

長野県松本市

MIMAZAWAGAWA-SAGAN

三間沢川左岸遺跡

－ 発掘調査報告書 －



2017.3

松本市教育委員会

長野県松本市

MIMAZAWAGAWA-SAGAN

三間沢川左岸遺跡

－ 発掘調査報告書 －



2017.3

松本市教育委員会



1次調査全景 南西から



2次調査全景 北西から



4次調査A区全景 南西から



5次調査全景 南東から



溝 3・6 (2次) 東から



通路状遺構 1 (5次) 北西から



緑釉陶器 (1)



緑釉陶器 (2)

< 50 住外面 >



< 50 住内面 >



135
(125 ft.)



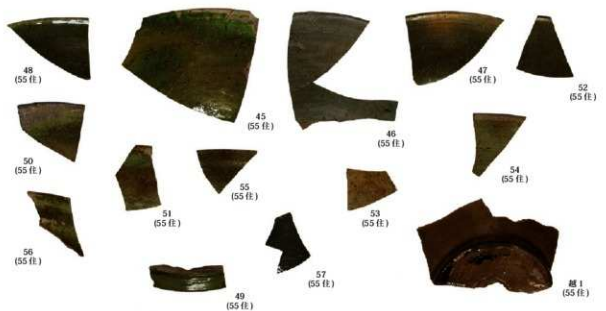
136
(125 ft.)



155
(148 ft.)







< 138 住外面 >



148
(138 住)



147
(138 住)



145
(138 住)



146
(138 住)



150
(138 住)



149
(138 住)

< 138 住内面 >



148
(138 住)



147
(138 住)



145
(138 住)



146
(138 住)



150
(138 住)



149
(138 住)



158
(156 住)



174
(198 住)



160
(156 住)



159
(156 住)



127
(121 ㊦)



128
(121 ㊦)



194
(267 ㊦)



178
(199 ㊦)

176
(199 ㊦)

175
(199 ㊦)

182
(203 ㊦)

181
(203 ㊦)

177
(199 ㊦)

180
(203 ㊦)







87



|



|



90



91



93



95



96



97



94



98



99

例言

- 1 本書は昭和62・63年度と平成22・23・25年度に実施された、松本市和田字西原3967-10ほかに所在する三間沢川左岸遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市臨空工業団地および新松本工業団地の造成工事に伴う緊急発掘調査で、整理・報告書作成とともに松本市教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡の発掘調査は本書刊行の時点で8次まで行われているが、本報告が対象とする調査次と調査年度・期間は次のとおり。
 - 1次：S62.5.30～7.21、2次：S63.4.21～8.1、4次：H22.4.12～23.7.20、5次：H23.4.25～24.3.8、6次：H25.6.4～12.13
- 4 本書の執筆、作成等の分担は次のとおり。
 - 第1章：事務局、第3章3節2：原田健司、同3：小山奈津実、同4節：バリノ・サーヴェイ株式会社（要約文責：直井）、第4章3節：宮島義和、その他：直井雅高
 - 写真撮影：調査担当（遺構）、宮嶋洋一（遺物）、岩岡世紀（1次空撮）、熊谷康治（2次空撮）、株式会社地図測量（5次空撮）
 - 総括・編集：直井雅高
- 5 本調査については、過去に当教育委員会が刊行した図書、報告書、報告会等の資料で部分的に紹介されてきたが、調査成果の内容については本書をもって最終的な見解とする。
- 6 発掘調査と本書作成にあたって次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。

石上周蔵、市村勝巳、井原今朝男、大久保知巳、大沢慶哲、岡本直久、片山昭悟、神澤昌二郎、桐原健、熊谷康治、小平和夫、佐々木明、笹本正治、島田哲男、新谷和孝、関沢聡、高山三千彦、田中正治郎、原明芳、樋口昇一、宮島義和、望月映、百瀬長秀、百瀬正恒、山下泰永、山田真一、和田和哉
- 7 本書の作成・執筆にあたって引用や参考にした文献は巻末にまとめて掲載した。
- 8 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823長野県松本市中山3738-1 Ⅱ.0263-86-4710）に収蔵されている。

凡例

- 1 調査区名は調査次数とローマ字の枝番で表記した。例：1次調査A区→1A区、2次調査区→2区
- 2 本文、図・表中で用いた遺構の略称は次のとおり。

竪穴建物：住、掘立柱建物：建、土坑：土、墓址：墓、溝址：溝、ピット：P、通路状遺構：通
- 3 土器類実測図の断面表現は次のとおり。

白抜き：土師器・黒色土器、黒塗り：須恵器・軟質須恵器・青磁・白磁、灰色：灰軸陶器・緑軸陶器

また以下の土器類には、必要に応じて土器番号に続けて次の略称を付して示した。

軟質須恵器：軟、緑軸陶器：緑、青磁・白磁：磁、墨書土器：墨、刻書土器：刻
- 4 土器番号は通番ではなく帰属遺構ごとに1から付している。

例：「023_2灰」は第23号竪穴建物出土土器の図示2番目の灰軸陶器を示す。
- 5 図類の縮尺は、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・墓址・ピットが1/80、土器・陶磁器類は1/4（墨書・刻書正対図集成は1/3）で統一したが、その他については不同で、そのつど提示した。
- 6 図中で用いた方位記号は真北方向を指している。
- 7 本文中で使用した時期表記は、すべて第4章第2節で設定した、本遺跡出土土器群の段階区分に基づく時期名称（第20表）を用いている。
- 8 遺構図中の土層名は下表のとおりに記号化している。

主要土色			土層属性		他の混入物		混入量		混入粒径	
A	褐色	H 橙褐色	O 暗灰色	V 灰白色	a 粘性	1 炭化物	1	微量(5%未満)	a	0.1cm未満
B	暗褐色	I 灰褐色	P 黒灰色	W 黄色	b 砂性	2 炭化材	2	少量(5～10%)	b	0.1～0.5cm
C	黒褐色	J 暗黄褐色	Q 橙灰色	X 黒色	c 鉄分	3 砂	3	中量(10%～20%)	c	0.5～1.0cm
D	明褐色	K 暗茶褐色	R 赤灰色	Y ローム	d 粘土	4 礫	4	多量(20%～40%)	d	1.0～3.0cm
E	黄褐色	L オリーブ褐色	S 黄灰色	Z 焼土	e 被熱	5 鉄滓	5	大量(40%以上)	e	3.0～5.0cm
F	赤褐色	M 暗オリーブ褐色	T 青灰色		f 蔽締	6 灰			f	5.0cm以上
G	茶褐色	N 灰色	U 緑灰色							

目次

カラー写真図版

例言	1	目次	2	図目次	3	表目次	4
第1章 調査の経緯							5
第2章 遺跡の環境							6
第3章 調査結果							
第1節 調査の概要							11
第2節 発見された遺構							
1 提示の方法							17
2 遺構概観							17
3 遺構各説							17
(1) 竪穴建物	17	(2) 掘立柱建物	18	(3) 土坑	18		
(4) 墓址	19	(5) 溝址	19	(6) 通路状遺構	21		
(7) 道路状遺構	21	(8) ビット・ビット群	22	(9) その他の遺構	22		
4 遺物出土状況							22
第3節 出土遺物							
1 土器・陶磁器							106
(1) 概要と提示の方針	106	(2) 種別	106	(3) 器種器形	106		
(4) 紋様・暗紋	106	(5) 緑軸陶器・磁器	108	(6) 墨書土器	109		
(7) 土器群	109						
2 石器・石製品							199
3 金属製品							209
4 土製品							221
5 自然遺物							221
第4節 自然科学分析							
1 2区出土炭化材の年代測定・樹種同定と炭化種実の同定							223
2 4区出土炭化材の年代測定・樹種同定							229
3 第293号竪穴建物理土の土壌洗出と種実遺体分析							231
第4章 調査のまとめ							
第1節 遺構について							
1 竪穴建物							243
2 溝址							246
3 通路状遺構							247
第2節 土器・陶磁器について							
1 三間沢川左岸遺跡における土器・土器群の変遷							248
2 模倣・搬入された土器							256
3 緑軸陶器							257
4 暗紋							260
第3節 墨書土器から見た三間沢川左岸遺跡							
1 墨書土器の分類							266
2 墨書からみた三間沢川左岸遺跡の特徴							266
第4節 平安時代の集落について							288
引用・参考文献一覧							304
写真図版							
抄録							

目次

第1図 土層模式図	6	第60図 竪穴建物 51(279～281・283・284住)	79
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡	7	第61図 竪穴建物 52(285～289住)	80
第3図 調査地と周辺調査地	9	第62図 竪穴建物 53(290～293住)	81
第4図 調査地配置図	10	第63図 掘立柱建物1(建1～3・11)	82
第5図 調査地全体図	12	第64図 掘立柱建物2(建5・9・10)	83
第6～9図 遺構配置図(1/4～4/4)	13	第65図 掘立柱建物3(建6～8)	84
第10図 竪穴建物 1(1～4・6・7住)	29	第66図 掘立柱建物4(建11・12・14)	85
第11図 竪穴建物 2(8・9・11～13・15住)	30	第67図 掘立柱建物5(建13)	86
第12図 竪穴建物 3(10・14住)	31	第68図 掘立柱建物6(建15)、柱列ピット群	87
第13図 竪穴建物 4(16・19～21・24住)	32	第69図 4次ピット群①②③	88
第14図 竪穴建物 5(17・18・22・23住)	33	第70図 4次ピット群④、5次ピット群	89
第15図 竪穴建物 6(25～29・31住)	34	第71図 土坑1	90
第16図 竪穴建物 7(32～37住)	35	第72図 土坑2	91
第17図 竪穴建物 8(38～43住)	36	第73図 溝配置	92
第18図 竪穴建物 9(44～49住)	37	第74図 溝2～4・8断面図	93
第19図 竪穴建物 10(50・57住)	38	第75図 溝6断面図	94
第20図 竪穴建物 11(51～54・56・59住)	39	第76図 溝9・14・19・22断面図	95
第21図 竪穴建物 12(55住)	40	第77図 通路状遺構1	96
第22図 竪穴建物 13(58・60～64住)	41	第78図 通路状遺構2・3	97
第23図 竪穴建物 14(65～70・116住)	42	第79図 通路状遺構4	98
第24図 竪穴建物 15(72～77住)	43	第80図 通路状遺構5、洗い場状遺構、溝6集石	99
第25図 竪穴建物 16(78～83住)	44	第81図 通路状遺構	100
第26図 竪穴建物 17(84～88・93住)	45	第82図 遺物出土状況1(135・223住)	101
第27図 竪穴建物 18(89～92・94～96住)	46	第83図 遺物出土状況2(161・197住)	102
第28図 竪穴建物 19(97・98・100～103住)	47	第84図 遺物出土状況3(157・245住)	103
第29図 竪穴建物 20(99住)	48	第85図 遺物出土状況4(55住)	104
第30図 竪穴建物 21(104～109住)	49	第86図 遺物出土状況5(226住、墓址)	105
第31図 竪穴建物 22(110・114住)	50	第87・88図 土器類器種器形一覧(1)・(2)	107
第32図 竪穴建物 23(112・113・115・117～119住)	51	第89～172図 出土土器類実測図(1)～(84)	115
第33図 竪穴建物 24(120～123・126・129住)	52	第173～177図 石器・石製品実測図(1)～(5)	204
第34図 竪穴建物 25(124・125・127・128・130住)	53	第178～181図 金属製品実測図(1)～(4)	217
第35図 竪穴建物 26(131～135住)	54	第182図 竪穴建物の床面積分布	244
第36図 竪穴建物 27(136・137・139～142住)	55	第183図 竪穴建物の時期別床面積分布	244
第37図 竪穴建物 28(138住)	56	第184図 竪穴建物の主軸方向	244
第38図 竪穴建物 29(143～148住)	57	第185図 カマド方位別住居数	245
第39図 竪穴建物 30(149～154住)	58	第186・187図 時期別カマド方位比率・位置比率	245
第40図 竪穴建物 31(155～159・263・264住)	59	第188図 食膳具の変遷	250
第41図 竪穴建物 32(160～164住)	60	第189・190図 糞類の変遷(1)・(2)	251
第42図 竪穴建物 33(165～170住)	61	第191図 土器群別みる食膳具の種別構成比率	254
第43図 竪穴建物 34(171～177住)	62	第192図 模倣・搬入土器集成	257
第44図 竪穴建物 35(178～181・183・184住)	63	第193図 住居1棟あたりの緑釉出土重量	257
第45図 竪穴建物 36(185～190・210住)	64	第194図 緑釉陶器・磁器集成	261
第46図 竪穴建物 37(191～195・257住)	65	第195図 暗紋Aの原型模式図	262
第47図 竪穴建物 38(196～201住)	66	第196・197図 暗紋集成(1)・(2)	264
第48図 竪穴建物 39(202～207住)	67	第198～211図 墨書土器集成(1)～(14)	274
第49図 竪穴建物 40(208・209・211～214住)	68	第212図 竪穴建物の時期別棟数	288
第50図 竪穴建物 41(215～221・269住)	69	第213～218図 集落変遷図(1)～(6)	290
第51図 竪穴建物 42(222～226・228・231住)	70	第219～221図 発掘地点分布図(1)～(3)	298
第52図 竪穴建物 43(227・229・230住)	71	第222～223図(参考) 川西開田遺跡全体図(1)～(2)	302
第53図 竪穴建物 44(232～238住)	72		
第54図 竪穴建物 45(239～246住)	73		
第55図 竪穴建物 46(247～253住)	74		
第56図 竪穴建物 47(254～256・259～261・273住)	75		
第57図 竪穴建物 48(262・265～268・271住)	76		
第58図 竪穴建物 49(182・258・270・272住)	77		
第59図 竪穴建物 50(274～278住)	78		

表目次

第1表 三間沢川周辺での発掘調査一覧	8	第14表 遺構別鉄滓出土重量	216
第2表 遺構番号振替一覧	17	第15表 土製品一覧	221
第3表 竪穴建物一覧(1/4～4/4)	24	第16表 炭化物一覧	222
第4表 掘立柱建物一覧	28	第17表 骨殖一覧	222
第5表 土坑一覧	28	第18表 竪穴建物時期別カマド方位	245
第6表 種別と器種器形の対応	107	第19表 柱穴を持つ竪穴建物	245
第7表 2区溝6出土土器類重量表	110	第20表 三間沢川左岸遺跡における土器群の段階区分	249
第8表 住居別土器群一覧(1/4～4/4)	111	第21表 緑釉陶器時期別出土重量	257
第9表 住居以外の遺構別土器群一覧	114	第22表 緑釉陶器一覧(1/3～3/3)	258
第10表 石器・石製品一覧(1/4～4/4)	200	第23表 土器群ごとの暗紋出現比率集計	263
第11表 表こもて石(編物用石鍾)集計	203	第24表 墨書一覧(1/5～5/5)	269
第12表 金属製品一覧(1/4～4/4)	211	第25表 希少遺物出土遺構	296
第13表 鉄滓一覧(1/3～3/3)	214	第26表 時期別墨書土器出土状況	297

写真図版目次

巻頭カラー写真		写真図版 7 竪穴建物(1)
カラー写真図版 1	調査区全景(1次・2次)	写真図版 8 竪穴建物(2)
カラー写真図版 2	調査区全景(4次・5次)	写真図版 9 竪穴建物(3)
カラー写真図版 3	溝3・6・通路状遺構 1	写真図版10 竪穴建物(4)
カラー写真図版 4	緑釉陶器(1)	写真図版11 竪穴建物(5)
カラー写真図版 5	緑釉陶器(2)	写真図版12 竪穴建物(6)
カラー写真図版 6	緑釉陶器(3)	写真図版13 竪穴建物(7)
カラー写真図版 7	緑釉陶器(4)	写真図版14 竪穴建物(8)
カラー写真図版 8	緑釉陶器(5)	写真図版15 掘立柱建物
カラー写真図版 9	緑釉陶器(6)	写真図版16 土坑・墓・ピット(1)
カラー写真図版10	緑釉陶器(7)	写真図版17 土坑・墓・ピット(2)
カラー写真図版11	緑釉陶器(8)	写真図版18 溝(1)
カラー写真図版12	緑釉陶器(9)	写真図版19 溝(2)
カラー写真図版13	緑釉陶器(10)	写真図版20 通路状遺構・道路状遺構
カラー写真図版14	新製品	写真図版21 出土状況(1)
巻末モノクロ写真図版		写真図版22 出土状況(2)
写真図版 1	航空写真(1)	写真図版23 調査風景
写真図版 2	航空写真(2)	写真図版24 墨書(1)
写真図版 3	調査区全景(1)	写真図版25 墨書(2)
写真図版 4	調査区全景(2)	写真図版26 墨書(3)
写真図版 5	調査区全景(3)	写真図版27 墨書(4)
写真図版 6	調査区全景(4)	写真図版28 墨書(5)
		写真図版29 墨書(6)・剣書



溝6(4次)、南東から

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯と調査経過

(1) 昭和62・63年度

松本市は和山西原地籍に臨空工業団地の造成を計画し、昭和60年度から用地取得を開始した。対象面積は約580,000㎡に及んだ。この一帯は昭和35年から38年にかけて開田事業（西原開田）が行われ、その際に平安時代の遺物が多量に採集されていたが、遺跡はそれに伴う工事によって湮滅したと考えられていた。ところが造成工事の一環として昭和61年12月に用地の一部について耕土の除去を行ったところ、耕土下のローム層上面に竪穴建物を中心とする多数の遺構が現れた。連絡を受けた松本市教育委員会は、現地を確認するとともに周辺の用地内で試掘調査を行った。その結果、湮滅したとされていた遺跡は、実際には良好に残存しており、しかもかなり広範囲に展開している可能性も考えられた。新発見の埋蔵文化財包蔵地として「三間沢川左岸遺跡」と命名し、開発部局との協議によって翌62年度当初から緊急発掘を実施して記録保存を図ることとなった。

昭和62年度の発掘調査は5月30日に開始した（第1次調査）。遺構の残存状況は良好であったが、開田工事の際の重機のキャタピラ痕などが局所的に深く食い込んで地盤が硬化し、検出作業は難渋した。130棟の竪穴建物を検出し掘り下げを進めたところ、多量の土器陶磁器のほか、緑釉陶器や銅印、銅鏡等の金属製品など貴重な遺物が多数出土し、特異な平安時代集落址であることが判明した。7月21日をもって調査は終了したが、引き続き遺跡の広がりを確認するため調査地の西側用地でトレンチによる確認調査を実施した。この結果、遺構分布はさらに西側に大きく広がるということが確認でき、翌年度に第2次調査を行うこととなった。

昭和63年度の発掘調査は、昨年度のトレンチ調査で遺構分布を確認した範囲全域を対象として、4月21日から実施した（第2次調査）。開田工事による下層への影響は1次調査地点より軽微で作業は順調に進捗し8月1日に調査は終了した。1次調査と同様に銅鏡や銭貨、銅鏝などの特殊な遺物が出土したうえ、集落内を100m以上にわたって直進する大規模な水路の検出などで遺跡の特異な性格はさらに際立った。

(2) 平成22・23・25年度

平成19年から臨空工業団地の北に隣接して新松本工業団地の造成が計画された。一帯は本遺跡の北縁に当たると想定されたため緊急発掘を実施して記録保存を図ることで開発部局と協議を進めた。発掘調査は用地取得の交渉がまとまった範囲について平成22年度から開始し、翌23年度と25年度の3次にわたって実施した（第4・5・6次調査）。

第4次調査は、平成22年4月12日から翌年7月20日にかけて実施した。第1・2次調査地の北側全域を対象とし、隣接部は面的な調査、さらにその北側はトレンチによって遺跡の残存と遺構・遺物の有無を確認した。調査地内は長芋の耕作による攪乱が著しかったが、面的調査範囲からは10棟の竪穴建物や土坑、溝を検出することができた。トレンチ調査範囲では遺構の残存は把握できなかった。

第5次調査は、第4次調査地の東側一帯を対象とし、平成23年4月25日から翌年3月8日にかけて実施した。南半部は面的調査、北半部はトレンチ調査を行い、第4次調査地と同様に長芋の耕作による攪乱の影響はあったが、面的調査範囲からは竪穴建物や溝、通路状遺構、道路状遺構などが発見された。トレンチ調査範囲は、そのほとんどが過去の開発事業等で耕作土下まで攪乱されており、遺構・遺物の有無を把握することはできなかった。

第6次調査は、第4次調査地の北側で最後に用地取得の見込みがついた地点について、平成25年6月4日から12月13日にかけて実施した。第4次調査で把握された大規模な水路（溝6）の上流部分が発見される可能性を想定した調査区の設定だったが、結果として溝は検出されず、以前の構造物等の影響で大規模な攪乱を受け、小規模な土坑が1基検出されたのみで遺物の出土はなかった。

(3) 整理作業、発掘調査報告書刊行

第6次調査に引き続き平成26・27年度に整理作業を実施し、平成28年度に発掘調査報告書（本書）の刊行に至った。ただし、第1・2次調査成果については、基礎的な整理計画がないまま発掘終了直後から展示等の普及公開に利用し続けたため、遺物の帰属情報などに若干の混乱が生じていた。さらに、調査終了から30年近くが経過し、保管等の不備もあって土器類の中には注記が判読不能になったものが少数あり、鉄製品の一部は劣化が進行して図示できなかった。

2 調査体制

(1) 昭和 62・63 年度

調査団長 松本市教育長 中島俊彦 調査担当者 【62年度】竹原学、三村竜一（嘱託）【63年度】直井雅尚（主事）

調査員 太田守夫、土橋久子 協力者 青柳洋子、赤羽包子、新井唯邦、石合英子、岩野公子、大出六郎、大川幸子、大谷成嘉、小野勝通、間嶋八重子、上條茂子、唐沢かほる、北沢達二、吳玉春紀、小林清志、小松正子、塩原竹子、塩原初子、塩原美世、瀬川長広、狂秀也、曾根原令子、田口吉重、武井緑、田多井うめ子、田多井豆、筒井とりへ、鶴川登、中島新嗣、中村悦子、中村安雄、林伊和夫、原沢一二三、堀江文子、丸山恵子、宮下英子、宮島たか子、麦島安夫、村川姓吾、村山正人、百瀬二三子、百瀬八江、百瀬義友、矢島利保、吉沢克彦、米山明子、米山植興、若井七十郎

事務局 松本市教育委員会 社会教育課 浅輪幸一（課長）、小松良（文化係長：S62）、田口勝（文化係長：S63）、熊谷康治（主査）、直井雅尚（主事）、山岸清治（事務員：S63）、洞田聡子（臨時：S62）、三沢利子（臨時：S63）

(2) 平成 22・23・25 年度

調査団長 松本市教育長 吉江厚 調査担当者 【22年度】福沢佳典（主事）、石井佑樹（嘱託）【23年度】熊谷博志（主事）、

原田健司（嘱託）【25年度】石井佑樹（主事）、原田健司（嘱託） 調査員 宮嶋洋一、森義直
協力者 青木久一、赤羽久、朝倉秀明、芦澤雅量、井口寛、石川一男、今井太成、加藤朝夫、坂口ふみ代、曾根原裕、高山知行、茅野信彦、床尾正成、中島健、中村明、西原達雄、平山忠男、三谷久美子、三村篤二、宮澤昭敬、沼田和男、百瀬二三子、矢野芳徳、渡辺順子
事務局 松本市教育委員会 文化財課 塩原明彦（課長：H22・23）、伊佐治裕子（課長：H25）、大竹永明（課長補佐：H22・23）、直井雅尚（主査：H22・23）、埋蔵文化財担当係長：H25）、久保田剛（主任：H22・23）、櫻井了（主査：H25）、柳澤希歩（嘱託）

(3) 整理作業

整理担当者 直井雅尚 職員・調査員 石井佑樹、小木曾昭洋、神澤昌二郎、神田潤安、熊谷博志、熊谷康治、栗田 愛、小山奈津実、白鳥文彦、高橋和孝、岡沢 聡、高桑俊雄、竹原 学、田中正治郎、土橋久子、原田健司、廣田早和子、福沢佳典、古林舞香、三村孝子、三村竜一、宮嶋洋一、宮島義和、和田和哉 協力者 荒井留美子、井内南奈香、五十嵐岡子、石合英子、市川二三夫、内沢紀代子、内田和子、柏原佳子、久保田聡志、小林由美子、佐々木正子、滝沢智恵子、竹内直美、竹平悦子、直井桃之介、直井知導、直井由加理、中澤温子、原田梨恵、沢沢文江、前沢里江、三澤栄子、宮本章江、村山政枝、百瀬二三子、八坂千佳

第 2 章 遺跡の環境

第 1 節 立地と地形地質

1 立地

三間沢川左岸遺跡は松本市和田字西原 3967-10 ほか位置する。調査地の一帯は標高 643～645m、東北東にごく緩やかに傾斜するローム層に覆われた台地で、「くろべ」と呼ばれる黒味を帯びた腐植土が広がり、以前は桑を中心とした畑作が行われていた。昭和 30 年代の開田事業で整然と区画されたほ場となり、昭和 47 年に竣工した新和神林堰によって、自然流下水を水源とする耕作が可能となった。

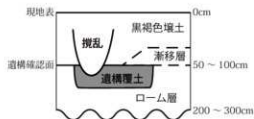
2 地形・地質

鎖川の西岸、三間沢川下流域は両河川による扇状地と梓川系統の扇状地の接点にあたり、その境界を三間沢川が流下している。三間沢川右岸から鎖川までの間には鎖川による沖積低地が広がっており、その堆積層は粘土やシルトが整然と堆積した互層をなしている。これに縄紋時代後期以降と推定される鎖川起因の氾濫性の砂泥や礫が覆い、鎖川寄りより厚く堆積している。また、かつての鎖川や三間沢川の旧流によると思われる大小の河川跡が幾筋も観察され、開田以前は窪地と微高地の連続する地形であったらしい。一方、三間沢川の左岸一帯は、こうし

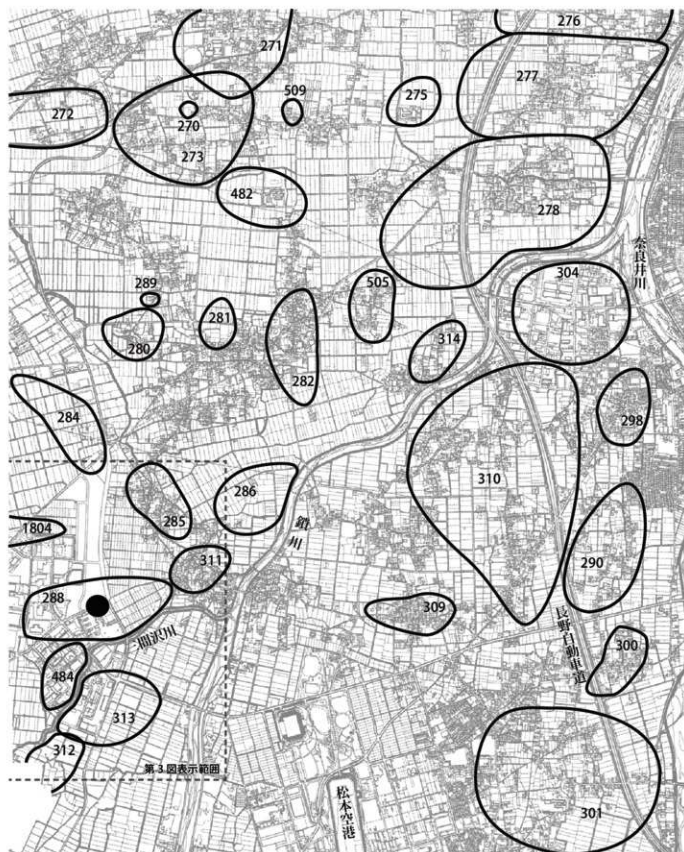
た沖積低地が形成される以前の、ローム層に覆われた後期更新世の扇状地（台地）が広がっており、その範囲は三間沢川より北では本遺跡を東限とし、南では境窪遺跡の西から南側で沖積層中に没している。また、それ以南では鎖川による明瞭な河岸段丘をもって区切られ、上流に向かうほど沖積低地が幅を減じ、段丘崖も発達する。

このように本遺跡付近では三間沢川の流路を境界とするようにローム層の洪積台地と鎖川による沖積層が切り替わっており、本書で扱う第 1・2・4～6 次調査地はほぼ全域がローム層にある。したがって調査地周辺の表土はローム層の腐植を起源とする礫や砂を含まない黒色・黒褐色の壤土が基本で、これが耕作や人為的な地業の影響で攪拌、削平されて現況となっている（第 1 図）。

本遺跡の南を画す三間沢川は、現在は平成の河川改修によって広い川幅に整備されているが、それ以前はかなり狭く、本遺跡より上流部は浅谷状に深く、下流部は天井川となっていた。昭和 30 年代の開田



第 1 図 土層模式図



270 秋葉原遺跡、271 新村遺跡、272 安塚古墳群、273 秋葉原古墳群、275 高欄遺跡、276 三の宮遺跡、277 北栗遺跡、278 南栗遺跡
 280 西和田遺跡、281 和田山の神遺跡、282 和田中遺跡、284 和田下西原遺跡、285 太子堂遺跡、286 二階道遺跡、288 三間沢川左岸遺跡
 289 衣外古墓址、290 中二子遺跡、298 下二子遺跡、300 上二子遺跡、301 神戸遺跡、304 大久保原遺跡、309 南荒井遺跡、310 下神遺跡
 311 神林川西遺跡、312 境窪遺跡、313 川西間田遺跡、314 梶海渡遺跡、482 芝沢遺跡、484 和田西原南遺跡、505 下和田遺跡、509 東
 新遺跡、1804 波田下原遺跡

破線 ---- は第3図の表示範囲

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

以前はさらに狭かったため、左岸地帯では三間沢川を用水とすることはむづかしかったと思われる。

第2節 歴史的環境

三間沢川左岸遺跡は松本盆地南部における遺跡立地の概略的な区分から俯瞰すると、大きくは奈良井川以西に分布する古代の遺跡群に属し、その西縁部に位置する。奈良井川以西の鳥立、新村、神林や本遺跡がある和田などの各地区、笹賀地区の北部は、現在は伝統的な集落が点在し松本を代表する豊かな水田地帯となっているが、考古学的な調査成果では、弥生時代後期や古墳時代から続く集落遺跡は無く、西暦600年代末頃から急激に開発が始まった一帯であることが判明している。その原因はおそらく生活用水や農業用水の水利にあったと考えるのが現段階ではもっとも妥当であろう。初期の開発は鳥立地区南部や和田地区東部が中心と推定されるが、西暦700年代以降はほぼ全域に拡がり、その結果として多くの遺跡が残された。古代から連綿と続けられた流路管理、水路開発が現在の水田の繁栄をもたらしている。ただし、これらの諸遺跡を潤す水路群からは、次節で詳述する本遺跡を含む三間沢川流域の川西開田遺跡、境窪遺跡、和田原南遺跡は、西端に突出して外れ、その恩恵を受けられない位置にある。そのためこれら4遺跡のエリアには近世以降からの伝統的な集落は形成されずに今日に至っている。本遺跡からさらに2kmほど西に寄ると西山山麓に近づき、縄紋時代と平安時代が混在する山麓や丘陵地帯の遺跡立地へと変わる。

第3節 周辺の発掘調査

1 過去の調査履歴

松本市域における鎮川西岸地帯の考古学的な発見は比較的新しく、昭和30年代の開田工事や製瓦用粘土の採掘の際の遺物出土などから遺跡の存在が知られるにとどまっていた。また昭和32年には三間沢川左岸遺跡とその東隣の神林川西遺跡の境界付近で瀬戸美濃産鉄軸茶入れと孔雀文器（昭和34年国重文指定：松本市立博物館蔵）が耕作中に出土したが、遺跡として明確に認識されるまでに至っていなかった。

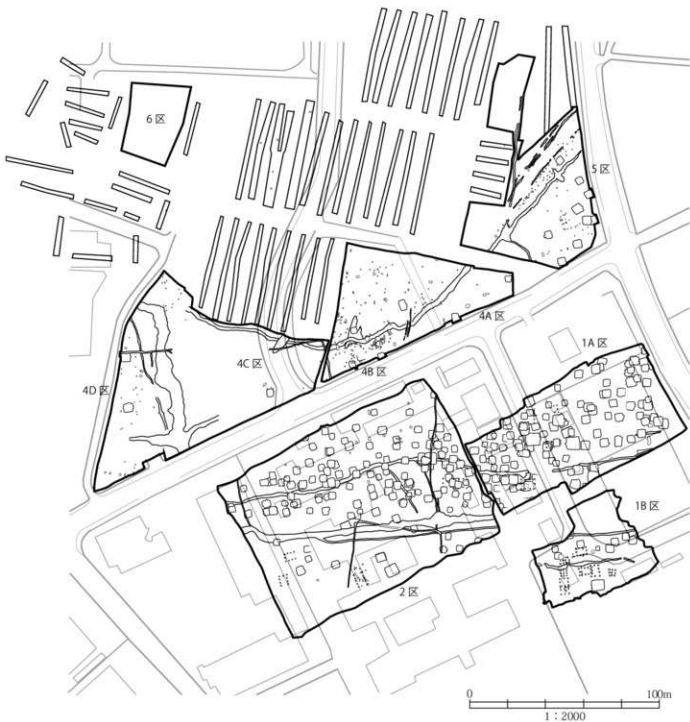
昭和60年代に入ると、県営ほ場整備事業に伴って梶海波遺跡(S60)、神林川西遺跡(S61)の調査が行われ、小規模ではあるが鎮川西岸域で初めて発掘調査によって古代・中世の人為的な営みの痕跡が確認できた。引き続き本書で扱う昭和62年度の三間沢川左岸遺跡第1次調査が臨空工業団地造成に伴って行われ、三間沢川流域での大規模な集落遺跡の存在が明らかになった訳だが、それ以後、翌63年の同遺跡第2次調査、平成7・8年の神林再ほ場整備事業での川西開田遺跡第1・2次調査と境窪遺跡第1次調査、平成10・11年の臨空産業団地造成に伴う川西開田遺跡第3・4次調査、同じく11年の県営三間沢川河川改修事業による松本市側での川西開田遺跡第5次調査と三間沢川左岸遺跡第3次調査、山形村側での境窪遺跡第2次調査などが相次いで行われた。いずれも大きな成果があり、鎮川西岸域の中でも特に三間沢川流域は縄紋時代から中世に至る各時代の集落が大規模に展開する遺跡の稠密地帯で

調査地区	調査年	遺跡名	調査区	発掘面積	調査成果の概略	報告書
県営ほ場整備	S60	梶海波遺跡	1	470	副塚1・坪1・溝6・竈12(平安)、火葬竈1(中世)	文獻35
	S61	神林川西遺跡	1	688	高路・溝(時期不明)	文獻36
	H7	川内開田遺跡	1	4,203	自然(倉庫、平安)、住1(縄紋中世)	文獻39
	H8	川内開田遺跡	2	2,702	自然(平安)、遺物中1(縄紋後期)、埴谷遺文、副塚1(平安)	
	H7	境窪遺跡	1	5,190	住10(半掘柱・副塚)・住物・住2(中世、住2(平安))	
	H10	川内開田遺跡	3	32,560	160・副塚15・土坑316・ビート1422・溝12(平安)、住14・土坑614・屋外土坑5・溝3(縄紋中世)	文獻41・42
	H11	川内開田遺跡	4	11,234	住10・溝6(平安)、土坑1762・ビート575(中世)、住16・土坑684(縄紋中世)	
県営河川改修	H11	三間沢川左岸遺跡	3	384	土坑48(弥生、平安)、溝5、副塚1	文獻40
	H11	境窪遺跡(山形村)	2	550	住2(平安)、土集1・土坑14・ビート245(弥生中世)	文獻49
	H24	二道遺跡	1	1,952	自然(弥生2・平安)、副塚4・柱列4・溝3(平安)、土坑131(弥生、平安)	
	H25	太子堂遺跡	1	1,049	土坑1(不明)、溝2・自然流路6(平安)、火葬竈1(中世)	
	H25	二道遺跡	2	807	土坑1(不明)、溝2・自然流路6(平安)、火葬竈1(中世)	
	H25	三間沢川左岸遺跡	7	963	土坑28・溝2・道路状遺構2・道路側溝2(平安)、自然流路1(不明)	未報告
	H26	太子堂遺跡	2	596	住3・溝7(平安)、土坑45(不明)、自然流路1(平安)、不明遺構(平安の副塚状遺構?)	
臨空工業団地 新松本工業団地	H26	三間沢川左岸遺跡	8	787	溝状遺構・土坑・自然流路(不明)	
	S62	三間沢川左岸遺跡	1	2,741	住130・副塚10・土坑7・溝5(平安)	
	S63	三間沢川左岸遺跡	2	11,304	住142・副塚4・土坑169・溝2・溝9(平安)	
	H22	三間沢川左岸遺跡	4	14,742	住10・ビート171・土坑87うち堀2・溝8・道路状遺構3(平安)、土坑1(縄紋)	
	H23	三間沢川左岸遺跡	5	7,897	住10・副塚1・ビート80・土坑9うち堀1・溝3・道路状遺構2・道路状遺構1(平安)	本書
	H25	三間沢川左岸遺跡	6	1,961	ローマ・マウンド・ビート(時期不明)	

第1表 三間沢川周辺での発掘調査一覧



第3図 調査地と周辺調査地



第4図 調査地配置図

あることが判明した。

平成20年代になると、新臨空工業団地造成に伴って22～25年に三間沢川左岸遺跡第4～6次調査(本書)、24～26年には市道7817線改良工事に伴う二階道遺跡第1・2次調査、太子堂遺跡第1・2次調査、三間沢川左岸遺跡第7・8次調査が行われた。特に市道7817号線改良に伴う調査では複数の地点で弥生時代や平安時代の遺構遺物が確認され、鎮川沿いから三間沢川左岸遺跡に至る東西1.5kmの間の遺跡分布や地形地質など、これまで解明が進んでいなかった三間沢川流域以外の範囲の考古学

的な究明の端緒とすることができた。

2 縄紋・弥生時代の発掘

縄紋時代の遺構・遺物が発見されている遺跡・調査としては、境産遺跡第1次調査(後期土器)、川西開田遺跡第1次調査(中期後葉の埋壘を伴う竪穴建物)、同遺跡第2次調査(後期堀之内I式土器と石器の遺物集中)、同遺跡第3・4次調査(竪穴建物30棟、土坑1,298基等の中期初頭の大規模な集落)を挙げることができる。また昭和62年に本遺跡第1次調査の後に立会い調査を行った和田西原南遺跡でも中期中葉の竪穴建物1棟を確認している。

西に隣接する山形村では昭和55・56年と平成13年の発掘調査で中期の遺構・遺物を大量に検出した三夜塚遺跡が知られる。

弥生時代は前記の境窪遺跡1次調査で中期中葉の住居址・建物址計30棟、墓址2基等とそれに伴う多量の遺物が出土している。三間沢川左岸遺跡第3次調査では同時期の土坑群、境窪遺跡第2次調査(山形村分)でも同時期の遺物集積が検出されている。また二階道遺跡第1次調査では境窪遺跡と同時期の炉址や遺物が発見されている。やや位置は離れるが昭和40年に行われた今井地区のこぶし畑遺跡の発掘調査では弥生中期前葉の遺構・遺物が発見されており、鎮川・三間沢川流域で弥生時代中期前半に相当の人の動きがあったことがわかる。ただしこれらに後続する時期の遺跡は発見されておらず、中期後半から後期全般にかけては空白となっている。

3 古代・中世の発掘

古墳時代の遺構・遺物は極めて希薄で、川西開田遺跡第1次調査で平安時代の遺構中から前期の土器がまとめて出土しているのみである。近在に小規模な該期集落が存在する可能性があろう。奈良時代の遺構・遺物は認められない。

平安時代になると川西開田遺跡の第1・2次調査で同時期の竪穴建物16棟、第3・4次調査で同76棟、境窪遺跡第1次調査で竪穴建物2棟、それに今回報告の三間沢川左岸遺跡第1・2・4～6次調査(本書)での計291棟を加えると、この3遺跡だけで385棟の竪穴建物が確認されている。うち1棟が8世紀に遡る他は、すべて西暦9世紀後半からほぼ11世紀前半代に収まるもので、これは三間沢川中流域のこの一帯で時期的に限定された極端な居住の集中があったことを示す。おそらく何らかの大規模な開発が行われたことを物語るものであろう。三間沢川流域から離れた二階道遺跡第1次調査と太子堂遺跡第2次調査でも、西暦9世紀後半の竪穴建物がそれぞれ3棟と6棟発見されており、これらから総合的に考えると鎮川西岸域の本格的な開発の始まりは9世紀代に下るといえる。

中世の遺構遺物は川西開田遺跡第3・4次調査の4B区とそれに隣接する同遺跡第5次調査地点から計1,862基の土坑が見つかり、覆土中から中世の陶磁器や金属製品が出土した。12世紀末から16世紀初頭に形成された大規模な墓域と推定されるが、背景となる集落の特定はできていない。

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

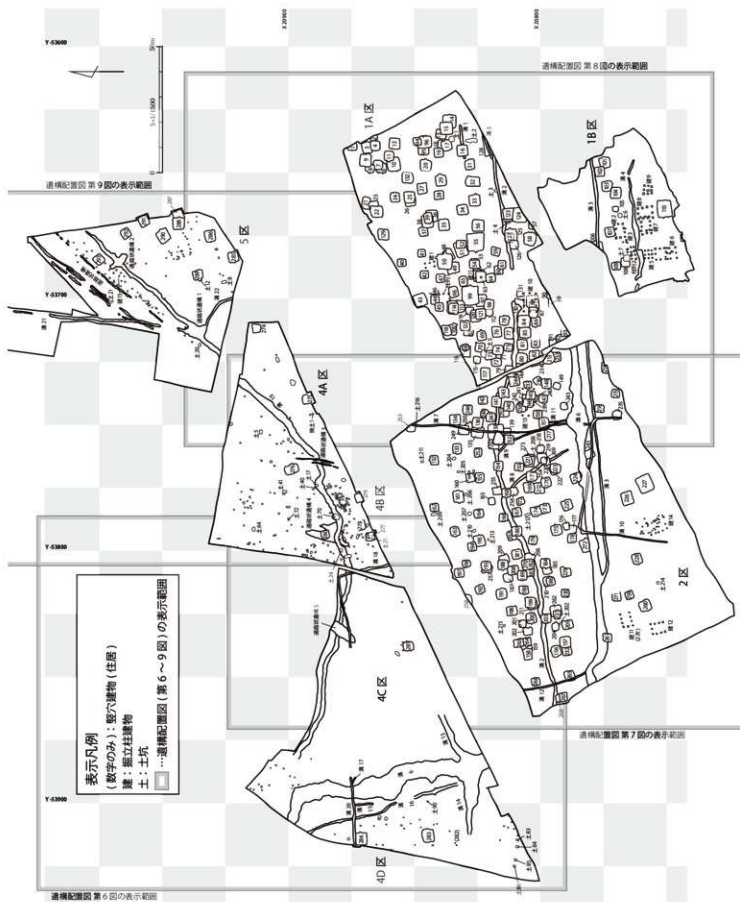
1 調査地点の選定

第1次調査(S62)は造成計画で調整池となるため先行して工事が始まる範囲を対象とした。前年の表土除去で遺構が露出した部分と、その北東隣接地の一角にあたる。続く第2次調査(S63)は前年の試掘で遺構分布を確認した第1次調査地の北西隣接地を対象とした。この第1・2次調査で遺跡の中心部と推定される遺構密集範囲を把握することができた。

平成22年度から始まる第4～6次調査は第1・2次調査地の北側一帯が対象で、用地取得が進んだ範囲から順次調査地とした。第1・2次調査地に隣接する部分は当初から面的調査を行い、集落の北限地域と推定されたさらに北側の一帯はトレンチ調査を先行させ、遺構の分布が認められた範囲に限って面的調査を行った。またトレンチ調査により、過去の開発等で表土下が完全に破壊されていることが把握できた範囲は面的調査地から除外した。

2 調査方法

各次調査では面的調査、トレンチ調査とともにパワーショベルで表土を除去し、排土の移動は第1・2次調査はブルドーザー、第4～6次調査はクローラードンプを用いた。遺構検出面は表土下のローム層上面とした。ローム層の上部に形成される黒色土との漸移層は耕作の影響でほとんど失われていたためである。検出作業は人力によって検出面を削り込んで遺構外周のラインを確定した。並行して調査地全域を真北を軸とした3m角のグリッドで覆い、交点の地表に釘を打設して平面実測の基準とした。遺構の掘り下げは竪穴建物は4分割、その他の遺構は規模によって2～6分割で土層観察面(土手)を残して進めるのを基本としたが、第1次調査に限り日程の関係ですべてを2分割に留めざるを得なかった。土層記録作成の後、遺物出土状況を撮影し、良好なものは出土状況を図化した。全遺構ですべての遺物を取り上げ、床面を精査・清掃して完掘写真を撮影、完掘図を作成した。さらに残存状況が良好なカマド等の施設は側面図や部分断面図の作成に努めた。実測は遣り方により縮尺1/20で調査地全域を平面図に収め、土層図等の立面図も縮尺1/20を基本とした。ただし平面・断面で詳細図が必要な場合は縮尺



第5図 調査地全体図



第7図 遺構配置図(2/4)

1/10とした。調査終盤で航空機や無線操縦機、高所作業車による高所からの全景撮影を行った。

3 調査結果の概要（各調査次の面積等の詳細は表1と巻末の抄録を参照）

計5回の調査地は南北約250m、東西約300mの範囲に連続して広がっており、面的調査ができた範囲は40,600㎡に及ぶ。竪穴建物を中心とする平安時代9～10世紀の集落址とそれに伴う様々な施設を検出し、多数の遺物出土をみた。竪穴建物は第1・2次調査区を中心に291棟、掘立柱物は16棟が確認され、土坑墓5基が集落内に点在していた。遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を据えた鍛冶遺構らしきものなども確認された。遺物は竪穴建物等の覆土・床面から多量の土器陶磁器や金属製品、石製品、土製品が出土した。金属製品では銅鈴、銅鏡（八稜鏡、海獣葡萄鏡破片）や銭貨（富寿神宝、延喜通宝）、銅鏡など銅製品が目立ち、銅印「長良私印」が第22号竪穴建物から出土している。また緑釉陶器と墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が複数の遺構から多数出土した。石製品には砥石、石鈴、編み物用石錘、土製品には羽口、土製円盤がみられた。

第2節 発見された遺構

1 提示の方法

すべての遺構の掲載を基本としたが、近現代の擾乱や、小規模な土坑・ピットで、単体で存在し時期の特定ができないものについては掲載を控えた。遺構実測図は平面図と断面図・土層図を組み合わせて示した。一部の溝址は規模が大きいため平面図とは別に断面図・土層図を掲載した。カマド等の遺構内施設は属する遺構の平面図に組み合わせた。遺構実測図の天地は方位ではなく各遺構の主軸に平行ま

本表での名称	調査図での名称(調査区)
遺13	遺7(4.3)
遺14	遺7(4.3)
遺15	遺2(4.3)
遺16	遺10(4.3)
遺17	遺11(4.3)
遺18	遺4(4.3)
遺19	遺1(4.3)、遺1-5(5.3)
遺20	遺9(4.3)
遺21	遺10(4.3)
遺22	遺2(5.3)
通路状遺構1	遺1-3・5(5.3)
通路状遺構2	遺5(5.3)
通路状遺構3	遺2(4.3)
通路状遺構4	遺4(4.3)
通路状遺構5	遺8(4.3)
通路状遺構	遺4・6・9(5.3)

第2表 遺構番号振替一覧

たは直交方向を基本とした。竪穴建物や土坑の中で特殊な遺物出土の状況を示したものは出土状況図を別に掲載した。各遺構の時期表記は第4章第2節で設定した、本遺跡出土土

器群の段階区分に基づく時期名称（第20表）を用いている。

竪穴建物と掘立柱建物を除く遺構の番号は調査次ごとに命名されており統一性を欠くが、遺物保管との整合性を考慮して振り替えは行ってない。ただし、溝址のみは複数の調査区、調査区にかかっていう上に、名称を通路状遺構や道路状遺構に変更したものもあるので、本書作成の段階で振り替えを行った（第2表）。本文と図・表中で用いる遺構名の略称は本書冒頭の凡例（1頁）に示すとおりである。

2 遺構概観

計6次にわたる調査で発見された遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、墓址、溝址、通路状遺構、道路状遺構、ピット、ピット群・ピット列、その他の遺構（鍛冶遺構、洗い場状遺構）である。ただし墓址、通路状遺構、道路状遺構及び洗い場状遺構の名称は、遺構の形状や位置、遺物の出土状況から性格や用途を推定した命名であり、今後の検討によっては改名すべき対象となる。調査区ごとの遺構の数量や詳細は第1表に示す。

遺跡の一角はローム層が発達し、ほとんどの遺構はその層中で掘り込まれて壁面（側面）と床面（底面）が構築されていたため、遺構上部を除き、極めて良好な残存状況を呈した。特に竪穴建物の床面では、沖積地の調査では把握が困難な小規模な周溝、ピットも検出でき、拡張やわずかに位置をずらした建て替えなどが想定できる痕跡をいくつも捉えることができた。

3 遺構各説

(1) 竪穴建物（第10～62図・第3表）

291棟を確認、調査した。5・30・282住は欠番、132住は誤って第1次調査と第2次調査の双方で命名したため2棟存在するが、本文・表中では区別できるように表記した。当初は1棟として把握し調査を進めたが、調査終了後や整理作業の段階で2棟の重複であったことが判明したのがあり、住居番号の後にA・Bを付して示した。1棟ではあるが周溝や柱穴等の配置から拡張や連続した移動が推定できるものがあり、これらのうち必要なものについては住居番号の後に旧・新を付した。出土した土器群から判断して、すべての竪穴建物址は平安時代に属する。

平面形は基本的な方形か隅丸方形で、これらを基調とした長方形や不整形もみられる。主軸はほぼ東西方向に統一されているが、時期的に古い一帯は北

東から南西へ若干振れる傾向がある。規模は一辺の長さが最大で8.0m(99住)、最少で2.2m(105住)、大方は3～4m台に取まる。床面積に換算すると最大の99住が46.8㎡、最小の105住が4.8㎡である。壁は垂直から若干の傾斜を持って掘り込まれている。壁高(遺構の深さ)はさまざまで、最深は0.6m(33住)を測るが、当該遺構周辺の検出面の残存状況に大きな影響を受けている。覆土(埋土)は①水平に2～3層が重なるもの、②壁際堆土を持ちレンズ状の堆積を示すもの、③単層のもの、などに大別できる。ほとんどの土層に、量的な違いはあるが地山のローム土が細粒・中粒となって混入しており、いずれも単純な自然埋没ではないことが窺える。①には中層に被熱層や焼土・炭化物を含有するものもあり、埋没過程での何らかの人為を想起させる。①と②が組み合わさった状況のものもみられた。床面は竪穴底面のローム層の地山をそのまま平坦に敷き締めているものが多い。底面の凹凸の上に地山のローム土を貼床したのも見受けられる。竪穴ごとに床の固さはさまざま、覆土に比してほとんど固さを感じないものもあった。固く締まる範囲は、中央部のみから壁際まで及ぶものまで多様である。

遺構内施設として柱穴・ピット、カマド、周溝がみられる。カマドは主に西か東壁の中央に設けられるが、コーナー寄りもある。壁外に若干張り出すことが多い。完存したものはないが、構造は袖部に石材を組んで空隙に粘土などを充填していたと推定される。石材が全く失われ、石材を埋め込んだ跡のピットや、火床の焼土のみが残存するものも多い。壁外に大きく張り出して延びる煙道は全く確認されなかった。柱穴は一部の竪穴建物にのみ伴う。明らかに柱穴と認定できる深さや規模を持ち、4基または6基が長方形や方形に配列する。長方形の短辺のひとつをなす2基が壁直下や壁外へ張り出す位置に配置されるものが多く(壁直下:50・51・55・99・114・272住、壁外:10・14・16・58・110・161住)、壁から離れた位置に方形に配置される例は少ない(43・138新・227住)。また壁直下に小ピットが規則的に並び、壁下柱穴と想定できる例もある(50・55・99・227住)。周溝は壁直下に並行して巡る溝で、半数以上の竪穴建物でみられたが、全周するものは少ない。幅は10～20cm、深さも最深で10cmほどである。途中で壁際から離れて曲がるものや床を区画する間仕切りのように延びるものも多い。住居の拡張や重複の痕跡と考えたい。周

溝の有無と竪穴建物の規模に相関は認められない。

遺物は土器類を中心に金属製品や石器・石製品、土製品、炭化材・炭化物がある。出土状況は石材などを伴う意図的な廃棄や納置があったことを窺わせるものと、埋土形成時の無作為な廃棄や混入とみられるものが認められ、後者が大半を占める。ただし、後者であっても土器類は各住居で時期的なまとまりを持つ場合がほとんどで、周辺にあった遺物が長期にわたり遺構の埋没と共に流れ込んだとは単純に考えられず、何らかの作為があった可能性は高い。

竪穴建物の分布は、1A区の中央部から西と、それに続く2区の東側で特に集中し、重複も著しい。1B区や2区の南側、4・5区では点在する程度になる。竪穴建物同士の重複は、2棟から数棟単位で切り合いや著しい近接をする例が多く、時期的にほとんど差異のない重複も少なからずみられた。

(2) 掘立柱建物(第63～68図・第4表)

15棟を確認、調査した。建11は誤って第1次調査と第2次調査の双方で命名したため2棟存在するが、本文・表中では区別できるように表記した。検出段階で掘立柱建物と認識できず、調査の進行過程でピットの配列から把握したのものもある。掘り方のピット内に土器等の遺物を伴ったものは少なく、厳密な時期の特定はできないが、重複関係や配置、分布等からみて、周囲の平安時代の竪穴建物群に伴う遺構と捉えて問題はないと考える。

総柱式は建5・9の2棟のみで、他は側柱式である。規模は最小が1×1間の建11(1次)で3.08×2.84m、面積は8.75㎡、最大は5×2間の建13で10.60×4.28m、面積は45.37㎡を測る。梁行は2間が基調、桁行は2～5間がみられる。掘り方のピットは、平面形は円か隅丸方形で、規模は径22～101cm、深さ3～64cmとばらつきがあるが、深さは検出面の残存状況に左右されている。調査地点の分布は1B区南と2区南西隅にまとまる傾向が窺える。特に1B区南には7棟が集中し、軸をそろえて隣接(建5・6)や重複(建7・8)するものがみられる。

(3) 土坑(第71・72図・第5表)

120基を確認、調査した(次項の墓址5基を含む)。径50～100cm前後の不整な円形、楕円形、隅丸長方形を呈す。深さや底面等の形状も多様で、用途を特定できるものは少ない。一部の土坑と墓址を除き、出土遺物は非常に少ない。時期は縄紋中期に属するもの1基(4区土90)を除くほとんどは竪穴建物

と同じ平安時代と推定する。分布は竪穴建物が稠密な1・2区で少なく、集落北辺部とみられる4・5区に多い。

(4) 墓址 (第72図・第5表)

墓址と推定される土坑は2区土209・212、4区土17・41、5区土21の5基で、このうち2・4区の4基は坑内に土器類が埋納されていたため墓址とした。5区土21は遺物の伴出はなかったが、規模や形状、埋土の状況が酷似しており墓址と推定した。平面形は長軸が1.2～1.5mの長方形や長楕円を呈し、壁は垂直に近く掘り込まれている。底面は平坦で、埋土に大小のブロック土を含み、短時間で埋め戻されたことが窺える。主軸方向はほぼ南北だが、10度前後振れるものもあり、斉性は見えない。分布も一定の傾向はなく、他の遺構間に点在する。

(5) 溝址 (第73～76図)

各調査区から大小さまざまな溝址が見つかった。水流の痕跡を残すものもあるが、すべてが人為的に掘削された遺構と考える。規模の長大なものは調査区を超えて連続しており、これを1本と数えたと22条の溝が検出されたことになる。

溝1 1A区南東部にあり、16住に切られる。長さ14m、幅10m、深さは40cmを測る。遺物は土器片が少量出土したのみで図示できるものはない。

溝2 (第74図) 1A区と2区にわたる。2区北西部の調査地区域外から現れ、2区中央部北寄りわずかに蛇行しながら西から東に横断して1A区に続き、1A区南東の調査地外に消える。1A区中央西寄り一旦途絶えるが、調査時の遺構検出面設定レベルの影響であって、本来は連続していたものであろう。重複するすべての竪穴建物の切られる。確認できる総延長は217m、幅は1.1～1.9m、深さは10～40cmを測る。覆土は、流路として機能した際に堆積したと推定する灰色系の砂性を帯びる土を含み、極めて特徴的なものであった。この灰色系の土はI・II期の竪穴建物数棟のカマド構築材としても用いられていた。2区の中央部東寄りで溝8と溝9が相次いで本址から分岐する。いずれも本址と酷似した埋土を持ち、溝8は分岐部分が竪穴建物の切られて不明だが、溝9は本址と連続する一体の遺構と捉えて問題ない状況であった。遺物は土器類と鉄器が出土している。土器類はf～1区間に集中して遺存しており、時期的にもI期新のまとまった資料である(第170図I溝2_1～第171図I溝2_46)。

溝3 (第74図) 2区中央部西寄りで溝6から分岐し、

東に直線的に伸びて2区南東隅で区域外に出るが、その延長線上の1B区に再び現れ、同区北部を東西に横切って東端の調査区外に消えている。実際に確認された長さは2区で95m、1B区で36mだが、2区の分岐点から1B区の東端までの総延長は168mとなる。幅は0.5～1.1m、深さは12～48cmを測る。覆土に明確な流路の堆積はみられなかったが、溝6と並走していることから溝6に関連する遺構であることは確かであろう。遺物は土器類707gの出土をみたが、図示できるものはない。

溝4 (第74図) 1B区中央の掘立柱建物が集中する地帯を東西に横断している。1B区の西端調査区外から現れ、東側の先端は調査区域外に到達する前に浅くなって調査地内で消える。途中で2か所途切れるが、本来は連続していた可能性がある。途切れた部分も含む総延長は52mで、幅0.7～2.1m、深さ28～40cmを測る。覆土に明確な流路の痕跡はみられなかった。遺物は土器類の破片が散発的に出土し、11点を図示できた。I期からII期の様相を示し、本址の埋没時期もそこに求めたい。

溝5 1A区の南東隅で128住を切っている。東西の長さ11m、幅0.6～0.9m、深さ15cm前後を測る。規模の小さいものであり、遺物もなく、用途、性格はわからない。

溝6 (第75図) 第2次調査で2区をほぼ東西方向に横断する大型の溝として発見された。第4次調査の4D区で発見された南北方向の大規模な溝も、その位置や規模、断面形からこれの上流部に接続するものと推定し、双方を合わせ溝6として一括で捉えた。4D区の西の調査区外から東に向かって現れ、すぐに直角に折れてわずかに蛇行しながら南に向かい、いったん4D区南の調査区外に消える。おそらくそのまま南に下って2区西側の調査区外で大きく曲がって東に向かったらしく、2区西端部に現れて、小さなクランクを持った後にまっすぐに東に向い、そのまま2区東端の調査区外に消える。その延長線上には1B区の北端部がかかるが、この一帯は耕作や開田時の攪乱が多く、調査の際に黒色土の広がりも認められたものの、明確な遺構としては把握できなかった。おそらく2区からまっすぐ東方に伸びていたものと推測する。4D区内の長さが89m、2区内が133m、双方を合わせ両区間の調査区外部分と1B区の推測部分を加えた推定総延長は約340mという長大な溝である。特に2区西側のクランク部は東は蛇行や湾曲をほとんど持たず、120mにわたる

一直線に東に向かっている。幅はばらつきが大きいが、4D区で4～11m、2区は2.5～8mで、概して4区で太く2区で細い。断面形は緩いV字やU字型を呈し、深さは0.6～1.4mを測る。埋土は自然堆積のレンズ状を呈するが、最下層付近に水流に伴う砂礫層が認められた地点がいくつかあり、流路であったことを示す。4D区の南寄りの同一地点で溝13と溝14が合し、2区の西側では溝3が分岐している。ただし溝3は本址よりもかなり浅く、水路の分流ではない可能性がある。2区の東寄りに溝幅が急に広がる部分があり、その一帯には溝底に礫の意図的な集中（「特殊遺構」と命名）や、あたかも溝底に下りていくために段と礫を配置したような遺構（「洗い場状遺構」と命名。文献5では「水汲場遺構」「洗い場遺構」と紹介）があり、本址の中でも特殊な部分だったことが窺える（第80図）。遺物は4D区では溝の規模の割に少なく、総量で1.2kgの土器片が埋土中から散発的に出土したのみだが、2区では地点によって多少差はあるが埋土の上・下層を問わず多くの土器類が含まれており、総量は24.7kgに及んだ（第171図2溝6(7_1～4溝6_5)。ただし、出土状況に意図的な配置や廃棄を示すものは認められなかった。遺物のほとんどが埋土形成時に周囲から入り込んだものとみれば、竪穴建物の集中域である2区の区間で多く、遺構がまばらな4D区で少ないという状況も理解できる。本址の形成時期はⅠ～Ⅱ期の224・245・272住と重複・近接することからそれ以降、埋没時期は出土土器群の最新時期であるV期古と考えられるので、本址はⅢ期からV期にかけて存在した大型の用水路であったと理解したい。

溝7 2区北東隅のやや南寄りで現れ真っ直ぐに南下、溝6の上部を切って渡り、溝10に合する。その間すべての竪穴建物、溝址を切る。総延長は72mを測るが、幅0.3～0.5m、深さ6～20cmと、長さの割に規模は小さい。埋土から609gの土器類が出土したが、近世以降の陶器が少量含まれており、古代に属する遺構ではないと判断した。

溝8（第74図）2区中央部東寄りで溝2から分岐し、南東に約30m延びて浅くなり消える。幅は0.8～1.1m、深さは16～24cmを測る。重複するすべての竪穴建物に切られる。埋土の特徴は溝2と全く同じであった。遺物は土器類が2.927gあるが、すべて破片で散発的な出土である。

溝9（第76図）2区中央部東寄りの溝8のさらに

東側で溝2から分岐し、南南東に約37m延びて溝11に切られて消える。幅は0.5～0.7m、深さは16～20cmを測る。重複するすべての遺構に切られる。埋土の特徴は溝8と同様であった。遺物は土器類が散発的に288g出土したのみである。

溝10 2区南部にあり一辺48mほどの方形区画に見えるが、南側は調査区外の境界付近で浅くなって消える。溝3、溝6の上部を切り、南下してきた溝7と合する。総延長は93mを測るが、幅0.3～0.5m、深さ14～20cmと、長さの割に規模は小さい。埋土から近世以降の陶器がわずかに出土し、古代に属する遺構ではないと判断した。

溝11 2区東部の151住南壁に切られる位置で現れ、そのまま13mほど南下して溝6に合して終わる。幅は0.3m、深さは10cmを測る。途中で溝9を切る。出土遺物はない。溝6の本址と合する地点は部分的に幅員を増し、洗い場状遺構2を伴っていた。溝12 2区北西隅やや東寄りから現れ、南南東に延びて溝6に合して終わる。途中で溝2と265住を切る。長さ26m、幅は0.4～0.7m、深さは5～15cmを測る小規模なもので、遺物は土器類が散発的に206g出土したのみである。溝6との併行関係は不明。

溝13 4D区南部で溝14とともに溝6に合する形で捉えられた。長さ21m、幅は1.5～2.6m、深さは5～15cmを測る。東から西に向かって徐々に深くなり溝6に合流している。遺物はない。

溝14（第76図）4D区南部で溝13とともに溝6に合する形で捉えられた。長さ24m、幅は0.7～5.8m、深さは5～40cmを測る。西から東に向かって急激に深さと幅を増し溝6に合流する。遺物は土器類の破片が散発的に84g出土したのみである。

溝15 4D区中央北寄りにある長さ9m、幅0.4～0.7m、深さ10～15cmの小規模なもので、溝20に切られる。遺物はない。

溝16 4D区にあり、溝6の西側に添うように北から南に向かう。途中で途切れ、溝6に合する溝14付近で浅くなって消えている。途切れた部分も含めると総延長63mを測るが、幅は0.5～1.4m、深さは5～25cmの浅いものである。埋土に2区の溝2でみられた灰色系の砂性を帯びる土を含む極めて特徴的な土層が認められ、溝2の上流部にあたる可能性もある。遺物は土器類98gが散発的に出土したのみで図示できるものはない。

溝17 4D区中央北寄りにあり、溝20に切られる

規模の小さいもの。長さ4m、幅0.4m、深さ15～20cm。遺物の出土はない。

溝18 4C区から4B区にかけてあり、通5と溝19を切る。4C区北寄りで現れて東進後、直角に折れて南下、そのまま4B区の区域外に消える。総延長50m、幅0.6～0.8m、深さ25～45cmを測る。遺物は土器類の小片28gが散発的に出土したのみで、本址の時期特定はできない。

溝19 (第76図) 4D区の北端部付近に発して東南東に向かい、4B区に入ると大きく弧を描いて北東に向きを転じ、そのまま5区を貫いて東端の調査区外に達する直前で浅くなって消える、総延長255mに及ぶ長大な溝である。通1～5と交差し、溝18、4・土17 (墓址) やいくつかの土坑、ピットに切られている。幅1.5～3.9m、深さ20～84cmを測る。断面形は浅いU字形を呈し、底面に若干の起伏がみられる。埋土に砂礫を伴う流水の痕跡は認められなかったが、鉄分の沈殿や青灰色を呈する部分がわずかにあり、局所的に小規模な滞水があったと推定する。遺物は、4A～D区の間では土器類が散発的に出土したのみだが、5区では通1との交差部の南側で須恵器の大甕 (5溝19・17) がまとめて遺存しており、通1・2間では底面や埋土下層に土師器と黒色土器Aの杯A一括品 (5溝19・4～11) が点々と残されていた。これらの土器類から本址の下限はIV期新からV期古くらいと考えられ、本址を切る4・土17がV期新なので、その頃までには埋没したのであろう。

溝20 4D区の西側区区域外から現れ、そのまま真っ直ぐ東に28m延びて終わっている。幅0.5～0.9m、深さ30～45cmを測り、284住・溝6・15～17を切る。遺物は土器類222gが散発的に出土した。軟質須恵器の杯A2点を図示できたが、混入品の可能性がある。

溝21 5区西部で、通1の北方向の延長線上約7mから現れ、ほぼ北に向かって44m延びる。いったん7mほど途切れて再び現れ、さらに北に向かって浅くなって終わっている。本址は独立した遺構ではなく、南西から北東に向かっていた溝19が通1の場所で2本に分岐して、いったんは途切れる北に向かった1本とみることできる。幅は0.7～1.0m、深さ15～20cmを測る。遺物は土器類の小片4gが出土したのみである。

溝22 (第76図) 通1の南端部から派生して弧を描くように南東に向かい、5区南部の調査区外へ消え

ている。長さ18m、幅0.7m前後、深さ15～20cmを測る。遺物はない。通1または溝19に伴う施設であろう。

(6) 通路状遺構 (第77～80図)

溝19 (4・5区) と交差する形で5基が検出された。通4は280住に、通5は溝18に切れ、通1からは溝22が南東に延びている。平面形は極めて不整な長楕円や菱形を呈し、規模は長軸で8.3～17.4m、幅は3.2～6.4mを測る。壁は不明瞭で、端部から徐々に傾斜、下降して底面に至り、検出面からの深さは最深部で0.4～0.6mほどである。底面は起伏に富み、地山のローム層が極度に硬化して、所々に黒色土が蔽き込まれたように貼りついていた。通1・通3・通4の中央部には、長軸方向に沿って1.4m前後の間隔をあけた、幅20～40cm、深さ20cm前後の溝が2本平行して走っており、通3・通4はその溝間に長径40～100cmのピットが連続して並んでいた。通1・通2にもピットというよりは激しい凹凸と表現した方がふさわしい起伏が集中していた。通1と通4は硬化面とピット (起伏) の広がりから、新旧2時期に分けられる可能性がある。長軸方向は、通2と通5が交差する溝19と直交するように東西に45度前後振るが、他は溝19の方向とはあまり関係がなく南北から東または西に10～15度振る程度で、溝19を指向しているように見える。各遺構は約30～70cmの間隔をおいて分布し、配置に規則性は感じられない。

遺物は、土器の小破片が埋土や底面から散発的に出土したのみである。通1から48g、通2から260g、通4から244g、通3と通5は皆無で、土器群として遺構の時期などを特定できる状況はない。

通1～5は、おそらく集落と同時期に存在した通路の痕跡で、当時の地表面と共に他の部分は失われたが、溝19との交差点のみは溝を横切るため窪地状に硬化面ができ、そのまま埋没して残存したものであろう。形成時期は溝19掘削以後、終期は交差する溝19の最新の遺物が10期古、通4を切る280住が9期新～10期古なので、それに近似する時期とみたい。ただし、各遺構が同時に存在した確証はなく、むしろ集落が継続していた間、必要に応じてそれぞれの方向に通路が延びていたと考えるのが自然であろう。

(7) 道路状遺構 (第81図)

5区の北部で検出された。6～8mの間隔を空けて両側に幅70～100cm、深さ5～16cmの溝が断

統的に連なる遺構である。溝の連続は約64mで、西側の溝は2重、3重になる部分がある。5区の西部で現れ、北東に延びて東側の調査区外に続いていく。東側の溝のさらに外側には径40～60cmのピットが連なり、部分的に列をなしているように見える(ピット列)。溝間に硬化面やピットなどは確認できなかった。遺物は溝中から10数gの土器小片が散発的に出土したのみである。両側に側溝を伴った道路状の遺構の痕跡と推定する。

(8) ピット・ピット群・ピット列・柱列

土坑より径の小さいピットは総数で351基検出されたが、規模が小さいので後世の掘乱や耕作痕と見分けがつかない。円形や楕円形を基調としている。遺物を伴ったものは少数で、時期を比定できるものは希だが、大半は竪穴建物と同じ時期に属すると推定する。分布は、土坑と同様に竪穴建物が集中する1・2区に少なく4A・4B・4D区と5区で多い。ピットが集中する箇所がいくつかあり、ピット群として把握した。また直線や直角に並ぶものをピット列とし、そのピット内に柱痕が確認できたものを柱列とした。特殊なピットとしては1A区の69住を切るP69(直径25cm、深さ28cm)から銅鏡片が一括出土している(第23図・第181図87)。

(9) その他の遺構

165住(2区)は中央に65×50cmの大石が据えられ、その脇の大形ピット内からは多量の鉄滓(7.947g)が出土した。大石は上面が平坦で、30cmの範囲で被熱・敲打痕を持つ。本址は金床石と鍛冶ピットを伴う鍛冶遺構であった可能性が高いと考えられる。

2区の溝6は東部で溝幅が広がる部分があり、その北岸の2カ所に、溝底に降りて行けるようなスロープ状の掘り込みや段に大小の礫を伴った施設が設けられていた。溝6の水流を利用する洗い場・水汲み場的なものが設けられていた可能性がある。

4 遺物出土状況

(1) 多量の炭化材・炭化物を伴った竪穴建物

ア 135住(第82図)

住居中央部やや南東寄りの埋土中層に多量の炭化材が集中、重積していた。炭化材は丸木状や分割材状だったがすべて5～12cmほどの小片で、上屋の構造材がそのまま炭化したようには見えなかった。炭化材はすべてが床面より数cm浮いており、集中部の中心には1mくらいの範囲で焼土層も伴って

いた。住居がある程度埋まった(埋めた)段階で焼土と炭化材層が形成されたものと考えられる。土器類は2.7kg出土したが、炭化材の分布とは関係なく、覆土下層から床面にかけて大小の破片で散在していた。

イ 161住(第83図)

埋土上層から下層にかけて多量の炭化材が遺存していた。炭化材は板状(最大36×32cm)や柱状(最大52×8cm)で、特に南部から南東部に多く、壁の近くでは寄り掛るように浮き、中央部付近では床に密着するものもあった。一方、土器類は西壁中央に設けられたカマドの前部から北西部の一带に集中していた。その量は21.2kgと極めて多かったが、破砕されたように大小破片で散らばっていた須恵器大甕1点と灰陶陶器の椀意器がほとんどで、床面に密着したものは少なく、意図的な配列などの様相はなかった。これらの周囲の覆土中層から鉄鏝3点が出土した。また北東隅やや西寄りの壁直近の覆土最上層から銭貨(延喜通宝)が孔の位置が通るように5枚溶着して出土した。

ウ 197住(第83図)

南半部に多くの炭化材が遺存していたが、5～25cmほどの長さで、規格や方向の統一性もなく密集や点在する状況であった。南西部のものは床面に接しており、東側に行くほどに覆土上部へ浮いていく傾向がみられた。また南西部にはカヤなどイネ科植物の茎を籐状に編んだものが炭化して遺存していた。土器類の出土量は2.25kgで他例と比べてかなり少ないが、多くが完形品やそれが割れた一括品で遺存していた。特に南西部には4点の土師器杯Aが床面上に密集して方形に並べられ、付近にも残りの良い杯Aと椀がまとめられていた。

エ 223住(第82図)

埋土上層から下層にかけて多量の炭化材が出土した。炭化材は柱状に細長いものが多く、最大は134×24cmを測った。中央部から周囲に向かって放射状に広がるように遺存しており、特に西部から南西部に顕著であった。壁の近くでは寄り掛るように傾き、中央部付近ではほとんどが床に密着、あるいはわずかに浮く程度であった。土器類は16.8kgという大量の出土があったが完形やそれに近い形で遺存した個体はほとんどなく、大小の破片が覆土の上層から中層にかけて多量に含まれていた。カマド周囲には床面に近いレベルのものもあったがすべて破片であった。

オ 245 住 (第 84 図)

床面中央部からカマドの前面や東側にかけて炭化材がまとまっていたが、他例に比べて量的には多くない。板状や丸木状を呈して 5～25cm ほどの長さや幅で、中央部のものは床に接し、端部に行くほど浮く傾向にあった。土器類は 10.2kg と多量に出土したが、上～中層に破片が多く、下層から床上には土師器・黒色土器 A の杯 A や椀が完形や一括品で残されていた。特にカマドの右脇には黒色土器 A の杯と椀、土師器裏の底部の計 7 個体が一カ所に重ねられていた。

(2) 意図的な廃棄、配置などがあつた遺構 ア 55 住 (第 85 図)

多量の土器類が出土し、杯・椀・皿類だけで 130 点を図化提示できたが、その多くが壁際から出土した。壁に直近のものは床面よりかなり高い位置で壁に添って立つように傾き、壁から少し離れたものは床面に近いレベルで傾きが少なく、あたかも壁の上部から滑り落ちたような遺存状況を示した。また壁際に 3 点ほどの杯 A が正位で重ねられたものもあった。

イ 157 住 (第 84 図)

東壁南寄りの石組みカマド周辺と住居中央部に大小の礫 (最大 60 × 35cm) が多量に残されており、その周辺から 11.1kg に及ぶ土器類が出土した。51 点を図示できたが、土器群は明らかに 2 時期 (Ⅲ期新～Ⅳ期古、Ⅴ期新) に別れることから、2 時期の異なる 2 棟の竪穴建物がほぼ同じ位置で重複していたのを調査時に見落とした可能性が高い。調査当初は西壁中央部に東西に長く延びる焼土 (F1) が最初のカマド跡、南寄りの石組みカマドが最終のものとなつたと捉え、1 棟の住居の中でカマドの移動があつたと理解した。しかし、出土図や写真を詳細に検討すると、石組みカマドや中央部の礫はすべて床面から 5～10cm 浮いており、北東隅から北壁際の礫は 10cm 近く浮いて北壁とは微妙に異なる緩い弧状のラインを描いて分布する。F1 の焼土は壁際では上部から存在するが 40cm ほど内側は一段下がった周囲の礫の下端レベルで検出されている。土器類の出土地点も新しい時期のものが石組みカマド周辺に集まる傾向が認められる。これらのことより、調査時に把握した壁と床面は東壁中央にカマド (F1) を持ちⅢ期新～Ⅳ期古の土器群が伴う住居 (157A 住) であり、石組みカマドと礫群を持ちⅤ期新の土器群が伴う住居 (157B 住) は A 住よりも 5cm ほど高いレベルに

調査では把握できなかった軟弱な床を持ち、A 住の中にすっぽり取まる位置に構築されていたと推定する。

ウ 2 区土坑 212 (第 86 図)

216 × 100cm を測る長方形の土坑の中央から中央北寄りに黒色土器 A の杯 A 2 点と灰軸陶器皿 1 点、南東隅に黒色土器 A の椀 1 点が完形で残り、中央部の西壁際からは釘状の鉄器 1 点も出土した。これらの遺物は土坑底面から 10cm 前後浮いていた。本址埋土の下層は底面の凹凸を埋め均したような不自然な堆積で、上層にはローム粒や黒色土ブロックが混じり、掘削で生じた土がそのまま埋め戻された状況を呈す。土器類は出土レベルが上層の底面付近で揃っており、埋め戻しと同時に意図的に納められたものと推定され、本址は墓址として捉えたい。

エ 4 区土坑 17 (第 86 図)

180 × 92cm を測る長方形の土坑の北壁下から土師器の杯 A 4 点と椀 1 点、中央部の東壁下から土師器杯 A が 1 点、完形に近い形で出土した。どちらも壁直下からわずかに内側に寄った位置にあり、北壁下の 5 点は正位や逆位で東西に並ぶように残されていた。本址の埋土はロームなどのブロックが多量に混じる、掘削土を短期間で埋め戻した状況を示しており、いずれの土器も土坑底面から 2～5cm 浮いていた。本址は土坑の底面を整地した後、土器類を意図的に並べて埋め戻しを行った墓址と推定する。

オ 4 区土坑 41 (第 86 図)

185 × 92cm を測る隅丸長方形の土坑の北東部から土師器杯 A と椀、黒色土器 A の椀、灰軸陶器椀と長頸壺各 1 点の計 5 点、南部から土師器杯 A が 1 点、合計で 6 点の土器類が完形に近い形で出土した。また南部のやや中央寄りには鉄器 (刀子) 1 点が残されていた。北東部の土器類 5 点は東壁に添うように並び、灰軸陶器椀以外は正位で、ほぼ底部のレベルは揃っていた。灰軸陶器椀のみは側位で直立しており、他と較べて不自然な状態であった。南部の土師器杯 A や鉄器も含め、すべてが土坑底面より 5～10cm 浮いていたがレベルは揃っていた。土坑の底面を整地した後、土器類を意図的に並べた墓址と推定する。

No.	地区	平面形	主軸方位	規模	用途	カマド位置	柱六	重畳回数	日	時期	特記事項	掲載頁		
78	IA	方形	N95E	4.0	3.7	0.28	13.5	東野中央		IV新	壁際は逆三角壁。中央は単層でローム・ブロック多。壁下を築き固い床。	25		
79	IA	方形	N1E		3.2	0.33	(10.6)	不明		溝2	床面の段差を伴う間切り状の溝。	25		
80	IA	隅丸方形	N84W	4.2	4.4	0.23	17.2	西野中央		溝2	高床部分の合理的な処理が。	25		
81	IA	方形	N94W	3.8	3.8	0.23	14.0	西野中央		溝2	壁下の隙溝を築き固い床。	25		
82	IA	隅丸方形	N3W	4.2	4.0	0.35	(15.9)	不明		IV新	東野中央部に。	25		
83	IA	方形	N7W	3.4	0.15			北野東寄りか		IV新	北野の礎を伴ったブロックがカマド下。	25		
84	IA	方形	N85W	5.0	1.6	(23.1)		西野中央		溝1	一部溝溝が。重なり、住居部との礎と推定。	26		
85	IA	隅丸方形	N93W	4.4	4.4	0.36	17.4	西野南寄り	84住	IV新	覆土中層まで埋没後、焚火の取組形成、ブロックの多いで埋まる。床は厚く固い。中央床面に横上層。	26		
86	IA	方形	N96W	3.5	3.5	0.13	(21.2)	西野中央	87住	溝古	中央部には横上層あり。カマド周囲に横溝が。	26		
87	IA	隅丸方形	N85E	4.0	3.6	0.20	13.4	東野中央	88住	溝1(壁10)	溝古	溝古	26	
88A	IA	隅丸方形	N4E	4.9	4.9	0.20	(23.4)	不明		溝1(壁10)	IV新	溝古	26	
88B	IA	隅丸方形	N1E	3.6		0.10	(12.2)	不明		IV新	不明	26		
89	IA	不明	NO		0.02			不明	90住	溝古	細作・粗乱による破壊が著しい。	27		
90	IA	不明	N2E		0.13			不明	89住	IV新	不明	27		
91	IA	不明	N87E		0.28			不明	92住	溝古	不明	27		
92	IA	不明	N8W	3.5	0.15			不明	93住	溝古	不明	27		
93	IA	不明	N98W		0.12			不明	92住	IV新	不明	26		
94	IA	隅丸方形	N97W	3.1	3.2	0.12	9.5	西野中央	96住	V新	中央部北寄りに礎層。	27		
95	IA	方形	N5W		4.4	0.50	(16.4)	不明	96住	溝古	不明	27		
96	IA	隅丸長方形	N88E	4.8	4.5	0.35	(18.8)	不明	94,95住	溝古	遺物多し。遺物が84住より本が新し。発掘面視と異なる。	27		
97	IA	方形	N91E	4.0	4.0	0.23	(14.3)	東野中央	98,99住	溝古	不明	28		
98	IA	方形	N91E	4.0	4.0	0.23	(14.3)	東野中央		V古	覆土はローム・ブロックを少量含む褐色土単層。	28		
99	IA	長方形	N85E	8.0	6.4	0.53	46.8	東野中央	13	V新	覆土に意図的な埋め戻しや焚火の取組跡がまもる。床は全体的にふかくなる。前面土階は一段下がりて床を伴う。	29		
100	IA	方形	N83E	4.5		0.06	(15.4)	東野南寄り	118住	IV新	ほとんど削平され。	28		
101	IB	方形	N87E	4.7	4.2	0.30	(14.9)	不明	102住	IV新	ほとんどのブロックを自然な覆土。人為的な埋め戻しが。	28		
102	IB	方形	N84E	3.7	3.9	0.12	14.5	東野中央	101住	溝古	床は固く良好。平坦。	28		
103	IB	方形	N83E	4.4	3.9	0.20	(15.5)	東野中央	104住	溝古	床は壁下を築き固く良好。東野中央部から見て、土階相多数。中央部は固く良好な床。壁下や中層部、所定で段差に直ぐ。	28		
104	IB	不整形方形	N91E	4.4	4.2	0.10	18.0	東野中央	103住	溝古	中央部は固く良好な床。全体が中央部に向けて傾斜した層状。	30		
105	IB	隅丸方形	N92E	2.2	2.4	0.10	4.8	東野中央寄り	11	溝古	中央部は固く良好な床。全体が中央部に向けて傾斜した層状。	30		
106	IB	方形	N79E			0.30	(23.7)	東野中央寄り(2)	溝3	溝古	P-1aは147の可能性がある。	30		
107	IB	方形	N98W	3.8	3.8	0.10	13.6	西野中央		IV古	床は平準だが中層部から大層な築造を伴ったと推定。穴で石が埋まるとともに密着。	30		
108	IB	方形	N1W	3.7	3.4	0.25	(11.6)	北野中央	17	溝古	床は平準で良好。	30		
109	IB	長方形	N83E	3.0	3.7	0.13	11.0	東野中央	7	溝古	床は固く良好。中央部床面にC30-0.5mの築層。礎石を有する柱の可能性。床はロームを敷き、炭火の取組跡。	31		
110	IB	長方形	N83E	6.6	6.6	0.37	36.5	東野中央	7	溝古	床は褐色土単層。土階相多数。傾斜した段差。石製土階。瓦葺。	31		
111	IA	長方形	N96W		0.07		(9.8)	西野中央	98,121住	IV古	遺物少ない。	32		
113	IA	方形	N4W	4.6	4.0	0.20	(18.4)	不明	99,114住	IV新	覆土1層はブロックを含む人為処理。中央の隅丸な床。遺物・カマド・柱の基盤や土階の立ち上がりなど新築想定。	32		
114E	IA	隅丸方形	N87E	4.8	4.4	0.22	18.1	東野南寄り	4	V古	柱・全面のガマドは新築。	31		
114E	IA	隅丸方形	N2W	4.7	4.1	0.18	17.2	不明	113住	溝古	不明	31		
115	IA	方形	N3E	2.8	2.9	0.08	7.8	不明		溝古	ほぼ全面良好な床。	32		
116	IA	方形	N88W	4.3	4.2	0.07	(18.8)	西野中央	68住	溝古	ほぼ全面良好な床。	32		
117	IA	長方形	N92W	4.8	3.9	0.18	17.6	西野南寄り		溝古	ほぼ全面良好な床。	32		
118	IA	不整形	N97W	4.0	3.5	0.15	13.0	西野南端	100住	溝古	中央部の床に東西に広がる窪み。	32		
119	IA	方形	N85E	3.1	0.11	0.30		東野中央	120住	溝古	遺物少ない。	32		
120	IA	長方形	N97W	4.7	0.14	(18.9)		西野南寄り	121住	V古	121住と122住の遺物が遺物所見と異なる。	33		
121	IA	方形	N93W	4.0	3.9	0.24	14.0	西野中央		V古	覆土1層は横上層。120住の遺物が遺物所見と異なる。	33		
122	IA	方形	NO	3.9	3.9	0.15	14.6	不明	67住	溝古	不明	33		
123	IA	方形	N91W		0.22	(21.8)		西野南寄り	124住	溝古	床は固く堅靱。溝の遺物埋入1階。	33		
124	IA	方形	N91W	5.8	5.4	0.36	(29.2)	西野南寄り(3)	123住	N新	覆土は褐色土。床全面固く良好。P-1aは147の可能性がある。	34		
125	IA	方形	N84E	5.4	4.9	0.32	(24.1)	東野中央	126,127住	IV新	不明	34		
126	IA	方形	N91W	3.3	3.3	0.24	11.0	西野南寄り	127住	溝1	125住層上に存在。中央西寄りに横上層。	33		
127	IA	方形	N3W			(12.4)		北野西寄り	溝5	溝1	溝溝・ピットの穴間から大層な築造を伴ったと推定。	34		
128	IA	長方形	N7W	8.1	0.38			不明	溝5	不明	住居の傾り方らしき大きな窪み多数。	33		
129	IA	方形	N88E	4.3	4.2	0.20	18.1	東野中央		溝2	不明	34		
130	IA	不明	N16E	3.8	0.08			不明	溝2	不明	ほとんど削平。	34		
131	IA	不明	N4W		0.08			北野西寄り	(壁10)	不明	ほとんど削平。	35		
132	IA	隅丸長方形	N90E	4.2	2.5	(17.2)		不明	不明	不明	不明	35		
132	2	方形	N3W	3.5	3.6	0.25	11.3	北野中央		IV新	覆土にローム・ブロック多量混入。人為処理の可能性。	35		
133	2	長方形	N89W	4.2	3.4	0.15	13.4	西野中央		IV新	床は平準。中央部は北野部より少し高く。右側面方上層。	35		
134	2	方形	N91W	4.1	4.2	0.16	16.9	西野中央		IV新	床中央部は良好で平坦。外層は築造層。	35		
135	2	不整形方形	N8E	4.7	4.5	0.15	19.1	不明	溝7,136住	N新	床は全面的に平準で固い。中央部の覆土中層に1.5m厚の壁土層。隅間・5cm長さの縦かま。炭化材多数。南東の壁土は方角の遺物埋入の可能性。	35		
136	2	方形	N81W	4.4	4.2	0.25	16.7	不明	溝7	IV新	不明	36		
137	2	方形	N85E	3.8	0.11	(16.4)		北野北寄り	138住	溝2	不明	36		
138E	2	方形	N12W	6.3	2.0	(12.3)		北野西寄り(3)	溝7	V古	溝古	不明	36	
138E	2	方形	N88E	5.7	5.5	0.15	(30.4)	東野中央	溝7	V古	溝古	不明	36	
139	2	長方形	N3E	2.8	0.12			不明	溝138,152住	IV古	両溝に傾り方状の窪み。中央部の床は良好。	37		
140	2	方形	N87W	3.6	4.0	0.11	14.4	西野中央		溝7	IV古	床は平準。南側両溝が。重なり内側のものは上部床層。築造の痕跡と推定。P.16から一括土器。	36	
141	2	方形	N88W	4.3	3.8	0.13	(15.6)	西野中央	143住	溝2	方で新築。築造の可能性。143住との遺物。遺物所見と混。	36		
142	2	長方形	N89E	3.1	3.6	0.10	10.9	東野中央		IV新	西野南寄りにかマドと推定される礎。遺物所見は不明。	36		
143	2	不整形方形	N84E	4.0	4.0	0.10	15.4	東野中央		溝1	溝古	溝古	36	
144	2	不明	N1W		0.17			不明	溝141住	溝2	溝古	溝古	38	
145	2	方形	N88W	3.6	3.6	0.22	12.8	西野中央		IV新	244住	IV新	244住	38
146	2	長方形	N84W	3.9	3.0	0.20	(12.2)	西野中央	145住	IV新	146,239	IV新	146,239	38
147	2	方形	N94E	3.6	3.4	0.31	10.6	東野中央		IV古	-241住	IV新	-241住	38
148	2	方形	N92W	3.8	3.7	0.10	14.0	西野中央		IV古	不明	不明	38	
149	2	方形	N108E	2.6	2.8	0.20	6.8	東野中央		溝新	236住	溝新	236住	38
150	2	方形	N87W	3.4	3.4	0.20	10.6	西野中央		溝1	151住	溝新	151住	39
151	2	隅丸方形	N87E		3.9	0.10	(15.0)	東野中央	溝7	溝1	150住	溝新	150住	39
152	2	方形	N6E	3.7	3.7	0.18	12.9	北野東端	溝7	溝1	139住	溝新	139住	39
153	2	方形	N87W	3.2	3.8	0.21	11.3	西野北寄り		V古	不明	不明	39	
154	2	方形	N91E	3.8	3.6	0.25	12.8	東野南寄り		溝2	溝2	溝2	39	

第3表 竪穴建物一覧(2/4)

No.	地区	平面形状	主軸方位	規模	規模	規模	規模	カマド位置	柱	重畳	重畳	時期	特記事項	附図		
				長さ	幅	深さ	面積		径	新	旧			No.		
218	2	正方形	N93E	3.3	3.0	0.18	8.9	東壁南寄り	柱			Ⅲ新	覆土中央部に壁・床・ロームブロック詰め、周囲を埋めて焚火か壁際や内側の土中層より一品。	50		
219	2	方形	N5W	4.0	0.22	14.0	西壁中央	269住				Ⅱ新	220住 溝8	50		
220	2	方形	N86E	4.0	0.12	10.2	東壁南寄り	219,269住				Ⅲ古	溝8	50		
221	2	隅丸長方形	N93W	3.9	3.3	0.32	12.2	西壁中央				Ⅲ新	254,273住	50		
222	2	隅丸方形	N22W	3.6	0.31			不明				223住	Ⅰ	223住に引かれてわずかに残る。		
223	2	隅丸方形	N93E	4.0	4.1	0.32	14.3	東壁南寄り				222住	Ⅲ新	炭化物多量出土。壁の下層は下層に炭化材多量。遺物は1層から下層まで大小片が多量に出土。82		
224	2	方形	N75E	3.8	4.0	0.33	14.5	東壁中央	溝6			Ⅱ新	壁際や土中の内側から5～20cm残った一括品10数粒。壁際に西側から角材が多量に埋りこんでたままに存在。その他小破片が多数に埋りこんで出土。	51		
225	2	方形	N70E	4.2	4.1	0.40	15.9	東壁中央				Ⅱ新	遺物多。カマド周辺に大破片と一括品出土。	51		
226	2	長方形	N73E	5.2	4.4	0.38	21.8	東壁中央				Ⅰ古	床は平坦で内側・壁際以外には炭燼。中央はどぼさか増す。土中層遺物きわめて少。下層と床面から一括品多数。カマド周より軽石製浮土。壁際をきまは平坦で古い。土柱は4本方形。壁柱4本12本均等に配置。西壁中央部壁下に入出口関連遺物とみられるビッド5基。カマドに多量の粘土残る。	52		
227	2	長方形	N65E	6.6	5.7	0.23	36.8	東壁中央	16			Ⅰ古	床は周く平坦。カマド突出。全面的に灰色粘土残る。床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	51		
228	2	不整形	N107W	4.4	3.7	0.25	14.6	西壁中央				Ⅰ古	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	52		
229	2	不整形	N81E	4.2	4.0	0.07	13.8	東壁北寄り				Ⅰ古	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	52		
230	2	不整形	N88W	3.1	3.2	0.17	9.3	東壁中央				Ⅰ古	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	52		
231	2	長方形	N83E	3.7	2.8	0.17	9.5	東壁中央				262住	Ⅰ古	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	51	
232	2	隅丸方形	N97W	3.6	3.7	0.32	12.1	西壁中央				157住	Ⅳ新	中央部東側に良好な床。	53	
233	2	長方形	N92W	3.9	0.12			西壁中央				213住	Ⅳ新	遺物僅少。	53	
234	2	不明	N97W	3.2	0.30			西壁南寄り				213住	Ⅰ古	大平石が城外。遺物僅少。少の可能性がある。	53	
235	2	不整形	N83E	3.3	3.6	0.13	10.4	東壁南寄り				溝10	Ⅰ古	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	53	
236	2	方形	N88E	3.3	3.6	0.07	8.7	不明				148住	Ⅰ	壁下に148住の重畳が認められるが、遺物は本層が主。	53	
237	2	方形	N96W	3.0	3.0	0.05	8.4	西壁中央				ⅢⅠⅣ	ほとんど削り取れた。遺物僅少。	53		
238	2	方形	N82E	3.5	3.7	0.18	11.9	東壁南寄り				146住	242住	Ⅱ新	242住の1層を削って、内層1中に床を構築。	53
239	2	不明	N8E	2.7	0.19			不明				145,146住	240住	Ⅱ新	残存部ほとんどなく。詳細不明。	54
240	2	不明	N6E	2.7	0.16			不明				145,209住	242住	Ⅱ新	残存部ほとんどなく。詳細不明。	54
241	2	不明	N5W	3.0	0.08			不明				145,146住	242住	Ⅰ古	146,238,141住は本層を削るが味まで達していない。南西側のビッドは出土し跡から本層を削り別遺物と判断。床は平坦だがあまり古い。小さい穴にしては遺物多。	54
242	2	方形	N102W	4.0	3.7	0.30	12.3	西壁中央				146,238	Ⅰ古	146,238,141住は本層を削るが味まで達していない。南西側のビッドは出土し跡から本層を削り別遺物と判断。床は平坦だがあまり古い。小さい穴にしては遺物多。	54	
243	2	不整形	N83E	2.8	2.8	0.12	7.2	東壁中央				144住	Ⅳ新	カマド周辺に中央部で床から若干残って一括品多数。	54	
244	2	方形	N9W	4.1	4.3	0.10	17.0	不明				241住	Ⅱ	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	54	
245	2	不整形	N70E	3.2	3.0	0.20	11.4	東壁中央				溝10	Ⅱ古	壁土中に下層の中央部からカマド前部にかけて遺材と土層。一括大破片多数出土。一括炭燼と焚火があった。	84	
246	2	方形	N3E	3.9	3.7	0.06	13.4	北壁中央				Ⅳ新	削平を受けて南壁部分はほとんどない。中央部良好。	54		
247	2	方形	N93E	3.7	3.9	0.13	12.9	東壁北端	248住			Ⅳ新	壁土中に248住の土層が確認。床は中央部良好。	54		
248	2	隅丸方形	N98E	3.4	0.10	8.8	東壁北寄り				Ⅳ新	東壁部はほとんど削平。247住との前後関係不明。	54			
249	2	方形	N94E	3.5	4.2	0.13	14.0	東壁中央				溝7	250住	Ⅳ新	南東部の床は250住の土層中に構築。	55
250	2	方形	N85E	4.0	0.17	13.4	東壁中央					249,135,136住	Ⅰ新	カマドに灰色の粘土残る。	55	
251	2	方形	N5W	3.4	3.9	0.10	13.6	不明				140住	溝2	Ⅱ新	内層より内側の床は良好。	55
252	2	長方形	N90W	3.5	3.8	0.06	10.1	西壁中央				140住	溝7	Ⅱ新	南平直く内層と覆土の一部のみ残る。中央部良好な床。	55
253	2	方形	N96E	3.4	0.05	10.1	東壁南寄り					溝7	Ⅳ新	床は周く平坦で古い。カマド周より一括品。	55	
254	2	長方形	N96E	4.4	0.12	12.1	東壁南寄り					271住,1206	Ⅱ新	221住は中央部が大きく破損している。	56	
255	2	長方形	N8E	3.3	2.9	0.11	10.0	不明				168住	(Ⅱ)Ⅳ新	破損がひどく、一部に認められる内層の床。遺物僅少。	56	
256	2	方形	N86E	3.2	0.06	10.1	東壁南端					168住	Ⅱ新	カマドが南東側に残る。古い。	56	
257	2	方形	N88W	4.0	0.08	12.2	西壁中央					193住	Ⅲ新	193住に大きく削り残った。残る。遺物僅少。	46	
258	2	不明	N81E	0.05				東壁中央				Ⅳ新	カマド・南壁から東方方向に構築と推定。遺物少ない。	58		
259	2	方形	N110W	3.0	3.0	0.15	9.0	西壁中央				Ⅰ古	西壁中央のカマドが中央部から削り取れた。遺物少ない。	56		
260	2	不整形	N88E	4.6	4.5	0.34	18.4	東壁中央				Ⅱ	中央から南端へ古い。壁が古い。	56		
261	2	方形	N1E	3.3	3.4	0.12	10.6	不明				溝6	Ⅱ	土層から多量に認められてはすず。壁面見と異なる。	56	
262	2	方形	N80E	4.2	4.3	0.30	17.9	東壁中央				203,231住	Ⅱ古	土中層遺物多。下層と床面に一括品。カマド南側に多い。	57	
263	2	長方形	N78E	3.4	3.8	0.12	12.4	東壁中央				159,264住	Ⅳ新	264住との重畳関係が不明。遺物僅少から判断。	40	
264	2	隅丸長方形	N98W	3.6	2.9	0.10	9.6	西壁中央				263住	159住	Ⅳ新	壁土位置から北壁方向に多量を想定。	40
265	2	隅丸方形	N108W	4.1	3.8	0.26	14.8	西壁中央				溝12	Ⅳ新	中央部は残存の残る。	57	
266	2	方形	N102W	3.2	3.0	0.22	10.0	西壁中央					Ⅳ新	中央部は残存の残る。	57	
267	2	長方形	N97W	3.6	3.1	0.12	10.6	西壁中央				268住	Ⅳ古	壁土から新目カマドと推定を想定。	57	
268	2	不明	N6W	3.2	0.16			不明				267住	Ⅱ	遺物僅少。時期詳細不明。	57	
269	2	方形	N87E	2.6	2.4	0.12	5.8	東壁南端				219,220住	Ⅰ古	遺物多。下層から大小破片多数。南壁周辺に一括品。219・220住を大きく切り込めた多量な品が多い。	58	
270	2	方形	N85E									182,183住	Ⅰ古	182住に削られたカマドの存在から本層を確定。カマド内を壁土が埋め込まれて182住とつながる。	58	
271	2	方形	N3W	3.4	0.03	12.9	不明					Ⅰ古	削平により覆土をほとんどなく。土層。	58		
272	2	方形	N72E	5.3	0.10	12.7	東壁中央					Ⅰ古	南壁を削6に削られるが、柱は残存。	58		
273	2	不明	N2E	0.15				不明				221,254住	Ⅱ古	221・254住に大きく削り残った。詳細不明。	56	
274	4A	方形	N7W	3.2	3.1	0.16	10.0	東壁南寄り				Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	59		
275	4A	方形	N87E	3.7	0.12	12.1	東壁中央					Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	59		
276A	4A	隅丸長方形	N15W	3.4	0.12	10.3	不明					Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	59		
276B	4A	隅丸長方形	N17W	4.0	0.22	11.8	不明					Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	59		
277	4B	隅丸方形	N101W	3.2	3.5	0.23	11.1	西壁中央				121	Ⅳ	床は起伏多。遺物多。	59	
278	4B	不整形	N111W	0.06	12.3			西壁中央				Ⅳ新	床は起伏多。遺物多。	59		
279	4B	方形	N72E	0.21	11.0			西壁中央				Ⅳ新	床は起伏多。遺物多。	59		
280	4B	不整形	N101W	3.5	3.2	0.24	10.4	西壁中央				溝4	Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	60	
281	4C	不整形	N103W	3.8	4.1	0.15	13.8	西壁中央				Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	60		
282																
283	4C	不整形	N96W	4.9	4.8	0.36	19.8	東壁南寄り				Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	60		
284	4C	方形	N87E	4.9	0.46	23.2	23.2	東壁中央				溝17	Ⅳ古	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	60	
285	5	方形	N78E	4.4	4.2	0.35	16.7	東壁中央				Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	61		
286	5	方形	N78E	4.8	4.3	0.24	18.4	東壁中央				Ⅳ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	61		
287	5	方形	N29W	4.0	0.35	15.6	北壁東寄り					288住	Ⅰ古	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	61	
288	5	方形	N88E	5.0	4.7	0.45	20.9	東壁中央				287住	Ⅱ古	深く、遺物多い。	61	
289	5	方形	N23W	3.9	3.5	0.18	12.7	不明				112	Ⅱ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	61	
290	5	方形	N5E	5.4	4.8	0.40	23.6	東壁中央				Ⅰ古	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	61		
291	5	方形	N69E	4.0	3.9	0.38	14.9	東壁中央				Ⅰ新	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	62		
292	5	方形	N54E	3.8	3.6	0.42	13.0	東壁中央				Ⅱ	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	62		
293	5	方形	N45E	3.8	3.7	0.27	13.4	東壁中央				Ⅱ	削平で破壊され、壁・内層の一部を破壊されたもの。	62		

面積欄(〇)は推定値であることを示す 時期欄の表示は第8表(P114)参照

第3表 竪穴建物一覧(4/4)

No.	地区	平面形 柱各寸	上軸方面 面積(m ²)	規模(cm)	柱間寸法(cm)	重直間隔			
						平面形	規模	柱間	間隔
1	1A	長方形 圓柱	N-10° W 6.4	200×100 364×176	桁行176 梁間160~200	円形	径40~46 径21~39	5基	63
2	1B	長方形 圓柱	N-10° W 19.3	300×200 536×364	桁行176~180 梁間172~188	円形・方形	径46~66 径19~32	8基	63
3	1B	長方形 圓柱	N-10° W 12.9	200×100 302×304	桁行326 梁間192~204	円形	径22~30 径11~22		63
5	1B	長方形 圓柱	N-1° W 8.4	200×200 300×288	桁行136~164 梁間132~152	円形	径42~56 径29~58	9基	64
6	1B	長方形 圓柱	N-3° W 36.2	500×200 840×428	桁行208~228 梁間88~248	円形・方形	径36~54 径19~45	14基	65
7	1B	長方形 圓柱	N-5° W 23.0	400×200 656×352	桁行124~188 梁間168~180	円形・方形	径40~60 径14~32	11基	65
8	1B	長方形 圓柱	N-6° W 24.1	300×200 572×416	桁行188~240 梁間180~200	円形・方形	径58~78 径9~27	7基	65
9	1B	長方形 圓柱	N-3° E 9.0	200×200 316×288	桁行152~160 梁間140~152	方形	径46~86 径18~41	9基	64
10	1A	長方形 圓柱	N-0° EW 34.7	300×200 724×480	桁行228~260 梁間224~252	円形	径50~70 径15~46	4基	64
11(1次)	1A	長方形 圓柱	N-4° W 8.9	100×100 308×284	桁行308 梁間280~292	円形・方形	径74~101 径38~59		63
11(2次)	2	長方形 圓柱	N-12° W 19.3	300×200 516×368	桁行160~192 梁間180~192	円形・方形	径38~64 径7~24	4基	66
12	2	長方形 圓柱	N-10° W 20.2	300×200 508×400	桁行192~204 梁間160~184	方形	径34~64 径10~14	8基	66
13	2	長方形 圓柱	N-0° EW 46.0	500×200 1060×428	桁行196~228 梁間204~220	円形・方形	径30~60 径10~49	7基	67
14	2	長方形 圓柱	N-8° W 46.0	400×100 1060×424	桁行424~460 梁間200~200	円形・方形	径32~56 径10~20		66
15	5	長方形 圓柱	N-41° E 23.6	300×200 648×448	桁行220~228 梁間192~228	円形	径32~70 径18~40		68

第4表 掘立柱建物一覽

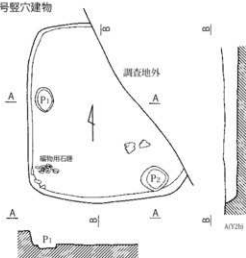
No.	地区	平面形	規模(cm)			特記事項	No.	地区	平面形	規模(cm)			特記事項
			長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ	
1-1	1A	方形	216	208	31	17住を切取	4-1	4B	長方形	176	84	30	27住を切取
1-2	1A	不整楕円形	468	168	20		4-2	4B	方形	140	108	42	溝19を切取
1-3	1A	楕円形	128	80	27	溝2を切取	4-3	4B	円形	80	68	70	
1-5	1A	隅丸長方形	280	220	5	70.73住を切取	4-6	4B	楕円形	(148)	104	75	
1-6	1B	方形	176	164	15		4-7	4B	不整楕円形	284	232	72	溝19に切取れる
1-7	1B	隅丸方形	252	228	34	108住を切取	4-7	4B	楕円形	104	80	88	
2-201	2	楕円形	108	64	32	200住を切取	4-8	4D	楕円形	88	72	47	
2-202	2	円形	80	64	14	204住を切取	4-8	4D	楕円形	(112)	92	21	
2-203	2	隅丸長方形	96	60	34	201住を切取	4-8	4D	不整方形	104	84	68	
2-204	2	不整方形	140	108	30		4-8	4D	楕円形	108	64	72	
2-205	2	楕円形	140	92	22		4-9	4D	円形	76	72	25	
2-206	2	隅丸方形	128	112	42		5-1	5	楕円形	88	36	10	N82W63, Tr10内
2-207	2	楕円形	168	128	43		5-1	5	隅丸長方形	224	96	15	
2-208	2	円形	88	100	28	25.4住を切取	5-1	5	隅丸長方形	132	92	21	289住を切取
2-210	2	楕円形	148	112	53		5-2	5	円形	104	104	68	
2-211	2	隅丸長方形	120	68	57		5-2	5	不整長方形	216	72	48	道路状遺構を切取・墓?
2-213	2	円形	72	72	18		2-209	2	隅丸長方形	228	108	12	墓
2-214	2	円形	88	84	86		2-212	2	長方形	216	100	27	墓
2-215	2	円形	100	88	36		4-1	4A	不整長方形	184	88	68	墓・溝19に切取れる
2-216	2	方形	(124)	(52)	20		4-1	4B	隅丸長方形	192	92	28	墓
4-1	4A	楕円形	136	(104)	11	溝1に切取れる							

第5表 土坑一覽

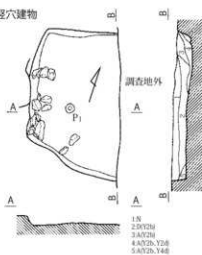


溝6(4次)、測量風景

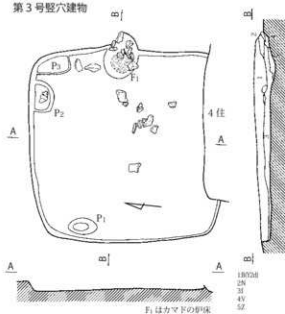
第1号竪穴建物



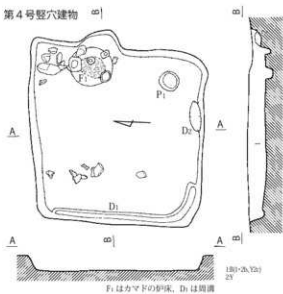
第2号竪穴建物



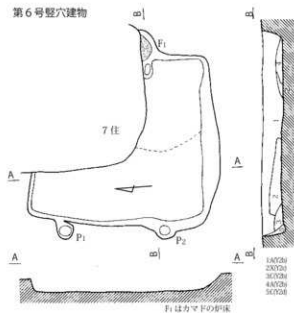
第3号竪穴建物



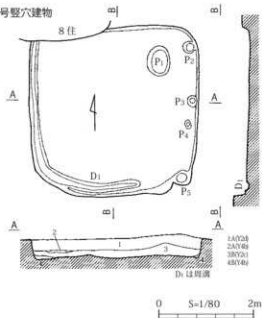
第4号竪穴建物



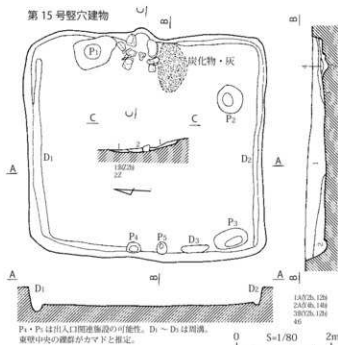
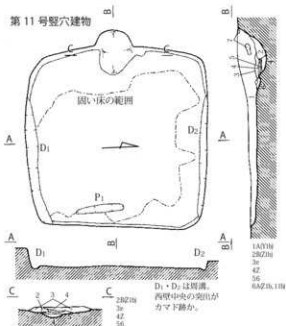
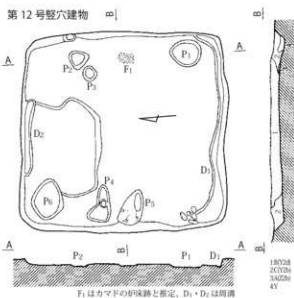
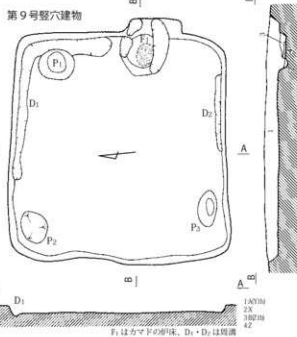
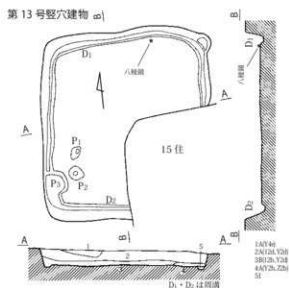
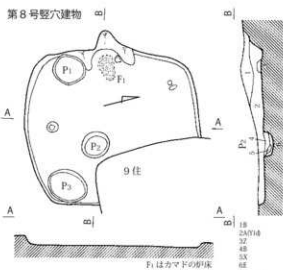
第6号竪穴建物



第7号竪穴建物

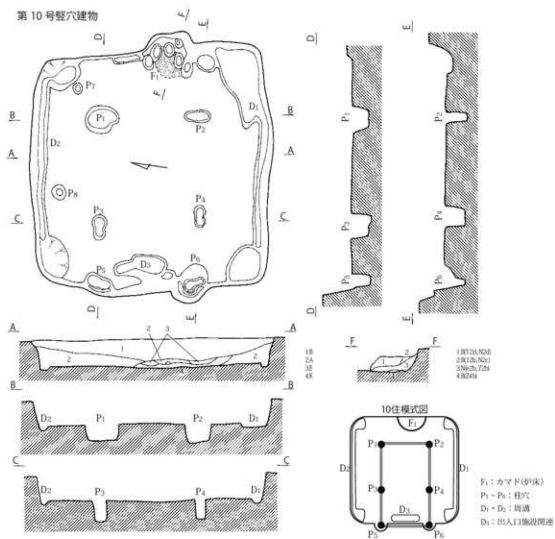


第10図 竪穴建物1(第1~4・6・7号)

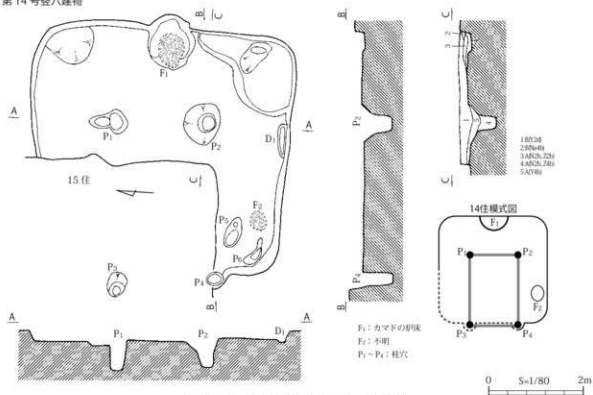


第11図 竪穴建物2(第8・9・11～13・15号)

第10号竪穴建物



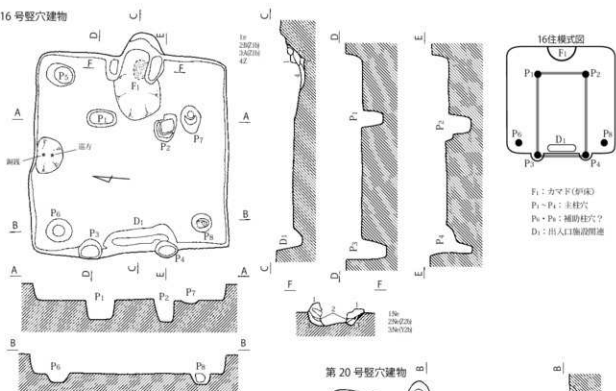
第14号竪穴建物



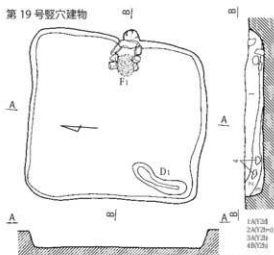
第12図 竪穴建物3(第10・14号)

0 S=1/80 2m

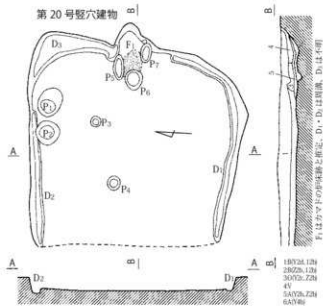
第 16 号竪穴建物



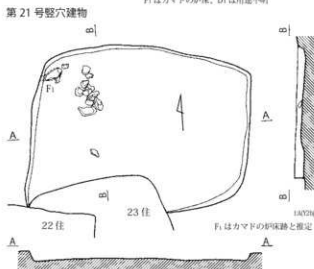
第 19 号竪穴建物



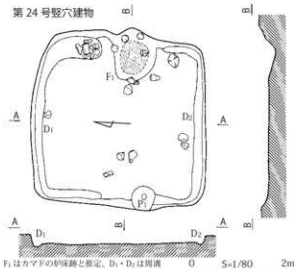
第 20 号竪穴建物



第 21 号竪穴建物

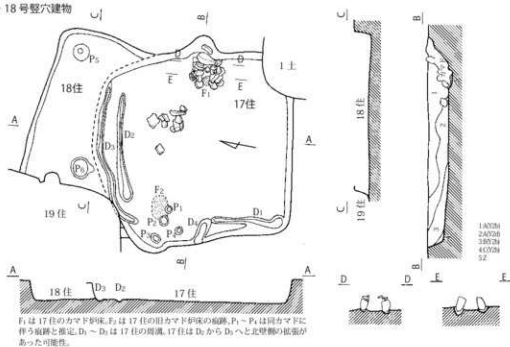


第 24 号竪穴建物



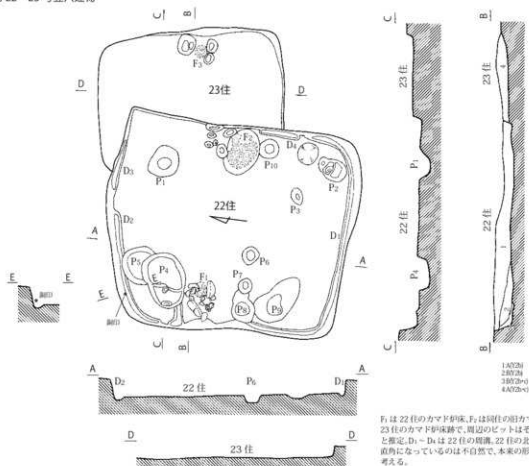
第 13 図 竪穴建物 4 (第 16・19～21・24 号)

第17・18号竪穴建物

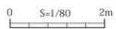


F₁は17住のカマド跡、F₂は17住の旧カマド跡の痕跡、P₁～P₅は同カマドに伴う痕跡と推定、D₁～D₃は17住の周溝、17住はD₂からD₃へと北壁脚の位置があった可能性。

第22・23号竪穴建物

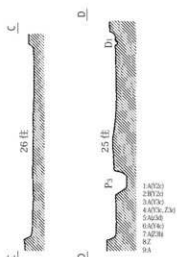
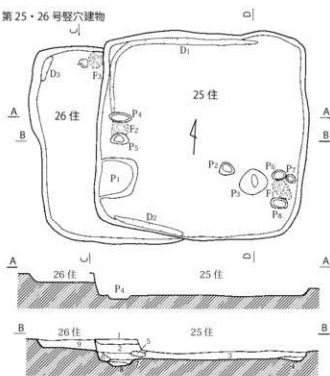


F₁は22住のカマド跡、F₂は同住の旧カマド跡、F₃は23住のカマド跡跡で、周辺のヒツはそれぞれに伴う痕跡と推定、D₁～D₄は22住の周溝、22住の北東コーナーが直角になっているのは不自然で、本来の形状ではないと考える。



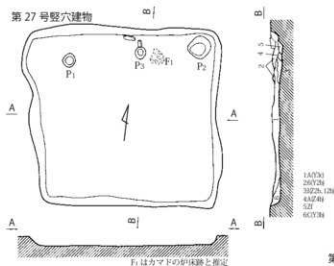
第14図 竪穴建物5(第17・18・22・23号)

第25・26号竪穴建物



F₁～F₂はいずれもカマドの炉床跡と想定、25住はF₂(旧カマド)とF₁(新カマド)の2時期がある可能性、P₁～P₈はカマドの礎石が取れたものか、D₁・D₂は周溝。

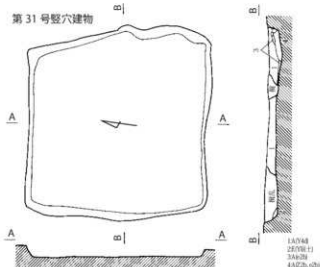
第27号竪穴建物



1A030
2B020
3A020, 3B
4A200
5Z
6C030

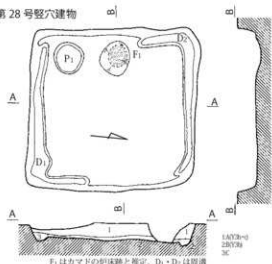
F₁はカマドの炉床跡と想定

第31号竪穴建物



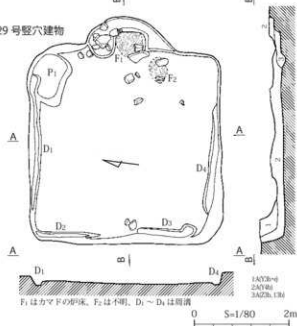
1A030
2B010, 11
3A030
4A200, 10B

第28号竪穴建物



F₁はカマドの炉床跡と想定、D₁・D₂は周溝

第29号竪穴建物

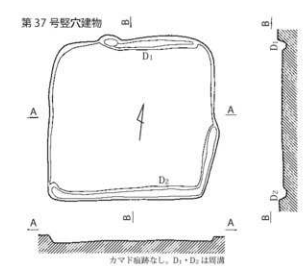
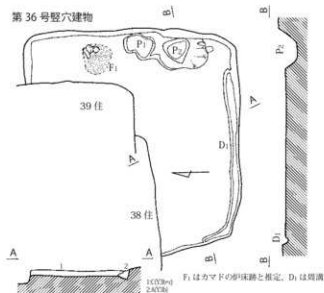
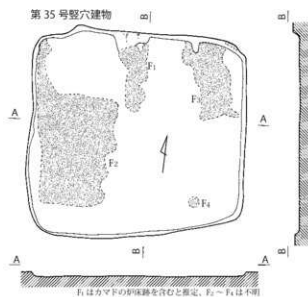
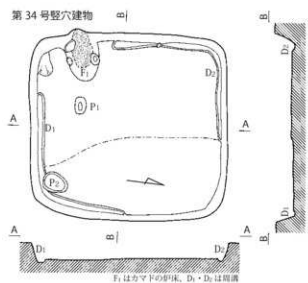
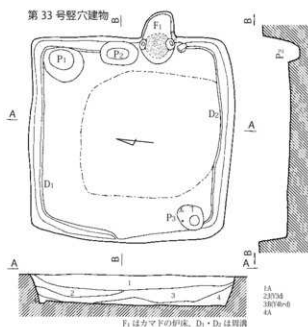
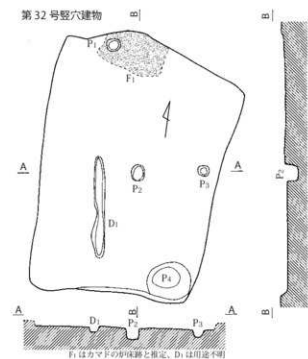


F₁はカマドの炉床、F₂は不明、D₁～D₄は周溝

1A030-0
2A010
3A200, 13B

0 S=1/80 2m

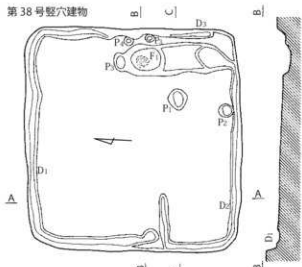
第15図 竪穴建物6(第25～29・31号)



第16図 竪穴建物7(第32～37号)

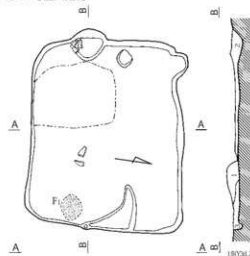
0 S=1/80 2m

第38号竪穴建物



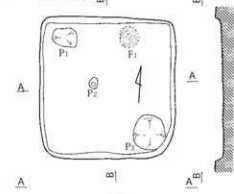
F₁ はカマドの跡。D₁ ~ D₄ は階溝。D₂ の北端は開口切り状。

第39号竪穴建物



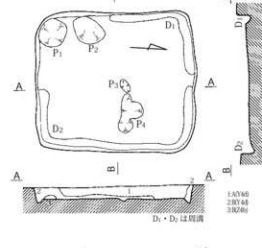
F₁ は旧カマドの跡跡跡。新カマドは西壁の開口部と推定

第41号竪穴建物



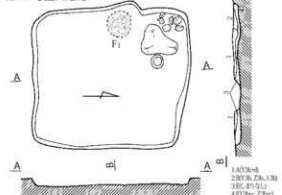
F₁ はカマドの跡跡跡と推定

第40号竪穴建物



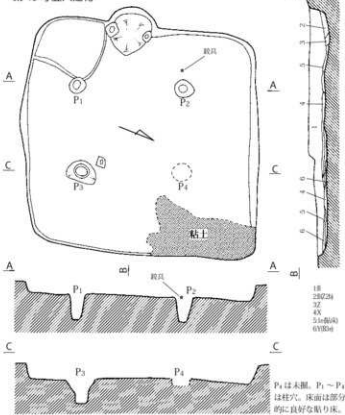
D₁・D₂ は階溝

第42号竪穴建物



F₁ はカマドの跡跡跡と推定

第43号竪穴建物

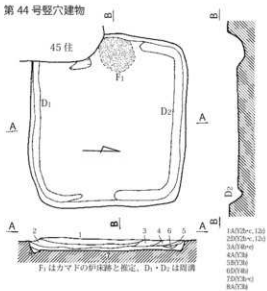


P₄ は木履。P₁ ~ P₃ は柱穴。床面は部分的に良好な順り状。

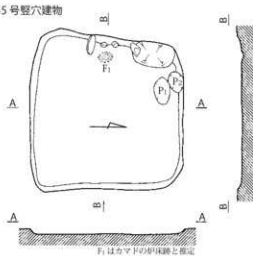
0 5=1/80 2m

第17図 竪穴建物8 (第38~43号)

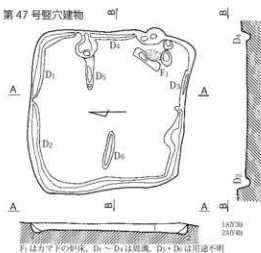
第44号竪穴建物



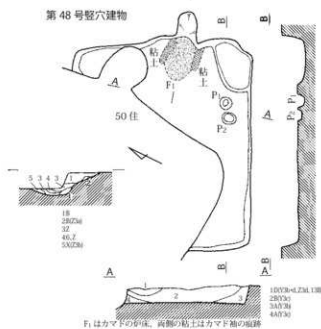
第45号竪穴建物



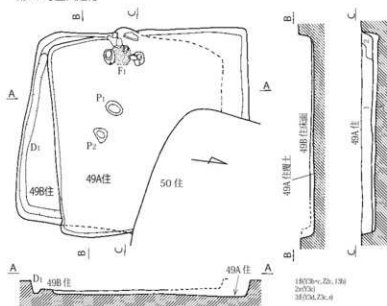
第47号竪穴建物



第48号竪穴建物

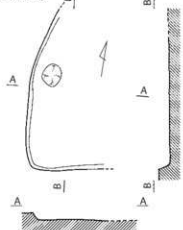


第49号竪穴建物



49B住が49A住を削っていたことが調査後に判明。本来あるべき49B住の北壁等のラインを点線で示す。
土層の第1~2層は49B住、第3層は49A住の覆土。D₁は49B住の間溝。F₁も49B住のカマドの炉床と推定。

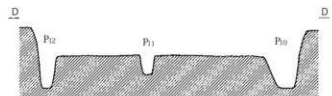
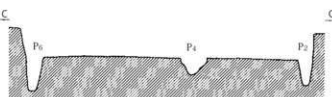
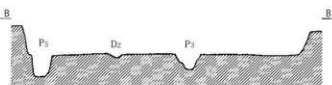
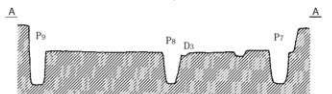
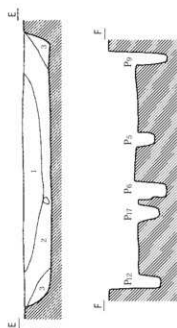
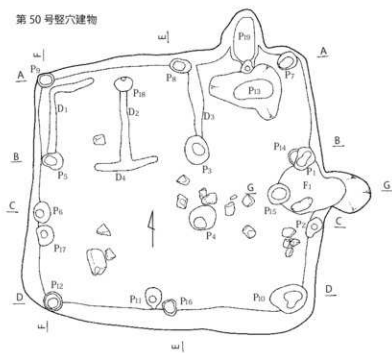
第46号竪穴建物



第18図 竪穴建物9(第44~49号)

0 S=1/80 2m

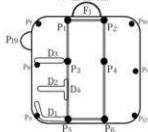
第50号竪穴建物



LA70H
2A(70)
3B(70)
4B

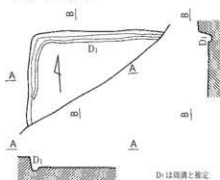
LA70H, Z6H
2A(66), Y6, Z6H
2B
4Z

50住模式図



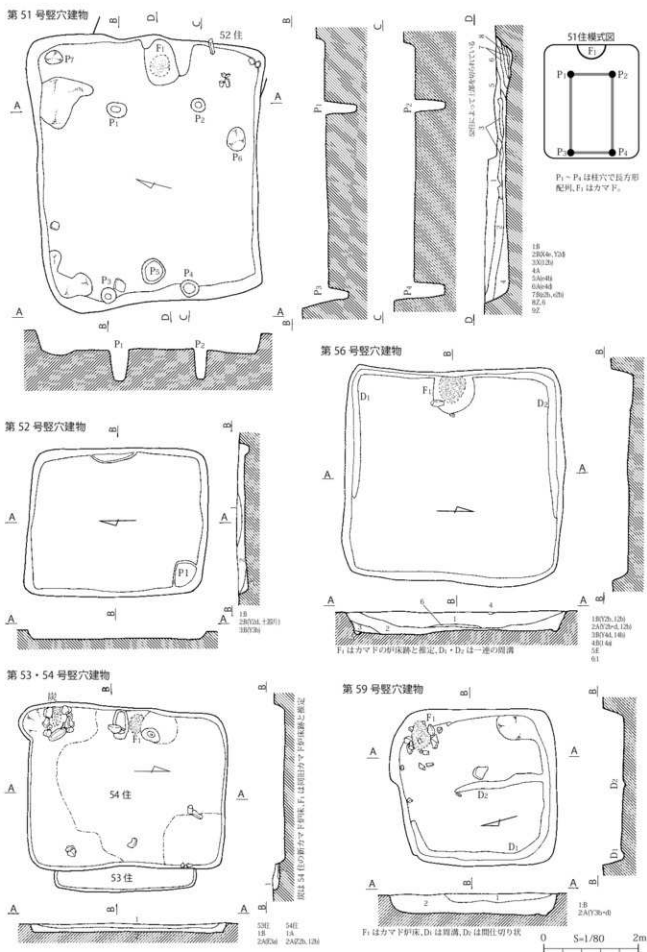
P₁ ~ P₆ は土柱穴、P₇ ~ P₁₉ は壁柱穴(補助柱穴)を想定、D₁ は凹溝、D₂ ~ D₄ は間仕切りなどの建物構造に関連するものと考え、F₁ はかまド(被熱層の表皮は土層間)、P₁₀ も位置的にかまドに類する施設と推定する。

第57号竪穴建物



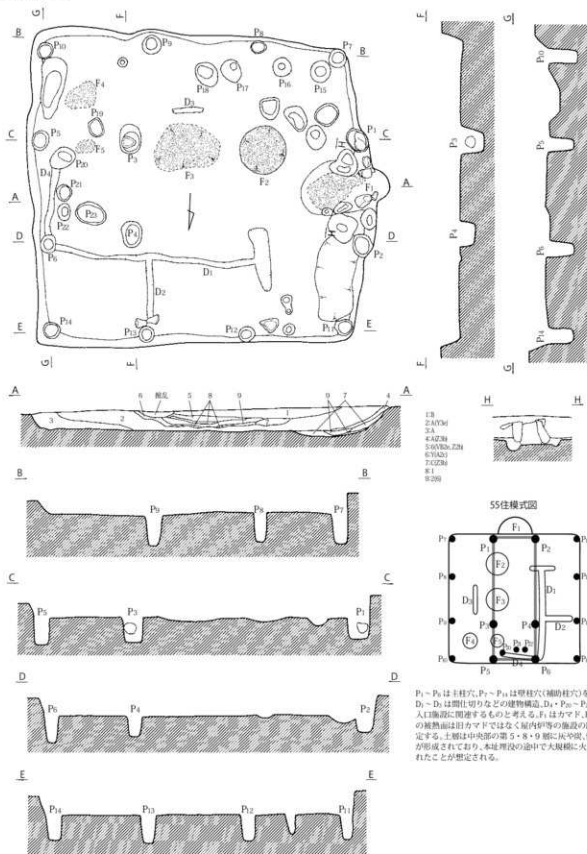
0 S=1/80 2m

第19図 竪穴建物10(第50・57号)



第20図 竪穴建物 11 (第51～54・56・59号)

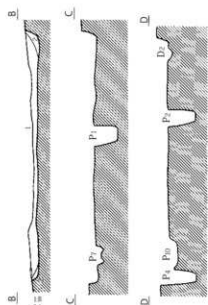
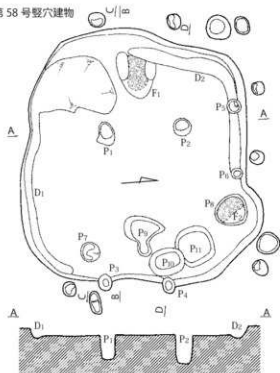
第 55 号竪穴建物



第 21 図 竪穴建物 12 (第 55 号)

0 S-1/80 2m

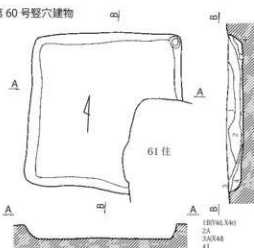
第58号竪穴建物



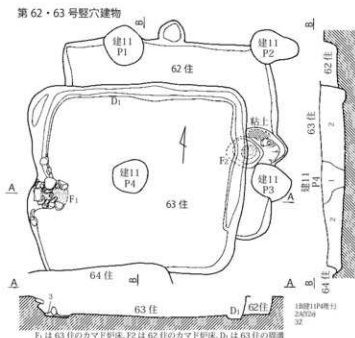
58住模式図

P₁～P₁₀は土柱穴、P₁₁・P₁₂は梁柱穴(補脚柱穴)を想定、D₁・D₂は明渡、F₁はカマド、F₂も位置的にカマドに類する施設の伊床と推定する。住居外側にもPが配列する。

第60号竪穴建物

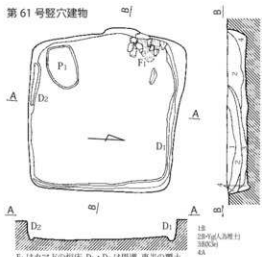


第62・63号竪穴建物



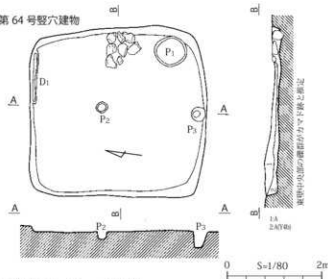
F₁は63住のカマド伊床、F₂は62住のカマド伊床、D₃は63住の明渡

第61号竪穴建物



F₁はカマドの伊床、D₁・D₂は明渡、東平の覆土には人工的に敷き詰められた版がある。

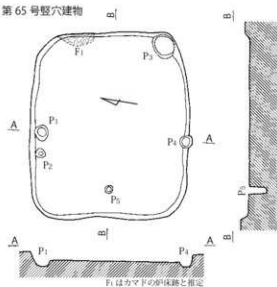
第64号竪穴建物



第22図 竪穴建物13(第58・60～64号)

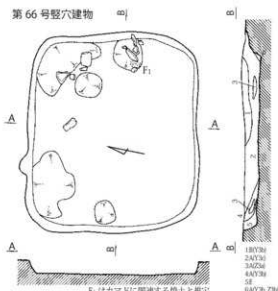
0 S=1/80 2m

第65号竪穴建物



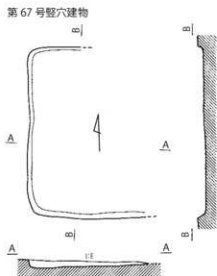
F₁はカマドの跡と推定

第66号竪穴建物

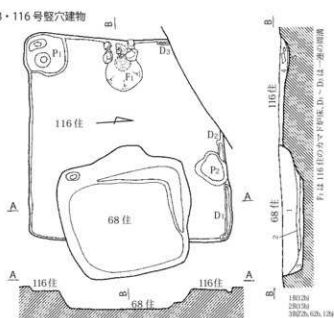


F₁はカマドに関連する痕土と推定

第67号竪穴建物

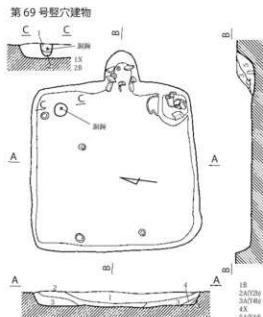


第68・116号竪穴建物



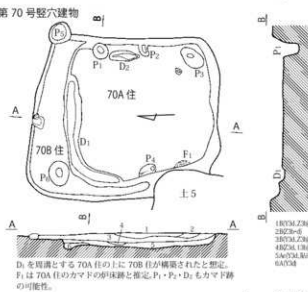
F₁は116住の穴と推定、D₁～D₃は一部の間壁

第69号竪穴建物



1B
2A/2B
3A/3B
4A
5A/5B

第70号竪穴建物

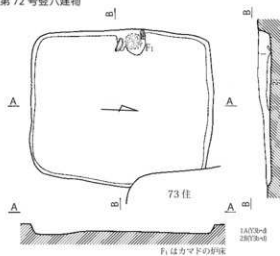


D₁を埋溝とする70A住の上に70B住が構築されたと想定。
F₁は70A住のカマドの跡と推定、P₁・P₂・P₃もカマド跡の可能性。

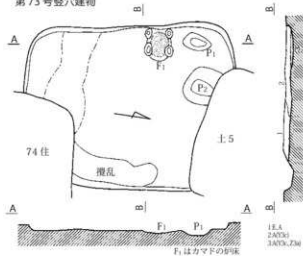
0 S-1/80 2m

第23図 竪穴建物14(第65～70・116号)

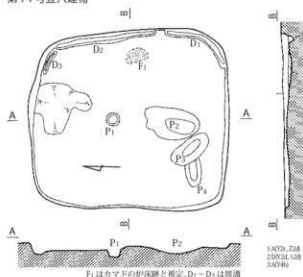
第72号竪穴建物



第73号竪穴建物



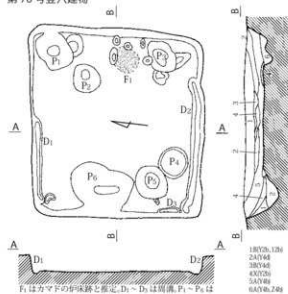
第74号竪穴建物



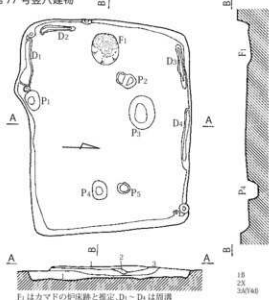
第75号竪穴建物



第76号竪穴建物

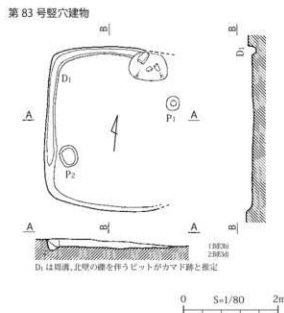
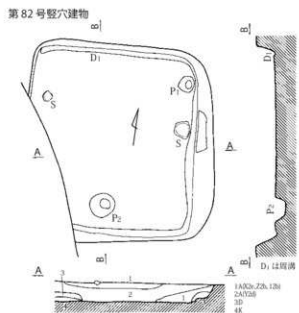
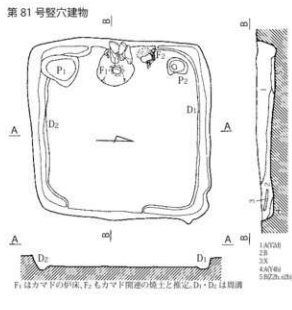
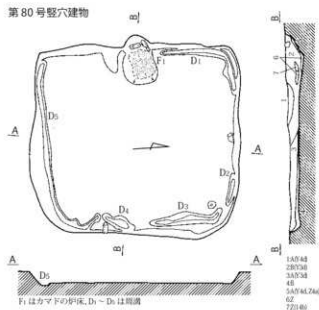
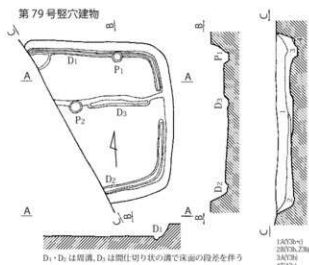
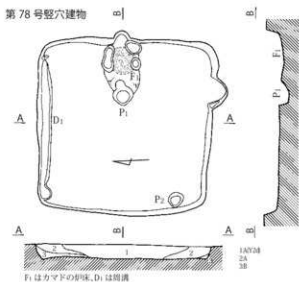


第77号竪穴建物



0 S=1/80 2m

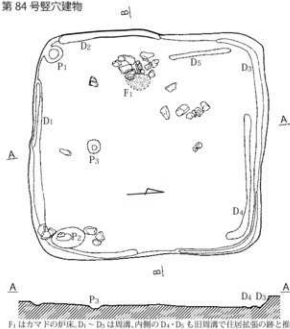
第24図 竪穴建物15(第72～77号)



第25図 竪穴建物16(第78～83号)

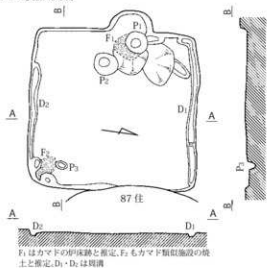
0 S=1/80 2m

第84号竪穴建物



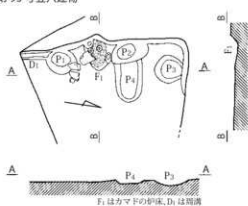
F₁ はカマドの炉床、D₁ ~ D₅ は竪溝、内側の D₁・D₂ も旧竪溝で住居拡張の跡と推定。

第86号竪穴建物



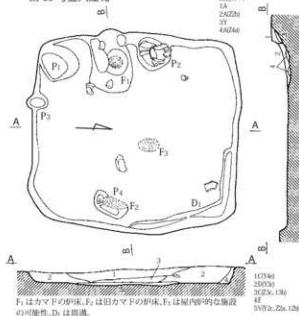
F₁ はカマドの炉床跡と推定、F₂ もカマド類似施設の残土と推定、D₁・D₂ は竪溝

第93号竪穴建物



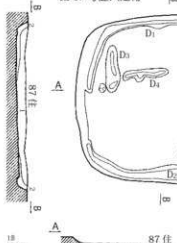
F₁ はカマドの炉床、D₁ は竪溝

第85号竪穴建物



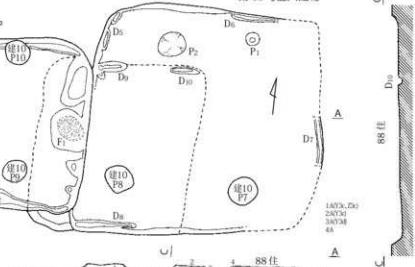
F₁ はカマドの炉床、F₂ は旧カマドの炉床、F₃ は屋内部的な施設の可能性、D₁ は竪溝

第87号竪穴建物



18
20Y36

第88号竪穴建物



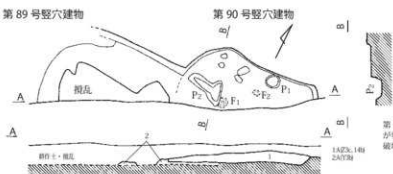
1A0Y3・22a)
2A0Y3)
3A0Y3)
4A

F₁ は87住のカマド炉床、D₁・D₂ は同住竪溝、D₃・D₄ は同住の施設か、D₅・D₆ は88住竪溝、D₇・D₈ 及び南西コーナーの存在から87・88住に切られた住居の存在を推定。遺物等は特約だが888住とする。P7~P10は建10を構成する柱穴。

0 S=1/80 2m

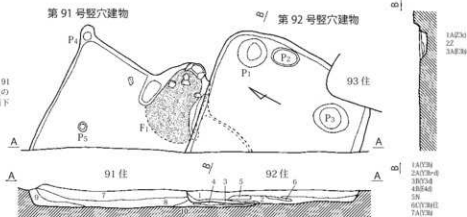
第26図 竪穴建物17(第84~88・93号)

第 89 号竪穴建物

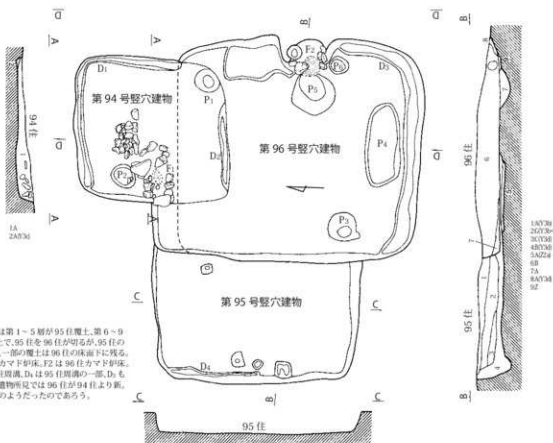
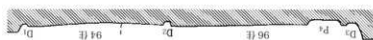


第 1 層が 90 住層土、第 2 層が 89 住層土で、89 住を 90 住
が切ると想定するが詳細は不明。両遺構共に前作や竪穴の
破壊が著しい。F₁・F₂ は 90 住のカマド跡に認定できない。

第 91 号竪穴建物



第 1～6 層が 92 住層土、第 7～10 層が 91
住層土で、91 住を 92 住が切ると 91 住の
方が若干深く、一部の層土は 92 住の残面下
に残る。F₁ は 91 住のカマド跡。

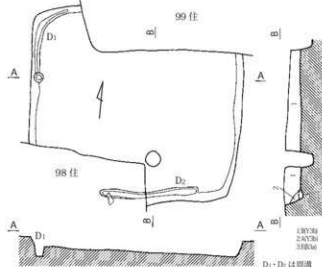


B 列の土層図は第 1～5 層が 95 住層土、第 6～9
層が 96 住層土で、95 住を 96 住が切ると、95 住の
方が若干深く、一部の層土は 96 住の残面下に残る。
F₁ は 94 住のカマド跡、F₂ は 96 住カマド跡。
D₁・D₂ は 94 住周溝、D₃ は 95 住周溝の一部、D₄ も
96 住の周溝。遺物所見では 96 住が 94 住より新
おそらく点線のようなのであろう。

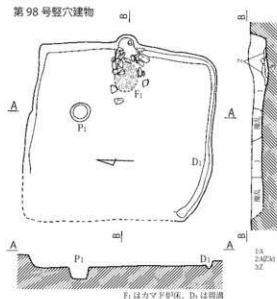
第 27 図 竪穴建物 18 (第 89～92・94～96 号)

0 S=1/80 2m

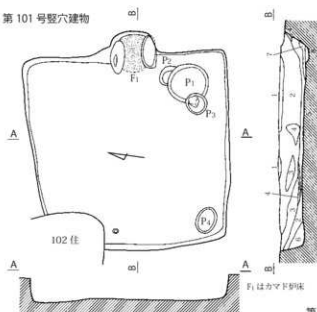
第97号竪穴建物



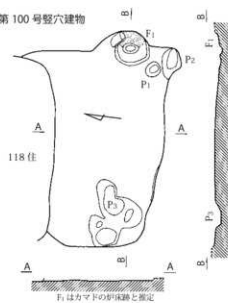
第98号竪穴建物



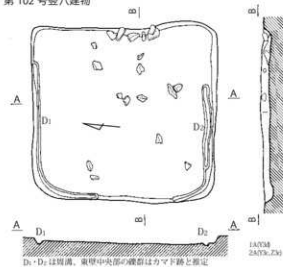
第101号竪穴建物



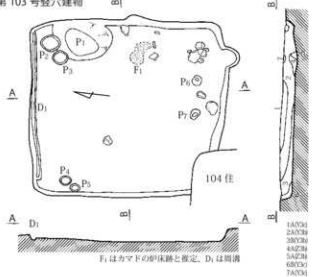
第100号竪穴建物



第102号竪穴建物



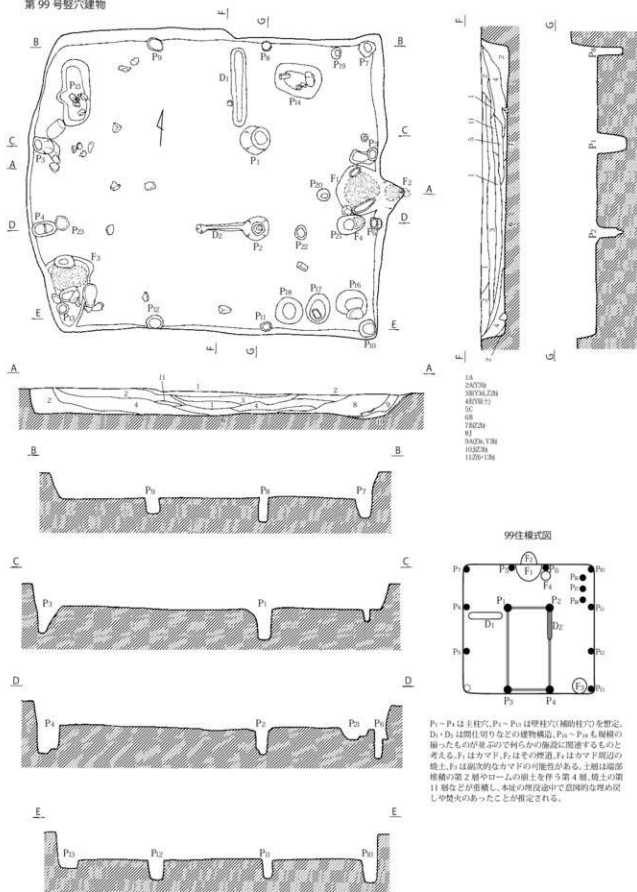
第103号竪穴建物



第28図 竪穴建物19(第97・98・100～103号)

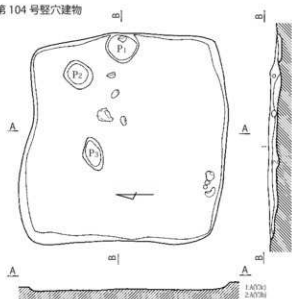
0 5=1/80 2m

第 99 号竪穴建物

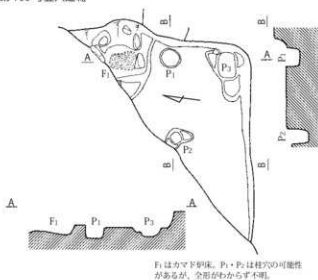


第 29 図 竪穴建物 20 (第 99 号)

第104号竪穴建物

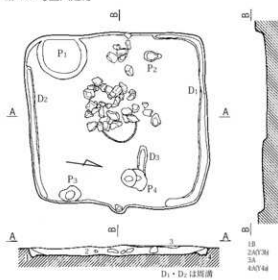


第106号竪穴建物



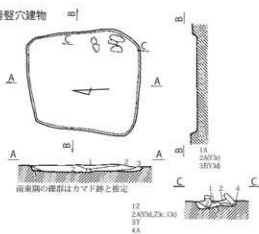
F1はカマド跡、P1・P2は柱穴の可能性
があるが、全形がわからず不明。

第107号竪穴建物



D1・D2は掘溝

第105号竪穴建物



南東隅の遺物はカマド跡と推定

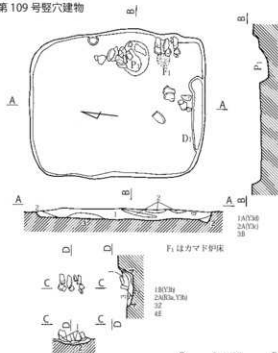
17

2A04ZL-130

37

4A

第109号竪穴建物



F1はカマド跡

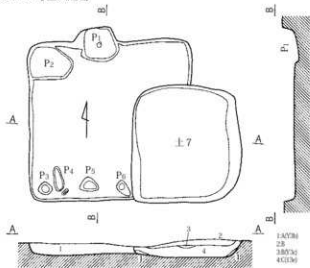
1B0736

2A0736 3B

37

4E

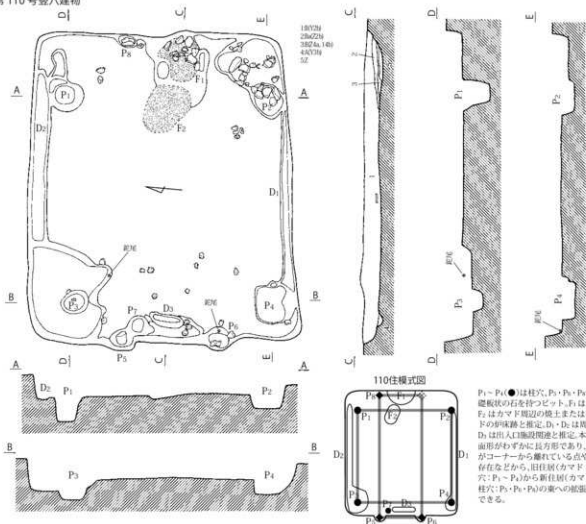
第108号竪穴建物



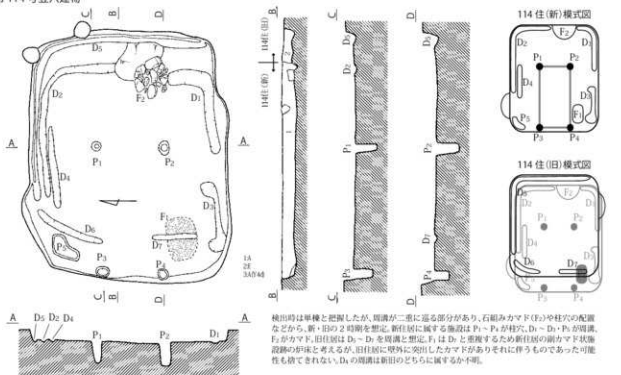
第30図 竪穴建物 21 (第104～109号)

0 5=1/80 2m

第 110 号竪穴建物

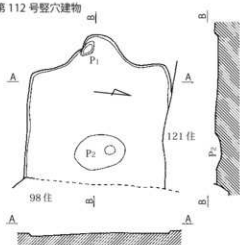


第 114 号竪穴建物

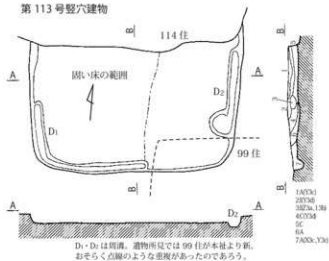


第 31 図 竪穴建物 22 (第 110・114 号)

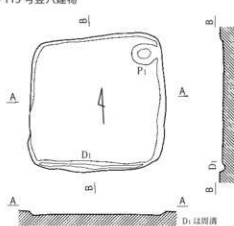
第112号竪穴建物



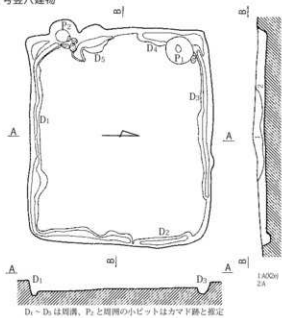
第113号竪穴建物



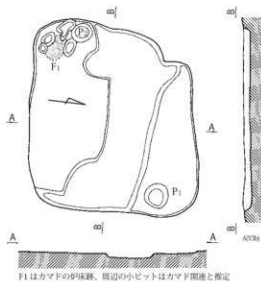
第115号竪穴建物



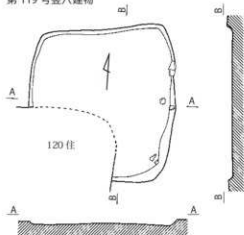
第117号竪穴建物



第118号竪穴建物



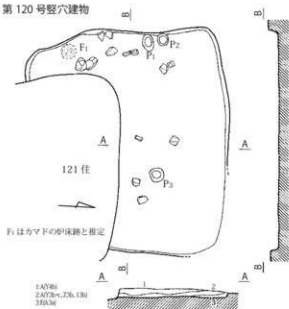
第119号竪穴建物



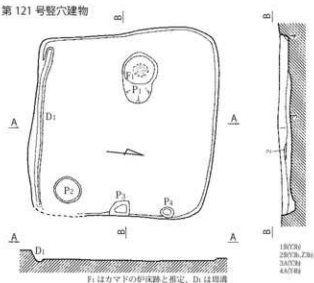
第32図 竪穴建物 23 (第112・113・115・117～119号)

0 S=1/80 2m

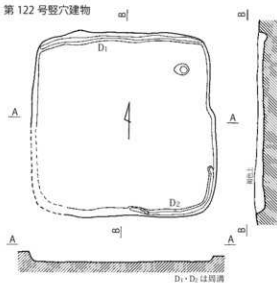
第120号竪穴建物



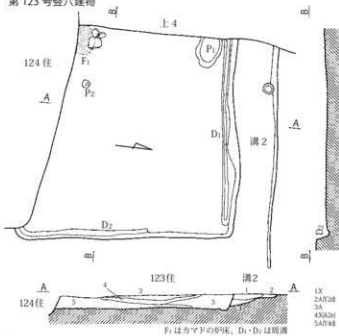
第121号竪穴建物



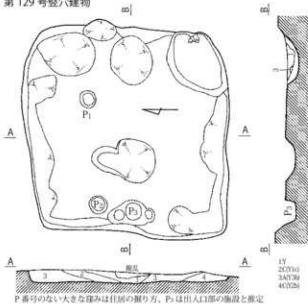
第122号竪穴建物



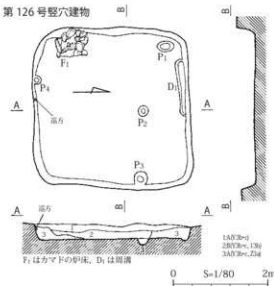
第123号竪穴建物



第129号竪穴建物



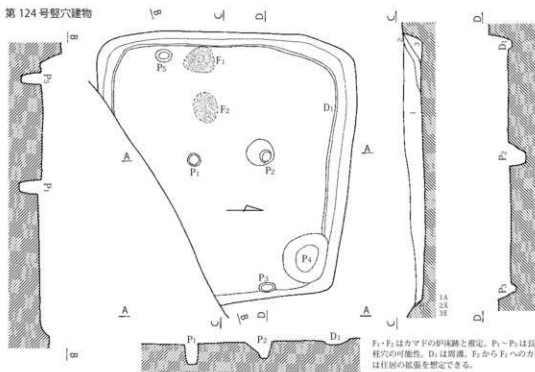
第126号竪穴建物



第33図 竪穴建物24(第120～123・126・129号)

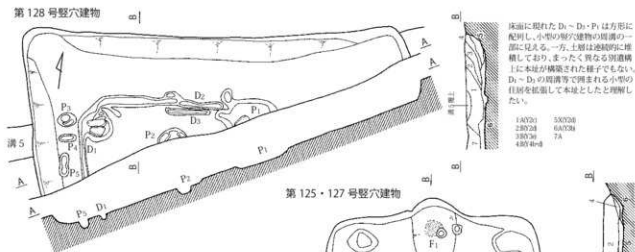
0 S-1/80 2m

第124号竪穴建物



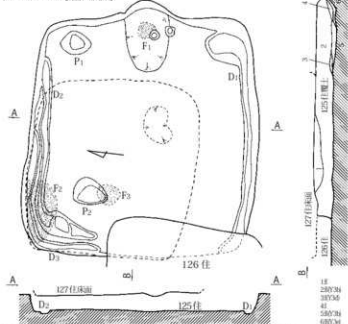
F₁・F₂はカマドの炉床跡と推定。P₁～P₄は長方形配列の柱穴の可能性。D₁は周溝。F₂からF₁へのカマドの移動は住居の拡張を想定できる。

第128号竪穴建物



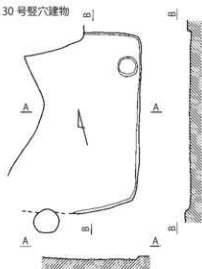
床面に現れたD₁～D₄は方形に配列し、小型の竪穴建物の周溝の一部に見える。一方、土層は連続的に堆積しており、まったく異なる別遺構上に本趾が構築された様子でもない。D₁～D₄の貫通等で判られる小型の住居を拡張して本趾としたと理解したい。

第125・127号竪穴建物



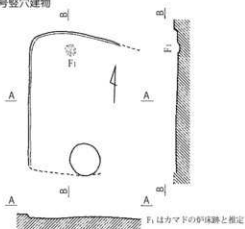
127住は125住履土上層で床面と焼土(P₁・P₂)を確認。床面範囲を点線で示す。P₃はカマドの炉床跡と推定。125住に属する施設はF₁(カマド炉床)、D₁～D₂(周溝)、P₁・P₂(用途不明)。

第130号竪穴建物



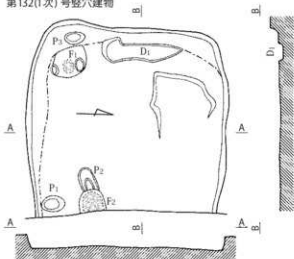
第34図 竪穴建物 25 (第124・125・127・128・130号)

第131号竪穴建物



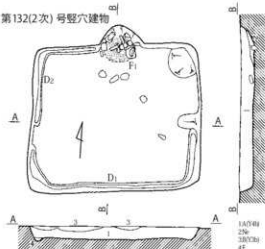
F₁はカマドの炉床跡と推定

第132(1次)号竪穴建物



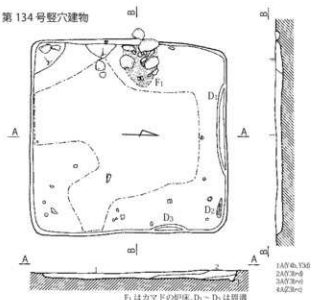
F₁・F₂はカマドの炉床跡と推定、F₁が竈、F₂が薪か?

第132(2次)号竪穴建物



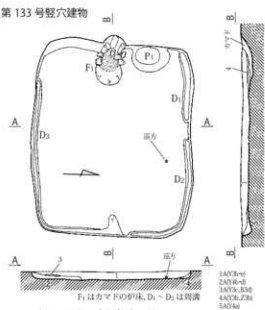
F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は明溝

第134号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は明溝

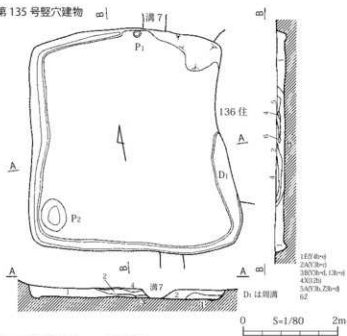
第133号竪穴建物



F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は明溝



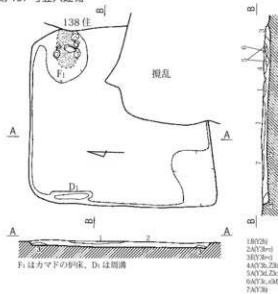
第135号竪穴建物



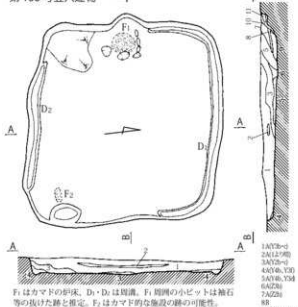
D₁は明溝

第35図 竪穴建物26(第131～135号)

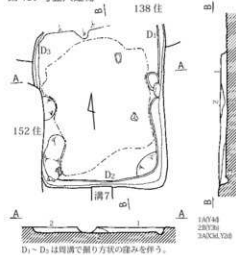
第 137 号竪穴建物



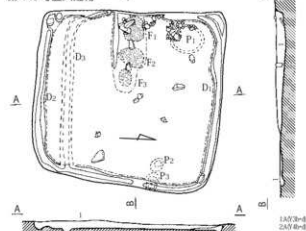
第 136 号竪穴建物



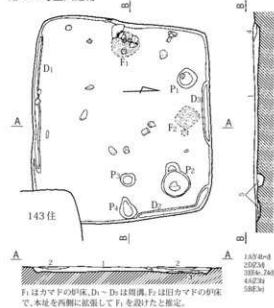
第 139 号竪穴建物



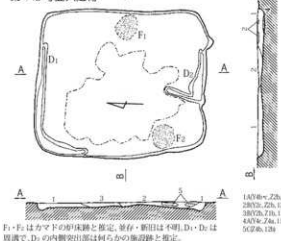
第 140 号竪穴建物



第 141 号竪穴建物



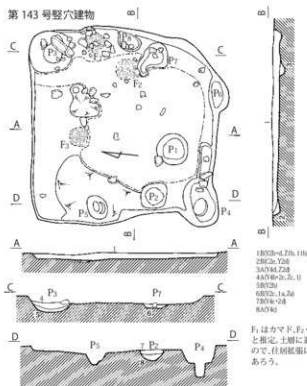
第 142 号竪穴建物



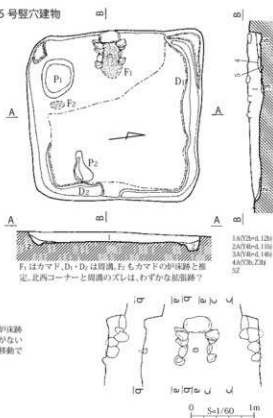
第 36 図 竪穴建物 27 (第 136・137・139～142 号)

0 S=1/80 2m

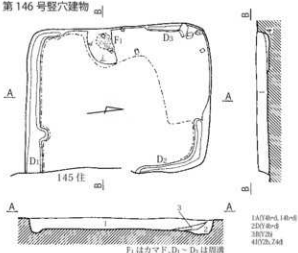
第 143 号竪穴建物



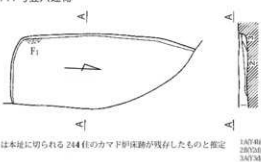
第 145 号竪穴建物



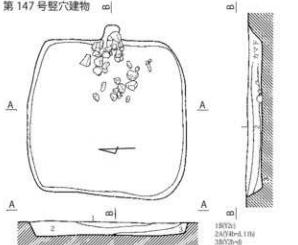
第 146 号竪穴建物



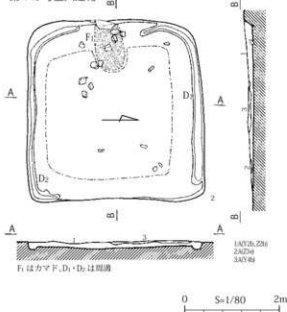
第 144 号竪穴建物



第 147 号竪穴建物

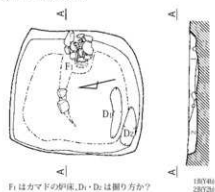


第 148 号竪穴建物



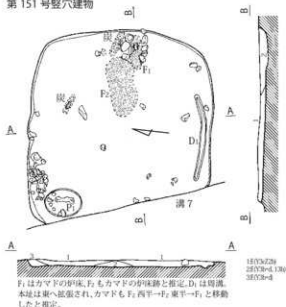
第 38 図 竪穴建物 29 (第 143 ~ 148 号)

第 149 号竪穴建物



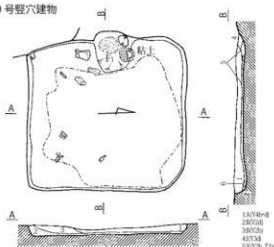
F₁ はカマドの炉床, D₁・D₂ は側り方か?

第 151 号竪穴建物



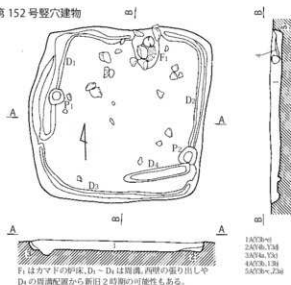
F₁ はカマドの炉床, F₂ もカマドの炉床跡と推定, D₁ は溝溝。
本址は東へ拡張され, カマドも F₂ 西平→F₂ 東平→と移動したと推定。

第 150 号竪穴建物



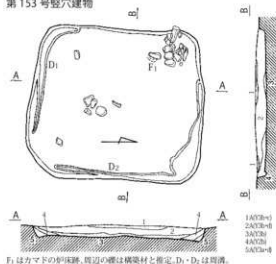
F₁ はカマドの炉床, 粘土は他の構築材と推定

第 152 号竪穴建物



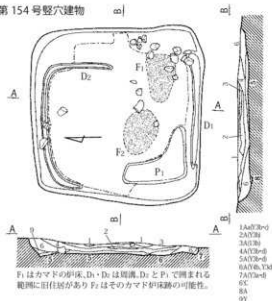
F₁ はカマドの炉床, D₁～D₂ は溝溝, 内野の張り出しや D₂ の両溝配置から新旧 2 時期の可能性もある。

第 153 号竪穴建物



F₁ はカマドの炉床跡, 周辺の壁は構築材と推定, D₁・D₂ は溝溝。

第 154 号竪穴建物

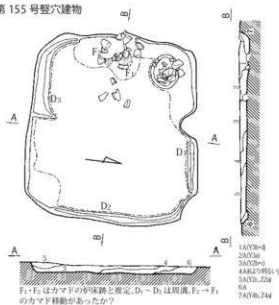


F₁ はカマドの炉床, D₁・D₂ は溝溝, D₂ と P₁ で囲まれる範囲に居住跡があり F₂ はそのカマド炉床跡の可能性。

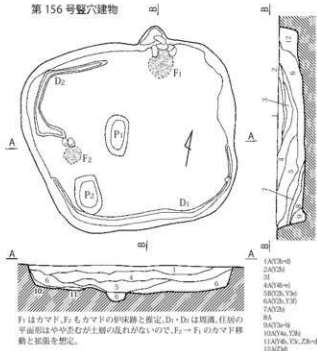
0 5=1/80 2m

第 39 図 竪穴建物 30 (第 149～154 号)

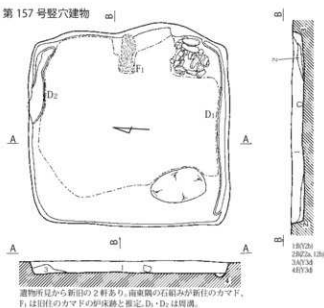
第155号竪穴建物



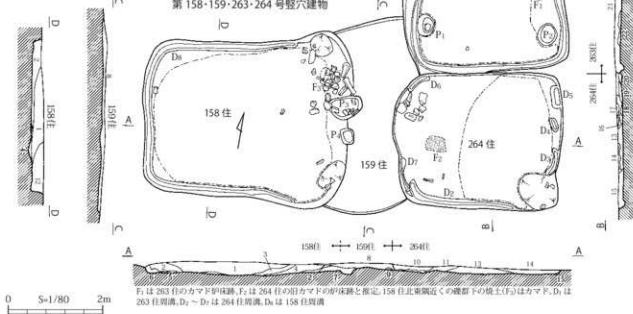
第156号竪穴建物



第157号竪穴建物

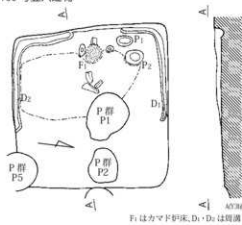


第158・159・263・264号竪穴建物



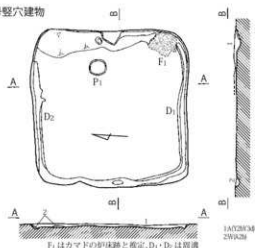
第40図 竪穴建物31(第155～159・263・264号)

第 160 号竪穴建物



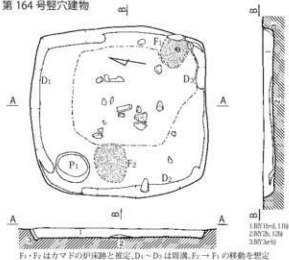
F₁ はカマドの炉床、D₁・D₂ は周溝

第 162 号竪穴建物



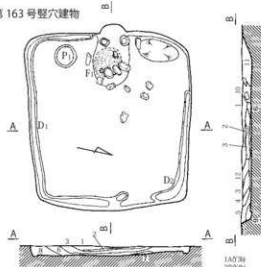
F₁ はカマドの炉床跡と推定、D₁・D₂ は周溝

第 164 号竪穴建物



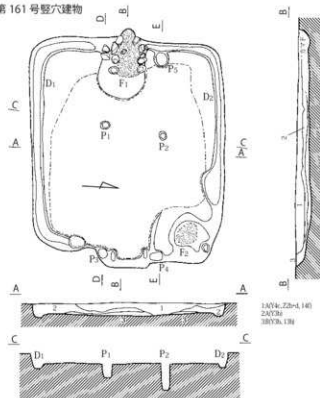
F₁・F₂ はカマドの炉床跡と推定、D₁・D₂ は周溝、矢→F₁ の移動を想定

第 163 号竪穴建物



F₁ はカマドの炉床、D₁・D₂ は周溝

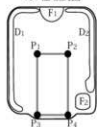
第 161 号竪穴建物



1A04k_22b-1, 140
2A073b
3B073b, 130

F₁ はカマドの炉床、F₂ も副炉的なカマド跡と推定、両者は同時存在した可能性を考えたい。P₁～P₄ は柱穴で長方形配列、P₃・P₄ は東壁の張り出し部にかかる。D₁・D₂ は周溝。

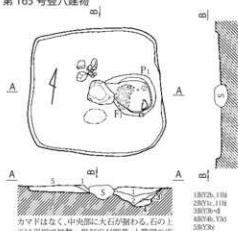
161 住棟式図



0 S=1/80 2m

第 41 図 竪穴建物 32 (第 160～164 号)

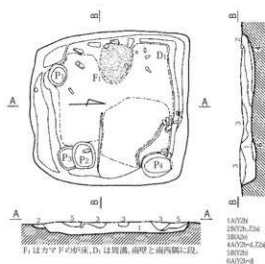
第 165 号竪穴建物



カマドはなく、中央部に大石が据わる。石の上
面は平坦で焼熱・敲打音が顯著。小龍洞の床
が硬いのみ、P₁ 側部に焼土(F₁)、内部から鉄
滓出土。最近遺構か。

18Y2b, 178
28Y2b, 1118
38Y2b-8
48Y2b, 103
58Y2b

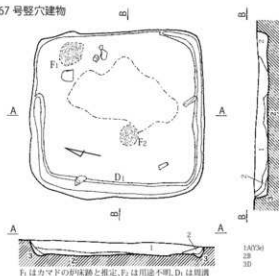
第 166 号竪穴建物



F₁ はカマドの跡、D₁ は炭溝、南壁と南西隅に設。

1A0Y2b
28Y2b, 224
38A2b
44Y2b-6, 224
58Y2b
64Y2b-8

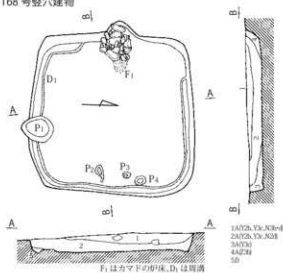
第 167 号竪穴建物



F₁ はカマドの跡と推定、F₂ は用途不明、D₁ は炭溝

1A0Y2b
28
3D

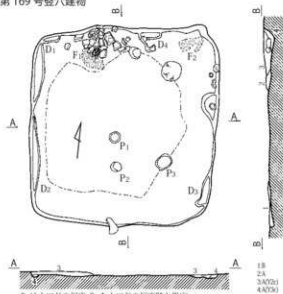
第 168 号竪穴建物



F₁ はカマドの跡、D₁ は炭溝

1A0Y2b, Y2, K3-8
2A0Y2b, Y2, N24
3A0Y2b
4A2Y2b
5D

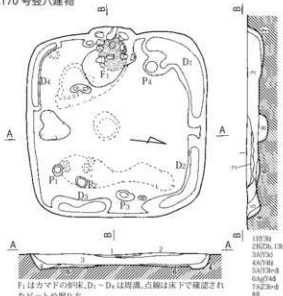
第 169 号竪穴建物



F₁ はカマドの跡、F₂ もカマドの跡と推定。
D₁ - D₃ は炭溝。

18
2A
3A0Y2b
4A0Y2b

第 170 号竪穴建物

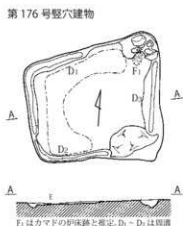
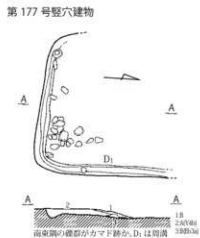
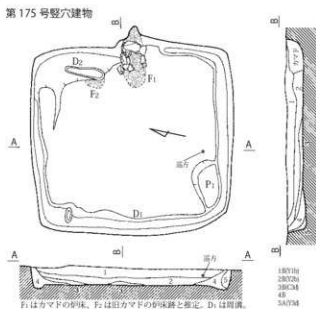
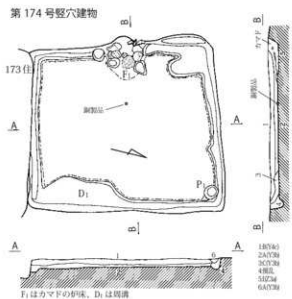
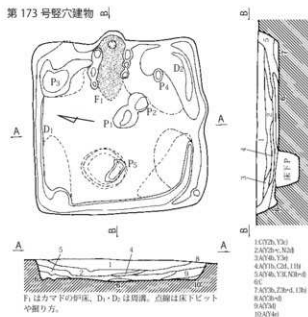
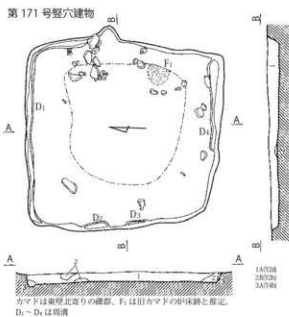


F₁ はカマドの跡、D₁ - D₃ は炭溝、点線は床下で確認され
たビットや銅り方。

115Y2b
28Y2b, 136
3A0Y2b
4A0Y2b
5A0Y2b-8
6A0Y2b-4
7A2Y2b-8
8D

0 S=1/80 2m

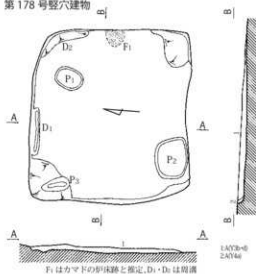
第 42 図 竪穴建物 33 (第 165 ~ 170 号)



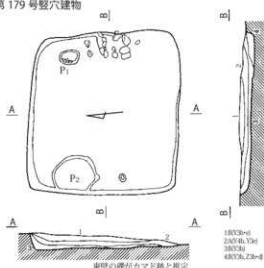
第 43 図 竪穴建物 34 (第 171 ~ 177 号)

0 S=1/80 2m

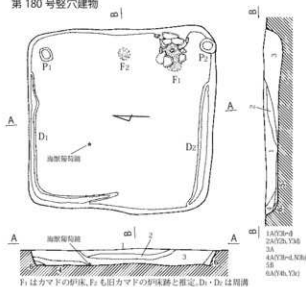
第178号竪穴建物



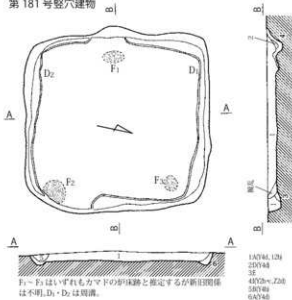
第179号竪穴建物



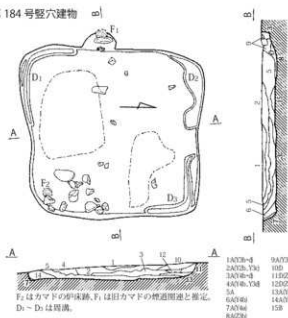
第180号竪穴建物



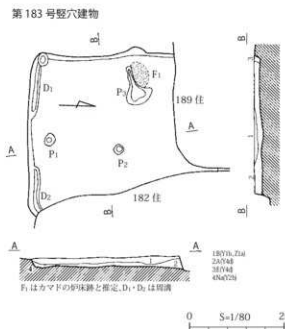
第181号竪穴建物



第184号竪穴建物



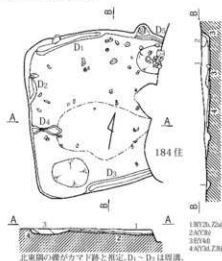
第183号竪穴建物



第44図 竪穴建物 35 (第178~181・183・184号)

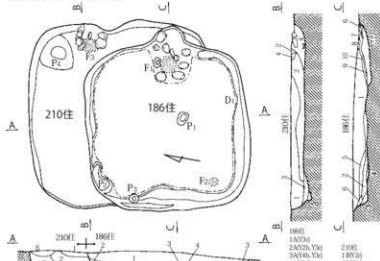
0 S=1/80 2m

第 185 号竪穴建物



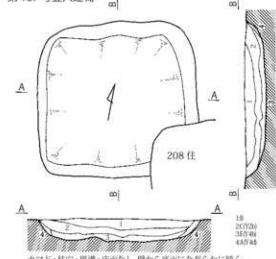
1873b, Z20
2A73b, Y30
3A73b, Y30
4A73b, Y30
北東隅の礎がカマド跡と推定。D₁ ~ D₃ は周溝。

第 186・210 号竪穴建物



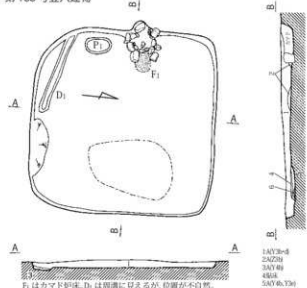
186E
1A73b
2A73b, Y30
3A73b, Y30
4A73b
5A73b
6A73b
7E
8A73b, Y30
9A73b, Y30
10A73b
210E
186E
186住は F₁ がカマド, D₁ が周溝, F₂ は不明, 210住は F₁ がカマド。

第 187 号竪穴建物



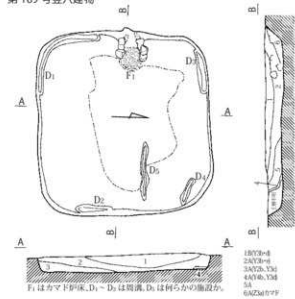
カマド・柱穴・周溝・床面なし。壁から底面になだらかに傾く。

第 188 号竪穴建物



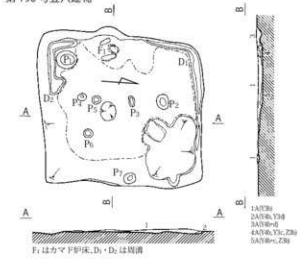
F₁ はカマド跡, D₁ は周溝に見えるが, 位置が不自然。

第 189 号竪穴建物



F₁ はカマド跡, D₁ ~ D₃ は周溝, D₄ は何らかの施設か。

第 190 号竪穴建物

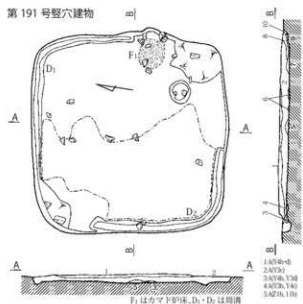


F₁ はカマド跡, D₁・D₂ は周溝

第 45 図 竪穴建物 36 (第 185 ~ 190・210 号)

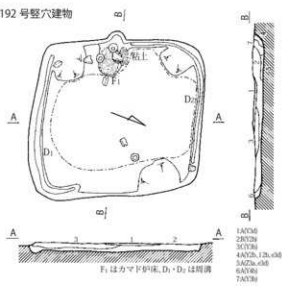
0 S=1/80 2m

第191号竪穴建物



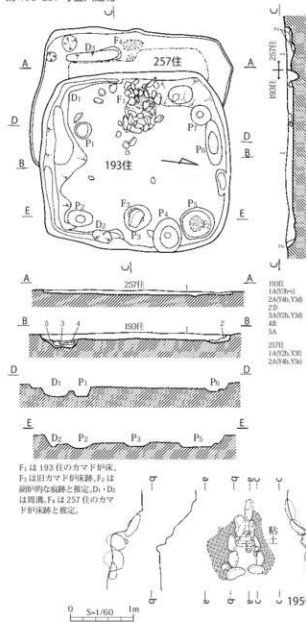
F: はかマド炉味, D₁・D₂ は周溝

第192号竪穴建物



F: はかマド炉味, D₁・D₂ は周溝

第193・257号竪穴建物

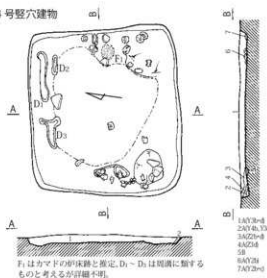


F₁ は193住のカマド炉味,
F₂ は旧カマド炉味, F₃ は
断片的な痕跡と推定, D₁・D₂
は周溝, F₄ は257住のカマ
ド炉味跡と推定。

195住カマド

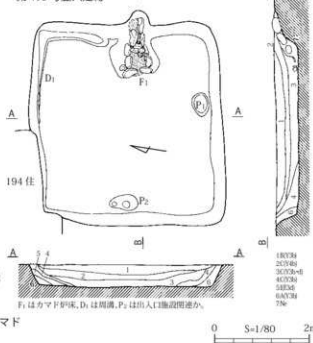
0 S=1/60 1m

第194号竪穴建物



F: はかマドの形跡跡と推定, D₁ - D₂ は周溝に類する
ものと考えられるが詳細不明。

第195号竪穴建物

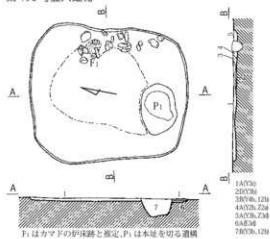


F: はかマド炉味, D₁ は周溝, F₂ は出入り口施設遺構か。

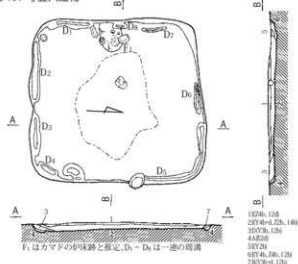
0 S=1/80 2m

第46図 竪穴建物37(第191～195・257号)

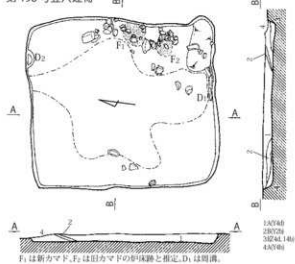
第 196 号竪穴建物



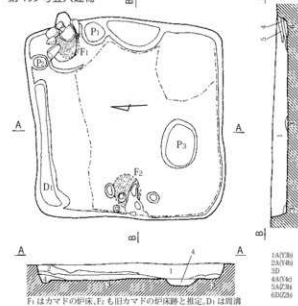
第 197 号竪穴建物



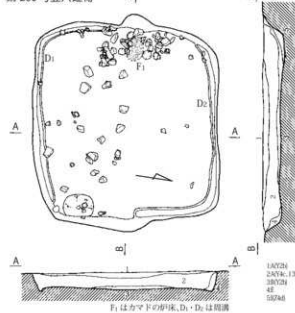
第 198 号竪穴建物



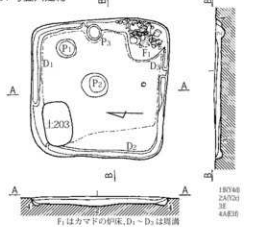
第 199 号竪穴建物



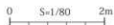
第 200 号竪穴建物



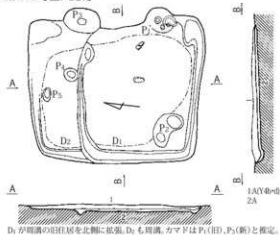
第 201 号竪穴建物



第 47 図 竪穴建物 38 (第 196 ~ 201 号)

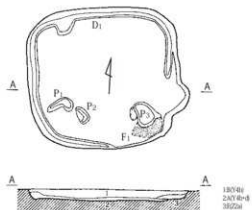


第 202 号竪穴建物



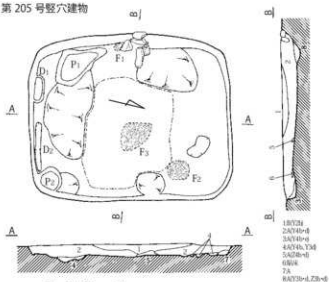
D₁が竪溝の旧土層を北側に拡張、D₂も同溝。カマドはP₁(旧)、P₂(新)と推定。

第 204 号竪穴建物

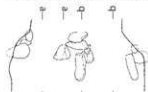


F₁はカマドの炉床跡と推定、D₁は竪溝

第 205 号竪穴建物

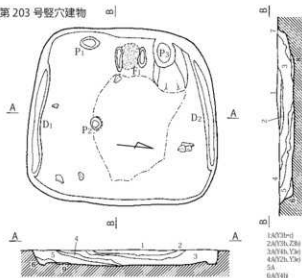


F₁はカマド、F₂は旧カマドの炉床跡で北東方向に拡張があったと推定、F₃は床中央部の突大跡、D₁・D₂は竪溝。大きな浅い窪みは床下の掘り方。



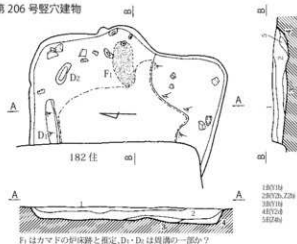
0 5=1/100 1m

第 203 号竪穴建物



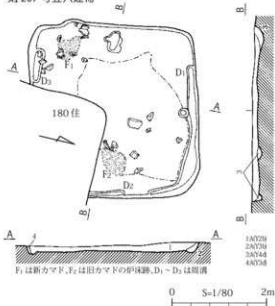
F₁はカマドの炉床、D₁・D₂は竪溝

第 206 号竪穴建物



F₁はカマドの炉床跡と推定、D₁・D₂は竪溝の一部か？

第 207 号竪穴建物

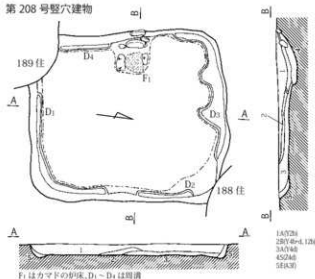


F₁は新カマド、F₂は旧カマドの炉床跡、D₁・D₂は竪溝

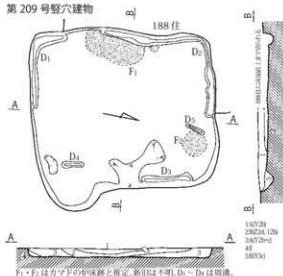
0 5=1/80 2m

第 48 図 竪穴建物 39 (第 202 ~ 207 号)

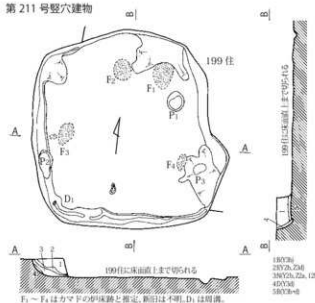
第208号竪穴建物



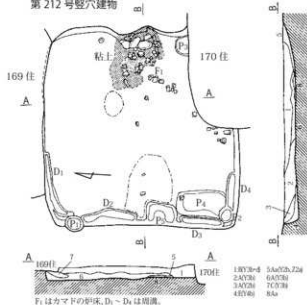
第209号竪穴建物



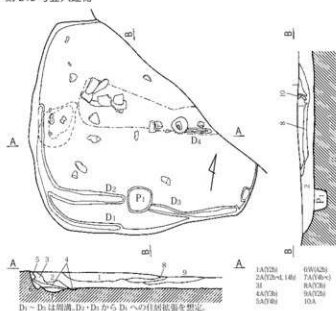
第211号竪穴建物



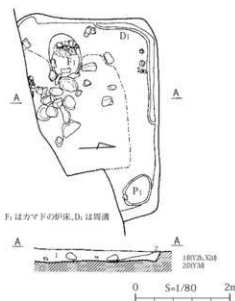
第212号竪穴建物



第213号竪穴建物

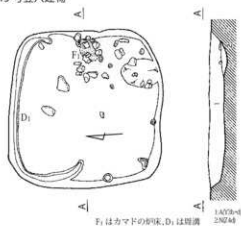


第214号竪穴建物



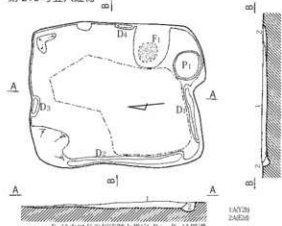
第49図 竪穴建物40(第208・209・211～214号)

第 215 号竪穴建物



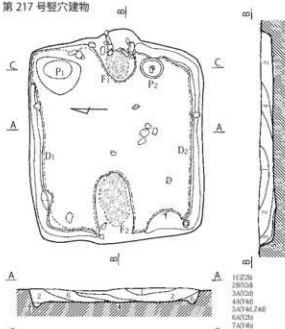
F₁ はカマドの跡、D₁ は間溝

第 216 号竪穴建物

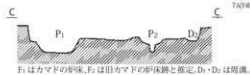


F₁ はカマドの跡跡と推定、D₁ ~ D₃ は間溝

第 217 号竪穴建物

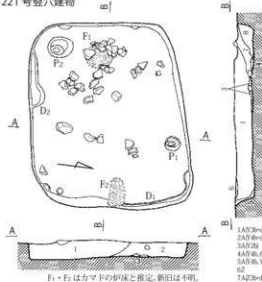


1A729-6
2B728
3A728
4A745
5A748, 748
6A729
7A749



F₁ はカマドの跡、F₂ は旧カマドの跡跡と推定、D₁ ~ D₂ は間溝

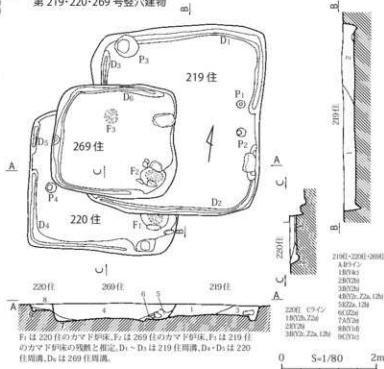
第 221 号竪穴建物



F₁、F₂ はカマドの跡跡と推定、新旧は不明

1A730-6
2A740-8
3A729
4A740-6, 649
5A740, 738
6
7A730-8
8A740-8

第 219~220~269 号竪穴建物

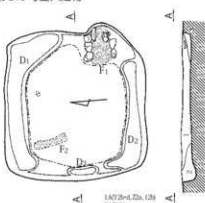


F₁ は 220 住のカマド跡、F₂ は 269 住のカマド跡、F₃ は 219 住のカマド跡の残骸と推定、D₁ ~ D₃ は 219 住の間溝、D₄ ~ D₅ は 220 住の間溝、D₆ は 269 住の間溝

21901-22041-0800
A B C
1B742
2B728
3B728
4B728, 22a, 12b
5B728, 12b
6C728
7A728
8B742
9C742

0 S=1/80 2m

第 218 号竪穴建物

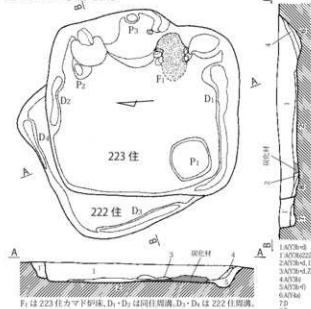


1A729-4, 2a, 12b
2A741
3B748

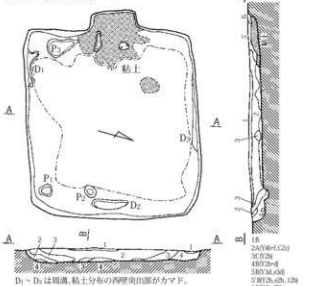
F₁ はカマドの跡、F₂ は旧カマドの跡跡と推定、D₁ ~ D₃ は間溝

第 50 図 竪穴建物 41 (第 215 ~ 221・269 号)

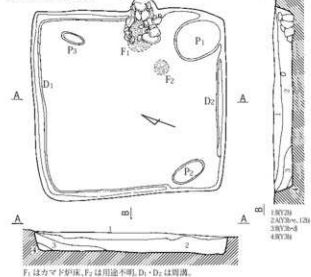
第 222・223 号竪穴建物



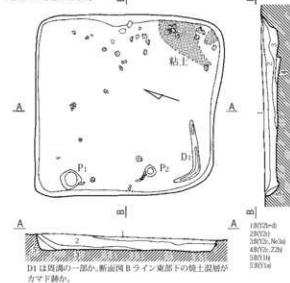
第 228 号竪穴建物



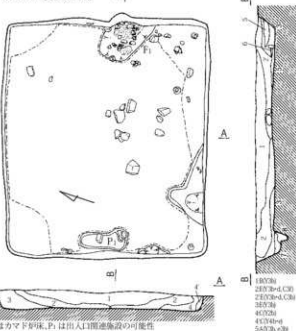
第 225 号竪穴建物



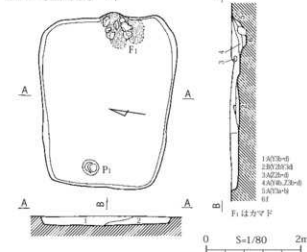
第 224 号竪穴建物



第 226 号竪穴建物

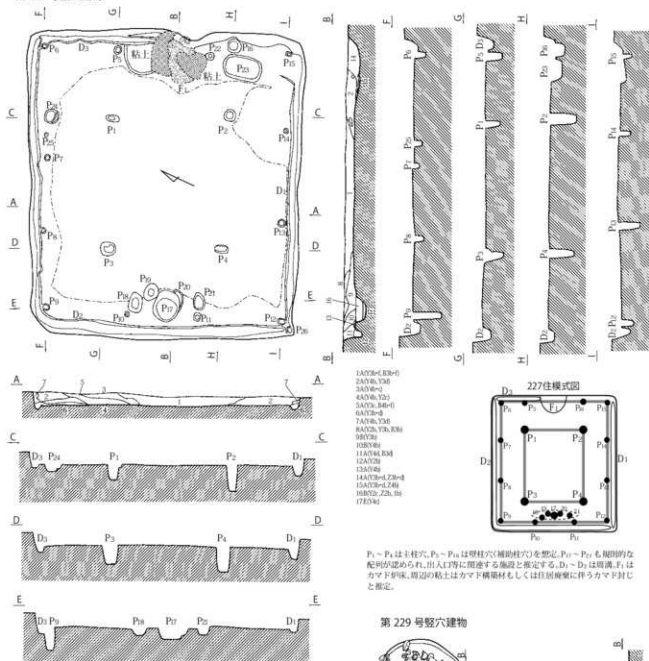


第 231 号竪穴建物



第 51 図 竪穴建物 42 (第 222 ~ 226 · 228 · 231 号)

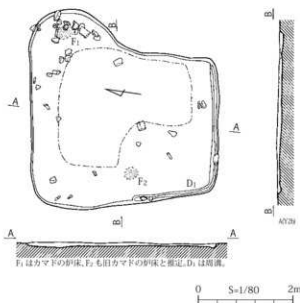
第 227 号竪穴建物



第 230 号竪穴建物

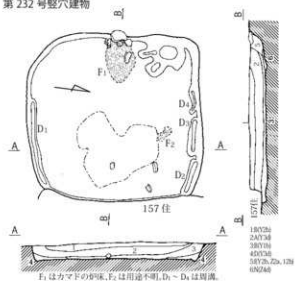


第 229 号竪穴建物

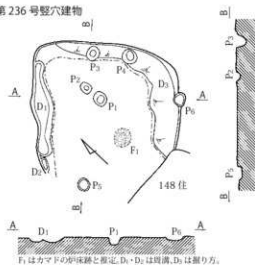


第 52 図 竪穴建物 43 (第 227・229・230 号)

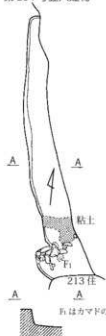
第 232 号竪穴建物



第 236 号竪穴建物



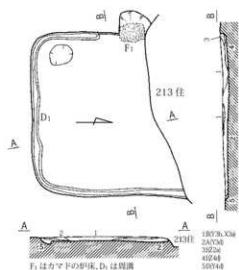
第 234 号竪穴建物



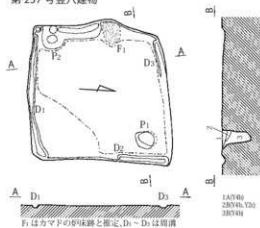
第 235 号竪穴建物



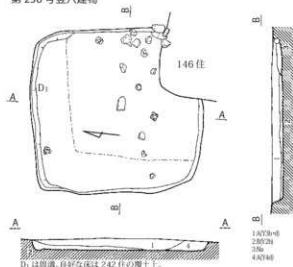
第 233 号竪穴建物



第 237 号竪穴建物

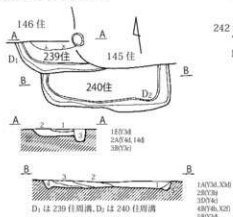


第 238 号竪穴建物

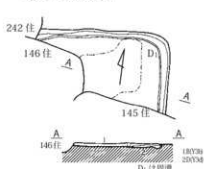


第 53 図 竪穴建物 44 (第 232 ~ 238 号)

第 239-240 号竪穴建物



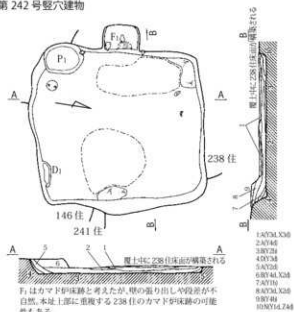
第 241 号竪穴建物



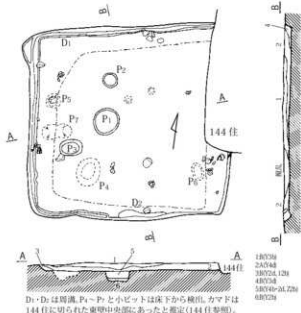
第 243 号竪穴建物



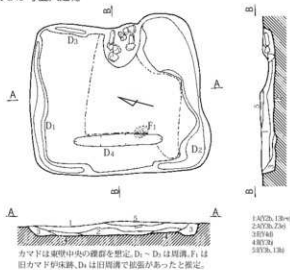
第 242 号竪穴建物



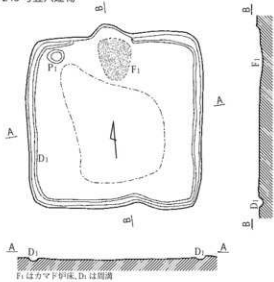
第 244 号竪穴建物



第 245 号竪穴建物



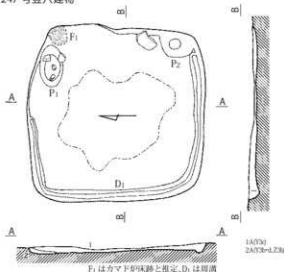
第 246 号竪穴建物



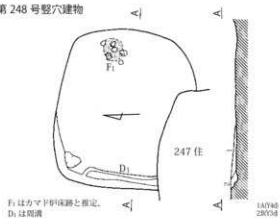
第 54 図 竪穴建物 45 (第 239 ~ 246 号)

0 S=1/80 2m

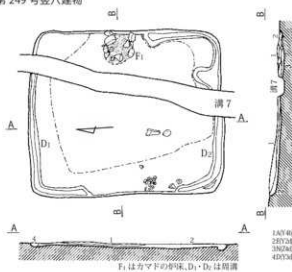
第 247 号竪穴建物



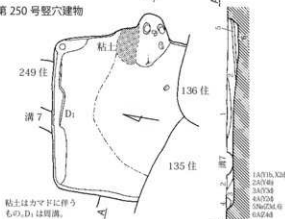
第 248 号竪穴建物



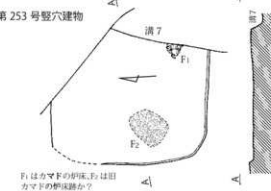
第 249 号竪穴建物



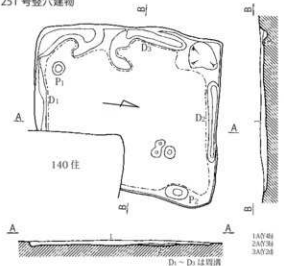
第 250 号竪穴建物



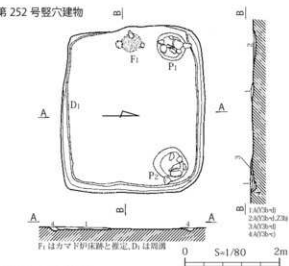
第 253 号竪穴建物



第 251 号竪穴建物

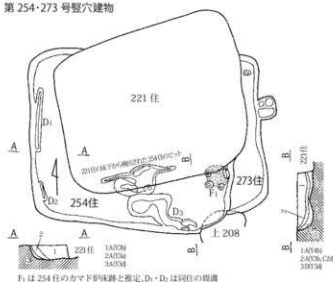


第 252 号竪穴建物

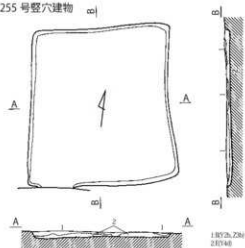


第 55 図 竪穴建物 46 (第 247 ~ 253 号)

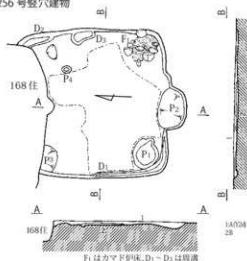
第 254・273 号竪穴建物



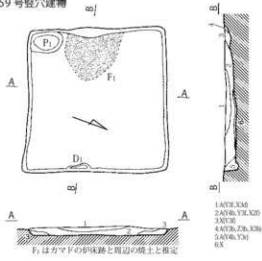
第 255 号竪穴建物



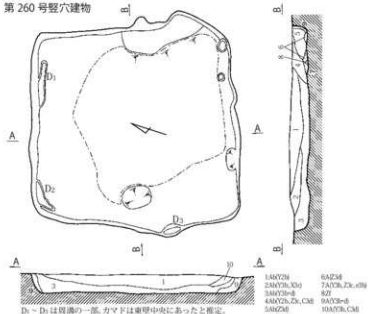
第 256 号竪穴建物



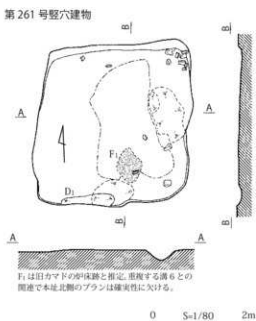
第 259 号竪穴建物



第 260 号竪穴建物

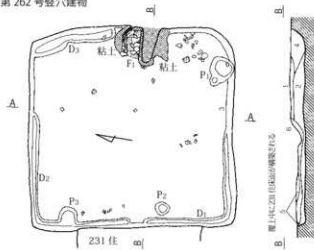


第 261 号竪穴建物



第 56 図 竪穴建物 47 (第 254 ~ 256・259 ~ 261・273 号)

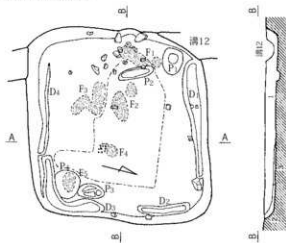
第262号竪穴建物



1C72b
2B1Vb, C4f
3F14b
4b
5W4C21Df
6B7b, 2a

F₁ はカマド跡、周辺の粘土はカマド構築材もしくは住居敷板に伴うカマド跡と推定、D₁ ~ D₃ は間溝。

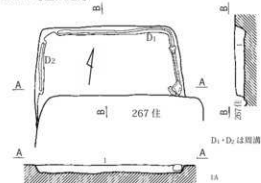
第265号竪穴建物



1A72b, 2a, 12b
2A70a
3B72b

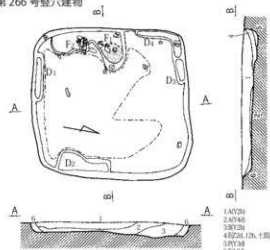
F₁ はカマド跡、F₂ も副射的なものと推定、F₃ ~ F₄ は床直の焚火跡、F₅ は南側に炭化物を伴う、D₁ ~ D₄ は間溝。

第268号竪穴建物



D₁・D₂ は間溝

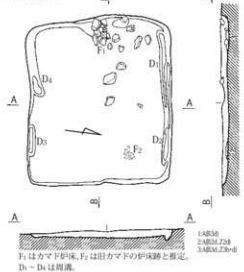
第266号竪穴建物



1A72b
2A74b
3B72b
4F2a, 12b, 12c
5F13a
6A33

F₁ はカマド跡、D₁ ~ D₂ は間溝

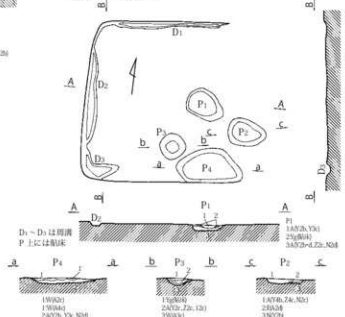
第267号竪穴建物



1A25b
2A32, 22a
3A33, 23a-b

F₁ はカマド跡、F₂ は目カマドの跡跡と推定、D₁ ~ D₂ は間溝。

第271号竪穴建物



D₁ ~ D₂ は間溝

P 上には船状

F₁
1A72b, 2a, 2b
27b, 64f
3A52a-d, 22a, 20a

a-a
P₄
1W92d
1700a
2A72b, 2a, 20d

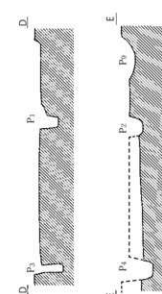
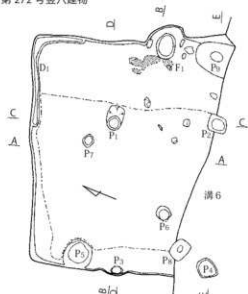
b-b
P₃
1700a
2A72b, 2a, 12b
3W93a

c-c
P₂
1A74b, 2a, 2b
2103a
3W93a

0 S=1/80 2m

第57図 竪穴建物48(第262・265~268・271号)

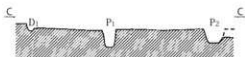
第 272 号竪穴建物



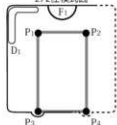
P₁は溝6の底面から掘り、点線は溝の位置に想定された部分の272住の範囲にP₁の想定位置。



180x48
2x0.25
3x0.25
4x0.45
5.5x0.38
6.5
7C

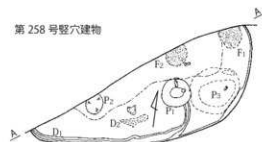


272住模式図



F₁はカマド伊床、P₁～P₄は柱穴、D₁は厨溝。柱穴は4本長方形配列。断面図と模式図は溝6に切られた部分を点線で想定復元。P₂・P₃は溝6の範囲内から検出。

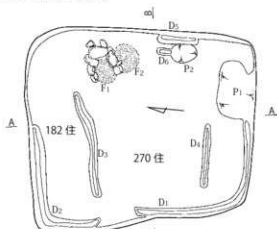
第 258 号竪穴建物



1x0.19
2.0x0.24

F₁はカマド伊床跡、F₂は耳カマド伊床跡で、東方向に住居の風通があったと想定。D₁は柱梁前の厨溝。

第 182・270 号竪穴建物



1.8x20
2x0.34

270住想定模式図



F₁: カマド伊床
D₃・D₄・D₅: 厨溝

182住想定模式図



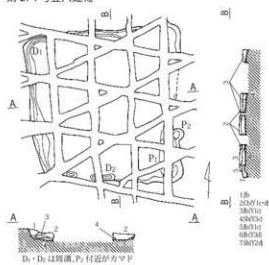
F₂: カマド伊床跡
D₁・D₂・D₃: 厨溝

石版(カマド(F₁))は182住に作るには位置や向きが不自然。D₁・D₂・D₃と共に182住内にすっぽり収まる270住の存在を想定した。出土遺物も2時期ありこれを支持する。しかし土層に270住の痕跡は見出せない。土層同時成時に270住の存在を全く考慮しておらず、微細な差異を見落としたのであろう。

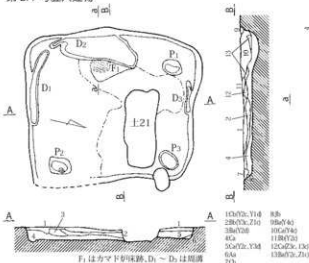
0 S=1/80 2m

第 58 図 竪穴建物 49 (第 182・258・270・272 号)

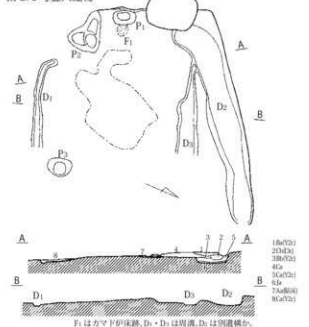
第 274 号竪穴建物



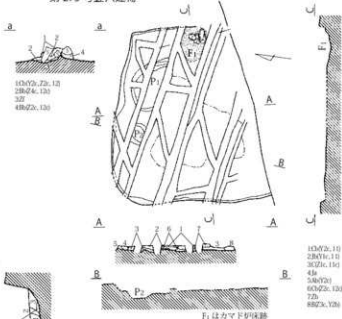
第 277 号竪穴建物



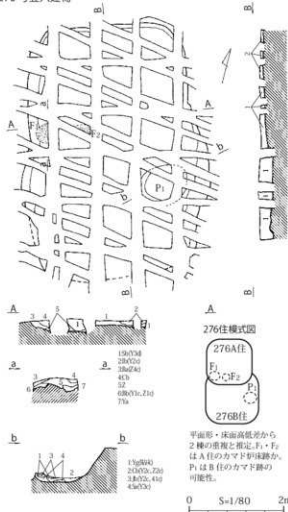
第 278 号竪穴建物



第 275 号竪穴建物

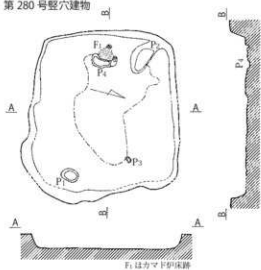


第 276 号竪穴建物



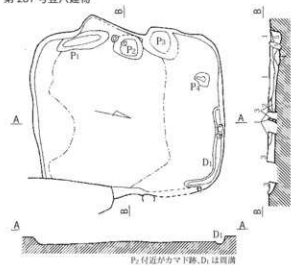
第 59 図 竪穴建物 50 (第 274 ~ 278 号)

第 280 号竪穴建物



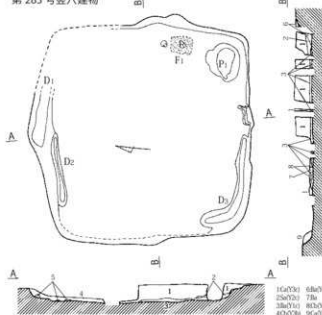
F₁ はカマド跡

第 281 号竪穴建物



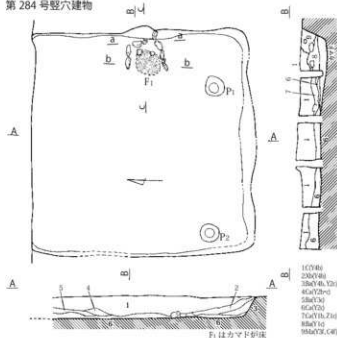
F₂ はカマド跡、D₁ は厨溝

第 283 号竪穴建物



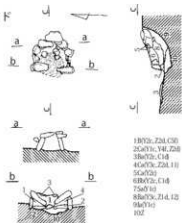
F₁ はカマド跡、D₁ - D₂ は厨溝

第 284 号竪穴建物



F₁ はカマド跡

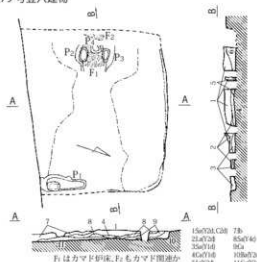
284 住カマド



1C704
230V48
33aV4b, 12j
4C6V2a
53aV3
6C6V20
7C6V10, 13d
8aV7 to
9a6V3, CW

1B703, 231, C28
2C6V1c, 14L, 208
3B6V2c, C14
4C6V2c, 231, 11
5C6V2
6B6V2c, C14
75dV14
8B6V2c, 214, 14, 12
9aV7c
612

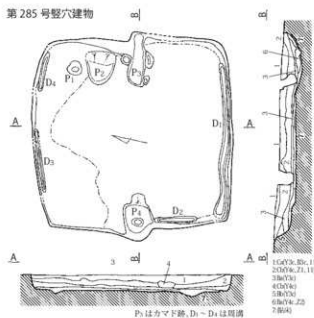
第 279 号竪穴建物



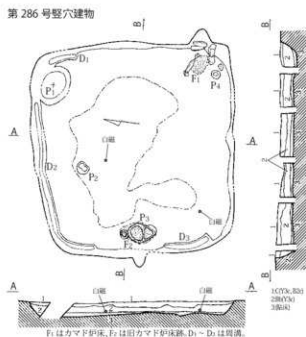
F₁ はカマド跡、F₂ もカマド関連か

第 60 図 竪穴建物 51 (第 279 ~ 281 · 283 · 284 号)

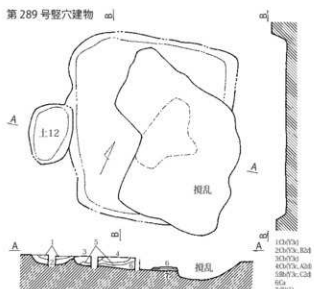
第 285 号竪穴建物



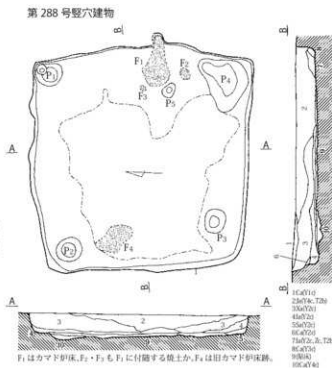
第 286 号竪穴建物



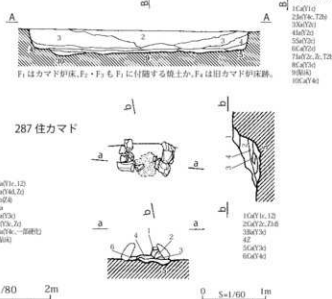
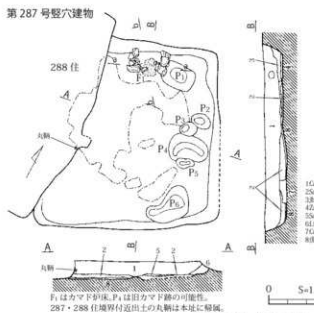
第 289 号竪穴建物



第 288 号竪穴建物

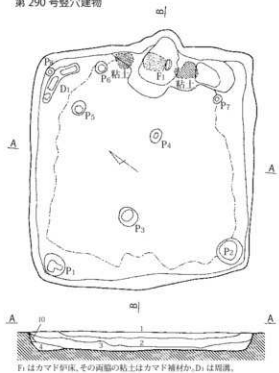


第 287 号竪穴建物

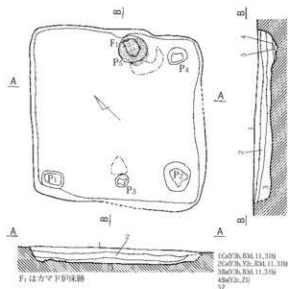


第 61 図 竪穴建物 52 (第 285 ~ 289 号)

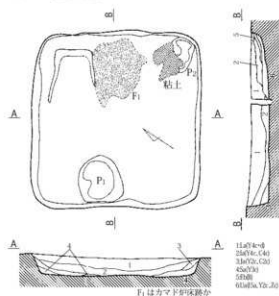
第 290 号竪穴建物



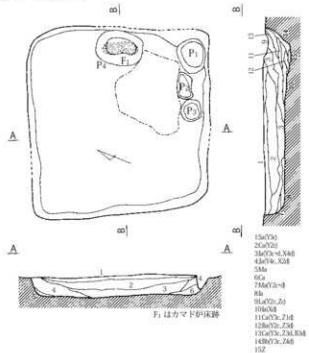
第 293 号竪穴建物



第 292 号竪穴建物



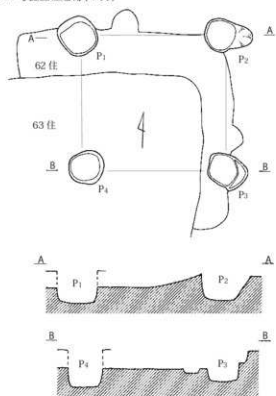
第 291 号竪穴建物



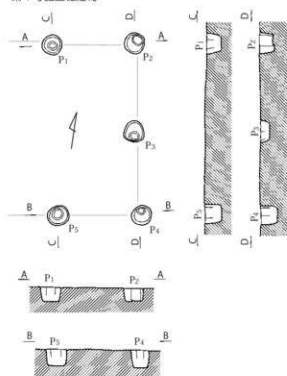
第 62 図 竪穴建物 53 (第 290 ~ 293 号)

0 S=1/80 2m

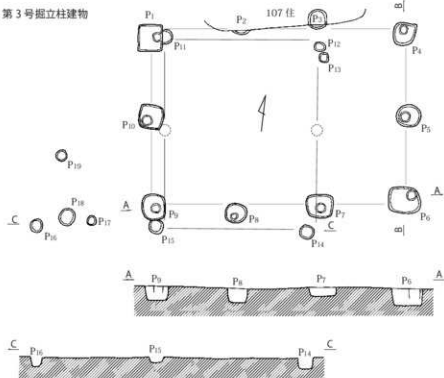
第11号掘立柱建物(1次)



第1号掘立柱建物



第3号掘立柱建物



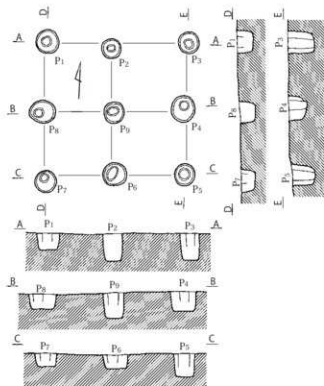
第2号掘立柱建物



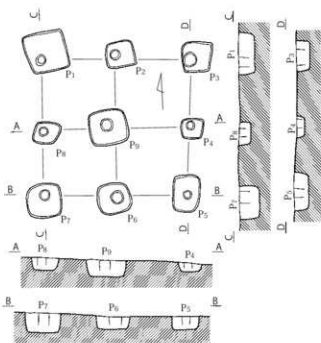
0 S=1/80 2m

第63図 掘立柱建物1(第1~3・11号)

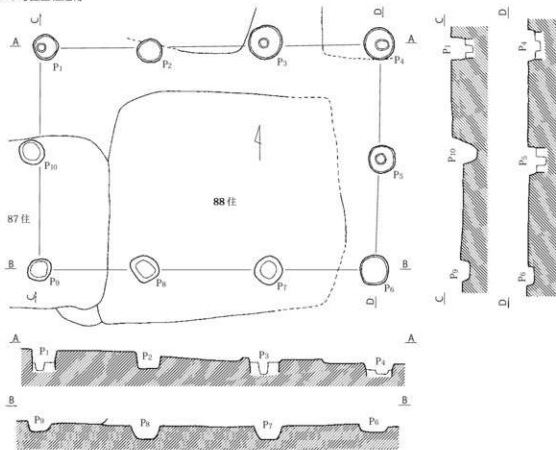
第5号掘立柱建物



第9号掘立柱建物



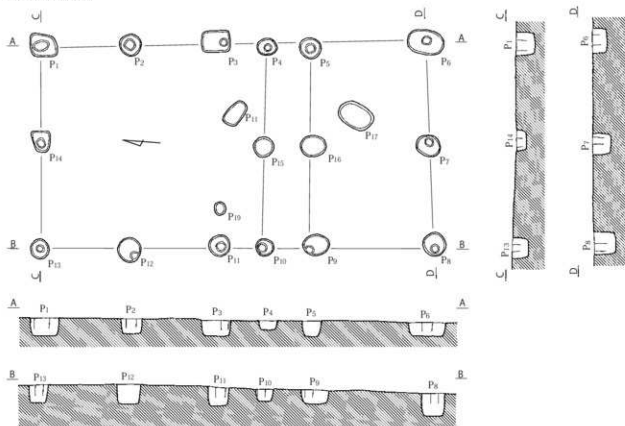
第10号掘立柱建物



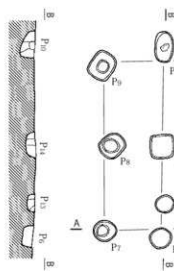
第64图 掘立柱建物2(第5・9・10号)

0 S=1/80 2m

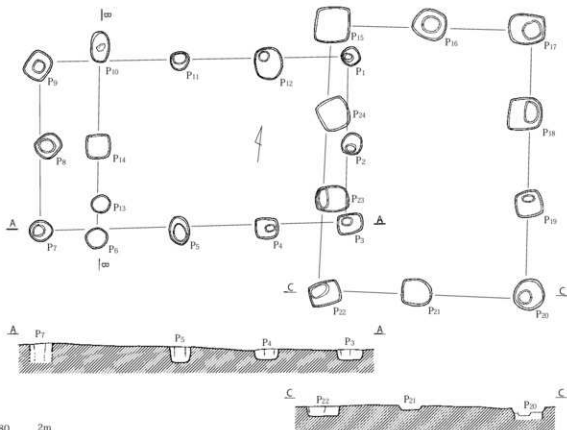
第6号掘立柱建物



第7号掘立柱建物



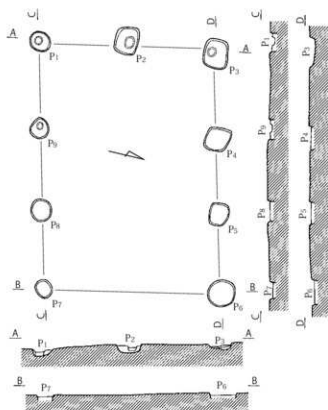
第8号掘立柱建物



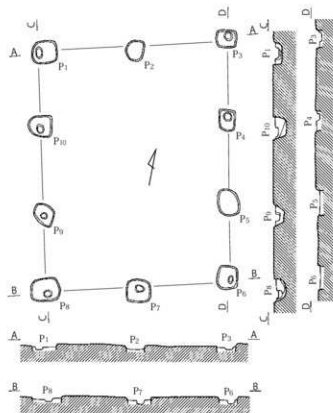
0 S=1/80 2m

第65图 掘立柱建物3(第6~8号)

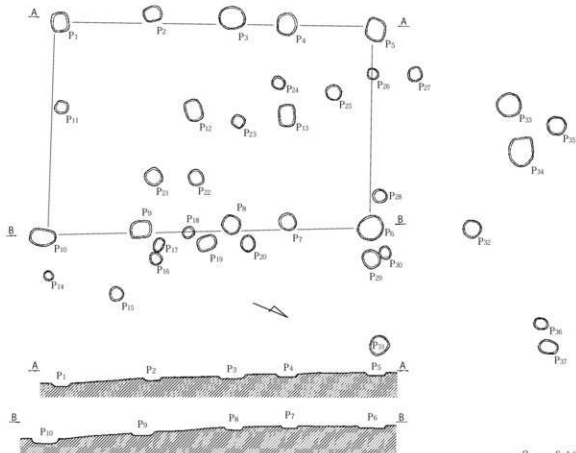
第11号掘立柱建物 (2次)



第12号掘立柱建物



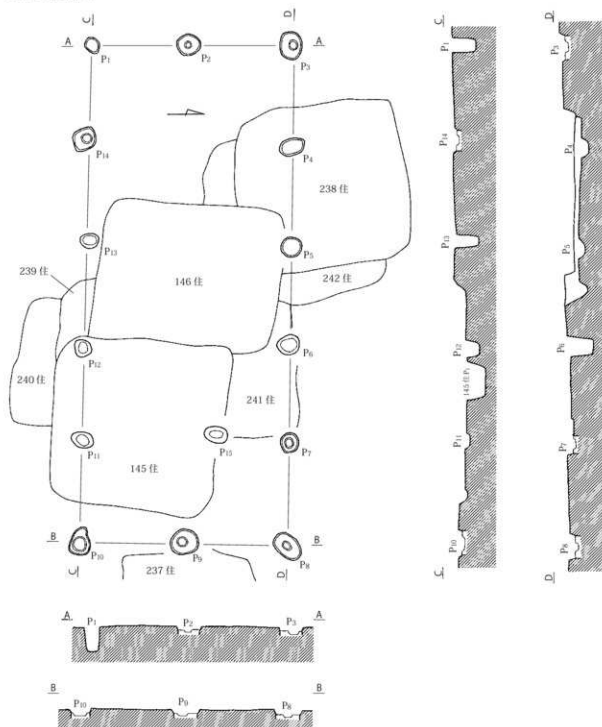
第14号掘立柱建物



第66图 掘立柱建物4 (第11・12・14号)

0 S=1/80 2m

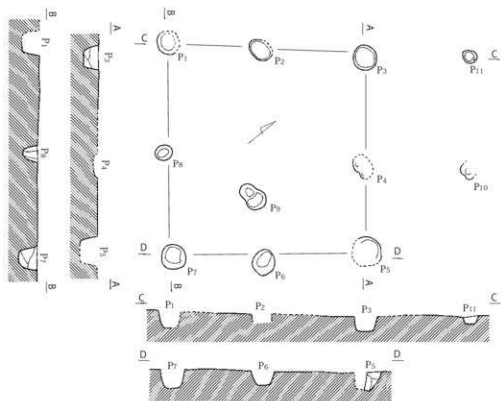
第 13 号掘立柱建物



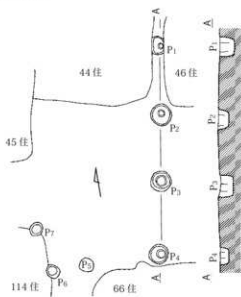
第 67 图 掘立柱建物 5 (第 13 号)

0 5=1/80 2m

第 15 号掘立柱建物

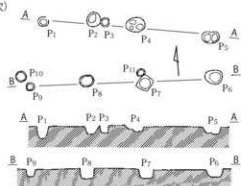


柱列 1 (1次)

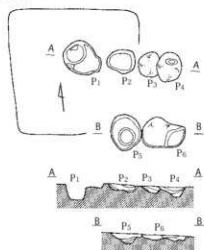


0 S=1/80 2m

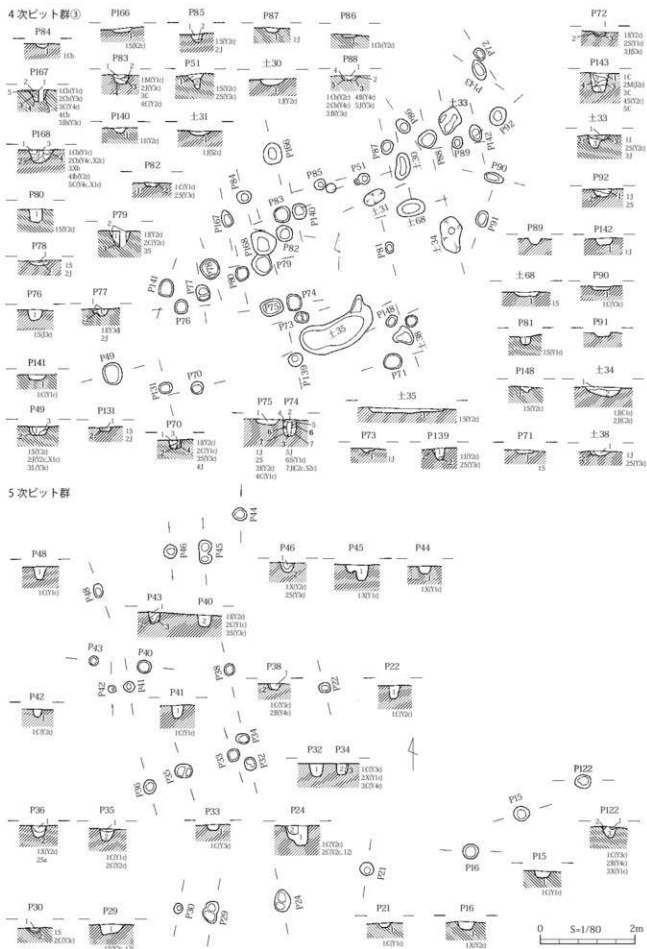
柱列 2 (1次)



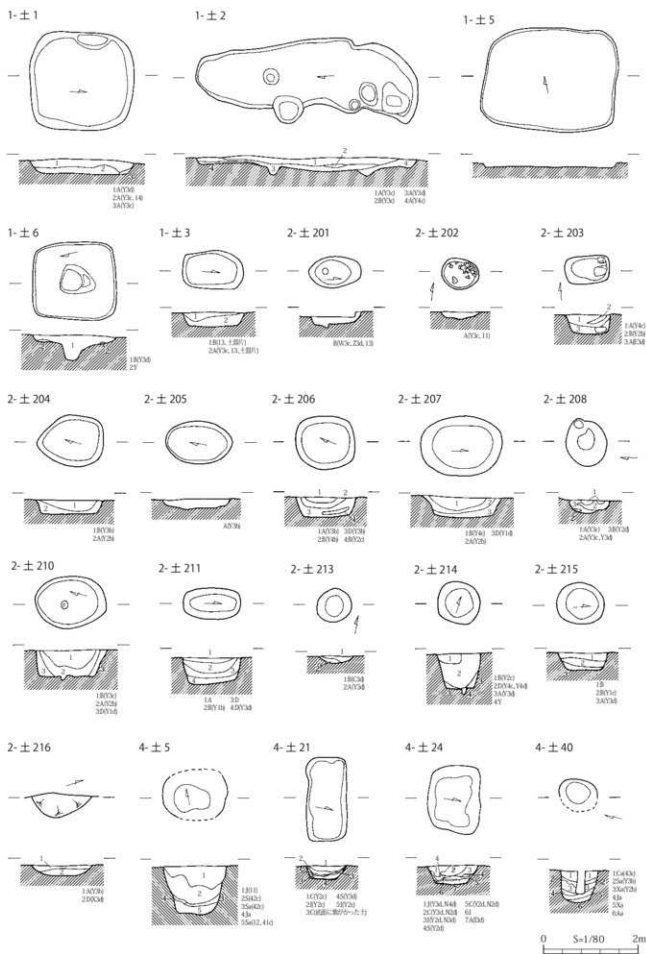
160住周辺ピット群 (2次)



第 68 図 掘立柱建物 6 (第 15 号)、柱列ピット群



第70図 4次ピット群③、5次ピット群 平面・断面図

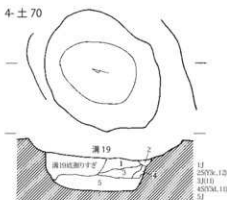


第71图 土坑1

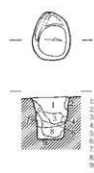
4 ± 64



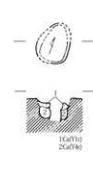
4 ± 70



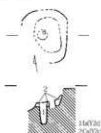
4 ± 72



4 ± 83



4 ± 84



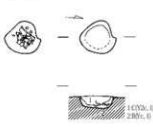
4 ± 85



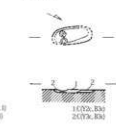
4 ± 86



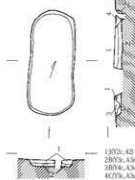
4 ± 90



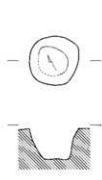
5 ± 3



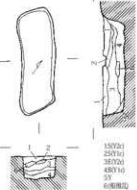
5 ± 8



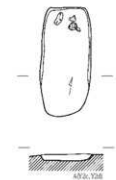
5 ± 20



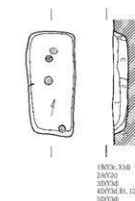
5 ± 21



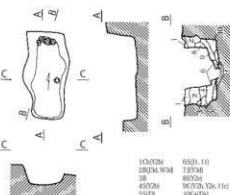
2 ± 209



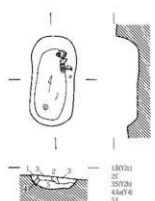
2 ± 212



4 ± 17

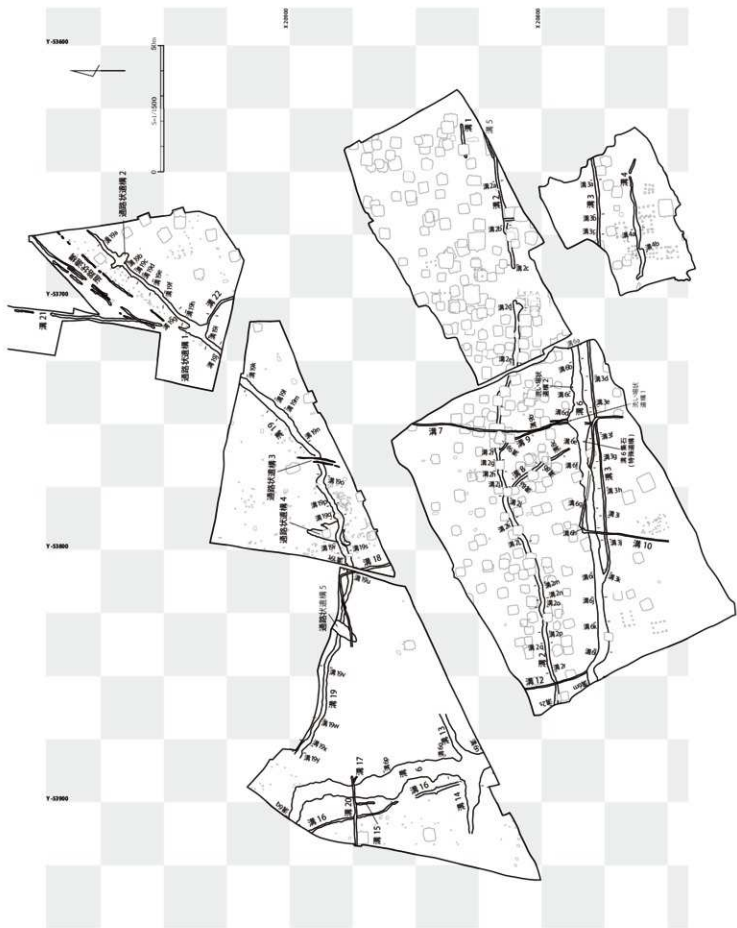


4 ± 41



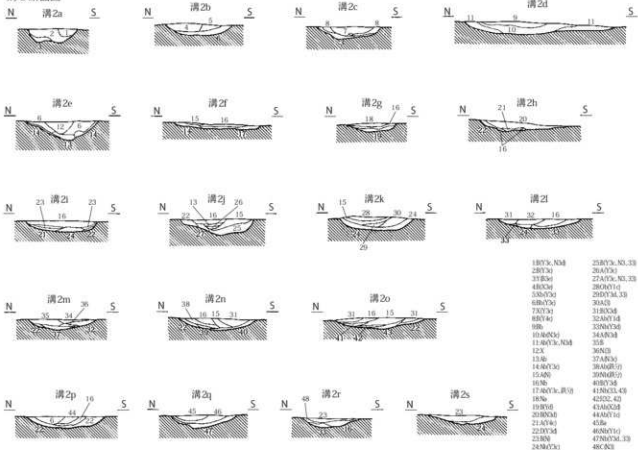
0 1/2 1 2m

第72图 土坑2

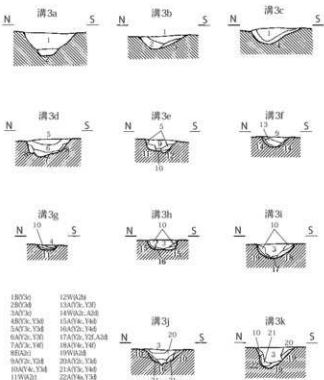


第73図 溝配置

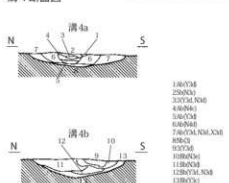
溝 2 断面図



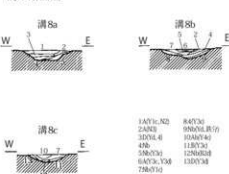
溝 3 断面図



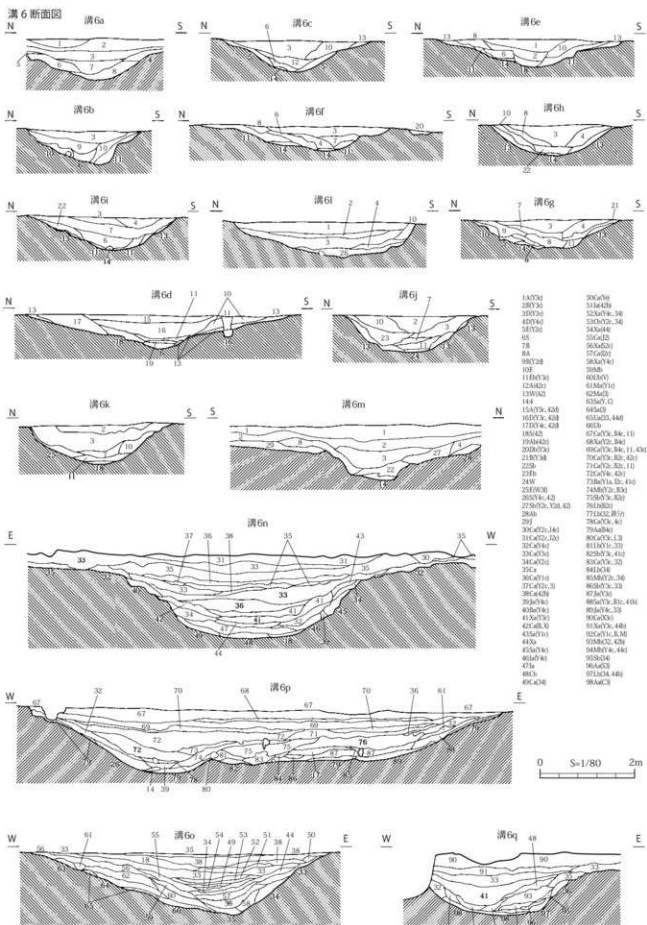
溝 4 断面図



溝 8 断面図

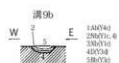


第 74 図 溝 2 ~ 4・8 断面図



第75図 溝6 断面図

溝 9 断面図



溝 14 断面図



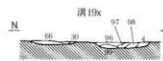
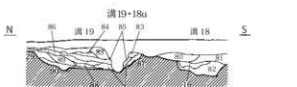
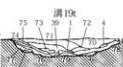
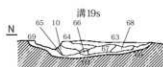
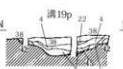
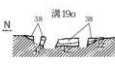
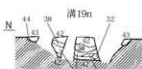
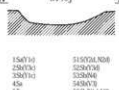
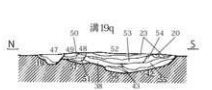
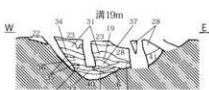
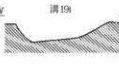
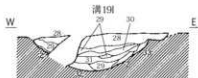
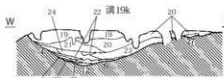
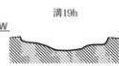
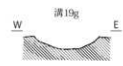
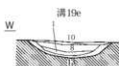
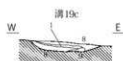
溝 22 断面図



164°03', 10
204°03', 30
364°04', 40
464°04'

0 S=1/80 2m

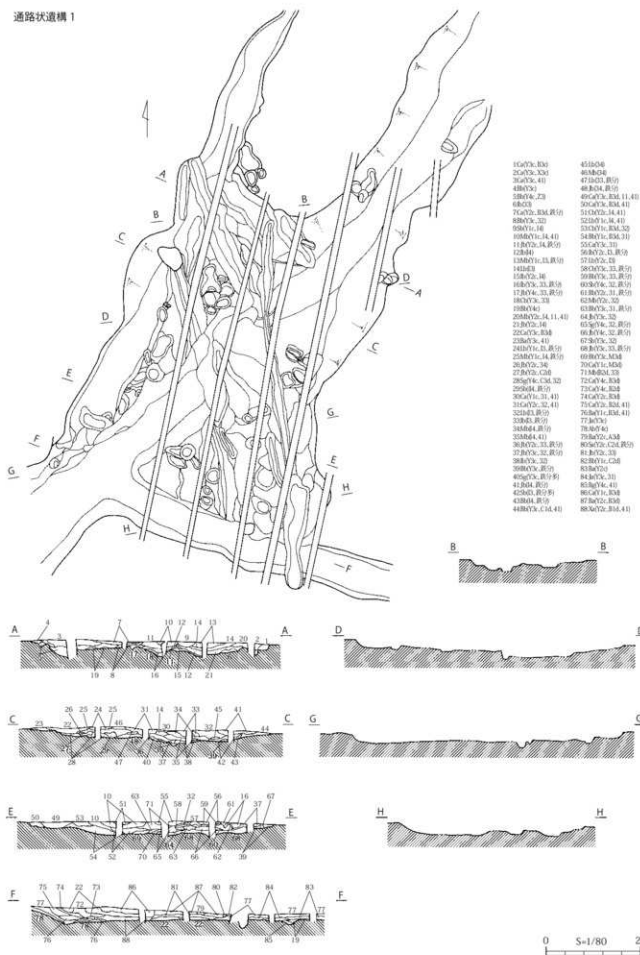
溝 19 断面図



- | | |
|---------------|--------------------|
| 154°10' | 515°04', N08 |
| 250°03' | 520°07' |
| 350°03' | 525°06' |
| 45° | 548°07' |
| 31° | 510°14', S2 |
| 63° | 564°11' |
| 77° | 528°02', T1 |
| 86°01' | 583°08' |
| 90° | 595°02', S4 |
| 92°03', G | 604°03', B(5) |
| 105° | 615°08' |
| 117°59' | 622°45' |
| 125° | 630° |
| 135°01' | 640°02' |
| 140°03', B(1) | 650°06' |
| 150°03' | 656°09' |
| 161°02' | 662°04' |
| 178°04', C(1) | 671°04', B |
| 188°04' | 686°02' |
| 190°02' | 696°07' |
| 208°02' | 706°04', S48 |
| 218°04' | 716°02', C(1) |
| 218°04' | 726°08' |
| 218°04' | 736°04', S |
| 243°07' | 743°06', C(2) |
| 258°04', S18 | 750°02', S3 |
| 264°07' | 760°04', Y44, B(1) |
| 275°02' | 775°04', S4, B(1) |
| 286°07', T14 | 786°04' |
| 290°02' | 796°04', B |
| 300°04' | 800°07' |
| 310°07' | 810°07' |
| 328°02' | 820°04', B |
| 334°03' | 830°05' |
| 345°04', N(1) | 840° |
| 350° | 850°02' |
| 363°03' | 860°02' |
| 375°07', N(1) | 870°07', T2 |
| 388° | 880°04', T3, B(1) |
| 395°01' | 895°03', T8 |
| 403°02' | 905°04' |
| 413°04' | 910°05' |
| 423° | 920°04' |
| 433°07' | 930°04' |
| 440° | 940°04' |
| 450° | 950°04' |
| 463°07' | 960°04' |
| 475°03', T2 | 970°07' |
| 485°07', T14 | 985°03' |
| 495°02' | 995° |
| 508°03' | |

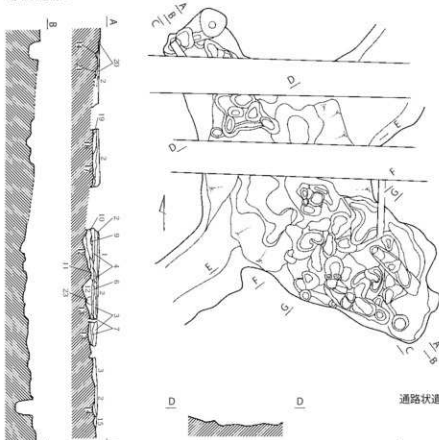
第 76 図 溝 9・14・19・22 断面図

通路状遺構 1

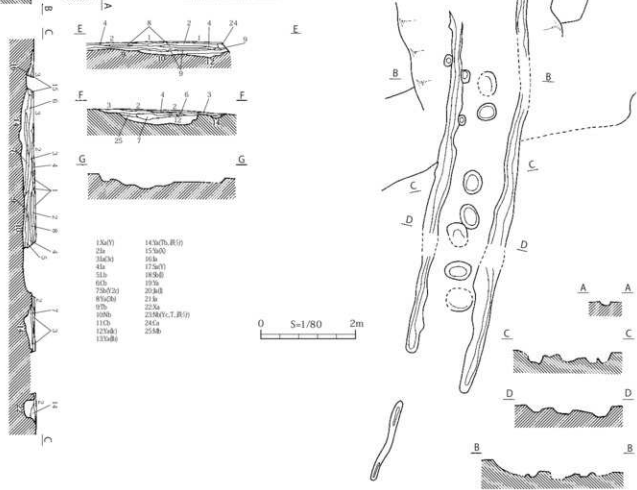


第 77 図 通路状遺構 1

通路状遺構 2



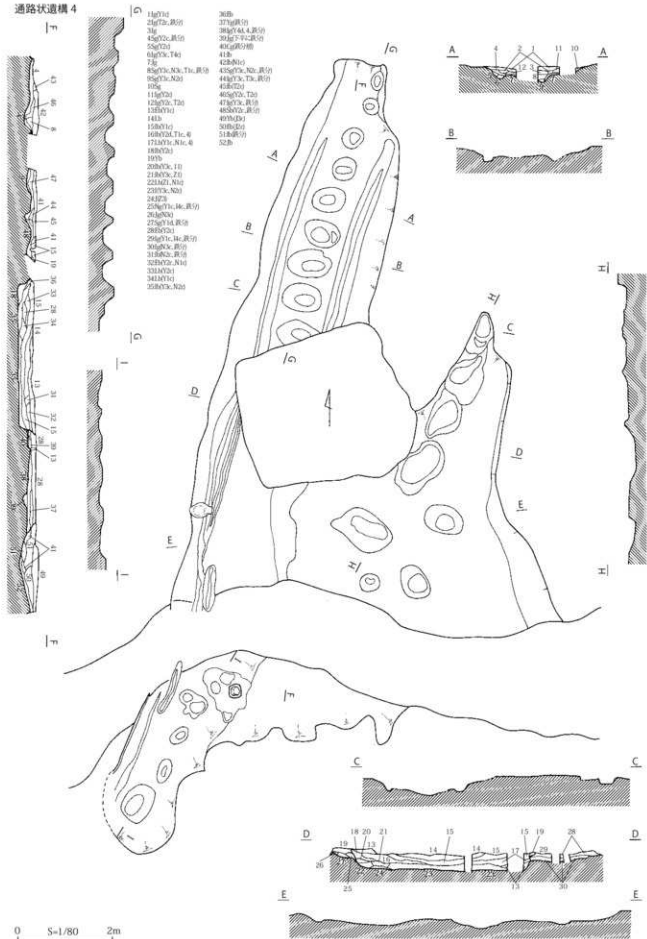
通路状遺構 3



- | | |
|----------|------------------|
| 13a(f) | 143a(7b, R(f)) |
| 21a | 157a(0) |
| 31a(k) | 161a |
| 41a | 175a(f) |
| 51a | 183a |
| 62a | 197a |
| 73a(f/2) | 203a |
| 81a(2) | 211a |
| 97a | 225a |
| 107a | 233a(f, T, R(f)) |
| 112a | 242a |
| 125a(f) | 251a |
| 133a(4) | |

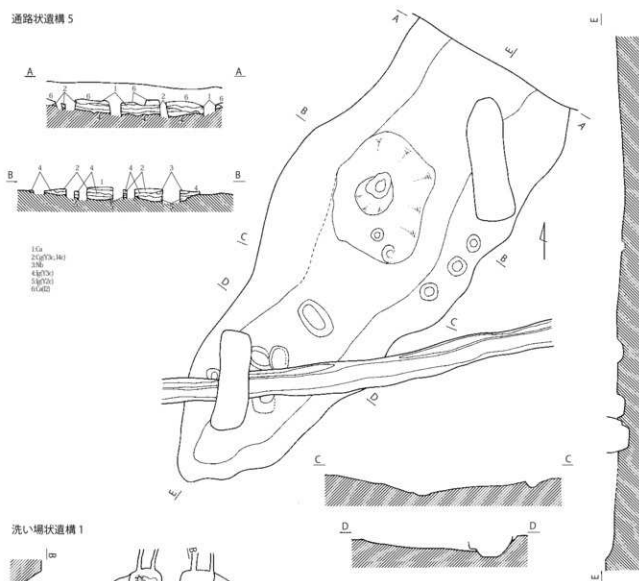
第 78 図 通路状遺構 2・3

通路状遺構 4

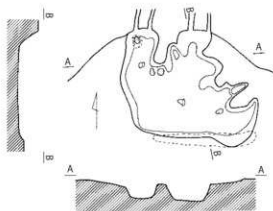


第79図 通路状遺構 4

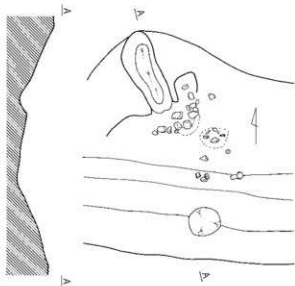
通路状遺構 5



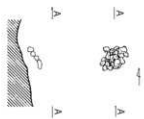
洗い場状遺構 1



洗い場状遺構 2

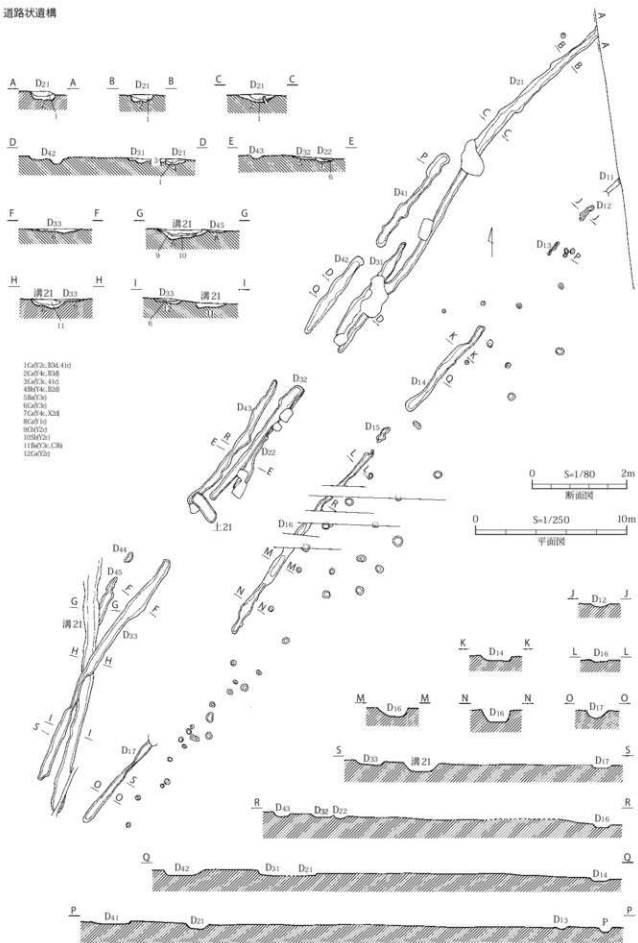


溝 6 集石 (特殊遺構)



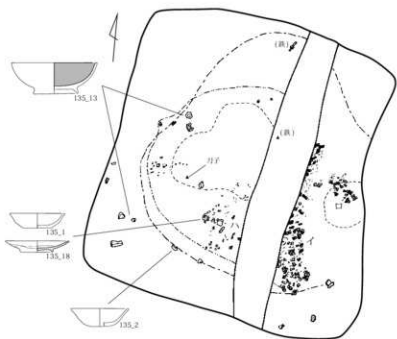
第 80 図 通路状遺構 5、洗い場状遺構 1・2、溝 6 集石

道路状遺構

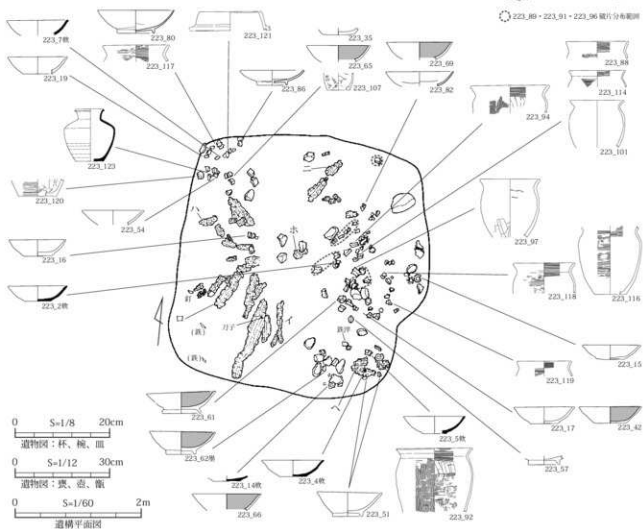


第 81 図 道路状遺構

第 135 号竖穴建物

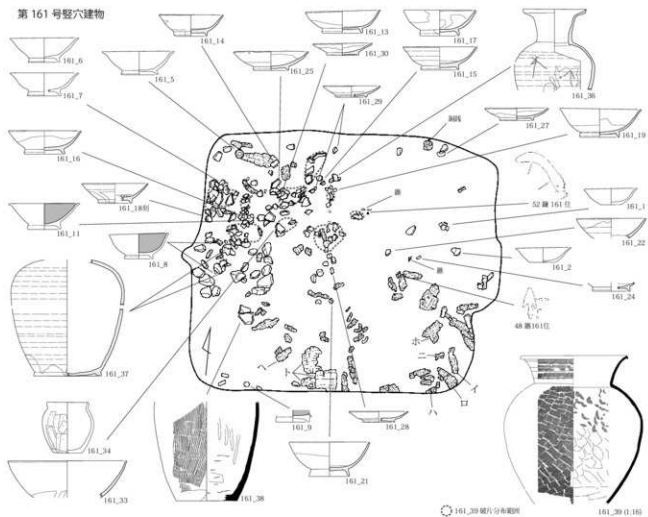


第 223 号竖穴建物

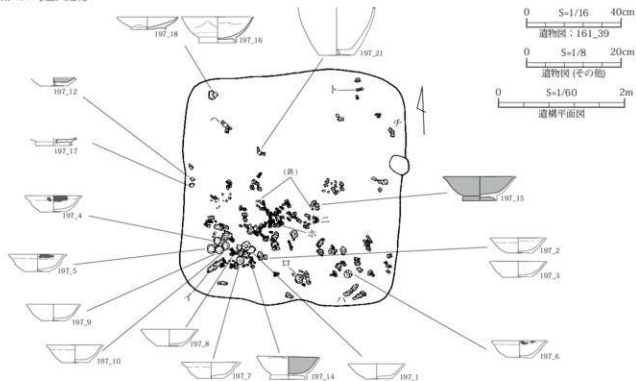


第 82 图 遺物出土状況 1

第 161 号竪穴建物

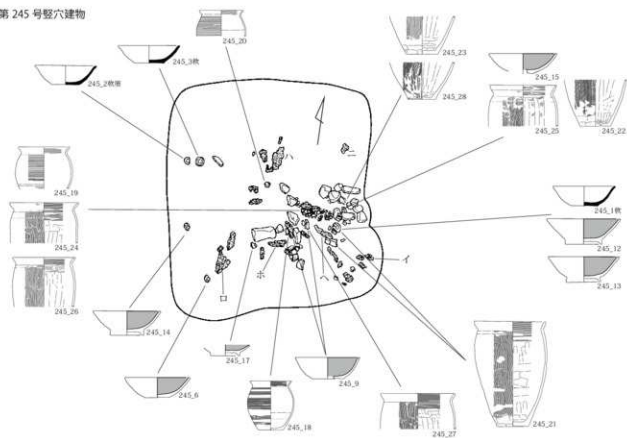


第 197 号竪穴建物

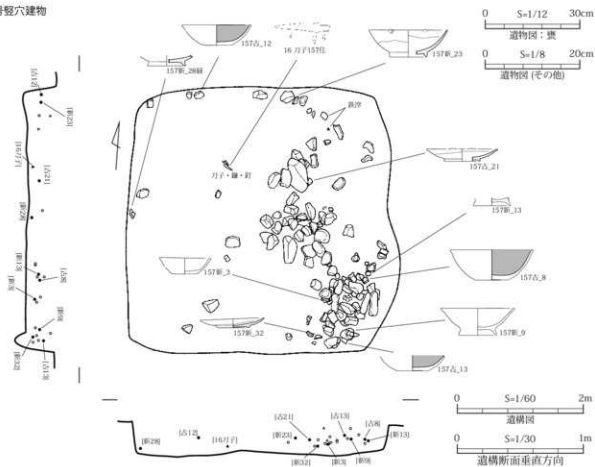


第 83 図 遺物出土状況 2

第 245 号竪穴建物

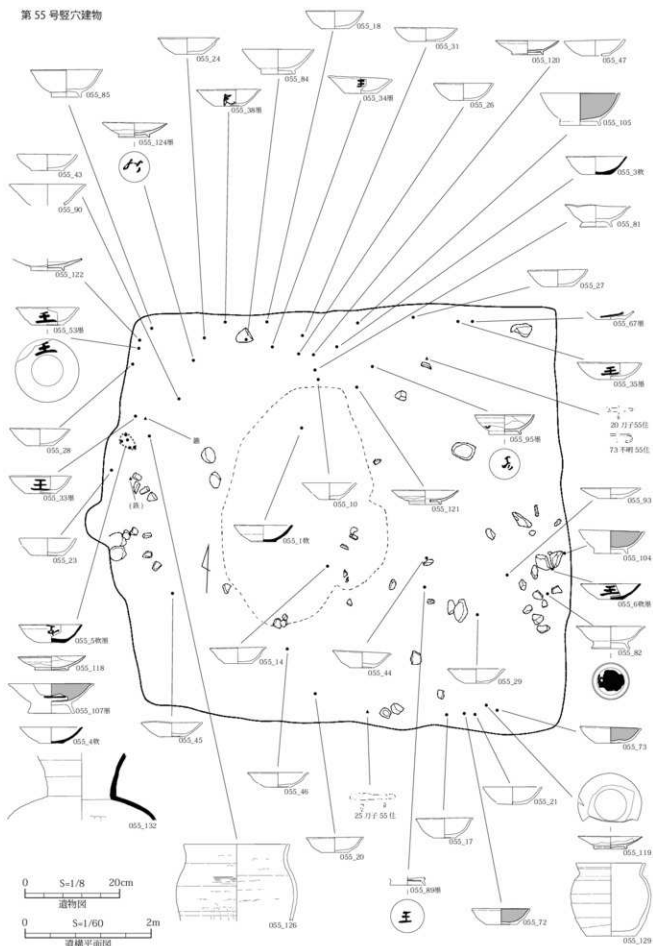


第 157 号竪穴建物

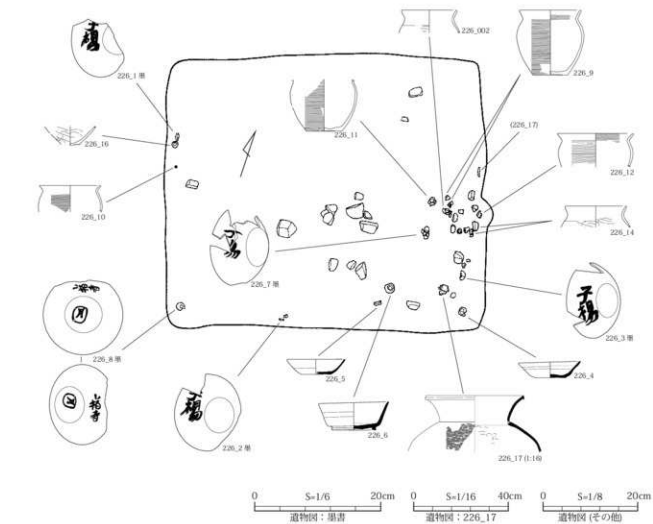


第 84 図 遺物出土状況 3

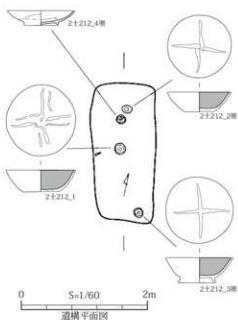
第 55 号竪穴建物



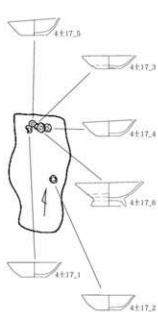
第 85 图 遺物出土状況 4



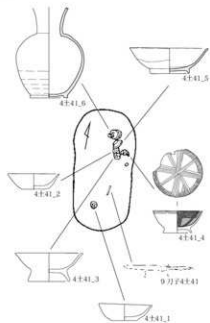
2-土 212



4-土 17



4-土 41



第 86 図 遺物出土状況 5

第3節 出土遺物

1 土器・陶磁器

(1) 概要と提示の方針

縄紋土器と古代に属する土器・陶磁器（焼き物。以下「土器類」という。）が出土し、把握できた総量は1,098kgである。縄紋土器はわずかなため、本書では特記しない限り「土器類」は古代に属するものを指す。土器類のほとんどが竪穴建物、土坑、溝址などの遺構内からの出土で、遺物包含層と遺構検出面からは少ない。竪穴建物からの出土量については、重量を第8表の中に示した。土器類の帰属時期は文献13・27に従うと、ほぼすべてが西暦9世紀の中葉から10世紀の末の間にあたる。

出土した土器類のうち遺存部が多いものについて実測図を作成し、遺構番号順に掲載した（第89～172図）。緑釉陶器と磁器は、他の土器類と同様に実測図を掲載したが、さらに実測不能の小破片を含めた全点を一覧表で示した（第22表）。墨書・刻書土器は、他の土器類と同様の基準で実測図を作成するとともに、墨書部分については正対図を作成した。通常の実測が不能な小片は墨書部分の正対図のみを作成し、墨書の全点を図化提示できるように努めた。墨書部分の正対図は集成を掲載し（第198～211図：274～287頁）、特殊な場合を除いて通常の実測図には掲出していない。図示掲載できた土器類は合計で4,319点、出土遺構別では、竪穴建物4,150点、土坑25点、溝128点、その他16点である。

(2) 種別

焼成の方法・技法で生じる焼き物の質的な違いを「種別」と表記する。文献13の分類に従うと、本調査で出土した土器類には、土師器、黒色土器A・B、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁がある。土師器は素焼きの土器、黒色土器Aは土師器の内面に炭素を吸着させる黒色処理を行ったもの、黒色土器Bは黒色処理が内外面に及ぶものである。須恵器は窯窯を用いた還元炎焼成のもの、軟質須恵器は還元炎焼成に抱っていると推定されるが、焼成度合や胎土が須恵器と大きく異なる質の粗悪なものである。

量的には土師器と黒色土器A、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器が土器類のほとんどを占めている。黒色土器Bはわずかしみられない。緑釉陶器は同時

期の他遺跡に比べると格段に多いが、種別構成の中ではまれな存在である。白磁と青磁は前者が2片、後者が1片確認されたのみである（緑釉陶器と磁器は本項(5)で再述）。

黒色土器Aの中には、使用時や廃棄後の被熱により黒色処理が失われ、一見して土師器のような色調を呈するものが散見されたが、当該種別に特有のミガキ調整の有無によって識別した。また、土師器と軟質須恵器には、双方の中間的な焼成の色調・質感を示すものが少なからずあり、それらについては胎土、器形などの要素を勘案して区別を行ったが、疑義が残るものもある。緑釉陶器には釉薬がすべて剥落したのもあったが、胎土と器形で判断した。

(3) 器種器形

名称と分類は概略を文献13に従う。大別して食膳具、煮炊き具、貯蔵具があり、種別を考慮せずに器種名を列挙すると、食膳具は杯形土器（以下「杯」と略す。他の器種も同じ。）・蓋・椀・鉢・皿・耳皿・盤、煮炊き具は甕・小型甕・甕・足釜、貯蔵具は甕・壺・瓶に大きく分類できる。さらに杯は杯A・Bに、皿は皿A～Cに細分でき、蓋や椀、盤、鉢なども同様である。本遺跡における土器類の主要な種別と器種器形、それらに認められる製作時の調整痕の概要を第87・88図に示す。香炉や各種の瓶・壺類など希少な器種については他遺跡の事例を参考とした。

基本的に煮炊き具は土師器、貯蔵具は須恵器と灰釉陶器に限られる。一方、食膳具に分類される杯・椀・皿などの器種は複数の種別に及んでいる。本遺跡でみられる食膳具の器種器形名と種別との対応関係について第6表に整理した。

(4) 紋様・暗紋

わずかに紋様に類するものを持つ土器類があり、種別と器種の組み合わせが次のとおり認められる。

ア 櫛描の波状紋

須恵器甕の頸部に、櫛歯状工具で波状紋が描かれた例がある。甕A（大甕）に限られており、全形がわかるものはない。

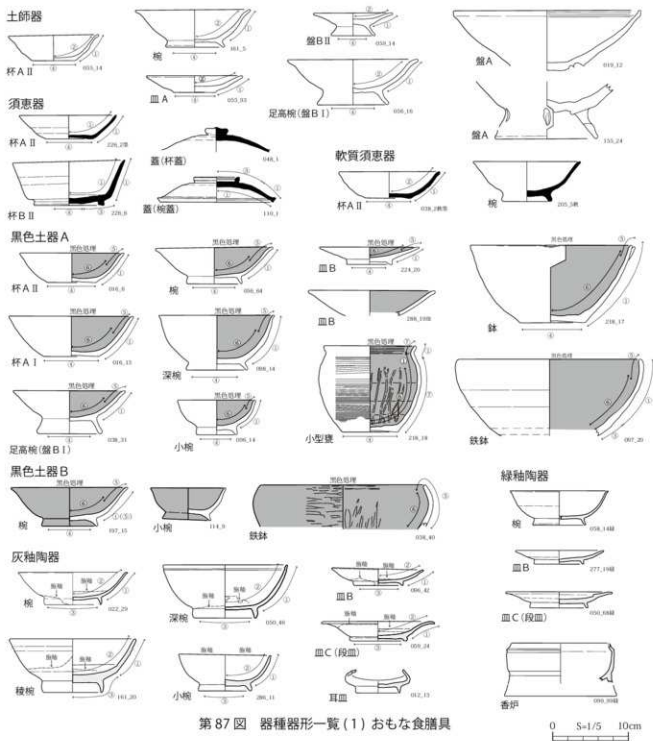
イ 陰刻紋（第147図213_14・第127図138_39）

ごく一部の灰釉陶器と緑釉陶器に、焼成前の線描陰刻による花卉を描いた紋様がみられる。

ウ 緑彩紋

ごく一部の緑釉陶器に緑彩紋と推定されるものが認められる。いずれも小片で図示できず、断定はできない。

エ 暗紋（第196・197図）



第 87 図 器種器形一覧 (1) おもな食膳具

0 S=1/5 10cm

器種	蓋	杯		皿			椀		鉢		盤			
		A	B	A	B	C	耳	椀	足高深	小	鉢	鉄	A	B
須恵器	○	●	○											
軟質須恵器		●						△						
土師器		●		○			△	●	○	○	○	○	○	○
黒色土器 A		●					△	●	○	○	○	△	○	○
黒色土器 B							△	△					○	
灰釉陶器				●	○	○	○	●	○	○				
緑釉陶器				●	○	○	○	●	○	△	△			

当該種別中の相対量で、多●、少○、稀れ△、空欄：なし、を示す。

第 6 表 種別と器種器形の対応

第 87 図 調整痕の凡例

- ① ロケロサテ
- ② 同上(コチ状工具使用?)
- ③ 回転ヘラ(クズリ)
- ④ 回転糸切り
- ⑤ ヘラミガキ(横)
- ⑥ ヘラミガキ(縦・放射)
- ⑦ カキメ

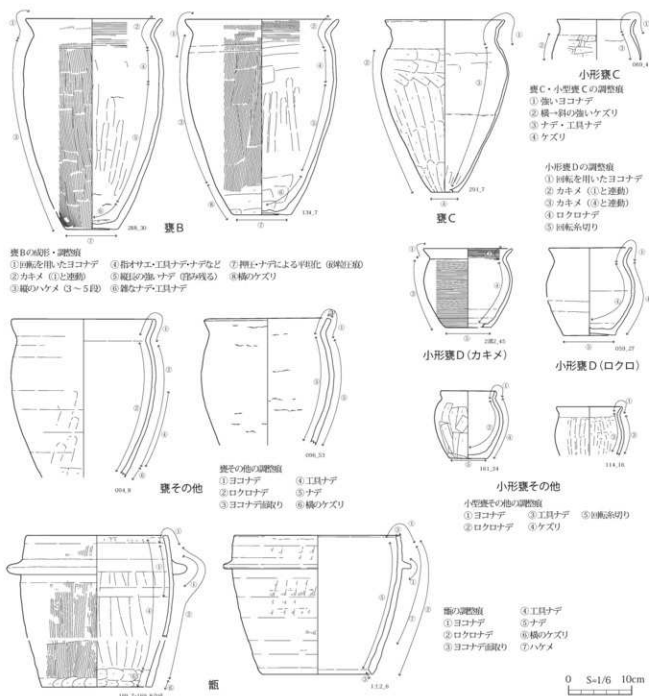
※ 灰釉陶器椀皿類の底面調整痕は回転クズリを基本とするが、回転糸切り痕が確認されたものは各実測図の底部中央に「糸」と記した。

黒色土器Aの杯・碗の内面に紋様の効果を意図した如き十字、螺旋、花卉状の暗紋が認められる。十字は、4分割する四方、6分割する六方、4分割をさらに2分する八方があり、まれに三方、五方、七方もみられる。十字の間に螺旋が組み合わされるものもある。黒色土器Aの杯・碗の内面には、精粗はあるが全面にミガキが行われるのが通例だが、ミガキ（特に体部の放射状ミガキ）を省略し、あたかも四方や六方、八方十字の暗紋のみで済ませている個体が多い。暗紋の分類や時期的な点については第4章第2節で別に触れる。

(5) 緑釉陶器・磁器 (第194図、第22表)

当地域の遺跡としては突出した量の緑釉陶器が出土している。総点数は237点、重量では3,589gで、97点を図化提示し、全点を一覧表で示した。出土遺構はほとんどが堅穴建物で、墓址を含めた土坑、溝址からの出土は僅かな破片のみであった。意図的な廃棄や納置などを想定できる出土状況を示したものはない。

器種・器形は碗と皿が大半を占め、僅かに壺・瓶類と合子（香炉）が伴う。より濃い緑釉で紋様を描いたと思われるもの（緑彩紋陶）や、施釉・焼成前



第88図 器種器形一覧(2) おもな煮炊き具

に花卉紋様を陰刻したもの（陰刻花紋陶）もわずかに伴っている。

器種・器形を問わず、色調（釉調）や胎土によっていくつかの類型に分けることができる。それについては文献 13・27 を参考とした。

(6) 墨書土器（第 198～211 図・第 24 表）

墨書や刻書による文字・記号が認められた土器類は 533 個体、記された墨書・刻書は 563 点となる。この内 205 点は一部の残存あるいは墨痕で判読ができない。墨書が記された土器類の種別、器種は土師器・黒色土器・須恵器・軟質須恵器の杯 A、土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器の碗・皿に限られるが、刻書は土師器小形甕にも記されている。墨書が記された部位は体部外面 (A) と底部外面 (B)、稀に内面 (C) で、A・B の双方に記されている個体もある。また体部外面の 2 力以上に記される例も複数みられた。土器体部に記された墨書の向きは、墨書の上下が明白なもので見ると土器を正位に置いた時に字句も正位となるもの (a)、逆位となるもの (b)、土器の口縁部を左側に置いた時に字句が正位になるもの (c)、右側に置いた時に正位となるもの (d) があり、a にはさらに 2 文字を横書きしたもの (a2) がわずかにあった。

(7) 土器群

土器類のほとんどは前述のとおり遺構内からの出土である。これらを各土器の単体ではなく、それぞれの遺構ごとの土器群として総体で扱うことによって、当該遺構の使用や埋没の時期、埋没状況、性格などを探る有力な手掛かりにできる。また、地域における当該期の土器様相に迫ることも可能になる。土器群の段階（時期）区分については、第 4 章第 2 節で設定したものをを用いる。

ア 竪穴建物出土の土器群

竪穴建物の埋土（覆土）中や床面（底面）から出土したもので、本調査で把握された土器群の中で量的にも内容的点でも主体をなす。出土状況から、意図的な納置や一括廃棄の可能性が推定できるものと、埋土形成時の無作為な廃棄とみられるものがあり、後者が大半を占める。ただし、後者であっても遺構ごとにかなり時的なまとまりが認められ、土器群として把握する意義は少なくない。第 8 表に竪穴建物出土の土器群について、種別・器種器形の構成や量的な内容、時期等を示した。また、出土状況に問題がなく、点数や器種などの内容が良い土器群 30 群を用いて、本遺跡出土土器の段階（時期）区

分の決定を試みた。

イ 掘立柱建物出土の土器群

掘立柱建物を構成するピット掘方のいくつかから少量の土器類が出土したのみで、内容的にも乏しく土器群としての特記はむずかしい。

ウ 土坑出土の土器群

土坑から出土した土器類は、次項の墓址を除き量的に少なく、内容的にも取り上げるべきものは少ない。4-土 90 からは縄紋土器がまとまって出土しており、それらを伴った遺構が本遺跡では稀な縄紋中期のものであることを示している。

エ 墓址出土の土器群

墓址と推定される 5 基の土坑のうち、良好な出土状況を示した土器群を取り上げる。これらは出土位置などから墓域内に納置、副葬されたものと考えられる。

① 2 区土坑 212 出土土器群

黒色土器 A の杯 A 2 点、碗 1 点、灰釉陶器の皿 1 点で構成される。黒色土器 A は杯・碗共に内面は口縁一帯に横のミガキを行うが体部の放射状ミガキは皆無で四方十字暗紋が描かれる。灰釉陶器の皿は体部下半から底面全面に回転ケズリが行われ、施釉はハケヌリである。Ⅲ期新からⅣ期古のまとまった資料と考える。

② 4A 区土坑 17 出土土器群

土師器の杯 A 5 点、碗 1 点で構成される。杯 A の口径はほぼ揃っており、平均値は 11.0cm を測る。Ⅴ期新のまとまった資料である。

③ 4B 区土坑 41 出土土器群

土師器の杯 A 2 点、碗（盤）1 点、黒色土器 A の碗 1 点、灰釉陶器の碗 1 点、長頸壺 1 点の計 6 点で構成される。杯 A の口径は 11.1cm と 10.8cm を測る。黒色土器 A の碗は小碗で、土師器の碗も盤に近いので、Ⅴ期新のまとまった資料と考える。

オ 溝址出土の土器群

溝址の規模によって土器類の出土量は大きく異なる。小規模な溝址からの出土は概して僅少で、内容的にも乏しく土器群としての特記はむずかしい。規模が長大な溝址には多量の土器類を出土したものがあり（溝 2・6）、それらの溝址が機能していた時期や期間等の検討に有効である。

① 溝 2 出土土器群（第 170・171 図、第 9 表）

2 区中央部を中心に 5.09kg の土器類が出土しており、47 点を図示できた。食器は須恵器杯 A、黒色土器 A の杯 A が主体で、須恵器杯 B と灰釉陶器碗

が伴う。土師器杯Aと軟質須恵器杯Aは混入と見なせる数値であろう。黒色土器Aの椀・皿、土師器の杯・椀がないこと、土師器甕Bが多量にあり、同甕Cもわずかに伴うことからI期新のまとまった資料といえる。灰釉陶器は椀が1点出土したのみで、体部の腰が張って四角く細い高台を持ち、軸は内面のみにハケヌリされる、あまり類例をみないものである。

② 溝4出土土器群 (第171図、第9表)

破片ばかりであるが2.9kgの土器類が散発的に出土し、11点を図示できた。須恵器と黒色土器Aの杯Aを中心として、須恵器の蓋B、黒色土器Aの椀(皿)、土師器の甕Bが伴っており、若干の時間幅はあるがI期からII期の様相にまよっている。

③ 溝6出土土器群 (第171図、第7・9表)

地点によって多少差はあるが埋土の上・下層を問わず多くの土器類が出土した。総量は24.7kgに及び、47点を図示できた。出土状況に意図的な配置や廃棄を示すものは認められず、ほとんどが埋土形成時に周囲から入り込んだものと考えられる。その点でまとまった資料とはいえませんが、溝6の遺構としての時期や性格を探るうえで重要な要素なので土器群として把握し、図化不能品を含め全点を計量した。食膳具の器種構成は、重量比で土師器の杯・椀が45%、黒色土器Aの杯・椀が27%、灰釉陶器の椀・皿が21%を占め、須恵器の杯Aは3.8%、杯Bは0.3%、軟質須恵器の杯Aは3.3%にすぎない。土師器の甕類は甕Bが主体だが、III期以降に現れてくる器面調整に回転を使わない「その他の甕」としたものが重量比で25%に達する。また甕が甕類に対して13%の比率で存在する。これらの点から見

ると、土器単体では時期幅に大きな広がりがあるが、総体の重量比では明らかにIV期以降に重心がある。最も新しい時期を示す土器類は、口径の小さい土師器杯A(第171図2溝6(4,3))や底面に回転糸切り痕を残す灰釉陶器の椀皿類(第171図2溝6(5,24・5,30))でV期古にあたる。これらが本土器群の最終的に形成された時期を示し、溝6の埋没時期をも示すと考える。

④ 溝19出土土器群 (第172図、第9表)

4区で2.5kg、5区で4.5kgの土器類が出土し、21点を図示できた。土師器、黒色土器A、須恵器と軟質須恵器の杯A、灰釉陶器の椀、須恵器の壺類と突帯四耳壺、大甕などの器種がみられるが、主体は土師器と黒色土器Aの杯Aである。この杯Aのうち8点は5区を通1・2区間の底面や埋土下層に一括品で点々と残された出土状態が類似するもので、廃棄に人為の影響も考えられる。土師器杯Aの2点は口径11.7cmで揃い、黒色土器Aの6点も口径が12.5cm前後で底径が5cm未満と小さく、腰が張る外形も酷似している。時期は土師器の口径からV期古にあたり、黒色土器Aも特殊な規格品と見れば同じ時期まで下すことが可能かもしれない。この時期まで溝19が機能していたと考える。

カ その他の遺構出土の土器群

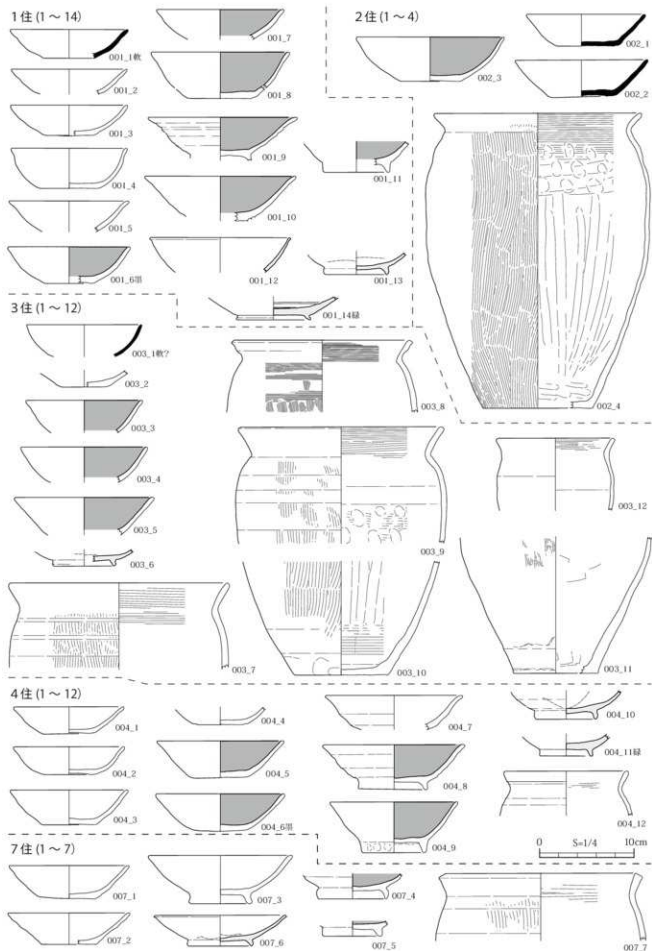
通路状遺構、道路状遺構、ビット、ビット群などの遺構があるが、いずれも少量の土器類が出土しているのみで、内容的にも乏しく土器群としての特記はむずかしい。

形態等 器種・器類 器群	土師器		黒色土器						須恵器						軟質須恵器						灰釉陶器						計	表炊具						貯蔵具ほか						区画計
	杯A		椀		杯A		杯B		杯A		杯B		杯A		杯B		杯A		杯B		杯A		杯B		計			小甕		甕		須恵器		灰釉陶器		雑品				
	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg		枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg	枚	kg			
b-c区	128	160	192	0	82	298	114	78	0	20	292	0	1370	332	32	280	643	96	0	22	770	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2952	0	0				
d区	2	10	10	0	6	46	14	4	0	6	42	0	140	62	0	0	62	10	0	0	46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	238	0	0			
e区	298	268	352	0	110	166	242	38	4	46	454	22	2000	292	8	434	734	206	0	18	912	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3886	0	0			
f区	88	124	96	0	32	32	48	50	0	60	98	0	628	306	2	152	460	92	32	28	268	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1514	0	0			
g区	94	60	156	0	20	80	90	60	0	10	34	0	604	576	6	0	582	72	116	80	292	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	36	1800	0	0		
h区	44	44	52	0	64	60	42	36	6	4	38	0	390	84	10	40	134	70	0	0	290	62	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	954	0	0			
i区	76	80	56	0	8	72	58	16	0	30	292	0	708	178	40	130	358	10	222	0	476	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1776	0	0		
j区	118	312	243	0	54	206	148	16	0	38	84	0	1302	288	54	214	556	74	386	16	546	46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	3051	0	0	
k区	66	132	10	0	0	18	0	0	0	0	234	0	460	142	0	0	142	30	0	0	92	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	724	0	0		
l区	44	114	62	0	0	12	28	10	6	10	12	0	298	250	18	152	460	108	0	0	348	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	140	1360	0	0	
m区	44	162	130	0	58	44	128	36	4	36	102	0	744	714	7	220	941	50	24	56	60	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	1919	0	0	
n区	16	82	46	20	12	16	20	0	0	24	188	0	424	100	1	16	117	30	0	2	234	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	849	0	0
o区	30	10	36	0	16	4	2	0	0	0	36	0	154	28	0	12	40	6	0	6	162	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	310	0	0	
p区	44	8	56	0	36	16	36	4	0	16	68	6	292	98	2	26	126	56	0	10	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	76	566	0	0	
q区	12	0	4	0	6	20	6	0	0	6	38	0	72	38	0	0	0	0	0	0	56	228	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	396	0	0	
r区	12	20	34	0	14	0	16	18	0	36	72	0	222	104	0	0	104	12	60	0	404	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	832	0	0	
s区	38	4	62	0	32	22	16	1	10	0	76	0	261	40	42	0	82	20	0	0	180	48	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	591	0	0	
t区	40	10	50	0	28	4	24	8	0	2	4	0	170	52	14	0	66	20	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	264	0	0	
u区	14	0	14	0	4	0	14	20	0	0	18	0	84	42	0	0	42	14	0	8	120	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	298	0	0
v区	2	0	12	0	0	0	0	0	0	6	0	0	30	12	0	0	12	12	0	0	0	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	86	0	0	
特殊遺構	24	162	24	0	0	0	0	0	0	0	6	0	220	34	0	0	0	34	0	0	30	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	292	0	0	
総計	1234	1782	1697	20	582	1188	1008	401	30	350	2198	28	10578	3812	236	1676	6724	988	840	302	5506	376	8	356	24678	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
埋没比率(%)	11.7	16.8	16.0	0.2	5.5	11.2	10.1	3.8	0.3	3.3	20.8	0.3	100	67	4	29	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

第7表 2区溝6出土土器類重量表(g)

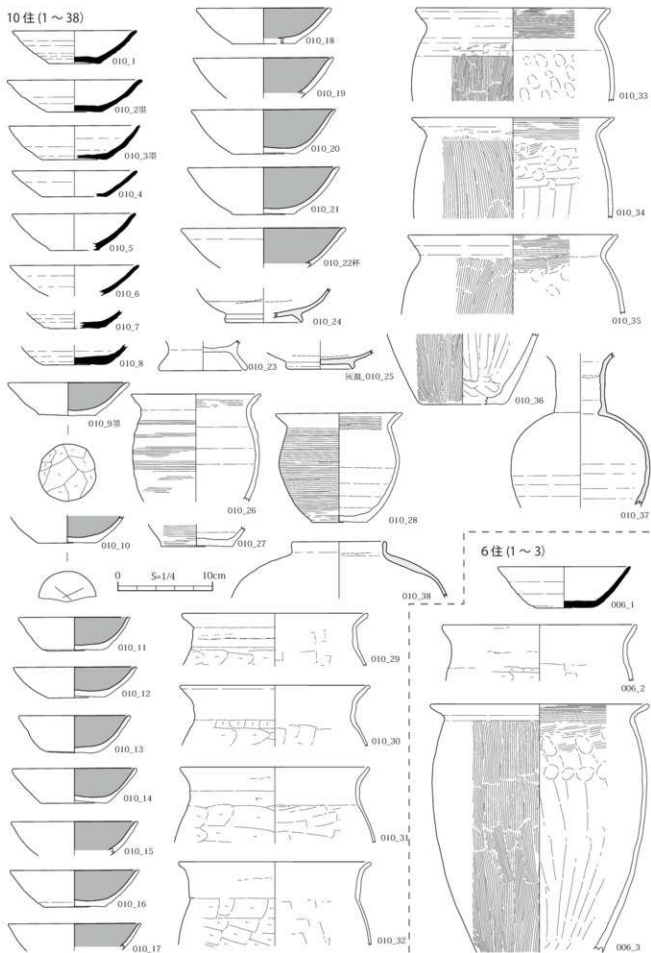
地区	住居No.	重量 (g)	実測 数	食器具													その他	時期	出土状況備考	
				杯A	盤A	椀	皿	山形鉄杯用	工鏡	煮炊器具		小甕	酒	器	器					
IA	1	632	14	1	4	3	2	3	2											
IA 1	632	14	1	4	3	2	3	2											中古<	
IA 2	1580	4	2	1	1														1新	
IA 3	4020	12	1	1	1														黒銅>	
IA 4	1450	12		4	2														黒銅>	
IA 6	1174	3	1	1															黒銅>	
IA 7	580	7	2																黒銅>	
IA 8	2300	13	2	4	1														黒銅>	
IA 9	2322	12	4																黒銅>	
IA 10	3890	38	8																1新	灰釉皿は盗入
IA 11	2304	13	7																黒銅>	
IA 12	748	14	1	4	2														黒銅>	
IA 13	8220	30	4																黒銅>	
IA 14	1300	12	3	7															黒銅>	
IA 15	2640	15	4																黒銅>	
IA 16	2700	20	1	12															黒銅>	灰釉は盗入か
IA 17	530	11	1	5	4														1新	
IA 18	220	3	1	1	1														黒銅>	非1
IA 19	1038	12	1	1															黒銅>	
IA 20	2960	19	4	1															1新	
IA 21	514	7	1	1															黒銅>	
IA 22	3874	43	6	3	13														黒銅>	
IA 23	1000	16	3	1															黒銅>	
IA 24	8715	38	3	10	3														黒銅>	
IA 25	4907	12	△	4															黒銅>	
IA 26	354	8	2	1															黒銅>	
IA 27	1494	8	2	1															黒銅>	
IA 28	3258	12	1																黒銅>	
IA 29	7749	26	5	9															黒銅>	
IA 31	2321	9	5																黒銅>	
IA 32	5540	7	1	1															黒銅>	
IA 33	1017	22	1	6															黒銅>	
IA 34	6814	31	6	1															黒銅>	
IA 35	988	4	1	1	1														黒銅>	
IA 36	1405	7	3																黒銅>	
IA 37	1334	4																	黒銅>	
IA 38	6189	44	8	10	3														黒銅>	
IA 39	4464	7	1																黒銅>	
IA 40	2746	21	2	8	1														黒銅>・中古	新が本址、古の由未不明
IA 41	2385	6	△	2															黒銅>	
IA 42																				
IA 43	7032	27	9																1新	
IA 44	1480	6	1	1															黒銅>	非4
IA 45	1789	7	1	3															黒銅>	非4
IA 46	231	0	△	1															黒銅>	
IA 47	2512	9	2	2															黒銅>	
IA 48	2478	9	1																黒銅>	
IA 49A	3796	12	2	1															1新	
IA 49B	3057	7	4																黒銅>	
IA 50	19655	87	2	22	3														黒銅>	
IA 51	7247	36	7	11															1新	
IA 52	1245	3	1	1															黒銅>	
IA 53	448	3	2																黒銅>	
IA 54	6472	16	9	1															黒銅>	
IA 55	8814	33	9	6	6														1新	
IA 56	8244	57	2	8															黒銅>	
IA 57	0	0																		
IA 58	6321	15	3	4															黒銅>	
IA 59	6573	32	10																黒銅>	
IA 60	952	8	2	2															黒銅>	
IA 61	2319	5	3																黒銅>	
IA 62	2897	13	3	3															黒銅>・V新	非5
IA 63	8119	29	4	4	6														黒銅>	
IA 64	1814	4																	黒銅?>	
IA 65	821	6	2	2	1														1新	新が本址
IA 66	8743	57	4	2	15														黒銅>	
IA 67	172	0																	黒銅>	
IA 68	1855	4	△	1															黒銅>	
IA 69	4035	13	2	1															1新	
IA 70A	2387	11	1	1	2														黒銅>	
IA 70B	52	1																		
IA 71	254	2	1																黒銅>	
IA 72	1554	7	2	2	1														黒銅>	
IA 73	1131	7	△	3															黒銅>	
IA 74	4139	12	5																黒銅>・中古	古は71・73住由未不明
IA 75	4087	14	3																黒銅>	
IA 76	7467	19	2	3	3														黒銅>	
IA 77	5127	14	1	1	3	1													黒銅>・中古	古は溝2由未不明
IA 78	3056	9	3																黒銅>	
IA 79	5174	9	4																黒銅>・V古	古は本址、新の由未不明
IA 80	6693	11	3	2															黒銅>	
IA 81	4612	16	2	1															黒銅>	
IA 82	4278	9	1	2															黒銅>	
IA 83	1267	8	2	2															黒銅>	
IA 84	5479	11	3																V新	
IA 85	7844	22	3																黒銅>	
IA 86	898	6	1																黒銅>	
IA 87	8250	59	8	12	5														黒銅>	
IA 88A	2836	14	6																黒銅>	
IA 88B	304	0																		
IA 89	1148	0	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	黒銅>	
IA 90	2708	17	2	1															黒銅>	

第8表 住居別土器群一覧(1/4)



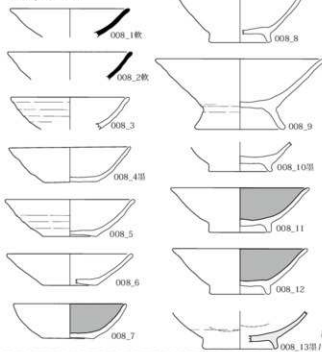
第89図 出土土器類実測図(1)

10住(1~38)

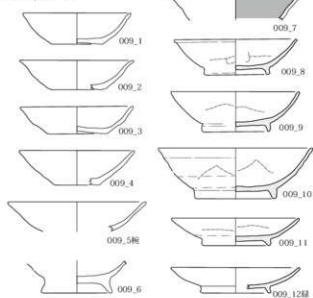


第90図 出土土器類実測図(2)

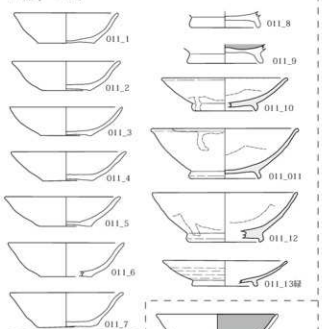
8住 (1~13)



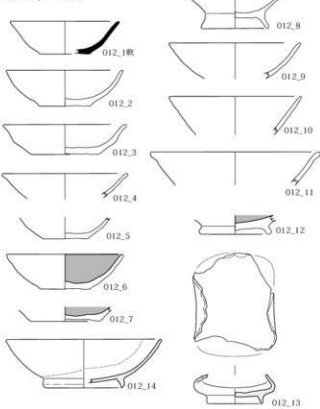
9住 (1~12)



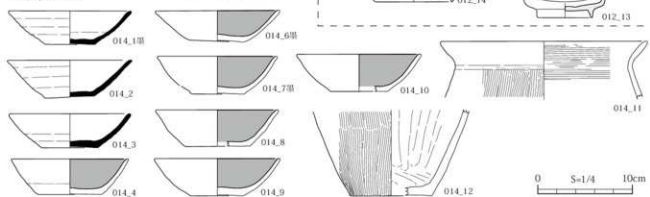
11住 (1~13)



12住 (1~14)

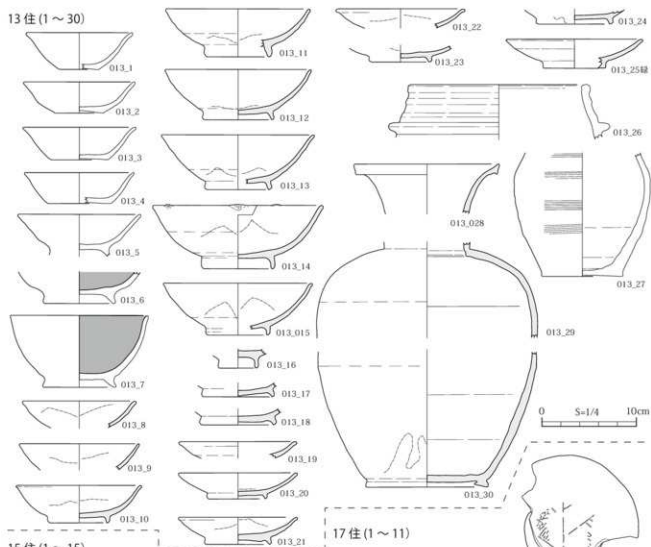


14住 (1~12)

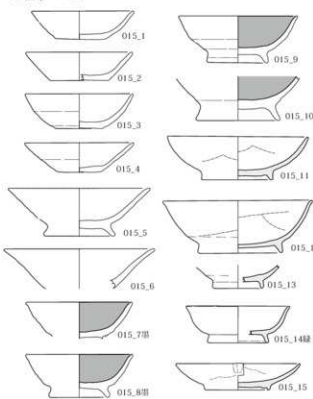


第91図 出土土器類実測図(3)

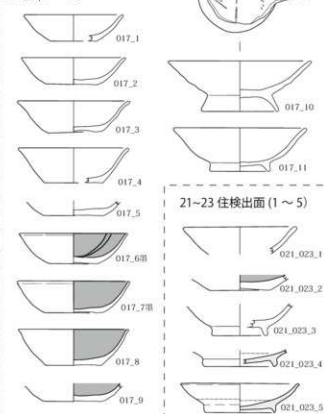
13 住 (1 ~ 30)



15 住 (1 ~ 15)

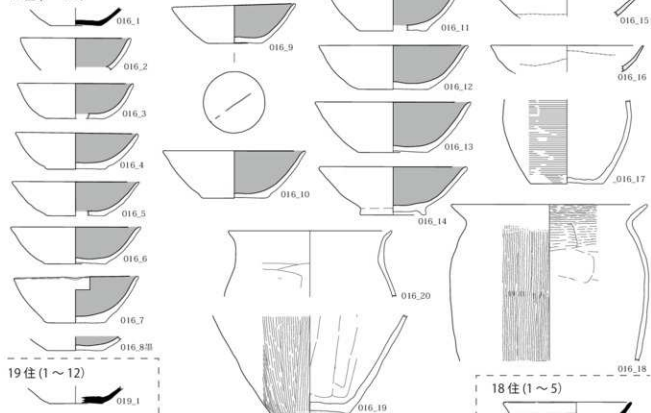


17 住 (1 ~ 11)

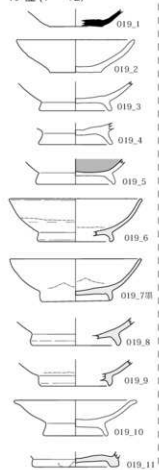


第 92 図 出土土器類実測図 (4)

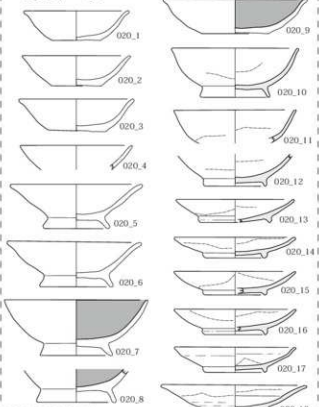
16住(1~20)



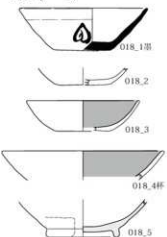
19住(1~12)



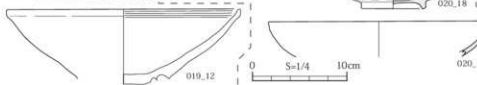
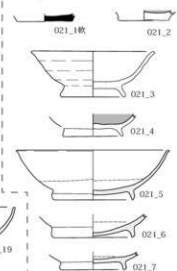
20住(1~19)



18住(1~5)

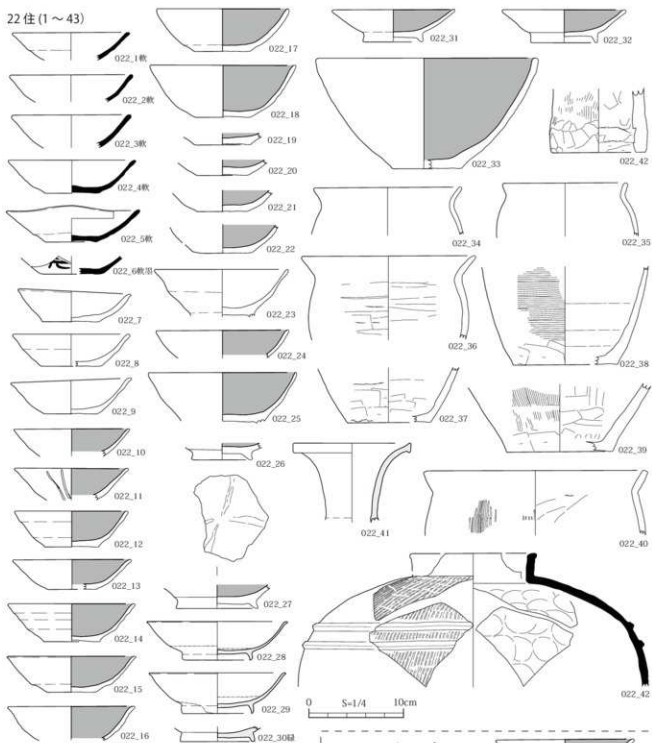


21住(1~7)

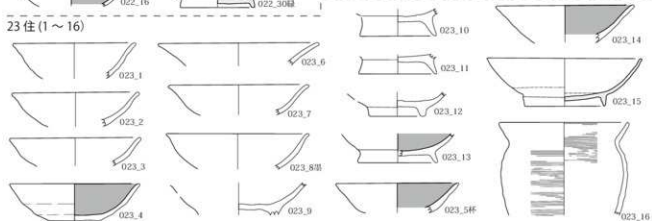


第93図 出土土器類実測図(5)

22住(1~43)

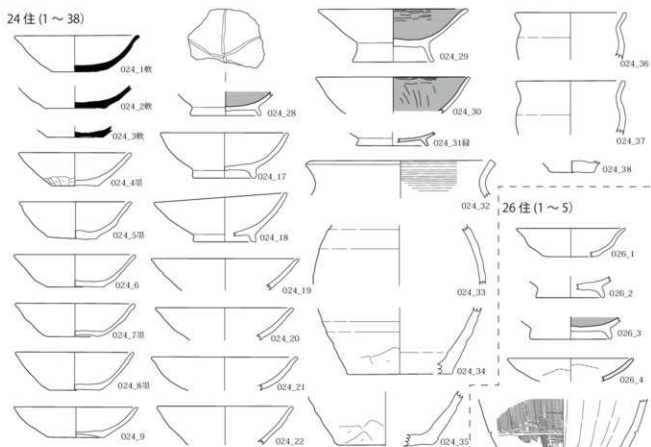


23住(1~16)

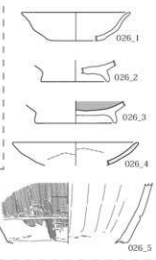


第94図 出土土器類実測図(6)

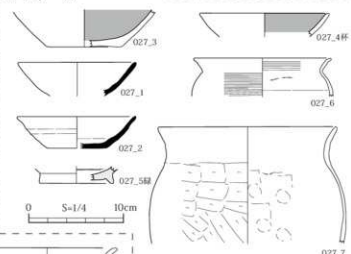
24住 (1 ~ 38)



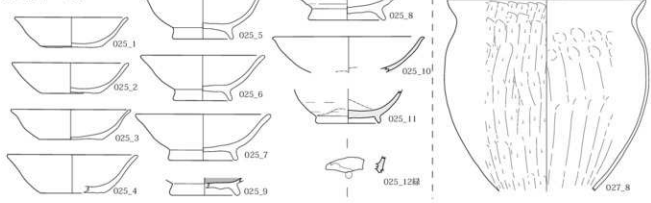
26住 (1 ~ 5)



27住 (1 ~ 8)

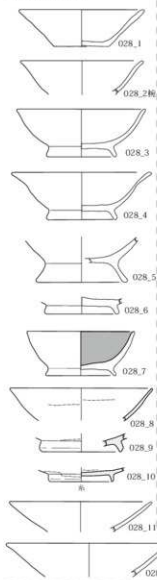


25住 (1 ~ 12)

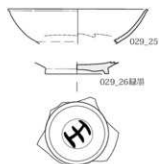
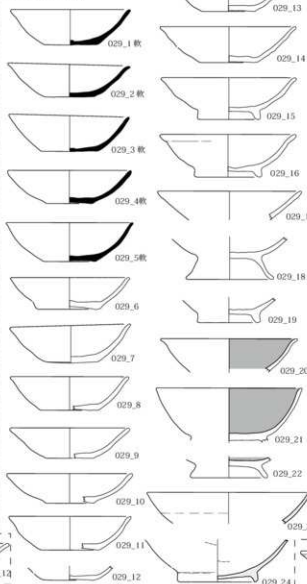


第95図 出土土器類実測図(7)

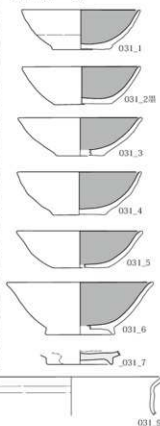
28住(1~12)



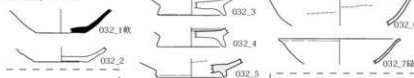
29住(1~26)



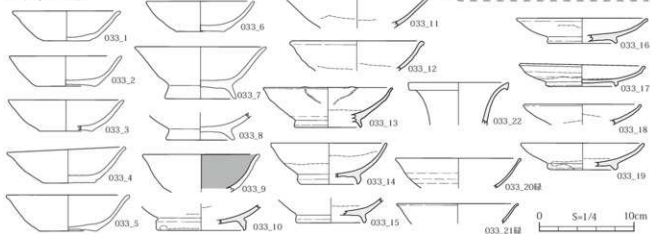
31住(1~9)



32住(1~7)

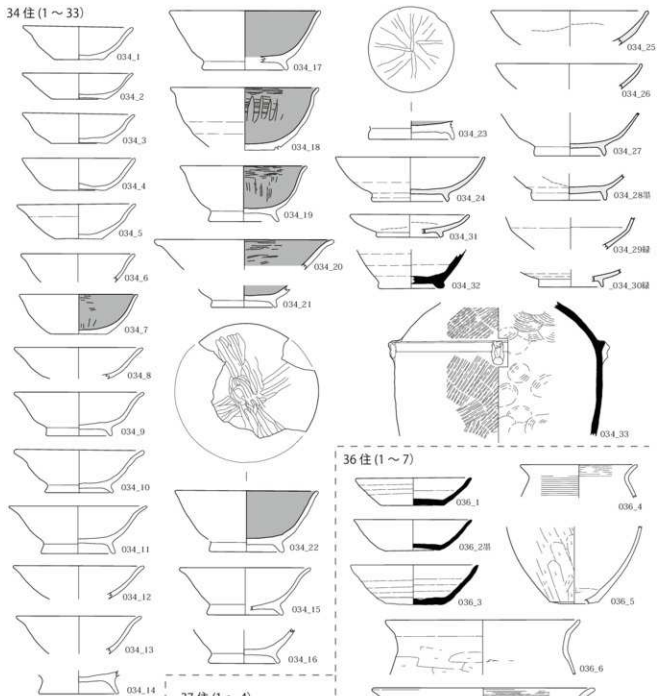


33住(1~22)

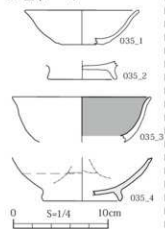


第96图 出土器類実測图(8)

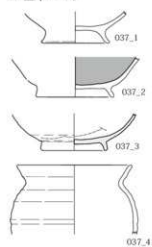
34 住 (1 ~ 33)



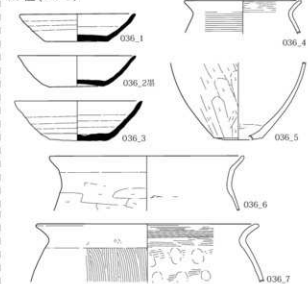
35 住 (1 ~ 4)



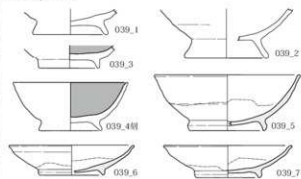
37 住 (1 ~ 4)



36 住 (1 ~ 7)

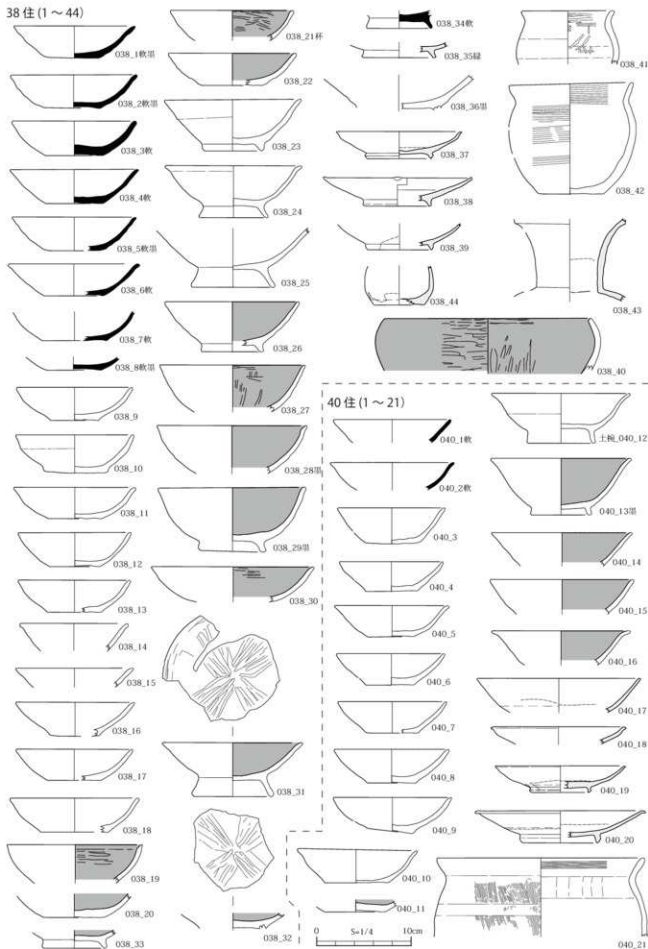


39 住 (1 ~ 7)



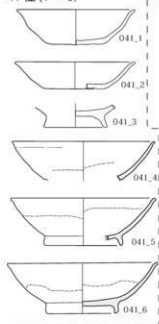
第 97 图 出土土器类实测图 (9)

38 住 (1 ~ 44)

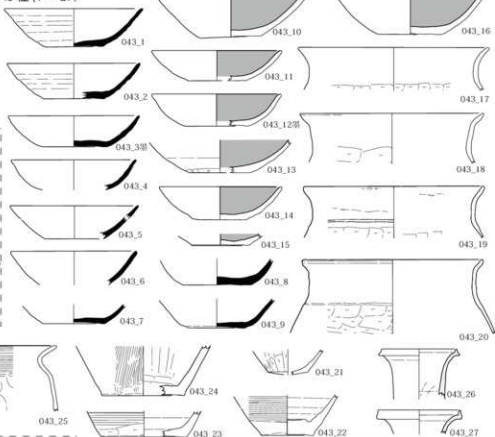


第 98 图 出土器類実測图 (10)

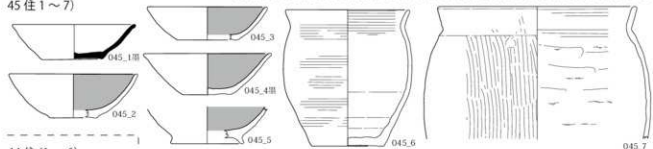
41 住 (1 ~ 6)



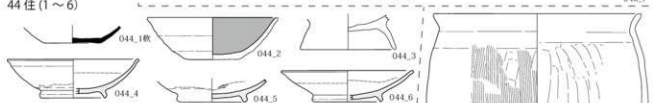
43 住 (1 ~ 27)



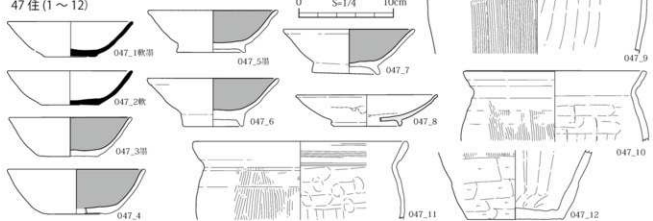
45 住 (1 ~ 7)



44 住 (1 ~ 6)

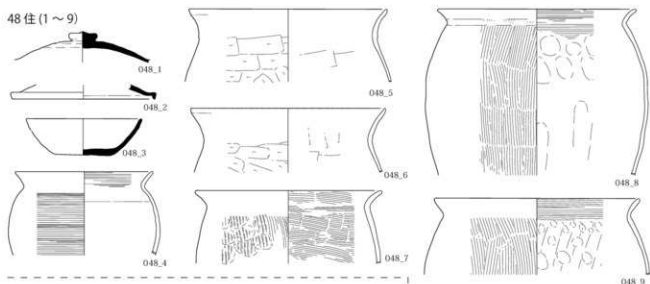


47 住 (1 ~ 12)

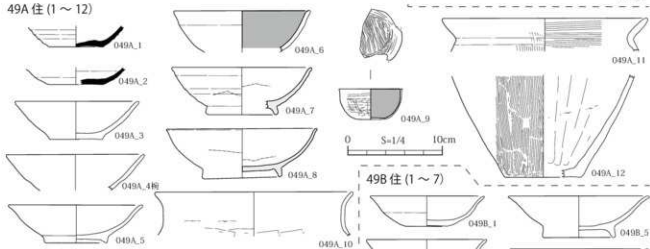


第 99 图 出土器類実測图 (11)

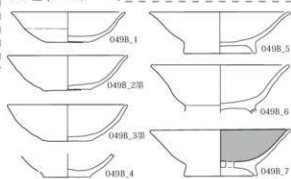
48住(1~9)



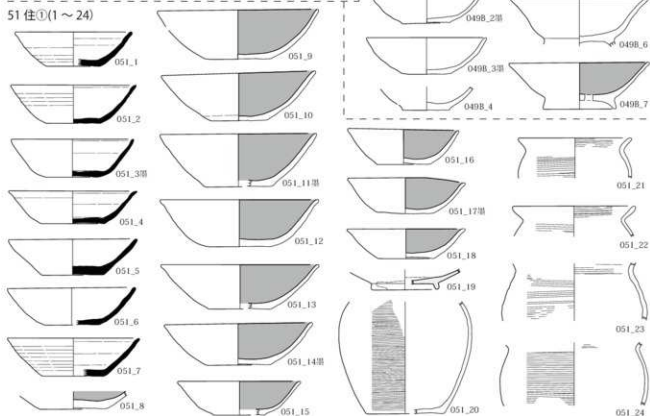
49A住(1~12)



49B住(1~7)

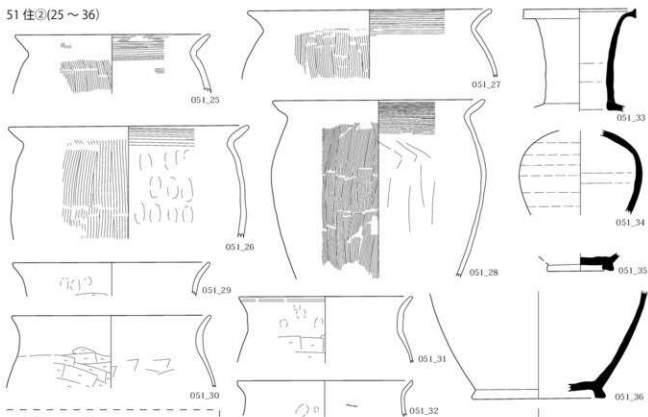


51住①(1~24)

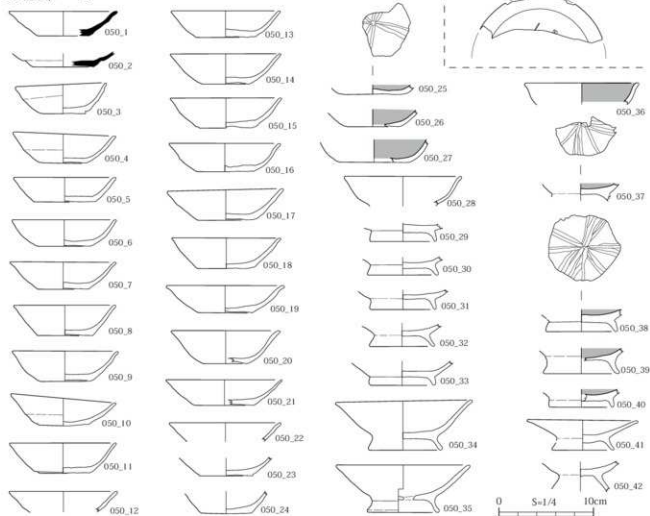


第100図 出土土器類実測図(12)

51 住②(25 ~ 36)

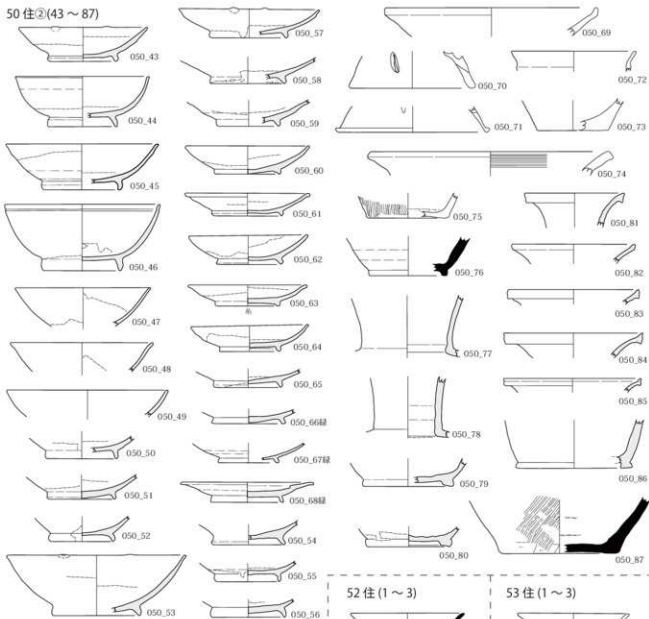


50 住①(1 ~ 42)

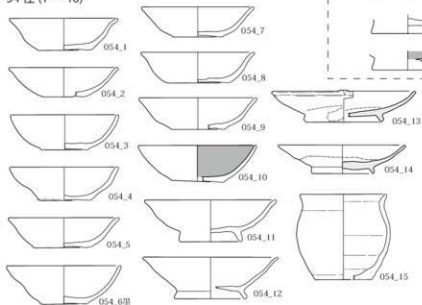


第 101 図 出土土器類実測図 (13)

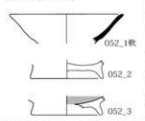
50 住②(43~87)



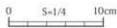
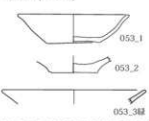
54 住(1~16)



52 住(1~3)

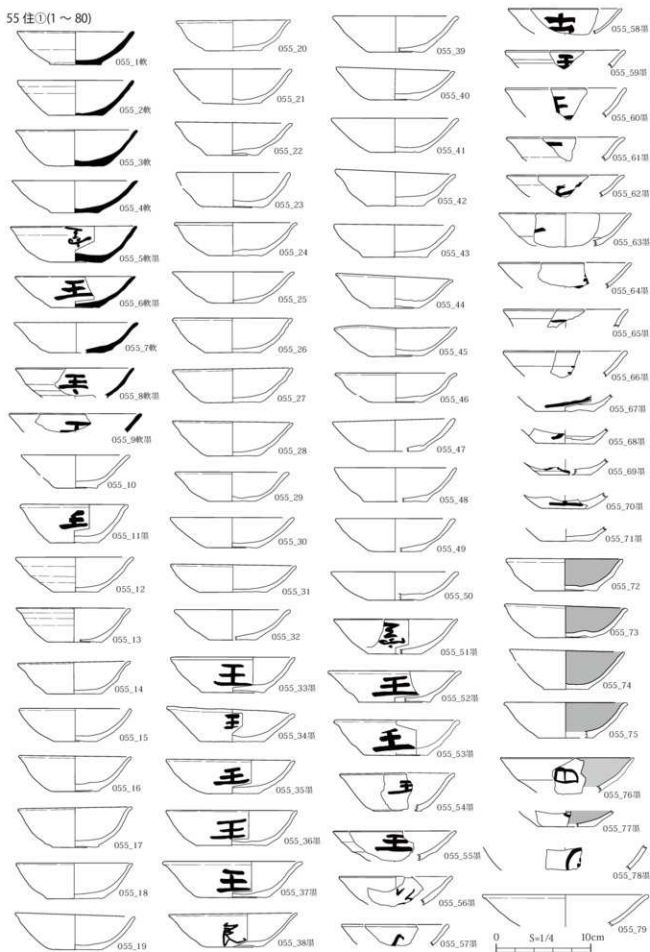


53 住(1~3)



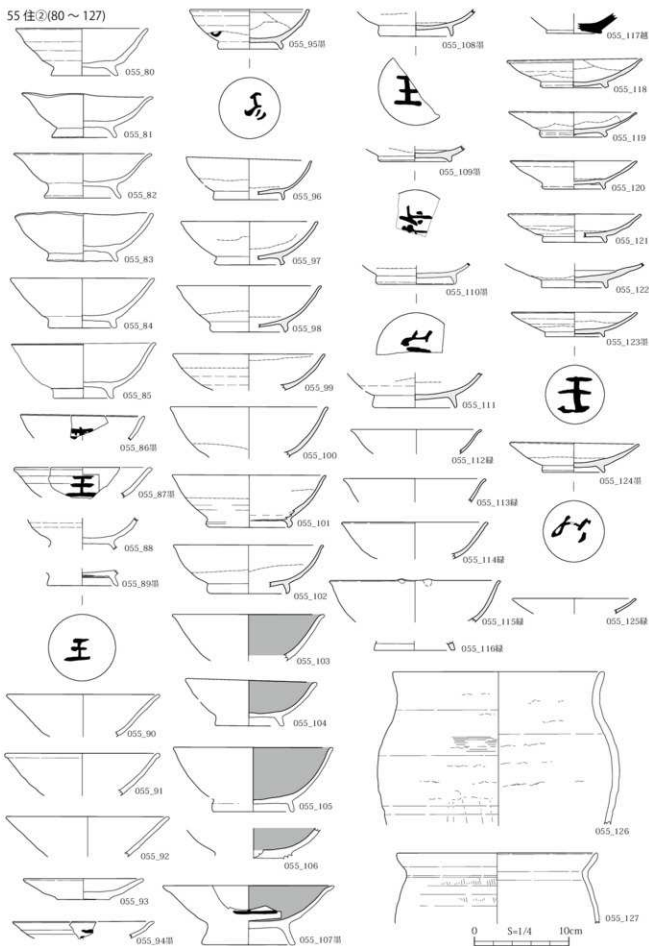
第 102 図 出土土器類実測図(14)

55 住①(1 ~ 80)



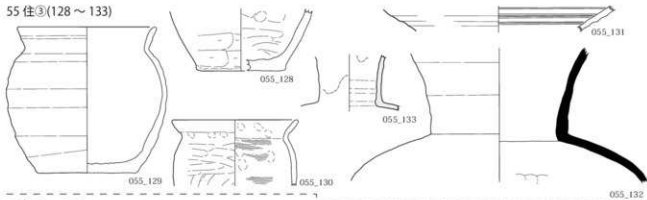
第 103 図 出土土器類実測図 (15)

55住②(80~127)

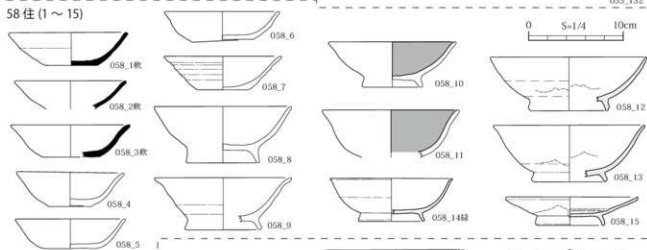


第104図 出土土器類実測図(16)

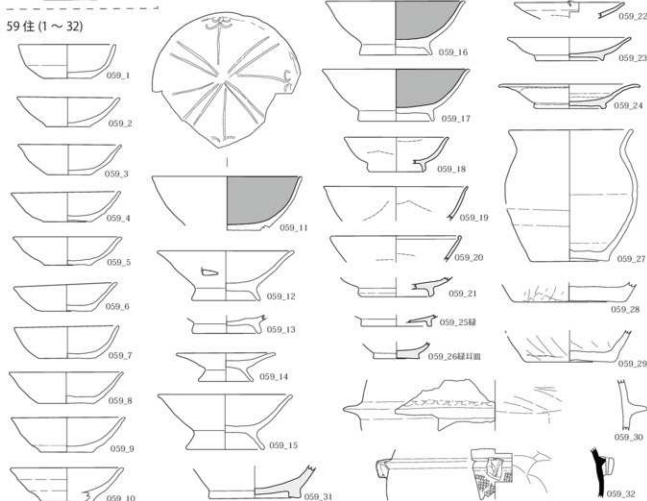
55 住③(128 ~ 133)



58 住(1 ~ 15)

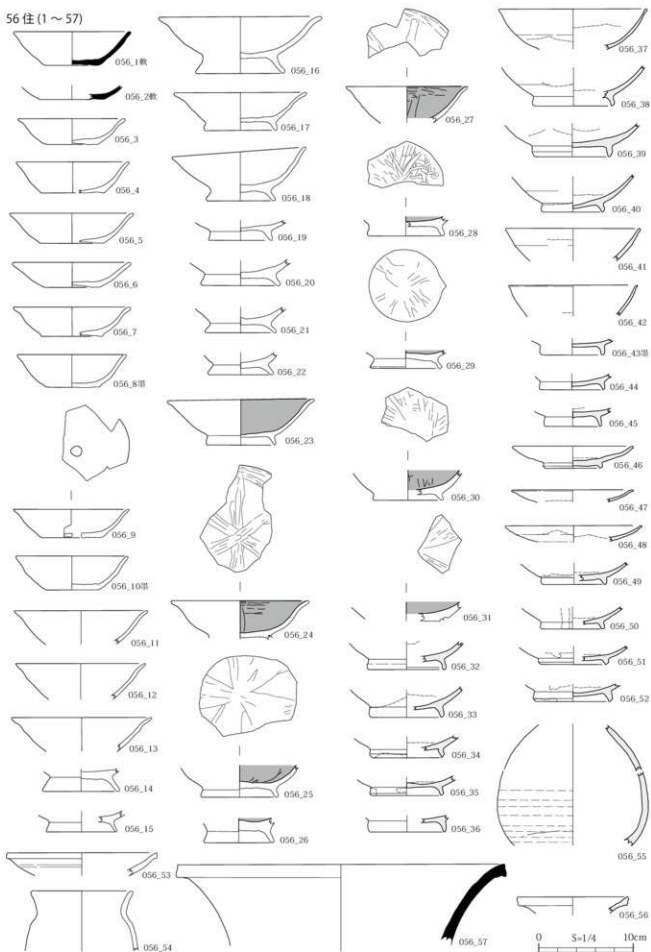


59 住(1 ~ 32)



第 105 図 出土器類実測図(17)

56住(1~57)

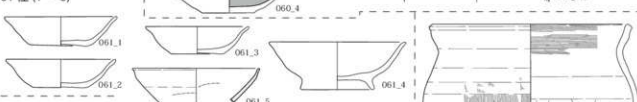


第106図 出土土器類実測図(18)

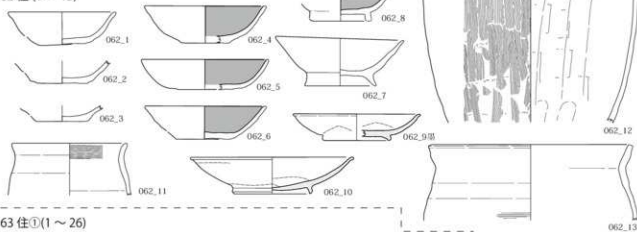
60 住 (1 ~ 8)



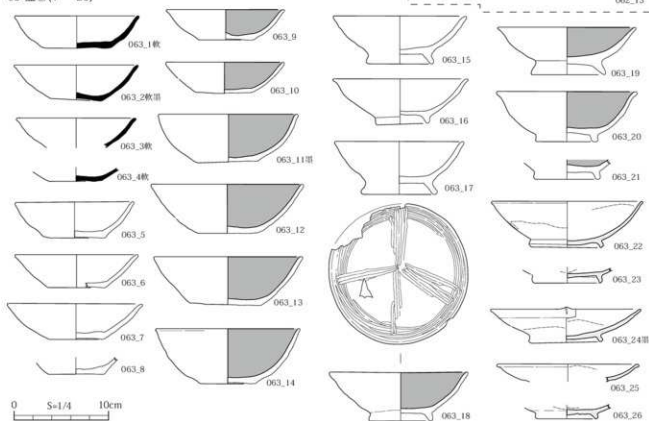
61 住 (1 ~ 5)



62 住 (1 ~ 13)

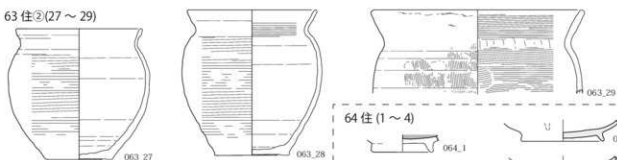


63 住 (1 ~ 26)



第 107 図 出土器類実測図 (19)

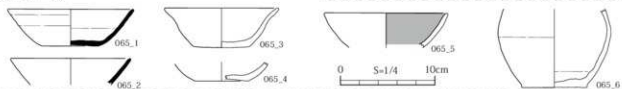
63 住③(27 ~ 29)



64 住(1 ~ 4)



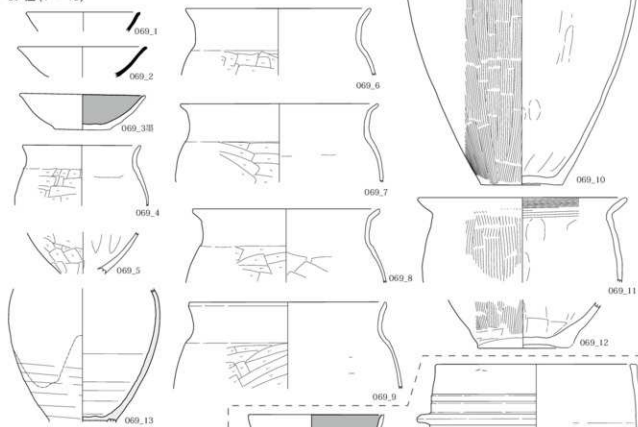
65 住(1 ~ 6)



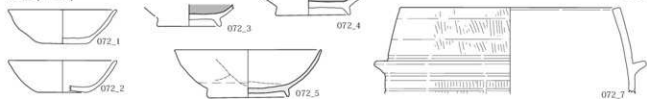
68 住(1 ~ 4)



69 住(1 ~ 13)

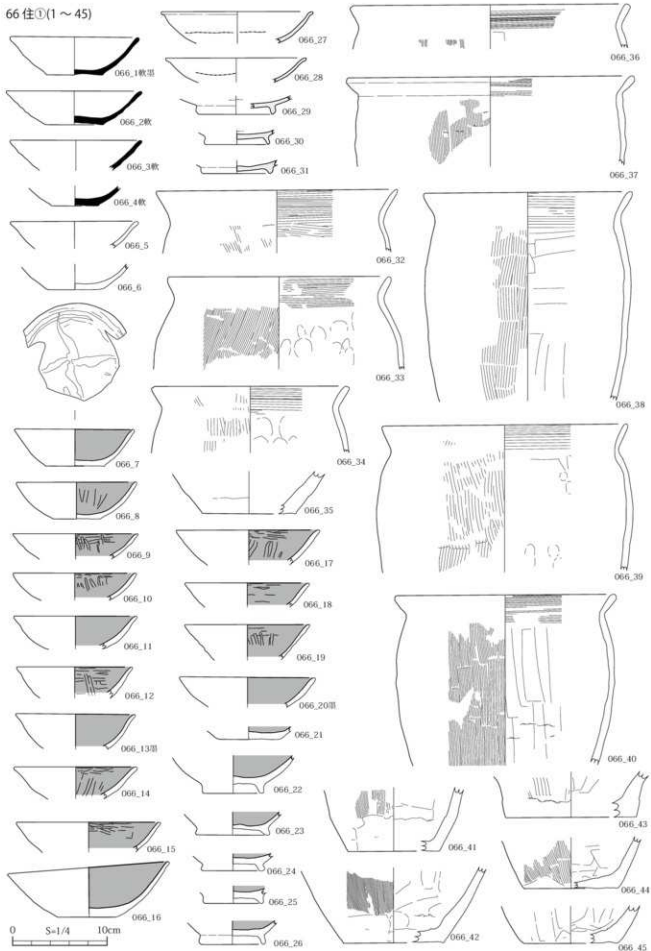


72 住(1 ~ 7)



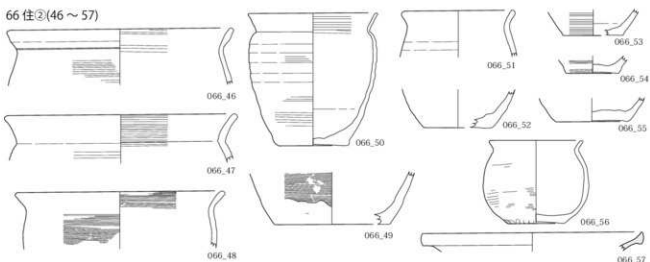
第 108 図 出土土器類実測図 (20)

66住①(1~45)

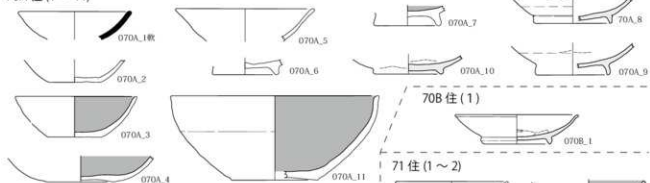


第109図 出土器類実測図(21)

66住②(46~57)



70A住(1~11)



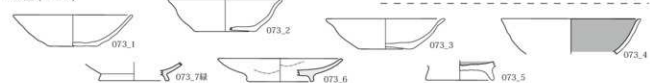
70B住(1)



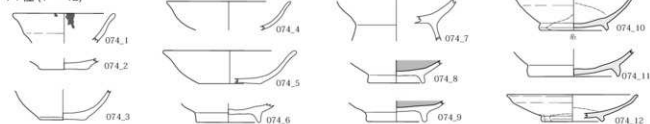
71住(1~2)



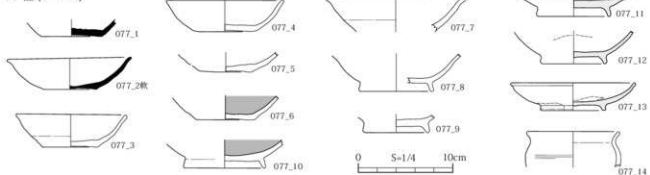
73住(1~7)



74住(1~12)



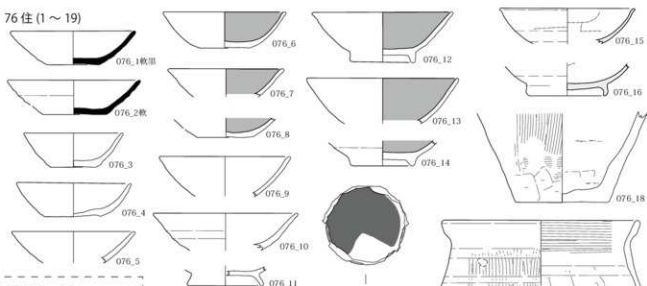
77住(1~14)



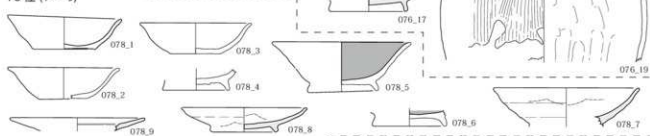
0 5=1/4 10cm

第110図 出土土器類実測図(22)

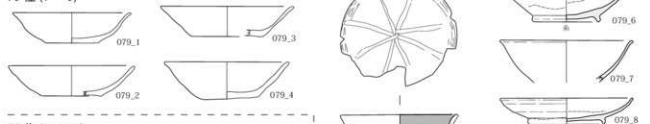
76 住 (1 ~ 19)



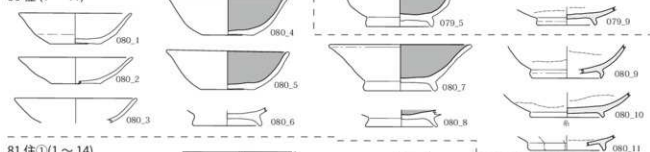
78 住 (1 ~ 9)



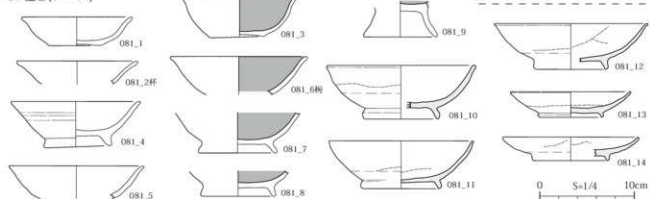
79 住 (1 ~ 9)



80 住 (1 ~ 11)



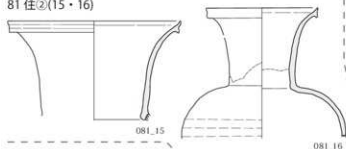
81 住 (1 ~ 14)



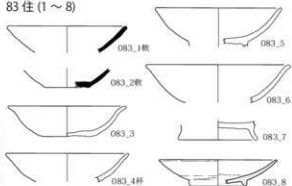
第 111 図 出土土器類実測図 (23)

0 S=1/4 10cm

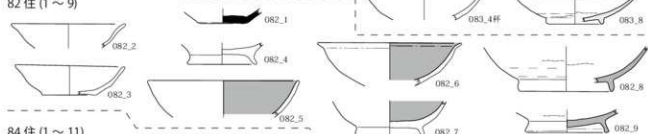
81 住②(15・16)



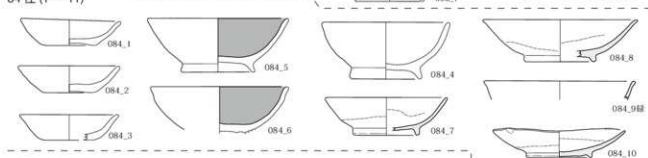
83 住(1~8)



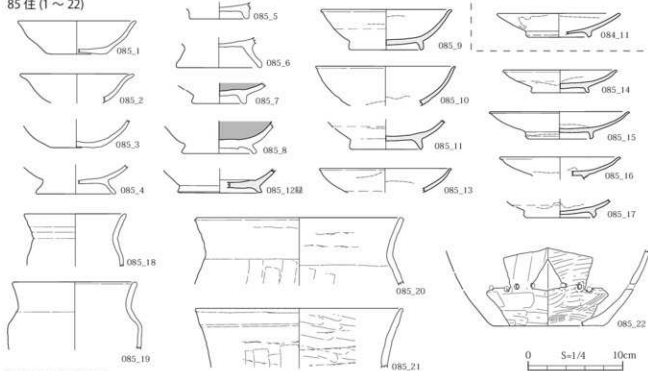
82 住(1~9)



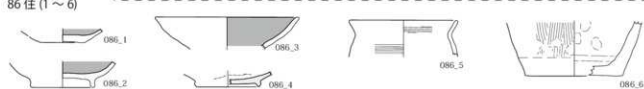
84 住(1~11)



85 住(1~22)

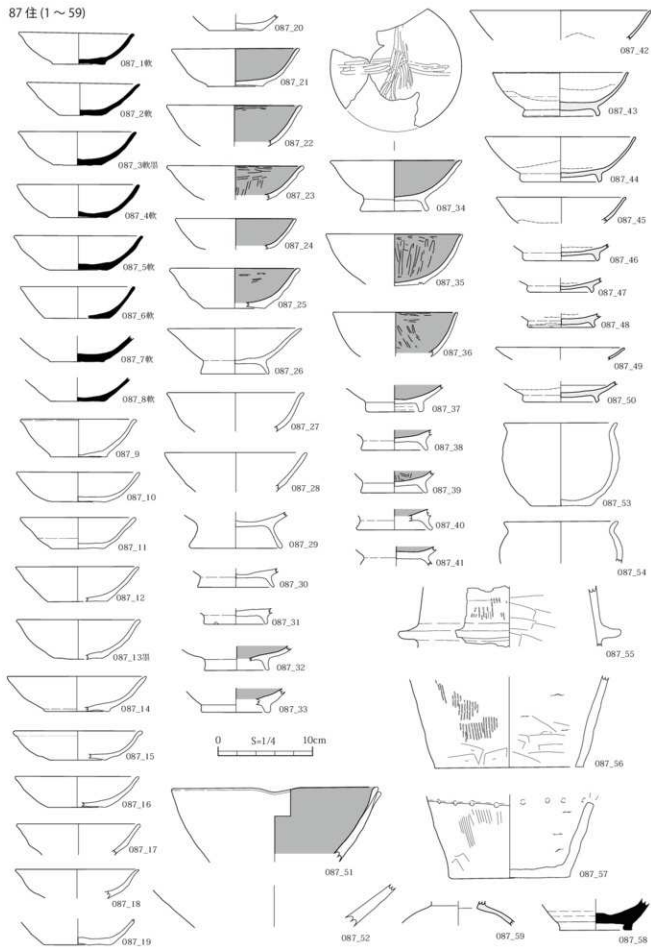


86 住(1~6)



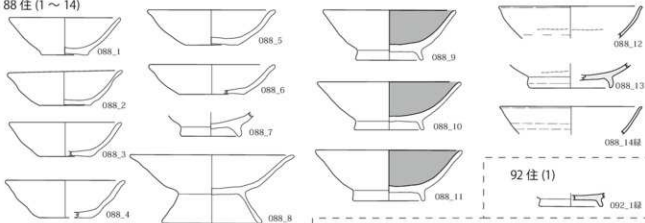
第112図 出土器類実測図(24)

87住(1~59)



第113図 出土器類実測図(25)

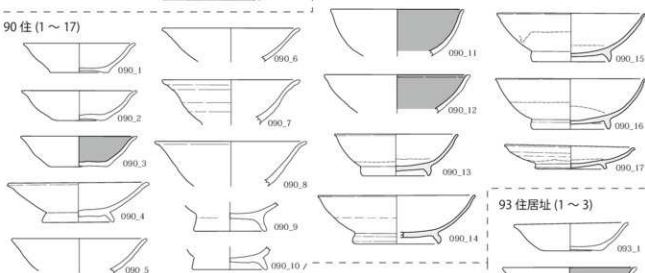
88住(1~14)



92住(1)



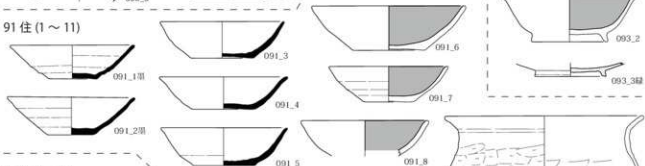
90住(1~17)



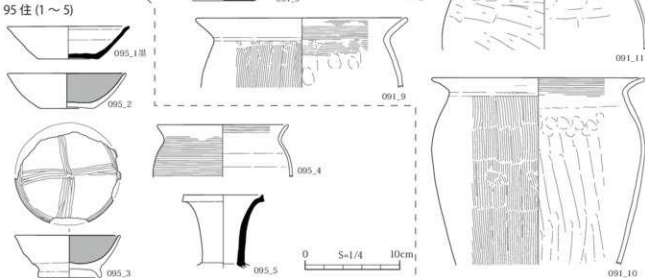
93住居址(1~3)



91住(1~11)

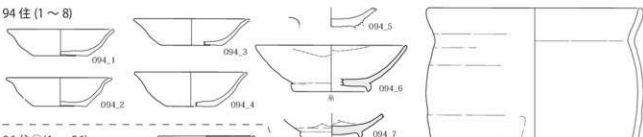


95住(1~5)

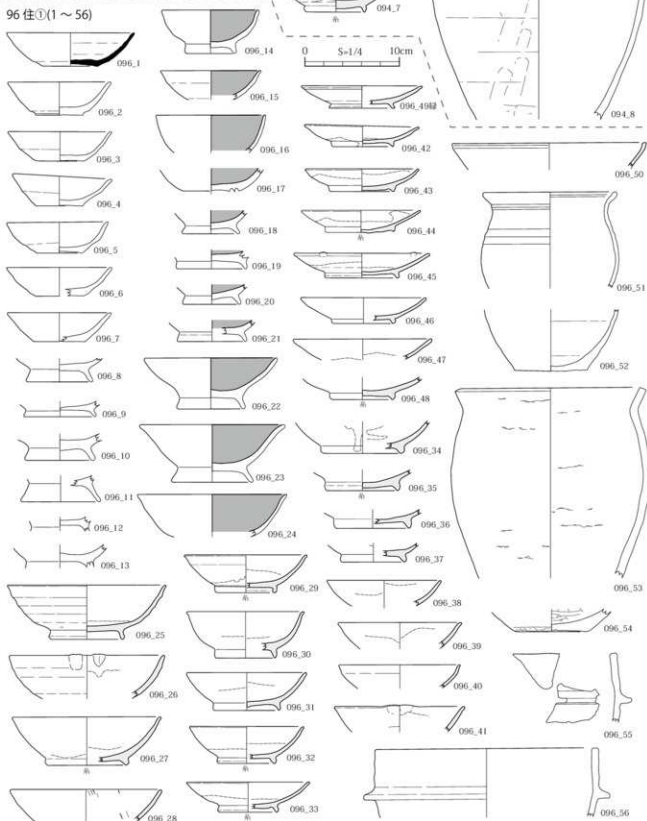


第114図 出土土器類実測図(26)

94住(1~8)

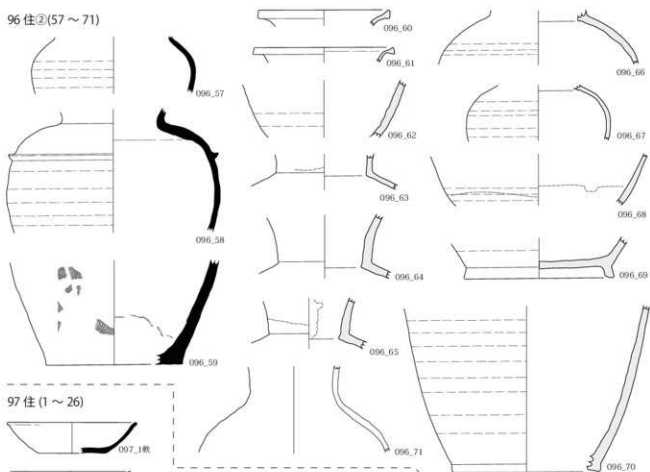


96住①(1~56)

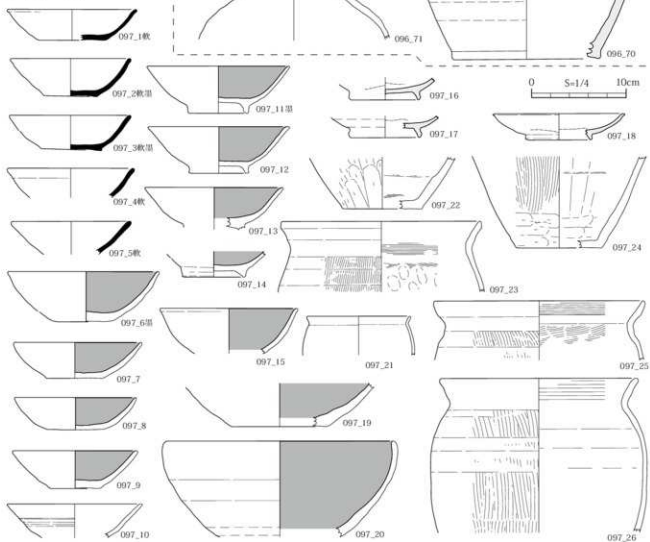


第115図 出土土器類実測図(27)

96 住②(57~71)

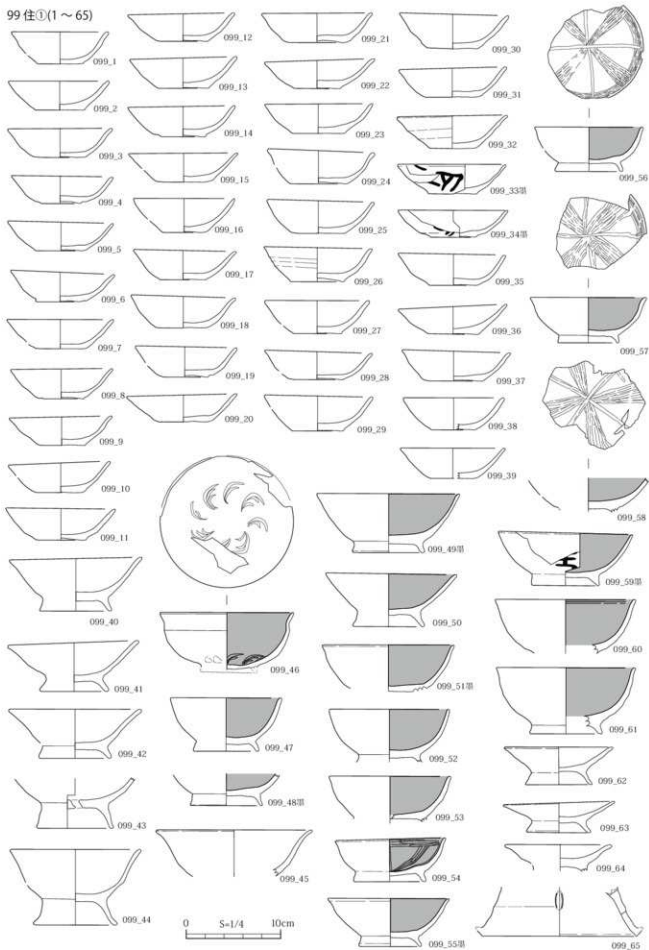


97 住(1~26)



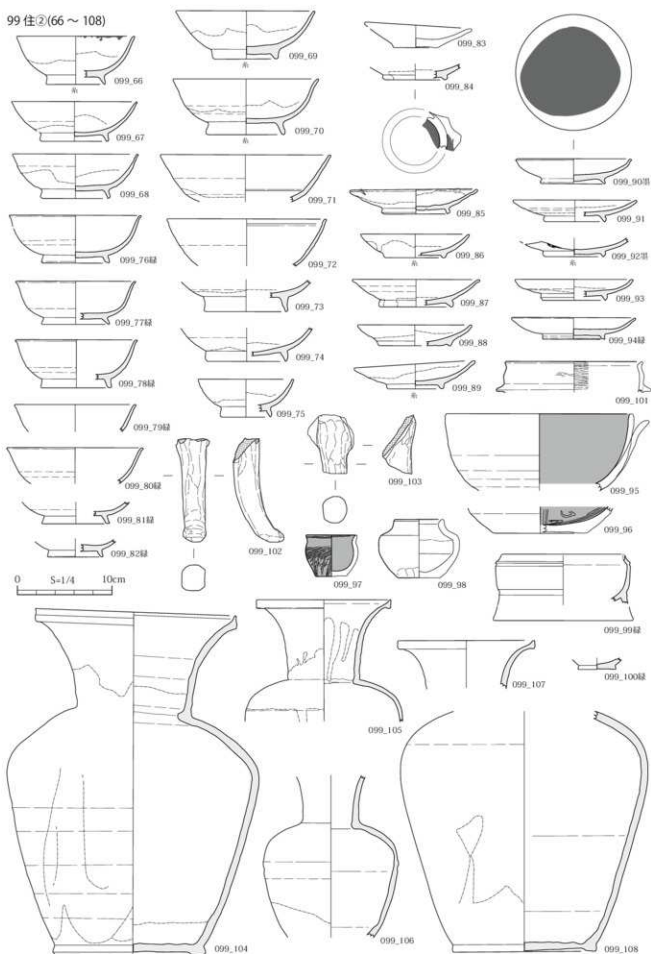
第116图 出土器類実測图(28)

99住①(1~65)



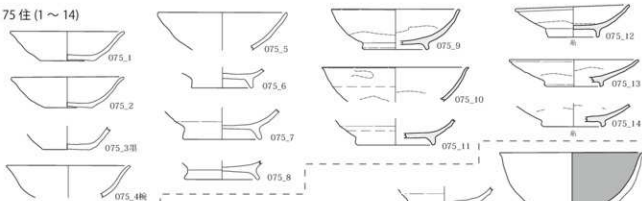
第117図 出土器類実測図(29)

99住②(66~108)

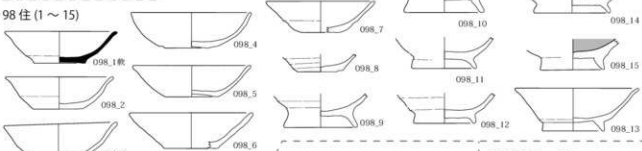


第118图 出土器类实测图(30)

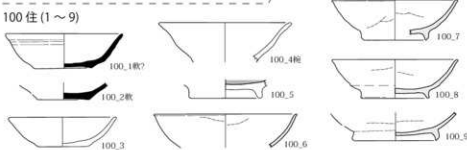
75住(1~14)



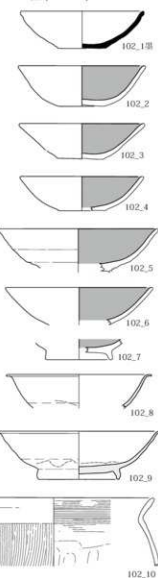
98住(1~15)



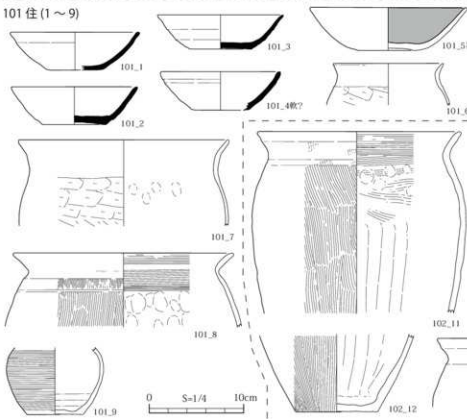
100住(1~9)



102住(1~12)



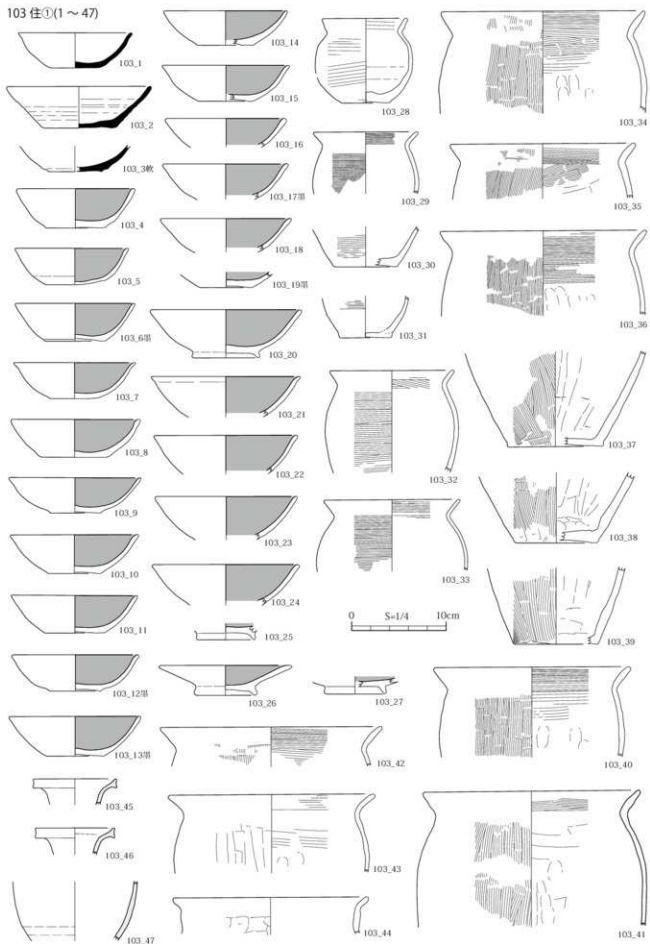
101住(1~9)



0 S=1/4 10cm

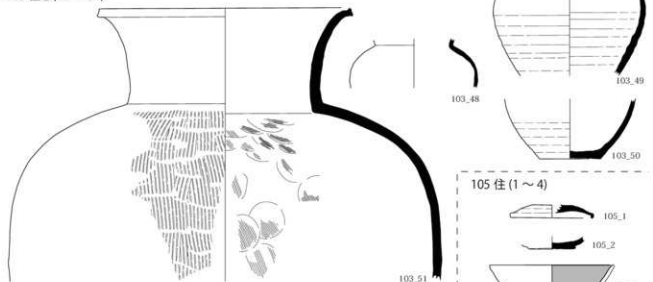
第119図 出土土器類実測図(31)

103住①(1~47)

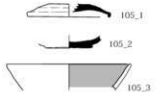


第120図 出土土器類実測図(32)

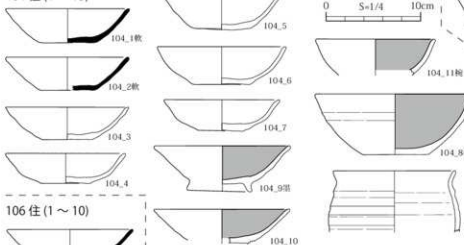
103 住②(48~51)



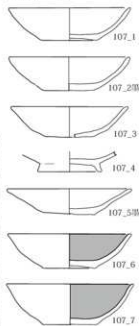
105 住(1~4)



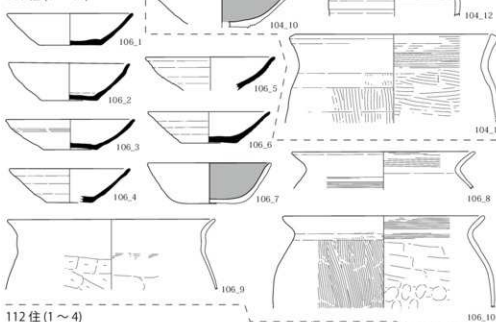
104 住(1~13)



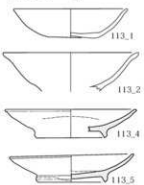
107 住(1~7)



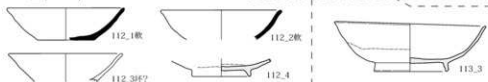
106 住(1~10)



113 住(1~5)

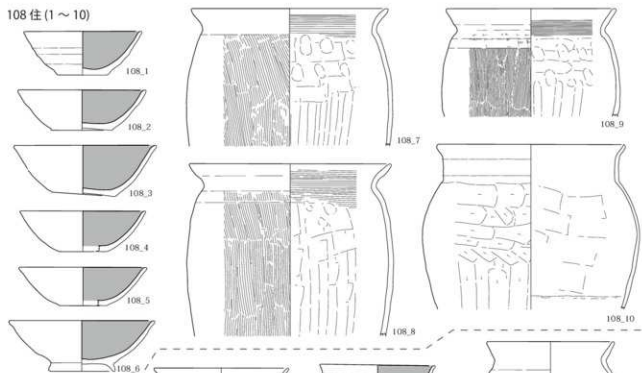


112 住(1~4)

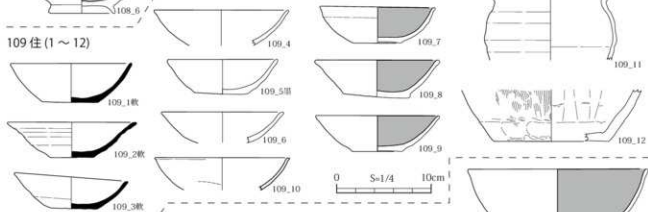


第 121 図 出土土器類実測図(33)

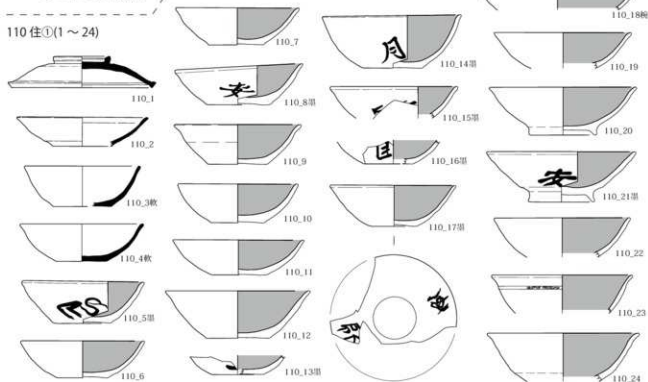
108住(1~10)



109住(1~12)

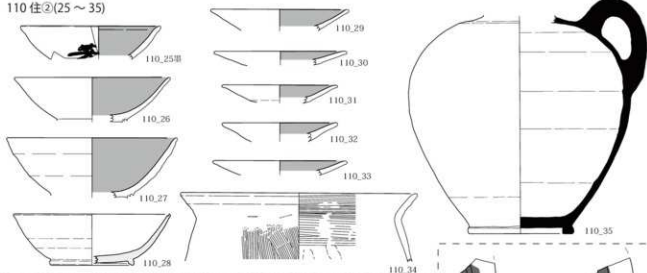


110住①(1~24)

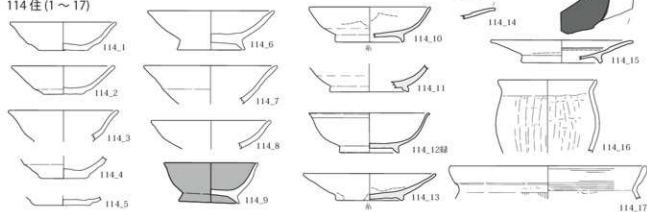


第122図 出土器類実測図(34)

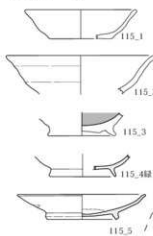
110住②(25~35)



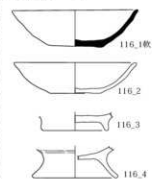
114住(1~17)



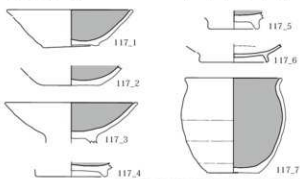
115住(1~5)



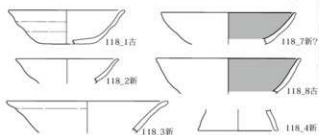
116住(1~4)



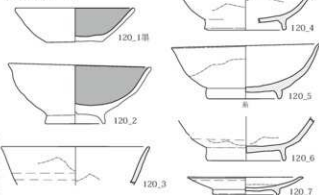
117住(1~7)



118住(1~8)

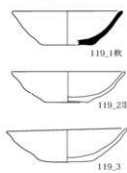


120住(1~7)

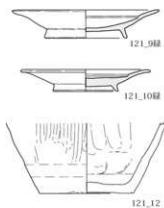
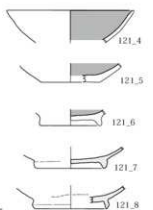
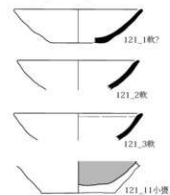


第123図 出土器類実測図(35)

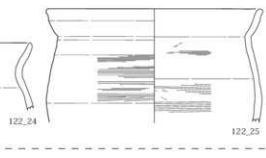
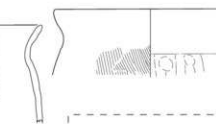
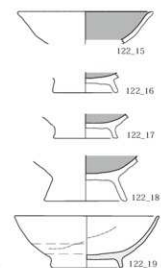
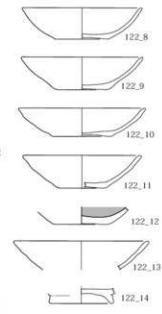
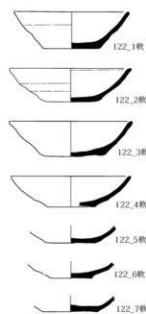
119住(1~3)



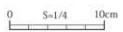
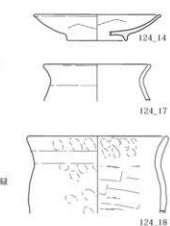
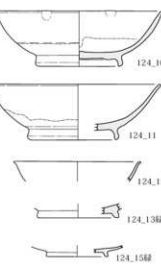
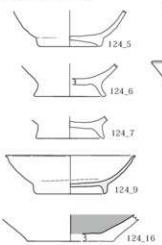
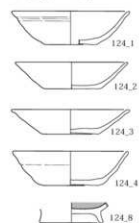
121住(1~12)



122住(1~25)

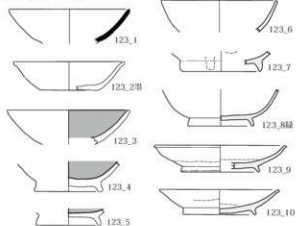


124住(1~18)



第124図 出土土器類実測図(36)

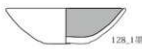
123 住 (1 ~ 10)



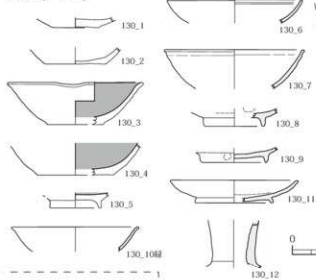
126 住 (1)



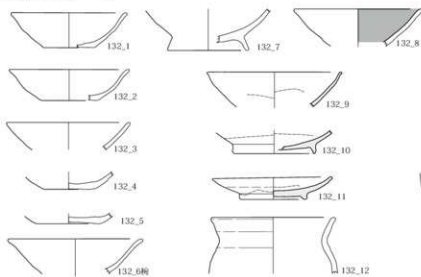
128 住 (1)



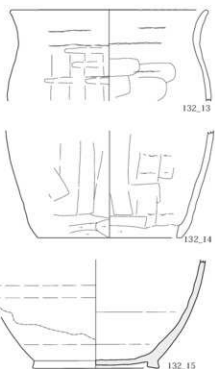
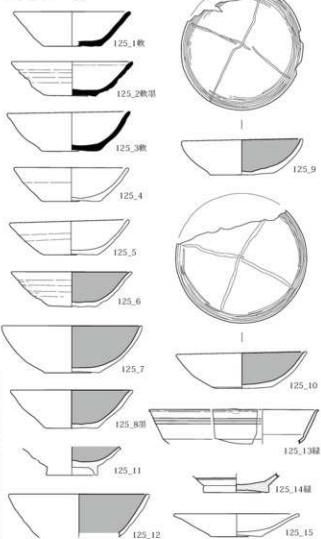
130 住 (1 ~ 12)



2 次 132 住 (1 ~ 15)

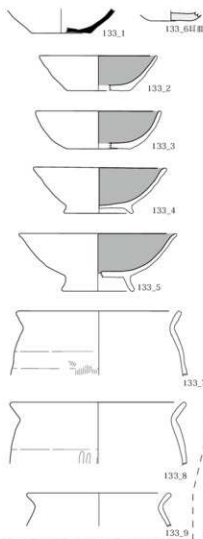


125 住 (1 ~ 15)

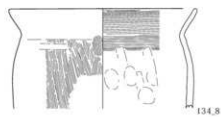
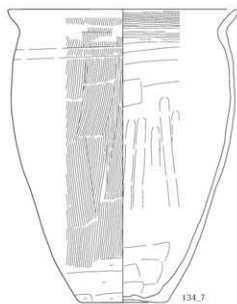
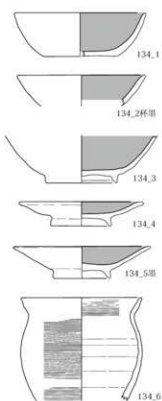


第 125 図 出土土器類実測図 (37)

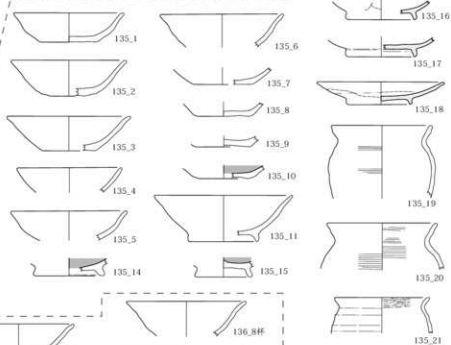
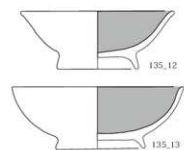
133住(1~9)



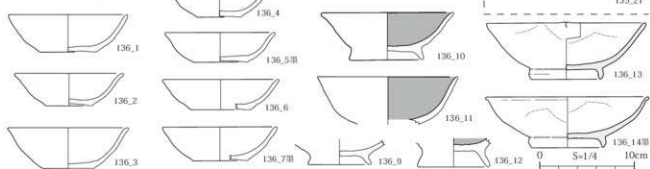
134住(1~8)



135住(1~21)

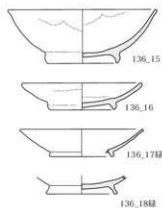


136住①(1~14)

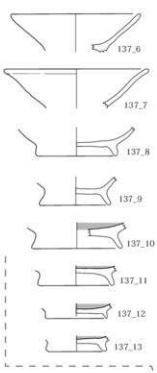
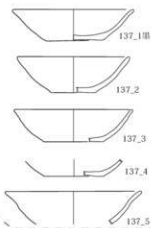


第126図 出土器類実測図(38)

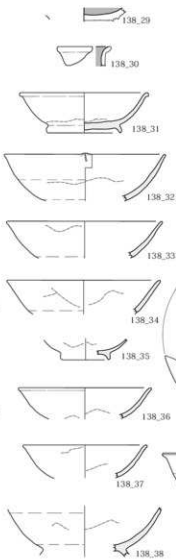
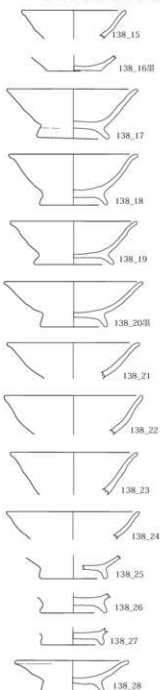
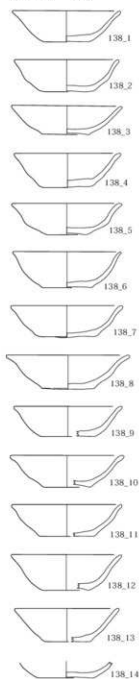
136住②(16~18)



137住(1~17)

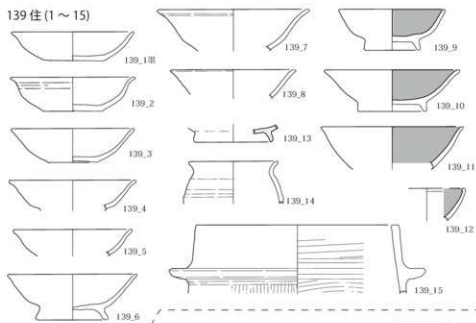


138住(1~45)

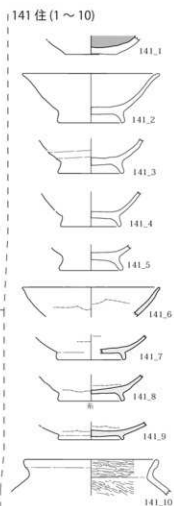


第127図 出土土器類実測図(39)

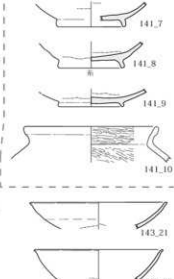
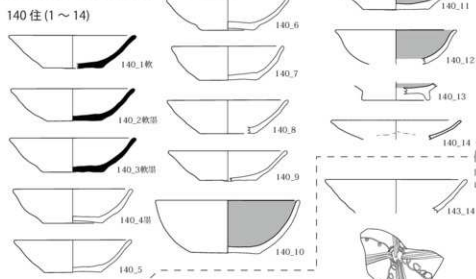
139住(1~15)



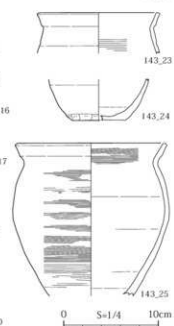
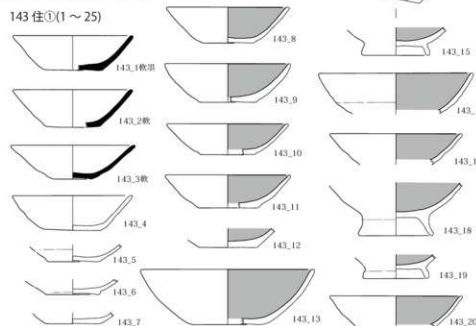
141住(1~10)



140住(1~14)

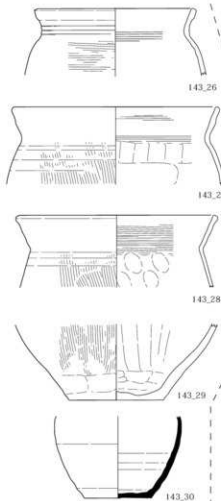


143住①(1~25)

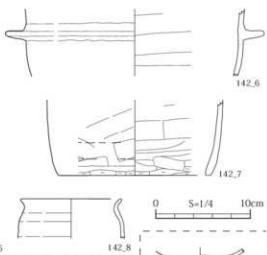
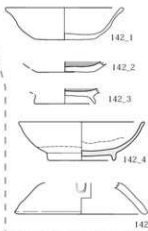


第128図 出土土器類実測図(40)

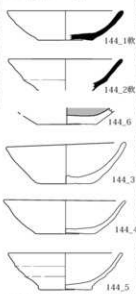
143 住②(26~30)



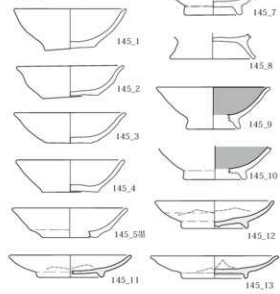
142 住(1~8)



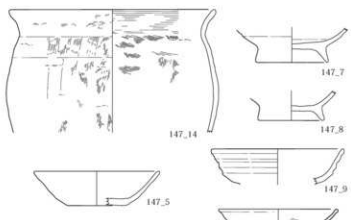
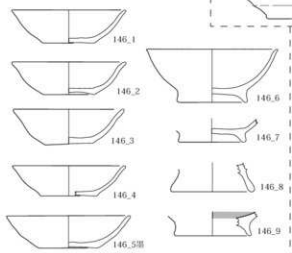
144 住(1~6)



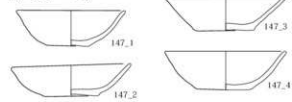
145 住(1~13)



146 住(1~9)

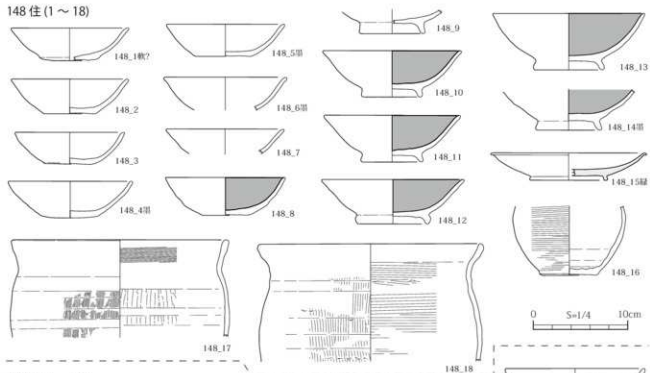


147 住(1~14)

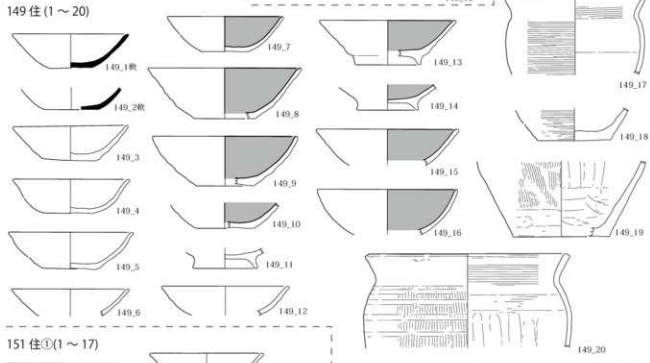


第 129 図 出土土器類実測図(41)

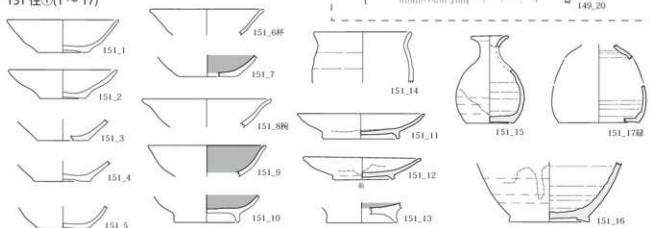
148住(1~18)



149住(1~20)

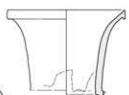
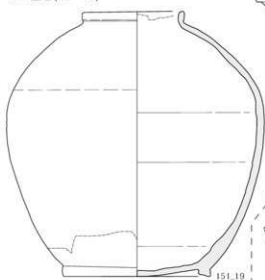


151住①(1~17)

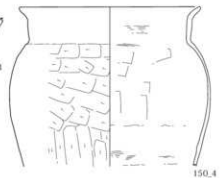
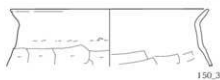
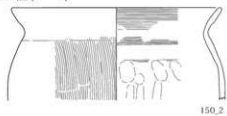


第130図 出土土器実測図(42)

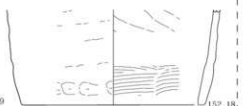
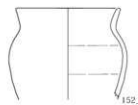
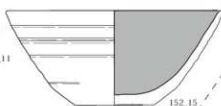
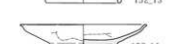
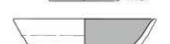
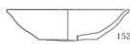
151 住②(18・19)



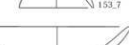
150 住(1~5)



152 住(1~19)



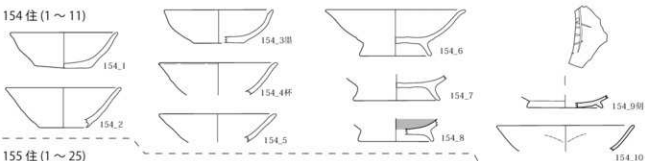
153 住(1~10)



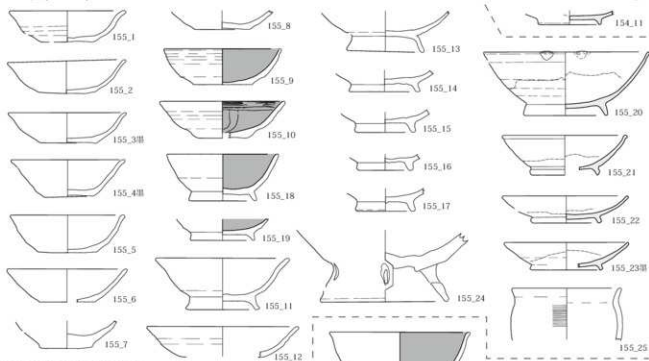
0 S=1/4 10cm

第 131 図 出土土器類実測図(43)

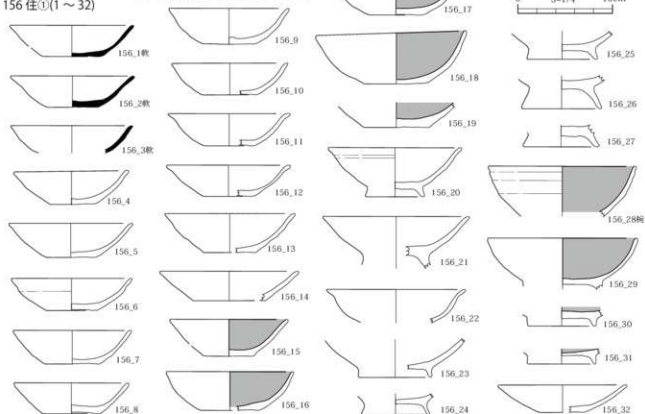
154住(1~11)



155住(1~25)

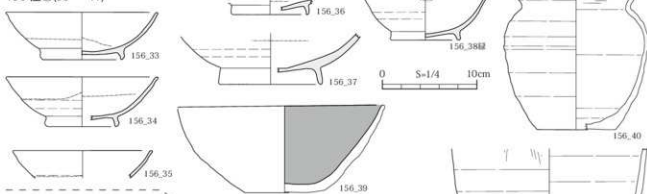


156住①(1~32)

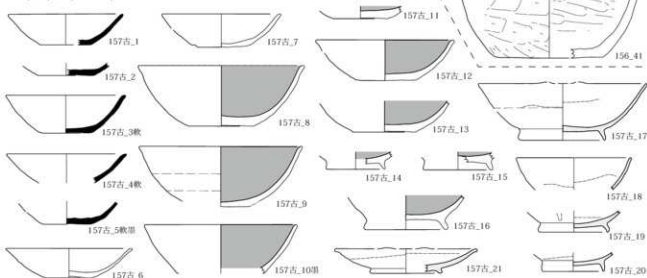


第132图 出土土器类实测图(44)

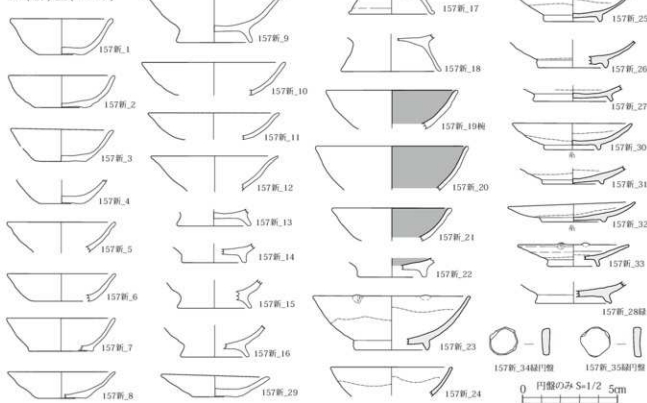
156 住②(33~41)



157 (古) 住(1~21)

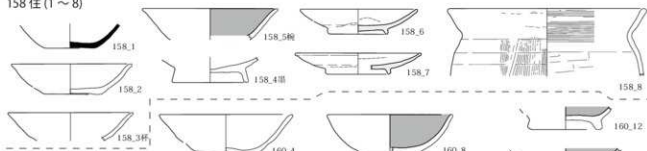


157 (新) 住(1~35)

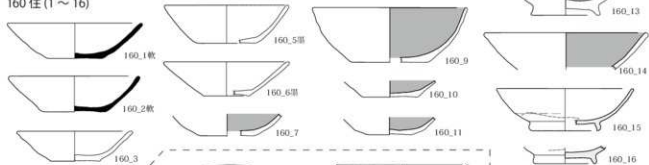


第 133 図 出土器類実測図(45)

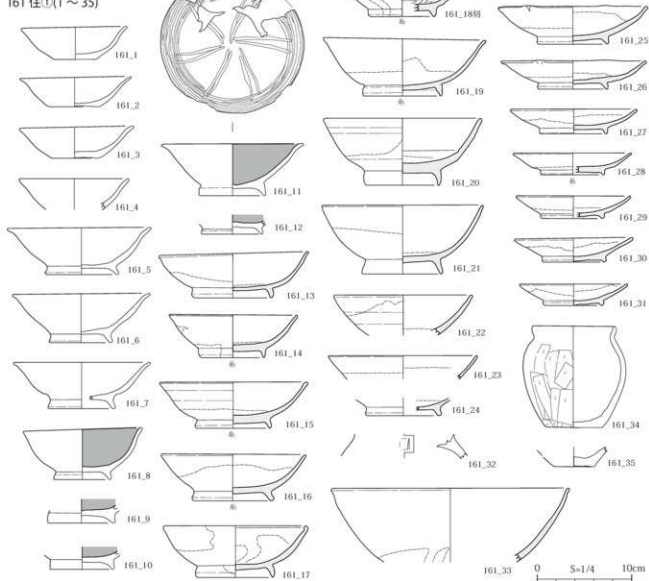
158住(1~8)



160住(1~16)

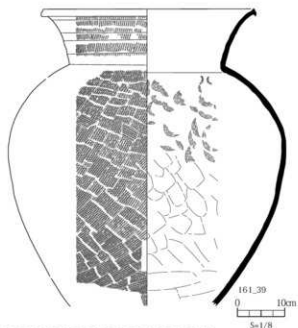
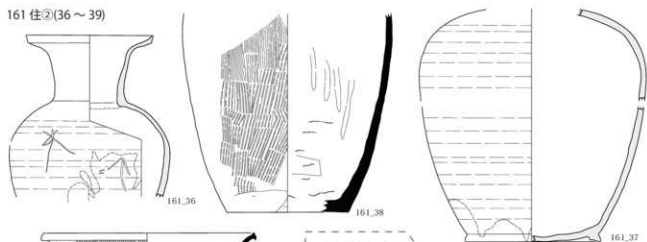


161住①(1~35)

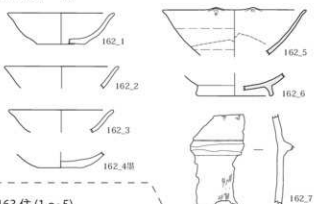


第134図 出土土器実測図(46)

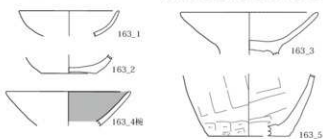
161 住②(36~39)



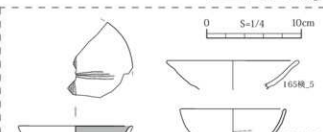
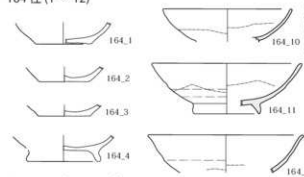
162 住(1~7)



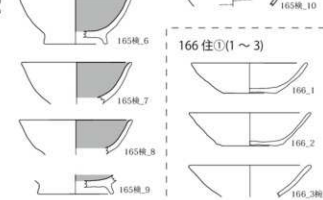
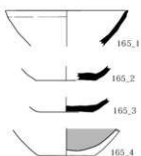
163 住(1~5)



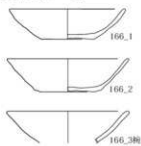
164 住(1~12)



165 住(1~10)

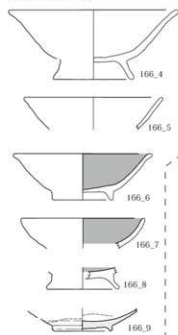


166 住①(1~3)

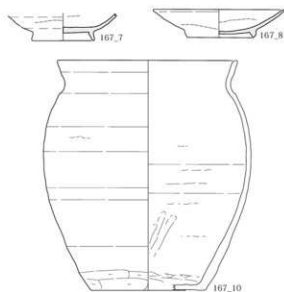
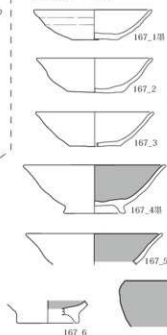


第 135 図 出土器類実測図(47)

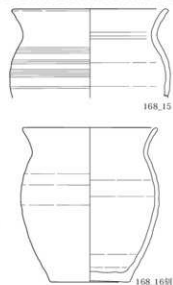
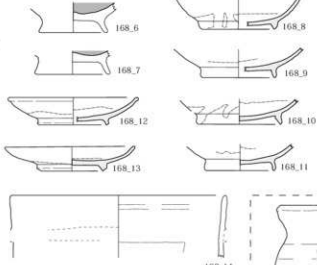
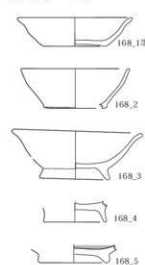
166住②(4~9)



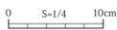
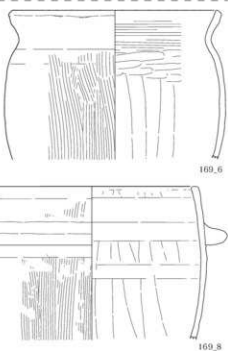
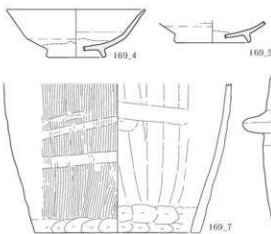
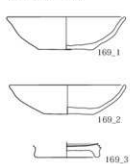
167住(1~10)



168住(1~16)

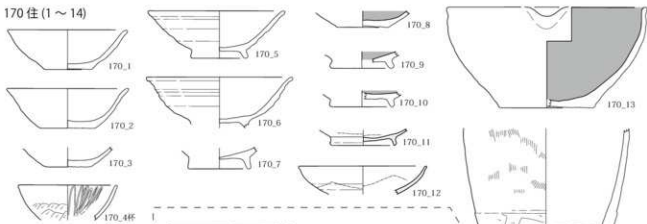


169住(1~8)

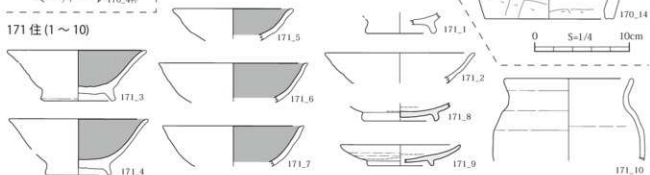


第136図 出土器類実測図(48)

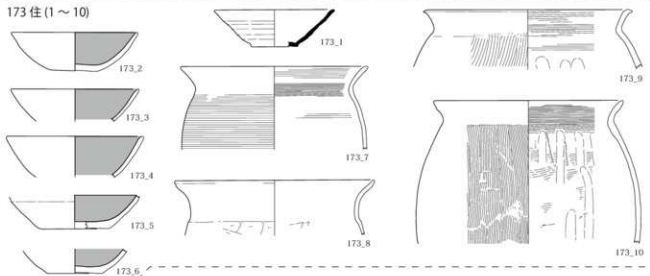
170住(1~14)



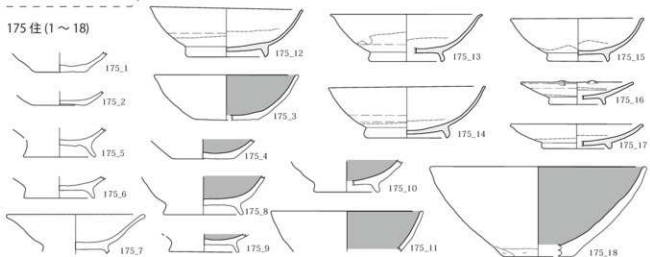
171住(1~10)



173住(1~10)

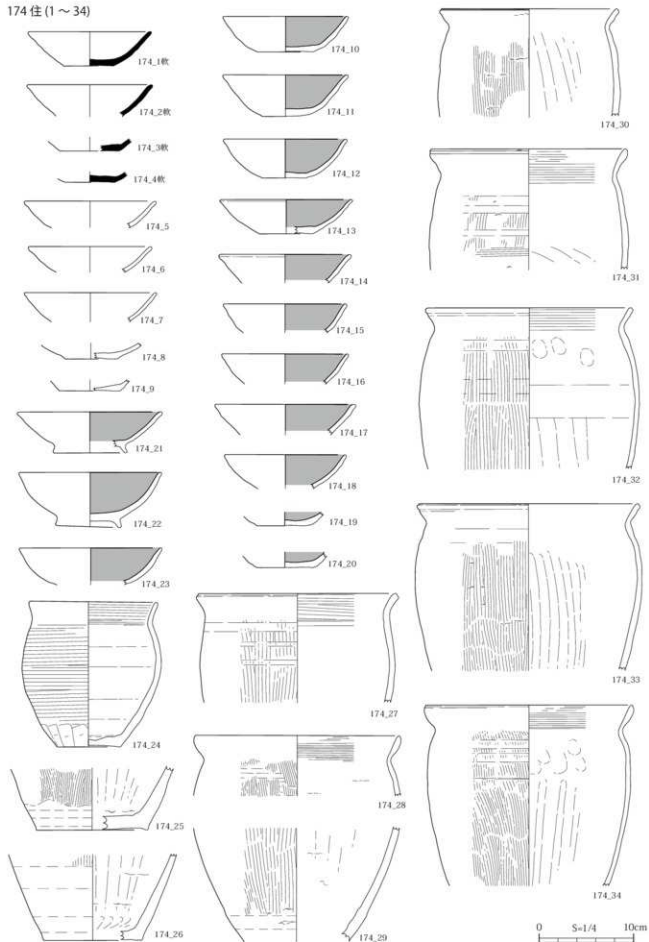


175住(1~18)



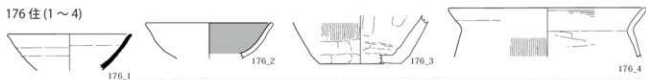
第137図 出土土器類実測図(49)

174住(1~34)

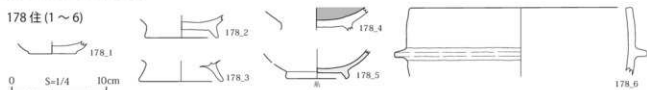


第138图 出土土器类实测图(50)

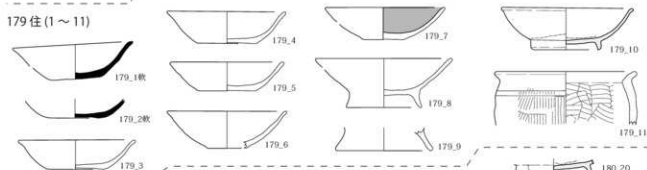
176住(1~4)



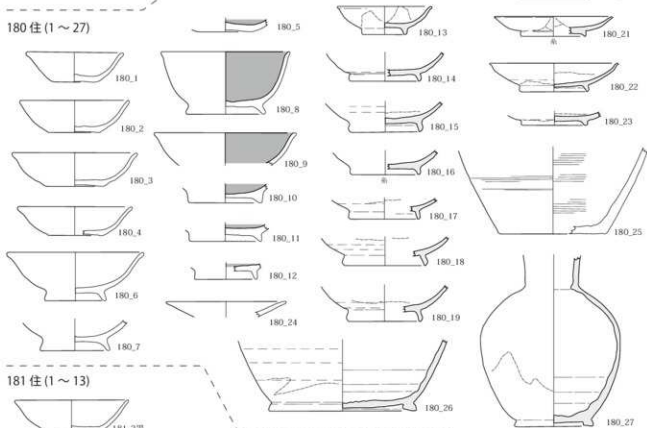
178住(1~6)



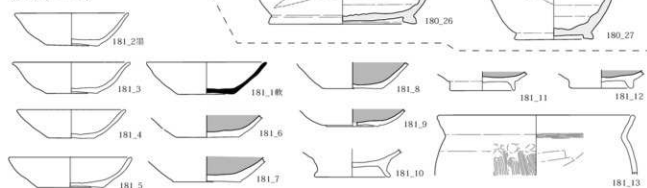
179住(1~11)



180住(1~27)

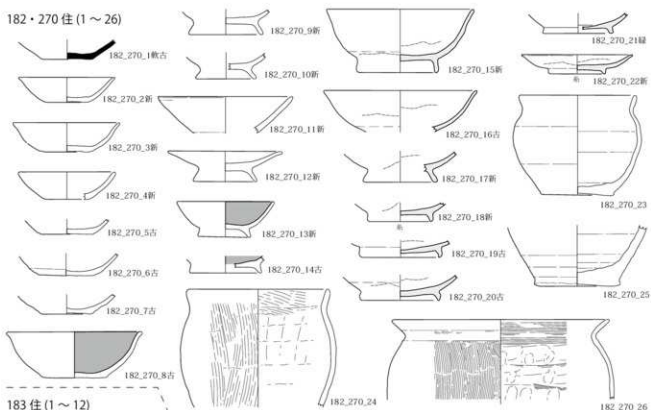


181住(1~13)

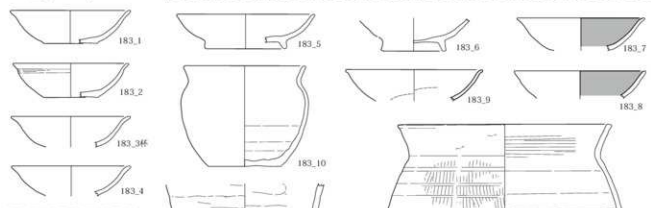


第139図 出土土器実測図(51)

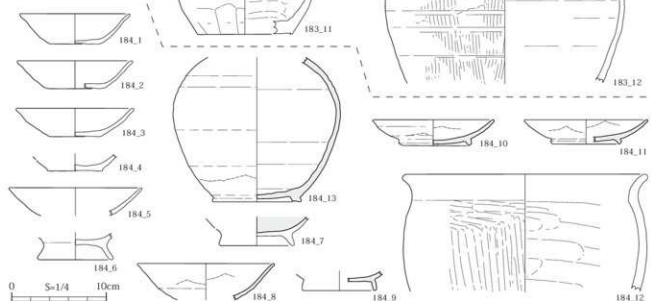
182・270 住 (1 ~ 26)



183 住 (1 ~ 12)

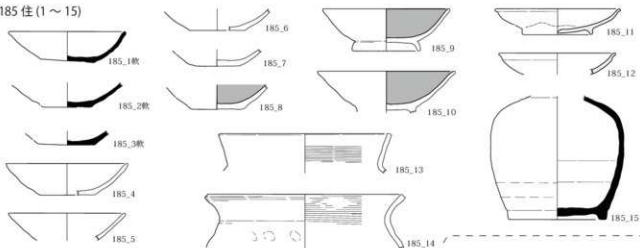


184 住 (1 ~ 13)

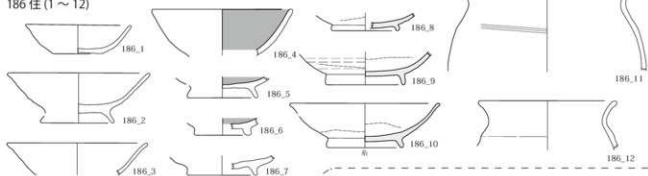


第 140 図 出土器類実測図 (52)

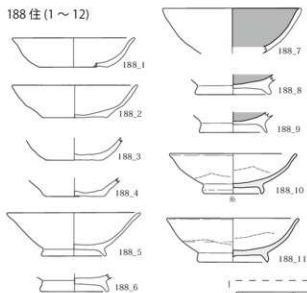
185住(1~15)



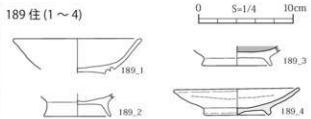
186住(1~12)



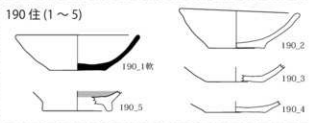
188住(1~12)



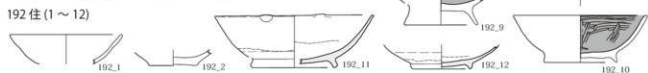
189住(1~4)



190住(1~5)

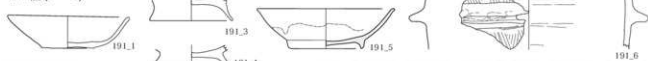


192住(1~12)

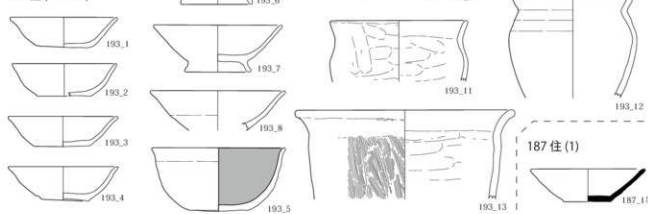


第141図 出土土器類実測図(53)

191住(1~6)



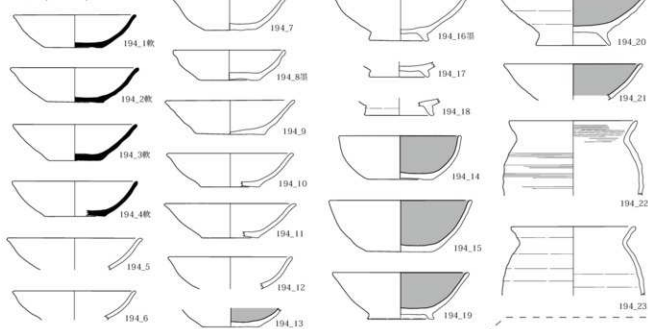
193住(1~13)



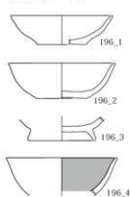
187住(1)



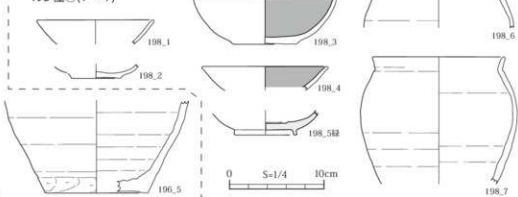
194住(1~23)



196住(1~5)

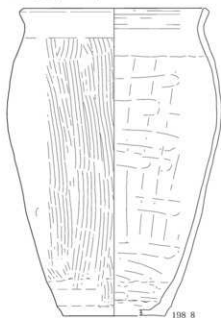


198住①(1~7)



第142図 出土土器類実測図(54)

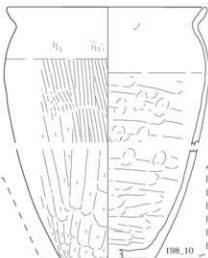
198住②(8~10)



198.8

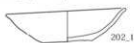


198.9



198.10

202住(1~8)



202.1



202.2



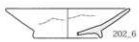
202.3



202.4



202.5

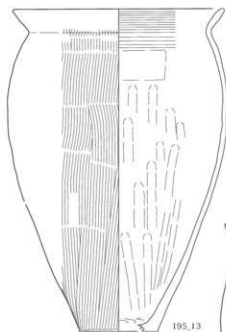
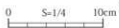


202.6



202.7

195住(1~18)



195.13



195.1



195.2



195.3



202.8



195.7



195.8



195.4



195.5



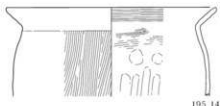
195.9



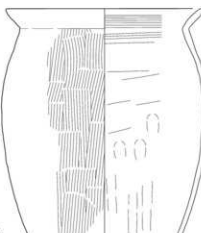
195.6



195.10



195.14



195.15



195.7



195.4



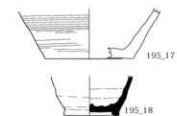
195.5



195.6



195.11



195.17



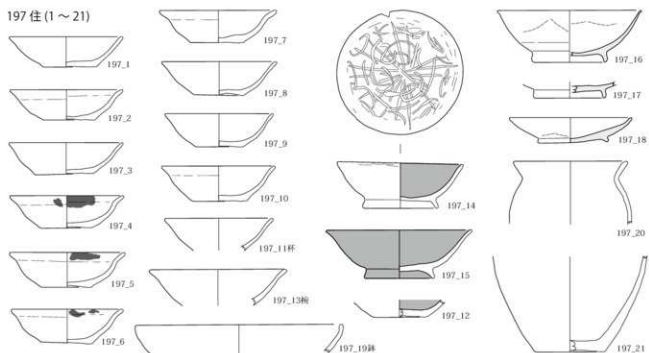
195.16



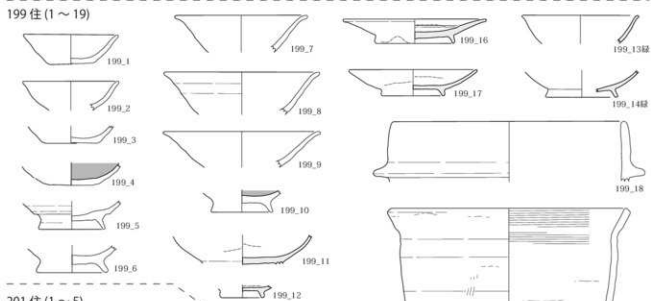
195.12

第143図 出土器類実測図(55)

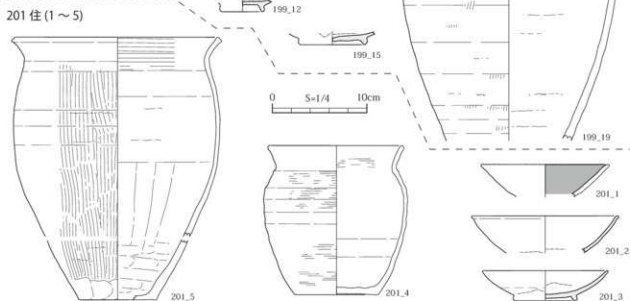
197住(1~21)



199住(1~19)

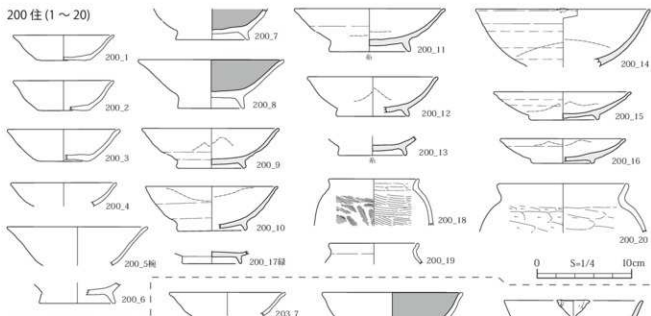


201住(1~5)

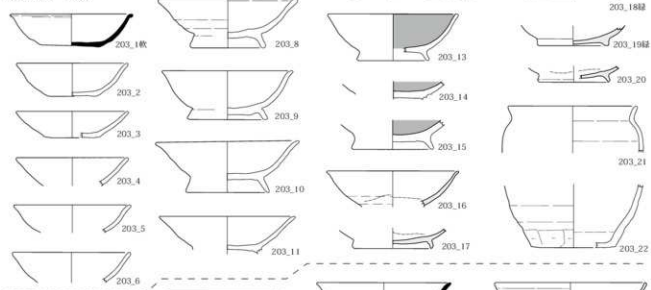


第144図 出土器類実測図(56)

200 住 (1 ~ 20)



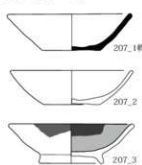
203 住 (1 ~ 22)



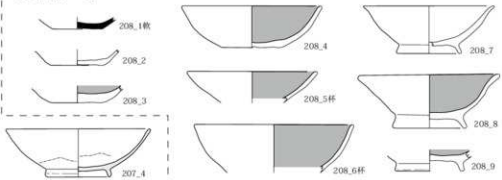
205 住 (1 ~ 8)



207 住 (1 ~ 4)

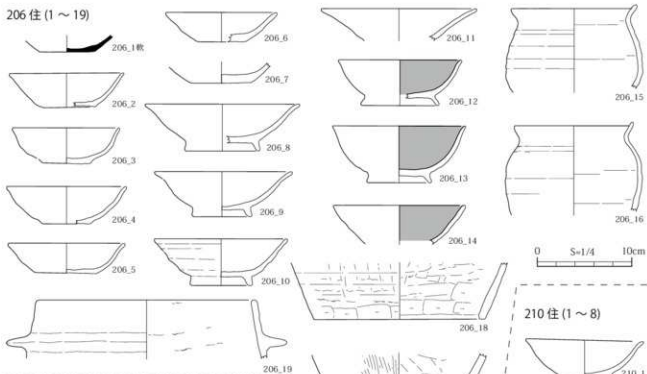


208 住 (1 ~ 9)

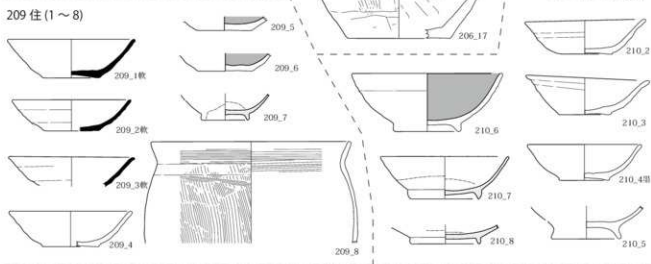


第 145 图 出土器類実測図 (57)

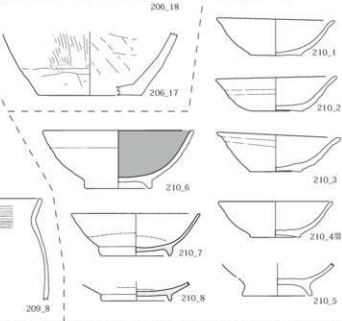
206住(1~19)



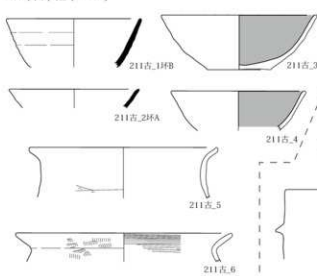
209住(1~8)



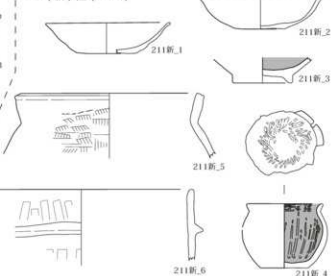
210住(1~8)



211(古)住(1~6)

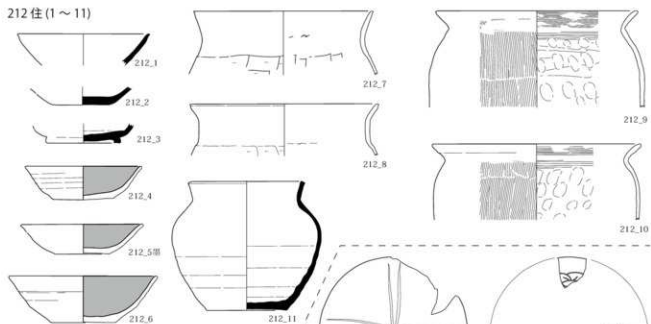


211(新)住(1~6)

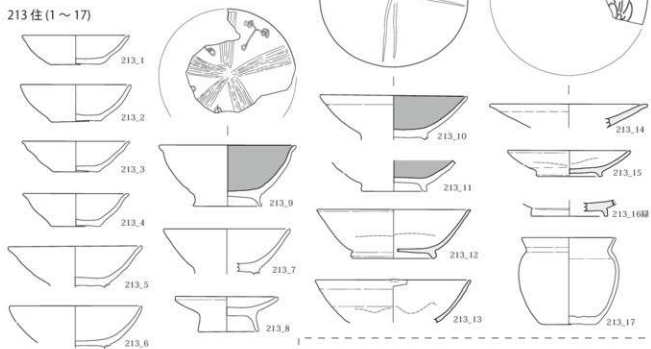


第146图 出土器类实测图(58)

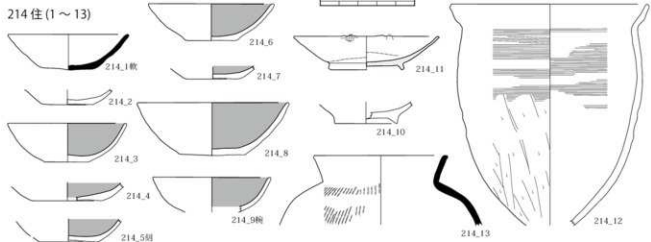
212住(1~11)



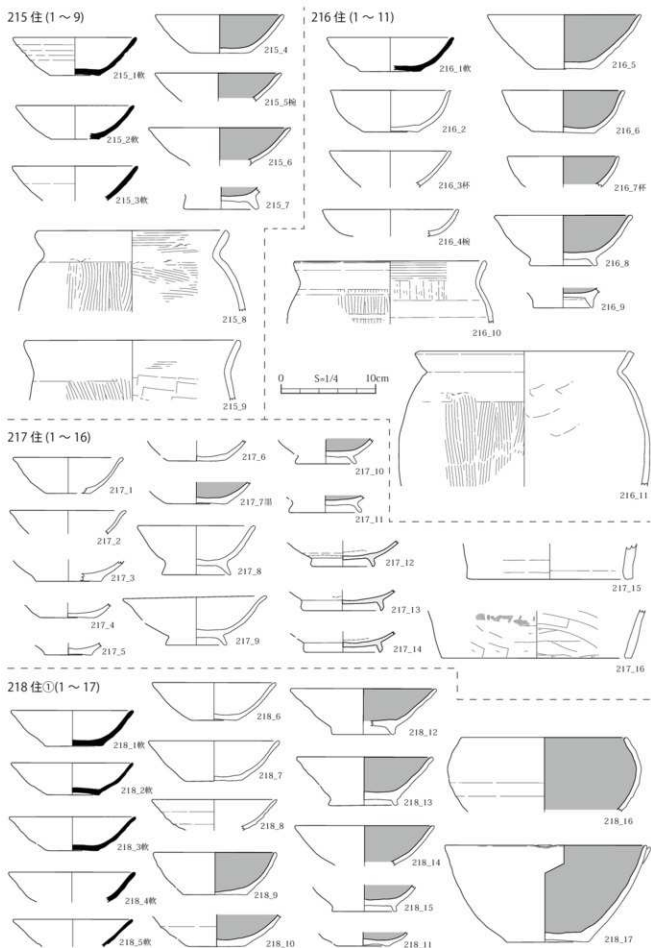
213住(1~17)



214住(1~13)

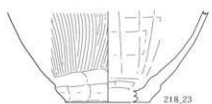
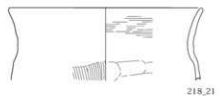
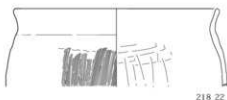
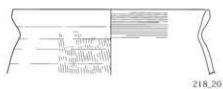
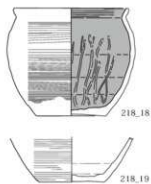


第147图 出土土器类实测图(59)

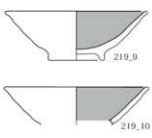
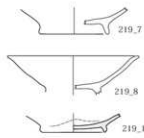
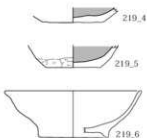
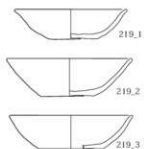


第148図 出土土器類実測図(60)

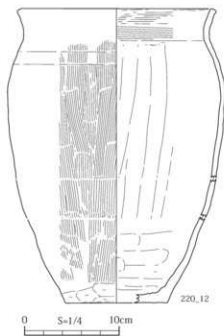
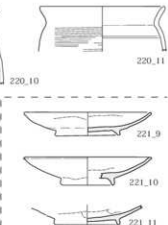
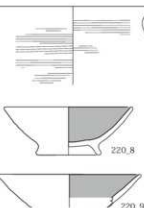
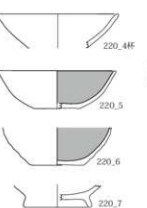
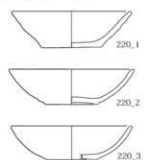
218住②(18~23)



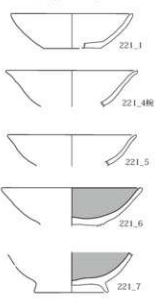
219住(1~11)



220住(1~12)

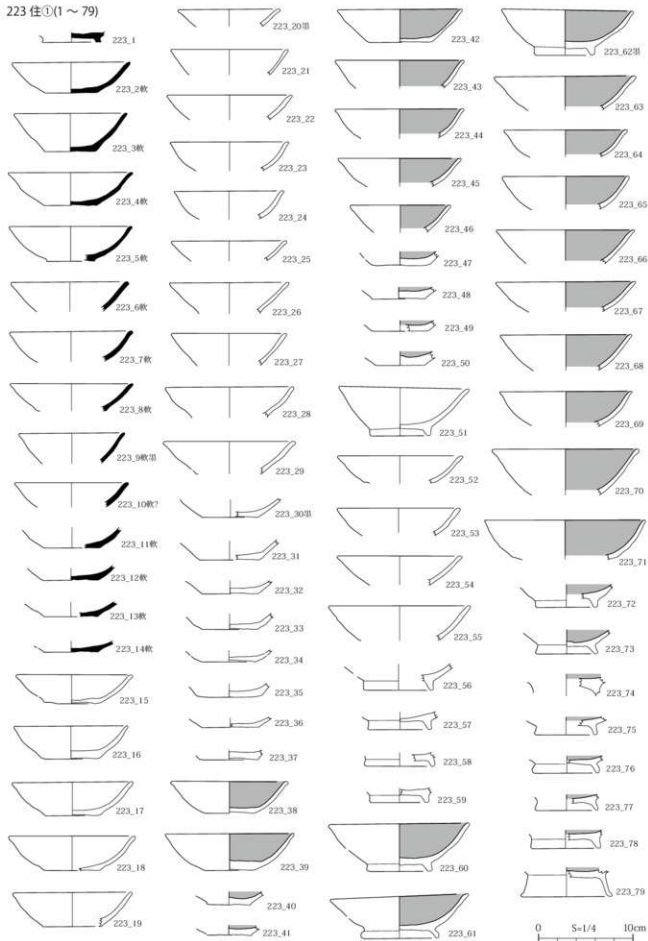


221住(1~13)



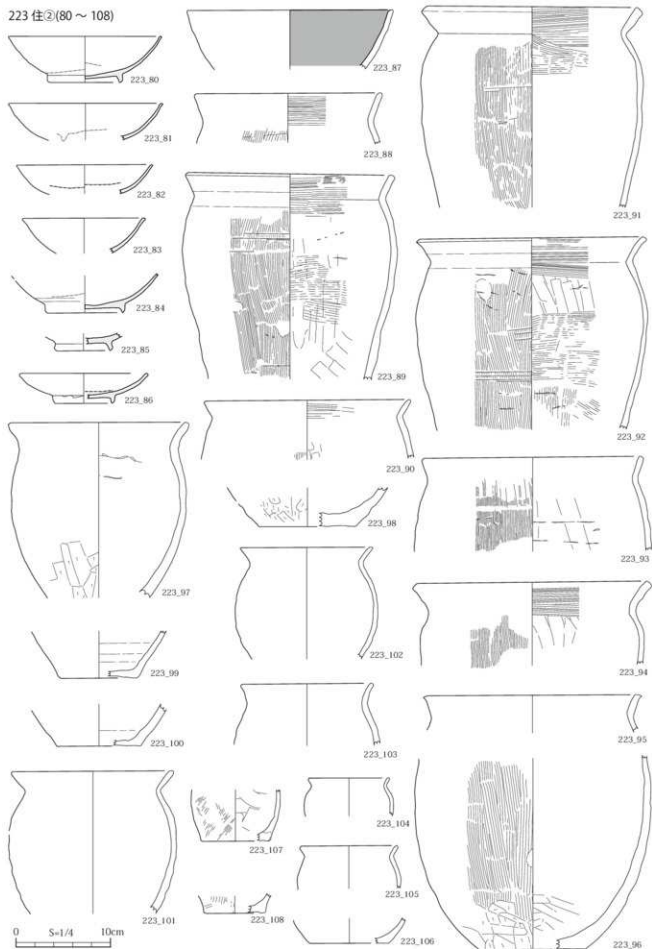
第149図 出土器類実測図(61)

223住①(1~79)



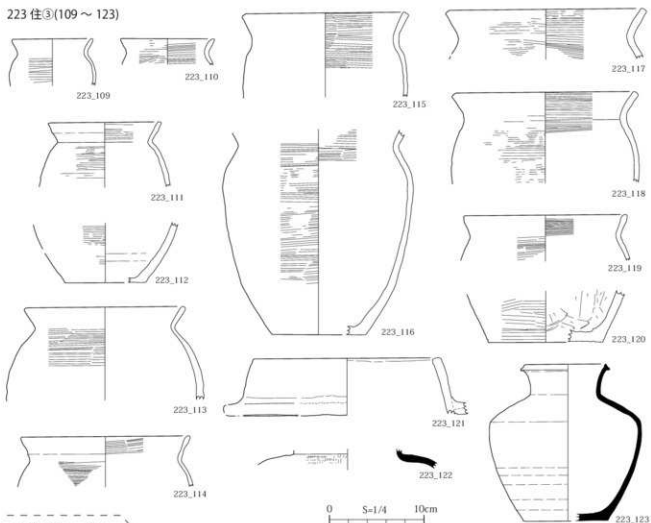
第150図 出土土器類実測図(62)

223 住②(80 ~ 108)

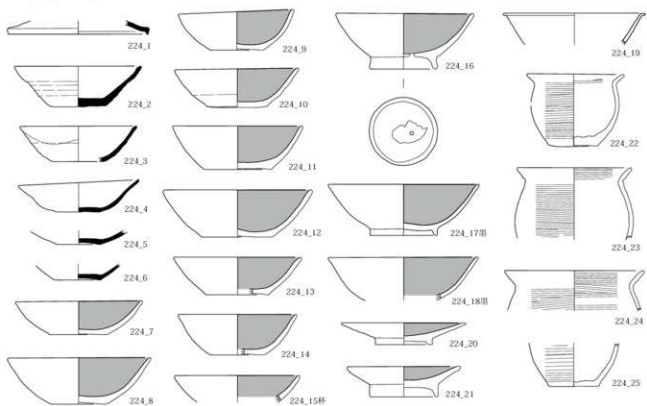


第151図 出土器類実測図(63)

223 住③(109~123)

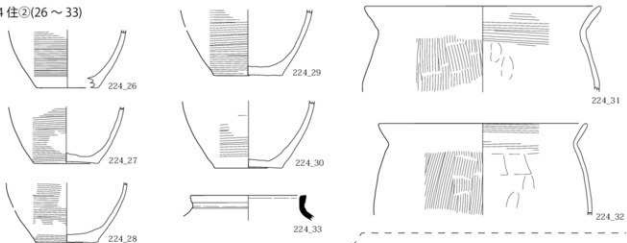


224 住①(1~25)

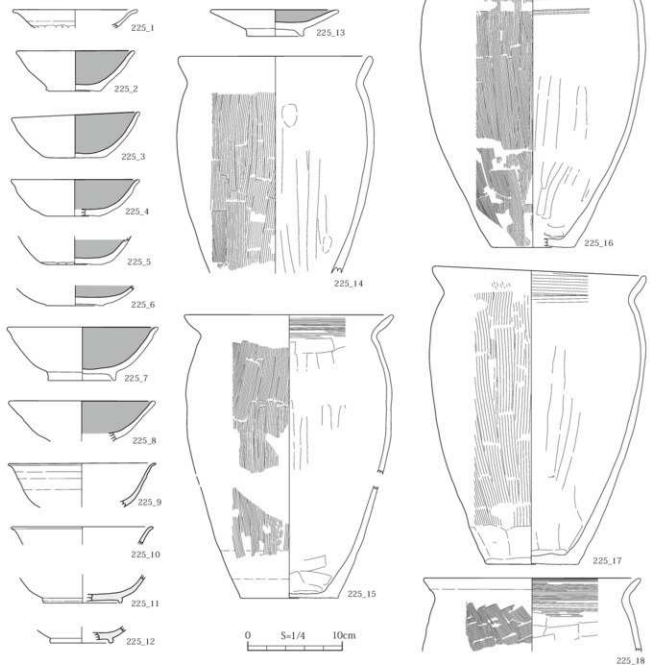


第152図 出土器類実測図(64)

224 住②(26~33)

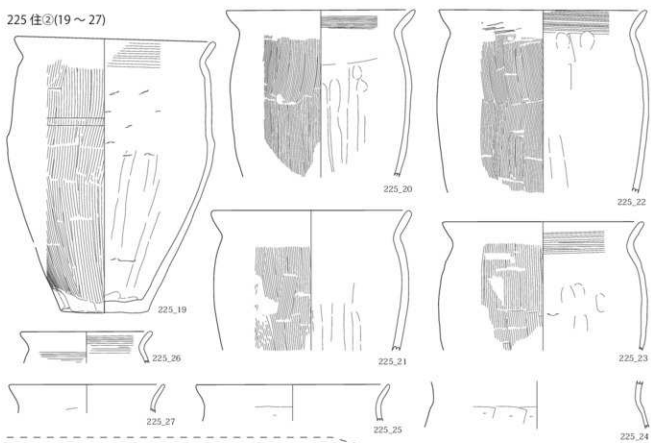


225 住①(1~18)

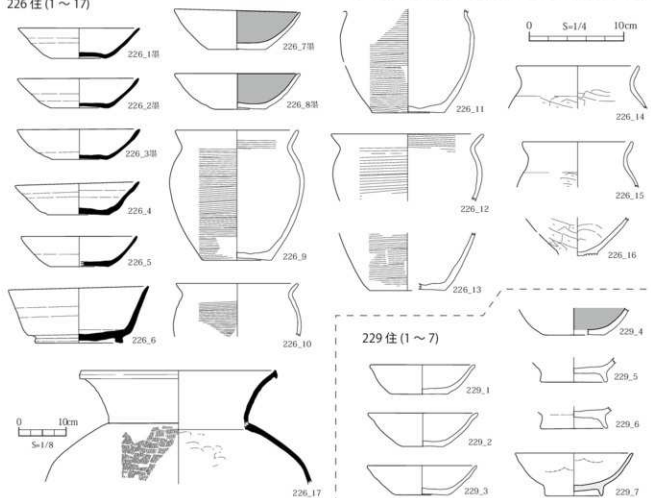


第153図 出土土器類実測図(65)

225住②(19~27)

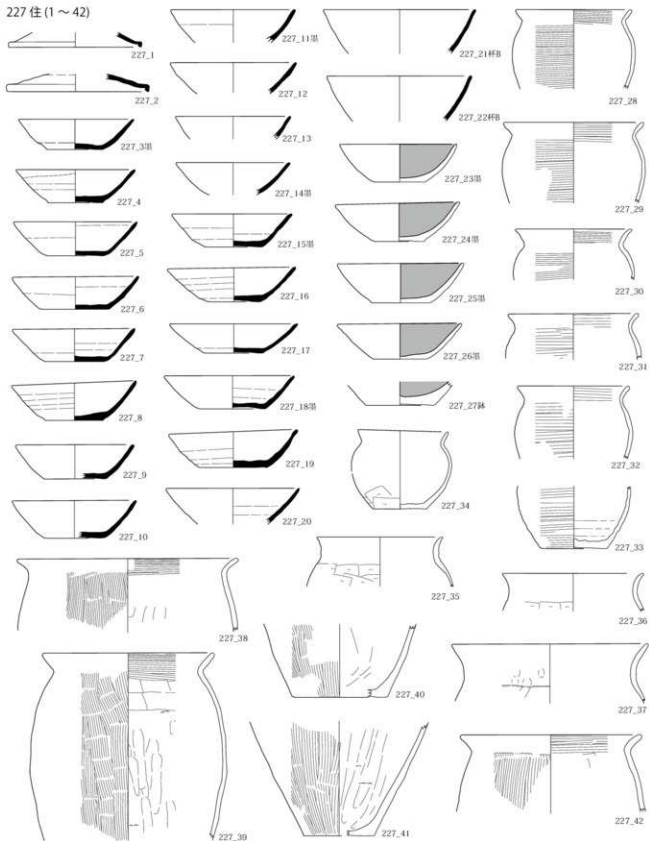


226住(1~17)



第154図 出土器類実測図(66)

227住(1~42)



228住①(1~4)

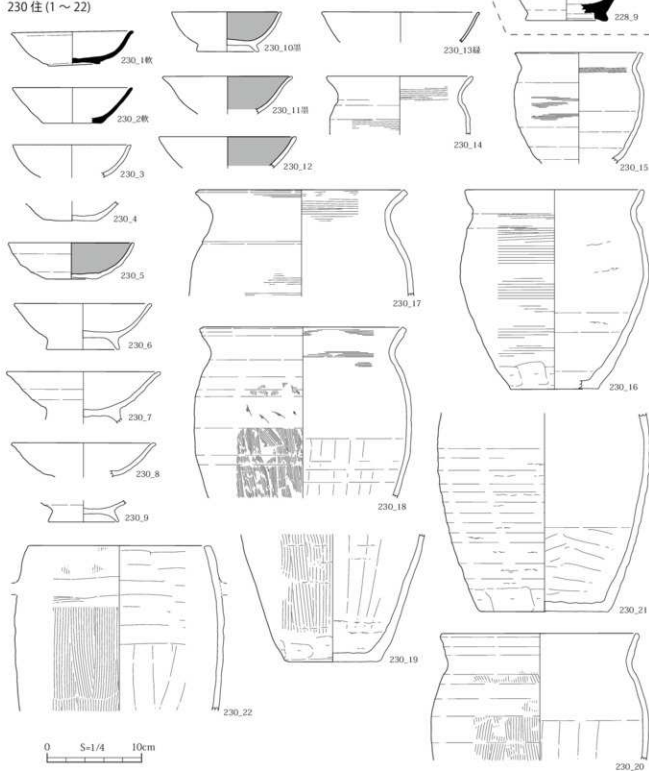


第155図 出土器類実測図(67)

228 住②(5~9)

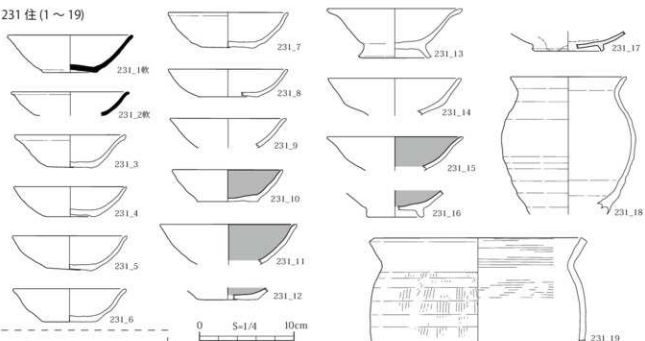


230 住(1~22)

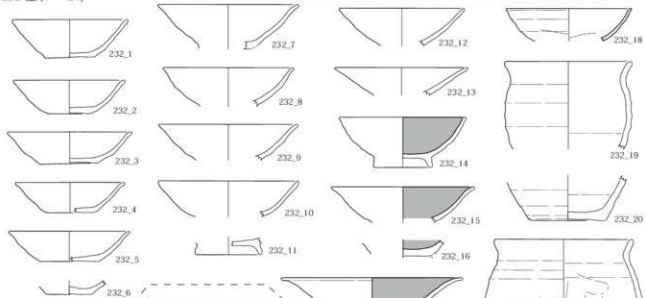


第156図 出土土器類実測図(68)

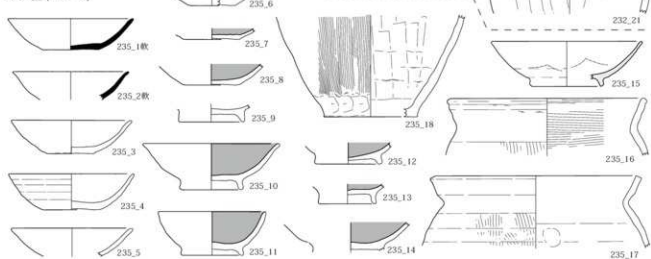
231住(1~19)



232住(1~21)

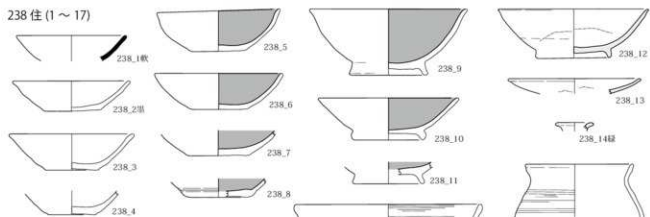


235住(1~18)

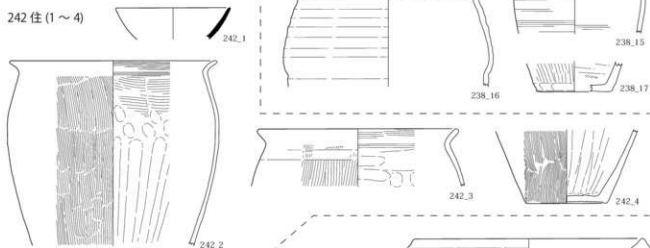


第157図 出土土器実測図(69)

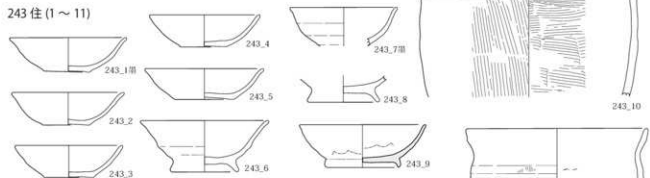
238住(1~17)



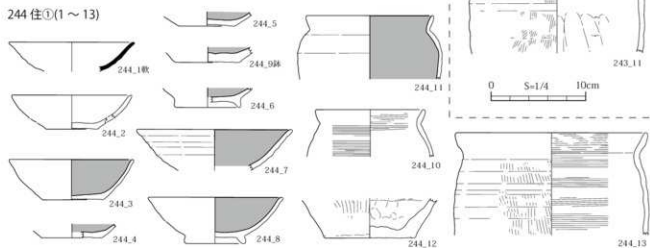
242住(1~4)



243住(1~11)

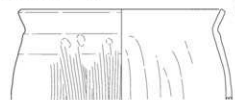


244住①(1~13)

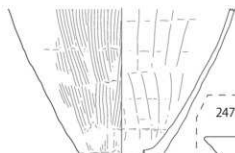


第158図 出土土器類実測図(70)

244住②(14・15)



244_14



244_15

246住(1~11)



246_1



246_2



246_3



246_10



246_4



246_5



246_6



246_7



246_8



246_9



246_11

247住(1~16)



247_1



247_2



247_3



247_4



247_5



247_12



247_13



247_14



247_9



247_6



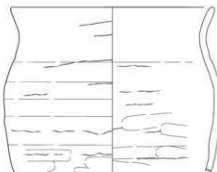
247_7



247_10



247_15



247_16



247_11



247_8

248住(1~5)



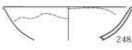
248_1



248_3



248_2



248_4



248_5

249住(1~6)



249_1



249_2



249_3



249_4



249_6

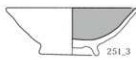


249_5

251住(1~7)



251_1



251_3



251_5



251_7



251_2



251_4

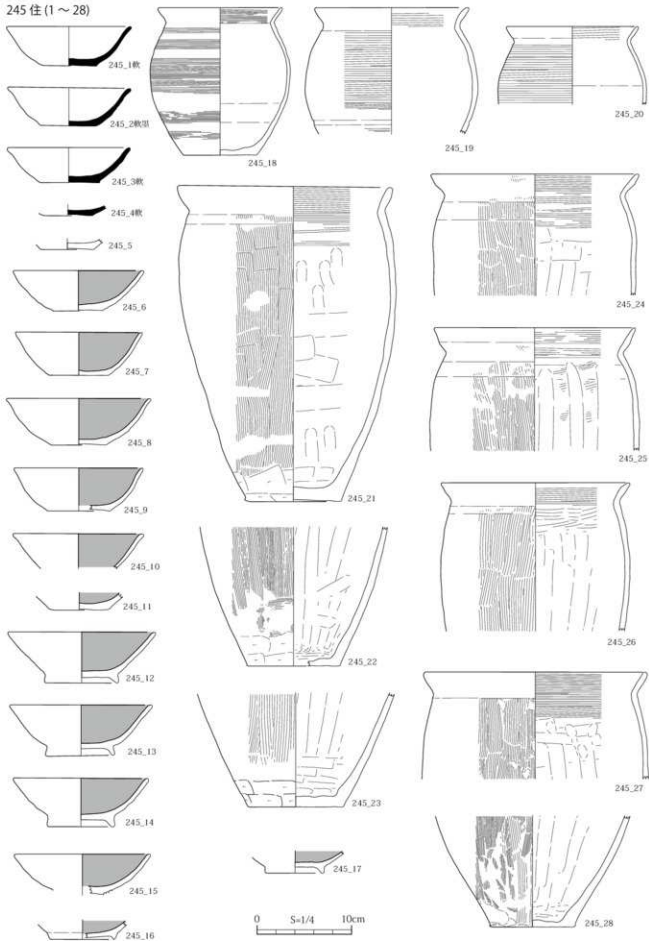


251_6

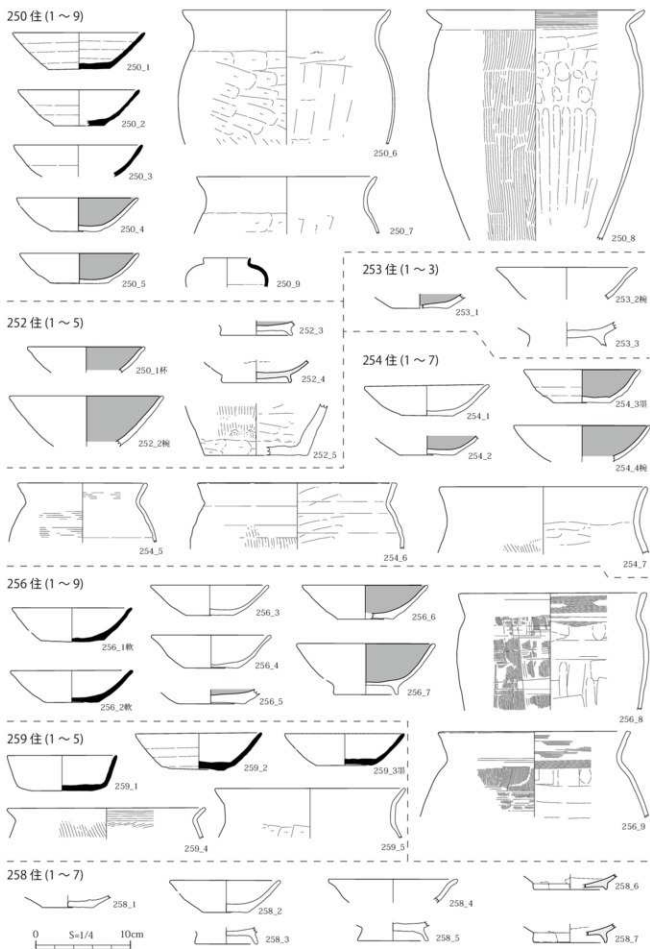


第159図 出土土器類実測図(71)

245 住 (1 ~ 28)

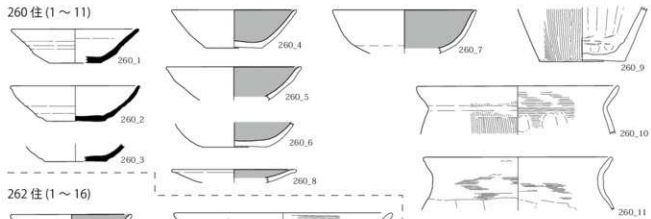


第 160 図 出土土器類実測図 (72)

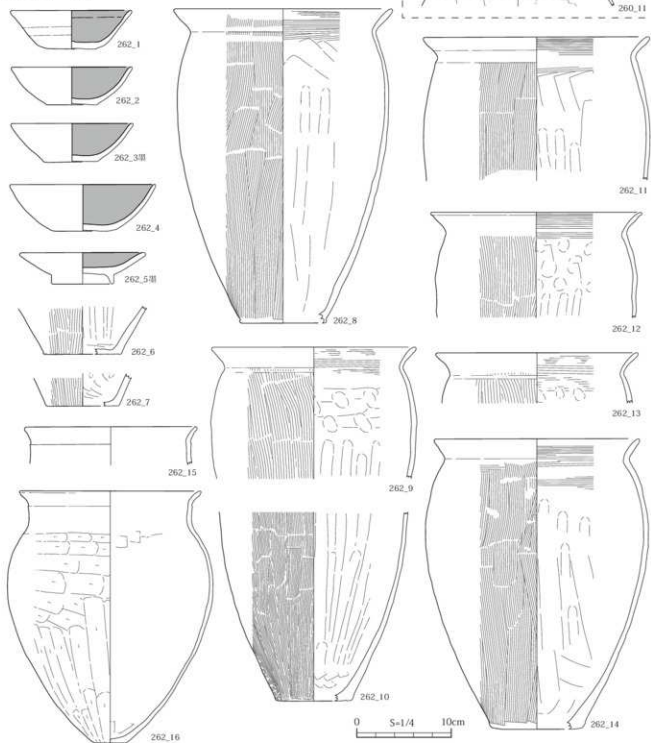


第 161 図 出土土器実測図 (73)

260住(1~11)

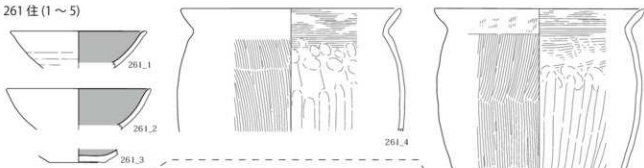


262住(1~16)

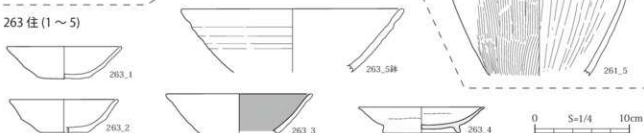


第162図 出土土器類実測図(74)

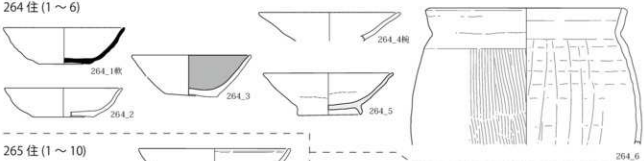
261 住 (1 ~ 5)



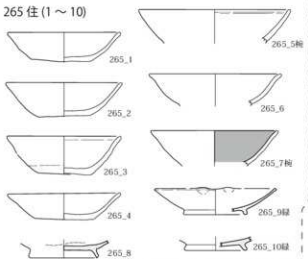
263 住 (1 ~ 5)



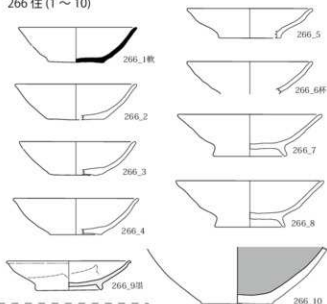
264 住 (1 ~ 6)



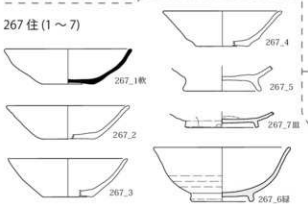
265 住 (1 ~ 10)



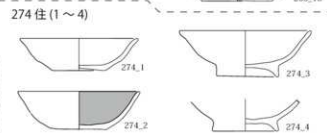
266 住 (1 ~ 10)



267 住 (1 ~ 7)

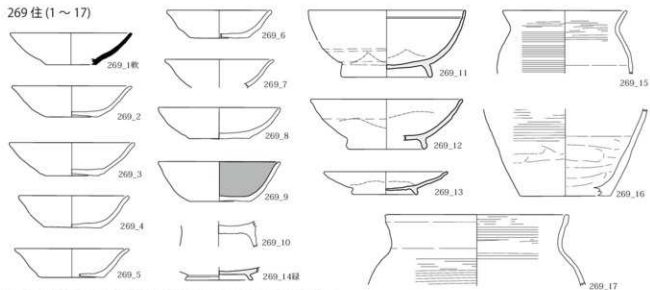


274 住 (1 ~ 4)

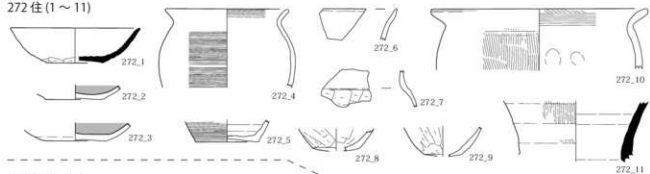


第 163 図 出土土器類実測図 (75)

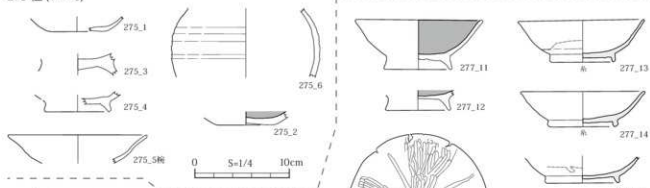
269住(1~17)



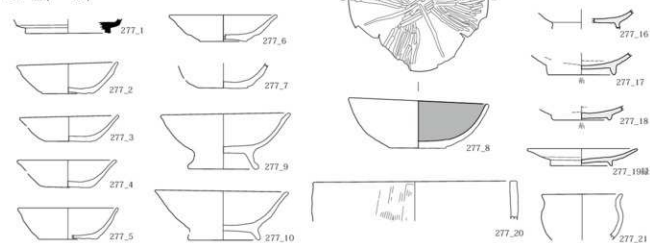
272住(1~11)



275住(1~6)

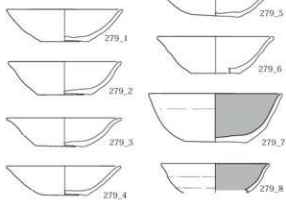


277住(1~21)

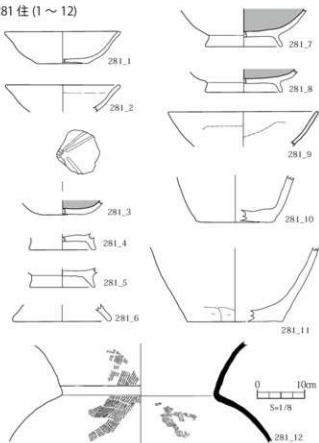


第164図 出土器類実測図(76)

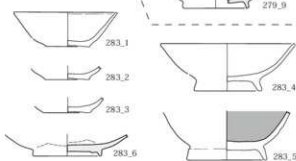
279住(1~9)



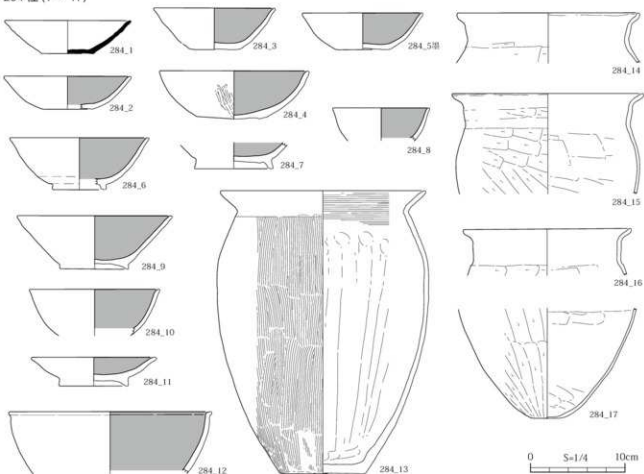
281住(1~12)



283住(1~6)

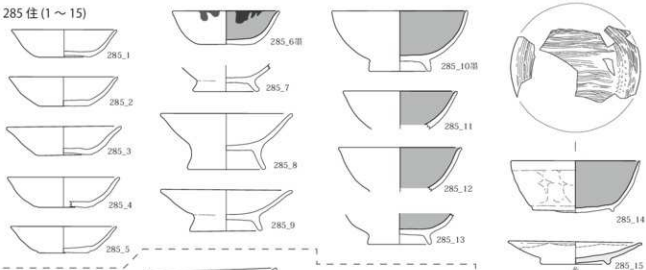


284住(1~17)

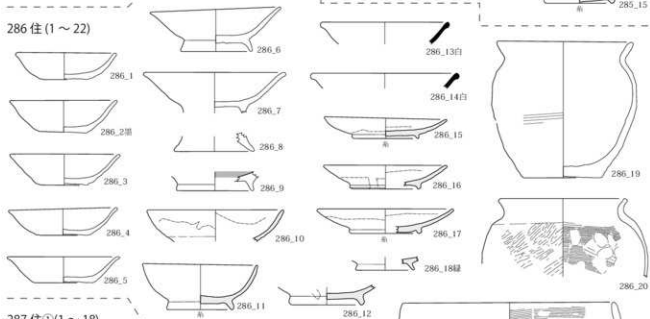


第165図 出土土器類実測図(77)

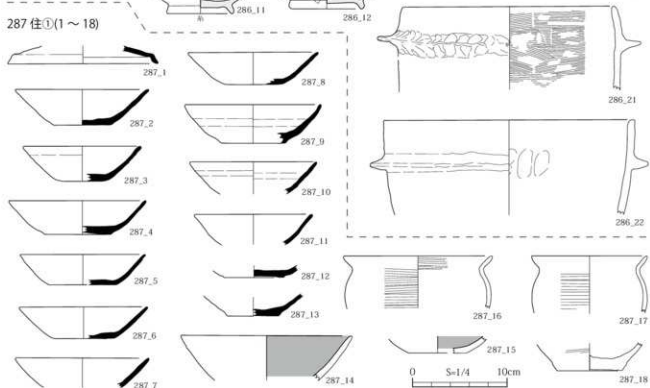
285住(1~15)



286住(1~22)

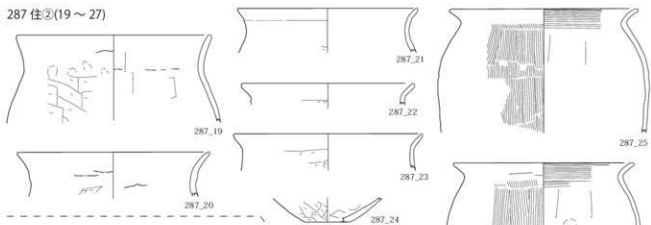


287住①(1~18)

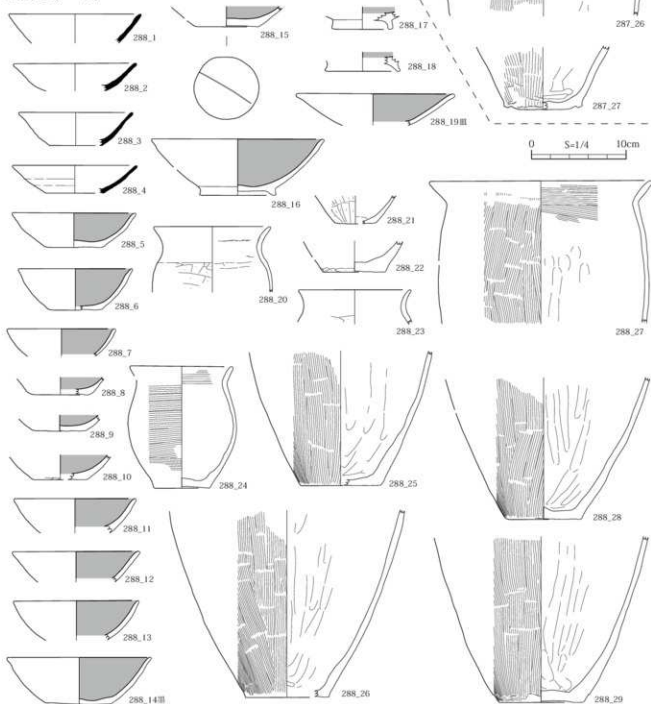


第166図 出土土器類実測図(78)

287 住②(19~27)

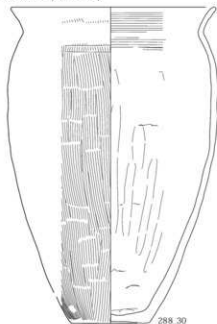


288 住①(1~29)

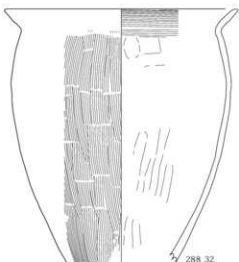


第 167 図 出土器類実測図(79)

288 住②(30~33)



288_30



288_32



288_33

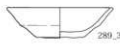
289 住(1~4)



289_1



289_2



289_3



289_4

290 住(1~22)



290_1



290_2



290_3



290_12



290_13



290_4



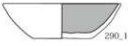
290_5



290_6



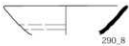
290_14



290_15



290_7



290_8



290_9



290_10



290_15B



290_21



290_16



290_19



290_22



290_20

291 住(1~7)



291_1



291_2



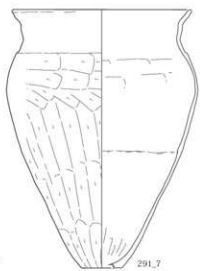
291_3



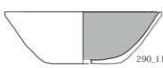
291_5



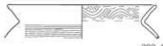
291_6



291_7



290_11



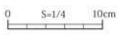
290_17



290_18

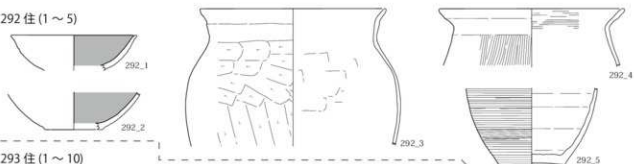


291_4

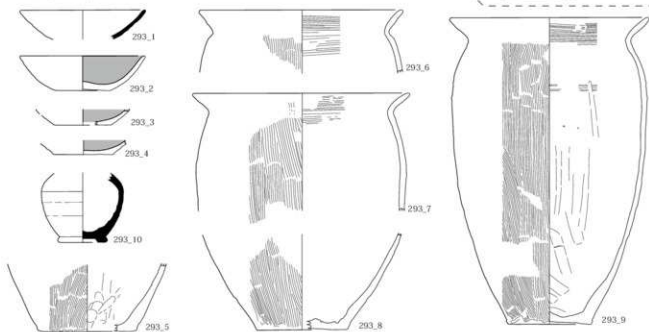


第168图 出土器類実測图(80)

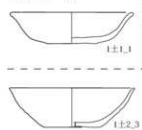
292住(1~5)



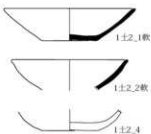
293住(1~10)



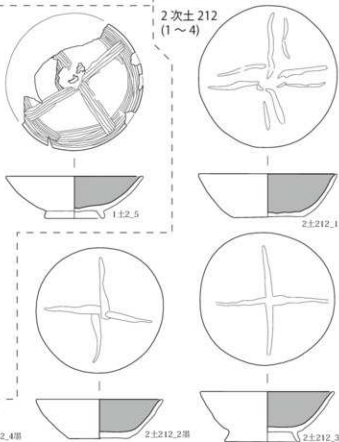
1次土 1 (1)



1次土 2(1~6)



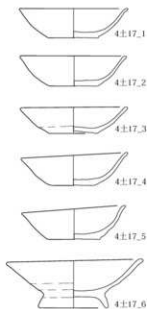
2次土 212 (1~4)



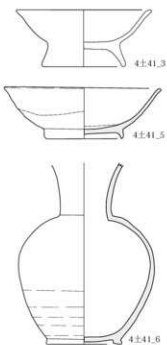
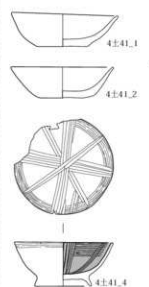
0 S=1/4 10cm

第169図 出土土器類実測図(81)

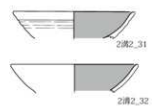
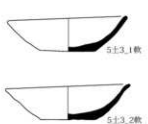
4次土 17(1~6)



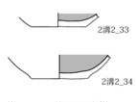
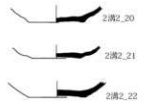
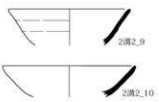
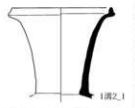
4次土 41(1~6)



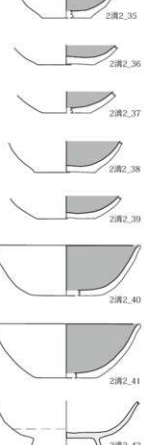
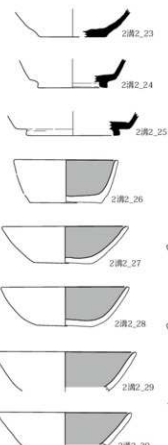
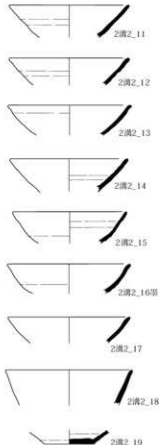
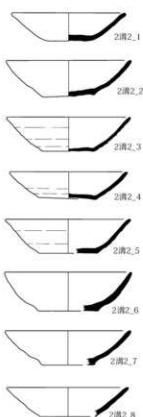
5次土 3(1・2)



1次溝 2(1)

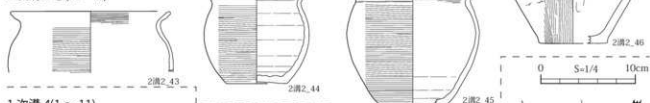


2次溝 2(1~42)

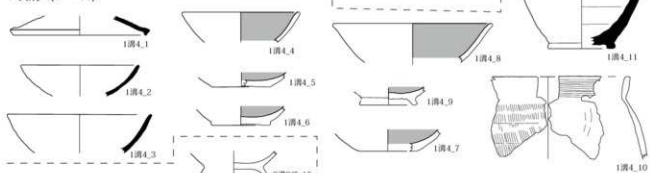


第 170 図 出土土器類実測図(82)

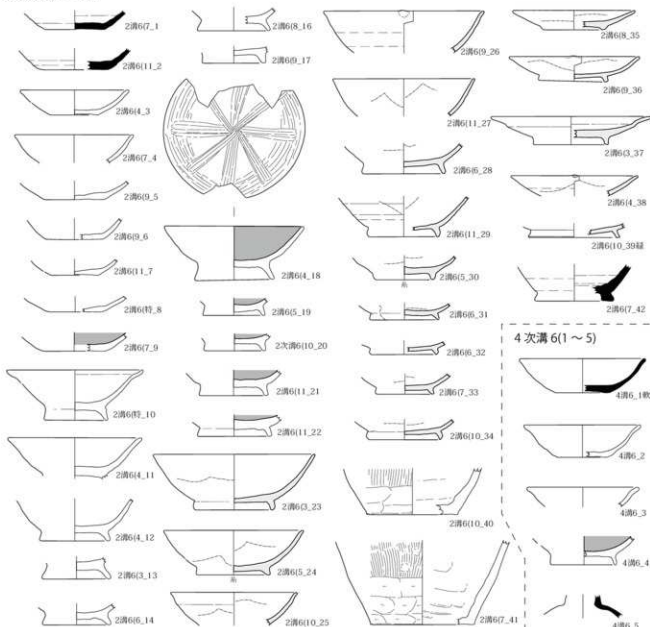
2次溝 2②(43~46)



1次溝 4(1~11)



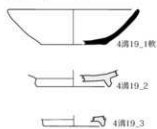
2次溝 6(1~42)



4次溝 6(1~5)

第 171 図 出土器類実測図 (83)

4次溝 19(1~4)

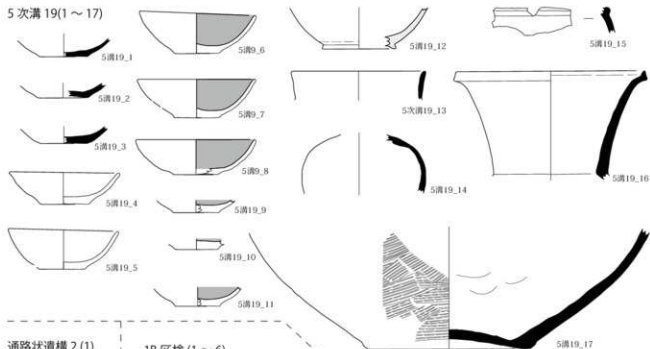


4次溝 20(1・2)



4溝_4

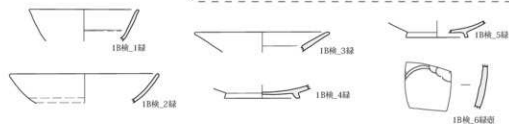
5次溝 19(1~17)



通路状遺構 2 (1)



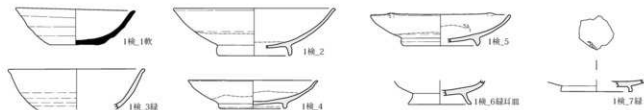
1B 区検 (1~6)



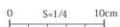
1A 区検 (1)



1次検 (1~7)



4次検 (1)



第 172 図 出土土器類実測図 (84)

2 石器・石製品 (第 173～177 図、第 10・11 表)

第 1・2・4・5 次調査で出土した定型的な石器・石製品は総数 297 点 (1 次 69 点、2 次 172 点、4 次 33 点、5 次 18 点、不明 5 点) である。その内訳は、石製帯飾り 2 点、浮子 8 点、火打ち石 6 点、磨石類 65 点、砥石 78 点、石鏝 19 点、小形刃器 9 点、楔形石器 2 点、打製石斧 21 点、磨製石斧 3 点、部分磨製石斧 2 点、磨製石鏝 1 点、大形刃器 7 点、石皿 1 点、尖頭器 1 点、石剣 / 石刀 1 点、石核 8 点、二次加工ある剥片 (RF) 9 点、微細剥離ある剥片 (MF) 6 点、剥片 28 点、原石 15 点、硯 1 点、不明 1 点がある。このうち古代に帰属する可能性のあるものを中心に 34 点と柱状片刃石斧 1 点、硯 1 点を図化し、概要を述べる。また、19 棟の住居址から合計 181 点の編物用石錘が出土している。住居址毎に集計し、概要を記す。それら以外のものは一覧表 (第 10 表) を参照されたい。

実測中における研磨・摩耗面はスクリーントーンと断面に矢印を付し表現した。新欠は白抜きとした。

石製帯飾り (1・2) 1・2 は、大理石製の巡方で、2 個一対の内部で連結する孔が裏面の四隅に配置されている。連結した孔内には帯に固定するための銅製の針金が残存しているものがある。

浮子 (3) 浮子は合計 6 点出土し、そのうち整形加工されているものが 1 点出土し、図示した。3 は、平面形が楕円形で上部に両面からの穿孔がみられ、その直径は最大 0.61cm を測る。

火打ち石 (4～7) 6 点出土した内の、使用痕が明瞭に観察できる 4 点を図示した。いずれもチャート製である。4 と 5 は、それぞれ 2 縁辺と 3 縁辺に比較的大きい剥離のツブレが観察できる。6 は、2 縁辺にツブレが顕著にみられる。重量が 86.0g と比較的重く、使用当初の形態を留めている可能性がある。7 は、6 とは逆に重量が 19.1g、最大長 2.7cm と比較的小さいこと、打点の残る面を 3 面有することから、新しい稜線を確保するための再加工が行われていると推定される。また、使用によるツブレも 4 縁辺にみられるため、使用頻度が高かったと考えられる。

磨石類 (8～15) 自然礫を素材にし、凹部、敲部、研磨・摩耗痕が観察されるものを一括して扱った。凹みの形状等から、縄紋時代に帰属すると考えられるものも含まれる。合計 64 点出土した内の、使用痕が明確に確認できる 8 点を図示した。8 は、表・裏面に磨面と、表面と 2 側面に敲打が観察される。

側面の敲打は平面形が分銅形に変化するほど顕著であるため、使用痕というよりは整形等に関わる痕跡の可能性が高い。9・11・13 は、平面形が棒状または長楕円形で、磨面と端部の敲打痕がみられる。11 は、片側面にも 8 と同様の顕著な敲打痕がある。12 は、扁平で平面形円形を呈し、磨面が表面に、敲打痕が上部にある。10・14・15 は、敲打痕はなく、単数または複数の磨面のみが観察される。

砥石 (16～32) 自然礫を素材にしたものと、柱状に整形加工したものの 2 種類がある。合計 70 点出土し、前者は 41 点、後者は 29 点ある。前者は砂岩製等の質の粗い石材が多いが、後者は凝灰岩や頁岩等の細かい石材が多い。後者は一部磨石と似ている個体もあるが、金属器の研磨を想定し、柱状 / 棒状または板状で表面に平坦もしくは内湾した面を有するものを砥石として扱った。16・17・22・23・31 は、整形加工により柱状または扁平な長方形を呈している。自然礫素材の砥石と比較すると、小形のものも多く、31 を除き、石質から荒砥に分類される。31 は、凝灰岩製で、中砥～荒砥と考えられ、そのサイズから手持ち砥石と推定できる。表面には、使用によると思われる断面 V 字の溝状研磨痕が多数みられる。全体的に赤色化し、はじけた様な剥離も観察できることから、被熱していることがわかる。18～21・24～30・32 は、自然礫を素材に 2 面以上の砥面をもつ。石質はいずれも粗粒の砂岩で、大形のものも多く、荒砥の置き砥石と考えられる。32 は、横断面形が六角形を呈し、砥面も 6 面を有す。また、すべての砥面ではないが、溝状研磨痕も確認できる。

磨製石斧 (33) 184 住で出土した弥生時代中期の緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧である。発掘調査によって出土した柱状片刃石斧は、市内では唯一のものであり、図示することとした。どういった経路で古代の住居に搬入されたのか不明である。刃部の断面は弱凸強凸で、平面形は緩い斜刃である。使用痕として刃縁に微細な剥離が確認できる。胴部から基部にかけて、部分的に敲打による整形が行われている。頭部には、自然面が残る部分もある。

市内で見つかった柱状片刃石斧は、他に中山地区の棚架出土とされるものが 1 点ある (文献 38)。

硯 (34) 遺存状態が極めて悪く、側面の一部と海部の一部のみがわずかに確認できる。石質は粘板岩製である。出土地点は 151 住であるが、中世以降の遺物であるため、何らかの理由で後世に混入した

ものである。

紡錘車(35・36) 35は、断面形が柳葉形に近い薄台形を呈す。裏面はほとんど整形加工が施されておらず、自然面に近い。中央部の孔の横にやや小さな孔が確認できる。両者の孔は断面形から片面穿孔孔と考えられる。36は、断面形が長方形を呈す。全面研磨による整形加工が認められる。中央部の孔は両面穿孔であり、正面に深さ2.1mmの貫通していない孔も確認できる。

編物用石錘 19棟の住居址から出土している。これらは住居址内から礫がまとまって検出されたため、編物用石錘と認定した。135住と138住、170住からは1点のみの出土であるため、自然礫である可能性が高いと思われる。しかし、他住居址で出土しているものと形状が近似していることや、調査時に遺物と認定されず採集されなかったものが存在する可能性も残ることから、ここでは編物用石錘とし、集計表(第11表)に加えた。石材はほとんど砂岩で占められているが、チャート、硬砂岩、頁岩等もわずかではあるが出土している。石錘はすべて自然礫をそのまま素材にしており、組掛けのために整形した痕跡はみられなかった。15点以上出

土している住居址は6棟を数える。そのうち227住では、出土点数が41点と突出して多い。各住居址から出土した石錘の出土点数と完形品のサイズと重量は第11表を参照されたい。

注記	図No	種類	地区	出土地点1	出土地点2	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	破損状況	備考	
	3	浮子	1	21住	カマド	軽石	6.3	5.8	4.5	42.6	完形	2個体に割れる	
	4	石錘	1	21住		黒曜石	(2.3)	(1.4)	(0.5)		1/3以下欠	右側面基部と基部欠損	
	5	砥石	1	9住	南部	砂岩	(5.3)	(1.9)	(1.3)	(20.7)	1/2欠	平面形棒状、砥石2面、手持石砥石	
	7	RF	1	101住	抽出面	緑色凝灰岩	5.7	4.0	0.7	(15.8)	表面割損	次加工1級刃	
	8	16	砥石	1	101住	東部	砂岩	(8.5)	(7.9)	(2.9)	(260.0)	1/2欠	平面形方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕
	9	小形分器	1	101住	東部	チャート	8.4	4.9	1.8	61.4	完形	サイドスクレーパー	
	10	磨石類	1	131住	南部	砂岩	3.9	3.3	3.1	53.5	完形	平面形円形、磨面1面	
	11	砥石	1	161住		石灰	4.6	3.7	2.7	47.3	完形		
	12	砥石	1	161住		凝灰岩	(7.6)	3.7	3.6	(142.5)	1/3以下欠	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮中	
	13	砥石	1	161住		石英	5.0	3.8	3.2	69.6	完形		
	14	砥石	1	201住	No.1	凝灰岩	16.3	6.7	5.3	81.4	完形	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕	
	15	磨石類	1	201住	北部	砂岩	(10.1)	5.8	2.5	(214.0)	1/3以下欠	平面形楕円形、砥石2	
	16	砥石	1	201住	北部	凝灰岩	(3.7)	2.5	1.6	(13.8)	1/3以下欠		
	17	小形分器	1	201住	ベルト内	砂岩	(2.1)	1.8	0.9	(3.3)	1/3以下欠	微細線1級刃	
	19	小形分器	1	241住	北部	チャート	3.9	3.1	6.0	9.7	完形	サイドスクレーパー	
	20	MF	1	241住		黒曜石	(2.3)	(2.3)	0.6	(2.8)	1/3以下欠	微細線1級刃	
	21	打製石斧	1	341住	No.11	砂岩	17.5	6.4	3.4	460	完形	片側面のみ加工し、未成品か	
	22	磨石類	1	341住	南部	砂岩	11.5	10.0	6.8	87.6	完形	平面形円形、磨面1面	
	23	磨石類	1	381住		砂岩	5.7	4.4	3.5	117.4	完形	平面形円形、磨面1面	
	24	小形分器	1	381・391住		チャート	5.0	4.3	1.4	33.2	完形	サイドスクレーパー	
	25	砥石	1	401住	ベルト内	砂岩	(5.0)	(3.9)	(5.7)	(104.8)	2/3以上欠	砥石2面	
	26	砥石	1	431住	北部	石英	2.8	2.0	0.8	4.5	完形		
	27	砥石	1	431住	北部	石英	8.38	2.5	2.2	18.4	完形		
	28	石槌	1	431住	南部	黒曜石	4.2	3.9	2.6	41.0	完形	打面3面以上	
	29	砥石	1	431住	北部	石英	6.5	4.8	2.9	69.3	完形		
	30	砥石	1	431住	北部	石英	3.8	2.9	1.7	23.5	完形	2個体に割れる	
	31	MF	1	471住		黒曜石	2.8	1.7	0.6	1.9	完形	微細線2級刃	
	32	磨石類	1	501住	西部	砂岩	9.6	8.6	7.6	79.4	完形	平面形円形、磨面1面	
	33	8	磨石類	1	501住	西部	砂岩	21.9	10.8	4.3	143.0	完形	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕
	34	18	砥石	1	541住	No.4	砂岩	22.5	11.6	9.1	354.5	完形	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕
	35	磨石類	1	541住		砂岩	(9.6)	4.1	(3.8)	(191.2)	1/2欠	平面形円形、砥石1面	
	36	磨石類	1	541住		砂岩	(19.0)	(6.0)	5.3	(800.0)	1/3以下欠	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕	
	37	磨石類	1	551住	カマド奥	砂岩	(5.4)	3.3	2.9	(100.4)	1/2欠	平面形棒状、砥石1	
	38	砥石	1	581住	No.5	砂岩	10.9	4.8	4.0	232	完形	平面形長方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮中	
	39	砥石	1	591住	No.26	砂岩	(10.1)	4.5	1.4	(90.8)	1/3以下欠		
	40	湖片	1	631住		黒曜石	(1.6)	(1.6)	(0.5)				
	41	17	湖片	1	661住	ベルト内	(4.4)	(4.3)	(1.5)	(30.7)	1/2欠	平面形方形、砥石4面、線条研磨痕有、粒皮痕	
	42	小形分器	1	抽出面	南部	砂岩	2.4	1.8	0.5	1.7	完形	サイドスクレーパー、右側面後方に加工し可能性	
	43	石錘	1	731住	No.1	黒曜石	(2.1)	(2.0)	0.2	(0.7)	1/3以下欠	無尖円基部、片側面欠損	
	44	磨石類	1	741住	南部	砂岩	4.0	2.6	1.5	20.0	完形	平面形楕円形、砥石1	
	45	磨石類	1	761住	南部	砂岩	(5.8)	4.5	1.8	(49.5)	1/3以下欠	平面形楕円形、磨面1	
	46	湖片	1	771住		チャート	2.6	2.2	0.5	3.1	完形		

第10表 石器・石製品一覧(1/4)

注記	図No	種類	地区	出土地点1	出土地点2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	破損状況	備考
	47	胡片	1	77住	ベルト内	チーク	4.0	1.8	1.2	9.1	完形	砥面1面, 粒度中
	48	砥石	1	71住	北部	凝灰岩	11.2	4.9	0.6	29.8	完形	砥面1面, 粒度中
	49	打製石斧	1	81住	No.16	凝灰岩	(16.9)	(7.2)	(3.0)	(610.0)	2/3以上欠	短形磨
	50	RF	1	81住		チーク	2.8	2.8	0.8	4.6	完形	文知加工跡1
	51	大形磨石	1	82住		黒曜石	(8.3)	7.3	1.8	(90.8)	1/3以下欠	先頭欠損
	52	MF	1	82住		黒曜石	2.9	1.9	1.0	5.4	完形	微細磨跡1跡1
	53	胡片	1	84住		珪石	2.4	1.9	0.5	1.9	完形	
	54	砥石	1	84住		珪石	14.1	5.4	0.7	236	完形	磨形
	55	砥石	1	92住		凝灰岩	5.4	1.5	0.4	4.4	完形	平面形不明, 砥面1, 線条研磨痕有, 粒度中
	56	砥石	1	95住	南部	安山岩	8.7	7.0	6.0	430	完形	平面形長方形, 砥面5面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	57	砥石	1	99住		凝灰岩	(7.5)	(7.2)	(4.0)	(274.0)	2/3以上欠	平面形不明, 磨面1
	58	砥石	1	横山面	横山面	凝灰岩	7.5	4.9	2.5	84.8	完形	平面形不明, 砥面1, 磨面2面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	59	砥石	1	102住	北部	凝灰岩	(7.9)	4.4	2.8	(124.8)	1/2欠	平面形長方形, 砥面1, 磨面2面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	60	磨石類	2	102住	北部	凝灰岩	9.1	4.5	2.8	218	完形	平面形不明, 磨面1
	61	打製石斧	1	110住	北部	凝灰岩	16.3	5.5	2.7	350	完形	磨形, 刃部加工跡1
	62	砥石	1	110住	北部	凝灰岩	17.2	4.2	4.8	588	完形	平面形長方形, 砥面2面
	63	砥石	1	110住	南部	黒曜石	1.9	1.2	1.6	3.0	完形	
	64	胡片	1	110住	南部	黒曜石	2.5	2.2	0.6	3.1	完形	
	65	砥石	1	118住	南部	凝灰岩	(8.8)	4.1	2.0	(110.4)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度中
	66	胡片	1	118住	南部	凝灰岩	2.2	2.0	0.6	2.7	完形	
	67	砥石	1	122住		凝灰岩	(11.3)	4.3	4.6	(268.0)	1/2欠	平面形長方形, 砥面4面(3面以上線条研磨痕有), 粒度中
	68	砥石	1	125住	北部砥面	凝灰岩	(147.0)	(6.5)	(3.9)	(400.0)	1/2欠	平面形不明, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	69	小形刀頭	1	126住	北部	黒曜石	3.4	3.2	1.6	14.0	完形	投入石器
	70	砥石	1	126住	西部	凝灰岩	(9.2)	8.8	7.5	(1022.0)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面1面
	71	石核	1	126住	西部	凝灰岩	4.4	3.0	1.7	24.4	完形	無刃石核
	72	磨石類	2	126住	横山面	安山岩	15.3	13.4	5.8	1526	完形	平面形不明, 磨面1, 横文
	73	楔形石蕊	1	不明		黒曜石	2.3	1.9	0.9	4.5	完形	
	74	磨石類	2	132住	床面	凝灰岩	(6.0)	(9.2)	(1.9)	(96.0)	2/3以上欠	平面形不明, 2個削り割石
	75	磨石類	2	134住	南東部	凝灰岩	(4.9)	(4.6)	(1.2)	(37.7)	2/3以上欠	平面形不明, 磨面1
	76	胡片	2	134住		チーク	5.0	4.5	0.9	18.0	完形	
	77	磨石類	2	136住		凝灰岩	(1.9)	(8.7)	(8.3)	(195.0)	0.7欠	平面形磨門形, 磨面1
	78	磨石類	2	136住		凝灰岩	(18.2)	(9.1)	(5.2)	(1152.0)	1/2欠	平面形磨門形, 砥面1, 線条研磨痕有, 粒度粗
	79	磨石類	2	136住		凝灰岩	16.8	11.7	9.0	2102	完形	平面形磨門形, 砥面2, 粒度粗
	80	磨石類	2	136住		安山岩	9.6	7.1	6.2	584	完形	平面形磨門形, 磨面1
	81	砥石	2	136住		黒曜石	(2.4)	2.0	0.4	(1.8)	1/3以下欠	五角形磨, 先頭部欠損
	82	砥石	2	137住		凝灰岩	(22.8)	(12.8)	(8.0)	(3325.0)	1/2欠	平面形長方形, 砥面3面, 粒度粗
	83	砥石	2	137住	No.23	凝灰岩	(13.3)	(4.0)	(4.9)	(1036.0)	1/2欠	平面形磨門形, 砥面1
	84	磨石類	2	137住	No.24	凝灰岩	6.6	5.9	3.6	80.5	完形	平面形磨門形, 砥面1
	85	磨石類	2	137住		凝灰岩	8.0	3.4	3.4	161.2	完形	平面形磨門形, 磨面1
	86	大形刀頭	2	138住	南東部	凝灰岩	9.7	6.0	1.2	80.4	完形	磨形石蕊
	87	磨石類	2	138住	ベルト内	チーク	3.5	2.4	0.5	5.2	完形	
	88	磨石類	2	140住		珪石	4.4	3.0	1.7	24.4	完形	
	89	胡片	2	140住		凝灰岩	(3.6)	14.4	6.2	(1410.0)	1/2欠	平面形不明, 砥面1, 粒度粗, 置き砥石
	90	磨石類	2	141住		凝灰岩	19.5	10.6	7.6	1532	完形	平面形磨門形, 砥面1, 線条研磨痕有, 粒度粗
	91	砥石	2	141住		凝灰岩	(4.4)	3.8	2.2	(55.8)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面4面, 粒度中
	92	磨石類	2	142住	P1, No.14	安山岩	22.9	14.6	12.5	5000	完形	平面形磨門形, 磨面1
	93	磨石類	2	143住		凝灰岩	21.6	6.8	5.4	1082	完形	平面形長方形, 砥面1面, 粒度粗
	94	磨石類	2	143住	No.26	凝灰岩	16.5	4.8	3.7	416	完形	平面形長方形, 砥面1面, 粒度粗
	95	磨石類	2	143住		凝灰岩	7.7	3.4	2.2	66	完形	平面形不明, 砥面1, 粒度粗
	96	磨石類	2	143住	北西部	凝灰岩	13.3	4.6	2.6	232	完形	平面形磨門形, 磨面2
	97	磨石類	2	147住	No.16	凝灰岩	(17.1)	4.1	5.5	(362.0)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面2, 粒度粗
	98	磨石類	2	147住	No.14	凝灰岩	21.8	6.2	4.8	882	完形	平面形長方形, 砥面2
	99	石核	2	147住		黒曜石	2.6	2.1	1.7	10.1	完形	打面数2以上
	100	胡片	2	147住		珪石	1.9	1.4	0.6	1.8	完形	
	101	磨石類	2	147住	北東部	珪石	5.3	4.4	2.3	79.0	完形	
	102	打製石斧	2	148住	No.24	凝灰岩	(14.3)	(10.4)	(3.5)	(528.0)	1/2欠	磨形
	103	磨石類	2	148住	No.26	凝灰岩	(10.7)	6.1	3.6	(336.0)	1/2欠	109と適合する, 平面形棒状, 磨面2
	104	磨石類	2	148住	No.27	凝灰岩	(11.0)	6.0	3.5	(410.0)	2/3以上欠	108と適合する, 平面形棒状, 磨面2
	105	砥石	2	148住	No.28	凝灰岩	12.8	5.3	5.7	564	完形	平面形棒状, 磨面2
	106	磨石類	2	148住	No.29	凝灰岩	(13.2)	7.7	4.1	(474.0)	1/2欠	平面形磨門形, 磨面2
	107	磨石類	2	149住	No.5	凝灰岩	7.7	4.4	4.9	98.5	完形	平面形磨門形, 砥面2, 線条研磨痕有, 粒度中
	108	磨石類	2	149住	No.6	凝灰岩	(12.0)	4.5	3.7	(278.0)	1/3以下欠	平面形磨門形, 磨面2, 線条研磨痕有, 粒度粗
	109	磨石類	2	151住	No.8	凝灰岩	12.8	4.4	3.3	274	完形	平面形棒状, 磨面1
	110	磨石類	2	151住	No.8	凝灰岩	14.5	5.1	4.6	636	完形	平面形長方形, 砥面1面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	111	磨石類	2	151住	ベルト内	凝灰岩	(10.1)	(5.1)	(0.9)	(76.3)	2/3以上欠	
	112	砥石	2	152住	北西部	凝灰岩	2.4	2.4	0.9	4.9	完形	無刃石核
	113	胡片	2	154住	南東部	凝灰岩	1.9	1.3	0.6	1.3	完形	
	114	磨石類	2	154住	ベルト内	凝灰岩	(8.9)	4.4	3.3	(240.0)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	115	楔形石蕊	2	157住	南西部	黒曜石	2.2	2.0	0.6	3.5	完形	
	116	打製石斧	2	157住	北西部	珪石	(12.7)	(7.2)	(3.0)	(342.0)	1/2欠	短形磨
	117	磨石類	2	157住	No.94	凝灰岩	12.5	3.0	2.0	208	完形	平面形長方形, 砥面2面, 粒度粗
	118	磨石類	2	162住	南東部	凝灰岩	(5.0)	(4.2)	(1.9)	(64.4)	2/3以上欠	平面形長方形, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度中
	119	磨石類	2	164住	No.20	凝灰岩	30.0	9.0	7.1	2645	完形	平面形長方形, 砥面1面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	120	磨石類	2	164住	No.8	凝灰岩	(14.0)	(6.4)	(3.9)	(336.0)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面3面, 粒度粗
	121	水打石	2	164住	南西部	チーク	(4.0)	(3.6)	(2.1)	(27.5)	1/2欠	ツツ3枚切
	122	大形刀頭	2	164住		珪石	13.1	5.4	2.4	159.3	完形	磨形石蕊
	123	小形刀頭	2	166住	No.1	チーク	1.6	1.8	1.4	13.0	完形	投入石器
	124	磨石類	2	166住	No.11	黒曜石	1.6	1.4	0.5	0.8	完形	
	125	磨石類	2	166住	No.13	凝灰岩	13.1	4.9	3.6	342	完形	平面形棒状, 磨面3
	126	磨石類	2	166住	No.13	凝灰岩	12.2	4.9	3.1	254	完形	平面形棒状, 磨面2
	127	胡片	2	166住	P1	チーク	3.7	2.4	0.8	6.5	完形	
	128	磨石類	2	168住	P2 No.1	凝灰岩	21.4	7.0	6.5	1284	完形	平面形棒状, 磨面2
	129	磨石類	2	168住	No.94	凝灰岩	21.8	7.9	6.9	2679	完形	平面形長方形, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	130	磨石類	2	169住		凝灰岩	(14.1)	7.2	5.4	(816.0)	1/2欠	平面形棒状, 磨面3, 磨面4, 線条研磨痕有, 粒度粗
	131	砥石	2	169住		凝灰岩	(8.2)	9.4	3.6	(374.0)	1/2欠	平面形長方形, 砥面1面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	132	磨石類	2	171住		凝灰岩	11.7	11.1	7.0	(1146.0)	表面磨	平面形磨門形, 磨面5, 磨面3
	133	打製石斧	2	173住	凝灰岩	(5.8)	(4.8)	(0.8)	(39.5)	1/2欠	平面形不明	
	134	砥石	2	173住	ベルト内	凝灰岩	12.8	4.7	4.0	262	完形	
	135	磨石類	2	175住	No.5	凝灰岩	(14.5)	7.9	6.8	(676.0)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面4面, 線条研磨痕有, 粒度粗
	136	磨石類	2	170住	南西部	凝灰岩	9.2	4.5	1.4	(90.7)	表面磨	平面形長方形, 磨面1
	137	磨石類	2	188住	No.16	凝灰岩	(8.1)	(6.0)	(3.9)	(288.0)	1/2欠	平面形長方形, 砥面1面, 線条研磨痕有, 粒度中
	138	胡片	2	191住	ベルト内	凝灰岩	(15.0)	(6.5)	(1.4)	(109.8)	2/3以上欠	
	139	砥石	2	193住	No.18	凝灰岩	(22.1)	5.5	6.8	(1300.0)	1/3以下欠	平面形棒状, 砥面2面, 粒度粗
	140	砥石	2	193住	No.5	凝灰岩	(8.1)	3.8	(1.4)	(144.8)	1/3以下欠	平面形長方形, 砥面3面, 粒度粗

第10表 石器・石製品一覧(2/4)

注記	図No	種類	地区	出土地点1	出土地点2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考		
	149	5	火打石	2	193住	南西部	チャート	4.9	2.3	1.8	22.8	完形		
	150	22	磨石	2	195住	北西部	凝灰岩	10.8	4.4	2.1	120.3	完形	平面彫長方形, 裏面4面, 榫条研磨痕有, 粒皮中	
	151	8	磨石	2	196住	北西部	凝灰岩	22.1	8.1	4.1	92.4	完形	平面彫長方形, 裏面2面, 粒皮中	
	152		湖片	2	196住	北西部	石英	2.1	2.3	1.1	5.2	完形	平面彫長方形, 裏面1面, 粒皮中	
	153		磨石	2	196住	北西部	砂岩	08.8	4.6	3.8	216.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面	
	154		磨石	2	199住	北西部	砂岩	6.0	5.9	4.3	169.3	2/3欠	平面彫長方形, 裏面2面	
	155		打製石斧	2	199住	No.22	凝灰岩	10.7	6.7	1.2	146.3	1/3欠	下欠	
	156		湖片	2	199住	南西部	砂岩	4.4	3.4	2.0	7.7	完形	平面彫長方形, 裏面2面	
	157		MF	2	199住	南西部	砂岩	2.1	1.8	0.5	1.9	完形	微彫無縁1線辺	
	158		磨石	2	199住	北東部	砂岩	10.7	4.5	1.8	105.0	2/3欠	上欠	
	159	12	磨石	2	200住	北西部	砂岩	10.4	10.4	2.6	430	完形	平面彫長方形, 裏面1面, 裏面1	
	160		石核	2	200住	北西部	凝灰岩	4.9	3.6	1.6	25.4	完形	打面数4以上	
	161		磨石	2	203住	南西部	砂岩	10.7	3.0	2.7	114.0	完形	平面彫長方形, 裏面2面	
	162		湖片	2	203住	ベルト内	凝灰岩	1.6	1.6	0.9	0.3	0.6	完形	平面彫長方形, 裏面2面
	163		磨石	2	205住	No.5	砂岩	9.2	8.8	6.3	650	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	164	20	磨石	2	208住	砂岩	14.1	7.4	5.9	872	完形	平面彫長方形, 裏面3面, 榫条研磨痕有, 裏面1		
	165		石核	2	213住	No.2	安山岩	11.2	18.9	8.7	3375.0	1/2欠		
	166		湖片	2	213住	南東部	石英	5.4	4.8	2.4	70.8	完形		
	167		磨石	2	217住	南東部	凝灰岩	4.6	2.0	0.7	8.9	完形		
	168		湖片	2	217住	No.1	砂岩	08.6	4.1	3.9	1153.9	1/2欠	平面彫長方形, 裏面4面, 粒皮中	
	170		湖片	2	217住	南東部	石英	2.9	2.6	1.1	9.3	完形		
	171		湖片	2	217住	南東部	砂岩	11.0	4.9	4.4	420.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面	
	172		湖片	2	217住	南東部	砂岩	11.6	8.0	6.7	691.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面	
	173	10	磨石	2	217住	南西部	砂岩	9.5	4.2	2.3	138.9	完形	平面彫長方形, 裏面3面	
	174		磨石	2	221住	北東部	砂岩	16.7	4.8	5.0	208.0	2/3欠	上欠	
	76	27	磨石	2	221住	北東部	砂岩	8.5	2.4	2.1	51.4	完形	平面彫長方形, 裏面1面, 榫条研磨痕有	
	177	15	磨石	2	221住	砂岩	13.9	11.1	6.0	1238	完形	平面彫長方形, 裏面1面		
	178		磨石	2	221住	南西部	凝灰岩	16.2	3.8	4.1	314.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面1面	
	179		湖片	2	221住	砂岩	7.2	4.7	2.6	124.3	1/3欠	下欠		
	180		磨石	2	225住	No.68	砂岩	9.3	8.9	3.4	352	完形	平面彫長方形, 裏面3面, 粒皮粗	
	181		磨石	2	225住	No.78	砂岩	17.1	15.4	3.1	1026	完形	平面彫長方形, 裏面2面	
	182		湖片	2	224住	No.28	砂岩	7.6	6.0	4.2	60	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	183	11	磨石	2	225住	No.26	砂岩	19.4	7.4	7.7	1100	完形	平面彫長方形, 裏面3面, 裏面4	
	184		磨石	2	225住	No.27	砂岩	16.4	5.9	4.3	642	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	185		磨石	2	225住	北東部	砂岩	09.7	6.1	2.2	136.7	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面, 裏面2	
	186	21	湖片	2	227住	No.43	砂岩	30.2	11.7	9.0	3795	完形	平面彫長方形, 裏面3面, 榫条研磨痕有	
	192		湖片	2	228住	No.1	砂岩	11.8	4.4	3.3	246	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	195		湖片	2	228住	北東部	チャート	4.7	2.5	0.3	6.4	完形		
	196		湖片	2	229住	安山岩	4.6	3.2	1.4	18.4	2/3欠	上欠		
	197		磨石	2	229住	砂岩	8.2	7.8	3.8	332	完形	平面彫長方形, 裏面2面, 裏面2		
	198		湖片	2	231住	砂岩	21.0	18.3	15.0	6660	完形	平面彫長方形, 裏面2面		
	199		湖片	2	231住	北西部	砂岩	17.7	7.6	11.4	2276.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面, 粒皮粗	
	200		磨石	2	231住	e型	砂岩	7.3	5.1	3.0	65.3	2/3欠	上欠	
	201		打製石斧	2	231住	砂岩	7.2	5.4	2.0	91.5	完形	微彫		
	202		湖片	2	232住	砂岩	08.9	7.5	4.6	414.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面1面, 榫条研磨痕有, 粒皮粗		
	203		磨石	2	232住	北西部	砂岩	3.6	3.1	0.9	15.4	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	204		湖片	2	238住	ベルト内	凝灰岩	2.6	2.0	1.1	8.6	完形	一次加工線辺	
	207		磨石	2	246住	南西部	砂岩	2.3	2.2	1.2	9.7	完形	平面彫長方形, 全体磨	
	210		湖片	2	248住	砂岩	15.3	8.0	10.5	1294	完形	平面彫長方形, 裏面2面		
	211		部分磨石	2	250住	No.1	砂岩	18.3	6.2	2.1	324	完形		
	212		湖片	2	260住	凝灰岩	4.7	3.3		20.4	2/3欠	上欠		
	213	19	磨石	2	262住	砂岩	20.3	6.4	5.8	1006	完形	平面彫長方形, 裏面2面, 裏面2		
	214		湖片	2	263住	No.2	石英	1.2	1.2	0.6	1.3	完形		
	216		湖片	2	263住	北西部	砂岩	6.7	3.6	2.7	81.5	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	217		打製石斧	2	264住	No.10	石英	20.3	10.2	4.6	1070	完形	微彫	
	218		MF	2	溝10	凝灰岩	2.3	1.9	0.2	1.3	完形	微彫無縁1線辺		
	219		打製石斧	2	溝2	1線	頁岩	5.0	5.5	0.9	37.3	完形	平面彫不明	
	220		小形刀器	2	溝2	1線	チャート	4.1	2.8	0.6	8.4	完形	サイドスクレーパー	
	221		湖片	2	溝2	1線	砂岩	7.6	5.9	1.3	44.0	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	222		磨石	2	溝3	東型	凝灰岩	4.1	3.8	2.2	35.8	2/3欠	上欠	
	223		磨石	2	溝6	1線	砂岩	6.6	6.3	2.4	137.6	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	224		磨石	2	溝6	1線	砂岩	7.8	3.8	3.1	117.6	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	225		磨石	2	溝6	1線	砂岩	09.0	4.1	3.7	178.4	1/2欠	平面彫長方形, 裏面1面	
	226		磨石	2	溝6	1線	砂岩	7.2	6.3	5.3	256.0	1/3欠	下欠	
	227		大形刀器	2	溝6	e型	砂岩	7.2	5.4	1.3	61.7	完形	石核, 無型	
	228		湖片	2	溝6	e型	凝灰岩	5.0	2.3	4.2	21.4	完形		
	229		磨石	2	溝6	e型	花崗岩	7.8	5.1	3.5	160.1	完形	平面彫不明, 裏面1面	
	230		湖片	2	溝6	d型	砂岩	11.7	6.0	5.3	562.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面1面, 粒皮粗	
	231		小形刀器	2	溝6	d型	砂岩	2.7	2.0	0.7	3.4	完形	サイドスクレーパー	
	232		打製石斧	2	溝6	c型	凝灰岩	12.5	6.6	1.6	190.0	完形	微彫	
	233		大形刀器	2	溝6	1線	1線	8.4	6.1	1.5	85.7	完形	微彫	
	234		湖片	2	溝6	tr-10西部	砂岩	19.4	14.0	6.1	2426	完形	平面彫不明, 裏面1面, 粒皮粗	
	235		磨石	2	溝6	tr-10西部	花崗岩	10.0	7.8	5.2	508	完形	平面彫長方形, 裏面1面	
	236		湖片	2	溝6	tr-d9	チャート	2.6	2.5	0.6	3.8	完形	一次加工線辺	
	237		湖片	2	溝6	tr-d9	凝灰岩	4.5	4.5	0.7	19.3	完形	一次加工線辺	
	238		湖片	2	溝6	石核	2.8	2.1	1.5	11.7	完形			
	239		磨石	2	溝6	砂岩	7.5	6.7	4.7	43.1	2/3欠	上欠		
	240		磨石	2	溝6	砂岩	5.5	5.3	1.6	84.3	2/3欠	上欠		
	241		磨石	2	溝6	砂岩	5.0	4.9	1.8	54.5	1/2欠	平面彫不明, 裏面1面		
	242		石核	2	溝6	凝灰岩	02.9	1.4	0.3	0.7	1/3欠	下欠		
	243		湖片	2	溝6	凝灰岩	12.6	6.8	1.8	210	完形	平面彫長方形, 裏面1面, 粒皮中~粗		
	244		打製石斧	2	溝6	S12/W135	砂岩	11.8	8.3	2.6	348.0	2/3欠	上欠	
	245		磨石	2	溝6	W12/S6	砂岩	9.0	5.9	1.2	92	完形	平面彫長方形, 裏面2面	
	246		湖片	2	溝6	S27/W60	砂岩	10.9	8.3	3.4	466.0	2/3欠	上欠	
	247		湖片	2	不明	砂岩	28.0	27.5	19.0	1000	完形	平面彫不明, 裏面2面		
	248		不明	2	不明	砂岩	1.9	1.4	7.0	2600	完形	石核		
	249	31	湖片	2	溝6	No.41	凝灰岩	09.0	5.9	2.0	125.4	1/3欠	下欠	
	250		湖片	2	溝6	No.78	凝灰岩	14.8	8.5	6.1	1156.0	1/2欠	平面彫長方形, 裏面2面, 粒皮粗	
	251	7	火打石	4	溝19	チャート	2.7	2.7	1.1	19.1	完形	一次加工線辺		
	252		湖片	4	溝19	凝灰岩	3.3	2.2	0.8	5.5	完形	一次加工線辺		
	253		湖片	4	溝19	チャート	2.4	2.3	0.9	3.8	完形			
	254		打製石斧	4	溝18	砂岩	10.0	5.1	1.6	094.5	1/2欠	微彫		
	255		磨石	4	通称長堤欄4	No.10	凝灰岩	06.7	5.5	2.5	101.7	2/3欠	上欠	
	256		石核	4	溝6	砂岩	1.8	1.7	0.2	0.4	完形	無型		

第10表 石器・石製品一覽(3/4)

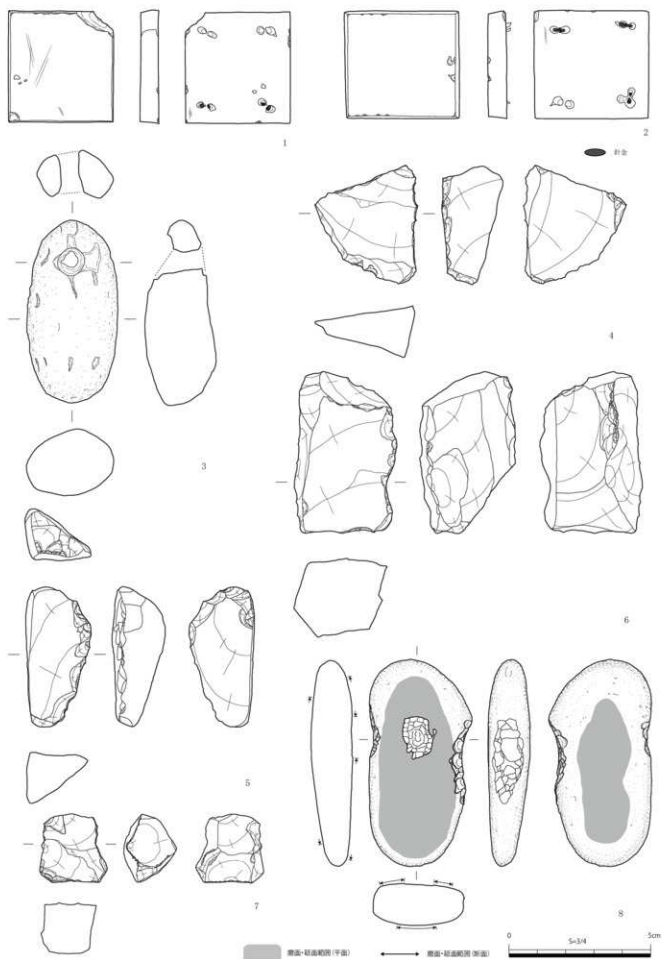
注記	図No	種類	地区	出土地点1	出土地点2	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	破損状況	備考
	257	廻片	4	溝6	No.2	黒曜石	4.2	3.7	1.2	24.4	完形	
	258	廻片	4	溝16		黒曜石	3.1	1.7	0.7	2.5	完形	
	259	石核	4	検出面		チャート	2.9	2.2	2.1	10.7	完形	打面数2以上
	260	火打石	4	検出面		チャート	2.5	2.0	1.5	9.5	完形	ツレ2以上
	261	RF	4	検出面		緑色灰岩片	(3.9)	(3.3)	(0.5)	(8.3)	1/2欠	一次加工跡あり
	262	石核	4	試掘5		チャート	4.3	3.1	1.7	22.1	完形	打面数3以上
	263	打製石片	4	不明		灰岩片	(4.8)	(4.1)	(1.5)	(9.2)	2/3以上欠	平面形不明
	264	大形石片	4	不明		黒曜石	8.0	7.8	2.4	103.1	完形	横刃石片
	265	廻石	4	不明		砂岩	9.7	3.5	2.8	90.7	完形	平面形短方形、砥面1面、粒度粗
	266	火打石	4	不明		チャート	5.6	3.7	3.1	86.0	完形	ツレ2以上
	267	打製石片	4	不明		砂岩	9.7	3.5	2.8	90.7	完形	平面形不明、砥面1面、線条面有、粒度粗
	268	廻石	4	不明		砂岩	(14.4)	(1.1)	(8.9)	(1738.0)	1/2欠	平面形不明、砥面2面、線条面有、粒度粗
	269	石核	4	不明		頁岩	5.4	4.0	1.6	32.2	完形	打面数2以上
	270	廻石	4	不明		砂岩	3.3	2.5	1.2	6.5	完形	
	271	石核	4	不明		黒曜石	3.6	2.6	0.6	5.9	完形	無葉四基面、基部二次加工なし
	272	打製石片	4	検出面	No.108	砂岩	(8.3)	(7.1)	1.6	(14.2)	1/2欠	平面形不明
	273	石核	4	検出面	No.144	黒曜石	3.1	2.2	0.4	1.6	完形	無葉四基面
	274	打製石片	4	検出面	No.183	黒曜石	(11.2)	(4.6)	1.1	(69.1)	1/2欠	短形
	275	石核	4	検出面	No.370	チャート	(1.5)	1.2	0.2	(0.3)	1/3以下欠	無葉四基面、断面、先端部欠損
	276	石核	4	検出面	No.646	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.7	完形	無葉四基面
	277	廻片	4	検出面	No.793	黒曜石	2.5	1.8	0.6	2.0	完形	
	278	廻片	4	検出面	No.794	黒曜石	2.7	1.7	0.4	2.0	完形	
	279	廻片	4	検出面	No.800	黒曜石	2.4	1.8	1.1	4.3	完形	
	280	廻片	4	検出面	No.848	黒曜石	2.5	1.6	0.6	1.8	完形	
	281	打製石片	4	検出面	No.866	黒曜石	(11.7)	(2.1)	1.8	(192.7)	1/3以下欠	平面形不明
	282	石核(石刀)	5	287住	2層	緑色灰岩片	(3.1)	(1.8)	(0.4)	(2.0)	2/3以上欠	
	283	石片	5	285住	南西部	チャート	(2.7)	2.0	0.4	(1.5)	1/3以下欠	右葉四基面、断面、飛行機跡、基部欠損
	284	浮子	5	287住	No.103	軽石	4.9	4.4	3.5	37.4	完形	
	285	浮子	5	287住	No.158	軽石	4.8	4.3	3.3	15.3	完形	
	286	浮子	5	288住	3層	軽石	3.1	2.2	1.5	2.7	完形	
	287	大形石片	5	289住	No.11	砂岩片	8.4	4.9	0.7	36.2	完形	横刃石片
	288	大形石片	5	289住	No.13	砂岩片	8.6	3.9	0.6	44.8	完形	横刃石片
	289	石核	5	290住	No.2	黒曜石	(2.3)	(1.5)	(0.3)	(0.7)	1/3以下欠	無葉四基面、片磨部欠損
	290	廻片	5	290住	No.70	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.9	完形	
	291	石核	5	290住	2層	黒曜石	2.6	1.8	1.4	5.0	完形	打面数2以上
	292	石核	5	291住	No.24	黒曜石	(2.0)	1.1	0.2	(0.3)	1/3以下欠	無葉四基面、先端部欠損
	293	石核	5	293住	No.5	砂岩	1.7	1.4	0.2	0.3	完形	無葉四基面
	294	石核	5	道路状遺構2	No.39	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.7	完形	短形
	295	小形石片	5	道路状遺構2	No.44	黒曜石	2.5	1.7	1.7	4.9	完形	横刃石片
	296	RF	5	道路状遺構	南部	黒曜石	2.4	1.3	0.5	1.5	完形	一次加工跡あり
	297	RF	5	r28	視見	黒曜石	2.8	2.1	1.1	5.3	完形	一次加工跡あり
	299	部分打製石片	5	226住		砂岩片	7.7	5.8	1.7	85.8	完形	
	300	石核	2	213住	南東	砂岩	2.7	1.4	0.3	0.3	完形	
	301	33 蓋	2	184住	No.6	緑色灰岩片	10.0	3.6	3.8	237	完形	打面数1
	303	石核	2	258住		チャート	3.1	2.3	1.6	14.4	完形	ツレ2以上
	306	廻片	2	140住	南東	チャート	2.1	1.7	0.3	1.2	完形	
	307	3 蓋	2	226住	北東	砂岩	6.4	3.0	2.4	16.3	完形	両面凹孔
	308	2 石製器物の	2	133住		大石片	3.8	4.1	8.3	26.1	完形	溝、表面3箇所に針金あり
	309	1 石製器物の	2	111住		大石片	3.9	3.7	6.8	26.2	完形	溝、表面2箇所に針金あり
	310	廻石	2	99住	北東上層	砂岩	(41.7)	(29.9)	(15.0)	(24.3)	1/2欠	砥面3、粒度粗
	311	廻石	2	99住	上層	砂岩	(96.4)	(24.5)	(25.5)	(81.4)	1/3以下欠	砥面3、粒度粗
	312	廻石	2	150住	No.15	砂岩	(70.6)	(88.8)	(18.5)	(150.3)	1/2欠	砥面2、粒度中
	313	35 筋線車	2	185住	No.1	砂岩	(52.0)	46.3	6.8	(21.9)	1/3以下欠	孔径2つ5つは貫通せず(孔径10.9mm、4.3mm)
	314	36 筋線車	2	200住	no.2	頁岩	48.9	44.7	20.8	69.9	完形	本溝深さ2.1mm、平面形凹孔
	315	廻石	2	208住	No.13	頁岩	(76.1)	(40.2)	(42.6)	(150.4)	1/3以下欠	孔径2つ5つは貫通せず(孔径10.9mm、4.3mm)
	316	石核	2	溝2	1層	黒曜石	(22.6)	17.5	2.7	(0.8)	1/3以下欠	右葉面、断面、飛行機跡、基部欠損
	317	打製石片	2		W117566	主形+フラス	(160.7)	90.6	22.9	(371.0)	1/3以下欠	短形
	318	打製石片	2	検出面	南東部	粘板岩	(47.6)	(24.6)	(3.7)	(3.9)	1/3以下欠	短方形
	319	打製石片	2	表採		頁岩	143.7	67.2	27.1	177.1	完形	短形
	320	廻石	1	表採		砂岩	(146.5)	(176.0)	(56.5)	(2125.0)	2/3以上欠	平面形不明、砥面1、溝状磨痕4本、粒度粗
	321	廻石	1	表採		砂岩	174.5	94.0	42.0	969.0	完形	平面形長筒形、砥面2、粒度中
	322	廻石	1	表採		頁岩	148.5	64.5	34.5	619.0	完形	平面形長方形、砥面5、粒度粗
	323	石核	2	W108N12	チャート	(13.8)	(11.4)	2.2	(0.2)	1/3以下欠		

第10表 石器・石製品一覽(4/4)

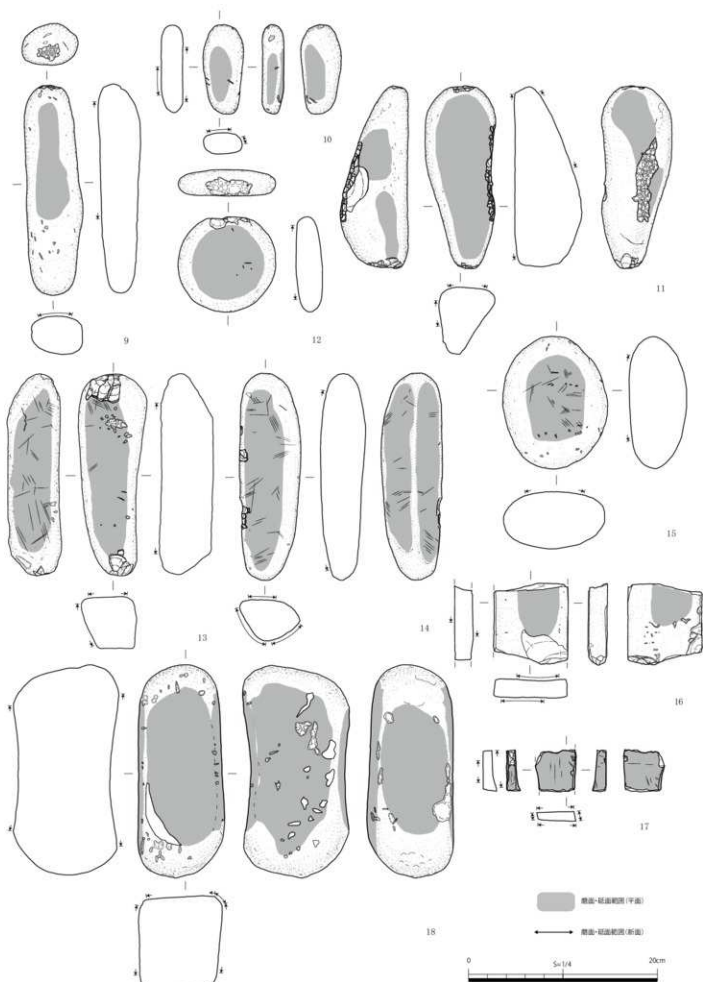
※ 200g未満は0.1g単位、200g以上は1g単位

出土地点	個数	長軸(径のみ、cm)			短軸(径のみ、cm)			重量(径のみ、g)		
		最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値	最小値	最大値	平均値
1住	25	6.3	12.2	9.2	2.3	4.7	3.5	39.9	143.6	114.7
9住	16	9.5	12.6	10.9	2.9	9.7	4.4	100.9	191.4	159.0
22住	16	6.6	9.6	8.0	2.2	4.1	2.9	41.7	102.6	62.4
135住	1	—	—	9.6	—	—	—	3.5	—	131.8
138住	1	—	—	15.0	—	—	—	4.9	—	376.0
145住	4	11.1	12.7	11.8	2.9	3.7	3.3	151.8	200.0	172.7
147住	4	7.4	12.0	9.7	2.7	4.4	3.7	74.5	180.6	123.3
147住	11	7.0	9.8	8.6	3.2	4.2	3.8	86.7	153.3	113.8
243住	19	7.4	11.6	9.1	2.8	5.1	84.0	184.0	184.1	113.3
244住	3	7.1	9.8	8.5	2.7	4.8	3.8	48.4	147.3	91.2
247住	3	—	—	10.7	4.9	5.5	5.2	—	—	176.3
249住	15	7.6	13.6	9.2	3.7	5.1	4.3	91.4	334.0	157.4
263住	3	6.5	8.2	7.6	2.7	3.5	3.2	50.4	85.8	66.0
平均(合計)	181	6.3	10.2	8.7	2.2	4.7	3.9	39.9	468.0	155.5

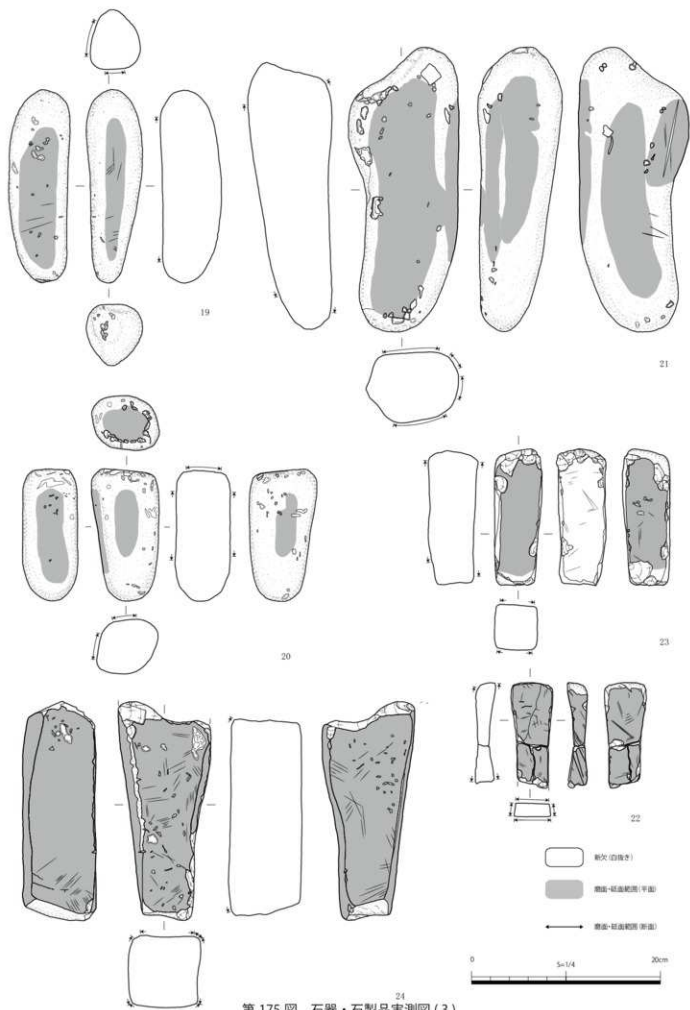
第11表 とも石(掘物用石錘)集計



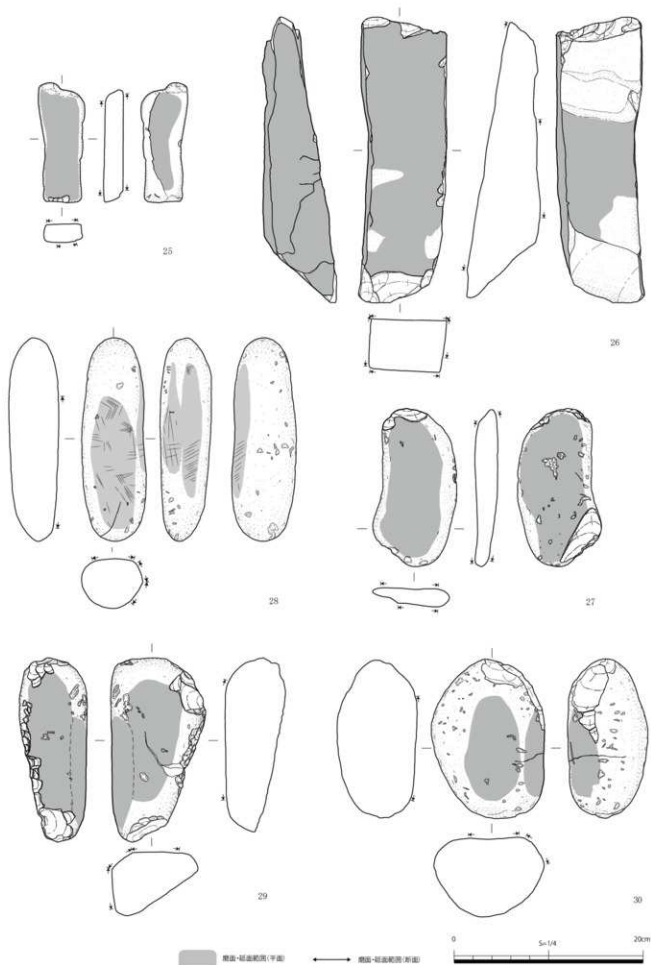
第 173 图 石器・石製品実測図(1)



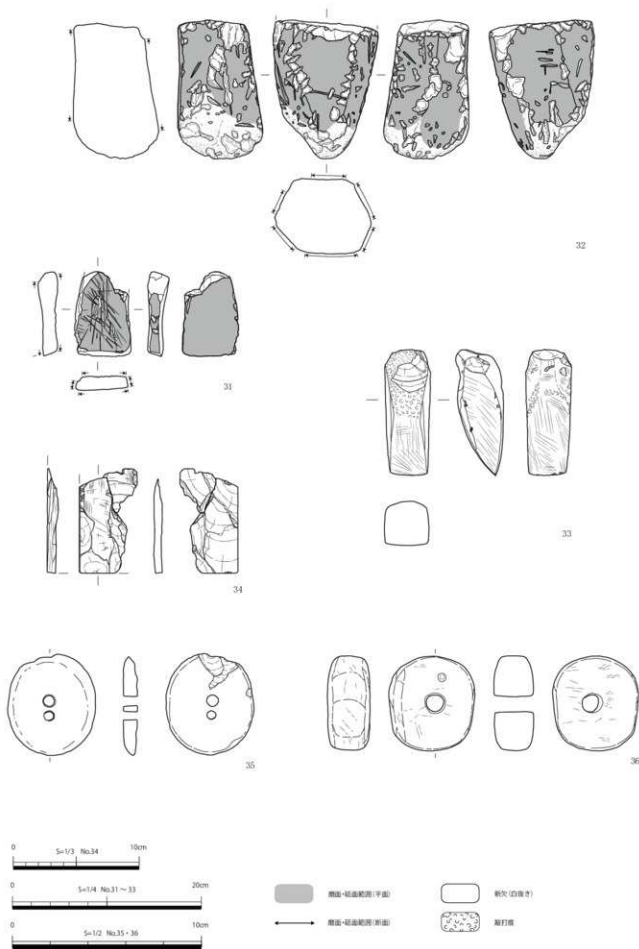
第 174 图 石器・石製品実測图(2)



第 175 図 石器・石製品実測図(3)



第 176 图 石器・石製品実測図(4)



第 177 图 石器・石製品実測図 (5)

3 金属製品(第178～181図、第12～14表、カラー写真図版14)

(1) 概要

金属製品は345点出土し、その内訳は鉄製品310点、銅製品23点、金属種別不明1点、銭貨11点である。その他、鉄滓が64.0837g出土している。これらの出土地点・器種・寸法等については一覧表(第12・13表)を参照されたい。なお、一部の製品については、錆化による損傷が著しく、計測ができなかった。

器種は、鉄製品が刀子・釘・鎌・鎌・斧・紡錘車・刃物・芋引鉄・鋸・燧鉄・ボルト・鐸・馬具・その他不明品、銅製品が煙管・鉸具・鉈尾・丸鞆・巡方・鉈・銅印・銅鏡・その他不明品、銭貨である。その内、比較的残存状態の良いなもの、特徴的なものを中心に92点を図示し、7点を写真掲載している。遺物の記載にあたっては図番号を使用している。また、遺物の形状等については、大半がX線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

(2) 鉄製品

刀子(1～35) 72点が出土し、35点を図示している。小松氏により形状の分類(文献14、以下同)がされているが、錆化による膨張で形状は不明瞭なものも多く、分類は困難である。現状から推定可能な点のみを述べると、4・5・7・10・16・18・26・28・29・32・34は両刃、6・9・14・15・22・25・33・35は片刃と推定される。また、13は木製の柄が良好に残存している。2は基部の片面、9は基部の両面に木質が付着している。

釘(36～42) 31点が出土し、7点を図示している。頭部が残存するものは6点ある。頭部の形状は、鑿の使用の有無、基部上端の折り曲げ・折り返しの有無が錆化による膨張で不明瞭な上、X線撮影を行っていないことから、特定が困難である。故に、小松氏により頭部形状による釘の分類が行われているが、前述の理由から、現状から推定可能な点のみを述べたい。38は鑿の使用の有無は不明であるが、基部上端を叩き伸ばして曲げていることから、IVまたはVa類と推定される。39は基部上端を叩き伸ばして丸く曲げていることから、Vb類と推定される。40は頭部の一部が欠損しているため、詳細は不明であるが、基部上面に楕円形の皿を載せたVII類に似る。42は基部が単に折り曲げられていることから、III類と推定される。また、41は頭部が欠損しているため、形状は不明であるが、脚部に木質

が付着している。

釘or鎌(43・44) 2点が出土し、図示している。43・44ともに断面が方形の棒状製品で、片側の幅が徐々に減じる形状をしている。釘の脚部もしくは鎌の基部とみられる。また、43は全面に木質が厚く付着している。

鎌(45～50) 10点が出土し、6点を図示している。小松氏により形状の分類が行われているため、現状からの分類を試みる。45は身部の一部が欠損しているため、身部平面は不明瞭であるが、正三角形または五角形とみられ、身部間の形状が逆刺であることから、IaまたはIIa類と推定される。46は身部平面が長三角形で、身部間の形状が角状または撥状であることから、VIIbまたはVIIc類と推定される。47・49は身部平面が長三角形で、身部間の形状が逆刺であることから、VIIa類と推定される。48は身部平面が正三角形で、身部間の形状が逆刺であることから、Ia類と推定される。50は雁股鎌のため、VIII類である。

鎌(51・52) 4点が出土し、2点を図示している。51は刃部が緩やかに湾曲しており、折り返し部は端部上端から側面にかけて折り返ししている。また、基部の両面には木質が付着している。52は刃部の湾曲が大きく、基部端部の形状は角丸である。折り返し部は端部の大半を折り返ししている。

斧(53・54) 2点が出土し、図示している。53は着柄部が袋状で、刃部は弧状を呈す。54は着柄部が袋状で、刃部は端部がやや丸みを帯びる。

紡錘車(55～61) 9点が出土し、7点を図示している。小松氏により紡輪の断面形状による分類が行われているが、錆化による膨張で紡輪の断面形状は不明瞭である。大きさについては、55・56は中型、57は小型とみられる。58～61は同一遺構内よりまとまって出土していることから、58は紡輪、59～61は紡輪の一部と判断した。

刃物(62) 1点が出土し、図示している。62は片側に刃部を有することから、何らかの刃物とみられるが、欠損が多く、器種の特定は困難である。

芋引鉄(63) 1点が出土し、図示している。63は肩が丸く、刃部は鋭利である。

鋸(64) 1点が出土し、図示している。64は片刃で、刃先は交互に振れている。この身の両面には木質が付着しており、柄の木材と推定される。

燧鉄(65) 1点が出土し、図示している。65は頂部、裾部が欠損しており、形状の詳細は不明である。

不明(66～79) 173点が出土し、14点を図示している。66は鎌に似た形状をしているが、断面が長方形であり、刃部を持たない。67は断面が長方形と方形で異なる棒状製品である。断面は長方形から方形へと変わり、さらに長辺を変えた長方形へと変化する。76～78は同一遺構内より出土していることから、同一個体の可能性が考えられるが、詳細は不明である。78は断面楕円形の棒状製品に孔を持つ板状製品を巻いた形状をしている。

(3) 銅製品

鉸具(80) 1点が出土し、図示している。80は緑金にT字形の刺金が接続する形状をしている。また、鉸具頭部はC字形をしている。

鉈尾(81・82) 2点が出土し、図示している。81は方形の一面が丸みを帯びる形状で、鉈留め痕は2カ所、孔は3カ所で見られる。何らかの原因で鉈留めが壊れ、3カ所に孔を開けて留め直した痕跡の可能性が考えられる。82は方形の一面が丸みを帯びる形状で、鉈留めは4カ所で良好に残る。

丸鞘(83) 1点が出土し、図示している。83は半円形で長方形の透かしが入る。鉈留めは3カ所で見られる。

巡方(84～86) 3点が出土し、図示している。84は方形で長方形の透かしが入る。鉈留めは5カ所で見られる。85は方形で長方形の透かしが入る。鉈留めは四隅にみられる。86は長方形で長方形と推定される透かしが入る。鉈留めは四隅で良好に残る。84・85に比べ、小型で、透かしは細長い形状をしている。

鏡(87・88) 7点が出土し、図示している。87はNo.64～69の6片を復元実測したものである。これらは同一遺構内より出土していることから、同一個体の可能性が考えられる。口縁部外側は上部に2本、下部に3本の沈線が入る。口縁部内側はわずかに膨らみ、沈線が入る。また、No.64はX線撮影により補修痕が確認されている。口縁部の欠損部を包むように銅板を折り曲げ、その端部を花卉状に切り、5カ所を鉈で留めている。なお、銅板に覆われた内側には2個の細い孔がみられ、補修時の失敗の孔の可能性が考えられる。88は薄い板状製品が湾曲した形状をしており、銅鏡と推定されるが、詳細は不明である。

銅印(89) 1点が出土し、図示している。89は印面が方形で、鈕の形状は蒼鈕有孔である。印面の輪郭は有郭で、印文は2行で「長良私印」と陽刻され

ており、朱の付着がみられる。材質は、奈良国立文化財研究所・沢田正昭氏のX線分析によると、主成分の銅の量に対して錫と鉛の量が多いという結果が出ている。

銅鏡(90・91) 2点が出土し、図示している。90は八稜鏡である。一部は被熱により溶けている。縁は断面台形の銅鑄式で、界圏は半圓がめぐる。裏面の紋様は錆化が著しく不鮮明であるが、瑞花双鳥文と推定される。外区の紋様は表面が荒れており不明であるが、1カ所に膨らみがみられる。鈕は円錐鈕が付く。91は海獣葡萄鏡である。欠損が著しく、縁や鈕は残存しておらず、詳細は不明である。裏面の紋様は海獣の身体と葡萄の房がみられる。

不明(92) 4点が出土し、1点を図示している。92は板状製品で、片端は断面三角形に膨らみ、もう片側はU字に曲がる。鏡の一部のようにも見えるが、詳細は不明である。

(4) 銭貨

銅銭(93～99) 11点が出土し、7点を写真掲載している。内訳は、富寿神宝1枚、延喜通宝5枚、開元通宝1枚、熙寧元宝1枚、寛永通宝1枚、銭貨不明1枚、雁首銭1枚である。93の富寿神宝は皇朝十二銭のひとつで、初鑄は818年である。松本市内では初の出土であり、その後、平成2年に小池遺跡、平成27年に高畑遺跡の調査でも出土している。94は文字が読み取れないが、古代銭貨の可能性が考えられる。95～99は溶着した状態で出土した。95・98は延喜通宝で、初鑄は907年である。96・97・99は文字が読み取れないが、出土状況からみて、延喜通宝であると推定される。(95～99は発見時には6枚の溶着とされていたが、その後、本書作成までの間に1枚ずつに分離されて展示等に使われ、5枚として保管されていた。分離前の状態での実測図は作成されていなかった。本稿では5枚として扱うが、95にはもう1枚分の残片らしきものが付着しており、それを6枚目と数えていた可能性もある。)

参考文献 文献14、文献37(巻末一覽参照)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
1		31住	横出面	瓦釘	31.1	9.6	8.0	1.5	Fe	
2	79	61住	横出面	不明	25.6	22.3	13.2	9.6	Fe	断面方形の棒状製品/片側が輪状になる
3	36	71住	横出面	釘	90.0	7.9	7.8	8.0	Fe	断面六角欠/断面方形
4	1	10住	東側土層	刀子	51.5	11.0	7.8	5.1	Fe	身部、茎尻欠
5		10住	東側	不明	63.8	27.4	6.2	20.6	Fe	
6	55	13住	No.02	紡錘車	255.0	51.5	8.3	50.6	Fe	紡錘車端欠
7	90	13住	No.01	銅鏝	87.0		2.6	54.5	Cu	八稜鏡/わずかに欠
8	7	15住	No.02	刀子	74.1	1.2	6.7	6.7	Fe	基部分の一部/断面の片面に木質付着
9	3	15住	No.15	刀子	117.2	14.1	5.6	17.6	Fe	身部及び基部分の一部か
10		15住	No.02	不明	151.9	10.5	3.5	4.3	Fe	
11		16住	下層	刀子	27.0	12.1	5.6	2.6	Fe	
12	93	16住	諏方神宝	22.7	21.8	1.7	1.5	Cu	わずかに欠/初測818年(威福天皇)	
13	84	16住	地方	32.8	31.1	3.9	10.2	Cu	真鍮金具	
14	46	17住	南側土層	鏝	101.2	14.6	13.1	13.0	Fe	基部分
15	43	18住	No.02	釘or鏝	49.5	10.2	8.9	4.5	Fe	断面方形の棒状製品/片側の端が輪状になる/全面に木質付着
16	44	18住	No.02	紡錘車	36.0	6.1	5.8	2.0	Fe	断面方形の棒状製品/片側の端が輪状になる
17	7	20住	北側	刀子	123.9	14.4	7.2	14.7	Fe	完形
18		20住	不明	41.2	29.2	5.4	14.6	Fe		
19	65	21~22住	横出面	鉄釘	95.9	31.1	5.3	30.3	Fe	頭部、茎部欠
20		21~22住	南側	不明	87.8	29.2	3.6	14.3	Fe	
21		22住	南側	不明	57.6	26.9	3.2	8.7	Fe	
22		22住	南側	不明	28.4	19.7	4.5	2.5	Fe	
23	89	22住	No.01	銅釘	33.0	32.0	28.0	52.5	Cu	完形
24	37	24住	南側土層	釘	103.3	8.2	8.0	7.4	Fe	断面六角/断面方形
25	24	24住	不明	釘	64.0	5.4	5.3	3.4	Fe	
26	75	25住	横出面	不明	83.9	40.6	6.0	26.3	Fe	板状製品
27		25住	南側	不明	76.2	18.8	4.1	12.6	Fe	
28	15	33住	No.04	刀子	87.7	17.0	10.4	14.4	Fe	切先、茎部欠
29	18	33住	No.04	刀子	72.5	9.6	5.1	6.0	Fe	茎部の一部欠
30		33住	No.04	刀子	40.0	10.2	3.6	3.7	Fe	
31	59	33住	No.01	紡錘車	124.9	9.8	8.6	12.7	Fe	紡錘車の一部か/断面円形
32	58	33住	No.01	紡錘車	46.9	24.8	9.9	6.4	Fe	紡錘車の一部
33	60	33住	No.01	紡錘車	62.0	6.0	5.8	3.5	Fe	紡錘車の一部か/断面円形
34	61	33住	No.01	紡錘車	35.0	9.0	8.4	3.9	Fe	紡錘車の一部か/断面円形
35		34住	P1	不明	34.7	13.0	6.8	6.5	Fe	
36		35住	東側	釘	56.2	6.2	5.9	2.6	Fe	
37		35住	不明	不明	23.5	13.0	8.8	3.2	Fe	
38		39住	北側	釘	36.0	6.6	5.3	1.6	Fe	
39		39住	南側	不明	65.0	19.5	5.0	7.4	Fe	
40		39住	北側	不明	30.6	18.1	4.1	2.1	Fe	
41	80	43住	不明	鍍具	44.8	44.0	9.6	39.8	Cu	完形
42	19	49住	南側	刀子	87.0	10.5	4.6	5.1	Fe	茎部の一部欠
43	11	49住	不明	刀子	36.9	7.4	6.6	3.6	Fe	茎のみ
44		50住	No.22	不明	39.1	22.1	7.8	7.4	Fe	
45	8	51住	北側土層	刀子	47.5	9.4	6.1	4.0	Fe	茎部の一部か
46	22	54住	No.01	刀子	198.0	16.3	6.7	27.5	Fe	完形
47	21	54住	東側	刀子	43.2	9.5	3.9	2.4	Fe	茎部の一部か
48		54住	横出面	不明	76.9	7.3	6.9	6.5	Fe	
49		54住	横出面	不明	41.3	6.4	6.1	2.4	Fe	
50		54住	東側	不明	27.2	10.0	9.9	2.2	Fe	
51	25	55住	No.56	刀子	95.8	15.6	6.4	14.2	Fe	切先、茎尻欠
52	20	55住	No.27	刀子	50.6	9.5	4.5	2.8	Fe	茎部の一部か
53	47	55住	No.01	鏝	74.7	14.8	7.6	9.6	Fe	茎部欠
54	73	55住	No.27	不明	47.3	19.6	8.0	4.1	Fe	断面長方形の棒状製品/2箇所が断面する
55	94	55住	残骸	15.6	13.9	1.3	0.8	Cu	わずかに欠	
56	26	56住	西側	刀子	103.8	16.0	6.5	9.7	Fe	切先欠
57		56住	横出面	釘	41.3	9.3	7.5	1.4	Fe	
58		56住	不明	不明	78.2	10.2	7.2	7.4	Fe	
59		58住	北側	不明	47.0	42.1	4.2	14.0	Fe	
60		59住	ペルト	不明	27.7	11.2	8.5	2.2	Fe	
61		59住	ペルト	不明	38.0	4.1	2.8	1.6	Fe	
62		59住	土層	不明	30.9	6.5	3.9	1.2	Fe	
63	23	66住	南側	刀子	55.3	7.8	2.2	2.9	Fe	茎部の一部か
64	87	69住	Pr	鏝	66.2	63.0	3.0	35.8	Cu	口縁部/軸径痕あり
65	87	69住	Pr	鏝	61.4	59.9	1.8	20.1	Cu	口縁部
66	87	69住	Pr	鏝	74.3	60.0	2.3	18.3	Cu	口縁部
67	87	69住	Pr	鏝	63.4	50.8	1.8	17.0	Cu	口縁部
68	87	69住	Pr	鏝	46.1	38.1	1.2	8.7	Cu	断面か
69	87	69住	Pr	鏝	45.1	41.3	1.1	7.4	Cu	断面か
70		72住	南側	刀子	25.2	8.0	3.8	0.9	Fe	
71		72住	不明	刀子	4.2	10.2	4.7	0.9	Fe	
72	28	74住	横出面	刀子	76.5	11.7	6.1	5.7	Fe	茎尻欠
73		74住	南側	不明	49.5	9.0	7.4	5.6	Fe	
74		74住	南側	不明	17.3	17.0	2.8	1.2	Fe	
75		76住	北側	不明	73.1	18.0	2.5	5.8	Fe	
76		80住	不明	不明	20.1	6.4	5.5	1.2	Fe	
77	24	81住	北側土層	刀子	50.5	12.5	5.7	3.7	Fe	切先のみ
78		81住	No.04	不明	28.2	7.7	6.6	1.4	Fe	
79		82住	南側	不明	27.5	16.0	6.9	2.5	Fe	
80		83住	横出面	不明	37.6	7.9	2.5	0.7	Fe	
81		83住	横出面	不明	31.8	6.4	1.5	0.5	Fe	
82		84住	No.02	刀子	90.9	10.8	3.9	9.1	Fe	
83	27	87住	横出面	刀子	127.3	13.4	3.6	15.0	Fe	茎尻欠
84	38	87住	横出面	釘	55.2	8.6	7.3	4.6	Fe	断面六角欠/断面方形
85		87住	横出面	不明	29.9	8.8	6.4	2.5	Fe	
86		87住	不明	不明	22.7	8.4	3.1	1.0	Fe	
87	53	88住	No.01	斧	114.4	39.7	32.8	212.8	Fe	完形
88		91住	南側土層	不明	41.6	29.9	7.1	11.7	Cu	
89	40	96住	釘	33.5	11.0	9.2	2.3	Fe	断面の一部、胴部欠/断面長方形	
90		96住	横出面	不明	34.8	22.3	6.8	7.8	Fe	
91	63	97住	芋引鉄	100.0	28.0	7.0	25.3	Fe	胴部先端欠	
92		98住	北側	標首	15.8	15.5	10.6	2.5	Cu	断面首
93		99住	横出面	釘	42.6	14.4	9.7	4.1	Fe	
94		99住	横出面	釘	38.5	6.3	5.1	1.8	Fe	

第12表 金属製品一覧(1/4)

No.	実測 標	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
95		99住	南西工堀	不明	34.9	8.6	3.7	2.7	Fe	
96		100住		鍔	78.0	31.9	3.7	16.4	Fe	
97		101住	北西	不明	43.6	5.8	5.7	2.4	Fe	
98		103住	No.17	刀子	81.4	15.5	6.0	9.6	Fe	
99		103住	No.28	刀子	75.2	17.3	10.3	13.8	Fe	
100_30		103住		刀子	76.2	9.2	7.0	6.6	Fe	基部の一部欠
101		109住	東側	刀子	80.4	12.0	5.0	6.4	Fe	
102_33		110住	No.28	刀子	128.2	14.0	7.3	15.8	Fe	基部欠
103_31		110住	出溝	刀子	85.2	13.8	6.8	8.2	Fe	基部の一部
104		110住	南側	刀子	34.5	10.2	4.7	2.6	Fe	
105_50		110住	南側	鍔	58.8	46.4	12.2	15.9	Fe	裏面鍔／片側の対面先端、後縁部、基部欠
106		110住	北側	不明	37.8	6.3	5.4	1.9	Fe	
107_81		110住	No.01	鍔	39.1	35.2	3.2	13.9	Cu	裏金具欠
108_82		110住	No.03	鍔	37.2	34.9	4.7	12.1	Cu	裏金具の一部欠
109		114住	南側	釘	39.5	7.5	7.2	2.9	Fe	
110		114住	南側	釘	25.9	6.5	6.3	1.7	Fe	
111		115住	横出面	釘	62.0	8.4	8.4	4.2	Fe	
112		122住		刀子	76.9	10.2	6.0	7.5	Fe	
113		122住	東側	不明	33.5	23.9	8.6	5.5	Fe	
114		126住	不明	不明	33.4	22.5	1.6	2.8	Fe	
115		126住	北側	不明	27.4	26.6	2.6	2.0	Fe	
116_85		126住	No.01	端方	31.5	29.7	2.5	5.9	Cu	裏金具欠
117		133住	表面	不明	60.3	3.6	2.1	1.9	Fe	
118		135住	溝	不明	-	-	-	3.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
119		139住	No.05	刀子	136.5	17.7	5.3	26.3	Fe	
120		136住	No.07	刀子	40.9	15.7	5.7	5.2	Fe	
121		136住	No.06	刀子	42.4	5.5	2.2	1.1	Fe	
122		136住	No.07	刀子	20.6	11.9	5.5	1.8	Fe	
123		136住	表面	鍔	110.4	32.1	10.7	29.0	Fe	裏又鍔
124		136住	No.27	丸刀か	42.6	4.0	3.6	1.5	Fe	
125		136住	No.03	鍔	106.5	8.0	7.0	12.2	Fe	
126		136住	No.03	不明	31.3	15.4	7.5	3.2	Fe	
127		136住	No.07	不明	32.9	5.5	4.8	1.4	Fe	
128		136住	No.06	不明	-	-	-	0.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
129		138住	No.10	不明	78.2	8.8	7.5	8.8	Fe	
130		138住	No.13	不明	10.1	6.0	5.5	0.4	Fe	
131		139住	No.12	不明	20.5	8.8	0.5	0.1	Fe	材質不明
132		140住	表面	不明	62.5	14.4	3.7	30.7	Fe	
133		140住	北西壁	不明	28.2	19.5	8.5	6.8	Fe	
134		141住	No.02	不明	48.4	15.6	3.1	9.9	Fe	
135		143住	P4	刀子	125.8	15.8	10.0	17.3	Fe	
136_51		143住	No.03	鍔	158.0	38.9	7.2	76.0	Fe	基部の端部欠／基部の内部に木貫付着
137		143住	表面	不明	33.3	6.3	8.4	2.0	Fe	
138		143住	P4	不明	25.5	7.6	7.2	1.7	Fe	
139		144住	No.01	不明	72.0	10.0	3.8	5.0	Fe	
140		145住	No.17	不明	52.8	11.0	8.5	11.5	Fe	
141		145住	No.07	不明	29.5	17.8	8.8	4.7	Fe	
142		145住	No.07	不明	24.0	12.0	5.8	1.8	Fe	
143		146住	北東一ノ工堀	釘	16.0	6.7	3.4	0.9	Fe	
144		150住	No.12	不明	-	-	-	3.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
145_10		152住	No.09	刀子	114.1	14.8	6.5	15.4	Fe	切先、葉欠
146		152住	No.09	不明	30.0	9.0	4.4	2.3	Fe	
147_13		153住	刀子	116.2	10.9	9.0	11.8	Fe	切先欠／木製の柄が付く	
148		153住	北西	動輪	63.4	63.3	37.0	37.0	Fe	
149_14		155住	No.18	刀子	102.8	10.7	5.6	6.3	Fe	葉欠
150_17		155住	No.12	刀子か	106.5	21.6	7.0	18.3	Fe	断面二角形
151_39		155住	No.22	釘	68.4	6.3	7.7	8.3	Fe	鋸部先端わずかに欠／断面方形
152		156住	北東	不明	-	-	-	1.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
153_16		157住	No.05	刀子	114.2	21.3	5.1	20.2	Fe	基部の一部欠
154		157住	No.05	鍔	66.1	20.9	3.4	7.9	Fe	
155		157住	No.05	釘	25.7	5.5	4.9	1.4	Fe	
156		158住	北東中堀	刀子	66.3	12.1	9.1	5.2	Fe	
157		161住	No.04	刀子	75.3	14.1	6.8	10.8	Fe	
158_48		161住	No.03	鍔	66.3	28.0	9.0	10.9	Fe	身筒側、基部欠
159_52		161住	No.01	鍔	122.9	22.1	5.7	23.3	Fe	刃形
160		161住	No.99	不明	60.0	16.0	4.0	7.2	Fe	
161_95		161住	延喜書宝篋	No.95	19.0	18.4	3.5	3.6	Cu	刃形／初稿907年(南朝天皇)
162_96		161住	延喜書宝篋	No.95	20.2	20.2	2.0	2.0	Cu	刃形
163_97		161住	延喜書宝篋	No.95	19.3	19.0	1.5	2.6	Cu	刃形
164_98		161住	延喜書宝篋	No.95	19.5	19.2	1.9	2.2	Cu	刃形／初稿907年(南朝天皇)
165_99		161住	延喜書宝篋	No.95	21.2	20.9	2.4	3.0	Cu	わずかに欠
166		164住	No.01	刀子	36.0	13.0	2.3	4.6	Fe	
167		164住	No.09	鍔	77.1	9.1	4.9	6.5	Fe	
168		164住	No.21	不明	65.3	8.0	7.8	5.2	Fe	
169		164住	No.01	不明	-	-	-	10.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
170		164住	No.09	不明	-	-	-	8.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
171		164住	ベニト	不明	-	-	-	8.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
172		164住	No.11	不明	-	-	-	3.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
173		165住	Pn	釘	32.0	10.5	5.2	5.1	Fe	
174		165住	Pn	不明	33.5	31.5	10.0	16.5	Fe	
175		165住	Pn	不明	39.6	22.6	8.0	12.1	Fe	
176		166住	Pn	不明	-	-	-	3.5	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
177		168住	北西	不明	47.0	5.8	5.1	2.3	Fe	
178		171住	No.01	刀子	62.2	13.3	6.5	8.3	Fe	
179		171住	No.02	刀子	42.1	8.0	1.2	1.5	Fe	
180		171住	No.02	不明	-	-	-	5.9	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
181		171住	No.01	不明	-	-	-	3.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
182		173住	No.21(床下)	釘	62.0	11.6	8.2	9.7	Fe	
183		173住	No.01	不明	38.8	13.6	8.1	3.6	Fe	
184		173住	No.01	不明	14.2	8.6	4.0	0.8	Fe	
185_92		174住	No.01	不明	40.8	33.2	3.0	4.5	Cu	板状製品
186_86		175住	端方	端方	27.8	23.2	5.7	6.2	Cu	裏金具、透かしの一部欠
187		176住	床面	不明	29.4	23.3	2.1	2.0	Fe	
188_91		180住	No.01	動輪	42.0	35.0	10.0	26.3	Cu	海胆殻動輪

第12表 金属製品一覽(2/4)

No.	実測値	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
189		182住	No.05	刀子	170.0	13.5	6.1	19.0	Fe	
190	29	182住	No.01	刀子	151.0	15.5	8.0	18.3	Fe	菜刀欠
191		182住	No.04	刀子	77.2	11.6	4.8	7.0	Fe	
192		182住	No.01	不明	45.7	7.7	4.5	2.3	Fe	
193		182住	No.09	不明	44.2	7.5	5.0	3.0	Fe	
194		182住	北東	不明	22.8	11.5	3.0	1.3	Fe	
195	32	184住	No.01	刀子	235.0	17.0	9.0	22.5	Fe	完形
196		184住	No.13	釘	51.4	7.5	6.5	3.1	Fe	
197		184住	No.09	不明	53.1	17.0	5.6	9.6	Fe	
198	45	186住	No.03	鏃	141.0	16.0	11.5	20.3	Fe	身体の一部、身体側欠
199		186住	No.13	鏃	57.2	21.5	3.2	9.9	Fe	
200		186住	No.19	不明	134.0	8.2	7.7	11.3	Fe	
201		186住	No.08	不明	67.1	6.0	8.0	6.8	Fe	
202		186住	No.14	不明	39.7	9.5	3.5	2.9	Fe	
203		186住	No.14	不明	31.7	9.0	6.5	2.7	Fe	
204		188住	表面	不明	12.7	10.2	7.0	1.2	Fe	
205		189住	No.01	鏃	39.4	16.3	14.5	11.5	Fe	
206		191住	No.13	釘	63.7	10.0	5.8	6.5	Fe	
207		191住	No.11	不明	48.5	9.5	4.5	3.0	Fe	
208		191住	No.11	不明	30.3	7.1	3.0	1.6	Fe	
209		191住	No.11	不明	19.7	8.5	4.0	1.5	Fe	
210		193住	北東	不明	-	-	-	1.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
211		195住	南東	不明	24.6	23.1	2.3	4.1	Fe	
212		195住	南東	不明	-	-	-	-	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
213		196住	No.06	刀子	105.8	12.8	9.8	10.9	Fe	
214	78	197住	刀子	33.3	30.2	7.2	6.3	Fe	板状製品/孔を持つ	
215	76	197住	不明	35.6	28.5	4.5	4.1	Fe	前面方形の棒状製品/屈曲する	
216	77	197住	不明	24.9	24.3	3.2	2.1	Fe	板状製品/孔を持つ	
217		197住	南西	不明	-	-	-	2.2	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
218		200住	No.11	不明	89.0	10.8	7.7	10.7	Fe	
219		203住	No.08	不明	72.1	5.0	4.0	3.1	Fe	
220		203住	No.08	不明	26.5	5.0	3.5	1.3	Fe	
221		205住	No.01	刀子	46.0	10.8	4.3	3.7	Fe	菜刀欠
222	49	205住	No.08	鏃	78.3	20.0	8.3	0.9	Fe	菜刀欠
223		205住	No.08	鏃	30.3	6.0	3.7	0.9	Fe	
224		206住	南東	不明	13.8	5.4	4.2	0.4	Fe	
225		206住	南東	不明	26.0	6.5	4.2	0.7	Fe	
226		216住	床No.01	不明	24.2	13.4	1.0	1.2	Cu	
227		217住	No.04	不明	59.5	15.7	3.3	6.7	Fe	
228		219住	No.03	刀子	150.5	14.8	6.5	7.9	Fe	
229		219住	No.03	不明	66.2	13.7	9.3	7.9	Fe	
230		220住	南西	不明	22.3	4.5	3.4	0.4	Fe	
231	35	221住	No.10	刀子	143.1	11.0	5.5	11.9	Fe	切先欠
232	34	221住	No.13	刀子	137.5	21.5	7.2	25.8	Fe	菜刀欠
233		221住	No.02	釘	94.8	12.1	10.7	12.6	Fe	
234		221住	No.03	不明	91.2	15.1	5.8	19.1	Fe	
235		221住	北西	不明	54.7	8.0	5.4	4.1	Fe	
236		221住	不明	不明	-	-	-	-	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
237		221住	No.01	刀子	85.8	12.4	4.8	9.0	Fe	
238	222・223住	南西	刀子	34.6	9.4	4.1	2.5	Fe		
239		223住	No.70	刀子	123.8	12.5	7.5	9.7	Fe	
240		223住	南東上～下層	刀子	91.8	11.4	5.0	8.1	Fe	
241		223住	No.01	釘	47.4	8.0	6.5	5.1	Fe	
242		223住	P1 No.77	不明	106.3	12.4	7.4	11.9	Fe	
243		223住	No.02	不明	47.8	4.5	4.5	2.4	Fe	
244		223住	P1 No.77	不明	29.4	7.2	4.5	1.5	Fe	
245		223住	No.02	不明	-	-	-	1.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
246		223住	No.01	不明	-	-	-	0.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
247		224住	No.01	刀子	81.7	10.1	2.4	5.0	Fe	
248		224住	No.24	刀子	25.8	10.8	2.5	1.1	Fe	
249		224住	No.01	不明	-	-	-	9.1	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
250		224住	No.24	不明	-	-	-	3.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
251		225住	菜刀No.01	刀子	163.0	11.6	5.5	20.2	Fe	
252		225住	南西	紡錘車	35.3	26.8	3.1	6.4	Fe	
253		225住	No.23	不明	37.1	15.4	2.5	2.0	Fe	
254		225住	菜刀No.01	不明	-	-	-	2.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
255		225住	菜刀	不明	-	-	-	2.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
256		225住	南西	不明	-	-	-	2.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
257	64	225住	No.02	鏃	190.0	23.3	6.5	33.5	Fe	の2に身体側欠/両面に木質付着
258		227住	No.01	不明	65.0	7.5	4.3	3.4	Fe	
259		227住	No.01	不明	27.9	7.2	4.9	2.2	Fe	
260		227住	No.01	不明	32.0	7.0	5.0	1.8	Fe	
261		235住	不明	不明	-	-	-	17.5	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
262		237住	上層	不明	-	-	-	4.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
263		247住	No.02	刀子	58.5	12.5	5.2	4.2	Fe	
264		247住	No.02	不明	-	-	-	1.7	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
265		251住	表面	不明	50.6	6.4	5.1	3.8	Fe	
266		251住	ペルト	不明	-	-	-	2.1	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
267		251住	表面	不明	-	-	-	1.6	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
268		258住	P1	不明	-	-	-	3.3	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
269		262住	No.02	不明	36.3	14.7	2.3	2.7	Fe	
270		263住	No.01	不明	-	-	-	3.4	Cu	錆化による損傷が著しく、計測不可
271		264住	No.07	不明	70.1	12.1	6.5	7.9	Fe	
272		264住	No.07	不明	-	-	-	1.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
273		264住	No.07	不明	-	-	-	1.0	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
274	56	268住	No.01	紡錘車	147.3	50.5	7.5	29.7	Fe	紡錘車側欠
275		269住	No.12	不明	33.3	5.1	4.7	1.3	Fe	
276		274住	北東	釘	21.9	7.9	5.7	0.8	Fe	
277		275住	南上～下層	不明	47.6	14.6	6.5	7.9	Fe	
278	41	277住	No.39	釘	36.6	6.4	6.3	1.5	Fe	前面欠/前面方形/腕部に木質付着
279	62	278住	No.01	不明	61.5	24.2	3.8	9.0	Fe	片側に対面を持つ
280		278住	No.04	不明	59.5	8.2	7.8	9.2	Fe	
281		278住	南東	不明	22.4	18.3	6.9	8.5	Fe	
282		279住	南東側欠	不明	81.3	39.1	13.0	44.0	Fe	

第12章 金属製品一覽(3/4)

No.	実測 図	出土遺構	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	金属 種別	備考
283		279住	甕	不明	41.5	6.0	5.2	1.9	Fe	
284		281住	丸釘	不明	27.3	9.5	8.2	2.9	Fe	
285		281住	甕	不明	27.2	18.0	3.3	2.7	Fe	
286		281住	不明	不明	26.5	6.2	4.0	0.9	Fe	
287		281住	No.41	不明	-	-	-	2.9	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
288	88	281住	No.782	鏝	90.0	74.2	1.0	32.0	Cu	銅部か
289	57	284住	No.01	紡錘車	42.8	41.2	28.4	16.4	Fe	紡錘及び回転の一部
290	67	2851住	No.135	不明	54.9	5.1	5.0	2.1	Fe	棒状製品・断面は部位により長方形と方形で異なる
291		281住	No.96	不明	17.3	2.4	5.0	1.0	Fe	
292	4	286住	No.78	刀子	260.5	15.8	6.1	30.2	Fe	定形
293		286住	No.79	不明	28.2	9.9	3.6	1.6	Fe	
294		286住	No.80	不明	21.7	7.5	4.8	1.3	Fe	
295	83	287住	No.203	丸鋸	27.7	17.8	3.4	3.2	Cu	鍍金器具
296	6	2881住	No.149	不明	135.3	13.8	4.5	15.8	Fe	切先欠・基部の両面に木質付着
297	12	288住	No.300	刀子	71.9	8.6	3.7	4.2	Fe	基部の一部
298	69	288住	No.45	不明	67.5	9.4	5.5	5.1	Fe	断面長方形の棒状製品・片側の幅が徐々に減る
299	70	288住	No.51	不明	71.1	21.4	5.3	1.2	Fe	板状製品・両面に木質付着
300		288住	No.61	不明	32.7	7.5	7.0	1.6	Fe	
301	54	291住	No.01	斧	150.0	59.5	41.0	610.0	Fe	定形
302	5	293住	No.52	刀子	64.3	16.6	7.1	13.7	Fe	基部及び見部の一部
303	71	293住	No.68	不明	50.0	28.5	4.0	9.6	Fe	板状製品
304	74	293住	No.83	不明	41.7	9.8	4.7	3.9	Fe	断面長方形の棒状製品
305		293住	No.81	不明	17.4	9.9	3.4	1.1	Fe	
306		4-1-21	No.13	不明	44.3	5.6	4.6	1.5	Fe	釘状
307	9	4-1-11	No.08	刀子	146.6	12.5	5.9	11.6	Fe	切先欠・基部の両面に木質付着
308		4-1-52	不明	不明	66.3	13.0	8.5	11.6	Fe	ホムド状
309		甕6	No.18	不明	30.6	30.4	3.9	5.6	Fe	
310		甕6	b-c間上層	不明	35.6	6.6	3.4	1.6	Fe	
311		甕6	1間	不明	15.9	4.8	4.3	0.5	Fe	
312		甕6	b-c間上層	不明	-	-	-	3.8	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
313		甕9	不明	不明	-	-	-	8.4	Fe	錆化による損傷が著しく、計測不可
314		甕9	不明	不明	98.0	7.8	6.1	8.4	Fe	
315		甕19	トレンチ	不明	37.0	9.5	9.3	6.4	Fe	
316		甕19	不明	不明	20.8	10.9	5.3	1.4	Fe	
317		通気装置5	甕	不明	39.8	19.4	4.0	4.7	Fe	
318		通気装置5	甕	不明	38.8	24.0	4.5	5.8	Fe	
319		柱8	不明	不明	49.3	12.6	11.3	18.2	Fe	
320		竈11付設	不明	不明	-	-	-	49.3	不明	錆化による損傷が著しく、計測不可
321		1区 検出面	126住から5m西	刀子	71.8	15.2	10.0	10.4	Fe	
322		1区 検出面	241住から5m北西	釘	30.4	6.0	5.5	1.5	Fe	
323		1区 検出面	91住から1.5m北	道具	34.0	24.5	6.9	4.0	Fe	
324		1区 検出面	681住から3m東	丸釘	33.0	9.2	8.5	1.3	Fe	
325		1区 検出面	681住から5.3m東	丸釘	26.3	4.1	4.1	1.4	Fe	
326		1区 検出面	90住から1.5m東	ホムド	86.0	20.5	18.0	36.8	Fe	
327		1区 検出面	261住から2m北西	不明	155.0	63.0	4.0	91.0	Fe	
328		1区 検出面	不明	不明	216.0	8.9	7.2	24.0	Fe	
329		1区 検出面	不明	不明	72.8	10.0	8.0	7.7	Fe	
330		1区 検出面	87住から2.5m南	不明	46.5	15.8	11.2	12.0	Fe	
331		1区 検出面	78住から1m東	不明	25.6	4.3	4.5	1.0	Fe	
332		1区 検出面	86住から5.3m南	不明	16.0	3.9	2.6	0.2	Fe	
333	42	1区 検出面	釘	82.1	16.2	5.5	9.6	Fe	脚部先端欠・断面方形	
334		2区 検出面	刀子	28.7	11.3	4.5	5.0	Fe		
335		2区 検出面	刀子	80.7	13.4	5.8	6.1	Fe		
336	72	4区 検出面	不明	24.8	24.5	10.1	4.6	Fe	断面長方形の輪状製品	
337	66	4区 検出面	No.009	不明	54.3	9.8	5.5	6.2	Fe	断面長方形の棒状製品・形状は断面に異なる
338	68	4区 検出面	No.561	不明	47.7	13.4	10.6	17.9	Fe	棒状製品・断面は部位により長方形と方形で異なる
339		4区 検出面	No.012	不明	30.7	8.2	8.0	2.8	Fe	
340		4区 検出面	No.015	鍍金	42.7	11.0	11.0	6.0	Cu	鍍金
341		4区 検出面	No.783	開元通宝	22.3	21.8	1.1	1.6	Cu	わずかに欠・初唐621年(唐)
342		4区 検出面	No.784	開元通宝	24.4	23.4	1.0	1.8	Cu	わずかに欠・初唐1088年(唐)
343		4区 検出面	No.001	景永通宝	23.2	22.9	1.1	2.3	Cu	定形・初唐1536年(明正天皇)
344		4区 検出面	No.008	無背銭	20.7	19.4	1.7	2.8	Cu	
345		4区 検出面	No.381	不明	19.7	19.1	2.0	0.5	Cu	

第12表 金属製品一覽(4/4)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
1	1住	東側	236.0	24	22-23住	検出面	126.0	47	39住	検出面	199.5
2	4住	北側	54.0	25	25住	南側	1041.2	48	39住	南側	36.0
3	4住	南側	14.0	26	25住	南側	210.8	49	44住	東側	242.0
4	4住	南側	24.0	27	25住	南側	174.0	50	45住	南側	34.0
5	8住		636.0	28	25住	北側	135.8	51	49住	北側	174.0
6	8住		100.0	29	28住	西側上層	50.0	52	49住	南側	122.0
7	9住	北側下層	54.0	30	28住	西側中層	4.0	53	50住	東側下層	126.0
8	9住	北側	46.0	31	29住	北側	116.0	54	50住	東側下層	96.8
9	10住	西側	66.0	32	29住	No.15	8.7	55	50住	P12	82.0
10	11住	南側上層	118.0	33	30住	検出面	148.0	56	50住	カマド	56.0
11	15住	南側	226.0	34	31住	北側	217.0	57	50住	西側中層	18.0
12	15住	検出面	No.09	35	32住	検出面	642.0	58	50住	東側下層	14.0
13	17住	検出面	52.0	36	32住	南側上層	642.0	59	50住	上層	4.0
14	17住		38.0	37	33住	No.05	336.0	60	50住	ベルト	20.0
15	20住	南側	273.0	38	33住	西側上層	160.0	61	50住	下層	56.0
16	20住	ベルト	159.7	39	33住	南側	28.0	62	55住	No.08	1198.0
17	20住	北側	50.0	40	33住	東側中層	24.0	63	54住	東側	460.4
18	21住	西側	228.0	41	33住	東側下層	16.0	64	54住	東側	427.4
19	22住	南側	159.9	42	33住	西側下層	8.0	65	55住	P17	314.0
20	22住	南側	16.0	43	34住	南側上層	636.0	66	55住	北側中層	298.0
21	23住	南側	198.4	44	35住	東側	46.0	67	55住	北側中層	274.0
22	23住	北側	36.0	45	36住	東側	194.0	68	55住	北側中層	102.0
23	21~23住	検出面	32.0	46	39住	北側	768.0	69	55住	北側上層	81.0

第13表 鉄滓一覽(1/3)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
70	55件	ベルト	66.0	104	99件	Pt	112.0	258	166件	No.15	66.0
71	55件	P3	62.0	105	99件	横出面	50.0	259	166件	P1	10.0
72	55件	南側中層	52.0	106	99件	中層	34.5	260	166件	北西	264.0
73	55件	カマド厨辺	44.0	107	101件	上層	158.0	261	166件	上層	296.0
74	55件	横出面	34.0	108	102件	横出面	276.0	262	167件	No.07	198.0
75	55件	南側中層	18.0	109	103件	南側	4.0	263	168件	No.03	236.0
76	55件	横出面	17.0	110	103件	北側	12.0	264	168件	No.13	436.0
77	56件	東側	350.0	111	104件	北側	16.0	265	168件	No.14	240.0
78	56件	西側	392.0	112	107件	西側	566.0	266	168件	南東	20.0
79	58件	北側	34.0	113	109件	東側	146.0	267	168件	ベルト	70.0
80	58件	北側	422.0	114	110件	南側	4.0	268	168件	南東	38.0
81	58件	北側	45.9	115	110件	南側上層	88.0	269	169件	北東	92.0
82	59件	No.02	235.3	116	113件	北側	276.0	270	169件	北西	10.0
83	59件	ベルト	486.0	117	110件	南側	28.0	271	171件	北西	42.0
84	59件		112.0	118	110件	西側	46.0	272	171件	北西	108.0
85	59件		34.0	119	113件	東側	18.0	273	171件	北東	86.0
86	59件		10.0	120	114件	北側	8.0	274	172件	北側	56.0
87	59件		100.0	121	114件	北側上層	40.0	275	172件	南側	72.0
88	59件	東側上層	938.0	122	114件	北側下層	98.0	276	173件	北西	10.0
89	59件	西側上層	654.0	123	114件	北側下層	26.0	277	173件	南東	18.0
90	59件	西側中層	10.0	124	121件	南側	300.0	278	174件	北東	8.0
91	59件	西側中層	464.0	125	122件	東側	82.0	279	175件	No.07	90.0
92	59件	西側下層	100.0	126	122件	南側	38.0	280	175件	No.24	228.0
93	59件	東側下層	46.0	127	124件	南側	372.0	281	175件	ベルト	24.0
94	59件	東側下層	244.0	128	124件	北側	178.0	282	175件	No.08	26.0
95	59件	横出面	10.0	129	124件	北側	76.0	283	175件	南東	6.0
96	59件	横出面	30.0	130	125件	ベルト	144.0	284	175件	ベルト	6.2
97	61件	No.03	20.0	131	126件	北側	220.0	285	180件	北側上層	42.0
98	61件	南側	88.0	132	128件	西側	66.0	286	180件	南東上層	24.0
99	61件	No.03	193.3	133	132件	西側	33.0	287	180件	北東	356.0
100	62件	No.01	259.5	134	132件	No.03	10.0	288	181件	No.03	194.0
101	63件	西側	580.0	135	133件	北西	90.0	289	181件	No.05	192.0
102	64件		188.0	136	133件		4.0	290	181件	上層	18.0
103	64件	横出面	200.0	137	136件	No.04	240.0	291	182件	南東	28.0
104	66件	南側	253.8	138	139件	北側	68.0	292	182件	北側	10.0
105	68件	上層	19.0	139	139件	北西	32.0	293	183件	北西	42.0
106	68件	上層	338.0	200	136件	南西	64.0	294	183件	南西	24.0
107	70件	西側	66.0	201	137件	No.01	32.0	295	183件	ベルト	6.0
108	70件		12.0	202	137件	No.02	188.0	296	186件	ベルト	30.0
109	72件	南側	16.0	203	138件	No.11	16.0	297	187・208件	表面	94.0
110	72件		144.0	204	138件	北東下床面	6.0	298	189件	北西	54.0
111	72件	北側	205.0	205	138件	南東下床面	22.0	299	190件	No.01	348.0
112	73件	北側	50.0	206	138件	南東	18.0	300	191件	No.03	42.0
113	76件		12.0	207	138件	No.09	17.7	301	191件	ベルト	106.0
114	76件	北側上層	28.0	208	139件	ベルト	126.0	302	191件	ベルト	4.0
115	76件	横出面	594.6	209	140件	北西	600.0	303	191件	表面	590.0
116	77件	No.03	39.0	210	140件	ベルト	10.0	304	192件	No.07	250.0
117	77件	No.04	80.0	211	140件	東側	30.5	305	192件	No.08	26.0
118	77件		20.0	212	141件	No.05	16.0	306	192件	No.09	328.0
119	77件		10.0	213	142件	南西	168.0	307	192件	南西	80.0
120	79件	下層	484.0	214	142件	南東	38.0	308	193件	Pt	62.0
121	80件	北側	342.0	215	143件	No.04	54.0	309	193件	南西	12.0
122	80件	南側	27.6	216	143件	表面	91.6	310	193・257件	表面	58.0
123	82件	北側	18.5	217	144件	北側	52.0	311	194件	表面	10.0
124	82件	北側	22.0	218	145・146・209・240件	上層	16.0	312	194件	北東	60.0
125	83件		88.8	219	146件	南西上～下層	116.0	313	195件	南東	88.0
126	84件	北側	338.7	220	146・238・241・242件	表面	8.0	314	195件	北西下層	26.0
127	84件	横出面	346.0	221	150件	北西	40.0	315	195件	北西上～下層	40.0
128	84件	南側	108.0	222	151件	北側	31.6	316	199件	北東	14.0
129	84件	東側	510.0	223	152件	ベルト	7.0	317	199件	北東	20.0
130	85件	西側	250.6	224	153件	北西	296.0	318	199件	ベルト	16.0
131	85件		8.7	225	154件	南東	48.0	319	199・211件	表面	8.0
132	85件	ベルト	18.5	226	155件	南東	44.0	320	200件	南西	32.0
133	85件		96.2	227	155件	No.19	354.0	321	200件	北西	140.0
134	85件	横出面	22.0	228	155件	No.19	11.9	322	200件	No.01	8.0
135	86・87件	横出面	12.0	229	156件	Pt	28.0	323	200件	ベルト	22.0
136	87件	横出面	174.0	230	156件	南東	188.0	324	200件	ベルト	32.0
137	88件	横出面	168.0	231	156件	ベルト	18.0	325	205件	表面左床	308.0
138	89件		142.0	232	156件	ベルト	178.0	326	206件	南東	90.0
139	90件		52.0	233	156件	No.03	12.0	327	206件	北西	2.0
140	90件	上層	6.0	234	160件	Pt	20.0	328	207件	北西	142.0
141	90件	横出面	20.0	235	156件	北東	4.0	329	208件	北西	18.0
142	92件		18.0	236	156件	南東	22.0	330	208件	南西	84.0
143	92件	横出面	82.0	237	156件	南西	8.0	331	212件	No.17	480.0
144	92件	南側	12.0	238	157件	No.06	47.0	332	212件	北西	44.0
145	93件		162.0	239	157件	No.07	92.0	333	212件	北西	46.0
146	95件	北側	276.0	240	157件	南東	20.0	334	212件	南西	352.0
147	96件	カマド	8.0	241	157件	北西	68.0	335	213件	南西	24.0
148	96件	南側	92.0	242	157件	南東	6.0	336	213件	ベルト	194.0
149	96件	南側	6.6	243	158件	No.07	84.0	337	213件	No.08	72.5
150	96件	南側	70.6	244	158件	北東上～下層	5.2	338	213件	北東	27.0
151	96件	北側	57.1	245	159件	ベルト	6.0	339	213・234件	上層	6.0
152	97件	東側	322.0	246	161件	Pt	230.0	340	215件	北側	68.0
153	97件	西側	158.0	247	164件	表面	48.0	341	215件	表面	6.0
154	98件		82.0	248	164件	北側	6.0	342	216件	No.15	106.0
155	99件	北西上層	82.0	249	164件	南西	124.0	343	217件	No.02	646.0
156	99件	北西中層	40.0	250	164件	北西	386.0	344	217件	188.0	
157	99件	北西中層	44.0	251	164件	北西	26.0	345	217件	北西	26.0
158	99件	北西中層	61.1	252	165件	表面	2880.0	346	217件	北東	16.0
159	99件	北東下層	82.0	253	165件	Pt	522.0	347	217件	南西	12.0
160	99件	南西下層	24.0	254	165件	南側	2775.0	348	217件	南西上層	6.0
161	99件	西側下層	240.2	255	165件	北側	676.0	349	217件	南東	36.0
162	99件	北西下層	119.2	256	165件	Pt	8.0	350	217件	南東	44.0
163	99件	北西	154.0	257	165件	Pt	1086.0	351	218件	表面	64.0

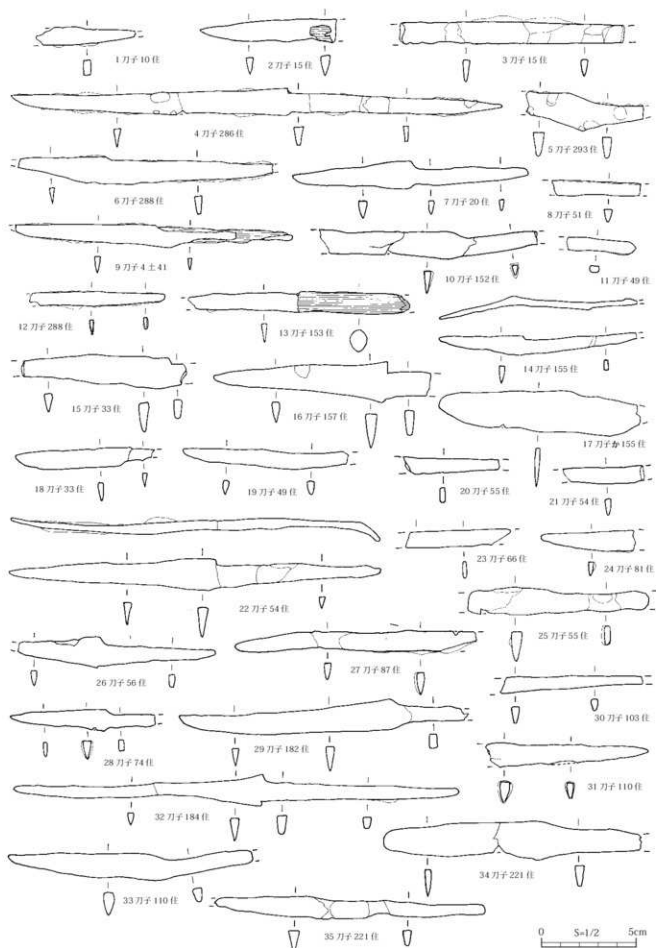
第13表 鉄滓一覧(2/3)

No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)	No.	出土遺構	出土地点	重量(g)
352	219F	北西	1.0	389	269F	北西	52.0	438	溝6	d-間	14.0
353	219F	北西	64.0	390	272F	P9	30.0	427	溝6	d-e間上層	32.0
354	220F	No.01	92.0	391	276F	No.03	56.8	428	溝6	b-e間上層	230.0
355	221F	No.01	86.0	392	278F	No.02	160.5	429	溝6	h-間	8.0
356	221F	No.03	118.0	393	278F	No.03	36.9	430	溝6	g-h間	298.0
357	221F	北東	52.0	394	283F	No.40	7.8	431	溝6	f-間上77	50.0
358	221F	北東	50.1	395	285F	No.32	26.7	432	溝6	e-間	188.0
359	221F	南東	16.0	396	285F	No.162	11.5	433	溝6	d-間	126.0
360	221F	北西	124.0	397	288F	No.31	14.3	434	溝6	d-e間トレンチ4	272.0
361	222~223F	上層	70.0	398	288F	Pit	2.4	435	溝6	d-e間	50.0
362	222~223F	北西	8.0	399	288F	西壁一括	3.3	436	溝6	d-e間	34.0
363	222~223F	南西	14.5	400	290F	No.52	13.8	437	溝6	b-c間 No.01	242.0
364	223F	No.03	26.0	401	296	c-間下層	24.0	438	溝6	特殊遺構2	12.0
365	223F	南東上～下層	184.0	402	1-1,2	横出	26.0	439	溝6	トレンチ3	76.0
366	223F	P2	144.0	403	1-1,3	西側	136.0	440	溝7	北側	6.0
367	223F	北東下層	152.0	404	1-1,5		171.7	441	溝8	北側	16.0
368	226F	No.13	104.0	405	1-1,7		20.0	442	溝8	北側	500.0
369	226F	北東	4.0	406	溝19		13.4	443	溝8	北側	8.0
370	226F	ベルト	28.0	407	溝19		10.8	444	溝8	北側	114.0
371	227F	No.07	142.0	408	溝2		424.0	445	溝8	北側	396.0
372	227F	ベルト	56.0	409	溝2		52.0	446	2区横出		160.2
373	227F	南東	86.0	410	溝2		156.0	447	2区横出		350.0
374	228F	南西	6.0	411	溝2	No.13	130.0	448	1区横出		128.0
375	229F	北東	4.0	412	溝2		46.0	449	1区横出	26仕か5.2m北西	34.0
376	229F	北東	8.5	413	溝2		68.0	450	1区横出	58仕か5.2.3m北	38.0
377	233F	北東	8.0	414	溝2		52.0	451	1区横出	64仕か5.0.2m北	18.0
378	238F	北東	11.0	415	溝2	No.06	250.0	452	1区横出	68仕か5.3m東	46.0
379	243F	No.03	386.0	416	溝2	No.07	386.0	453	1区横出	82仕か5.0.3m北東	28.1
380	247F	北西	20.0	417	溝3	中央北横出	66.0	454	1区横出		449.0
381	251F	北東上	134.0	418	溝3	中央北横出	290.0	455	1区横出	90仕か1.5m東	19.0
382	256F	北東上～下層	90.0	419	溝3	中央	28.0	456	1区横出	1区横出	120.0
383	257F	No.03	4.0	420	溝4	トレンチ4	22.0	457	1区横出	2区横出	14.0
384	257F	No.06	52.0	421	溝4	東側横出	18.0	458	1区横出	1区横出	64.0
385	260F	ベルト	90.0	422	溝6	トレンチ西側	12.0	459	2区横出	西側	24.0
386	264F	No.05	86.0	423	溝6	1区下層	194.0	460	2区横出	北側	100.0
387	264F	北西	96.0	424	溝6	e-間下層	76.0	461	4区横出	No.597	11.3
388	266F	No.03	128.0	425	溝6	e-間下層	76.0				

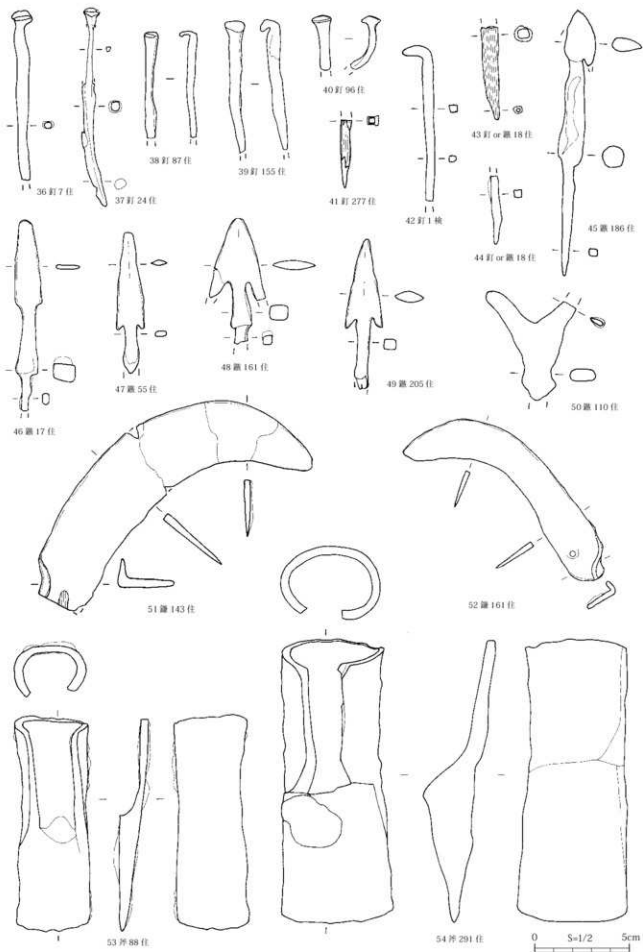
第13表 鉄滓一覧(3/3)

遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考	遺構	重量(g)	備考
1F	236.0		79F	484.0		146F	116.0		215F	74.0	
41E	92.0		80F	369.6		150F	40.0		216F	106.0	
74F	736.0		82F	403.5		151F	24.0		217F	976.0	
9F	100.0		83F	88.8		152F	70.0		218F	64.0	
10F	66.0		84F	1302.7		153F	296.0		219F	65.0	
11F	118.0		85F	396.0		154F	48.0		220F	92.0	
15F	286.0		87F	174.9		155F	409.9		221F	446.0	
17F	30.0		88F	418.0		156F	660.0		222F	744.0	
20F	482.7		89F	142.0		157F	233.0		226F	136.0	
21F	228.0		90F	88.0		158F	89.2		227F	284.0	大型住居
22F	175.9		92F	112.0		159F	30.0		228F	6.0	
23F	234.0		93F	162.0		161F	230.0		229F	12.5	
25F	1561.8		95F	276.0		164F	626.0		233F	8.0	
28F	34.0		96F	234.3		165F	794.7	観治遺構	238F	18.0	
29F	124.7		97F	1108.0		166F	636.0		243F	386.0	
30F	148.0		98F	82.0		167F	198.0		247F	20.0	
31F	217.0		99F	1043.0	大型住居	168F	1040.0		255F	134.0	
32F	972.0		101F	158.0		169F	94.0		256F	90.0	
33F	572.0		102F	276.0		171F	236.0		257F	56.0	
34F	636.0		103F	116.0		172F	128.0		260F	90.0	
35F	46.0		104F	16.0		173F	28.0		264F	96.0	
36F	194.0		107F	566.0		174F	8.0		266F	180.0	
39F	1003.5		109F	146.0		175F	380.2		272F	30.0	
44F	242.0		110F	198.0	大型住居	180F	416.0		276F	56.8	
45F	34.0		113F	18.0		181F	404.0		278F	197.4	
49F	296.0		114F	172.0		182F	38.0		285F	48.5	
50F	472.8	大型住居	121F	300.0		183F	72.0		288F	20.0	
54F	887.8		122F	120.0		186F	30.0		290F	13.8	
55F	2554.9	大型住居	124F	626.0		189F	54.0		溝6	246.0	
56F	742.0		125F	144.0		190F	348.0		1-2	26.0	
58F	501.9		126F	220.0		191F	742.0		1-3	136.0	
59F	3473.3		128F	66.0		192F	732.0		1-5	171.7	
61F	116.0		132F	340.0		193F	74.0		1-7	20.0	
62F	259.5		133F	94.0		194F	70.0		溝1	0.0	
63F	580.0		136F	694.0		195F	154.0		溝2	1564.0	
64F	388.0		137F	320.0		199F	56.0		溝3	384.0	
65F	253.8		138F	79.2	大型住居	200F	234.0		溝4	40.0	
68F	348.0		139F	126.0		205F	308.0		溝6	2014.0	
70F	78.0		140F	624.8		206F	112.0		溝7	6.0	
72F	198.0		141F	16.0		207F	142.0		溝8	1034.0	
73F	50.0		142F	206.0		208F	102.0		溝19	24.2	
76F	634.6		143F	57.8		212F	922.0				
77F	504.0		144F	52.0		213F	203.2				

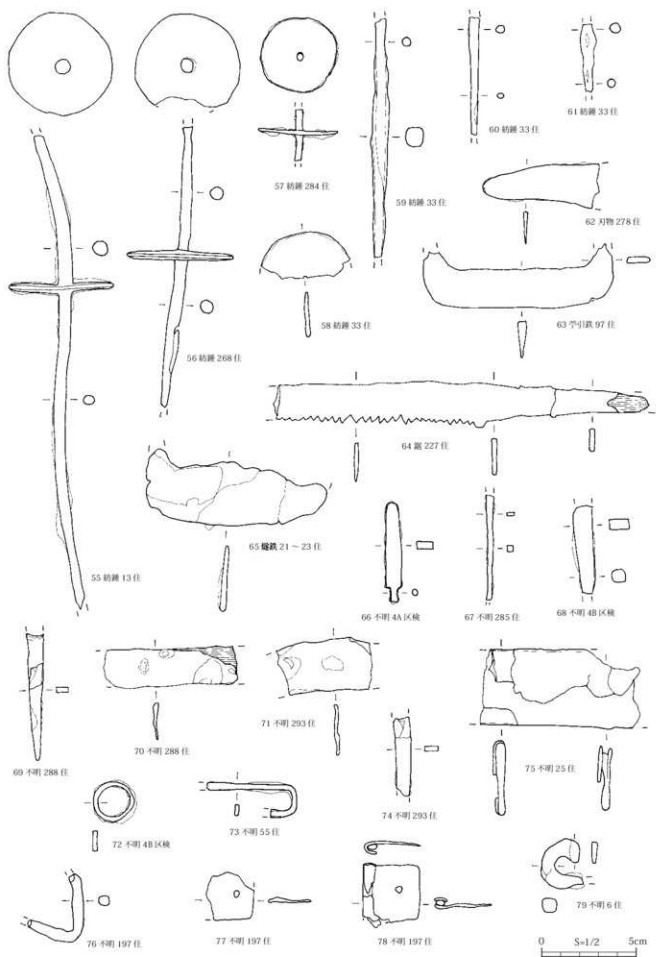
第14表 遺構別鉄滓出土重量



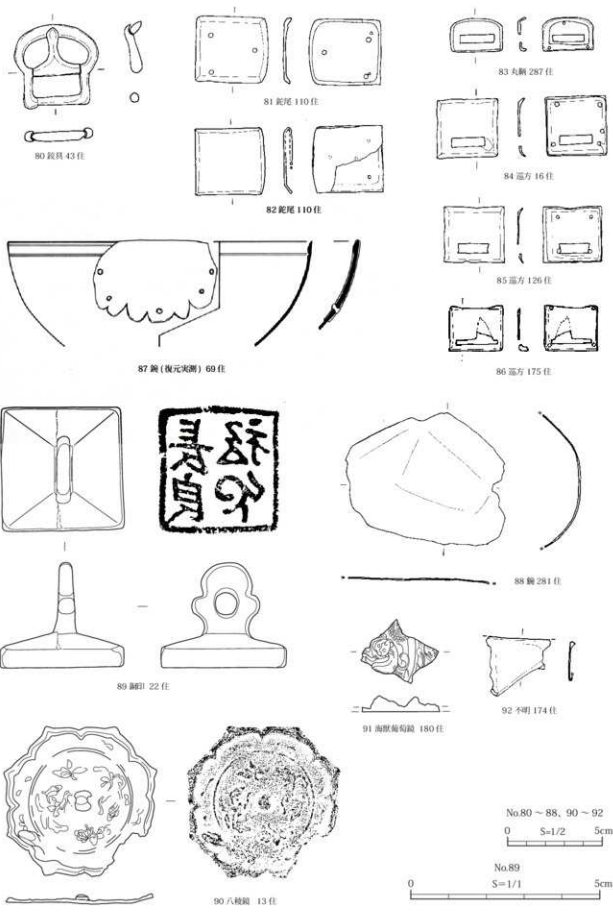
第 178 图 金属製品実測图 (1) 刀子



第179図 金属製品実測図(2) 釘・鏃・鎌・斧



第 180 図 金属製品実測図 (3) 紡錘車・鉄その他・不明



第181図 金属製品実測図(4) 銅製品

4 土製品 (第 15 表)

土製品に分類、把握した遺物としては、輪の羽口、有孔土製品、環状土製品、筒状土製品、焼成粘土塊がある。すべてを一覧表で示し、実測図は掲載していない。輪の羽口は 39 点が出土し、総重量は 2,784g を量る。全形がわかるものはなく、すべて大小の破片となっている。いずれも被熱痕が顕著で、側面は溶解が著しい。有孔土製品は直径 3mm 前後の貫通孔を有し、形状から土器の一部ではない可能性があるものを一括した。2 点あるが、いずれも小片で詳細はわからない。環状土製品は幅 2.3cm で直径が 5cm ほどの環状の一部にあたと推定される土製品で、平安時代の土師器の破片とは思えないものだが小破片で詳細はわからない。筒状土製品は上下両端を欠く方柱形で、一方の端に向かって徐々に細くなっていく形状を呈し、芯部に太い孔が貫通している。残存長 32cm、断面形は長方形から台形で太い側の端が 11.5 × 9.5 ~ 10.5cm、細い側は 9.5 × 6.5 ~ 7.5 cm を測る。器肉は 2.0 ~ 3.5cm 前後と厚く、そのため 2,870g と重い。色調と焼成は土師器に似るが、胎土には 1cm 以上の小石が混じり、極めて焼きが甘くボロボロと崩れてしまう。外器面の調整は工具ナドとわずかなハケメで仕上げられ、内面の孔側は全く器面調整がない。焼成粘土塊は土器などに成形されていない粘土が被熱によって固形化したごとくに見える土塊で、9 点出土している。いずれも 40g 以下の小塊で、詳細は全くわからない。

陶製品としては緑釉陶器の碗皿類破片の外周を打ち欠き、研磨して作られた陶製円盤が 157 住から

2 点出土している (第 133 図 157 新_34・35)。いずれも直径 1.4 ~ 1.6cm、厚さ 0.3 ~ 0.4cm、胎土は須恵器質で釉は濃緑に近い。

5 自然遺物 (第 16・17 表)

炭化物と骨類を自然遺物として扱う。炭化物には炭化材、炭化種実、植物質の製品が炭化したものなどを含む。現場から取り上げができた炭化物の一覧を第 16 表に示す。このうち 48 点で樹種同定を行い、さらにその中の 7 点については放射性炭素年代測定を実施した。また炭化種実塊 1 点について種実同定を行った。それらの結果は自然科学分析 (本章第 4 節) に掲載した。その他の炭化物については計量したのみで観察や分析は未実施である。骨類については第 17 表に示す。いずれも少量で分析等は未実施なので詳細は判明していない。2・土 212 は墓址と推定される遺構なので被葬者の歯が残存していた可能性がある。溝 6 からは馬の歯らしきものが、最下層や特殊遺構 (溝 6 集石) を含む複数の地点から出土している。

遺物として取り上げたものではないが、293 住の覆土 (埋土) を 15 地点・層位に分けて土壌試料として採取し水洗選別を行った結果、炭化種実が 60 点余発見されている (本章第 4 節)。取り上げ不能で記録のみを残した遺物として 197 住で検出された籾殻の炭化物がある (次頁写真掲載)。細いカヤ状の植物茎を燃ったワラ状の繊維で連ねたものが 20 × 10cm ほどの範囲で検出できた。

No.	地区	遺物	種類	重量 (g)	特記事項
1	1A	107	焼成粘土塊	14	
2	1A	287	羽口	14	
3	1A	287	羽口	72	
4	1A	297	土製品	28	有孔土製品
5	1A	337	羽口	56	
6	1A	447	羽口	20	
7	1A	507	羽口	12	
8	1A	517	羽口	128	
9	1A	517	土製品	2870	筒状土製品
10	1A	547	羽口	38	
11	1A	557	焼成粘土塊	26	
12	1A	557	焼成粘土塊	12	
13	1A	567	羽口	34	
14	1A	587	焼成粘土塊	38	
15	1A	597	羽口	102	
16	1A	597	羽口	56	
17	1A	597	羽口	26	
18	1A	597	羽口	46	
19	1A	597	羽口	110	
20	1A	597	羽口	12	
21	1A	597	羽口	36	
22	1A	597	羽口	38	
23	1A	597	羽口	340	
24	1A	617	羽口	36	
25	1A	637	羽口	56	
26	1A	637	羽口	22	
27	1A	647	羽口	88	
28	1A	647	羽口	152	

No.	地区	遺物	種類	重量 (g)	特記事項
29	1A	687	焼成粘土塊	6	
30	1A	747	羽口	30	
31	1A	767	焼成粘土塊	8	
32	1A	847	羽口	42	
33	1A	847	羽口	112	
34	1A	877	羽口	42	
35	1A	977	土製品	8	環状土製品
36	1A	997	羽口	36	
37	1A	997	羽口	26	
38	1A	1137	羽口	50	
39	1B	溝3	羽口	32	
40	2	1357	羽口	22	
41	2	1477	羽口	110	
42	2	1497	焼成粘土塊	18	
43	2	1577	羽口	64	
44	2	1577	焼成粘土塊	10	
45	2	1657	羽口	82	
46	2	1657	羽口	32	
47	2	1757	羽口	32	
48	2	2127	羽口	76	
49	2	2127	羽口	188	
50	2	2127	羽口	48	
51	2	2127	羽口	38	
52	2	2237	羽口	66	
53	2	溝6	羽口	488	
54	2	溝6	羽口	28	
55	4A	2757	土製品	14	有孔土製品
56	5	2907	焼成粘土塊	28	

第 15 表 土製品一覧

No	出土施設等	重量(g)	特記事項
1	13住 北地区 870706	42	
2	13住 北地区 870707	134	
3	13住 北地区 870708	284	
4	28住 No.4内 灰化土	8	
5	33住 西側下層 870619	14	
6	35住 東側 870612	12	
7	35住 西側 870612	4	
8	54住 東側 870613	98	
9	54住 西側 870613	170	
10	54住 東No.5 870702	122	
11	54住 東 870702	158	
12	64住 上層北側 870616	24	
13	55住 上層南側 870616	6	
14	55住 ベルト内 870618	86	
15	68住 上層 870626	42	
16	68住 中層 870626	54	
17	68住 下層 870626	10	
18	68住 東 870630	180	
19	85住 ベルト内 灰化土 870708	134	
20	90住 E1.5m横出灰化土 870611	3	
21	90住 上層 870707	4	
22	99住 北東中層 870616	4	
23	99住 ベルト 870618	10	
24	107住 東側 870622	100	
25	124住 フク上層 870624	14	
26	128住 東部 870708	60	
27	135住 南西フク土灰化土 880702	1	
28	135住 土灰	100	樹種同定
29	135住 土灰	125	樹種同定、年代測定
30	135住 ハ灰 880713	80	樹種同定
31	135住 灰化土 880714	240	樹種同定
32	136住 表面 880524	10	
33	138住 P4貯蔵口 880720	20	
34	145住 ベルト内 灰化土 880611	5	
35	145住 P2灰 880611	10	
36	146住 上層→下層間 880622	20	
37	147住 No.10灰化 880527	5	
38	151住 上面 880624	1	
39	151住 東 880712	85	樹種同定
40	151住 灰土P4 880712	10	
41	158住 No.10 880706	16	
42	160住 No.16 880719	115	樹種同定
43	161住 南西中層 880531	100	樹種同定
44	161住 フク土灰化 880607	20	樹種同定
45	161住 カマド付近 灰化土 880607	20	樹種同定
46	161住 イ 880608	260	樹種同定
47	161住 ロ 880608	630	樹種同定
48	161住 ハ 880608	215	樹種同定
49	161住 ニ 880608	280	樹種同定
50	161住 ホ 880608	300	樹種同定
51	161住 ヘ 880608	335	樹種同定、年代測定
52	161住 ト 880608	1050	樹種同定

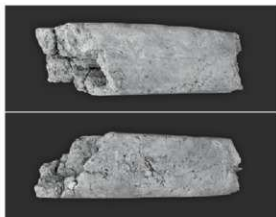
No	出土施設等	重量(g)	特記事項
53	164住 北西フク土灰化 880530	10	
54	166住 ベルト 880530灰	7	
55	183住 ベルト 880706灰	3	
56	193住 カマド内 880616灰	1	
57	197住 東 880623	240	樹種同定
58	197住 西土 880623	20	樹種同定
59	197住 灰化土	60	樹種同定
60	197住 灰化土ハ	50	樹種同定
61	197住 灰化土ニ	40	樹種同定
62	197住 灰化土ホ	75	樹種同定
63	197住 灰化土ヘ	65	樹種同定
64	197住 灰化土ト	85	樹種同定
65	197住 灰化土No.4の下層	115	
66	197住 No.5内 灰化土	100	樹種同定
67	197住 n1土	1	
68	197住 N11	1	
69	197住 灰化土	2000	樹種同定
70	200住 北東 880617	5	
71	206住 No.19 880709	10	
72	211住 カマド内 灰化土 880713	8	
73	213住 ベルト内 880712	3	
74	214住 内層 880727	4	
75	217住 フク土 灰化土 880526	1	
76	217住 内土 880531	1	
77	218住 ベルト内 灰化土 880527	5	
78	223住 上層→下層間 灰化土 880609	40	
79	223住 イ 880613	835	樹種同定、年代測定
80	223住 ロ 880613	385	樹種同定
81	223住 ハ 880613	330	樹種同定
82	223住 ニ 880613	420	樹種同定
83	223住 ホ 880613	345	樹種同定
84	223住 ヘ 880613	210	樹種同定
85	227住 P2灰化 880721	1	
86	227住 P4 880721	10	
87	245住 イ灰化	100	樹種同定、年代測定
88	245住 ロ灰化	30	樹種同定
89	245住 ハ灰化	110	樹種同定
90	245住 ニ灰化	30	樹種同定
91	245住 ホ灰化	20	樹種同定
92	245住 ヘ灰化	50	樹種同定
93	257住 No.4 880718	32	
94	257住 No.7 880718	2	
95	264住 北面 880612	2	
96	264住 No.9内 880706	15	
97	265住 No.6 880729	3	
98	135.113住 ベルト内 灰化土 870716	20	
99	135.116住 灰化土 870625	188	
100	135.117住	244	
101	106.5区 灰化土 880706	1	
102	106.5区 灰化土 880706	5	
103	106.9区	5	
104	106.9区 特殊遺構1区 880720	10	樹種同定

第16表 炭化物一覧

No	出土施設等	重量(g)	種別・状況等
1	16住 カマド右側 870709	10	焼炭
2	98住 北フク 870710	42	骨炭
3	123住 No.1 870710	80	焼炭骨と炭
4	124住 骨 870704	6.8	骨片
5	124住 北側 870704	1.6	骨片
6	125住 No.9 870713	3.5	骨片
7	137住 No.3.1	5.1	馬の歯か
8	137住 No.3.1	4.3	馬の歯か
9	235.212 No.6 歯	0.7	人の歯か

No	出土施設等	重量(g)	種別・状況等
10	235.212 南 880722	0.9	人の歯か
11	106.5区 最下層 砂礫中 880707	6.9	馬の歯か
12	106.9区 中層 骨 880718	61.1	馬の歯か
13	106.9区 中層 880718	23.6	馬の歯か
14	106.4区 上層 880623	12.5	馬の歯か
15	106.4区 上層 880623	13.9	馬の歯か
16	106.4区 上層 880623	1.3	馬の歯か
17	106.9区 特殊遺構1区 880705	8.9	馬の歯か

第17表 骨類一覧



51 住出土 筒状土製品



197 住 炭化材出土状況

第4節 自然科学分析

1 2区出土炭化材の年代測定・樹種同定と炭化種実の同定

(1) 放射性炭素年代測定

ア 試料

焼失住居とされる竪穴遺構4軒(135住、161住、223住、245住)より出土した炭化材のうち、135住口-b(№2)の芯持丸木(径1.2cm)、161住へ-a(№12)の芯持丸木(径6×5cm)、223住イ-a(№27)の芯持丸木(径4cm)、245住イ(№33)の(柾目)板状を呈する炭化材の4点を選択した。いずれも観察範囲内に認められる最外年輪を含む数年輪分を測定に供している。

イ 分析方法

試料中の土壌や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0。(Copyright 1986-2014 M Stuiver and

PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正は、CALIB 7.1.0.のマニュアルに従い、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は $\sigma \cdot 2\sigma$ (σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

ウ 結果および考察

炭化材試料の同位体効果による補正を行った測定年代(補正年代)は、表1のとおりである。また、暦年較正結果(1 σ)は、表1、図1に示すとおりである(表1、図1)。

以上の各竪穴建物の暦年較正結果(1 σ)を参考とすると、135住が10世紀後半から11世紀前半頃、161住および223住が9世紀末から10世紀後半頃、245住が7世紀前半から中頃と推定される。三間沢川左岸遺跡は、これまでの発掘調査により平安時代(9~10世紀)の集落とされ、135住、161住および223住では若干の時期差が推定されるものの、得られた年代は調査所見と調和する。245住は、上記した3軒よりも明らかに古い。今回の結果は、当竪穴建物の年代を示している可能性はあるものの、他の3軒では芯持丸木状を呈する炭化材を供したのに対し、本遺構では(柾目)板状を呈する炭化材を供しているため、古木効果の影響により古い年代を示している可能性も考慮する必要がある。

(2) 炭化材(樹種)同定

ア 試料

焼失住居とされる竪穴建物7軒(135住、151住、160住、161住、197住、223住、245住)および溝6特殊遺構1より出土した炭化材39試料(№1~39)である。これらには、炭化材1点のみの試料や、接合関係が認められず、形状や木取り、組織の特徴が異なる複数(種)の炭化材から構成される試料、さらに炭化種実塊などが確認された。このうち、複数(種)の炭化材から構成される試料については、各試料中で形状や木取りなどの観察から代表的なものを選択・抽出している。炭化種実塊につ

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 (暦正年代) (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果 (cal)			相対比	測定機関 CodeNo.
				o	1 σ	2 σ		
No.2 135住ロ-b 炭化材 (コナラ樹)	1,050 \pm 30	-2.425 \pm 0.53	1,047 \pm 25	o	cal AD 987 - cal AD 1,017	cal BP 963 - 933	1.000	IAAA- 143338
				1 σ	cal AD 903 - cal AD 919	cal BP 1,047 - 1,031	0.042	
				2 σ	cal AD 965 - cal AD 1,026	cal BP 985 - 924	0.958	
No.12 161住へ-a 炭化材 (ヤブナ)	1,120 \pm 20	-26.45 \pm 0.43	1,115 \pm 23	o	cal AD 896 - cal AD 927	cal BP 1,054 - 1,023	0.525	IAAA- 143339
				1 σ	cal AD 942 - cal AD 970	cal BP 1,008 - 980	0.475	
				2 σ	cal AD 888 - cal AD 985	cal BP 1,062 - 965	1.000	
No.27 223住イ-a 炭化材 (カエデ属)	1,110 \pm 20	-32.45 \pm 0.49	1,110 \pm 24	o	cal AD 897 - cal AD 926	cal BP 1,053 - 1,024	0.484	IAAA- 143340
				1 σ	cal AD 943 - cal AD 973	cal BP 1,007 - 977	0.516	
				2 σ	cal AD 889 - cal AD 987	cal BP 1,061 - 963	1.000	
No.33 245住イ 炭化材 (ヤブナ)	1,410 \pm 20	-25.52 \pm 0.64	1,405 \pm 23	o	cal AD 630 - cal AD 656	cal BP 1,320 - 1,294	1.000	IAAA- 143341
				1 σ	cal AD 606 - cal AD 661	cal BP 1,344 - 1,289	1.000	
				2 σ	cal AD 606 - cal AD 661	cal BP 1,344 - 1,289	1.000	

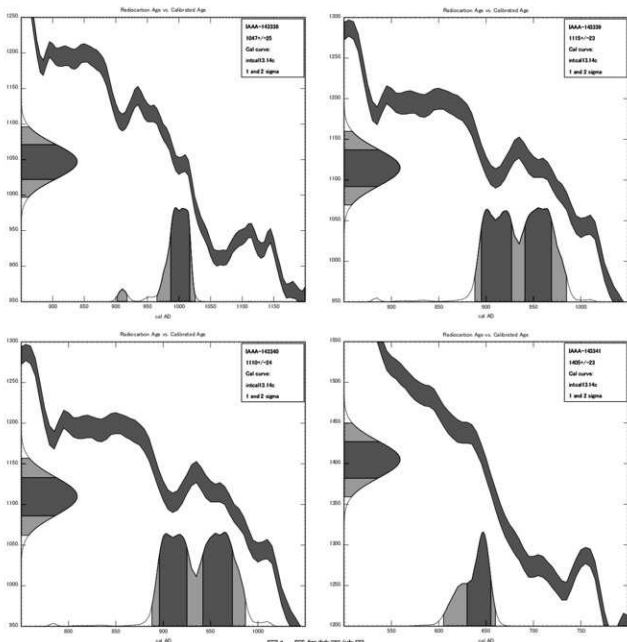


図1 暦年較正結果

いては、後述する(3)の種実同定試料としている。

本分析では、上述した試料の観察により選択・抽出した炭化材より57点を対象とした。なお、各試料の詳細(通し)No、出土地点、仮名称、観察所見などは、結果とともに表2に示したので参照されたい。また、表2中の仮名称は、1試料より複数の炭化材を選択・抽出した際、試料の識別のために便宜的に付した名称である。

イ 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。

ウ 結果

同定結果を表2に示す。各遺構より出土した炭化材は、針葉樹2分類群(モミ属、サワラ)、広葉樹10分類群(ハンノキ属ハンノキ亜属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、エノキ属、ケヤキ、モクレン属、カツラ、カエデ属、アワブキ属)およびイネ科に同定された。イネ科に同定された試料は、径および柀の厚みの違い等から複数種が混じる可能性があるが、組織観察では判断に至らなかった。

エ 考察

焼失住居とされる竪穴住居跡などから出土した炭化材は、各試料の観察では、表3に示すとおり芯持丸木(芯持材を含む)をはじめ、分割材(ミカン割、半裁)および板状(板/棒状)を呈するもののほか、カヤ材とみられる稗(莖)などが確認された。

各遺構を通じて確認された樹種は、サワラが22点と最も多く、次いでコナラ節(10点)、クヌギ節(5点)、モミ属(6点)、カツラ(4点)、カエデ属(3点)であり、この他は1~2点という組成を示した(表3)。また、分析点数が多い竪穴住居跡の樹種構成についてみると、135住は9点すべてがコナラ節であった。一方、161住は15点のうち8点がサワラであり、この他にモミ属、クヌギ節、ケヤキ、モクレン属、イネ科なども認められたものの1~2点とわずかであり、サワラを主とする傾向が

うかがえる。また、197住はサワラやカツラ、223住および245住はサワラを含む針葉樹材が多く認められる。

次に、各竪穴住居跡における炭化材の形状や木取りと樹種との関係についてみると、135住は住居跡南東部に炭化材が多く分布しており、これらの試料には、芯持丸木、分割材(ミカン割)状などが認められた。なお、分析対象とした炭化材は、すべてコナラ節であり、形状の違いによる樹種の違いは認められなかった。

151住は分割材(ミカン割)状がクヌギ節、板状がサワラ、160住の板状がサワラであり、板状を呈する試料にサワラが認められる点で共通する。

161住は、住居跡南壁付近を含む南半部の床面より出土した炭化材を主体とし、これらの試料には板状を呈する試料を主体として、芯持丸木や分割材(ミカン割、半裁)状を呈する試料、カヤ材が認められた。このうち、芯持丸木や半裁状、板状を呈する試料はサワラを主体とすることから、建築部材にはサワラが多く利用されていた可能性がある。また、覆土試料に認められたイネ科や南西中層試料に認められたクヌギ節やモクレン属などは屋根材(カヤ材)や木舞などに由来する可能性があり、出土状況等の調査所見による検討が望まれる。

197住は、住居跡床面全面から炭化材が出土しており、とく南半部より多く出土している。分析対象とされた炭化材は、壁際(口、ハ、ト、チ)、住居中央(二、ホ)および炭化米出土した地点付近(No5内)より採取されており、芯持丸木を呈するものが多く、この他分割材(ミカン割、半裁)状、板状(板/棒状を含む)、カヤ材などが認められた。このうち、芯持丸木は、針葉樹のモミ属やサワラ、広葉樹のハンノキ亜属、クヌギ節、カツラが認められるなど複雑な樹種構成を示す一方、分割材状(ミカン割、半裁)にはカツラとカエデ属が、板状(板/棒状)にはサワラやハンノキ亜属が認められた。とくに板状を呈する試料にサワラが多く認められる傾向は、151住や160住、161住と共通する特徴と言える。

223住は、住居跡床面中央より放射状に炭化材が出土する状況が確認されており、分析対象とされた炭化材はいずれも垂木と推定される炭化材より採取されている。これらの試料は、板状(板/棒状を含む)を主として、芯持丸木(芯持材?を含む)や分割材(半裁)状などから構成され、板状(板/棒状を含む)にはモミ属とサワラ、芯持丸木や分割材

(半截) 状にはエノキ属、カエデ属、アワブキ属が認められた。本遺構では、板状を呈する試料にサワラが多く認められるという、上記した遺構と共通する特徴が指摘できる。また、板状(板/棒状を含む)以外の試料は広葉樹から構成されることから、形状によって利用樹種が針葉樹と広葉樹とに分かれるという特徴もうかがえる。

245 住は、223 住ほど明瞭ではないものの、住

居跡床面中央より放射状に炭化材が出土する状況やカマド前面(前庭)に炭化材が多く出土する状況が確認されている。分析対象とされた炭化材は、上記した放射状に出土した垂木の可能性がある炭化材より採取されている。これらの試料には、芯持丸木、分割材(ミカン割)状、板状(板/棒状含む)が認められたが、分割材(ミカン割)状にク리가認められた他は全て針葉樹であった。針葉樹は、芯持丸木

表2 樹種同定結果

(通し) No.	試料	試料			観察所見		樹種 (分類群)	備考
		遺構名	出土位置 (層上表下-%)	仮名称	形状	直径 (半径)		
1	135住	イ	イ	芯持丸木		3cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
2	135住	ロ	イ	芯持丸木		1.2cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定
			ロ	芯持丸木		2.5cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
3	135住	ハ	イ	芯持丸木		2.5cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			ロ	芯持丸木		2.5×2.3cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			ハ	芯持丸木		2.3×2.0cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			ニ	芯持丸木				
4	135住	炭化物	イ	分割材(ミカン割)状		(3cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			ロ	分割材(ミカン割)状		(2.5cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
			ハ	芯持丸木		2cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
5	134住	炭化物	イ	分割材(ミカン割)状		(0.7cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
			ロ	分割材(ミカン割)状		(0.7cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
			ハ	板状(板目)			サワラ	
6	160住	№16	イ	板状(板目)			サワラ	
7	161住	イ	イ	板状(板目)			サワラ	
8	161住	ロ	イ	板状(板目)		(7cm)	ケヤキ	
9	161住	ハ	イ	板状(板目)			コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
10	161住	ニ	イ	分割材(ミカン割)状		(1.5cm)	ケヤキ	
11	161住	ホ	イ	板状(板目)			サワラ	
12	161住	イ	イ	板状(板目)			サワラ	
13	161住	ハ	イ	芯持丸木		8×5cm	サワラ	放射性炭素年代測定
			ロ	分割材(半截)状		3.5cm	サワラ	
14	161住	ト	イ	板状(板目)			セシ属	
15	161住	カマド付宮	イ	板状(板目)			サワラ	
16	161住	フタ土	イ	カヤ材(鞘)		8.3cm	イネ科	
17	197住	ロ	イ	分割材(ミカン割)状		(1.3cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
			ロ	分割材(ミカン割)状		(1.3cm)	セシ属	
18	197住	ハ	イ	芯持丸木		2.8×2.5cm	カワラ	
			ロ	芯持丸木		2.0cm	ハンノキ属ハンノキ亜属	
			ハ	分割材(ミカン割)状		(1.3.5cm)	カワラ	
19	197住	ニ	イ	板状(板目)			サワラ	
20	197住	ホ	イ	分割材(半截)状		3.5cm	カワラ	
			ロ	芯持丸木		3.0cm	サワラ	
21	197住	ハ	イ	芯持丸木		5.0cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
			ロ	板・棒状(板目)			サワラ	
22	197住	トナキ	イ	カヤ材(鞘)		8.5cm	イネ科	
			ロ	カヤ材(鞘)		2.0cm	カエデ属	
			ハ	分割材(半截)状				
			ニ	芯持丸木		2.7×2.2cm	セシ属	
23	197住	炭	イ	分割材(ミカン割)状		(3.5cm)	カエデ属	
			ロ	板・棒状(板目)			サワラ	
			ハ	板・棒状(芯持材)			ハンノキ属ハンノキ亜属	
			ニ	カヤ材(鞘)			イネ科	
26	197住	炭化物	イ	芯持丸木		4.5×2.8cm	カワラ	
			ロ	芯持丸木		5.3×5.0cm	サワラ	
27	223住	イ	イ	芯持丸木		4cm	カエデ属	放射性炭素年代測定
28	223住	ロ	イ	板状(板目・道板)			サワラ	
29	223住	ハ	イ	板状(板目)			サワラ	
			ロ	分割材(半截)状		4.5cm	ユズキ属	
30	223住	ニ	イ	板・棒状(板目)			セシ属	
			ロ	板状(板目)			サワラ	
31	223住	ハ	イ	板状(板目)			サワラ	
32	223住	ホ	イ	板・棒状(板目)			セシ属	
33	245住	イ	イ	板状(板目)			サワラ	放射性炭素年代測定
34	245住	ロ	イ	分割材(ミカン割)状		(1.2cm)	クワ	
35	245住	ハ	イ	芯持丸木		4.5cm	セシ属	
36	245住	ニ	イ	分割材(ミカン割)状		(1.2cm)	セシ属	
37	245住	ホ	イ	板状(板目)			サワラ	
38	245住	ハ	イ	板・棒状(板目)			サワラ	
39	遺構特殊遺構1	洞	イ	分割材(ミカン割)状		(1.1.2cm)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

と分割材（ミカン割）状がモミ属、板状（板／棒状含む）がサワラであり、形状による樹種構成の違いが示唆される。

以上の結果から、135 住を除く各竪穴住居跡からは板状（板／棒状を含む）を呈する炭化材が出土しており、このような板状を呈する試料には針葉樹材が多く利用される傾向が明らかとなった。また、その他の形状の炭化材についても針葉樹のサワラが認められる一方、135 住出土炭化材の主体をなすコナラ節は認められなかった。このような状況から、135 住とその他の竪穴住居跡では木材利用が異なることが示唆される。

なお、135 住のコナラ節を主とする種類構成は、形状やコナラ節の材質から強度を考慮した木材利用が推定される。その他の竪穴住居跡については、135 住との差異や樹種構成において特筆される板状（板／棒状を含む）試料は出土状況から垂木や壁材などに推定される試料も含まれる状況から、サワラを主体とする針葉樹材の加工性を考慮した木材利用が考えられる。また、この他に確認された広葉樹材については、強度が高い木材が多いことから、上記した針葉樹材の板状とは用途や部位が異なる可能性も考えられる。

本遺跡で別途実施した他の焼土住居と考えられる竪穴建物（275 住、279 住）より出土した炭化材の分析調査によれば、275 住の芯持丸木の分割材状の炭化材にコナラ節、クリ、カエデ属、カヤ、角材状にサワラが確認されており、279 住のカマド脇より出土した板状の炭化材にサワラが確認されている。このような樹種構成は、今回の 135 住を除く竪穴住居跡の木材利用に類似する可能性がある。

また、松本盆地における古代の住居跡より出土した炭化材の調査事例では、宮北遺跡の平安時代の住居跡出土炭化材にヒノキ科、扇屋敷遺跡（塩尻市）の平安時代の住居跡出土炭化材に広葉樹のクリ、ナラ（コナラ節）、トチ（トチノキ）、トネリコ（トネリコ属）、マカンバ（カバノキ属）、ヤナギ（ヤナギ属）、針葉樹のトウヒ（トウヒ属）、スギなどが確認されている（小林,1982）。また、三角原遺跡（旧三郷村）の 10 世紀後葉～11 世紀前葉とされる住居跡出土炭化材にヒノキ科が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社,2005）。さらに、来見原遺跡（大町市）では、奈良時代の住居跡からオニグルミとコナラ、11 世紀前半の住居跡からコナラ節とクリ、11 世紀中頃～後半とされる住居跡から広

葉樹のコナラ、クリ、クヌギ、コナラ、針葉樹のモミ属が確認されている（森,1988）。形状や木取りなどを含めた詳細な比較は難しいものの、概ね針葉樹材と広葉樹材が混在して利用されるという傾向がうかがえ、このような木材利用は今回の 135 住を除く各竪穴住居跡などと共通する。コナラ節が主となるという特徴が認められた 135 住については、(1)の結果では 161 住や 223 住と比較して若干の時期差が示されている状況などから、時期による木材利用の変化や建築材として利用する樹木を調達した森林植生の変化などを反映している可能性などが考えられる。

(3) 種実同定

ア 試料

試料は、(1) - アで触れた炭化材試料に確認された炭化種実塊 1 試料（№ 24；197 住炭化物 880623）と、245 住より採取された土壌 2 点（炭化種子、炭化種子?）である。

イ 分析方法

(ア) 炭化種実塊

本分析では、試料の保存を優先し、非破壊による分析を行った。炭化種実塊を双眼実体顕微鏡とマイクロスコープ（KEYENCE,VHX-1000）で観察する。また、炭化種実塊より脱落した炭化種実は、ピンセットで抽出する。炭化種実の同定は、現生標本を参考に実施し、結果を一覧表と図版で示す。分析後は、試料を容器に入れて保管する。

(イ) 土壌試料

土壌試料を粒径 2.0mm、1.0mm、0.5mm の篩を通す。粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本と石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。種実以外の分析残渣は、一覧表の下部に重量を記録後、容器に入れて保管する。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。

ウ 結果

(ア) 炭化種実塊

結果を表 4 に示す。炭化種実塊 9 個のうち、8 個を構成する炭化種実は、すべて栽培種のイネの胚乳（炭化米）に同定された。1 個は状態不良のため、イネの胚乳?とした。イネ以外は、単子葉類の炭化植物片と土砂の付着が確認された。なお、イネの類（稗）や他分類群の種実、虫類は確認されなかった。

表3 遺構別種類構成

	135住		151住		160住		161住		197住			223住		245住		溝6	合計
	芯持丸木 分割材状 (ミカン割)	分割材状 (ミカン割)	板状	板状	芯持丸木 分割材状 (ミカン割)	分割材状 (ミカン割)	板状	カヤ材	芯持丸木 分割材状 (ミカン割)	分割材状 (ミカン割)	板状 (楕状)	カヤ材	芯持丸木 分割材状 (ミカン割)	板状	芯持丸木 分割材状 (ミカン割)		
針葉樹																	
ソミ属							1	1					2	1		1	
ヤツラ			1	1	1		1	2			3		4			6	
広葉樹																	
ハンノキ亜属									1		1					2	
クヌギ部				2			1	1	1							5	
コナラ部	7	2													1	10	
クリ															1	1	
エノキ属													1			1	
ケヤキ							1	1								2	
モクレン属						1										1	
カツラ									2	1	1					4	
カエデ属									1	1						3	
アワブキ属													1			1	
その他																3	
イネ科											2					3	
合計	7	2	2	1	1	1	3	1	9	1	2	2	4	2	2	61	

表4 種実同定結果（炭化種実塊）

試料名	分類群・部位・状態	個数	仮番号	重量 (g)	大きさ	図番 番号	備考
No.24 197住炭化物 880623	イネ胚乳+植物遺体(単子葉類)	4	1	4.46	5.2cm×3.0cm×1.6cm	1,2	平坦面確認,植物片:少ない, 腹数回方向配列
			2	3.21	3.9cm×2.8cm×1.6cm	3,4	平坦面確認,植物片:長さ1.7cm×幅2.1cm, 腹数回方向配列
			3	0.70	2.3cm×2.1cm×1.1cm	5	平坦面確認,植物片:長さ1.7cm×幅1.0cm, 腹数回方向配列
			4	0.07	1.0cm×0.9cm×0.7cm	6	平坦面確認,植物片:残存長4mm×幅1.7mm(1個体)
	イネ胚乳(多量塊状)	1	-	1.54	3.2cm×1.9cm×1.5cm	-	平坦面確認,イネ胚乳のみ
	イネ胚乳(塊状,状態不良)	3	1	0.35	1.8cm×1.5cm×0.8cm	7	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
			2	0.24	1.5cm×1.4cm×0.5cm	-	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
			3	0.11	1.4cm×0.9cm×0.6cm	-	一部の胚乳の形状が残る,外面は丸みを帯びる
	イネ胚乳?(塊状,状態不良)	1	-	0.06	1.0cm×0.7cm×0.4cm	-	胚乳の形状は不明瞭,外面は丸みを帯びる
	イネ胚乳	13	1	<0.01	長さ4.46mm,幅2.10mm, 厚さ2.11mm	8	長粒極小型,種皮が残存(玄米)
2			<0.01	長さ4.08mm,幅2.28mm, 厚さ1.94mm	9	長粒極小型,種皮が残存(玄米)	
-			0.10				
分析残渣(イネ,単子葉類,泥等)	-	-	1.93				
	合計			12.79			

表5 種実同定結果（土壌試料）

試料名	分類群	部位	状態	数量 (個)	重量 (g)	備考
245住 炭化種子	エノコログサ属	果実	破片	63	-	薄膜状,状態不良
	スベリヒユ	種子	完形	1	-	
	アカザ属	種子	完形	103	-	1個発芽
			破片	17	-	
	エノキグサ	種子	破片	1	-	
	炭化材			2	0.02	最大4.3mm
	分析残渣(>0.5mm)			-	2.84	土粒主体,植物片
	分析残渣(<0.5mm)			-	0.65	土粒主体,アカザ属種子片,植物片
245住 炭化種子?	エノコログサ属	果実	破片	25	-	薄膜状,状態不良
	カヤツラサ属	果実	完形	3	-	
	スベリヒユ	種子	完形	31	-	
			破片	5	-	
	アカザ属	種子	完形	612*	0.13	14個発芽
			破片	23	-	
	カタバミ属	種子	完形	1	-	
	ニシキソウ亜属	種子	完形	2	-	
	エノキグサ	種子	完形	3	-	
			破片	1	-	
	炭化材			17	<0.001	最大3.7mm
	分析残渣(>1.0mm)			-	4.64	土粒主体,植物片
	分析残渣(1.0-0.5mm)			-	1.66	土粒主体,アカザ属種子(200個超),植物片
	分析残渣(<0.5mm)			-	2.19	土粒主体,種実片,植物片

イネの胚乳は、炭化しており黒色、やや扁平な長楕円体を呈する。炭化種実塊から脱落した胚乳13個の重量は0.10gを量る。また、保存状態が良好な2個の計測値および粒形・粒大(佐藤,1988):図版1_5-8)と、長さ4.7mm、幅2.1mm、厚さ2.1mm(長粒極小型:図版1_5-8)と、長さ4.1mm、幅2.3mm、厚さ1.9mm(短粒極小型:図版1_5-9)であった。胚乳の基部一端には、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦隆条が確認され、種皮が残る「玄米」の状態も確認された(図版1_5-8,9)。

多数の胚乳が密着した炭化種実塊のうち、最大塊(図版1_5-1)の大きさは $5.2 \times 3.0 \times 1.6$ cmを測り、重量(土砂を含む)は4.5gを量る。炭化種実塊の表面観察では、胚乳個々の向きは区々で、隣接する別個体の種皮が密着する。なお、炭化種実塊9個のうち5個は、最大面が平坦であった(図版1_5-1a,3a)。このうち4個の平坦面には単子葉類の炭化植物片が確認された(図版1_5-1b,3b,4-6)。炭化植物片は、最大長1.7×幅2.1cm程度の薄い膜状を呈し、炭化米塊と接して長軸方向に複数配列する(図版1_5-3b,4)。炭化植物片は、幅1~3mm程度の線形を呈し、表面には浅く細い長軸方向の平行脈が配列する(図版1_5-6)状況から、同一種の単子葉植物の葉や茎等と考えられる。

一方、残りの炭化種実塊4個(イネ?含む)は、状態が極めて不良であり、胚乳の形状を留める個体が少なく、外面に丸みを帯びる共通点が確認された(図版1_5-7)。

(イ) 土壌試料

同定結果を表5に示す。2試料を通じて、草本8分類群(エノコログサ属、カヤツリグサ属、スベリヒユ、アカザ属、カタバミ属、ニシキソウ亜属、エノキグサ)891個の種実が同定された。なお、1試料(炭化種子?)からは、アカザ属の種子が多量確認されたため、粒径1mm(635個0.13g)までの抽出同定にとどめ、1mm以下はアカザ属以外を同定対象としている。分析残渣は土粒を主体とし、炭化材(最大4.3mm)や炭化していない植物片等も少量確認された。

種実遺体群は、明るく開けた、やや乾いた場所に生育する中生草本のみから成り、アカザ属が全体の85%以上を占める(755個)。種実遺体の保存状態は、膜質で脆弱なエノコログサ属を除いて極めて良好で、いずれも炭化は認められない。また、アカザ属には、発芽種子が15個確認された。

なお、これらの種実遺体群は、本遺跡の立地や、焼失住居とされている245住より採取された試料であることを考慮すると、出土炭化材などは履歴が異なる(後代の混入など)可能性が高いと判断されるため、考察からは除外している。

エ 考察

197住より出土した炭化種実塊の同定の結果、表面に確認された種実はすべて栽培種のイネの胚乳(炭化米)に同定された。炭化種実塊より脱落した炭化米の一部を計測した結果、長粒極小型と短粒極小型(佐藤,1988)が確認された。

この出土炭化米塊は、穎が確認されなかったことから、粃殻を取り去った(脱稃;だっぶ)後の胚乳(玄米)が多量密着した状態で火を受けたと考えられる。なお、一部の炭化米塊には平坦面が確認されたことや平坦面に同一種と考えられる単子葉植物の植物片が同一方向に配列する状況が確認されたことから、敷藁等の植物片を挟み、平坦面に接した状態で火を受けたことなどが推定される。一方の保存状態が不良な炭化米塊は概形が丸みを帯びる。形状から上記した平坦面を有する炭化米塊との差異が示唆されるが、その成因については本試料の出土位置や調査所見による検討が望まれる。

2 4区出土炭化材の年代測定・樹種同定

(1) 試料

試料は、焼失住居であるA区275住から出土した炭化材7点(ID1~7)と、B区279住から出土した炭化材1点(ID8)の計8点である。このうち、275住No2(ID2)とNo3-1と3-2(ID3, ID4)は、発掘調査時に出土した形状を保つよう取上げられ、タッパーに保管された状態であった。これらの試料の観察では、カヤ材とみられる植物遺体の集合体と、芯持丸木状あるいは分割材状などの複数の炭化材が確認できた。そのため、275住No2(ID2)では、芯持丸木状(径約2.5cm)の炭化材(ID2-1)と、分割材状(残存径4.0cm)の炭化材(ID2-2)を抽出している。

今回の調査では、放射性炭素年代測定には275住No2(ID2)の芯持丸木状の炭化材(ID2-1)と、同No3-1の炭化材(ID3)の観察範囲内の最外年輪部を含む部位、さらに同No3-2(ID4)の芯持丸木状(径約5.5×3.5cm)の炭化材を供し、樹種同定は275住No2の分割材状の炭化材(ID2-2)を含めた計9点を対象とした。

(2) 分析方法

1- (1) -イ、1- (2) -イと同じ。

(3) 結果

ア 放射性炭素年代測定

275 住出土炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代・較正暦年代）は、表6のとおりである。

イ 樹種同定

樹種同定結果を表7に示す。炭化材は、針葉樹2分類群（サワラ、カヤ）と、広葉樹3分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、カエデ属）に同定された。

(4) 考察

275 住の炭化材3点の放射性炭素年代測定結果（補正年代）に基づく較正暦年代は、いずれも8世紀後半～9世紀後半を示した。これまでの発掘調査により、本遺跡は平安時代を主体とする集落であることが明らかとされているが、今回の結果から275住も当該期の遺構である可能性が示唆される。

また、275住および279住から出土した炭化材には、サワラ、カヤの針葉樹と、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、カエデ属などの広葉樹が確認された。各分類群の木材の材質をみると、針葉樹のカヤはやや重硬で強度や保存性が高いが、加工は容易

である。サワラは、軽軟で強度が低いが、木理が通直で割裂性が高いために加工が容易であり、耐水性が高い。一方、広葉樹のコナラ節、クリおよびカエデ属は、重硬で強度が高く、加工はやや困難である。

275住は、発掘調査時にカマドと貼床に新旧が確認されていることから、同じプラン内での建直しが推定される。炭化材は、床面のほぼ全面から出土しており、建築部材に由来すると考えられている。分析対象とされた炭化材は、№4（ID5）と東側拡張部（ID7）を除く5点が、住居中央から外側に向かって放射状に伸びるように出土している。これらの炭化材には、コナラ節、クリおよびカエデ属が確認されたことから、強度の高い木材の利用が推定される。№2（ID2）にはクリとカエデ属が認められたことから、異なる部材が含まれると考えられる。また、カヤとみられる植物遺体が認められたことから、屋根材と垂木、あるいはそれに伴う部材の組合せを示している可能性がある。№4（ID5）は、住居北壁際より出土している。炭化材は断面（木口）が半歳～扇形を呈し、径約5cmを測る。当試料は、針葉樹のカヤであり、上記した広葉樹を主体とする5点と傾向が異なる。さらに、東側拡張部から出土した炭化材（ID7）は、分割材（角材）状を呈し、針葉樹のサワラに同定された。以上の結果から、住

表6 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 (補正年代) (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code No.
				1 σ	2 σ		
ID2(2-1) 275住 №2 炭化材(カエデ属)	1,220±30	-24.50±0.58	1,215±25	1 σ	cal AD 774 - cal AD 830 cal AD 836 - cal AD 868	0.650 0.350	IAAA- 112359
				2 σ	cal AD 766 - cal AD 888	0.882	
ID3 275住 №3-1 炭化材(コナラ節)	1,180±20	-25.26±0.48	1,180±23	1 σ	cal AD 782 - cal AD 789 cal AD 810 - cal AD 847 cal AD 855 - cal AD 887	0.089 0.467 0.444	IAAA- 112360
				2 σ	cal AD 776 - cal AD 895 cal AD 925 - cal AD 937	0.969 0.031	
ID4 275住 №3-2 炭化材(カエデ属)	1,180±20	-29.97±0.54	1,183±24	1 σ	cal AD 782 - cal AD 789 cal AD 810 - cal AD 848 cal AD 853 - cal AD 886	0.100 0.480 0.420	IAAA- 112361
				2 σ	cal AD 775 - cal AD 895 cal AD 925 - cal AD 937	0.973 0.027	

表7 樹種同定結果

ID	区	遺構	№ほか	形状*	樹種	備考
1	A	275住	№1	分割材状(ミカン割状)	クリ	
2-1	A	275住	№2	芯持丸木(径約2.5cm)	カエデ属	放射性炭素年代測定試料
(2-2)	A	275住	№2	分割材状(板状)	クリ	
3	A	275住	№3-1	分割材状(ミカン割状)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	放射性炭素年代測定試料
4	A	275住	№3-2	芯持丸木(径約5.5×3.5cm)	カエデ属	放射性炭素年代測定試料
5	A	275住	№4	分割材状(1/2割、径約5cm)	カヤ	
6	A	275住	№5	分割材状(ミカン割状)	カエデ属	
7	A	275住	東側拡張部、 造成土	分割材状(角材状)	サワラ	広い面が板目
8	B	279住	№70	分割材状(板目板状)	サワラ	カマド出土

*炭化材の形状観察による。

居構築材として、比較的硬い材質の広葉樹材と針葉樹材が利用されるという傾向がうかがえる。なお、東部拡張部から出土した試料については、後世の攪乱の影響を受けている可能性が考えられるため、住居構築材の詳細な用途の検討は今後の課題である。

一方の279住の炭化材は、住居西壁に設置されたカマドの脇の床面上から出土したことから、燃料材と推定されている。この炭化材は、針葉樹のサワラであったことから、軽軟で燃えやすい木材の利用が推定される。

3 第293号竪穴建物埋土の土壌洗出と種実遺体分析

(1) 試料

第293号住居跡埋積物(覆土)より採取された土壌15点である。土壌試料は、住居跡覆土の堆積状況の観察のために設定された東西および南北ベルトの両端付近と、両ベルトが交叉する中央部の計5地点より採取されている(図2)。また、上記した5地点では、覆土の調査所見によって分けられた第1層(黒褐色弱粘質土)、第2層(黒褐~暗褐色弱粘質土)および第3層(暗褐色弱粘質土)より、層別別に採取されている(表8)。

本分析では、上記した地点および層別別に採取された土壌試料15点を対象に、土壌洗出・分類および種実遺体分析を実施した。

(2) 分析方法

土壌試料は、各地点・層別より計94.5kgが採取されている(表8)。住居跡覆土中の微細遺物の産状を把握するため各試料1kgを対象に水洗選別を実施し、主に植物片(炭化、未炭化)、土器、土塊、砂礫などに大分類した後、炭化植物片が多く得られた試料を対象に種実遺体分析を実施するという工程が示された。なお、後述するように、各試料1kgを対象とした分析の結果、検出された炭化種実は少量であったため、担当者確認の上、仕様を一部変更し各試料1kgについて追加分析を行った。以下、土壌洗出(水洗)および種実遺体分析の工程を記す。

土壌試料を72時間常温乾燥後、水を満たした容器に投入し、浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、浮いた炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約20回)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、

同定が可能な種実遺体を拾い出す。

種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑類を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。分析残渣は、水に浮いた炭化物主体と沈んだ砂礫主体とに分け、40℃48時間乾燥後の重量を記録する。

栽培種などを対象とした種実の大きさ(長さ、幅、厚さ)の計測にはデジタルノギスを用いた。

(3) 結果

結果を表9に示す。土壌洗出および種実遺体分析の結果、第293号住居跡埋土試料(15試料;31kg)を通じて、被子植物13分類群(ブドウ科、イネ、コムギ、キビ?、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ近似種、ホタルイ属、サナエタデ近似種、タデ属(2面体、3面体)、スベリヒユ科、マメ科)112個の種実が抽出・同定された。また、状態不良の炭化物片44個は、種類の同定に至らなかったため不明炭化物としている。この他に、骨片が1個(No.4;径5.4mm)、巻貝類が10個、土器片が1個(4.8g、径4.3cm)確認された。分析残渣は、炭化物主体(炭化材・植物片等)が26.9g、砂礫主体が356.5gを量る。

栽培種は、穀類のイネの胚乳が3個、コムギの胚乳が28個(うち1個は穎片着)、キビ?の胚乳が1個と、栽培種の可能性があるヒエ近似種の穎・胚乳が2個、マメ科(ダイズ類?)の種子が1個の、計35個が確認され、全て炭化している。

栽培種と栽培種の可能性がある種実を除いた分類群は、木本が落葉広葉樹のブドウ科が1個、草本6分類群(ホタルイ近似種、ホタルイ属、サナエタデ近似種、タデ属(2面体、3面体)、スベリヒユ科)32個の、計33個が確認された。イネ科25個、ホタルイ属1個、タデ属(2面体、3面体)4個の、計29個は炭化しているが、ブドウ科、ホタルイ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ科の各1個は、炭化が認められず、保存状態が良好である。

なお、上記した炭化が認められない状態の良好な種実については、後代の混入の可能性があるため、結果表示に留めている。また、火熱の影響を受けた痕跡が認められない骨類や巻貝類についても、炭化が認められない種実と同様に取り扱っている。

ア 炭化種実の出土状況

以下、地点別の炭化種実の出土状況を記す。

(ア) 東ベルト

第1層からキビ?が1個、第2層からコムギが1個、第3層からタデ属(2面体)が1個確認された。

(イ)西ベルト

第1層からヒエ近似種が1個、第2層からイネが1個、コムギが1個、イネ科が9個、第3層からコムギが2個、マメ科が1個確認された。

(ウ)南ベルト

第1層からコムギが5個、第2層からコムギが4個、ヒエ近似種が1個、イネ科が4個、第3層からイネが1個、コムギが3個確認された。

(エ)北ベルト

第1層からイネ科が3個、第2層からコムギが3個、ホタルイ属が1個確認され、第3層からは1個も確認されなかった。

(オ)ベルト中央

第1層からコムギが4個、タデ属が3個、第2層からイネが1個、コムギが4個、イネ科が4個、第3層からコムギが1個、イネ科が2個確認された。

イ 出土炭化種実の記載

炭化種実の保存状態は極めて不良で、表面に泥が付着している。出土炭化種実各分類群の写真を図版3に、栽培種などの種実遺体の計測結果を表10に示す。また、以下に、出土炭化種実の形態的特徴などを述べる。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ4.3mm、幅2.4mm、厚さ2.2mmのやや偏平な長楕円体で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、両面に2~3本の縦隆条がある。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳・穎は炭化しており黒色、長さ2.6~3.9mm、幅2.1~2.8mm、厚さ1.4~2.6mmの丸みを帯びた楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な粒状模様がある。焼き崩れにより側面が窪む個体や、頂部から焼き膨れが突出した個体がみられる。また、南ベルトの第3層より出土した1個の表面に穎(果)の破片が付着する。穎は薄く、表面は粗面で微細な縦筋が配列する。

・キビ (*Panicum miliaceum* L.)? イネ科キビ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ1.4mm、幅1.6mm、厚さ0.8mmのやや偏平な広卵体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、径0.5mmの半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、小型であるため、キビ?としている。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

胚乳・穎は炭化しており黒色。長さ1.7~2.0mm、幅1.2~1.3mm、厚さ0.6~0.9mmの半広卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。胚乳基部正中線上は、背面に長さ1.0~1.5mm、幅0.7mmの馬蹄形、腹面に径0.5mm程度の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。胚乳表面に付着する穎(果)は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

胚乳・穎は炭化しており黒色、長さ1.3mm、径0.7mmの半狭卵~楕円体。背面は丸みがあり、腹面は偏平。胚乳の基部正中線上には径0.5mmの胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。胚乳表面に残る穎(果)は薄く、表面には微細な網目模様が縦列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は炭化しており黒色、長さ2.1mm、径0.6mmの片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、背面正中線上は鈍稜、基部は切形で刺針状の花被片を欠損する。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。破損部から確認される果実内部は炭化・発泡している。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実は炭化しており黒色、長さ1.7mm、径1.4mmのやや偏平な広卵体(2面体)と、長さ1.4mm、径1.1mmの三稜状広卵体(3面体)の少なくとも2分類群が確認された。いずれの果実も頂部は尖り、花柱を欠損する。基部は切形で萼片を欠損する。果皮表面は粗面。微細な網目模様がある。破損部から確認される果実内部は炭化・発泡している。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色、長さ6.8mm、幅3.9mm、厚さ2.8mmのやや偏平な楕円体。腹面の子葉合わせ目にある長楕円形の臍を欠損する。幼根はやや突出し、長さ2.2mm、幅1.3mmを測る。種皮表面は粗面で、焼き崩れて発泡している。ダイズ属ダイズ (*Glycine max* (L.) Merr. subsp. *max* (L.) Merr.) の類に似るが、臍を欠損するため、マメ科に留めている。

(4) 考察

第293号住居跡覆土からは、穀類のイネ、コムギ、ヒエ(近似種)、キビ?、豆類のマメ科(ダイズ類?)などの炭化種実が確認された。穀類の出土状況は、コムギが28個と最も多く、他の分類群は1~3個程度であった。コムギは、各地点より確認された



図2 第293号住居跡完掘略図および試料採取位置

表8 第293号住居跡採取試料一覧

試料No	地点/層位	土層名	重量 (kg)
1	東ベルト	第1層 黒褐色弱粘質土	3.25
2		第2層 黒褐～暗褐色弱粘質土	7.25
3		第3層 暗褐色弱粘質土	2.00
4	西ベルト	第1層 黒褐色弱粘質土	6.75
5		第2層 黒褐～暗褐色弱粘質土	6.00
6		第3層 暗褐色弱粘質土	9.00
7	南ベルト	第1層 黒褐色弱粘質土	7.00
8		第2層 黒褐～暗褐色弱粘質土	9.50
9		第3層 暗褐色弱粘質土	3.75
10	北ベルト	第1層 黒褐色弱粘質土	8.50
11		第2層 黒褐～暗褐色弱粘質土	9.00
12		第3層 暗褐色弱粘質土	3.00
13	ベルト中央	第1層 黒褐色弱粘質土	5.75
14		第2層 黒褐～暗褐色弱粘質土	8.75
15		第3層 暗褐色弱粘質土	5.00
		合計	94.50

が、南ベルトとベルト中央でやや多く認められる傾向にある。また、層位別にみると、第1層から9個、第2層から13個、第3層から6個と覆土中部より多く出土するという傾向が看取される。

渡来した栽培種とされるイネ、コムギと栽培種の可能性を含むキビ(？)、ヒエ(近似種)、マメ科(ダイズ類?)は、当時利用された植物質食料と考えられ、その状態から火熱の影響により炭化したことが推定される。また、コムギの一部や、ヒエ(近似種)の表面には穎(鞘)が残ることから、食用前の穎がついた生の状態で炭化した可能性がある。

本地域における平安時代の植物質食料の出土事例では、本遺跡の南西に位置するヨシバタ遺跡(山形村)が挙げられる。ヨシバタ遺跡では、3軒の住居跡より栽培種のモモ、イネ、アワ(近似種を含む)や栽培種の可能性があるヒエ近似種やマメ科、さらに食用可能な堅果類のトチノキが確認されている。とくに、炭化穀類が多く出土した住居跡(SB-11)では、イネとアワ(近似種)が多産するという状況が確認されている(バリノ・サーヴェイ株式会社,2012)。これらの産状と第293号住居跡の炭化種実遺体群とを比較すると、多く出土する穀類が異なるなどの組成の違いが指摘される。2遺跡間における炭化種実の産状の違いは、集落の年代や様態を反映する可能性もあり、今後の同様の調査事例の蓄積による検討が期待される。

なお、栽培種とその可能性がある炭化種実を除いた分類群では、いずれも明るく開けた場所に生育する人里植物の草本のイネ科、ホタルイ属、タデ属が確認され、ホタルイ属には湿生植物が含まれる。これらは、住居跡周辺の水湿地などを含む草地環境に

由来すると考えられる。

<引用文献>

- 熊井久雄,1988,1 地形分類図,土地分類基本調査 松本,長野県農政部農村整備課,11-18.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 小林康男,1982,火災住居検出の炭化材,厨屋敷 長野県塩尻市厨屋敷遺跡発掘調査報告書,厨屋敷遺跡発掘調査団・塩尻市教育委員会,157.
- 松本市教育委員会,1988,三間沢川左岸遺跡(1) 平安時代集落址の緊急発掘調査概報.
- 森 義直,1988,炭化物(炭化材)について,長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 来見原遺跡Ⅱ,大町市埋蔵文化財調査報告書第14集,大町市教育委員会,118.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版),東北大学出版会,678p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2005,三角原遺跡の自然科学分析,安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書 一 三郷村内一 三角原遺跡,長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76,農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・長野県埋蔵文化財センター,付録 CD-ROM所収.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

表9 土壌試料洗い出し・種実遺体分析結果

分類群	部位	状態	第293号住居跡															合計	備考
			東ベルト			西ベルト			南ベルト			北ベルト			ベルト中央				
			第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層	第1層	第2層	第3層		
炭化種実			No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15		
炭化種実																			
炭化種実																			
イネ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
コムギ	穎・胚乳	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	胚乳	完形	1	-	-	1	2	4	3	1	-	-	-	-	-	1	1	1	15
	破片		-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	3	-	-	3	3	-	12
キビ?	胚乳	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒエ近縁種	穎・胚乳	完形	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2
マメ科	種子	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
その他の草本																			
イネ科	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
	胚乳	完形	-	-	-	4	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	2	12
	破片		-	-	-	5	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	5	-	11
ホタルイ属	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
タデ属(2合体)	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	3
タデ属(3合体)	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
不明炭化物			7	-	5	9	6	1	2	1	3	1	-	5	4	-	-	-	44
炭化していない種実																			
木本																			
ブドウ科	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
草本																			
ホタルイ近縁種	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サナエタデ近縁種	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
スベリヒユ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
動物遺体																			
骨片*			-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
鳥骨*			2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	2	3	-	10
土器片			-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
分析残渣																			
炭化物主体(炭化材、植物片等)			1.8	1.5	2.0	1.9	3.0	2.3	2.2	1.0	3.1	2.1	0.9	0.7	1.2	1.3	1.9	-	26.9
砂礫主体			14.1	83.0	17.0	13.7	24.0	13.5	12.8	17.4	57.2	35.2	18.1	10.7	21.0	10.9	8.0	-	356.5
分析量			2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.0	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1	31.0

*火熱の前焼なし

表10 主な種実遺体の計測値

分類群・部位	試料 No.	出土遺構	ベルト	層位	大きさ			備考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	
イネ 胚乳	14	第293号住居跡	ベルト中央	第2層	4.3	2.4	2.2	
コムギ 穎・胚乳	9	第293号住居跡	南ベルト	第3層	3.3 *	2.1 *	1.8 *	
コムギ 胚乳	2	第293号住居跡	東ベルト	第2層	2.9	2.6	2.3	
	5	第293号住居跡	西ベルト	第2層	2.8 *	1.8 *	1.4	頂部焼き割れ(長さ0.9mm)
	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	3.9	2.1	2.2	
	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	2.8 *	2.1	2.0	頂部焼き割れ(長さ1.0mm)
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.7	2.8	2.6	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.4	2.4	2.1	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	3.5	1.9	1.7	
	7	第293号住居跡	南ベルト	第1層	2.6	1.8	1.8	
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	3.7 *	2.8	2.4	基部欠損
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	3.2	2.3	2.2	
	9	第293号住居跡	南ベルト	第3層	3.3	1.8 *	2.1	
	13	第293号住居跡	ベルト中央	第1層	3.5	2.2	1.9	
	14	第293号住居跡	ベルト中央	第2層	3.5	2.7	2.5	
	15	第293号住居跡	ベルト中央	第3層	3.2	2.1	2.1	
キビ? 胚乳	1	第293号住居跡	東ベルト	第1層	1.4	1.6	0.8	胚の凹み径0.5mm
ヒエ近縁種 穎・胚乳	4	第293号住居跡	西ベルト	第1層	1.7	1.2	0.9	胚の凹み長さ1.0mm,幅0.7mm
	8	第293号住居跡	南ベルト	第2層	2.0	1.3	0.6	胚の凹み長さ1.5mm,幅0.7mm
マメ科 種子	6	第293号住居跡	西ベルト	第3層	6.8	3.9	2.8	幼穂やや突出,長さ2.2mm,幅1.3mm

計測値はデジタルノギスによる。欠損部は残存部に「*」で示す。

佐藤敏也,1988,弥生のイネ,弥生文化の研究2 生業,金岡 恕・佐原 真編,雄山閣,97-111.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

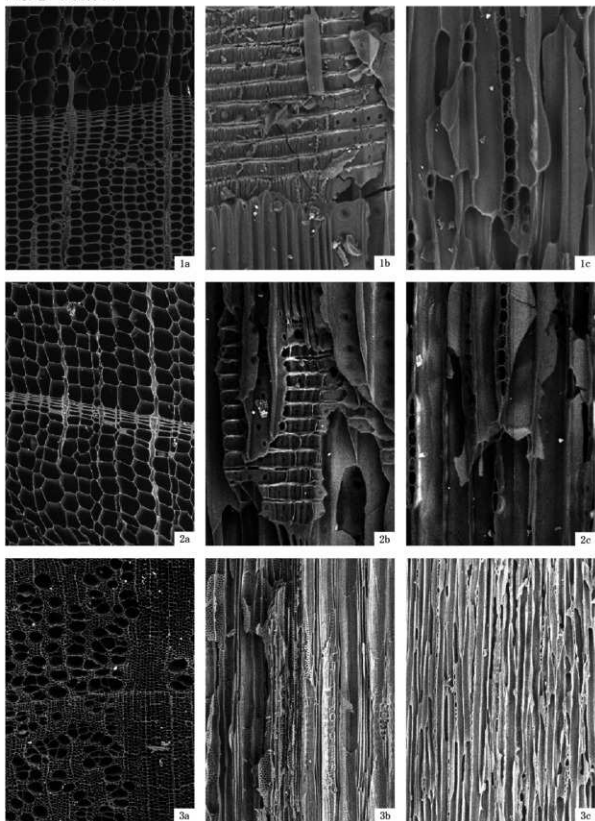
鈴木康夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—,誠文堂新光社,272p.

パリーノ・サーヴェイ株式会社,2012,VI 自然科学分析,ヨシバタ遺跡 山形県新築倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書

,山形県遺跡発掘調査報告書第19集,山形県教育委員会,98-110.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1_1 炭化材(1)



1. モミ属(161住ト-a:13)

2. サワラ(160住 No.16:6)

3. ハンノキ属ハンノキ亜属(197住ハ-a:18)

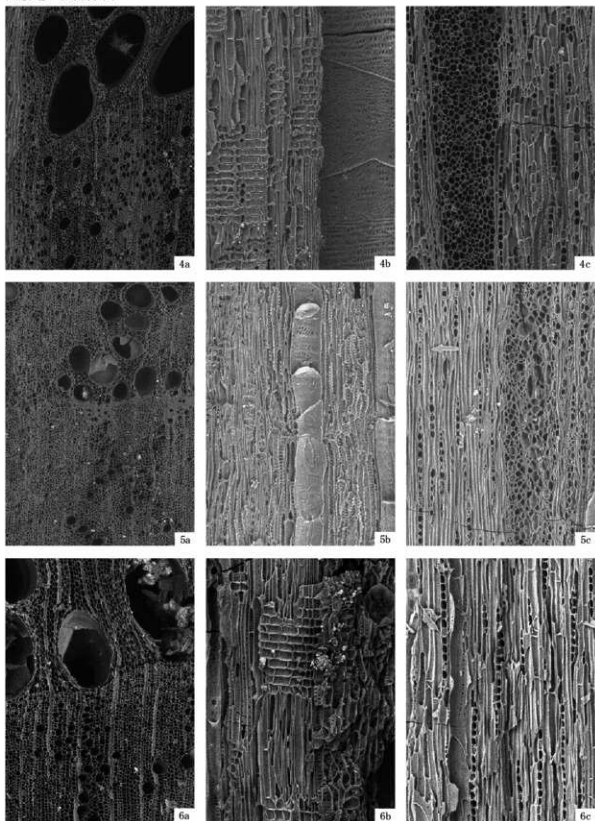
a:木口, b:柎目, c:板目

100 μm:3a

100 μm:1-2a, 3b, c

100 μm:1-2b, c

図版1_2 炭化材(2)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(151住炭化物-b:5)

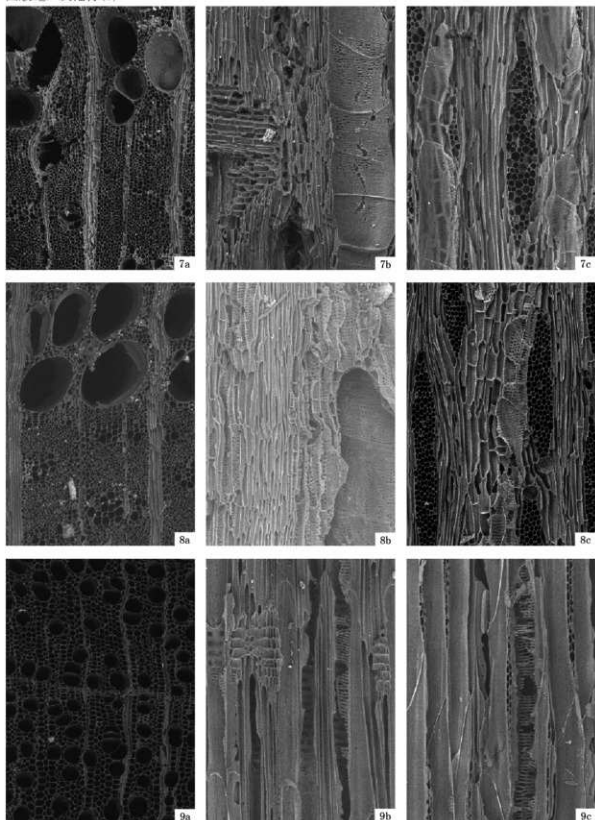
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(135住炭化物-a:4)

6. クリ(245住口:34)

a:木口, b:柾目, c:板目

100 μm: a
100 μm: b, c

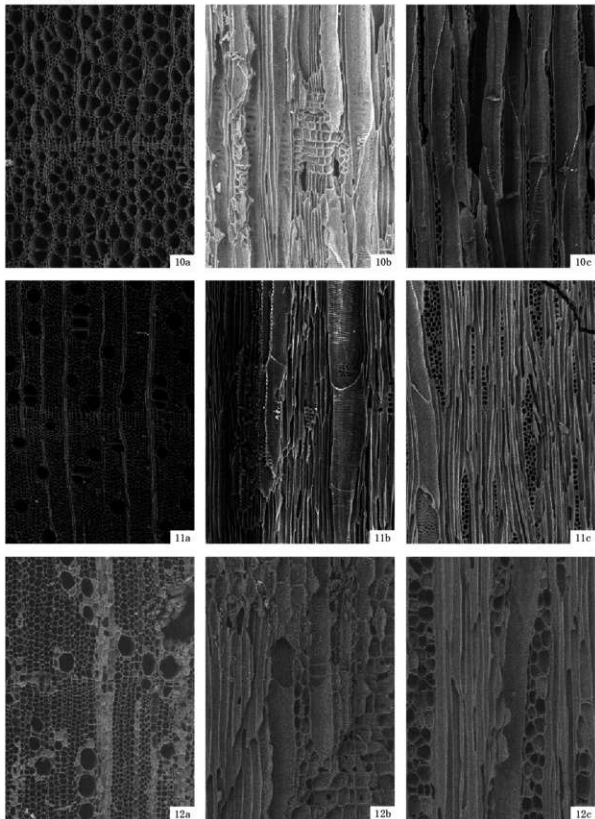
図版1_3 炭化材(3)



7. エノキ属(223住ハ-b:29)
 8. ケヤキ(161住ロ:8)
 9. モクレン属(161住 南西中層-b:16)
 a:木口, b:柁目, c:板目

100 μm:a
 100 μm:b,c

図版1_4 炭化材(4)



10. カツラ(197住炭化物-a:26)

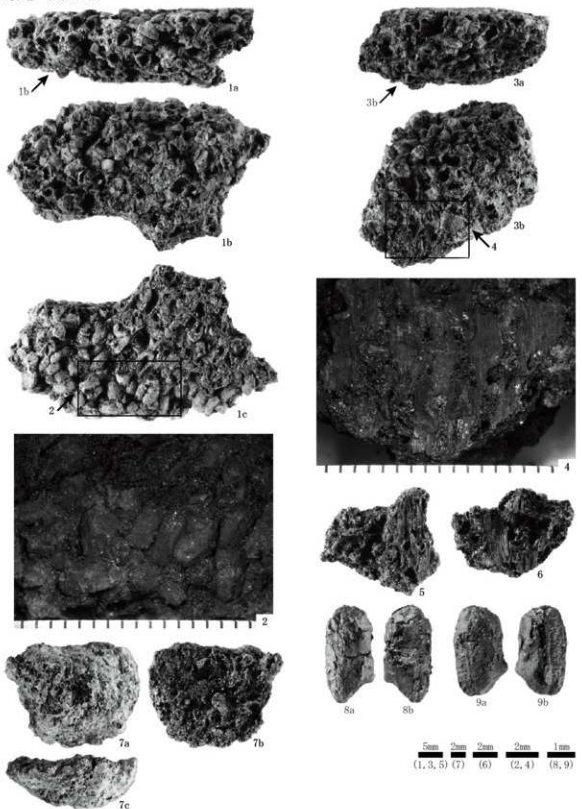
11. カエデ属(197住炭-c:23)

12. アワブキ属(223住イ-c:27)

a:木口, b:柀目, c:板目

100 μm: a
100 μm: b, c

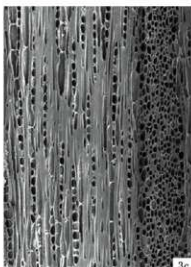
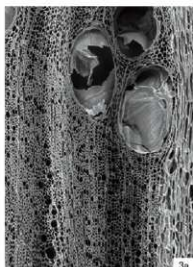
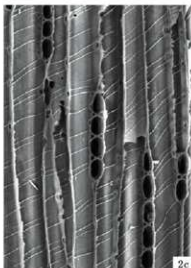
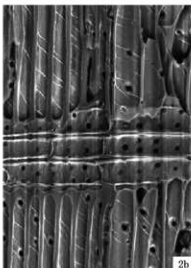
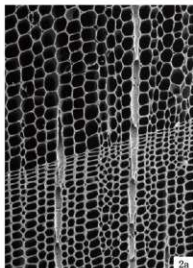
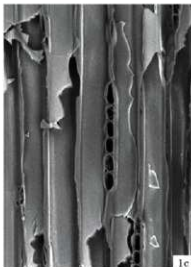
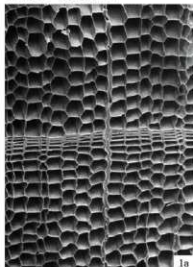
図版1_5 炭化種実



1. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物:24)
3. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物:24)
5. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物:24)
7. イネ 胚乳?(塊状、状態不良)(197住炭化物:24)
9. イネ 胚乳(197住炭化物:24)

2. イネ 胚乳(塊状)(197住炭化物:24)
4. 単子葉類(197住炭化物:24)
6. イネ 胚乳(塊状)・単子葉類(197住炭化物:24)
8. イネ 胚乳(197住炭化物:24)

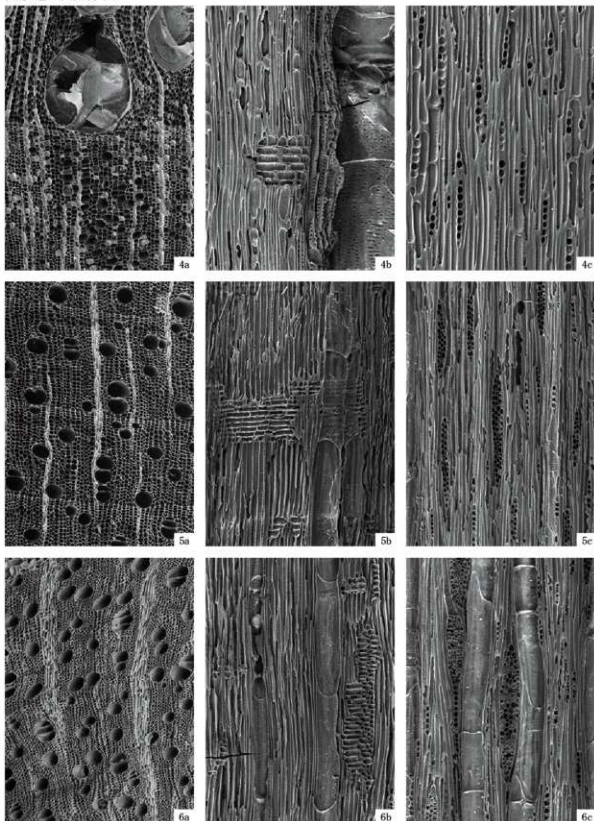
図版2_1 炭化材(1)



1. サワラ (275住 東側拡張部: ID7)
 2. カヤ (275住 No.4: ID5)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (275住 No.3-1: ID3)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2_2 炭化材(2)



4. クリ (275住 No.2:ID2~2)

5. カエデ属<Aタイプ> (275住 No.3-2:ID4)

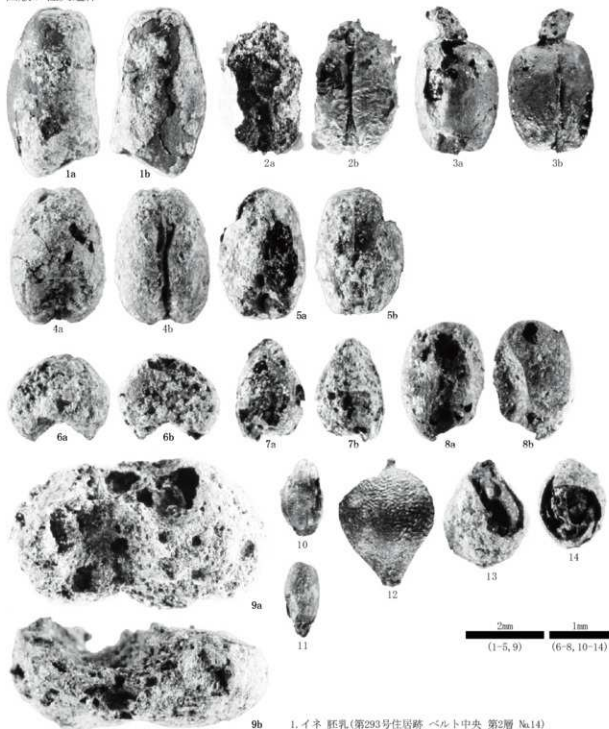
6. カエデ属<Bタイプ> (275住 No.5:ID6)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm: a

200 μm: b, c

図版3 種実遺体



1. イネ 胚乳(第293号住居跡 ベルト中央 第2層 Na.14)
2. コムギ 穎・胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第3層 Na.9)
3. コムギ 胚乳(第293号住居跡 西ベルト 第3層 Na.6)
4. コムギ 胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第1層 Na.7)
5. コムギ 胚乳(第293号住居跡 ベルト中央 第3層 Na.15)
6. キビ? 胚乳(第293号住居跡 東ベルト 第1層 Na.1)
7. ヒエ近似種 穎・胚乳(第293号住居跡 西ベルト 第1層 Na.4)
8. ヒエ近似種 穎・胚乳(第293号住居跡 南ベルト 第2層 Na.8)
9. マメ科 (ダイズ類?) 種子(第293号住居跡 西ベルト 第3層 Na.6)
10. イネ科 穎・胚乳(第293号住居跡 北ベルト 第1層 Na.10)
11. イネ科 穎・胚乳(第293号住居跡 北ベルト 第1層 Na.10)
12. ホタルイ属 果実(第293号住居跡 北ベルト 第2層 Na.11)
13. タゲ属 (2面体) 果実(第293号住居跡 ベルト中央 第1層 Na.13)
14. タゲ属 (3面体) 果実(第293号住居跡 ベルト中央 第1層 Na.13)

第4章 調査のまとめ

第1節 遺構について

1 竪穴建物

(1) 規模・規格等の比較

ア 規模

平面形が方形(隅丸方形)を基調としており、一辺の最大は8.0m(99住)、最少は2.2m(105住)、床面積に換算すると最大の99住が46.8㎡、最小の105住が4.8㎡である。第182図のグラフは床面積の分布で、12～14㎡台を中心とする平均的な分布を示す。ただし23㎡台と36㎡、46㎡台に特異な突出があり、大形や準大形の竪穴建物が一定数で存在する傾向が読み取れる。第183図のグラフは床面積の分布を時期別にみたもので、Ⅲ期とⅥ期を除き、突出した大型住居が存在することがわかる。さらにⅠ・Ⅱ期では総数の少なさに比して、特定の床面積に集中せず、様々な大きさのものがかなり対等に分布しているのに対し、Ⅲ・Ⅳ期は中央値に向かってかなり集中しているようにみえる。Ⅲ期に集落レベルで変化が起こっている可能性がある。

イ 主軸方向

第184図のグラフは竪穴建物の主軸方向を示したもので、ほぼ東西とそれに直交する南北に沿っているものが主流となっている。それ以外では東西軸より北東-南西方向に15～25度振るものとそれに直交するものが一定の数で認められ、これらはⅠ・Ⅱ期の竪穴建物に該当する。すなわち集落の出現時からしばらくは主軸が北東-南西方向に振っており、やがて東西(南北)に定まっていく状況を示すと考える。

ウ カマドの位置

竪穴建物のどの方向の壁にカマドがあり、その壁のどの位置にカマドが築かれているかを第185～187図のグラフで、その時期別のデータを第18表で示した。カマドは竪穴建物の西壁と東壁がほとんどで、わずかに北壁にも設けられるが、南壁の例は皆無である。この傾向に時期差はあまり感じられない。壁のどの位置にあるかは、Ⅰ・Ⅱ期は中央部やその付近がほとんどだが、Ⅲ期以降にやや隅寄りのものが現れ始め、Ⅳ・Ⅴ期にはさらに隅に近いものが増えてくる。本遺跡ではⅥ期以降の動向を知り得ないが、他遺跡の例ではさらに時期が新しくなると隅に設置されることが多くなるので、本遺跡のⅣ期あたりにその萌芽があるとみることもできよう。

(2) 柱穴を持つ竪穴建物

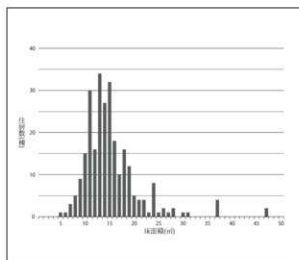
ア 柱穴の有無

第19表は上屋構造に関わる柱穴とおぼしきピットが確認された竪穴建物の一覧だが、総数が15棟で、竪穴建物全体の5%と少ない。地山がローム層だったので沖積地の遺跡では見つけ難いような小ピットや溝なども床面から検出でき、それにもかかわらず柱穴を伴う竪穴建物の発見率が低いということは、本遺跡の竪穴建物は床面に穴を掘って柱を立てるのではない構造が主流であったと考えざるを得ない。

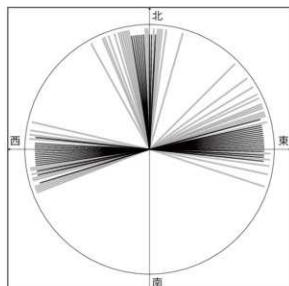
一方、比較的規模の大きい竪穴建物に柱穴が伴うことは明らかである。床面積が上位5位までの大型竪穴建物(50・55・99・110・138・227住)にはすべて柱穴があり、それ以外でも柱穴があるのは中型クラスが多い。柱穴を持つ中で床面積が最小のものは16住(17.7㎡)だが、これも本遺跡の竪穴建物の床面積分布の中央値(13㎡)よりは大きい。逆に中型クラスでありながら柱穴が明らかでないのは226住(21.8㎡)、56住(20.5㎡)くらいである。また柱穴のある竪穴建物は概して遺存状況が良く、これは他の竪穴建物より床面までが深かったことを意味する。これらから、柱穴を有す要件の一つが遺構の規模であることは間違いない。柱穴の有無と竪穴建物の時期について相関関係は認められない。

イ 柱穴の配置

長方形と方形の配置があり、前者が12例(10・14・16・50・51・55・58・99・110新・114・161・272住)と多く、後者は4例(43・110旧・138新・227住)にすぎない。長方形配置は4基の柱穴がかなり扁平

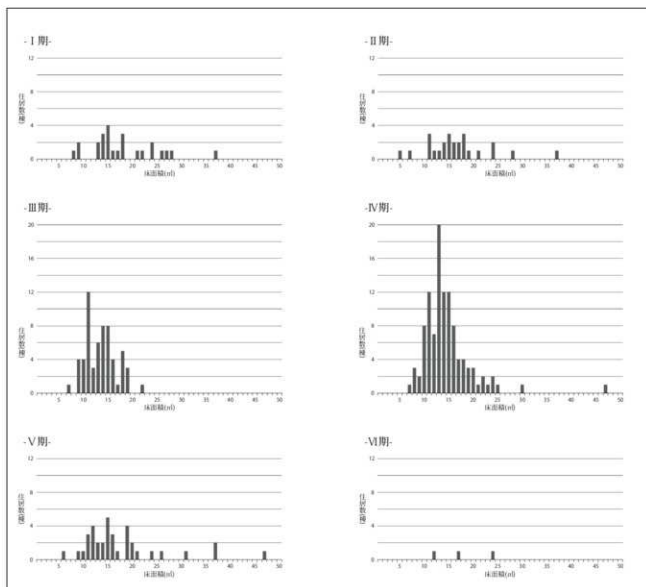


第182図 縦穴建物の床面積分布



住居の主軸方向を1度別みて集計し、グラフ化
 —— 該当する住居が3棟以上ある主軸方向
 - - - - 1~2棟の主軸方向

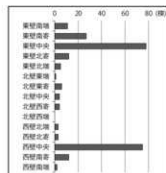
第184図 縦穴建物の主軸方向



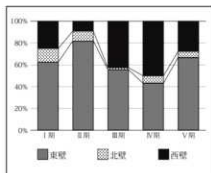
第183図 縦穴建物の時期別床面積分布

カマド位置	I期	II期	III期	IV期	V期	合計
東壁南端	0	0	3	5	0	11
東壁南寄り	4	1	10	9	3	27
東壁中央	11	17	15	22	13	78
東壁北寄り	0	0	1	10	1	12
東壁北端	0	0	1	1	2	5
北壁東端	0	1	0	0	0	2
北壁東寄り	3	0	0	3	0	6
北壁中央	0	1	0	2	1	4
北壁西寄り	0	0	1	2	1	4
北壁西端	0	0	0	0	0	0
西壁北端	0	0	0	2	1	3
西壁北寄り	0	0	1	2	0	3
西壁中央	4	2	19	41	7	75
西壁南寄り	2	0	3	5	2	12
西壁南端	0	0	2	2	0	4

第 18 表 竪穴建物時期別カマド方位



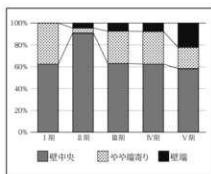
第 185 図 カマド方位別住居数



第 186 図 時期別カマド方位比率

遺跡名	地区	面積(m ²)	主柱の形状	補助柱穴	時期
101住	1A	25.5	6基 長方形		I期
141住	1A	(28.0)	4基 長方形		II古
161住	1A	17.7	4基 長方形	(有)	II古
431住	1A	23.6	4基 方形		I期
501住	1A	38.3	6基 長方形	有	V期
511住	1A	26.3	4基 長方形		I期
551住	1A	46.3	6基 長方形		IV古
581住	1A	23.3	4基 長方形	有	IV期
991住	1A	46.8	4基 長方形	有	V期
1101住	1B	36.5	4基 方形, 3基 長方形		II新
1141住	1A	18.1	4基 長方形		V期
138新住	2	(36.3)	4基 方形		V古
1611住	2	18.7	4基 長方形		V古
2271住	2	36.8	4基 方形	有	I古
2721住	2	(27.3)	4基 長方形		I古

第 19 表 柱穴を持つ竪穴建物



第 187 図 時期別カマド位置比率

の長方形に配置され、その短辺の一つをなす 2 基が壁直下や壁外へ張り出す位置に設けられるのが基本となる。まれに 6 基の柱穴が長方形に並ぶものもあるが、扁平であることや壁直下・壁外への配置を欠くことがないのは同様である。壁直下や壁外へ配置される柱穴の位置はカマドの対辺にあたることが多い。方形配列は 4 基の柱穴で構成され、壁から離れた床中央部に近い位置に 4 基が方形に並ぶ。壁の各コーナーに柱穴が配されていたと推定される 110 住 (旧) は例外的である。

(3) カマドの移動

竪穴建物の壁に近い床面に複数の焼土層 (被熱層) が残っている例が少なからずあり、カマドの移動があった可能性を指摘できる。移動前後の位置関係は①対辺、②側辺、③同辺の左右、④同辺の外側、の 4 類型がある。①の事例としては 75 住・85 住・217 住など壁の中央部から対辺の壁の中央部に動いたものと、164 住・199 住・207 住・286 住のように対辺の隅寄りに動いたもの。②は 138 新住・141 住・156 住などでいずれも壁の中央部から側辺の中央部に動いたもの。③は 180 住・198 住などにみられる同じ壁の中央部から隅や脇寄りに動いたもの。④は 110 住・124 住・140 住・151 住・258 住など壁の中央部の同じ位置ではあるが竪穴建物の内側から外側へと移動したと推定されるものである。①のうち中央部に動いたものと②は竪穴建物内でカマドが設置されている壁の変更、①で隅寄りに動いたものと③はⅢ期以降にカマドの設置位置が壁の中央部から隅寄りへと変化していく流れの中にあるもの、④は竪穴建物の拡張に伴うものと理解したい。

(4) 竪穴建物の拡張

周溝の数と配置から竪穴建物の拡張を推定できる例がいくつかある。具体的には、周溝が同じような位置に相似形で二重に巡ったり、やや離れたところを壁に平行して走っていたりするもので、前者としては 17 住・84 住・125 住・140 住・213 住、後者は 151 住・154 住・258 住などが相当しよう。140 住・151 住・258 住では前項のような拡張に伴うカマドの移動 (④類型) もみられる。138 住はこれらの拡張とは異なり、南と西に拡張するとともに旧住居を埋め、より浅いレベルに新住居の床面を構築している。本遺跡では珍しい例である。

(5) 竪穴建物の重複

竪穴建物が集積する 1A 区と 2 区では、2 棟から数棟単位での重複や著しい近接の例が多く、その中には時期的にほとんど差異のないものもみられた。特に 2 棟の重複・近接例の中には住居規模や主軸方向、カマ

下位置などの規格が類似し、しかも時期的にも近く、まるでその場所に限定して意図的に同じような竪穴建物を連続して建てた如くに見えたものかいくつかあった。具体的には25・26住(Ⅳ古・Ⅳ新>)、60・61住(Ⅳ古>Ⅳ新<)、101・102住(Ⅰ新>Ⅱ新>)、103・104住(Ⅱ新>Ⅲ新<)、173・174住(Ⅱ新・Ⅲ古<)、194・195住(Ⅲ古<Ⅱ古<)、186・210住(Ⅴ新>Ⅳ古<)などで、これらの多くは切の方が切られるものより深く、逆に新しい方の床面深度が浅い例は稀であった。床面深度の差は、構築にあたり良好なローム面が露出するまで掘削しただけという単純な理由かもしれないが、平面配置をも勘案すると竪穴建物の占地が偶然やランダムな選択だけではなく、何らかの条件や規制、意図の上に行われ、その結果として重複が生じた場合もあるのではないかと考えたい。

(6) 特異な竪穴建物

ア 165 住

中央部の床上に65×50cmの大礫が平坦面を上にして据えてあり、平坦面には被熱と敲打の痕跡が顕著であった。硬化した良好な床面は大礫の南側に50cmほどの範囲のみに存在した。大礫の東側に隣接して大形のピット(径100cm、深さ25cm)があり、内部には鉄滓と小砂利が多量に含まれ底面には焼土が残されていた。本址は竪穴建物の形態をとる鍛冶遺構と推定する。覆土中からも鉄滓が多量に出土したが、土器類は覆土下層と検出面から少量が得られたのみである。覆土下層出土品はⅠ期を示すので本址の時期もそこに求めるが、検出面出土品はⅤ期にまとまっていてどこに由来するか不明である。何らかの跡地利用があったのであろうか。

イ 187 住

上面検出では他の竪穴建物との違いはなく、平面が隅丸方形の竪穴建物として一連の遺構番号を付して掘り下げた。しかし完掘の結果、カマド・炉・柱穴・周溝・床面がなく、壁もゆるい傾斜でなだらかに底面へ続いていく、通常の竪穴建物とは全く異質な遺構となった。深さは約50cmと他の竪穴建物と比べて遜色はなかったが、遺物は上層から土器類の小破片が数点、下層からは掲載した須恵器杯A(第142図187_1)の1点が二つに割れ1mほど離れて出土したのみで他は皆無、出土土器総量は205gしかなかった。時期は下層出土の須恵器杯AからⅠ～Ⅱ期とするが他の土器類が貧弱なので詳細はわからない。本址の用途や構築の目的は全く推定できない。掲載した須恵器杯Aは完形品で墨書があり、薄れて判読が難しいが2文字あり「王□」と見える。「王」の墨書では最古である。

ウ 227 住

本遺跡の中では3番目の床面積(36.8㎡)を有する大形住居で、方形配列の4本の主柱穴と12本の壁柱穴を持つ。さらに東壁中央に設置されるカマドの対辺にあたる西壁中央部直下に特徴的な規模と配列の5基のピットがある。隣接する同時期の226住から「小栢寺」と記す墨書が出土しており、規模と特異なピット配置から本址は村落寺院の可能性が指摘される(本章第3節2)。

2 溝址

溝2・溝6・溝19は本遺跡を特徴づける最大の遺構である。調査地内に限っても200m以上に伸びる長大なもので、溝2と溝6は2区と1区を西から東に貫いて横断し、溝19は4区から5区にかけて集落居住域の北限を画すように位置している。

(1) 溝2と溝6

溝2と溝6には水流があったことを示す堆積が認められ、この2条は集落に導水する目的で人為的に掘削された大型の用水路と推定する。本遺跡が所在する三間沢川下流域の左岸一帯はローム層とその上部腐植土層で形成される土壌、地質で極めて水利が悪く(文献1)、現代においても農業用水はすべて梓川から引水されている(中信平右岸用水:昭和47年竣工)。本遺跡が営まれた平安時代前期に、このような高燥な土地に自然流路があり、それを一部改修して利用していたと考えるのは、無理があると思う。溝2・溝6は共に本遺跡のかなり遠方から導水していたもので、その水源は松本市と山形村境の唐沢川、またはその近在の西山山麓から流下する小河川の可能性が高いと現段階では考えている(注1・2)。溝6は遺構各説(第3章第2節)で推定したように、4区の西側外から調査区域内に入っていたん南下し、2区の西側区域外で

東に曲がって2区を貫くものとみるが、溝2も4区の西部を南下する溝16がその上流と捉えると、溝6とほぼ同様の位置を取る。両者とも時期差はあるが水源から本遺跡まで同じような経路をたどっていたためであろう。

溝2はI期に属し集落の開始期と一致するので、この水路と本遺跡の出現は極めて密接な関係があり、溝2を開削して入植を開始したとの想定も可能である。一方、溝6はⅢ期の中で掘削されⅤ期の中で埋没したと推定でき、本遺跡の最盛期と軌を一にしている。集落の生活用水を支えた水路であつたに違いない。この水路が機能していた間には当然、部分的な自然埋没や崩落などがあり、それに対して溝浚いや修繕など維持管理の営みも継続されたであろう。溝幅の太い地点の土層にはそれに関連した、溝の中心部の移動のようにも見える痕跡が認められる(溝6土層図d・o・p地点など)。溝6の埋没以後、本遺跡は急速に衰退して集落は消滅する。集落の継続には溝6の維持管理が不可欠で、逆に言うところ集落を維持していく必要がなくなった時点で溝6の埋没が始まったのであろう。この地で集落を営むには導水は必須の条件で、本遺跡は溝2と共に始まり、溝6の消長と盛衰の歩みを共にしたといえよう。

(2) 溝19

本址が導水用の水路であることを示す堆積は明確にはみられない。ただし滞水した痕跡はあった。この長大な溝の用途・目的については次のような想定ができる。①本遺跡の集落の北限を画す。これは全体の遺構配置を見れば自明である。ただし、平面形が集落の展開する南側ではなく、逆の北側を内面とするような弧状を描いており、②集落北側の遺構がない空白の領域を囲う。という目的も感じられる。特に溝21が単独ではなく本址の続きと見ればその感は一層強まり、その領域に行くための通路が5本も溝19を渡っている点もこの見解をさらに補強する。溝19の北側には発掘調査で把握できなかった何らかの(重要な)用途の領域・空間があった可能性が高い。

本址の時期は、直接の遺構重複や出土遺物から下限をⅣ期新からⅤ期古と考えた。始まりはⅡ期の竪穴建物が本址の南北に展開するのでそれ以降とみると、用水路である溝6とほぼ並行する集落の盛行期に存在、機能したと推定される。

注1：第2次調査(S63)の際、地形地質担当の調査員だった太田守夫氏が溝6最下層に堆積していた流路性の砂礫について肉眼観察の結果「梓川水系ではなく唐沢川水系のもの」との見解を述べられていた。本書への成稿を頂戴する前に逝去された。

注2：平成23年に実施された下原遺跡第2次調査で、9世紀後半頃に埋没した水路が発見されている。幅約3m、深さ1m以上を測り、最下層には砂礫の堆積があった。報告書では大規模な土木工事によって作られた導水目的の水路で、旧唐沢川もしくはその支流、分流から取水していた可能性を考えている(文献43)。本遺跡から1.5km西方の地点であり、この水路が本遺跡に向かうものであったと即断はできない。しかし本遺跡と同時期に溝6に匹敵する規模の水路が作られていたという発見は極めて重要である。

3 通路状遺構

4次調査で発見された通3・通4は、調査当初は通路という認識はなく、溝19に付随する溝底に降りていくための施設で、同溝の一部が張り出したものと捉えていた。しかし5次調査でも溝19の延長上に同様の遺構が2基も現れたため、それほど幅が太くない溝19の溝底に降りる目的だけでこのような施設が何力所も必要なのかという疑問が生じた。それまで想定していなかった種類の遺構の可能性もあったので、長野県立歴史館考古資料課長(当時)であった原明芳氏に現地視察をお願いしたところ、溝19を渡るための通路の痕跡ではないかというご教示を得た。また、溝を渡るための道の発掘調査での先行事例を探したところ、かなり類似する事例(文献6・22)を見出すことができ、本址を通路状遺構として把握することができた。

第2節 土器・陶磁器について

1 三間沢川左岸遺跡における土器・土器群の変遷

(1) 先学の成果と本遺跡の土器群

長野県内の古墳時代末期から平安時代全般にかけての土器類・土器群の段階区分(編年)、年代観については、文献27と文献13(本節では、以下「両文献」という。)が広く用いられている。いずれも直接には長野自動車道建設に伴って発掘調査が行われた塩尻・松本市内の遺跡を対象としたものであったが、長野県内では同時期の多くの遺跡で両文献の時期区分と年代観が参照され、特に時期名称は文献13のものが多く使用されている(文献2・7)。両文献とも、基本的には杯Aの型式変化と土器群内での種別構成比を基準にした時期的な段階を設定したうえで、それに伴う各器種の消長や型式変化、土器群の様相の変化を明らかにするという方法を採用しており、現在でもその有効性に否定的な見解はない。(注1)

本遺跡の土器類も大枠では両文献の成果の範囲で把握が可能である。しかし両文献が直接対象とした遺跡に比して年代幅が短いにもかかわらず遺構は密で、土器類の量は極めて多い。遺跡の立地自体も異なる。この特徴を考慮すると、さらに詳細な土器群の段階区分に基く時期の尺度での遺構や集落の把握が必要となる。ここでは両文献の成果を基軸としながら、本遺跡出土土器群の段階区分を独自に設定すると共に代表的な器種器形の消長について考えてみたい。

(2) 段階区分の設定

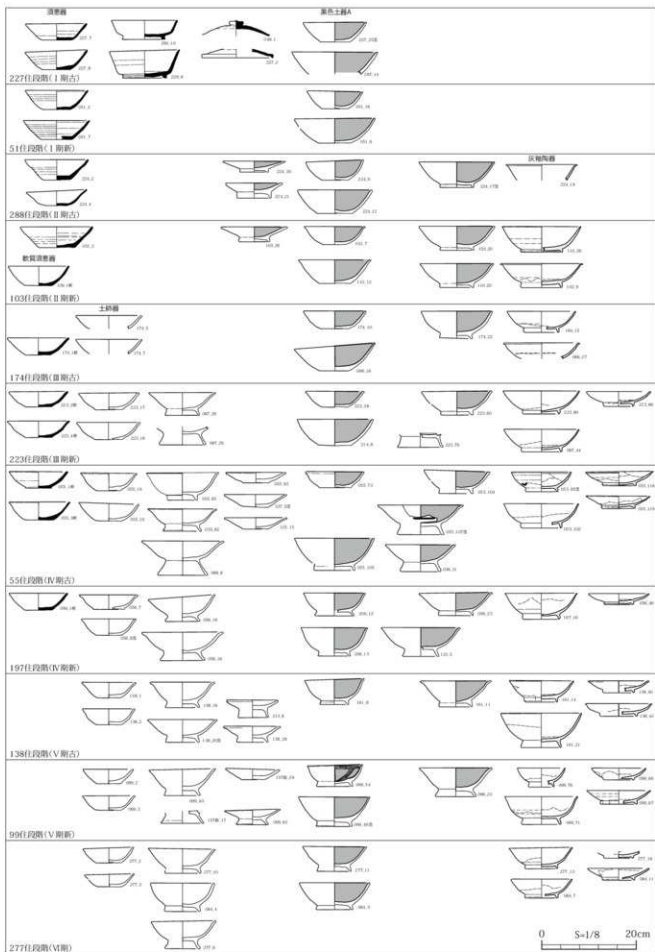
実測可能な土器個体数が合計で20点を超え、かつ種別を問わず杯Aが10点以上ある土器群(例外として、これを満たさないが時期的な特徴を示す必要のあるものを含む)で、遺構の切り合い等の把握に層間的な問題がないもの30例を対象として、時期的な段階区分の設定を試みた。区分の基準は両文献に倣い、複数の種別に共通する器形の杯Aの消長と口径の変化を第一の指標とするもので、土師器杯Aの出現を大きな画期とし、それ以前を須恵器と黒色土器Aでの杯Aの構成比、それ以降を土師器杯Aの平均口径によった。さらに副次的な指標として、主な食器の種別と器種の消長、煮炊き具の器種の消長を参考にした。指標の詳細と段階区分の根拠は第20表に示すとおりで、本遺跡出土の代表的な土器群は連続する11の段階に細別できる。各段階の名称は最も代表的な土器群の遺構名を用いる(正式には「三間沢川左岸遺跡○○段階」。単に「○○段階」と略す)。既存の段階区分(両文献)と本遺跡の各段階との対応関係についても第20表に示す。各段階の指標と概要は以下のとおり。

- ① 227住段階 227住、287住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が20%以下であることが第一の指標である。土師器の甕が甕Bと甕Cで構成されることが副次的な指標となる。須恵器の杯Bと蓋がわずかに伴う。
- ② 51住段階 10住、43住、51住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が20～60%であることを第一の指標とする。土師器の甕が甕Bと甕Cで構成されることが副次的な指標で、次段階との差異は黒色土器Aの椀と皿Aが伴わないことである。
- ③ 288住段階 16住、224住、288住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と黒色土器Aで構成され、後者の占める比率が60%を超えることを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bと甕Cで構成され、本段階から黒色土器Aの椀と皿Bが伴う場合があることが副次的な指標となる。次段階との差異は軟質須恵器の杯Aが伴わないことである。
- ④ 103住段階 103住、110住から出土した土器群を基準とする。杯Aは須恵器と軟質須恵器、黒色土器Aで構成され、須恵器と黒色土器Aにおいて後者の占める比率が60%を超えると共に軟質須恵器が伴うことを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bが主体となり甕Cがわずかに伴う場合があること、黒色土器Aの皿Bが伴う場合があることが副次的な指標となる。
- ⑤ 174住段階 66住、174住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が13cm以上であると共に須恵器の杯Aがみられないことを第一の指標とする。土師器の甕は甕Bが主体だが甕B・甕Cの分類では括れないその他の甕が伴うことが副次的な

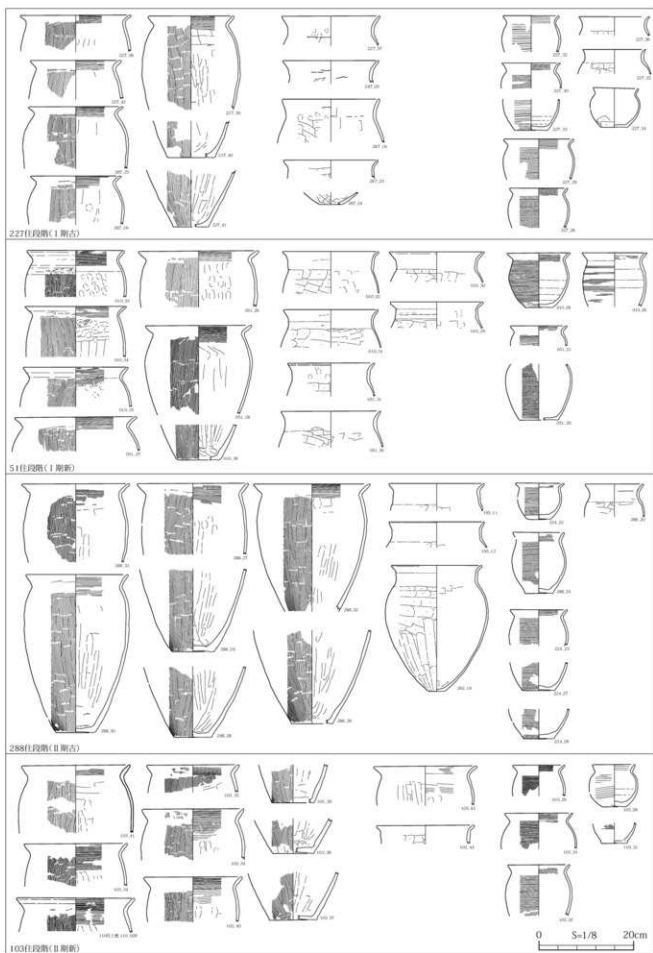
時期	段階名称	段階区分		土器群 (遺構名)	総個 数	土器 数	須 数	杯A個体数 黒土	計 数	黒灰A 割合(%)	土灰A 平均(%)	杯A以外の食器具の個体数			窯の個体数 黒土B・黒土C・黒土D	既存層年の各段階と基準 原1989		
		杯Aの指標	その他の指標									須	杯B	杯C			杯D	原1989
I期	227住段階	杯Aの指標 須80%以上		227住	42	18	4	22	18.18						5	1	原1989 小平1990 6期 SB184段階 黒灰20~60%	
				287住	27	12	2	14	14.29							3		6
				101住	38	8	14	22	63.64							0		4
II期	51住段階	黒20~60%前後	須杯B・香消滅	43住	27	9	7	16	63.75						2	5	7期 (須灰器減少) (軟須出現)	
				51住	36	7	11	18	61.11							4		4
				161住	20	1	0	12	13	92.31						0		1
III期	288住段階	黒60%前後超	黒灰・皿出現	224住	33	5	0	14	64.29						1	2	8期 土師器登場 (須灰器薄灰) 12.7~13.7cm	
				288住	33	4	0	11	15	73.33						1		3
				103住	51	2	1	16	19	84.21						2		6
IV期	174住段階	土口径1.3cm台 土登場・須消滅	灰椀皿出現	110住	35	1	2	13	16	81.25					5	10	9期 11~13.6cm 平均12cm前後	
				66住	57	4	15	2	21	13.30						0		5
				174住	34	4	11	5	20	13.53						0		3
V期	223住段階	土口径1.2cm台後半	土椀出現	87住	59	7	5	12	24	13.10					10	6	10期 10.8~11.8cm 平均11.2cm 前後	
				194住	23	4	3	8	15	13.16						3		3
				223住	123	13	13	23	49	12.90						19		9
VI期	55住段階	土口径1.1cm台後半		24住	38	3	3	10	16	12.81					3	11	11期 10.3cm前後	
				38住	44	8	3	10	21	12.52						9		3
				55住	133	9	6	63	78	12.65						5		14
VII期	197住段階	土口径1.2cm台前半 軟須消滅		156住	41	3	5	11	19	12.66					4	7	12期	
				56住	57	2	0	8	10	12.10						9		12
				135住	21	0	1	9	10	12.40						4		1
VIII期	138住段階	土口径1.1cm台後半		197住	21	0	1	11	12	12.10					1	3	13期	
				138住	45	0	16	16	11.70							2		11
				161住	39	0	4	4	11.70							5		3
IX期	99住段階	土口径1.1cm台前半		286住	22	0	5	5	11.55						1	3	14期	
				50住	87	3	22	25	11.00							5		8
				59住	32	0	10	10	11.40							3		2
X期	277住段階	土口径1.0cm台		99住	109	0	39	39	11.11						16	6	15期	
				84住	11	0	3	3	10.57							2		1
				277住	21	1	6	7	10.84					2	2			

表中「須」は須灰器、「軟須」は軟須須灰器、「黒」は黒土器A、「土」は土師器、「灰」は灰椀皿器、「緑」は緑釉陶器を指したものの

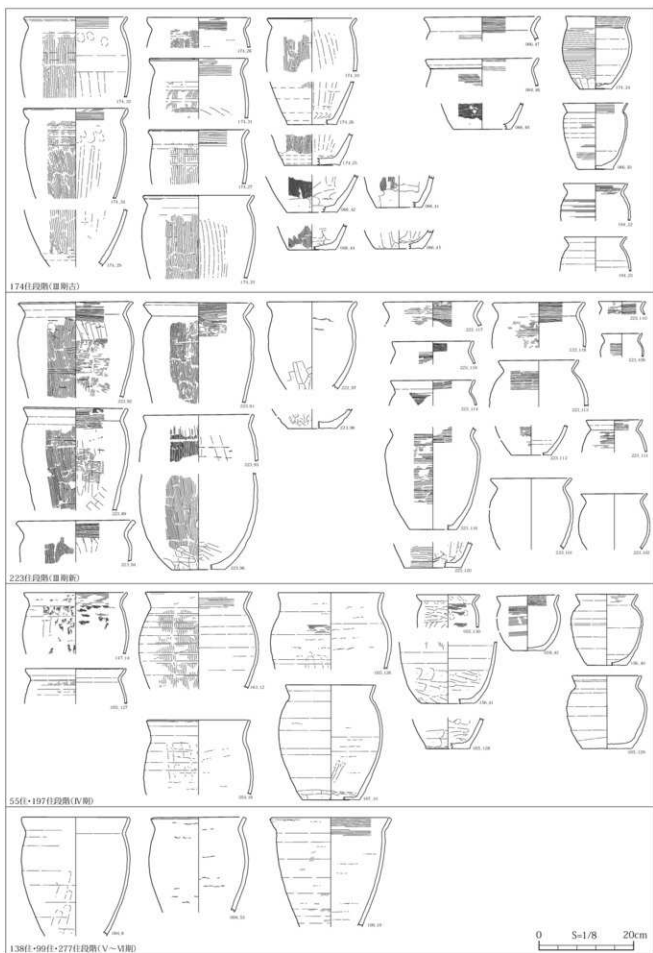
第20表 三間沢川左岸遺跡における土器群の段階区分



第 188 図 食膳具の変遷



第189図 甕類の変遷(1)



第190図 甕類の変遷(2)

指標である。前段階との差異は土師器の杯Aが現れること、黒色土器Aの皿Bがみられないことである。

⑥ 223 住段階 87 住、194 住、223 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が13cm前後であることを第一の指標とする。土師器の椀が伴うことが副次的な指標となる。

⑦ 55 住段階 24 住、38 住、55 住、156 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは軟質須恵器と黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が12cm台後半であることを第一の指標とする。

⑧ 197 住段階 56 住、135 住、197 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器A、土師器で構成され、土師器の杯Aの口径が12cm台前半であることを第一の指標とする。前段階との差異は軟質須恵器の杯Aがほとんどみられなくなることである。

⑨ 138 住段階 138 住、161 住、286 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は僅少で後者が主体を占め、土師器の杯Aの口径が11cm台後半であることを第一の指標とする。土師器の盤Bがわずかに伴う。

⑩ 99 住段階 50 住、59 住、99 住から出土した土器群を基準とする。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は僅少で後者が主体を占め、土師器の杯Aの口径が11cm台前半であることを第一の指標とする。土師器の盤Bが伴う。

⑪ 277 住段階 84 住、277 住から出土した土器群を基準とするが、他に比べ本段階は良好な土器群に恵まれていない。杯Aは黒色土器Aと土師器で構成されるが前者は極めて僅少で、土師器の杯Aの口径が10cm台後半であることを第一の指標とする。

(3) 段階区分と時期の名称

前項では良好な土器群 30 例による段階区分を設定したが、この段階区分は本遺跡の遺構や遺物、集落の時期を記述、比較するための尺度にする目的もあった。ただし「段階」という名称はあくまでも土器群の段階区分という限定的なものであり、遺構・遺物や集落の変遷について時間的な順番や前後関係も示しながら時期を規定する用語としては適当ではない。また、遺構や集落の時期の尺度としては細かすぎる点もある。そこで本遺跡の遺構・遺物や集落の「時期」を示す汎用的な名称としては土器群の段階区分に対応させた「三間沢川Ⅰ～Ⅵ期」の用語を使用する。土器群の段階区分との対応関係は第 20 表左側欄のとおりである。(混乱のおそれがないかぎり表記短縮で「Ⅰ期」「Ⅱ」と略す。細分が必要な場合には「Ⅰ期古・新」等で表記する。)

(4) 土器群の変遷

土器群の段階区分に基づいた食器類の変遷の概要を第 188 図に示す。その量的な比較は第 20 表を元に作成した各段階の杯Aを構成する種別の比率グラフ(第 191 図左)と、食器類全体の種別構成の比率グラフ(第 191 図右)で示した。第 191 図左からは、杯Aの種別構成が須恵器から黒色土器A、そして土師器へと遷移していく大きな流れと、その中で軟質須恵器の出現と消滅、消長が読み取れる。第 191 図右は杯Aだけではなく椀や皿、盤Bなどを含む食器類全体における各種別構成の比率を示したもので、やはり須恵器から黒色土器Aへ、そして土師器と灰軸陶器へと変化していく大きな流れがわかる。

同じく炊煮き具の土師器甕と小型甕の変遷概要を第 189・190 図に示す。甕Bと甕Cによる構成から、やがて甕Cがなくなり、さらにその他の甕が現れると共に甕Bが型式変化していく状況がわかる。

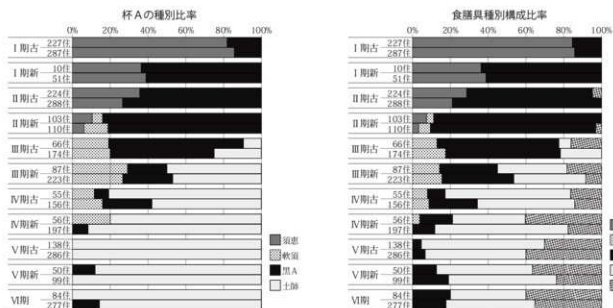
(5) 代表的な器種の消長と変化

ア 杯A

最も普遍的な器種で、種別は須恵器、軟質須恵器、黒色土器A、土師器に限られ、灰軸陶器と緑軸陶器には全くみられない。軟質須恵器と土師器の区別が難しい焼成のものが少なからずある。(注2)

須恵器の杯AはⅠ・Ⅱ期のみでみられなくなる。底径の縮小と器高の減少による体部の傾斜の増加や、器壁が薄くなるなど文献 13 で指摘されているのと同様の動きを示す。軟質須恵器はⅡ期から散見されるようになり、Ⅲ期からⅣ期古に量的なピークを迎えた後、急速に姿を消す。その間、技法や形態にほとんど変化はみられない。外形は須恵器杯Aのような小ぶんな底部から直線的に体部が開くものではなく、むしろ黒色土器Aの杯Aに近い。

黒色土器AはⅠ期からⅥ期までほぼ間断なく存在するが、Ⅱ・Ⅲ期で量的なピークを迎え、Ⅳ期新以降は



第191図 土器群別にみる食膳具の種別構成比率

著しく数を減じてV期以降には僅少となる。I～III期は大小（I・II）の二規格（二法量）が明確に認められるが、III期以降の全体量の減少に伴い「大」規格の存在が不明瞭になる。技法的には、I期は内面のミガキの方向や単位が把握できないほど細かく密で、回転を用いた外器面の調整も凹凸が少なく、全体的に丁寧な造りである。II期以降は内面のミガキが口縁部は横方向、体部・見込み部は放射状に定形化し、新しくなるほど磨き残しの隙間が目立つ雑なものになる。放射状のミガキを全く行わず、各種の十字状の暗紋に置き換わるものがIII期以降に現れる。

土師器はIII期から現れ、急激に種別間での量的な比率を増して、IV期以降は杯Aの80%以上を占める。両文献は時期が下るにつれて口径が縮小していく現象を指摘し、時期区分の主要な指標としているが、本遺跡でも全く同じ状況を示した。技法的には時期差に起因する差異はみられない。初期から成形・調整が雑で全体が歪むものも散見され、出現期にあっても丁寧に作られた様相は認められない。文献27では出現時に黒色土器Aと同様な大小の二口径（二法量）の存在を認めているが、本遺跡ではこの点は明確にできなかった。

イ杯B

須恵器のみであり、I期の土器群にわずかに伴うが量的に極めて少ない。本遺跡では盛行期を過ぎているためであろう。身の深いもの（第154図226_6）と浅いもの（第168図290_10）、径が小さいもの（第150図223_1）がみられた。

ウ椀

杯Aに次いで普遍的な器種で、種別は黒色土器A、土師器、灰軸陶器で多数がみられ、緑軸陶器の中でも半数を占める。ごくまれに軟質須恵器とするしかない胎土、色調を呈すものがある。

本遺跡での椀の初現はII期の土器群に伴う黒色土器Aと灰軸陶器で、土器群内での構成比は少なく、特に灰軸陶器は僅少である（110住・224住）。II期の黒色土器Aの椀は、外形は腰の張りが緩やかで大きく開き、小さい高台が付されるものも多く、同期の灰軸陶器の椀に似る。技法的には前時期の黒色土器Aの杯Aと同様に内面のミガキは均質で方向が揃い、回転を用いた外器面の調整も凹凸が少ないなど、全体的に丁寧な造りのものが多い。

III期になると土師器が加わり、以後はこの3種別が椀の主要な構成となる。黒色土器Aと土師器は類似の外形を呈すものも多く、高台は前時期より厚く大きめのものも目立つようになる。黒色土器Aの内面ミガキは、同杯Aと同じで口縁部は横方向、体部・見込み部は放射状で定形化するが、磨き残しの隙間が目立つ雑なものが多くなる。暗紋も同杯Aと歩調を同じくしている。黒色土器A、土師器ともに成形・調整も雑で全体が歪むものも散見され、土師器の椀は出現期にあっても丁寧に作られることはない。III期の後半より高台が高く体部が浅めの足高椀が現れるが数量は少なく、最初は黒色土器Aに限られ、次いで土師器にも類似す

る形態がみられるようになる。この足高椀が、両文献ではV期以降に出現するとされる盤B Iに繋がって行く可能性も考えたい(第20表では盤Bではなく椀でカウントしている)。

IV期も種別の構成や外形、調整の特徴に前時期と大きな変化はなく、粗雑さが一層目立つようになる。土師器の中には高台のやや高いものや、体部の腰の張りが微弱、あるいは直線的なものがみられるようになる。

V期以降になるとわずかに黒色土器Bがみられるようになる。また半球形の浅椀、深椀が黒色土器Aと灰軸陶器に現れるが、従来のような形態も依然として存在する。両文献では全国的な様相と次期以降の動向を見据え、土師器の体部が直線的で高台の高いものを盤B Iとして椀から分離するが、本遺跡の段階まででは従来の椀との外形上の差異に基づく区別はむずかしいものが多い。

エ 皿

皿Aは高台が付されないもの、皿Bは高台があり、皿Cは段皿である。皿Aは土師器にしかみられず、IV期以降の土器群にわずかに伴うのみの希少器形といえる。皿Bの種別は黒色土器Aと灰軸陶器、緑軸陶器で、黒色土器AはII期に集中的に現れ、それ以後は全くみられない。技法的には、黒色土器Aの杯Aや椀のような粗雑化が生じる前に消滅するので、顕著な変化を指摘するのはむずかしい。口径12~14cmの範囲にあるが、17cmを超えるものもある(第167図288_19)。灰軸陶器はIII期から現れ、以後継続する。緑軸陶器は数量が少ないが灰軸陶器と同様の傾向を示す。段皿は灰軸陶器と緑軸陶器にしかみられない。III期からわずかに現れ、IV期以降に量を増す。

オ 盤B

両文献によると、I・II(大・小)の二法量があり、文献27ではSB94段階:10期相当、文献13では11期から出現し、「長く外傾する高台がつき、上部は皿状(文献27)」、「足高高台を有する身の浅い椀型の器(文献13)」と説明されている。本遺跡ではV期以降に盤B IIが散見される。盤B Iは体部のみの残存では土師器椀との区別が明瞭にできなかった。また「高い高台」に着目すると、本遺跡では黒色土器Aの中に体部が椀に近い形態でIII期ころから現れ始め、次いで土師器にも同形態が現れるが、それを盤B Iとすると両文献での出現時期や形態の説明と齟齬が生じる。その点で文献23による屋代遺跡(千曲市)での黒色土器Aの盤B I(土師器の盤B)の分類の方が本遺跡の状況に近いと感じられた。「椀」の項でも述べたように本書ではこれら高い高台のものをとりあえず足高椀として把握し、盤B Iにカウントしていないが、今後、在地における盤Bの出現を探っていく中で当然、見直しがなされるものと考えられる。

カ 土師器 裏B

I・II期に盛行するが、その後は徐々に型式変化をしながら量を減らし、IV期には全く原形をとどめない形態となって消滅する。(第189・190図)

外形上の変化の着目は口縁部の長さや外開・外反度合い、口唇部の形態にある。例外も少なくないが、概略としては口縁部の長さは[短]→[長]、外開・外反度合いは[強・外反]→[弱・直線+後]→[弱・受け口]、口唇部は[細丸]→[太丸]→[面や沈線]という方向で変化していく。技法上での着目は器内の厚さ、ロクロ等の回転を用いた器面調整が行われる範囲、ハケメの整雑、胴部下端のケズリの有無と範囲である。こちらも例外はあるが、器内は[薄]→[厚]、回転を用いた調整範囲は[狭・口縁部]→[広・胴部上半]、ハケメは[整・均質]→[雑・太細や深淺のばらつき]、胴部下端は[端部までハケメ]→[下部にケズリ]と変化していく。外形上の口縁部の長さや外反度合いの変化が技法上の回転を用いた器面調整の変化に密接に連動しているであろうことは容易に推測できる。

オ 土師器 裏C

I~II期にみられる。I期には裏Bに拮抗する量を持つ土器群もあるが、全形を知り得るものは少ない。II期新にはごくわずかとなり消滅する。外形の変化は文献13で把握されているものと全く同じで、口縁部が「く」の字状から逆「コ」の字状になる。小型裏Cも同様の経過をたどるが、口縁部形態の変化は顕著ではない。

カ 小型 裏D

ロクロ等の回転を用いて器面すべての調整を行い、底面には回転切り痕を残すもので、I期から盛行し、本遺跡では型式変化をしながら概ねV期までは存在が確認できる。(第189・190図) 胴部外面の調整痕と

口縁部形態を中心とする外形を時期的な変化の指標とする。その他にも大小の規格に時期的特徴が感じられるが明確な指標にはできなかった。

I期は胴部外面の全面にカキメが顕著に残る。カキメの条は均質で深く、隙間はない。器肉は薄い。II期も同様だが、やや雑になる傾向がある。III期には雑な傾向が顕著となり、カキメの太細や深浅のばらつきが大きい。一応、カキメは行方がロクロナデの凹凸を均しきれず、カキメが当たる部分とそうではない部分が生じた個体も多い。器肉は厚くなり、器壁を薄く削り込むためのカキメの意味が失われていく。さらにロクロナデのみでカキメを行わないものが現れ、これは口縁部内面のカキメも欠落している。IV期以降はこの傾向がさらに強まり、部分的でもカキメが認められる個体はごくわずかになり、ほとんどがロクロナデのみとなる。II期から現れ始める、このカキメの粗雑化という現象は、喪Bにおける胴部外面のハケメの変化に似ており、双方が製作段階で何らかの関連性を持っていることが窺える。

口縁部を中心とした外形は、短めの口縁が強く外開・外反するものから、やや長めで外開・外反が弱くなるという方向で変化する。喪Bほど顕著ではないが、やはり同様な傾向がある。

キ甔

直立かわわずかに内傾する長い口縁部下に鈎が全周し、頸部のくびれが全くない形態の大形の土師器で、発掘時は羽釜と認識していた。しかし整理作業を進める中で、羽釜の特徴のひとつである平底大型や丸底の底部が破片資料を合わせてもほとんどみられない一方で、かなり底径が大きくなりそうな底の抜けた甔とみられる破片が多数あり、一部は接合して甔としての全形が捉えられた。また、文献13では羽釜の出現が11期(本遺跡VI期相当)であること、文献27ではSB114段階(本遺跡IV期相当)で羽釜Aが出現するがその多くが羽釜型の甔であろうとしていることを勘案し、前記の鈎が付く土師器は本書ですべて甔という名称で一括した。羽釜が含まれている恐れは皆無ではないが、羽釜として接合・復元できた例はない。

III期新(IV期古)の土器群に伴って現れVI期まで継続している。形態上の特徴や製作技法の時期的な差異などを抽出、一般化するには個体数が少なすぎて難があるが、III期以降の喪Bの太細や深浅のばらつきがあるハケメに類似する調整痕が残るものと、全く異なるナデや工具ナデなどがみられるものがある。鈎以下がかなり長く丈の高いものもある(第131図152_19)。いずれも厚手で、中には極めて焼成が良く、色調は土師器だが質感や重量は須臾器に匹敵するような例もある。事例の増加とともに、在地以外にも視野を広げて検討が必要な器種であろう。

2 模倣・搬入された土器

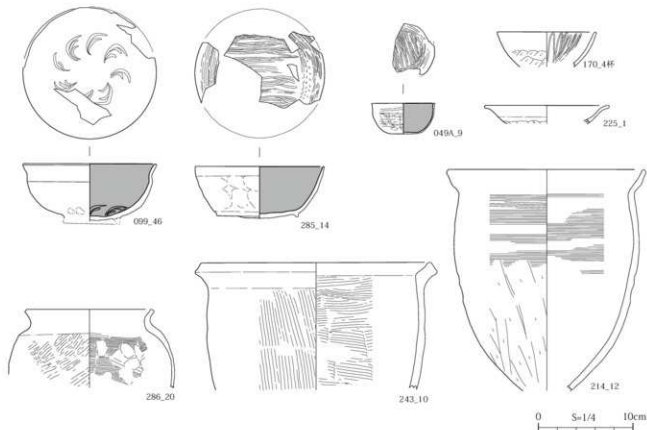
土師器や黒色土器Aの中に在地で通有の器種器形に比して形態や製作技法が大きく異なるものがわずかにみられる。在地の系統的な土器生産から外れたものと考えられ、他地域からの搬入品か、それらを模して特別に製作されたものである可能性が高い。

(1) 食膳具

黒色土器Aでは第117図099_46(碗)と第166図285_14(碗)、第100図049A_9(小鉢)を挙げたい。後の2者にはロクロナデによる器面調整の行われた痕跡がない。小片で図化できなかったが049A_9によく似た黒色土器Bの破片が187住の上層からも1点出土している。土師器では第137図170_4(杯)、第153図225_1(皿)を挙げたい。前者は体部内面に放射状の特徴的なミガキがあり外面下半は手持ちケズリ、後者にも外面下半に手持ちケズリがあり、口縁端部は玉縁状を呈す。甲斐型の杯や皿に似る。

(2) 土師器甔類

第147図214_12(甔)、第158図243_10(甔)、第166図286_20(小型甔)が該当する。214_12は口縁部内面から胴部上半部までカキメが巡り、外面胴部下半には縦方向のケズリが行われるが、喪Cのような薄い器壁には仕上っていない。北信を中心に分布する甔に似る。243_10は四角く厚い口縁部や強いハケメ、口縁端部に最大径がある点など甲斐型の甔と共通点が多い。286_20は肩部以上に強いヨコナデが行われ、胴部は外面が稜のできるくらい強いケズリ(もしくはタタキ)の後に全面的な太いミガキ、内面が明瞭な指頭圧痕とハケメで調整され、焼成が極めて良い土器で、在地での類例をみない。



第 192 図 模倣・搬入土器集成

3 緑釉陶器

(1) 胎土と色調の特徴

出土した器種はほとんどが椀と皿であるが胎土の色調や質感、釉の色調はかなり多様である。生産地と時期の違いに起因すると考えるが、筆者の狭い知見ではそれについて触れるのは困難なので、外見上の観察にとどめた。

胎土は色調や硬さ、質感で4種類ほどのグループに分けられる。第一のグループは灰白色を呈しやや硬めのもの、第二のグループは同じく灰白色を呈するがかなり軟質なもの、第三のグループは黒めの暗灰色を呈し須恵器のような質感で硬いもの、第四のグループは青灰色や薄めの灰色を呈し須恵器のような質感で硬いものである。第二のグループに属するものはわずかしかない。被熱の影響であろうか、断面の一部やすべてに橙色を帯びるものが各グループで見られる。

釉の色調は淡緑や草色、淡黄緑、緑、濃緑や洗みのある濃緑などがみられる。一個体の釉の色調はほとんどが一樣だが、器面の狭い範囲に黄橙色の部分を持つものや、より濃い緑の大小の斑点が全面的にとんでいるものが、特に緑や濃緑の釉の個体で見られる。

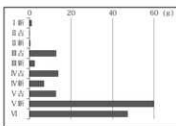
胎土の質感と釉の色調にはある程度の相関を認めてもよい。胎土が第一のグループは概して淡緑や草色を呈し、第三や第四のグループには緑や濃緑が多い。特に第三のグループで洗みのある濃緑が目につく。

(2) 時期別の出土比率

本遺跡での緑釉陶器の総出土量は3,589gで、うち時期が判定できる竪穴建物出土の土器群に伴っていたのは3,322gである。これらの時期別の重量と、それを該当時期の竪穴建物棟数で割り戻した数値を第21表に示す。I・II期は1.0g以下なので、とりあえず混入として排除すると、本遺跡での緑釉陶器の確実な

期	緑釉陶器	緑釉陶器
I期	16.3	0.91
II期	1.5	0.09
III期	5.5	0.37
IV期	332.8	12.80
V期	109.2	2.43
VI期	773.0	13.80
VII期	551.2	6.89
VIII期	316.4	12.66
IX期	1075.0	59.72
X期	141.5	47.17
計	3322.4	(11.34)

第 21 表 緑釉陶器時期別出土重量 (左表)



第 193 図 住居 1 棟あたりの緑釉出土重量 (右図)

No.	実測図No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考
1	001_14	17E	碗	高台2/3,口縁全欠	101.4	灰白硬	灰色	見込みに磨削2本
2	004_11	47E	碗	高台1/4,口縁全欠	29.7	灰白硬	黄褐色	見込みに内縁
3	009_12	9E	皿	高台1/6,口縁1/8	15.1	暗灰硬	濃緑色に有	
4	011_13	11E	皿	高台1/4,口縁1/8	17.6	灰白硬	灰色、釉全面剥落	縁は破断で落ちたか
5	013_25	13E	皿	高台1/4,口縁1/10	24.8	暗灰硬	黒濃緑	No.6と同一個体か、飛び出し底面
6	13E	皿	口縁1/10	4.7	暗灰硬	黒濃緑	No.5と同一個体か	
7	015_14	15E	碗	高台1/3,口縁1/10	32.7	白色やや軟	濃緑色に有	小丸縁
8	15E	不明	1.5cm小片	1.0	暗灰硬	灰色		
9	16E	不明	1.5cm小片	1.5	灰白硬	灰色		
10	20E	不明	口縁1/8	9.8	暗灰硬	濃濃緑		
11	20E	不明	口縁1/8	5.3	暗灰硬	濃濃緑	No.11と同一個体か	
12	022_30	22E	碗	高台2/3,口縁全欠	62.6	青灰硬	緑	No.10と同一個体か
13	024_31	24E	碗	高台1/8,口縁全欠	9.0	暗灰硬	濃濃緑	見込みに磨削か
14	25E	不明	口縁1/10	5.0	青灰硬	緑		
15	025_12	25E	蓋付	体部1/8	3.7	白色やや軟	灰色、艶著しい	透かしらしもの
16	027_5	27E	碗	高台1/8,口縁全欠	16.3	青灰硬	灰色	No.10と同一個体か
17	029_26	29E	碗?	高台元,口縁全欠	64.7	青灰硬	灰色、底面剥離	底面黒青!上(黒塗No.67)
18	29E	不明	1cm小片	1.4	灰白硬	灰色、内面無釉	胎にしては薄い	
19	31E	不明	1.5cm小片	3.9	暗灰硬	濃濃緑		
20	31E	不明	1cm小片	1.6	灰白硬	灰色		
21	32E	不明	口縁1/16	7.9	灰白硬	灰色		
22	32E	不明	口縁1/20小片	0.9	暗灰硬	濃濃緑		
23	032_7	32E	不明	口縁1/10	5.1	暗灰硬	濃濃緑	
24	033_20	33E	不明	口縁1/10	5.0	灰白硬	濃灰色、釉外面剥落	
25	33E	不明	1.5cm小片	3.4	灰白硬	灰色		
26	033_21	29E	不明	口縁1/10	3.4	灰白硬	灰色	
27	33E	不明	口縁1/10	2.0	青灰硬	濃濃緑		
28	034_30	34E	碗	高台1/4,口縁全欠	14.1	暗灰硬	濃濃緑	
29	034_29	34E	不明	体部1/8	10.2	青灰硬	緑	縁破
30	34E	不明	1.5cm小片	4.6	灰白硬	灰色	底面か	
31	34E	不明	1.5cm小片	2.8	灰白硬	灰色		
32	038_35	38E	碗	高台1/4,口縁全欠	16.1	暗灰硬	濃緑色に有	
33	38E	不明	体部1/6	15.8	白色やや軟	灰色	面とするとかなり大きい	
34	42E	不明	口縁1/16	3.8	青灰硬	緑		
35	47E	不明	口縁1/25	1.1	青灰硬	緑		
36	050_66	50E	碗	高台1/3,口縁全欠	24.3	暗灰硬	濃濃緑	
37	60E	不明	口縁1/10	5.9	青灰硬	濃濃緑		
38	50E	不明	口縁1/20	2.8	暗灰硬	濃緑色に有		
39	50E	不明	1cm小片	0.8	暗灰硬	濃緑色に有		
40	50E	不明	1cm小片	0.8	白色やや軟	灰色		
41	050_68	50E+75E+84E	皿	高台3/4,口縁1/3	93.2	暗灰硬	緑	段皿
42	050_67	50E	皿	高台1/4,口縁全欠	13.3	灰白硬	灰色	
43	053_3	53E	皿	口縁1/8	4.1	灰白硬	灰色、釉外面剥落	
44	53E	不明	1.5cm小片	2.4	灰白硬	灰色		
45	055_114	55E	不明	口縁1/8	17.5	灰白硬	灰色	
46	055_115	55E	不明	口縁1/10,体部1/8	11.1	青灰硬	緑	輸花
47	055_112	55E	不明	口縁1/8	5.5	灰白硬	灰色	
48	055_113	55E	不明	口縁1/8	4.0	青灰硬	緑	
49	055_116	55E	輸花	高台1/6のみ	3.5	灰白硬	濃濃緑	
50	055_125	55E	不明	口縁1/8	3.2	灰白硬	濃濃緑	
51	55E	不明	口縁1/20	3.0	灰白硬	灰色		
52	55E	不明	口縁1/20	2.6	灰白硬	濃濃緑		
53	55E	不明	1cm小片	2.2	灰白硬	灰色		
54	55E	不明	口縁1/10	2.1	灰白硬	灰色		
55	55E	不明	口縁1/10	1.8	青灰硬	濃濃緑		
56	55E	不明	口縁1/10	1.7	白粉やや軟	灰色	輸花	
57	55E	不明	約2×1cm小片	1.7	暗灰硬	濃濃緑		
58	56E	不明	1.5cm小片	4.5	灰白硬	灰色		
59	56E	不明	1cm小片	2.7	暗灰硬	濃濃緑		
60	56E	不明	口縁1/20	1.8	灰白硬	濃濃緑		
61	56E	不明	1cm小片	1.5	灰白硬	濃濃緑		
62	56E	不明	1cm小片	1.0	暗灰硬	濃緑色に有		
63	56E	不明	1cm小片	0.6	暗灰硬	濃緑色に有		
64	058_14	58E	碗	高台1/3,口縁1/10	44.2	暗灰硬	濃濃緑	小丸縁
65	58E	不明	口縁1/10	3.0	白粉やや軟	灰色色に有	輸花	
66	059_26	59E	耳皿	底面1/4,口縁全欠	47.9	青灰硬	灰色、ミ刀手なし	底面突出、高台なし
67	59E	不明	体部1/8	7.7	青灰硬	濃濃緑	腹2面	
68	59E	不明	1cm小片	0.6	灰白硬	灰色		
69	059_25	59E+128E	碗	高台1/2,口縁全欠	18.9	白粉やや軟	灰色	
70	60E	不明	体部1/8	4.1	灰白硬	濃濃緑		
71	060_8	60E	蓋付	口縁1/10	3.1	白粉軟質	釉全面剥落、色調不明	
72	61E	不明	1.5cm小片	1.6	青灰硬	濃濃緑		
73	63E	不明	1.5cm小片	3.7	灰白硬	灰色		
74	073_7	73E	碗	高台1/6,口縁全欠	8.4	灰白硬	灰色	
75	76E	不明	1.5cm小片	2.5	白粉やや軟	灰色、オリブ		
76	77E	不明	1cm小片	0.9	青灰硬	緑		
77	77E	不明	1.5cm小片	3.4	青灰硬	濃濃緑		
78	084_9	84E	不明	口縁1/10	5.7	暗灰硬	濃濃緑	
79	085_12	85E	碗	高台1/4,口縁全欠	46.0	暗灰硬	濃緑色に有、底面剥離	底面に糸切り残る
80	87E	不明	1cm小片	1.6	青灰硬	緑	見込みに磨削	
81	088_14	88E	碗	口縁1/6	9.0	灰白硬	灰色	
82	88E	不明	口縁1/20	3.7	暗灰硬	濃濃緑、釉外面剥落		
83	88E	不明	口縁1/10	4.0	暗灰硬	濃濃緑		
84	88E	不明	1cm小片	1.0	青灰硬	緑、粘着剥離		
85	89E	不明	高台1口縁全欠	8.4	白粉やや軟	灰色	底面	
86	89E	不明	高台1口縁全欠	11.0	灰白硬	灰色、ミ刀手なし	底面	
87	89E	不明	高台1口縁全欠	9.7	暗灰硬	濃濃緑	底面	
88	092_1	92E	皿	高台1/2,口縁全欠	26.1	暗灰硬	濃濃緑	
89	093_3	93E	皿	底面2/3,口縁全欠	63.4	青灰硬	濃濃緑	
90	96E	不明	体部1/8	11.9	青灰硬	灰色剥離	深縁	
91	096_49	96E	不明	高台3/4,口縁1/4	64.7	白色やや軟	濃緑色に有	
92	099_76	99E	不明	高台2/3,口縁1/2	127.2	暗灰硬	濃緑色に有	
93	099_94	99E	不明	高台元,口縁2/5	92.4	白粉やや軟	濃緑色に有	底面に磨削か
94	099_77	99E	不明	高台1/3,口縁1/6	36.0	灰白硬	灰色	

第22表 緑釉陶器一覽(1/3)

No.	実測No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考
95	099_80	99F	碗	口縁1/3	25.9	暗灰緑	濃緑色	
96	099_82	99F	碗	高台3/4,口縁全欠	39.4	灰白緑	緑色むら有 / 青色, 輪全面剥落	輪取石片と輪剥落片が嵌合
97	099_100	99F	不明	高台1/8,口縁全欠	22.1	白緑やん散	青色, 底面剥落	底面のみ
98	099_99	99F	台子	底面1/5	19.1	白色軟	青色, 輪全面剥落	No.98~100同一個体
99	"	99F	台子	体部	2.7	白色軟	青色, 輪全面剥落	"
100	"	99F	台子	肩~腹部	3.7	白色軟	輪全面剥落	"
101	099_79	99F	碗	口縁1/8	5.2	青灰緑	青色, 輪外面剥落	
102	099_81	99F	碗	高台1/8,口縁全欠	17.0	暗灰緑	暗灰緑	
103	"	99F	不明	口縁1/20	0.8	暗灰緑	濃緑色	
104	"	99F	不明	口縁1/20	7.9	暗灰緑	濃緑色	
105	"	99F	不明	体部	3.8	暗灰緑	濃緑色	深緑
106	"	99F	不明	口縁	3.0	柳灰緑	濃緑色	
107	"	99F	不明	体部	2.5	青灰緑	濃緑色	
108	"	99F	不明	体部	2.4	灰白緑	青色	
109	"	99F	不明	口縁	1.6	暗灰緑	濃緑色	
110	"	99F	不明	口縁1/10	2.2	暗灰緑	濃緑色	
111	"	99F	不明	体部	2.2	暗灰緑	青色	
112	"	99F	不明	体部	1.7	灰白緑	青色むら有	
113	"	99F	不明	体部 <small>1cm小片</small>	1.7	灰白緑	青色	
114	"	99F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	1.6	灰白やん散	青色	
115	"	99F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	1.6	暗灰緑	濃緑色	
116	"	99F	不明	口縁1/12	1.5	暗灰緑	濃緑色	
117	"	99F	不明	口縁1/10	1.1	灰白緑	輪全面剥落	
118	"	99F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	0.8	白緑やん散	青色	
119	"	99F	不明	体部 <small>1cm小片</small>	0.6	灰白緑	輪全面剥落	
120	099_78	99F-取付	不明	高台1/4,口縁1/4	62.4	灰白緑	輪全面剥落	小丸碗
121	"	99F	不明	体部 <small>1cm小片</small>	1.4	灰白緑	青色	
122	114_12	114F	不明	口縁1/20	1.2	暗灰緑	濃緑色むら有	
123	114_12	114F	不明	高台完,口縁3/5	112.7	青灰緑	濃緑色むら有	
124	"	114F	不明	高台1/8,口縁全欠	8.9	灰白緑	青色, 輪全面剥落	
125	"	114F	不明	口縁1/20	2.2	灰白緑	青色, 輪全面剥落	
126	115_4	115F-取付	不明	底面1/4,口縁2/3,高台完,一部のみ	12.5	暗灰緑	濃緑色	
127	121_9	121F	不明	口縁2/3,高台完	159.4	青灰緑	濃緑色むら有	段皿
128	121_10	121F	不明	高台完,口縁1/3	109.7	暗灰緑	濃緑色むら有	段皿
129	123_8	123F	不明	高台3/4	46.6	青灰緑	青色	段皿
130	124_13	124F	不明	高台1/8,口縁全欠	17.3	青灰緑	濃緑色	見込みで磨粉か
131	124_12	124F	不明	口縁1/10	4.3	濃緑色	濃緑色	
132	124_15	124F	不明	高台1/8,口縁全欠	6.6	暗灰緑	濃緑色, 輪外面剥落	
133	"	124F	不明	口縁1/16	2.5	白色やん散	青色	
134	"	124F	不明	口縁1/20	1.5	青灰緑	濃緑色	輪花
135	125_14	125F	不明	底面完	80.2	灰白緑	青色, 底面剥落	蛇の目高台
136	125_13	125F	不明	口縁1/8	12.7	青灰緑	濃緑色	輪花, 輪花
137	"	125F	不明	口縁1/20	2.6	青灰緑	濃緑色	
138	"	125F	不明	1cm小片	1.6	暗灰緑	底面で変質	
139	130_10	130F	不明	口縁1/4	9.7	暗灰緑	濃緑色	
140	"	135F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	0.4	灰白緑	青色	
141	"	136F	不明	体部 <small>1cm小片</small>	0.2	灰白緑	青色	
142	136_18	136F	不明	高台1/3	31.3	暗灰緑	濃緑色	
143	136_17	136F+145F	不明	高台1/4,口縁1/10以下	13.6	灰白緑	濃緑色	
144	137_15	137F	不明	口縁1/10	4.8	灰色	青色	小碗
145	138_39	138F	不明	口縁1/2,底面全欠	14.8	暗灰緑	濃緑色	輪花, 印刷紋, 小碗
146	"	138F	不明	"	5.9	"	"	No.145~148同一個体
147	"	138F	不明	"	46.1	"	"	"
148	"	138F	不明	"	16.4	"	"	"
149	138_45	138F	不明	高台1/4	15.6	暗灰緑	濃緑色	
150	"	138F	不明	口縁1/12	2.0	暗灰緑	濃緑色	
151	"	141F	不明	口縁1/12	6.2	暗灰緑	濃緑色	段皿か
152	"	141F	不明	口縁小片	2.5	暗灰緑	濃緑色	
153	"	142F	不明	体部	6.9	暗灰緑	濃緑色	
154	"	142F	不明	体部	3.9	暗灰緑	濃灰色	
155	148_15	148F	不明	高台1/3,口縁1/4	72.7	灰白緑	青色	
156	151_17	151F+72F	不明	底面2/5	31.7	灰色軟	輪全面剥落	糸切碗, No.157と同一個体
157	"	151F+72F	不明	口縁1/10	3.7	"	"	No.156と同一個体
158	156_38	156F	不明	高台1/3,口縁1/4	55.9	柳灰緑	青色	輪花
159	"	156F	不明	体部	7.8	暗灰緑	青色	
160	"	157F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	1.3	暗灰緑	青色, 内面剥落	
161	157新_28	157F	不明	底面1/3,高台半欠	54.8	灰色軟	濃緑色むら有, 底面剥落	
162	157新_34	157F	不明	体部10cm形状	1.5	灰色軟	濃緑色	断面ミガキか
163	157新_35	157F	不明	体部1cm形状	1.4	灰色軟	濃緑色	断面ミガキか
164	"	157F	不明	体部	2.9	灰色軟	青色, 内面ほろ剥落	
165	"	157F	不明	口縁 <small>1cm小片</small>	0.6	灰色軟	青色	
166	"	157F	不明	高台1/10	3.0	灰白緑	青色, 外面ほろ剥落	
167	"	157F	不明	体部	3.0	灰白緑	青色, 内面ほろ剥落	
168	168F	"	不明	口縁小片	1.8	底面で変質	輪全面剥落	
169	"	179F	不明	底面小片	1.1	灰白緑	青色	
170	"	180F	不明	口縁1.5cm小片	10.0	暗灰緑	青色	方子出土
171	182_20,21	182F+270F	不明	高台1/3	27.3	暗灰緑	青色	底面に磨粉
172	"	190F	不明	体部	0.5	暗灰緑	濃緑色	
173	"	192F	不明	体部	2.1	暗灰緑	濃緑色	
174	198_5	198F	不明	高台2/3	95.8	灰白緑	青色むら有	底面に磨粉
175	199_13	199F	不明	口縁1/8	5.8	灰色軟	青色	
176	"	199F	不明	小片	1.1	灰色軟	濃緑色	
177	199_14	199F	不明	高台1/3	31.1	暗灰緑	青色	底面か
178	"	199F+211F	不明	体部	3.1	柳灰やん散	青色	199Fが211Fを切っている
179	200_17	200F	不明	底面完	46.3	暗灰緑	濃緑色	
180	203_19	203F	不明	高台1/2	46.0	柳灰やん散	底面剥落	
181	203_18	203F+177F	不明	口縁1/10,体部	14.2	灰白散	青色	輪花, 見込みで磨粉
182	"	203F	不明	口縁小片	0.0	灰白散	青色	No.181と同一個体か
183	213_16	213F	不明	底面3/4,高台全欠	59.7	暗灰緑	青色	
184	"	213F	不明	高台1/5	32.6	暗灰緑	青色	
185	"	213F	不明	体部	4.8	暗灰緑	濃緑色	
186	"	213F	不明	1cm小片	0.8	灰白緑	輪全面剥落	
187	"	213F	不明	口縁1/12	5.3	柳灰緑	青色	
188	"	217F	不明	口縁1/20	4.2	灰色軟	底面ほろ剥落	

第22表 緑釉陶器一覽 (2/3)

No.	実測図No.	出土地点	器種	残存状況	重量(g)	胎土	釉調・色調	備考
189	230_13	230住	椀	口縁1/5	13.3	灰白やや軟	茶色	
190	238_14	238住	力皿	口縁1/8	1.6	緑灰硬	茶色	
191	265_9	265住	椀	口縁1/7	1.3	灰白硬	茶色	
192	265_9	265住	椀	高台1/5,口縁1/6	18.3	灰白硬	茶色	緑花
193	265_10	265住	椀	高台1/4	13.0	灰白硬	茶色	
194	267_6	267住	椀	高台3/4,口縁1/3	129.3	灰白硬	茶色	
195	269_14	269住・220住	椀	高台1/5	13.8	灰白硬	茶色	269住が220住を切っている
196	277_19	277住	皿	口縁1/8	98.1	灰白硬	茶色	
197	286_18	286住	皿	高台1/10以下	4.4	灰白硬	茶色, 緑ほぼ全面剥落	
198		1区_3	椀	口縁1/10	2.2	白粉やや軟	茶色	緑花
199		溝3	不明	1cm小片	1.7	灰白硬	茶色	
200		溝4	椀	1.5cm小片	5.8	白色やや軟	オリーブ・ツギ, 買入	No.237と同一体か
201	2溝6(10_39)	溝6	皿	高台1/2	9.4	灰白硬	茶色	
202		溝6	椀	体部	7.9	白粉軟	茶色	
203		溝6	椀	高台1/8	6.2	灰白硬	茶色	
204		溝6	不明	底径2cm小片	2.1	灰白硬	茶色	
205		溝6	不明	体部1cm小片	1.4	灰白硬	茶色	
206		溝8	不明	体部1cm小片	1.2	暗灰硬	茶色	見込みに覆覆
207	1A線_1	1A区検出面	皿?	高台1/8,口縁全欠	7.2	青灰硬	茶色	
208		1A区検出面	椀	口縁1/20	3.6	灰白硬	茶色	
209		1A区検出面	椀	1.5cm小片	2.5	灰白硬	茶色	
210		1A区検出面	不明	1cm小片	1.9	暗灰硬	濃緑むら有	
211		1A区検出面	椀?	口縁1/20	1.7	灰白硬	茶色	緑彩紋陶
212		1A区検出面	不明	1cm小片	1.1	青灰硬	茶色	
213		1A区検出面	不明	1cm小片	1.1	白粉やや軟	茶色	
214		1A区検出面	6cm皿	1cm小片,口縁	1.0	白粉やや軟	茶色	
215		1A区検出面	不明		0.8	白色やや軟	茶色, 内面剥落	
216	1B線_6	1B区検出面	脚部辺	脚部辺	27.0	灰白硬	茶色, 内面黒焼	外面に印刷花紋
217	1B線_2	1B区検出面	椀	口縁1/4	20.7	青灰硬	緑	
218	1B線_4	1B区検出面	椀	高台1/4,口縁全欠	17.4	灰白硬	茶色	
219	1B線_3	1B区検出面	皿	高台1/8	15.1	灰白硬	茶色	段皿
220	1B線_5	1B区検出面	不明	高台1/8,口縁全欠	8.8	白色やや軟	茶色	
221		1B区検出面	椀?	高台1/10,口縁全欠	8.1	暗灰硬	濃緑	器内薄い
222		1B区検出面	不明	2×3cm平板	7.8	緑灰軟	茶色	何かの底部か
223	1B線_1	1B区検出面	椀	口縁1/8	6.7	暗灰硬	濃緑	内面に段
224		1B区検出面	皿	体部1/8	5.3	青灰硬	緑	段皿
225		1B区検出面	不明		4.3	灰白硬	茶色	
226		1B区検出面	椀?	1.5cm小片	3.9	青灰硬	茶色	
227		1B区検出面	椀?	1.5cm小片	3.5	灰白硬	茶色	
228		1B区検出面	不明	1.5cm小片	1.1	白粉やや軟	茶色	
229		1B区検出面	不明	1.5cm小片	0.8	白色やや軟	茶色	
230		1B区検出面	不明	1cm小片	0.6	白粉やや軟	茶色, 内面黒焼か	
231		1区	不明	口縁1/8	5.0	白色やや軟	茶色	段皿か
232	1機_6	1区	検出面	高台1/8,口縁全欠	18.6	暗灰硬	濃緑	耳皿か
233		1区	検出面	1.5cm小片	1.9	白粉やや軟	濃緑むら有	
234	1機_7	1区	検出面	高台1/6,口縁全欠	11.9	灰白硬	茶色むら有	緑彩紋陶か
235		1区	不明	1.0cm小片	0.6	灰白硬	茶色	
236		1区	不明	1.0cm小片	1.0	白粉やや軟	茶色	
237	1機_3	1区	不明	口縁1/8	19.7	白粉やや軟	オリーブ・ツギ, 買入	高台の一部
組1	055_117	1区	椀	底径1/3	36.1	緑灰軟	濃緑	深線 No.200と同一体か
組2		230住	椀	体部	4.9	暗灰硬	濃緑	ケア?出し高台
組3		1B区検出面	不明	口縁1/10以下	1.6	暗灰硬	濃緑	
組1	286_13	286住	椀	口縁1/10以下	7.4	白色	白焼	
組2	286_14	286住	椀	口縁1/10以下	4.5	白色	白焼	

第22表 緑彩陶器一覧(3/3)

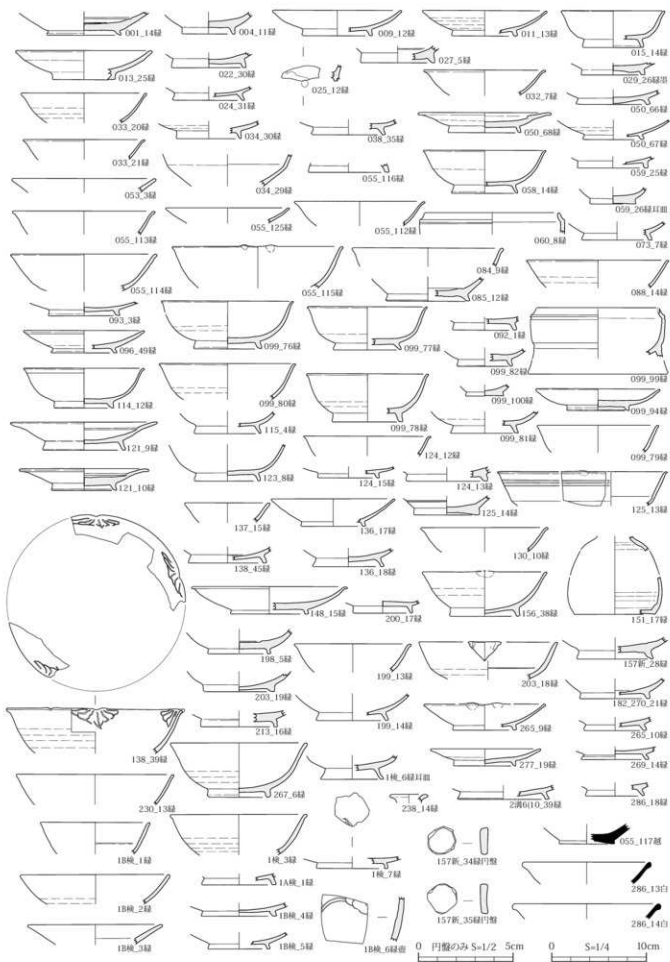
出現時期はⅢ期古である。それ以降は量的な多さを最後まで継続し、特にⅤ期新からⅥ期にかけて急増している。集落が消滅する寸前まで卓越した保有量を誇っていたといえよう。ただし、細かくみるとⅢ期新とⅤ期古でいったん減少する状況が認められる。時期ごとの出土量(廃棄量)が流入量を示しているとは必ずしもいえないが、緑彩陶器の受容に関して集落レベルで何らかの変動があったことを暗示するものかもしれない。

4 暗紋

(1) 分類

黒色土器Aの杯・椀にみられる暗紋について本遺跡で認められたものを分類し、出現の時期や展開を推察してみたい。土器実測での暗紋の図化は全形が良くわかるもの、典型的なものに絞ったが、第196・197図にその集成を示す。いくつかの類型に分けることが可能で、大分類として十字やそれに類する3～8方向の十字状・放射状のものを暗紋A、螺旋や花卉状を描くなど十字状以外のものを暗紋Bとする。暗紋の個々のミガキの線の太さには2mm以上の太いものと1mm前後の細いものがあり、暗紋Aは前者が圧倒的に多い。暗紋Bには後者が散見される。また、口縁部を除く体部内面にミガキ調整を全く行わずに暗紋が描かれる場合がほとんどだが、放射状のミガキ調整の上に重ねて暗紋を描いた例も稀にある(第197図165_検_6など)。ただし、暗紋A・B共に器体自体の調整や形態などはごく普遍的なもので、最初から暗紋を付するという特殊性を意図して製作されたようには見えない。

暗紋Aは、暗紋の方向数とミガキの本数でさらに細分できる。方向数は3～8方向の6種類がありa～f



第194図 緑釉陶器・磁器集成

の記号で示す。本数は1本線、2本線、多数線の3種が基本で、これに多数線と1本線を組み合わせたもの2種を加え、この5種を1～5の数字で示す。多数線には平行なものと扇形があり、後者にはさらに1を付して分離する。暗紋Aの類型表記は、暗紋Aを示すAと、方向・線数を示す記号・数字とを組み合わせるとAa1などとする。方向のa～fと線数の1～5を組み合わせた暗紋Aの類型模式図を第195図に示した。また第196・197図の集成にもそれぞれの個体の類型表記を添付した。

暗紋Bは類例が少なく細分には至らないが、暗紋AのAb3型をベースにしてその間に細いミガキによる螺旋(143_15)を描くもの、Ab2型の間には花卉状(059_11)、Ac3型の間には花卉状(213_9)を描くものがある。197_14はおそらくAf1型がベースでその上を覆うように弧線や螺旋を連ねており、これも花卉状を意図したようにみえる。一方、099_46は見込み部中央を核とした弧線の風車状を描く、暗紋Aをベースにしていない例である。049A_9や285_14は見込み部に一方のみ平行線を重ねるもので、他の暗紋Bとは異質であるが、これらは器体の成形・調整にロクロナデが用いられない特殊な器種なので、それらに固有のミガキと解するべきかもしれない。

	a	b	c	d	e	f
1						
2						
3						
31						
4						
41						
5						

第195図 暗紋Aの類型模式図

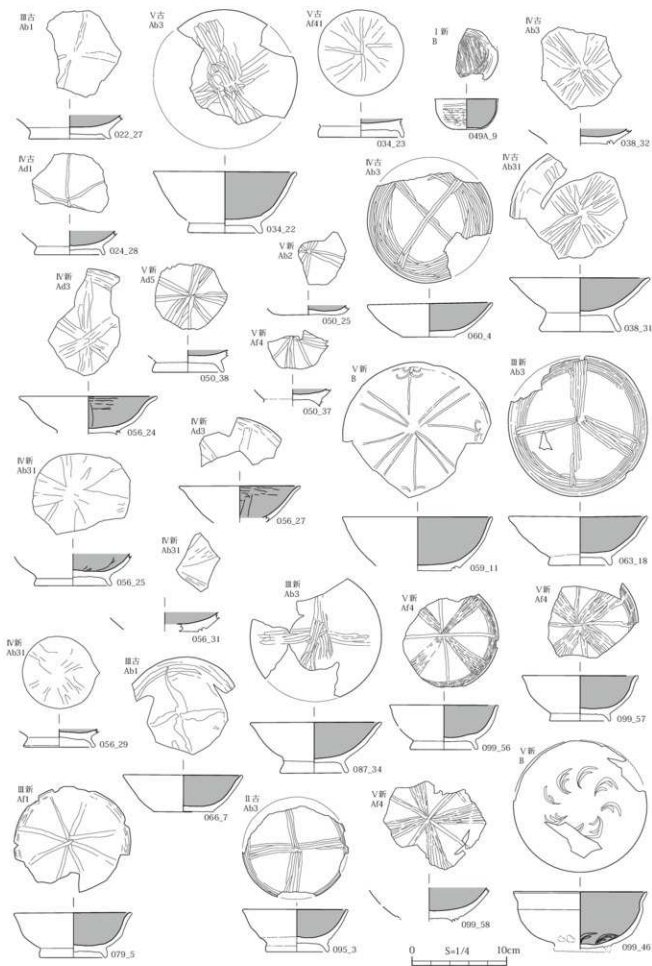
、これも花卉状を意図したようにみえる。一方、099_46は見込み部中央を核とした弧線の風車状を描く、暗紋Aをベースにしていない例である。049A_9や285_14は見込み部に一方のみ平行線を重ねるもので、他の暗紋Bとは異質であるが、これらは器体の成形・調整にロクロナデが用いられない特殊な器種なので、それらに固有のミガキと解するべきかもしれない。

(2) 出現と展開

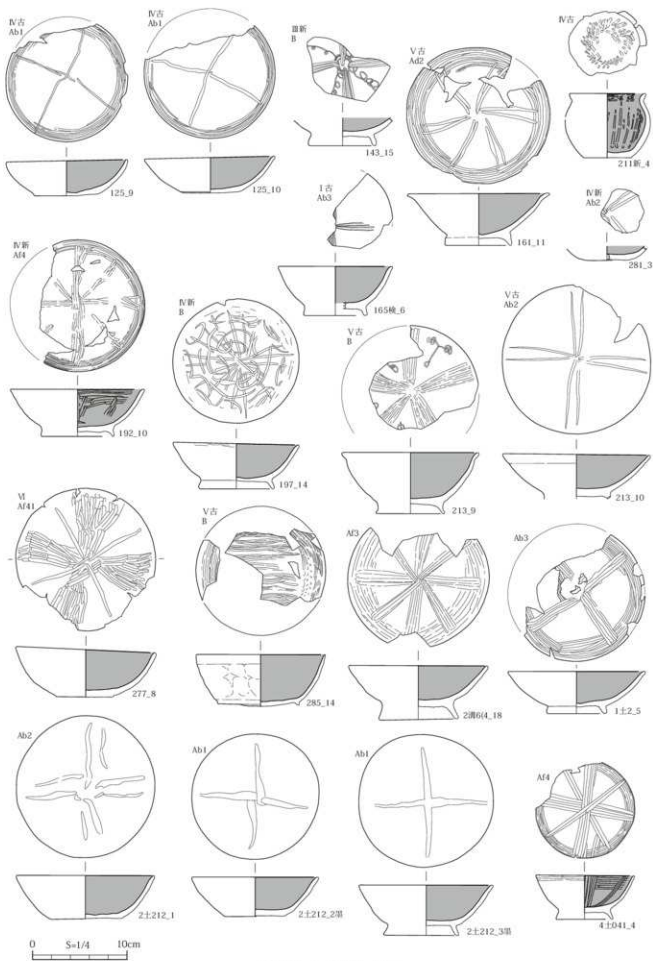
段階区分に用いた標式的な土器群(第20表(249頁)で取り上げた土器群)と、それ以外で黒色土器Aの杯・碗が多い土器群について、暗紋を持つ土器点数とその比率、暗紋の類型を一覧にしたのが第23表である。これで見るとI期に暗紋はなく、II期古が初出だが出現率は1.7%とわずかしかない。III期古が11.8%、III期新になると22.8%と比率が増し、個々の土器群でみると30%を超えるものも10例中3例あり、本遺跡ではIII期古から暗紋が安定的に出現したと考えてよさそうである。IV～VI期は平均すると20～40%台であるが、30%以上を占める土器群が増え、50%を超えるものもみられる。ただしV期新からVI期になると杯・碗類のなかで黒色土器Aの占める比率が減少し、さらにVI期には器種構成を良好に把握し得るだけの個体数を有する土器群がなくなるので、暗紋の動向は明言できない。

暗紋Aの類型は、III期古以前では3方向多数線のAa31型と4方向1本線のAb1型とがみられ、以後はAb1型や4方向多数線のAb3型・Ab31型を主流としながら展開する。IV期からは6方向Ad型、IV期新以降は8方向のAf型などがみられるようになる。特にV期からはそれぞれ4方向の多数線と1本線を組み合わせたような8方向のAf4型・Af41型が現れる。これらから通観すると、出現時は3・4方向で、時期が下るとつれ方向が増えるもの加わるという図式を想定することが可能かもしれない。

暗紋Bは点数が少ないので明確にはいえないが、III期新から認められ、IV・V期にわたって存在している。集成図ではV期に3例が認められる。暗紋Bは本遺跡ではIII期に出現し、暗紋AのAf型の盛行とほぼ歩調を揃えるように展開した可能性を考えたい。



第 196 图 暗纹集成 (1)



第 197 图 暗纹集成 (2)

第3節 墨書土器から見た三間沢川左岸遺跡

1 墨書土器の分類

三間沢川左岸遺跡出土の墨書土器は刻書も含めて 533 個体、墨書・刻書は延べ 563 点となる。この内 205 点は一部の残存あるいは墨痕で判読ができない。また 168 点は断定に迷うが一応読める文字、残存部から類推して読んだ文字で、第 24 表では「カ」をつけた。本節では「カ」をつけたものも含め、一応の判読を行った墨書について分類を行う。

- ① 施設 西庄、庄、西舎、小栢寺、市、界、住、門、田、宿
- ② 人名 子楊、目刀、神人、安倍、王、大南、大南介、人、真、大石、□吉、安、定
- ③ 家号 窪家
- ④ 嘉字 金、倍、万、良、貴
- ⑤ 嘉字カ 大、上、全、月、成、祢、祢または祈
- ⑥ 数字 十
- ⑦ 方位 南
- ⑧ 呪句 ☆、井、占
- ⑨ 特殊文字 厶、凡、全、卩、彡、彡、風、今、㊀、用、爻、爪、事
- ⑩ その他 乙、貞、取、生、中、能、帛、服、本
- ⑪ 記号 ㄣ、ㄩ、ㄗ、ㄛ、ㄜ、ㄝ、ㄞ、ㄟ、ㄠ、ㄡ、ㄢ、ㄣ、ㄤ、ㄥ、ㄦ、ㄧ、ㄨ、ㄩ、ノ

墨書土器から導き出される遺跡の性格は後述する。

施設の「西庄」の墨書から、北陸の例をみても庄家(所)が存在していたことが指摘できる。他に「庄」が「庄カ」も含め 3 点出土しており、「左」も「庄」と読むことが可能である。おそらく初期荘園に関する遺跡である可能性が高い。また「西舎」も庄に関わる建物であったものと推定される。その外に「宿」「市」といった施設名からも遺跡の性格が単なる農村とは異なることが示唆される。このことから人名は「西庄」の開発や運営に携わった者や集団を含むと考えられる。特に「子楊」「安」「王」「大南」は後述の通り重要な位置を占める人名と考えられる。

「小栢寺」は寺院名と推定される。1 期古段階の竪穴住居から出土しており、三間沢川左岸遺跡の村落は仏教施設を内包した開発集落であったものと理解される。

「窪家」は 1 点だけ出土している (224 住)。千葉県吉原山王遺跡で「大家」の墨書土器が出土しており、関和彦氏はこれを古代の「家号」であると指摘している (関 1994)。224 住はⅡ期新段階の竪穴住居である。墨書土器が限定された空間・人的関係の中における祭祀・儀礼行為に伴って使用されたものという理解があるが (高島 2000)、「嘉字」「嘉字カ」「その他」とした文字はそれにあてはまる可能性が高い。その中でも呪句として扱った「☆」(五芒星)、「井」(ドーマン)「占」は祭祀に直結する文字といえるだろう。

「特殊文字」として分類したものは則天文字のつくりを意識したと思われる造語が主である。吉祥な文字とも考えられる。平川南氏は、日本の古代社会は漢字に一定の魔力または権威が付帯されていた状態と考え、則天文字のような特殊な文字はより一層効果的だったとし、一種の優越性の表徴であったと述べている (平川 2000)。

記号と思われるものは数多くあるが、その中で「ㄣ」は 17 あり、10 軒の住居から出土している。ある種のグループを示すものと推定される。その他の記号には複雑なものもあり、やはり呪術性をもつ可能性がある。

2 墨書からみた三間沢川左岸遺跡の特徴

(1) 1 期の村

A 村のはじまり

三間沢川をはさんで南に近接する川西開田遺跡の発掘調査では古代の竪穴住居が 16 軒出土しており、

三間沢川左岸遺跡と時期を同じくするものも存在する。しかし確認された墨書土器は刻書も含めて8点ほどに過ぎず、積極的に墨書土器を使用する傾向はみられない。この点から三間沢川左岸遺跡の集落は通常の集落とは異なったもので、荘園に関する集落としての性格が濃厚であると考えられている（文献39）。

三間沢川左岸遺跡の村はI期古段階から始まる。溝3の南側の建14などの掘立柱建物や空地に囲まれた大型の竪穴建物227住が中心的な住居と推定される。この住居から6点「子楊」が出土しており、その北側に付属する形の226住からも4点出土している。

「子楊」を人名と推定したが、「楊」は『新撰姓氏録』諸蕃に「楊侯忌寸」がみられる。また『続日本紀』天平宝字4年(761)3月15日条では、百済の渡来人の内王国嶋等5人に「楊津連」を与えている。これらの例から類推し「楊」は渡来系の氏族の系譜を引く可能性がある。「楊」をウジ名とする例としては長岡京出土木簡に「楊守嶋」、富山県北高木遺跡出土木簡に「楊麻呂」がある（以下木簡は奈良文化財研究所木簡データベースによる）。村の開発を主導した存在である可能性が高い。

注目されるのは226住出土の「小栢寺」と書かれた墨書土器である。寺の名称であると考えられ、「子楊」と密接に関することは明らかである。おそらく「小栢寺」を建立したのが「子楊」なのであろう。先に記述されたように227住は竪穴建物であるが、1間×1間の身舎に四面の廂がつく構造をもつ。これは須田勉氏が指摘した村寺院の分類のうち竪穴建物型(Ⅲ類)Dと同じである(須田2006)。おそらく227住は寺(堂)だったものと推定される。

9世紀以降の集落が丘陵地や山間に展開する傾向は関東甲信越各地で指摘されていることから、平野修氏はこれを当該期に新たに出現する計画的な開墾集落と捉えられているとし、そのような集落に「寺」に関連すると思われる「堂」的な建物や、仏教的色彩の強い遺物が少なからず確認されると指摘している(平野1996)。三間沢川左岸遺跡は平地の集落であるが、奈良井川左岸域の7世紀後半から開発が行われた遺跡群とは異なり、それまでは開発の対象とはならなかった土地に9世紀前半に突如現れる集落である点、そして仏教的な色彩の強い遺物・遺構がある点で共通している。時期も平野氏の分析により9世紀前半を主とし、集落の開発当初から仏教的色彩を帯びるが、9世紀半ば以降にはほとんどつながらない点も同じである。イ 荘園開発と村

三間沢川左岸遺跡は荘園に関する村と推定される。その理由として「庄」の墨書土器の出土ももちろんながら、最も注目されるのが「西庄」の存在である。この「方位+庄」の墨書は東大寺横濱江莊推定地である金沢市の上荒屋遺跡で東西南北すべてが出土している。出越茂和氏は、9世紀の初期荘園は東西南北といった表記で表される、分散する複数の庄家と倉庫群からなる複合的な構造をもつ場合があったことを指摘し(出越1993)、これを受けて小口雅史氏は庄家が分散することの意味はおそらく荘園の分割経営法と関わるものと理解している(小口1996)。「西庄」はI期新段階の43住から出土しており、開発当初の9世紀前半から初期荘園を分割して経営するために設置された庄家に関わる村の開発が行われたと考えられる。

井上尚明氏は庄家遺構についてまとめられている(井上2014)、北陸の上荒屋遺跡、じょうべのま遺跡をモデルとして庄家の構造を示している。掘立柱建物群が整然とならび、廂付の建物を主屋とする図が提示されている。これに従えば三間沢川左岸遺跡には庄家の主屋などは未検出ということになる。そこで庄家は調査区外にあると想定して、出土した竪穴住居群はその庄家(西庄)建設に伴ってI期新段階に新たに開発された村と認識される。すなわち初期荘園経営に携わる計画的な村の成立である。

しかしこの認識には問題がある。初期荘園における計画村落は存在しないという前提論である(金田章裕1978・小口雅史1991)。小口氏は金田氏の指摘を受け、周辺を田に囲まれた孤立的荘宅的荘所では周囲に村が連続して存在する例がなく、荘園経営に必要な労働力からみても、それは既存の村に依存せざるをえないものと考えられるとしている。

しかし藤井一二氏は法令制下で新たに形成された村を「開墾型集落」として把握し、その一形態として「荘園村落」を指定している。すなわち荘園成立を契機にして開発・経営の関わりから荘園近辺の地に進出する「開墾型集落」(Ⅱ類)であり、荘園関係史料にみえる「村」については「荘所」の成立ないし私的領有権の発生との関りで理解する見方が有力であるとしている点も無視できない(藤井1986)。三間沢川左岸遺跡の村は既存のものではなく、開発当初から荘園に関わっていたことが墨書土器から指摘できる。

(2) II期の村

ア 村の縮小化

II期古段階はやや村の中の住居が減少し、核となる住居も見当たらない。I期新段階にみられた「△」をもつ住居が2軒ほど残ることから集団は継続していた可能性がある。284住から出土した「生」の墨書は「庄」と読めそうな字体で、荘園機能が継続していた可能性を示す。

イ「安」と110住

II期新段階になると住居数が増加する。この段階で中心となる大型住居は110住である。「安」が3点出土しており、この住居を拠点として村を統括する存在であったと推定される。また、187住からは「王□」が出土しており、次の段階で隆盛する「王」とのつながりが窺える。

ウ II期の信仰

I期の寺を中心とした仏教信仰がII期に続いた痕跡は墨書からは窺えない。信仰関係の資料としては134住出土の「☆」(五芒星)である。符籙と判断され、道教的な信仰が入ってきているものと考えられる。同じく134住からは造語の「望」も出土しており、信仰に関する可能性がある。

(3) III期の村

ア「王」の登場

III期古段階に「王」の墨書が登場する。7軒の住居から「王」を含めて14点が確認され、66住からは4点確認できる。目立った規模の住居はみられないが、160住では「王」のほかに「庄」が2点あり、新たなグループが進出して荘園経営に携わったものと推定される。

新段階になると12軒の住居から32点が出土しており、特に目立つのは63住の13点である。「王」はIII期の間に進出しそのグループの住居を増やしている。

イ「王」の解釈

「王」は山形県今塚遺跡に9世紀第2四半期頃の墨書土器がある。三上喜孝氏は「王」を渡来系氏族と捉えている(三上2004)。姓として与えられた「王(こにきし)」で百済系渡来王族の流れをくむ在地有力者かもしれない。王をウジ名とする例は藤原京出土木簡に「王葛」、平城宮出土木簡に「王部大庭」「王南天」がある。また、国司クラスの官人の例として「続日本後記」承和9年(842)8月29日条に「前豊後介正六位中井王」が私宅を豊後国日田郡に置き私営田を諸郡に持っていることが記述されている。この場合の王は3世王以下の「皇族ではない王」を示すものと考えられる。すなわち王号をもって臣籍となった王臣家である。

(4) IV期の村

ア「王」と55住

「王」はIV期古段階へと続く。13軒の住居から64点が出土しており、圧巻なのは55住で出土した32点である。IV期古段階の半分がこの住居から出土していることになる。大型の建物跡で、まさに村の核となる住居といえる。住居数も大きく増加し、「王」は村の中で確固とした勢力を手に入れたように思われる。

IV期新段階になると「王」の出土は3軒の3点と大幅に縮小してくる。

イ「大南介」

IV期古段階の54住からは「王」とともに「大南」が出土している。「王」の勢力が縮小したとみられるIV期新段階の136住・145住・168住で1点ずつ出土している。いずれも小型の住居である。ウジ名の可能性もあるが類例をみない。新たな勢力の進出を思わせる。

さらに154住から「大南」とともに「大南介」が出土している。信濃国府の存在から考えても「介」は国司級の官人を示す可能性があるが、「大南」が不明である。おそらく国府と関連のあるグループとみられ、その先頭に立つのが「大南介」なのであろう。国司私営田といわれる私営地の獲得が行われたのではないだろうか。国司層の私営田経営は9・10世紀を通して一ヶ所集中の形ではなく諸郡所在の経営田の集合体だったとされる(奥野中彦1988)。

ウ 特殊文字の出現

IV期古段階には「厶」(44住)、「𠂔」(230住)、「𠂔」(266住)、「𠂔」(156住)など則天文字を意図したような造語が登場する。吉祥句のような役割を持っていたものか。墨書文字に新たな段階が訪れたように

も思われ、祭祀にも変化が起きてきたことが推定される。

(5) V期の村

ア 大南と王

V期古段階において、大型住居 138 住が出現する。「大南」が 1 点出土していることからこの段階で「大南」は村の核となる住居をもつことになる。しかし、13 住・20 住・23 住・120 住・229 住からは王が出土しており、その命脈をたもっていることがわかる。

イ「王」と「定」の隆盛と村の終焉

V期新段階に再び「王」が隆盛を迎える。99 住は非常に大型の住居であり、「王」が 4 点出土している。まさに大南を凌駕した感がある。村の中核となる住居であろう。ただ注意しなくてはならないのが 50 住で、99 住に近接する大型住居である。ここからは「王」が 1 点出土しているものの「定」が 4 点出土している。同時期に近接していることから相反する勢力とは思えず、「王」に関わりのある有力者である可能性が高い。しかしこの段階以降、村は衰え VI期古段階をもって終焉を迎える。

遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種類	器種	時期	遺構	No.	文字等	部位	向き	土器No.	種類	器種	時期
1住	1	生	A	a	001.6	黒土	杯A	IV古	17住	35	大	B	e		—	—	V新
"	2	王	A	a		黒土	杯A	"	18住	36	山	A	a	018.1	須	杯A	I新
"	3	?	A	?		黒土	杯A	"	"	37	?	A	?		須	杯A	"
"	4	王	A	a		黒土	杯A	"	"	38	定	A	a		土	杯A	V古
4住	5	大	A	a		土	杯A	IV新	19住	39	上	B	e	019.7	灰	椀	IV新
"	6	王	A	a	004.6	黒土	杯A	"	20住	40	王	B	e		黒土	椀	V古
6住	7	?	A	a		黒土	杯A	III以降	"	41	?	B	e		土	杯A	"
8住	8	?	A	a	008.10	土	椀	IV古	"	42	□	A	a		土	杯A	"
"	9	ハカ	B	e	008.13	灰	椀	"	22住	43	□	A	a	022.6	軟	杯A	III古
"	10	ハカ	A	a	"	—	—	"	"	44	吊	A	a		軟	杯A	"
"	11	良	A	a	008.4	土	杯A	"	"	45	隼	A	a		黒	杯A	"
10住	12	界	A	d	010.9	黒土	杯A	I新	"	46	?	A	?		黒	杯A	"
"	13	山	A	a	010.2	須	杯A	"	"	47	?	A	?		黒	杯A	"
"	14	山	B	e	"	—	—	"	"	48	?	A	?		黒	杯A	"
"	15	山	A	a	010.3	須	杯A	"	23住	49	王	A	a	023.8	土	杯A	III新
"	16	山	B	e	"	—	—	"	"	50	大南	A	a		土	杯A	"
13住	17	王	A	?		土	杯椀	V古	24住	51	?	A	?		土	杯A	IV古
14住	18	ハカ	A	b	014.1	須	杯A	II古	"	52	?	A	?		黒	杯A	"
"	19	成	A	c	014.5	黒	杯A	"	"	53	□	A	a	024.8	土	杯A	"
"	20	□	A	b	014.6	黒	杯A	"	"	54	□	A	a	024.4	土	杯A	"
"	21	月	A	b	014.7	黒	杯A	"	"	55	王	A	a	024.5	土	杯A	"
15住	22	?	A	?		黒土	杯椀	V新	"	56	王	A	a	024.12	土	杯A	"
"	23	?	B	e		黒土	杯椀	"	"	57	王	A	a	024.7	土	杯A	"
"	24	大	A	a		黒	杯椀	"	25住	58	?	A	?		土	杯A	IV新
"	25	大	A	a		黒	杯A	"	"	59	?	A	?		土	杯A	"
"	26	上	A	a	015.7	黒	小椀	"	26住	60	万	A	a		土	杯A	IV新
"	27	上	B	e	"	—	—	"	"	61	万	A	a		土	杯A	"
"	28	上	A	a	015.7	黒	小椀	"	28住	62	王	B	e		土	椀	V古
"	29	上	B	e	"	—	—	"	29住	63	王	A	a		軟	杯A	IV古
16住	30	穴	B	e	016.8	黒	杯A	II古	"	64	?	A	?		土	杯A	"
"	31	?	A	a		黒	杯椀	"	"	65	?	A	?		土	杯A	"
17住	32	ハカ	A	a		土	杯A	V新	"	66	王	A	a		軟	杯A	"
"	33	美・大	A	a2	017.6	黒	杯A	"	"	67	王	B	e	029.26	緑	椀	"
"	34	美	A	a	017.7	黒	杯A	"	31住	68	?	A	?		土	杯A	II新

部位 A: 体部外面 B: 底部外面 C: 内面

向き a: 土器を正位に置いたときに文字正位 a2: aの向きで2字横書き b: 土器を正位に置いたときに文字逆位

c: 土器口縁部を左側に置いたときに文字正位 d: 土器口縁部を右側に置いたときに文字正位 e: 底部・内面

刻書は文字等欄に(刻)を付して表記

第 24 表 墨書一覧(1/5)

遺構	No	文字等	部位	向き	土器No	種類	器種	時期	遺構	No	文字等	部位	向き	土器No	種類	器種	時期
31住	69	安倍	A	a2	031_2	黒灰	杯A	Ⅱ新	55住	131	王	A	a	055_53	土	杯A	Ⅳ古
32住	70	□	B	e		黒灰	椀	Ⅳ古	"	132	王	A	a	055_67	土	杯A	"
"	71	?	A	?		土	杯A	"	"	133	良	A	a	055_38	土	杯A	"
33住	72	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新	"	134	王	A	a	055_58	土	杯A	"
"	73	事	A	?		黒	杯A	"	"	135	□	A	a	055_76	黒	杯A	"
"	74	委	A	a		土	椀	"	"	136	王	A	a	055_54	土	杯A	"
"	75	能	A	a		土	杯A	"	"	137	定	A	b	055_51	土	杯A	"
34住	76	+	B	e	034_28	灰	椀	V古	"	138	?	A	?	055_77	黒	杯A	"
36住	77	人	A	a	036_2	須	杯A	I古	"	139	王	A	a	055_34	土	杯A	"
38住	78	?	A	?		黒	杯A	Ⅳ古	"	140	?	A	?	055_63	土	杯A	"
"	79	?	A	?		黒	杯A	"	"	141	王	A	a	055_87	土	椀	"
"	80	王	A	a	038_36	土	盤A	"	"	142	?	A	?		土	杯A	"
"	81	王	A	a	038_29	黒	椀	"	"	143	王	A	a	055_8	軟	杯A	"
"	82	王	A	a	038_8	軟	杯A	"	"	144	王	A	a		土	杯A	"
"	83	王	A	a	038_5	軟	杯A	"	"	145	王	A	a	055_60	土	杯A	"
"	84	王	A	a	038_2	軟	杯A	"	"	146	?	A	?		土	杯A	"
"	85	+	A	a	038_28	黒	椀	"	"	147	?	A	?	055_65	土	杯A	"
"	86	王	A	a	038_1	軟	杯A	"	"	148	王	A	a	055_94	土	皿	"
39住	87	王	B	e		灰	椀	Ⅳ古	"	149	?	A	?	055_61	土	杯A	"
40住	88	□	A	?	040_13	黒	椀	Ⅳ古	"	150	王	A	a	055_59	土	杯A	"
43住	89	西庄	A	d	043_3	須	杯A	I新	"	151	?	A	?		土	杯A	"
"	90	占	A	c	043_12	黒	杯A	"	"	152	?	A	?	055_56	土	杯A	"
44住	91	?	A	?		土	杯A	Ⅳ古	"	153	?	A	?	055_66	土	杯A	"
"	92	□	B	e		土	杯A	"	"	154	?	A	?	055_78	土	椀	"
"	93	王	A	a		土	杯A	"	"	155	?	A	?	055_69	土	杯A	"
45住	94	王	A	b	045_1	須	杯A	Ⅲ新	"	156	王	A	a		土	杯A	"
"	95	大	A	a	045_4	黒	杯A	"	"	157	?	A	?		土	杯A	"
47住	96	?	A	?	047_1	軟	杯A	Ⅲ古	"	158	王	B	e	055_71	土	杯A	"
"	97	真	A	b	"	—	—	—	"	159	王	A	a	055_70	土	杯A	"
"	98	王	A	a	047_3	黒	杯A	"	"	160	□	A	a	055_68	土	杯A	"
"	99	王	A	a	047_5	黒	椀	"	"	161	王	A	a	055_9	軟	杯A	"
49住A	100	?	A	?		黒	杯A	I新	"	162	王	A	a	055_86	土	椀	"
49住B	101	定	A	a	049B_3	土	杯A	Ⅳ新	"	163	王	A	a	055_87	土	椀	"
"	102	定	A	a	049B_2	土	杯A	"	"	164	?	A	?	055_57	土	杯A	"
"	103	上	B	e		黒	杯A	"	"	165	王	A	a	055_64	土	杯A	"
50住	104	定	A	a		土	杯A	V新	"	166	?	A	?	055_62	土	杯A	"
"	105	定	A	a		土	杯A	"	"	167	王	A	a		土	杯A	"
"	106	定	A	a		土	杯A	"	"	168	定	A	b	055_5	軟	杯A	"
"	107	定	A	a		土	杯A	"	"	169	?	A	?	055_95	灰	椀	"
"	108	定	A	a		土	杯A	"	"	170	□	B	e	"	—	—	"
"	109	本	A	a		土	杯A	"	"	171	?	A	?	055_123	灰	皿	"
"	110	?	A	?		軟	杯A	Ⅲ・Ⅳ	"	172	王	B	e	"	—	—	"
"	111	?	A	a		黒	杯A	Ⅲ・Ⅳ	"	173	+	B	e	055_124	灰	皿	"
"	112	王	A	a		土	杯A	V新	"	174	王	B	e	055_108	灰	椀	"
51住	113	神人	A	b		須	杯A	I新	"	175	王	A	a		土	杯A	"
"	114	大	A	b		須	杯A	"	"	176	王	A	a		土	杯A	"
"	115	神人	A	b		須	杯A	"	"	177	王	A	a		軟	杯A	"
"	116	心	A	a	051_11	黒	杯A	"	"	178	祢	B	e	055_109	灰	椀	"
"	117	人	A	b	051_14	黒	杯A	"	"	179	□	B	e	055_110	灰	椀	"
"	118	心	A	a	051_17	黒	杯A	"	"	180	王	A	a	055_107	黒	杯A	"
"	119	?	A	?	051_3	須	杯A	"	"	181	?	A	?		黒	杯A	"
54住	120	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新	"	182	王	A	a		土	杯A	"
"	121	王	A	a		黒	杯A	"	"	183	+	A	a		灰	椀	"
"	122	?	A	?		土	杯A	"	56住	184	定	A	a		土	杯A	Ⅳ新
"	123	大南	A	a	054_6	土	杯A	"	"	185	+	B	e	056_43	灰	椀	"
55住	124	王	A	a	055_6	軟	杯A	Ⅳ古	"	186	記	A	a	056_10	土	杯A	"
"	125	王	A	a	055_37	土	杯A	"	"	187	?	A	?		土	杯A	"
"	126	王	A	a	055_52	土	杯A	"	"	188	?	A	?	056_8	土	杯A	"
"	127	王	A	a	055_35	土	杯A	"	58住	189	?	A	?		土	杯A	Ⅳ新
"	128	王	A	a	055_11	土	杯A	"	"	190	王	A	a		土	杯A	"
"	129	王	A	a	055_36	土	杯A	"	"	191	全	A	a		黒	杯A	"
"	130	王	A	a	055_33	土	杯A	"	62住	192	王	A	a	062_9	灰	皿	Ⅲ新

第24表 墨書一覽(2/5)

遺構	No	文字等	部位	陶器No	種類	器種	時期	遺構	No	文字等	部位	陶器No	種類	器種	時期	
63住	193	□	A ?		黒軟	杯A	Ⅲ新	99住	255	王幼	A a	099_59	黒	碗	V新	
"	194	王幼	A a		軟	杯A	"	"	256	王幼	A a	099_49	黒	碗	"	
"	195	王	A a		土	杯碗	"	"	257	王	A a	"	—	—	—	
"	196	王幼	A a		土	杯	"	"	258	王	B e	"	—	—	—	
"	197	王	A a	063_2	軟	杯A	"	"	259	王幼	A a	099_51	黒	碗	"	
"	198	王幼	B e		土	碗	"	"	260	王	B e	"	—	—	—	
"	199	王幼	B e	063_24	灰	皿	"	"	261	?	A ?	099_33	土	杯A	"	
"	200	王幼	A a	063_11	黒	杯A	"	"	262	□	B e	099_90	灰	皿	"	
"	201	□	A a		土	杯A	"	"	263	□	A a	"	土	杯碗	"	
"	202	王幼	A a		土	杯A	"	"	264	□	A ?	099_34	土	杯A	"	
"	203	王幼	A a		黒	杯碗	"	"	265	?	A ?	099_48	黒	碗	"	
"	204	王幼	A a		土	杯A	"	"	266	?	A ?	"	—	—	—	
"	205	王幼	A a		黒	杯碗	"	"	267	王	B e	"	—	—	—	
"	206	王幼	A a		土	杯A	"	"	268	上	A a	099_55	黒	碗	"	
"	207	王幼	A a		土	杯A	"	"	269	上	B e	"	—	—	—	
66住	208	王幼	A a		軟	杯A	Ⅲ古	"	270	?	A ?	099_92	灰	皿	"	
"	209	住幼	A a		黒	杯A	"	101住	271	㊦	A a	101_5	黒	杯A	I新	
"	210	王幼	A a	066_20	黒	杯A	"	102住	272	?	A ?	"	黒	杯A	Ⅱ新	
"	211	王	A a	066_1	軟	杯A	"	"	273	収	A a	102_1	須	杯A	"	
"	212	王	A a	066_13	黒	杯A	"	103住	274	?	A ?	"	黒	杯A	Ⅱ新	
68住	213	全	A a		黒	杯A	IV古	"	275	㊦(刻)	A ?	"	黒	杯A	"	
69住	214	㊦	A a	069_3	黒	杯A	I新	"	276	?	A ?	"	黒	杯A	"	
"	215	㊦	A a	"	—	—	"	"	277	□	A ?	103_6	黒	杯A	"	
70住	216	王幼	A a		土	杯A	IV新	"	278	□	A ?	103_12	黒	杯A	"	
"	217	王	A a		土	杯A	"	"	279	□	A ?	103_11	黒	杯A	"	
74住	218	?	A ?		土	杯A	IV古	"	280	?	A ?	103_17	黒	杯A	"	
"	219	?	A ?		土	杯A	V新	"	281	?	A ?	103_19	黒	杯A	"	
"	220	?	A ?		黒	杯A	"	104住	282	王幼	A a	"	軟	杯A	Ⅲ新	
"	221	?	A ?		黒	杯A	"	"	283	王	A a	104_9	黒	碗	"	
"	222	王幼	A a		土	杯A	"	107住	284	王幼	A a	107_5	皿	土	IV古	
"	223	王幼	A a		土	杯A	"	"	285	王幼	A a	107_2	土	杯A	"	
"	224	□	A a		土	杯A	"	108住	286	?	A ?	"	黒	杯A	Ⅱ新	
75住	225	大方	A a	075_3	土	杯A	V古	109住	287	王	A a	109_5	黒	杯A	Ⅲ古	
76住	226	王幼	A a		土	杯A	IV古	110住	288	安	A a	110_5	黒	杯A	Ⅱ新	
"	227	?	A ?		黒	碗	"	"	289	安	A a	110_21	黒	碗	"	
"	228	倍	A a	076_1	軟	杯A	"	"	290	安幼	A a	110_25	黒	杯碗	"	
77住	229	?	A ?		土	杯A	IV古	"	291	?	A ?	110_13	黒	杯A	"	
78住	230	□	A ?		黒	杯A	IV新	"	292	?	A ?	110_15	黒	杯A	"	
"	231	?	A ?		黒	杯A	"	"	293	月	A a	110_14	黒	杯A	"	
79住	232	南	A a		土	杯A	Ⅲ新	"	294	安	A a	110_8	黒	杯A	"	
80住	233	□	A a		土	杯A	IV新	"	295	安	A a	110_17	黒	碗	"	
82住	234	?	A ?		土	杯A	IV新	"	296	帛	A b	"	—	—	—	
85住	235	新幼	B e		灰	碗	IV新	"	297	月幼	A b	110_16	黒	杯A	"	
"	236	?	B e		灰	碗	"	"	298	?	A ?	"	黒	杯A	"	
"	237	王	A a		土	杯A	"	"	299	?	A ?	"	黒	杯A	"	
87住	238	?	A ?		土	杯A	Ⅲ新	112住	300	?	A ?	"	黒	杯A	IV古	
"	239	王	A b	087_3	軟	杯A	"	"	301	?	A ?	"	土	杯A	"	
"	240	?	A ?	087_13	土	杯A	"	113住	302	王幼	A a	"	軟	杯A	IV新	
88住	241	㊦	B e		灰	碗	IV古	114住	303	?	A ?	"	土	杯A	V新	
91住	242	㊦	A a	091_1	須	杯A	I新	119住	304	?	A ?	119_2	土	杯A	Ⅲ古	
"	243	?	A ?	091_2	須	杯A	"	120住	305	□	A ?	120_1	土	杯A	V古	
94住	244	鹿幼	A a		黒	杯A	V古	"	306	?	A ?	"	黒	杯A	"	
95住	245	?	A ?		黒	杯A	Ⅱ古	"	307	王	B e	"	灰	耳皿	"	
"	246	?	B e		黒	須	杯A	"	121住	308	?	A ?	"	黒	杯A	Ⅲ古
"	247	㊦	A a	095_1	須	杯A	"	122住	309	王	A a	"	軟	杯A	Ⅲ古	
97住	248	?	A ?		土	杯A	Ⅲ新	"	310	王	A a	"	土	杯A	"	
"	249	王幼	A a		土	杯A	"	"	311	王	A a	"	黒	杯A	"	
"	250	?	A ?		黒	杯A	"	123住	312	大南幼	A a	"	黒	碗	IV新	
"	251	王幼	A a	097_6	黒	杯A	"	"	313	大南	A b	123_2	土	杯A	"	
"	252	王幼	A a	097_11	黒	碗	"	124住	314	?	A ?	"	灰	皿	IV新	
"	253	?	A ?	097_3	軟	杯A	"	"	315	▽	A a	"	黒	碗	"	
"	254	王幼	A a	097_2	軟	杯A	"	125住	316	王	A a	125_8	黒	杯A	IV古	

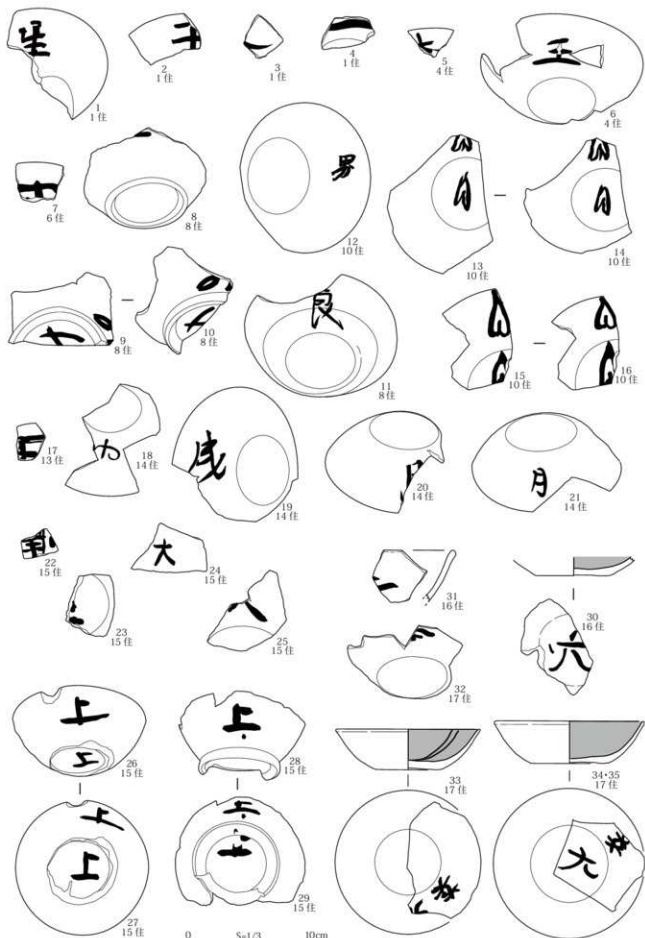
第24表 墨書一覽(3/5)

遺構	No	文字等	部位	向き	土器No	種類	器種	時期	遺構	No	文字等	部位	向き	土器No	種類	器種	時期	
125住	317	王	A	a	125_2	軟	杯A	IV古	160住	379	庄	A	a	160_5	土	杯A	III古	
126住	318	王	A	a		軟	杯A	IV	"	380	王	A	a	160_6	土	杯A	"	
"	319	王	A	a		軟	杯A	"	"	381	庄	A	b		黒	杯A	"	
"	320	王	A	a	126_1	軟	杯A	"	161住	382	?(刻)	C	e	161_18	灰	椀	V古	
"	321	王	A	a		軟	杯A	"	"	383	丌(刻)	A	a	161_36	灰	長皿	"	
128住	322	王	A	a	128_1	黒	杯A	III	"	384	个(刻)	A	a	"	一	一	一	
"	323	王	A	a		黒	杯A	"	162住	385	?	A	?	162_4	土	杯A	V古	
"	324	王	A	a		黒	杯A	"	164住	386	?	A	?		土	杯A	IV新	
129住	325	□□	A	c		黒	杯A	IV以降	166住	387	?	A	?		軟	土	杯A	IV古
132住	326	記	A	a		黒	杯A	IV以降	167住	388	井	A	c	167_1	土	杯A	IV新	
"	327	全	A	a		黒	杯A	IV新	"	389	井	A	c	167_4	黒	杯A	"	
134住	328	女	B	e	134_5	黒	皿	II新	"	390	王	A	a		土	杯A	"	
"	329	中	A	b		一	一	一	"	391	□	A	a		土	杯A	"	
"	330	登	A	d	134_2	黒	杯A	IV新	"	392	井	A	c		土	杯A	"	
135住	331	鬼	A	a		黒	杯A	IV新	168住	393	(鋸歯、刻)	A	a	168_16	土	小甕	IV新	
136住	332	大南	A	a	136_7	土	杯A	IV新	"	394	上	B	e		灰	皿	"	
"	333	?	A	?		土	杯A	"	"	395	大南	A	a	168_1	土	杯A	"	
"	334	田	A	a	136_5	土	杯A	"	"	396	×(刻)	A	a		土	甕B	"	
"	335	王	A	a	136_14	灰	一	一	169住	397	?	A	a		黒	杯A	III新	
"	336	?	B	e	"	一	一	一	"	398	門	A	a		黒	杯A	IV古	
137住	337	?	A	?		土	杯A	IV新	171住	399	井	A	?		土	杯A	IV新	
"	338	西舍	C	e	137_1	土	杯A	"	174住	400	王	A	a		軟	杯A	III古	
138住	339	大南	A	a	138_20	土	杯A	V古	175住	401	?	A	?		黒	杯A	III古	
"	340	?	A	c/d	138_16	土	杯A	"	"	402	十	B	e	(?)	一	一	一	
"	341	?	A	?		土	杯A	"	"	403	組	A	a		土	杯A	"	
"	342	?	A	?		土	杯A	"	"	404	王	A	a		土	杯A	"	
"	343	定	A	a		土	杯A	"	178住	405	?	A	?		土	杯A	V	
"	344	?	C?	?		土	杯A	"	"	406	王	A	a		土	杯A	"	
139住	345	王	A	a	139_1	土	杯A	IV古	180住	407	王	A	a		軟	杯A	V新	
140住	346	王	A	a	140_2	軟	杯A	IV古	181住	408	?	B	e		灰	椀	III新	
"	347	王	A	a	140_3	軟	杯A	"	"	409	爪	A	a		黒	杯A	"	
"	348	王	A	a	140_4	土	杯A	"	"	410	?	A	?		土	杯A	"	
"	349	王	A	a		黒	杯A	"	"	411	?	A	?		土	杯A	"	
141住	350	王	A	a		土	杯A	IV新	"	412	王	A	a		土	杯A	"	
"	351	?	A	?		黒	杯A	"	"	413	王	A	a	181_2	土	杯A	"	
"	352	□	A	a		土	杯A	"	"	414	?	A	?		土	杯A	"	
142住	353	?	A	?		軟	杯A	IV新	182住	415	?	A	?		土	杯A	IV新	
143住	354	王	A	a	143_1	黒	杯A	III新	183住	416	?	A	?		土	杯A	IV古	
145住	355	大南	A	a	145_5	土	杯A	IV新	184住	417	?	A	?		土	杯A	IV新	
"	356	南	A	a	145_7	土	杯A	"	"	418	?	A	?		土	杯A	"	
146住	357	王	A	a	146_5	土	杯A	IV新	187住	419	王□	A	d	187_1	土	須	II新	
148住	358	王	A	a	148_5	土	杯A	IV古	188住	420	?	A	?		軟	杯A	IV古	
"	359	王	A	a	148_4	土	杯A	"	"	421	?	A	?		軟	杯A	IV古	
"	360	王	A	a	148_14	黒	杯A	"	192住	422	今	A	b		黒	杯A	IV新	
"	361	王	A	a	148_7	土	杯A	"	"	423	?	A	?	192_6	黒	杯A	"	
"	362	?	A	?		黒	杯A	"	"	424	?	A	?		黒	杯A	V古	
149住	363	?	A	?		土	杯A	III新	194住	425	王	A	a	194_16	土	杯A	III新	
151住	364	?	A	?		土	杯A	IV新	"	426	?	A	?	194_8	土	杯A	"	
152住	365	?	B	?		灰	皿	IV新	"	427	?	A	?		軟	杯A	"	
"	366	大	A	b	152_1	土	杯A	"	198住	428	王	A	a		黒	杯A	III新	
154住	367	大南介	A	d	154_3	土	杯A	IV新	200住	429	?	A	?		黒	杯A	V新	
"	368	大南	A	a		土	杯A	"	202住	430	服	A	a		黒	杯A	IV新	
"	369	?(刻)	C	e	154_9	灰	椀	"	"	431	?	A	?		黒	杯A	"	
155住	370	王	A	a	155_3	土	杯A	IV新	203住	432	□	A	a		黒	杯A	IV新	
"	371	王	A	a	155_23	灰	皿	"	"	433	?	A	?		土	杯A	"	
"	372	王	A	a	155_4	土	杯A	"	"	434	?	A	?		土	杯A	"	
156住	373	黒	B	e		灰	椀	IV古	208住	435	王	A	a		土	杯A	III新	
157住	374	服	A	a	157占_10	黒	杯A	IV古	"	436	?	A	?		土	杯A	"	
"	375	?	A	?	157占_5	軟	杯A	"	"	437	?	A	?		黒	杯A	"	
"	376	□	A	a		黒	杯A	"	210住	438	大	A	a	210_4	土	杯A	IV古	
"	377	大南	A	a		土	杯A	V新	"	439	?	A	?		土	杯A	"	
158住	378	?	A	?	158_4	土	杯A	III新	211住	440	?	A	?		土	杯A	IV古	

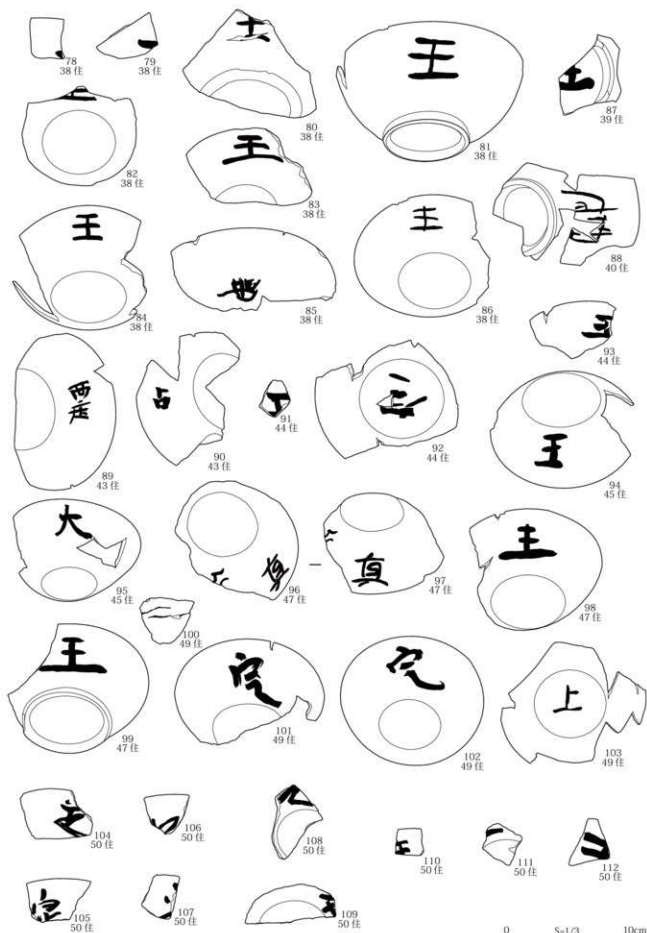
第24表 墨書一覽(4/5)

遺構	No	文字等	部位	土器No	種類	器種	時期	遺構	No	文字等	部位	土器No	種類	器種	時期
211住	441	?	B e	()	—	—	IV古	262住	503	?	A ?	—	—	—	II古
"	442	?	A ?		土	杯A	"	"	504	?	A ?	262_5	—	皿	III新
212住	443	①	A a	212_5	黑	杯A	I新	264住	505	?	A ?		黑	杯碗	III新
214住	444	①	A a		小	甕	III新	266住	506	慮	B e	266_9	灰	皿	IV古
"	445	十(刻)	A a	214_5	黑	杯A	"	284住	507	生	B d	284_5	—	杯A	II古
217住	446	大口	A b		土	杯A	IV新	"	508	へ	A b	"	—	—	—
"	447	□	A a		土	杯A	"	285住	509	?	B ?		土	杯A	V古
"	448	□	A a		土	杯A	"	"	510	庄	B e	285_10	黑	碗	"
"	449	□	A a	217_7	黑	杯A	"	"	511	大	A a	285_6	黑	杯A	"
"	450	王	A a		土	杯A	"	"	512	委	A a	"	—	—	—
"	451	?	A ?		土	杯A	"	286住	513	?	A ?		土	杯A	V古
223住	452	金	A b	223_62	黑	杯	III新	"	514	市	B e		土	杯A	"
"	453	王	A a	223_30	土	杯A	"	"	515	貴	A b	286_2	土	杯A	II古
"	454	王	A a	223_20	土	杯A	"	288住	516	之	A a	288_14	黑	—	"
"	455	□	A ?	223_9	軟	杯A	"	"	517	之	A a	"	—	—	—
"	456	□	A a		黑	—	"	290住	518	①	A a	290_15	黑	杯A	II古
"	457	?	A ?	()	—	—	"	"	519	①	A a	"	—	—	—
"	458	?	A ?		黑	—	"	"	520	①	A a	"	—	—	—
"	459	?	A ?		黑	杯碗	"	1-12	521	?	A ?		土	杯A	
"	460	?	A ?		黑	杯碗	"	"	522	?	A ?		土	杯A	
"	461	?	A ?		黑	杯碗	"	1-13	523	?	A ?		土	杯A	
224住	462	窪家	A c	224_18	黑	杯	II新	2-1212	524	田	A a	2-1212_2	黑	杯A	III新
"	463	□吉	A c	224_17	黑	杯	"	"	525	王	B e	2-1212_4	灰	皿	III新
226住	464	子楊	A c	226_1	須	杯A	I古	"	526	王	A a	2-1212_3	黑	碗	III新
"	465	子楊	A c	226_3	軟	杯A	"	4-13	527	丸	A a		黑	—	"
"	466	子楊	A c	226_2	須	杯A	"	4-126	528	王	A a		土	杯A	
"	467	子楊	A c	226_7	黑	杯A	"	溝2	529	?	A ?		軟	杯A	
"	468	子	A c		須	杯A	"	溝3	530	?	A ?		軟	杯A	
"	469	①	B e	226_8	黑	杯A	"	溝4	531	貞	A a		黑	杯A	
"	470	小柏寺	A d	"	"	"	"	溝2	532	王	A d	2溝2_16	須	杯A	
227住	471	子	A c	227_25	黑	杯A	I古	溝6	533	本	A a		土	杯A	
"	472	子楊	A c	227_26	黑	杯A	"	"	534	本	A a		土	杯A	
"	473	子楊	A c	227_24	黑	杯A	"	"	535	貞	A a		土	杯A	
"	474	子楊	A c	227_3	須	杯A	"	"	536	□	A a		土	杯A	
"	475	子楊	B e	227_15	須	杯A	"	"	537	王	A a		土	杯A	
"	476	子楊	A c	227_18	須	杯A	"	溝8	538	?	A ?		黑	杯A	
"	477	子楊	A c	227_11	須	杯A	"	通2	539	?	A ?		黑	杯A	
"	478	?	A ?	227_14	須	杯A	"	"	540	?	A ?		黑	杯A	
"	479	目刀	A c	227_23	黑	杯A	"	"	541	?	A ?		黑	杯A	
229住	480	王	A a		土	杯A	V古	"	542	王	B e		灰	碗	
230住	481	記	A a	230_11	黑	杯	IV古	"	543	田	A a		黑	碗	
"	482	王	A a	230_10	黑	杯	"	1区検	544	王	A a		土	杯A	
231住	483	?	A ?		土	杯A	IV古	"	545	?	A ?		土	杯A	
233住	484	?	A ?		黑	杯碗	III新	"	546	王	A a		軟	杯A	
238住	485	王	A a	238_2	土	杯A	III新	"	547	王	A a		黑	碗	
"	486	王	A a		黑	杯A	"	"	548	王	A a		黑	碗	
"	487	王	A a		黑	杯碗	"	"	549	王	B e		黑	碗	
"	488	?	A ?		軟	杯A	"	"	550	王	A a		黑	杯A	
"	489	?	A ?		軟	杯A	"	"	551	取	A a		黑	杯A	
243住	490	大南	A a	243_1	土	杯A	IV新	"	552	?	A ?		軟	杯A	
"	491	?	A ?	243_7	土	杯	"	"	553	?	A ?		軟	杯A	
245住	492	門	A c	245_2	軟	杯A	III古	"	554	安	A a		黑	碗	
247住	493	?	A ?		黑	杯	IV古	"	555	王	A a		軟	杯A	
"	494	?	A ?		黑	杯碗	"	"	556	王	A a		黑	杯A	
"	495	?	B ?		土	杯A	"	"	557	大南	A b		土	杯	
250住	496	宿	A a		黑	杯	I新	2区検	558	定	A a		黑	杯碗	
251住	497	□	A ?	251_2	黑	杯A	III新	不明	559	王	A a		黑	碗	
254住	498	十	A a	254_3	黑	杯A	III新	"	560	成	A a		黑	杯碗	
257住	499	今	A a		黑	杯A	III新	"	561	王	A a		黑	碗	
259住	500	□	A c	259_3	須	杯A	I古	"	562	王	A a		土	杯A	
260住	501	?	A ?		須	杯A	II古	"	563	?	A ?		黑	杯碗	
262住	502	貞	A d	262_3	須	杯A	II古								

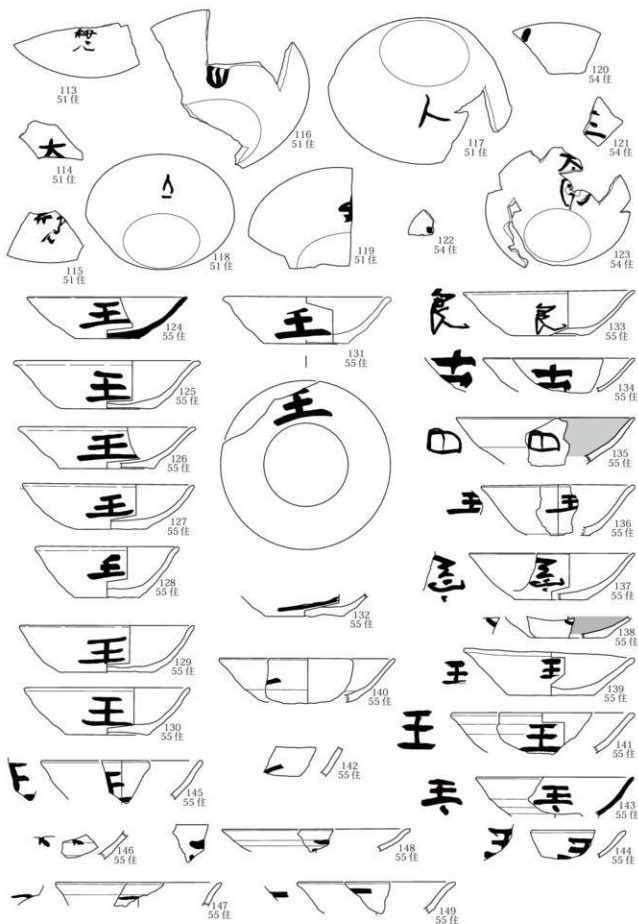
第24表 墨書一覽(5/5)



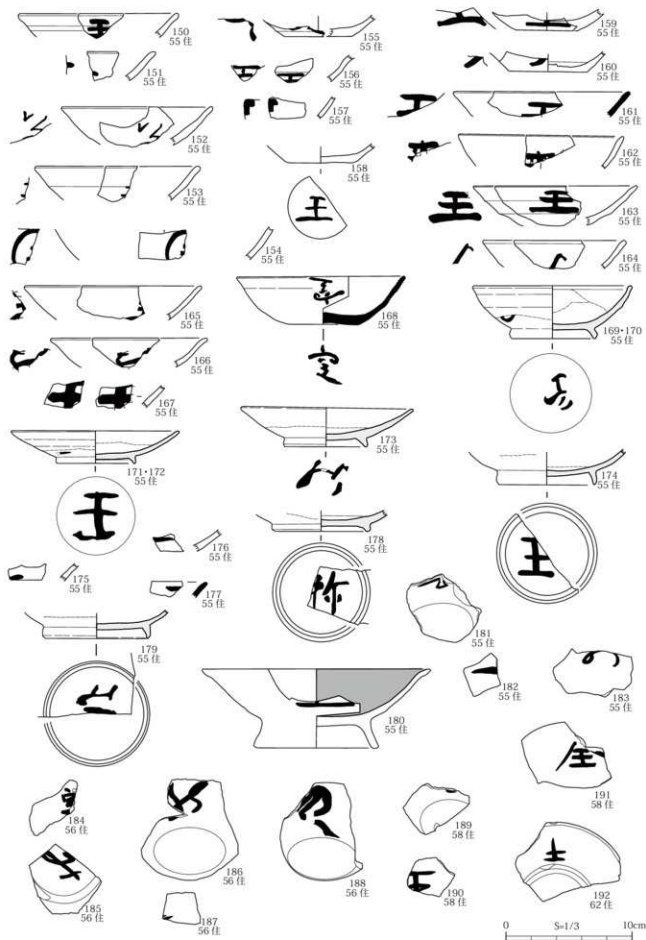
第 198 図 墨書土器集成(1)



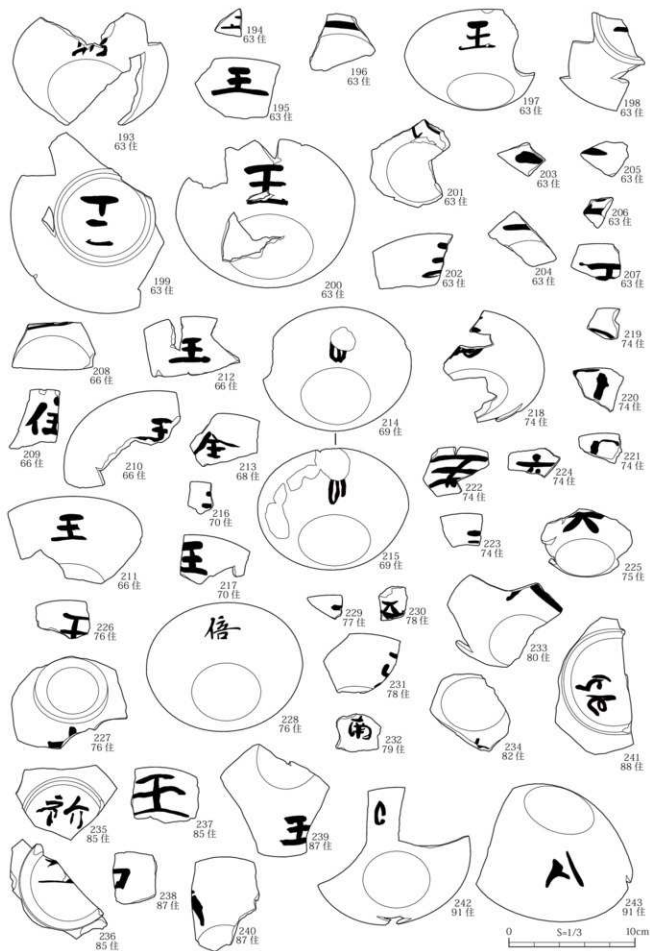
第 200 図 墨書土器集成(3)



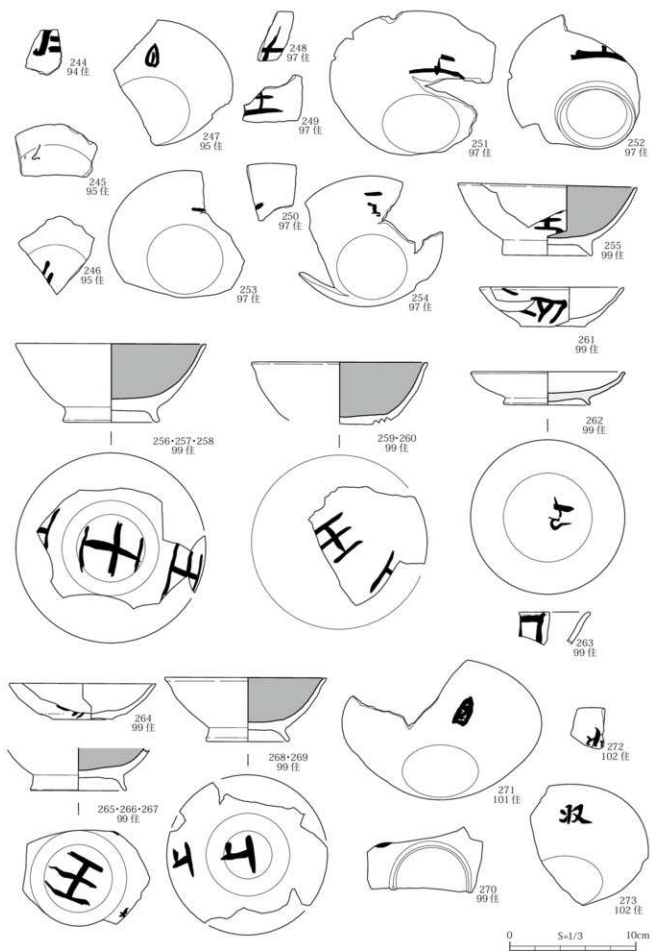
第 201 図 墨書土器集成(4)



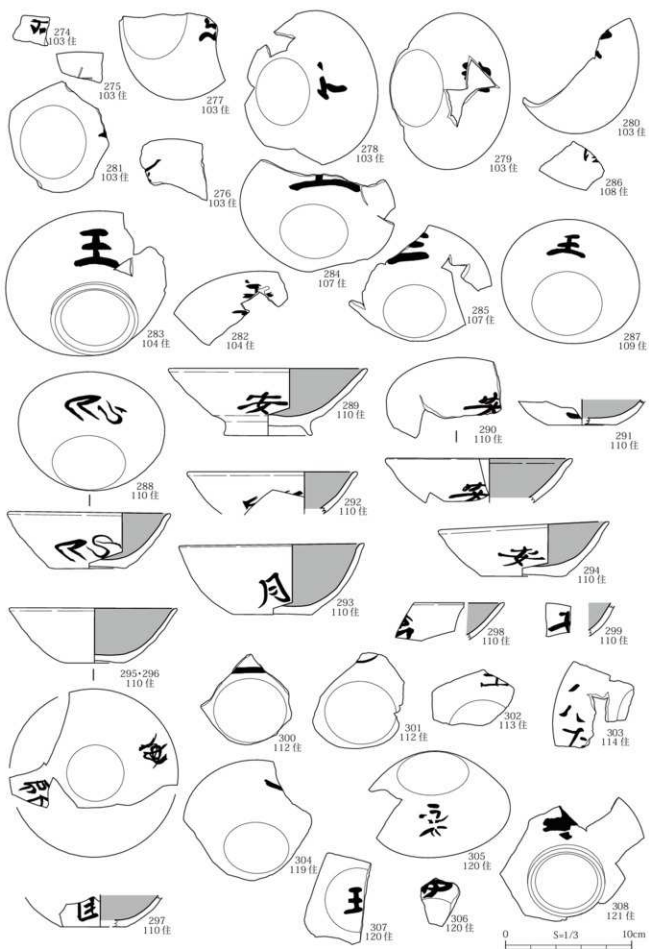
第 202 図 墨書土器集成(5)



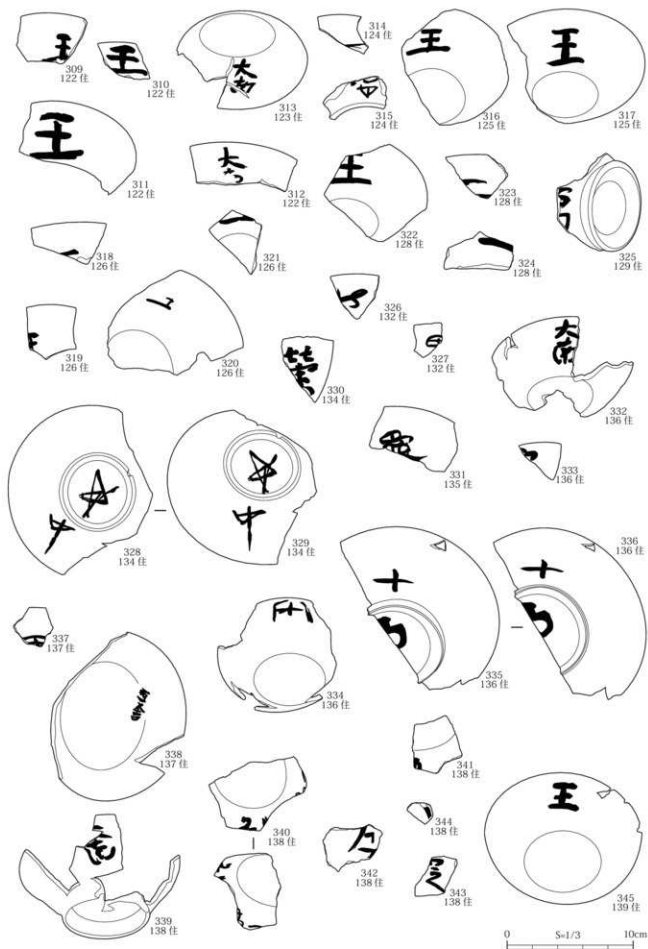
第 203 图 墨書土器集成 (6)



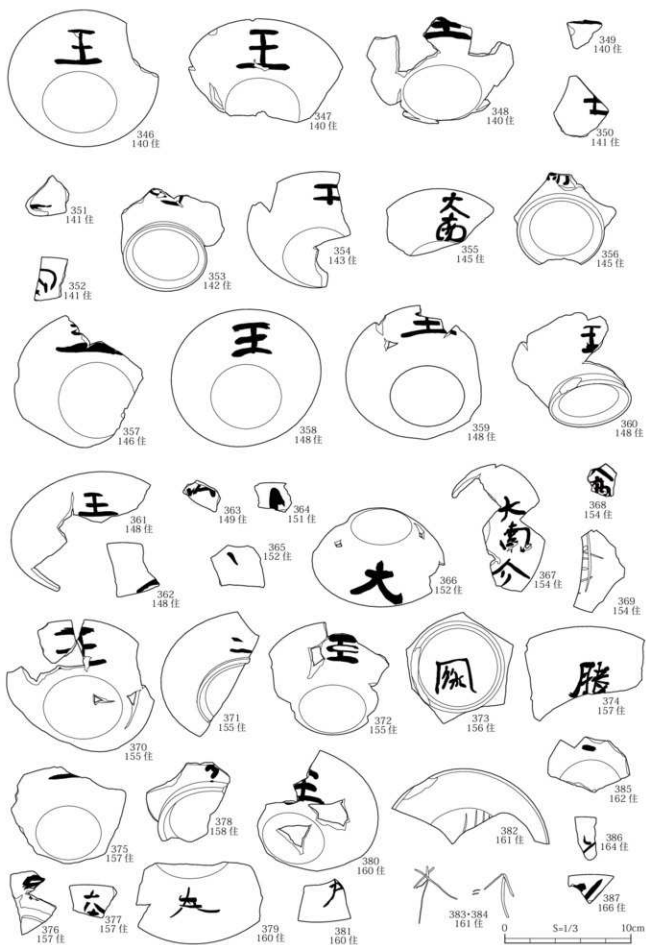
第 204 図 墨書土器集成(7)



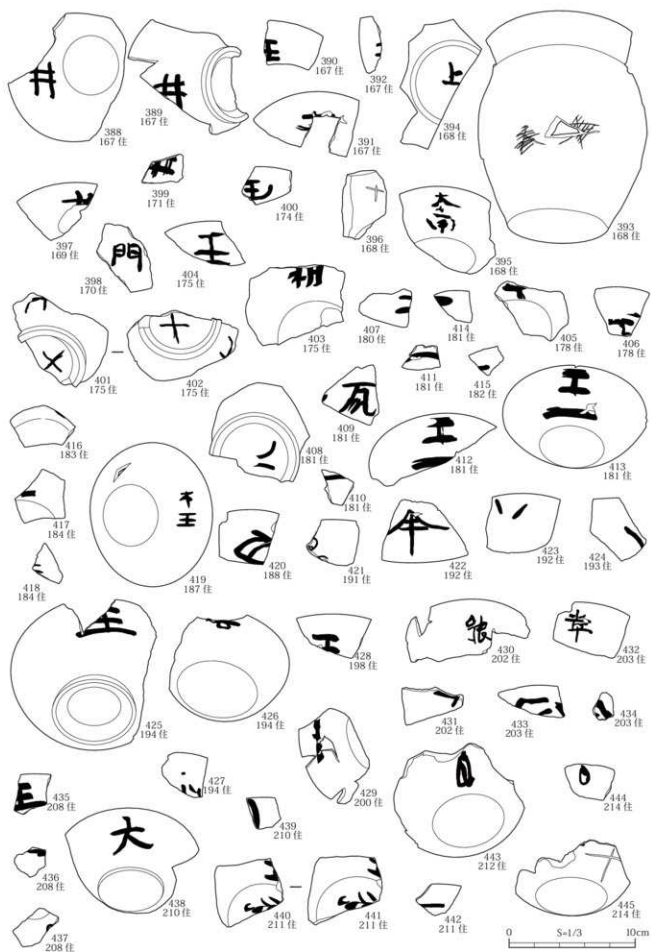
第 205 図 墨書土器集成 (8)



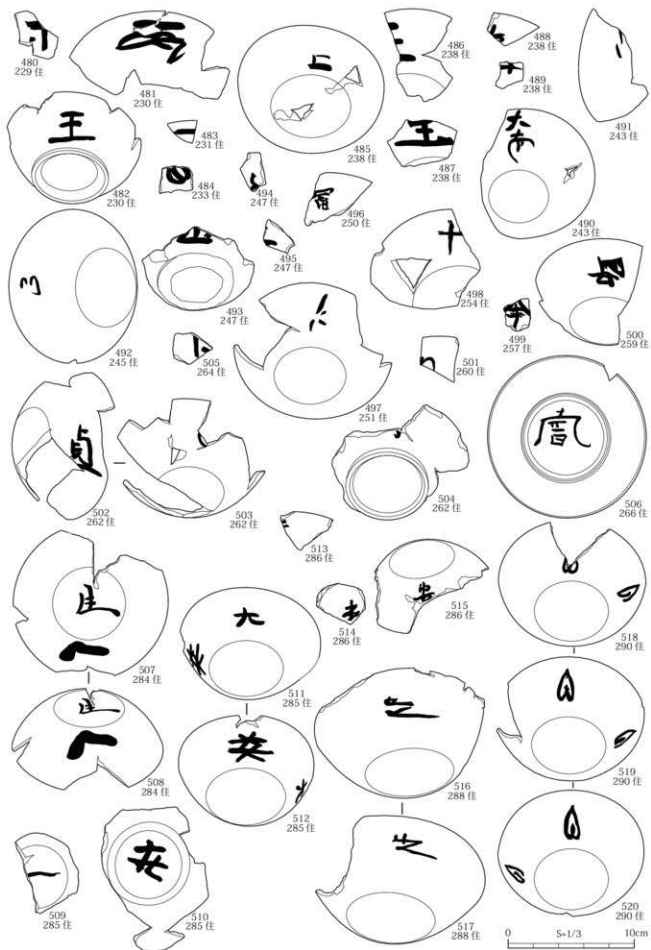
第 206 図 墨書土器集成 (9)



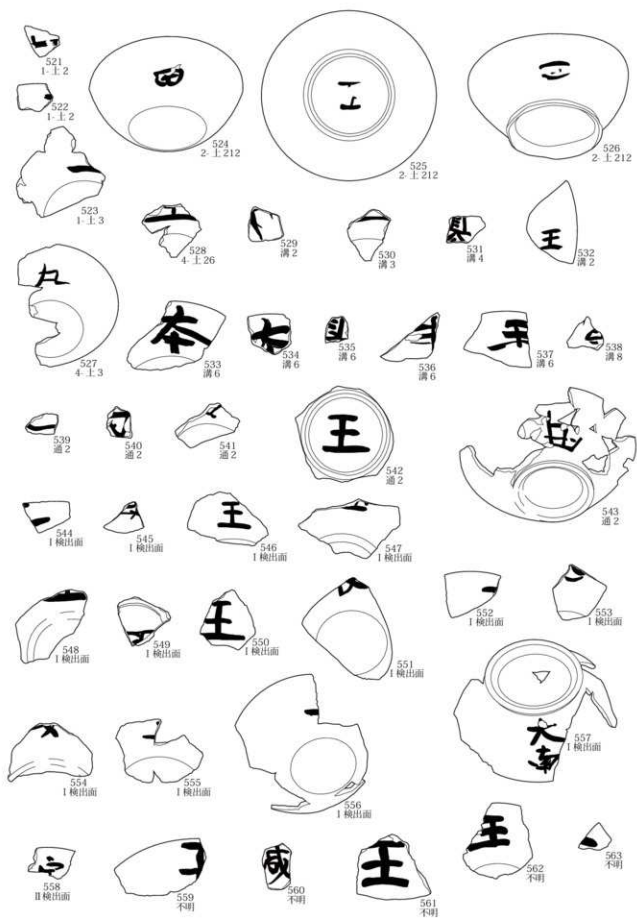
第 207 図 墨書土器集成 (10)



第 208 図 墨書土器集成 (11)



第 210 図 墨書土器集成 (13)



第 211 図 墨書土器集成 (14)

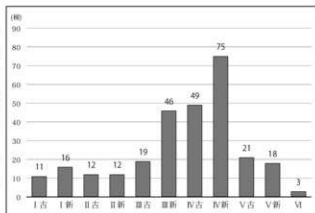
第4節 平安時代の集落について

1 平安時代集落の概観

本遺跡で確認された遺構のうち、縄紋時代の土坑、近世以降の溝などごくわずかなものを除くすべてが平安時代前半に属すると特定や推定ができる。それらは大別すると竪穴建物、掘立柱建物、墓址を含む土坑、特殊遺構等を含む溝、通路状遺構、道路状遺構として捉えられ、本遺跡はこれらの遺構が組み合わさって集落を構成していた。集落の存続期間は三間沢川Ⅰ期からⅥ期までで、文献13の実年代推定に従うと800年代前半から900年代後半にあたり200年間に満たない。

2 竪穴建物棟数の時期別推移

集落の主体を占める遺構の竪穴建物は291棟というまとまった数が発見されたが、これらは本遺跡の存続していた間、常に一定だったわけではなく、時期によって棟数が増減がある。出土土器群から推定した竪穴建物の時期(Ⅰ期～Ⅵ期)の棟数の推移を第212図のグラフで示す。Ⅰ期からⅡ期は20棟以下で推移するが、Ⅲ期に入ると20棟を超えて増加が始まり、Ⅳ期新で75棟に達してピークを迎える。以後、急速に減少し、最後のⅥ期古では3棟を数えるのみとなる。



第212図 竪穴建物の時期別棟数

3 各期の様相と集落の変遷(第213～218図)

(1) Ⅰ期

本期に存在が確実なのは竪穴建物27棟(古段階11棟、新段階16棟)と3本の溝(溝2・4・16)である。溝8・9は溝2から分岐するので本期に属すると推定でき、その末尾が溝4に続いていた可能性がある。溝16はそのまま南下して2区の西側調査区外で直角に近く曲がり、溝2に接続していた可能性を考えている。竪穴建物は調査地を西から東に貫く溝2の南北両側に点在しているが、古段階では2区南端部(A)、1A区北部(B)、5区東部(C)の3エリアが認められ、Aエリア以外で新段階へ続いていく。本期の竪穴建物の特徴として主軸方向がきっちり東西(南北)を指さず、北東から南西方向に15～25度振れている点が挙げられる。Aエリアにまとまる掘立柱建物(建11・12・14)が同様の軸方向を採っており、これらは本期から出現したと考えたい。1棟のみ離れて存在する165住は鍛冶遺構、Aエリアの大型住居227住は墨書土器の項(本章第3節)で述べたように村落寺院の可能性が指摘される。

本期は集落の開始期である。本期前半から既に三つのエリアに竪穴建物が分布しており、当初から広範な展開があったといえる。その中でも大型の226・227住と掘立柱建物があるAエリアが中核部に近いであろう。遠方から導水した水路の溝2を集落の中心に据えており、本集落が計画的に拓かれたことを物語る。集落内に鍛冶遺構を持ち、村落寺院を伴っていた。

(2) Ⅱ期

本期に存在が確実なのは竪穴建物24棟(古12、新12)である。溝2とそれに関連する溝4・8・9・16は本期の初頭までは残っていた可能性がある(溝2の特徴的な堆積土:灰色砂性粘質土が本期前半の195住のカマドに使用)。Ⅰ期にみられたA～Cエリアは、拡大傾向のCエリア以外は縮小あるいは消滅するが、他方で1B区にDエリア、1A区東端にEエリアが現れる。特にDエリアは本期後半からではあるが大型住居の110住を中心に、一帯の掘立柱建物7棟の多くが伴っていたと推定する。掘立柱建物のうち建5・9は2×2間の総柱建物である。

本期は竪穴建物の棟数はⅠ期とあまり変わっておらず、集落の中心であった溝2は前半までで埋没してしまう。しかし、本期後半には大型住居と掘立柱建物群を中心としたDエリアが出現しており、倉庫とみられ

る総柱建物2棟を伴った掘立柱建物群はかなり整然と並ぶ。おそらくここが集落の中核の一部として機能していたのであろう。1期のAエリアと同様に南部に中核部が継続して置かれた点で集落の性格が大きく変わったとは考えられないが、110住を中心とする掘立柱建物群の集中は、本期に集落の管理的側面が強化された感を受ける。

(3) III期

本期に存在が確実なのは竪穴建物65棟(古19、新46)と2区土坑212である。溝6は245住(III期古>)と接し、それ以外の竪穴建物との重複や近接がないので、おそらく本期の中で最初の掘削が行われたのであろう。溝6に合流する溝13・14もこれに準ずる。溝19及びそれに交差する通1～5は、通4が280住(IV期新)に切られるのでIV期には埋没していたこと、溝19に293住(II期古)が近接しておりそこまでは廻らないことの2点から、本期から出現すると推定したい。通1との位置関係から溝21も同様で、その溝21と前後する道路状遺構も本期からの存在と考える。竪穴建物は本期から棟数が増加し、特に後半からの急増が著しい。1A区西半分から2区北半分の全域にかなり密集して分布し、I・II期までのA～EエリアではB・Dエリアで小規模に残るのみとなる。

本期は溝6や溝19と通路状遺構という本集落を特徴づける遺構が登場するとともに、竪穴建物が増加し、溝6の北側一帯(中央部エリア)の広範囲に密に分布する。前時期までの中核地帯であった集落南部(A・Dエリア)はほとんど空白となり、それに代わる中核は見当たらない。強いて挙げるなら中央部の建10(2×3間:4.8×7.2m)、建13(2×5間:4.3×10.6m)が相当しようか。I・II期までの溝2を中心としながら中核部を南部外縁に設ける構成から、溝6を大きな南限とし中核を中央部に取り込む構造へと、本期の中で集落の景観や性格を大きく変貌させたのであろう(竪穴建物の床面積分布でも本期での変化は読み取れる:本章第1節1)。2区土212は本期後半から次期前半くらいの墓址で、中央部エリアに埋葬されている。

(4) IV期

本期に存在が確実なのは竪穴建物124軒(古49、新75)である。溝はIII期に引き続き溝6と溝19が存在していたものと推定する。通路状遺構は通4が埋没して280住(IV期新)が掘り込まれている他は、本期での有無を裏付けする根拠がないので溝19と一体で捉えておきたい。竪穴建物は前半では前時期とほぼ同じ棟数を維持し、後半はさらに増加する。分布は溝6を南限としながら前時期よりさらに中央部エリアの範囲を広げ、1A区・2区全域から4区の溝19の一帯にまで及ぶ。

本期は溝6を南限とし、中央部エリアが拡大するという集落の基本的な構成は前時期と変わらないが、さらに竪穴建物が増加密集するとともに、その中に単独で突出する規模の大型住居55住が現れる。前時期から始まった竪穴建物の増加がピークとなり、集落は最盛期を迎える。

(5) V期

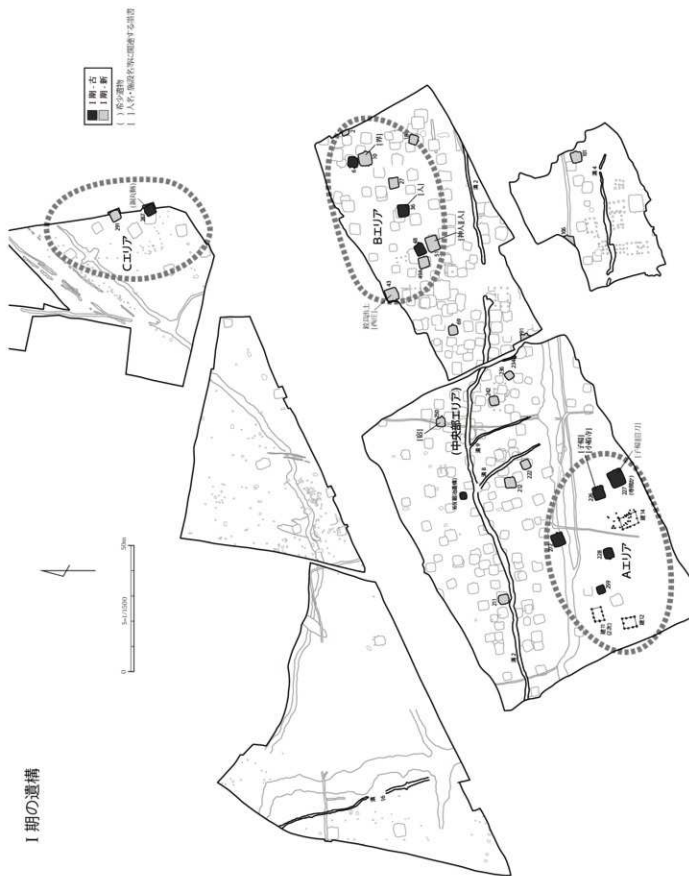
本期に存在が確実なのは竪穴建物39軒(古21、新18)と4区土坑17・41である。溝6は伴う最新の土器類がV期古なので、本期後半までには埋没したと考える。溝19は5区区間の溝底に配置された土器類がV期古であり、さらに4区土17(V期新の土器類を副葬する墓址)に切られているので、やはり本期の後半までには埋没したと考える。竪穴建物は棟数と分布密度を著しく減少させている。一方、II期でいったん消滅したCエリアに再び竪穴建物が見られる。

本期は竪穴建物の棟数が前時期の1/3以下に急減し、本集落を特徴づけていた溝6、溝19が埋没する。溝6を南限とした中央部エリアに竪穴建物が広く展開する構成に変化はないが、前時期に比べた棟数の減少は顕著で、集落が急速に終息に向かっていることが窺える。そのような動きの一方で、前半に138住、後半に50住・99住という突出した大型住居が集落の中心部に造られている。集落の北のはずれには4区土17と土41の2基の墓址が15mほどの距離をおいて設けられた。

(6) VI期

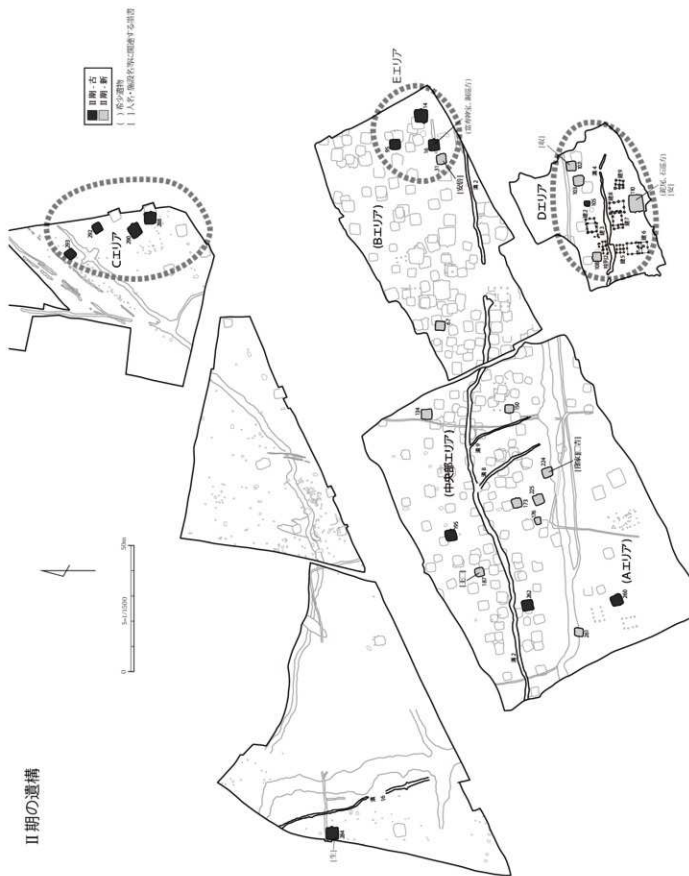
本期に存在が確実なのは竪穴建物3棟のみで、他の遺構の存在は推定も含めて認められない。竪穴建物は遺構・遺物共に突出する内容はなく、本期を以て集落は消滅する。

I期の遺構



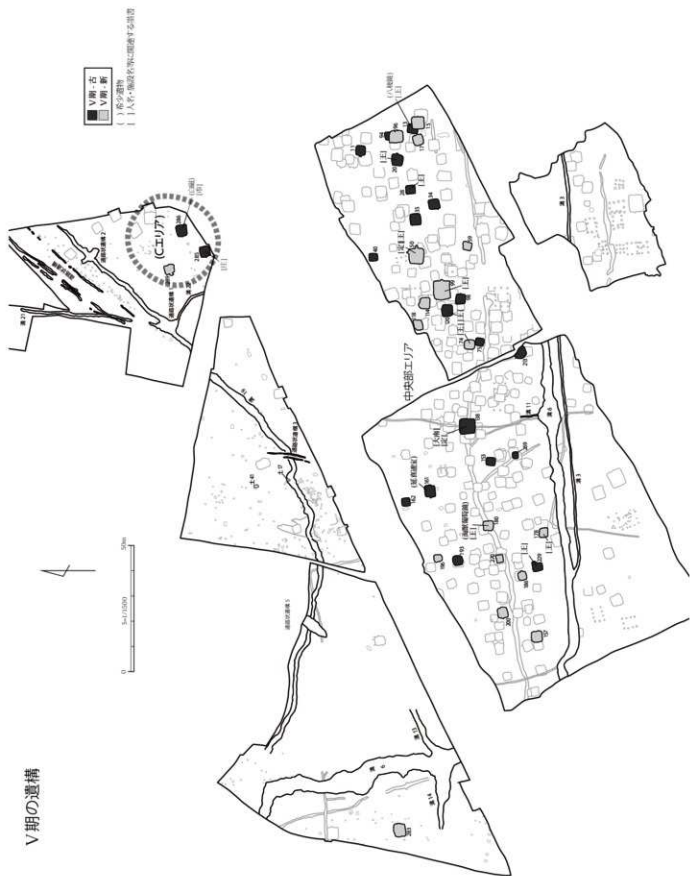
第 213 図 集落変遷図 (1)

II期の遺構



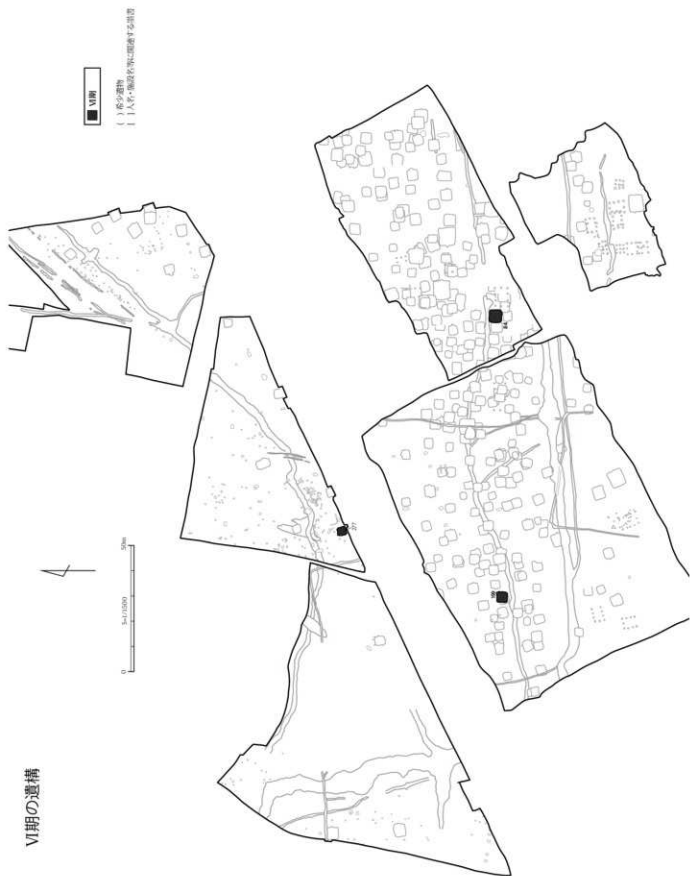
第 214 図 集落変遷図 (2)

V期の遺構



第 217 図 集落変遷図 (5)

VI期の遺構



第 218 図 集落変遷図 (6)

4 集落と希少遺物

本遺跡から出土した磁器類、金属製品、石製品などの希少な遺物や黒書土器について、遺構内や集落でのあり方の点から見てみる。第25表は希少遺物が出土した竪穴建物の時期と特徴の一覧である。

希少遺物を出土した竪穴建物の遺構面での特殊性については、大型住居の55住と110住、柱穴を有する16住、43住、161住の5例が特殊な規格の竪穴建物（161住は焼失住居でもある）、残りの9例はごく普通のものであった。特殊な竪穴建物5例のうち43住以外はすべて複数点の出土がある一方で、普通の竪穴建物9例からは1点ずつしか出土していない。この状況だけで希少遺物の廃棄（あるいは特殊な竪穴建物の廃絶）に他とは違う意味があるとはいきれないが、集落を考える上では一つの視点となろう。

竪穴建物の時期は出土土器群の段階区分によって特定、推定しており、厳密にはそれらの遺物が廃棄、遺棄された時期を示す。特に希少遺物でその点は重要であろう。

青磁・白磁 越州窯青磁の碗1点（第104図055_117）と白磁の碗2点（第166図286_13・14）が出土しているが、いずれも底部や口縁部の破片である。白磁は同一個体の可能性もある。青磁は55住（Ⅳ期古）から出土した。55住の壁際には土師器を中心とした多くの杯Aや碗が意図的とみられる状況で残されていたが、青磁はそれらとは異なり小片で覆土からの出土であった。ただし55住は本遺跡で最大級の床面積を有する大型住居で、その点は考慮する必要がある。白磁2点は286住（Ⅴ期）の出土だが、他の土器類と同じで特殊な状況は全くみられなかった。本遺跡で多数が出土している緑釉陶器も青磁や白磁と同様、特殊な出土状況は全くない。磁器は共伴した土器群の時期と文献27などの成果がほぼ整合する。

銅鏡 281住と69住を切るピットから出土している。281住のもの（第181図88）は板状の銅製品で鏡とは断定できない。281住はⅣ期の遺構だが、銅製品は本址の検出面から破片の単体で出土した。後者は出土したピットが径25cmと小さく（第23図、写真図版16）、出土状態も大形破片4点のうち3点が並ぶようになっており、意図的にピット内に納められたと考える。ピット自体も銅鏡埋納用に設けられた可能性がある。ピットの時期は69住がⅠ期なのでそれ以降であることは確かだが、ピット内から他の遺物は得られておらず、周辺にこのピットを伴う遺構も見当たらないのでそれ以上の推定はむずかしい。銅鏡は第3章第2節3で述べたように補修痕を有す極めて珍しいものである（第181図87）。

銅鏡 八稜鏡と海獣葡萄鏡が出土している。八稜鏡は13住（Ⅴ期）の床面近くから表面を上にして出土した（第11図）で、出土状況に特殊な様子は認められない。一部を欠損するだけだが全体の半分ほどが被熱で融けて傷んでいる。13住には炭化材や焼土などを伴った火災や焚火の痕跡はなく、八稜鏡は廃棄・埋没以前から傷んでいた可能性がある。海獣葡萄鏡は3cm角ほどの破片で180住（Ⅴ期）の床中央部の硬化面に圧着するような状態で出土した（第44図）。破断面は鋭利で、破片になった後に摩滅・風化した痕跡は顕著にみられない。海獣葡萄鏡は全国的にみて7世紀から8世紀初頭の遺跡や古墳から出土するが、その年代と180住とは200年以上の開きがある。そもそも本遺跡全体でも古代に属する最古の遺構・遺物は9世紀前半なので、海獣葡萄鏡は本遺跡とは大きく時期を遡る異質な存在といえる。おそらく意図的に折損され、本来の用途である鏡とは認識されない小破片となった形で集落に持ち込まれ、Ⅴ期に廃棄されたものであろう。

銅印 22住の北壁西隅寄りの壁際から数cm、床からは10cmほど浮いて出土した（第14図）。他の土器類などと同様で特殊な出土状況は示していない。22住の土層は西側から埋没、あるいは埋め戻された状況を示しており、銅印もその際に廃棄されたものと推定される。完形品で遺存状態も良好である。印文の「長良私印」については文献17・20・31で解釈が示されている。銅印は遺物そのものから製作の時期を絞り込むのは難しい（4文字の私印は印影や使用例が8～11世紀に及ぶとされる；文献20）。銅印が出土した22住の土器群はⅢ期古に位置付けたがⅡ期新に遡る要素を若干含んでおり、文献13の比定を参考にすると9世紀後半の中に収まる。銅印廃棄の時期もそこに求められる。

時期	遺構	備考	出土遺物
Ⅰ古	287住	柱	銅丸鏡1
Ⅰ新	43住	柱	段貝1
Ⅱ古	161住	柱	富春神石1、銅高方1
Ⅱ新	110住	柱・大	瓦葺2、右高方1
Ⅲ古	22住	柱	銅高方1
Ⅲ新	133住	柱	白磁方1
Ⅳ	175住	柱	銅高方1
Ⅳ古	55住	柱・大	白磁1、鉄鏡1
Ⅳ新	126住	柱	銅高方1
Ⅴ	281住	柱	銅鏡1
Ⅴ古	161住	柱	青磁碗5
Ⅴ	286住	柱	白磁2
Ⅴ新	13住	柱	八稜鏡1
Ⅵ	180住	柱	海獣葡萄鏡

備考欄「柱」は柱穴のある住居、「大」は大型住居を示す

第25表 希少遺物出土遺構

銭貨 竪穴建物出土の銭貨は計7枚で、銭種の判読ができたものは富寿神宝1枚と延喜通宝2枚、判読ができないものうち3枚も延喜通宝と推定され、もう1枚も大きさなどから古代銭貨とみられる(第3章第2節3)。富寿神宝は16住の北壁中央部直下の床に掘られた浅いピット状の窪みから銅製巡方とともに出土したものである(第13図)。16住ではその他の遺物は特殊な出土状況を示していないが、銭貨と巡方が窪みの中から出土したことは意図的な廃棄や埋納の可能性も考えられる。延喜通宝5枚はすべて161住からの出土で、南壁中央東寄りの壁際の覆土上層から、5枚が重なって溶着した状態で出土した(第83図)。161住は覆土上～下層に多量の炭化材が残り、灰釉陶器を中心とする土器類が意図的に多数廃棄されていたいわゆる焼失住居で、銭貨は炭化材生成時に被熱溶着したものと推定する。廃棄時に紐で結ばれていたか、袋や容器に重ねて入れられていた可能性を考えたい。銭種不明の1枚は55住出土であるが、出土状況はよくわからない。富寿神宝は初鋳が818年、延喜通宝は907年で、前者が出土した16住がⅡ期、後者の161住がⅤ期(文献13の7期と10期に対応。それぞれ9世紀中葉から後半、10世紀中葉に比定)なので時期的に齟齬はないが、初鋳から50年を経ずして廃棄されたことになる。

石鈿・銅鈿 革帯に付される鉸具、鉈尾、巡方、丸柄が出土している。すべて単体での出土で、内訳は鉸具1点、鉈尾2点、銅製丸柄1点、巡方5点(銅製3点、石製2点)の計9点である。出土遺構は16住(Ⅱ期古:銅巡方1)、43住(Ⅰ期新:鉸具1)、110住(Ⅱ期新:鉈尾2、石巡方1)、126住(Ⅳ期:銅巡方1)、133住(Ⅲ期新:石巡方1)、175住(Ⅲ期新:銅巡方1)、287住(Ⅰ期古:銅丸柄1)で、16住の銅巡方が床面の窪みから銭貨(富寿神宝)と共に出土した他は、出土状況に特殊性は感じられない。110住からは3点が出土しているので注目すべきであろう。革帯関連の遺物は前半期の竪穴建物からの出土が多い。

墨書土器 第26表は竪穴建物の時期別棟数(時期が限定できないものは除く。)に占める墨書土器の出土した竪穴建物数と比率などを示したものである。竪穴建物が3棟のみとなったⅤ期を除き、各時期で30%から60%台の竪穴建物から墨書土器が出土しており、量的な指標となる保有指数(文献27:墨書土器数÷竪穴建物棟数)でもすべて1.0以上を示す。他の遺跡と較べると、文献13で対象とした7遺跡では墨書土器は5期から8期の間に出土が集中し、9期以降にはほとんどみられない。文献27の塩尻市吉田川西遺跡でも6・7期がピークで8・9期には減少に転じ、10期以降は僅少となっている。本遺跡ではⅣ・Ⅴ期になっても減少傾向はみられず、墨書土器の時期的なあり方はかなり特殊な状況といえる。(文献13・27の5～10期は本遺跡のⅠ期の前段階～Ⅴ期に相当:第20表参照)

時期	住居数	墨書土器 出土住居数	墨書土器 点数	墨書土器を持つ 住居の比率(%)	保有指数
I古	11	4	17	36.4%	1.55
I新	16	10	20	62.5%	1.25
II古	12	8	15	66.7%	1.25
II新	12	8	28	66.7%	2.33
III古	19	9	24	47.4%	1.26
III新	46	26	76	56.5%	1.65
IV古	49	34	142	69.4%	2.90
IV新	75	41	91	54.7%	1.21
V古	21	13	25	61.9%	1.19
V新	18	8	32	44.4%	1.78
VI	3	0	0	0.0%	0.00
全体	282	161	470	57.1%	1.67

住居数・土器点数は時期が明確なものを表記
保有指数は墨書土器点数を住居数で割り戻した値

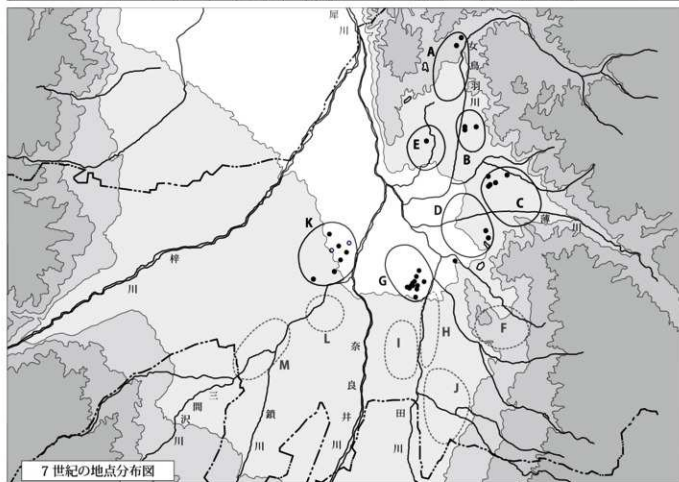
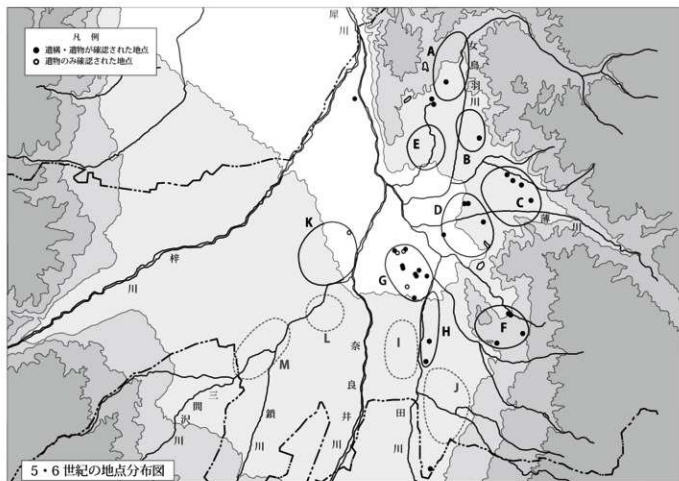
第26表 時期別墨書土器出土状況

5 三間沢川下流域の平安時代集落をめぐって

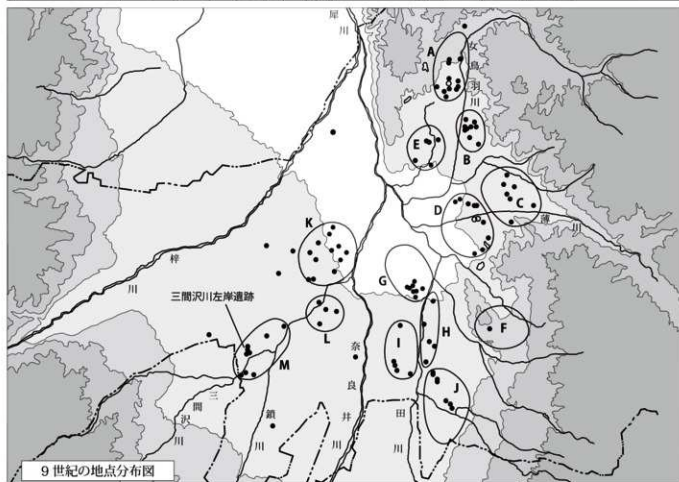
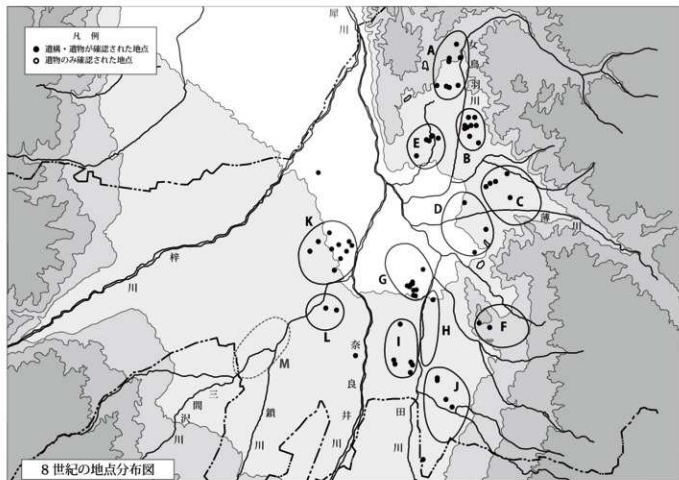
(1) 三間沢川下流域の遺跡群

これまで触れてきたが、本遺跡は極めて特徴的なあり方を示している。始まりが9世紀前半と遅く、しかも10世紀末までにほぼ消滅する短期間の集落でありながら、非常に多くの竪穴建物が密集して営まれ、出土品に希少遺物が多い。墨書土器も多い。計画的に水路を設けてローム層地帯に集落を営んでいる。

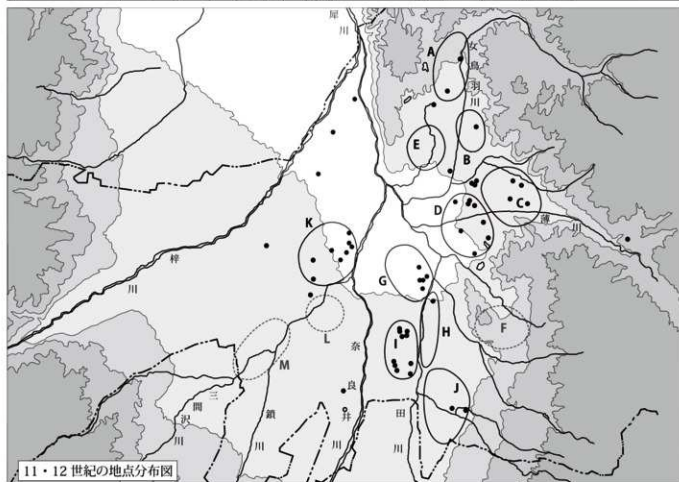
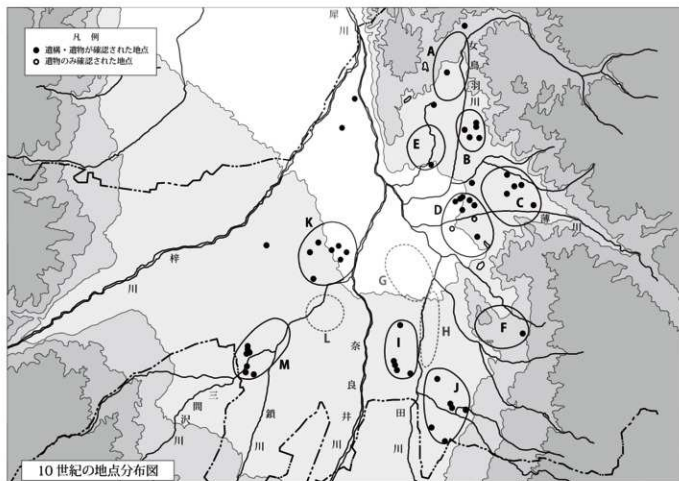
本遺跡と同様の三間沢川下流域に立地する川西開田遺跡は、地形的には本遺跡の対岸に位置し、三間沢川や鎖川による沖積地上に営まれている。4次にわたる調査で92棟の竪穴建物が発見されている(文献40・41)。この集落は本遺跡よりやや遅れて始まり11世紀代の中で終わるとい違いを見せるが、9世紀代から開発が始まる点や、集落の存続期間が短い、集落内に大規模な水路を設けている、緑釉陶器や銭貨などの希少遺物が伴う点は本遺跡によく似ている。ただし墨書土器は多くない。時期的にほぼ並行するこの二つの集落間の距離は600mほどであり、双方が密接な関連を有して存在していたことは想像に難くない。川西開田遺跡の約200m南では境窪遺跡が調査されており、9世紀後半に属するとみられる2棟の竪穴建物が発見されている。地形的には川西開田遺跡と同じなので、同一の集落の縁辺部と捉えることもできている。本遺跡を含めたこれら三間沢川下流域の遺跡群については、それぞれの相違点もあるが、包括して捉えていく必



第 219 図 発掘地点分布図 (1)



第 220 図 発掘地点分布図 (2)



第 221 図 発掘地点分布図 (3)

要がある。

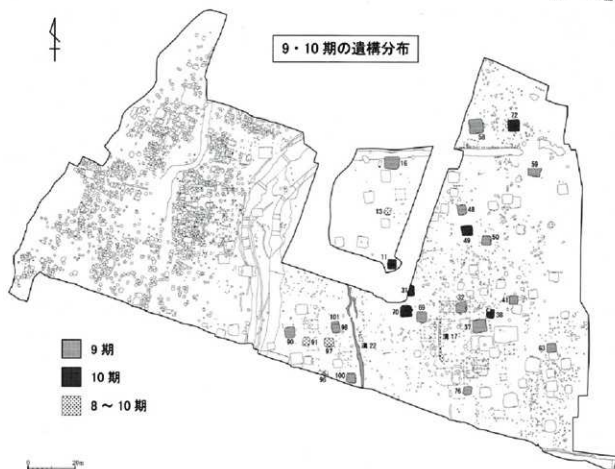
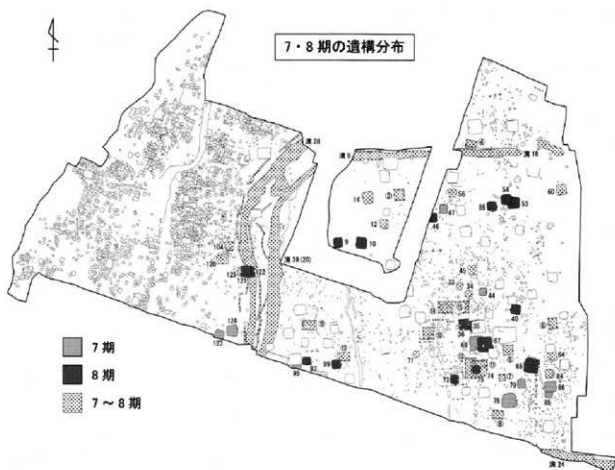
(2) 松本市域の古代集落と三間沢川下流域の遺跡群

昭和50年代以降の発掘調査の蓄積によって松本市域での小地域ごとの古代集落遺跡の動向がかなり判明してきている。三間沢川下流域の遺跡群は、その中でどのように位置付けできるか、若干の考察を巡らせてみたい。

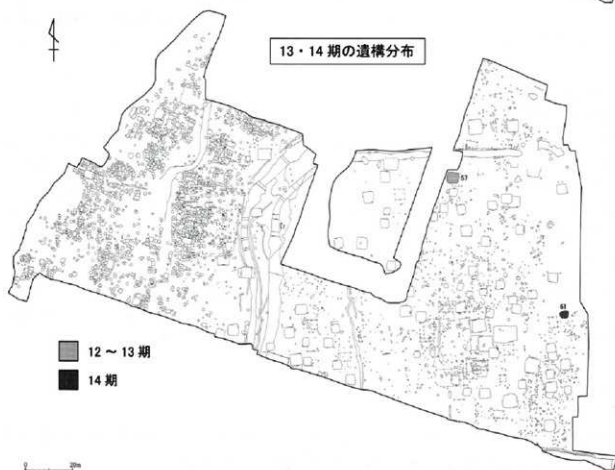
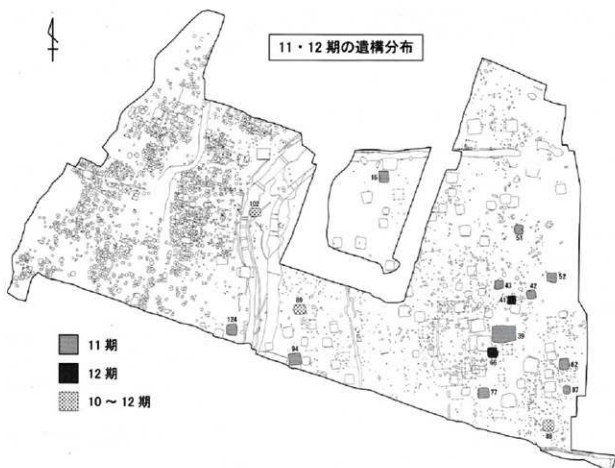
第219～221図は昭和50年以降に松本市教育委員会が実施した発掘調査で5世紀から12世紀までの遺構・遺物が検出された地点を示したものである（古墳本体は除く）。それらの地点は地形的にAからMまでのエリアで暫定的にまとめることができる。5・6世紀の地点分布図（第219図上段）では、A～D・F～Hエリアで遺構・遺物がみられる。Eエリアは今のところ、この時期の明確な発見はないが周囲に同時期の古墳があるため加えた。Gエリアは南松本、出川の一帯であるが、それ以外は田川以東が主で、これらが古墳時代前期（Aエリアを除く）と弥生時代）から続く松本市域における「伝統的な地域」である。7世紀の地点分布図（第219図下段）では、Kエリアが加わる。前代までほとんど遺構・遺物がなかった地域で一挙に地点が広がっている。7世紀後半から末のことと捉えられている。F・Hエリアでは途絶えるが、Hエリアは調査例が少ないので未発見なだけかもしれない。8世紀の地点分布図（第220図上段）ではI・J・Lのエリアが加わる。田川・奈良井川間のIエリア、東山山麓のJエリア、鎮川・奈良井川間のLエリアはこの時期から本格的な開発が始まった一帯と考えることができる。Fエリアの地点は窯跡であり、集落址ではない。Kエリアのかなり北方に単独の地点があり、ここに小規模なエリアを設定すべきかもしれない。9世紀の地点分布図（第220図下段）に至ってMエリアが加わる。このMエリアが本遺跡の含まれる三間沢川下流域の遺跡群で、松本市域の中ではかなり後発の地域だったことがわかる。しかも前代までまったく遺構・遺物がなかった地域で一挙に地点が広がっている点は7世紀後半のKエリアの出現に似ている。この9世紀（の後半くらいまで）が最も地点が多く、「伝統的な地域」でも、それ以降に加わったエリアでも盛んな開発があったことが窺える。しかし、10世紀の地点分布図（第221図上段）では、前代まで地点を有していたG・H・Lエリアが途絶え、Aエリアも著しく減少している。「伝統的な地域」のB～Dエリア、後発のI・J・Mエリアは前代の状況を維持しているが、Kエリアも縮小傾向にある。それまで順調に増加、拡大を続けてきた松本市域の遺跡分布に、10世紀に入ると大きな変化が広範に生じている。この異変ともいえるエリアの縮小と衰退はおそらく9世紀の後半から末ころには始まっており、それが10世紀の分布図に大きく反映したものであろう。さらに11・12世紀の地点分布図（第221図下段）では本遺跡を含むMエリアも空白になる。厳密には川西開田遺跡に1棟のみが残り、11世紀の前半で消滅する。伝統的な地域の田川以東でも地点の分布が減少している。その一方でIエリアは地点数を増やしており、田川・奈良井川間のこの傾向は南隣する塩尻市域の吉田川西遺跡にも通ずるものがある。いったん消滅したGエリアも復活する。おそらく9世紀後半から始まった変化を経て、新たな集団が入ったのであろう。

このような動向を踏まえ、あらためて本遺跡をみると、竪穴建物棟数はⅢ期から増加し、Ⅳ期にピークを迎え、続くⅤ期も棟数は減らしているが3棟の大型住居を中核に据えている。墨書土器、緑釉陶器など希少遺物も多い。本遺跡のⅢ～Ⅴ期は文献13の年代比定によれば9世紀末から10世紀中頃までにあたり、松本市域全体ではそれまでの有力エリアのいくつかが消滅、縮小していった時期に重なる。伝統的な地域やそれに続いた古い開発のエリアが衰退していく一方で、三間沢川下流域の遺跡群は新たに出現し、拡大発展を遂げたといえよう。ところが、次のⅥ期では急速に衰え、川西開田遺跡でわずかに次期に続いたのち、三間沢川下流域の遺跡群は消滅してしまう。

三間沢川下流域の遺跡群の登場と拡大、急激な消滅の背景は、単なる地勢的な要因などではなく、おそらく8世紀（9世紀前半）までの政治や地方経済の体制が大きく変動し揺るぎ始めたことに対する地域の反応や、中央権力との結びつき方の変化といった視点で捉えるべきで、ひとり松本市域だけの問題ではないため、ここでのこれ以上の検討はむずかしい。



第 222 図 《参考》川西開田遺跡全体図 (1)



第 223 図 《参考》川西開田遺跡全体図 (2)

おわりに

本書では発掘調査の最大の成果である平安時代の遺構と遺物の全容を報告することを主眼とした。次いで遺跡の特徴、特殊性を示す目的で土器類や緑釉陶器、希少遺物、墨書土器などを取り上げて本章で触れた。ただし、鉄器・鉄製品、石器・石製品、土製品、自然遺物、鉄滓などについては実測図の掲載やデータの列挙、個々の遺物説明にとどまった。わずかではあるが出土している縄紋時代の遺物については、石器の一部を提示できたのみで土器は図化できていない。その他にも墨書土器の多さに対応するはずの硯(転用硯)の問題、多彩な鉄器類、こもて石(編物用石錘)の多量出土、64kgに及ぶ鉄滓などについては、詳細な観察や検討ができなかった。本遺跡の特徴を物語る遺物であるだけに残念である。また、自然科学分析の結果と発掘成果との対比、検討もできていない。これらすべては今後への大きな課題としたい。

本遺跡の第1次調査から既に30年が過ぎた。発掘時から出土品や遺構は注目を集め、翌年には概報を刊行したが、それ以後の整理作業はまったく進捗せず、平成22年から始まる第4次以降の調査で、ようやく以前のものと合わせた整理作業と報告書が刊行できる運びとなった。このような遅滞の原因と責任は調査と遺物保管に関わった市教委の担当者であり、深くお詫びするものです。

何回かの発掘調査、長期にわたった保管や整理作業では数えきれないほど多くの方々からご協力やご教示をいただいた。例言に列挙しただけではとても及ばないところで、本書の刊行にあたっては、それらすべての皆様に満腔の謝意を申し上げます。

引用・参考文献一覧

- 文献1 赤羽裕幸 2002「3 遺跡の歴史的環境と周辺遺跡(4) 近世以降」『松本市文化財調査報告書№162 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 古代・中世編』松本市教育委員会
- 文献2 飯田市教育委員会 2005『恒川遺跡群一遺物編その1(古代・中世一)』
- 文献3 出越茂和 1993「北陸初期荘園の考古学的分析」『上荒屋遺跡(二)』金沢市教育委員会
- 文献4 井上高明 2014「多様な地方官衙と庄家・居宅」『古代官衙』考古調査ハンドブック 11 ニューサイエンス社
- 文献5 井原今朝男 1989「平安時代の生活と村落」『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
- 文献6 上田市立信濃園分寺資料館 2009『信濃の東山道と万葉歌』
- 文献7 岡谷市教育委員会 2008『郷土の文化財 29 榎垣外官衙遺跡』
- 文献8 小口雅史 1991「荘園と村」『日本村史講座 4 政治Ⅰ』塙山閣出版
- 文献9 小口雅史 1996「荘所の形態と在地支配をめぐる諸問題」『土地と在地の世界をさぐる』山川出版社
- 文献10 奥野中彦 1988『日本における荘園制成立過程の研究』三一書房
- 文献11 金田章裕 1978「東大寺領荘園の景観と開発」『古代の地方史 4 東海・東山・北陸』朝倉書店
- 文献12 国立歴史民俗博物館 1999『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』
- 文献13 小平和夫 1990『古代の土器』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4—松本市内その1—総論編』長野県教育委員会・財長野県埋蔵文化財センター
- 文献14 小松 望 1989「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』長野県教育委員会・財長野県埋蔵文化財センター
- 文献15 須田 勤 2006『古代村寺院とその信仰』『古代の信仰と社会』国士館大学考古学会編
- 文献16 関 和彦 1994『古代の家号と実体的共同体』『日本古代社会生活史の研究』校倉書房
- 文献17 高島英之 1999「古代の私印について」『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 文献18 高島英之 2000「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』第9号 日本考古学協会
- 文献19 竹原 学 2000「三間沢川下流の原始・古代・中世—地形の変化と集落—」『松本市史研究』第10号
- 文献20 土橋 誠 1999「私印論」『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館
- 文献21 戸田芳実 1967『日本領土制成立史の研究』岩波書店
- 文献22 栃木県教育委員会・財とちぎ生涯学習文化財団 2001『鶴田A遺跡Ⅰ 県営園地整備事業(山前中部Ⅲ期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 文献23 鳥羽英継 1999「第5章第1節 土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)—古代Ⅰ編—』長野県教育委員会・財長野県埋蔵文化財センター
- 文献24 長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物

- 文献 25 長野県埋蔵文化財センター 1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 文献 26 西山克己 2011「信濃出土の古代銭貨の用いられ方とそれが意味すること」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号
- 文献 27 原 明芳 1989「吉田川西遺跡にみられる食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3 一塩尻市内その 2—吉田川西遺跡』長野県教育委員会、榎長野県埋蔵文化財センター
- 文献 28 原 明芳 1996「古代社会の変質と中世の始まり」『松本市史』第二巻歴史編 1 原始・古代・中世 松本市
- 文献 29 原 明芳 2014「信濃国筑摩郡の変容、その主体者は誰か」『古代東国の考古学③ 古代の開発と地域の力』高志学院
- 文献 30 平川 南 2000「付 則天文字を追う」『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 文献 31 平川 南 2002「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」『長野県考古学会誌』99・100 号
- 文献 32 平野 修 1996「古代仏教と土地開発—山梨県内の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 7 集
- 文献 33 藤井一二 1986「初期荘園の耕地と村」『初期荘園史の研究』塙書房
- 文献 34 松本市教育委員会 1974『長野県松本市今井こぶし畑遺跡緊急発掘調査概報』
- 文献 35 松本市教育委員会 1986『松本市文化財調査報告No. 40 松本市榎海渡遺跡』
- 文献 36 松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告No. 55 松本市神林川西遺跡』
- 文献 37 松本市教育委員会 1988『三間沢川左岸遺跡(Ⅰ)平安時代集落址の緊急発掘調査概報』
- 文献 38 松本市教育委員会 1993『松本市文化財調査報告No. 100 松本市山影遺跡』
- 文献 39 松本市教育委員会 1998『松本市文化財調査報告No. 130 境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- 文献 40 松本市教育委員会 2001『松本市文化財調査報告No. 150 川西開田遺跡Ⅴ・三間沢川左岸遺跡Ⅲ』
- 文献 41 松本市教育委員会 2002『松本市文化財調査報告No. 162 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 古代・中世編』
- 文献 42 松本市教育委員会 2003『松本市文化財調査報告No. 167 川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ 縄紋編』
- 文献 43 松本市教育委員会 2015『松本市文化財調査報告No. 217 波田下原遺跡 2・3 和田中西原遺跡 2』
- 文献 44 三上善孝 2004「墨書土器研究の可能性」『山形大学人文学部研究年報』1 巻
- 文献 45 山形村教育委員会 1981『三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』
- 文献 46 山形村教育委員会 1982『神明遺跡・三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』
- 文献 47 山形村教育委員会 2009『下原遺跡 三夜塚遺跡Ⅳ—県営畑地帯総合整備事業竹田原地区に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 文献 48 山形村教育委員会 2010『下原遺跡 三夜塚遺跡Ⅴ—地方特定道路整備工事(村道北 6 号線)に伴う記録保存—』
- 文献 49 山形村教育委員会 2001『境窪遺跡Ⅱ—三間沢川河川改修工事に伴う緊急発掘調査報告書—』



溝 19 (5 次)、南西から



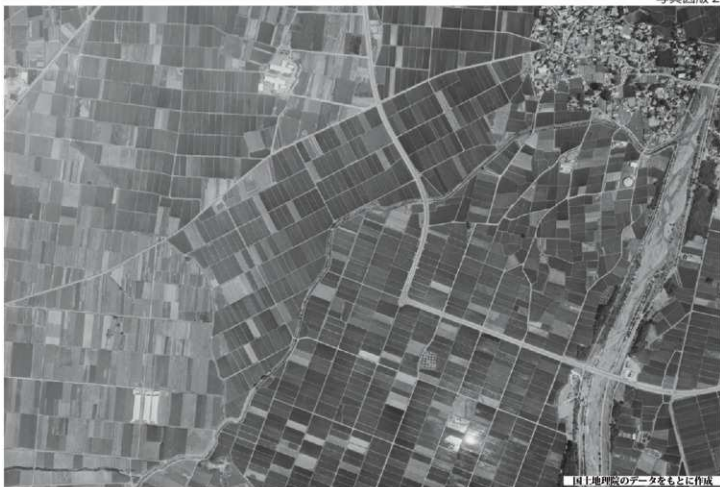
昭和23年撮影 左手前から右奥にかけて三間沢川が流れ、右側の鋸川に合流する

■国土地理院のデータをもとに作成



昭和44年撮影 開田工事事業 (S34～38) により、方形区画の耕地となっている

■国土地理院のデータをもとに作成



昭和 54 年撮影 国民体育大会（やまびこ国体：S53）にあわせて、松本環状高家線が開通



平成 25 年撮影 調査終了後 臨空工業団地が広がる



1次A区 北から-1



1次A区 北から-2



2次調査区 北から



2次調査区 東から



4次B区南半 北東から



4次D区全景 南から



5次調査区 南東から



5次調査区 南西から



10 住 西から。左上は 11 住に切られる



11 住 東から



13 住 西から。右上を 15 住に切られる



14 住 西から。左手前を 15 住に切られる



16 住 西から



17 住 西から。左隣の 18 住を切り、右上の土 1 に切られる



19 住 西から



22 住 東から。右手前は 23 住



24住 西から



50住 西から



51住 西から。奥は52住が上部を破壊する



55住 東から



56住 東から



58住 東から



59住 西から



61住 東から。右上は60住を切る



63 住 東から。左上を64住に切られる



66 住 西から



69 住 西から。本址覆土中のピットから銅鏡出土



76 住 西から



81 住 東から



84 住 東から。上奥は85住



94 住 東から。左側は96住を切る



98 住 西から。横方向の上土の変質は開田時のキャタピラの跡
竪穴建物(3)



99 住 西から。手前左隅は 113 住



103 住 西から。手前右隅は 104 住



107 住 東から



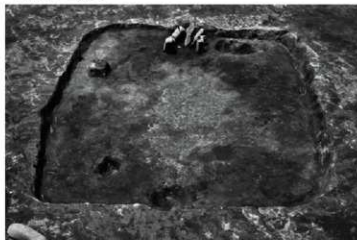
108 住 南から。奥は 109 住。右側は土 7 に切られる



110 住 西から



126 住 東から。手前から右は 125 住を切る



133 住 東から



138 住 西から。右手前は大きな攪乱



140 住 東から。左側へ拡張している



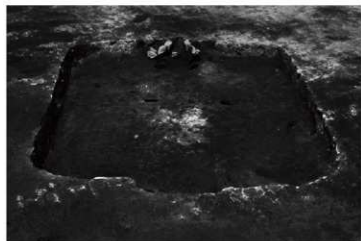
151 住 西から。手前を溝7に切られる



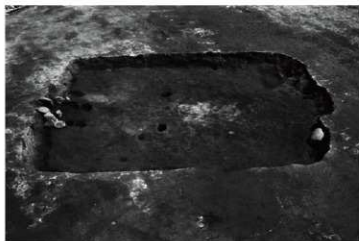
156 住 南から



157 住 西から



161 住-1 東から



161 住-2 南から



165 住 南から



174 住 東から。左側は173住



175 住 西から



180 住 西から



187 住 東から。左下は 208 住



195 住 西から。左下隅は 194 住に切られる



197 住 東から



200 住 東から



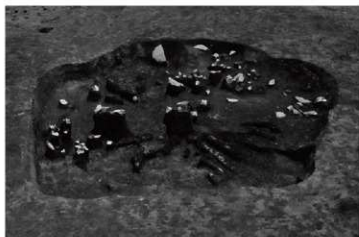
206 住 西から。手前は 182 住と 270 住カマド



217 住 西から



219住・220住・269住 南から。左下より220・269・219住



222住・223住 西から。炭化材が223住。222住は左側のみ



224住 西から



225住 西から



226住 西から



227住 西から



228住 東から



242住 東から。右上一帯に238住が覆っていた。
左側は146住と145住



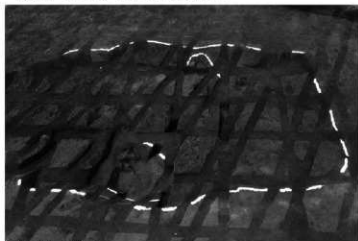
245 住 西から



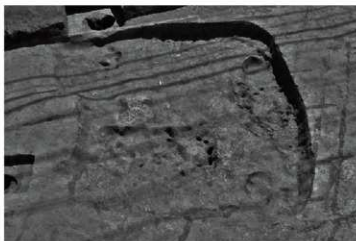
262 住 西から。手前の突出は 231 住



272 住 西から。右側は溝6に切られる



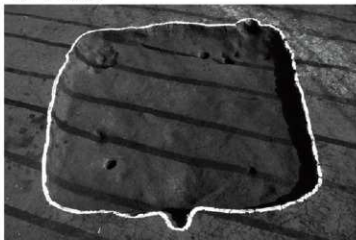
276 住 東から



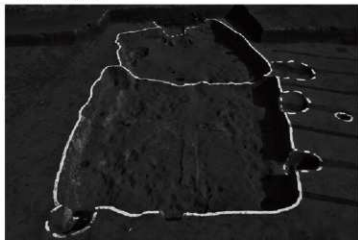
277 住 北から



284 住 西から



286 住 西から



287 住・288 住 西から。奥は 287 住、手前が 288 住



建2 西から。左は107住



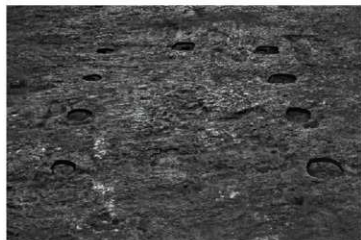
建5・6 南から。奥が建5、手前が建6



建7・8 西から。奥が建8、手前が建7



建9 南から



建11(2次) 東から



建12 南から



建13 西から。複数の住居と重複する



建15 南西から。右側は通路状遺構2
掘立柱建物



69住 銅碗出土ピット



1次土7 西から。108住を切る



2次土202 遺物出土状況



2次土209住 南から



2次土212 遺物出土状況。南から



4次土17 A区西壁



4次土17 遺物出土状況-1



4次土17 遺物出土状況-2。東から

土坑・墓・ピット(1)



4次土17 東から



4次土41 ベルト北から



4次土41 遺物出土状況-1。北から



4次土41 遺物出土状況-2



4次土41 完掘



4次土90 遺物出土状況



5次土8 セクション 東から



5次土8 西から



溝6・3(2次) 西から



溝6(4次C区) 北から



溝6(4次C区) 溝6a断面北壁



溝6(4次D区) 北から



溝6・16(4次D区) 北東から



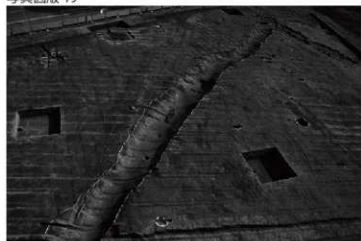
溝6(4次D区) 溝6p断面南壁



溝7 138住を切る。南から



溝16(4次D区) 断面北壁



溝 19 (4次A区) 北から



溝 19 (4次A区) 溝 19k 断面北壁



溝 19 (4次A区) 溝 19n 断面西壁



溝 19 (4次B区) 西から。中央奥は通路状遺構 4



溝 19 (4次B区) 溝 19r 断面西壁



溝 19・18 (4次C区) 東から



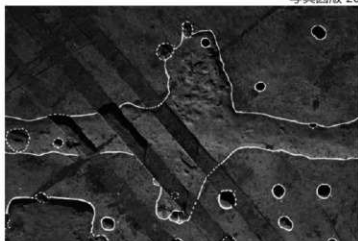
5次 溝 19・道路状遺構等空撮



溝 19 (5次) 溝 19h 断面北壁



通路状遺構 1 北から



通路状遺構 2 空撮-1 (上か南)



通路状遺構 2 空撮 2



通路状遺構 3 南西から



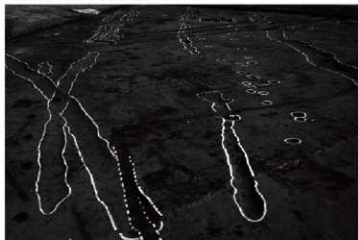
通路状遺構 4 南から



通路状遺構 4 遺構内ビット土層



通路状遺構 5 東西ベルト北壁



通路状遺構 南西から



13住 八稜鏡



16住 銭貨と還方



22住 銅印



51住 筒状土製品



125住 帯飾り



133住 石幣



161住 銭貨



180住 海獣葡萄鏡



9住 こもで石



165住 大石



161住 炭化材・遺物出土状況-1



161住 炭化材・遺物出土状況-2



161住 炭化材・遺物出土状況-3



161住 炭化材・遺物出土状況-4



197住 炭化材・遺物出土状況

184住 石器出土状況
出土状況(2)



1次 調査風景



2次 調査風景



4次 調査風景



5次 調査風景



4次 重機



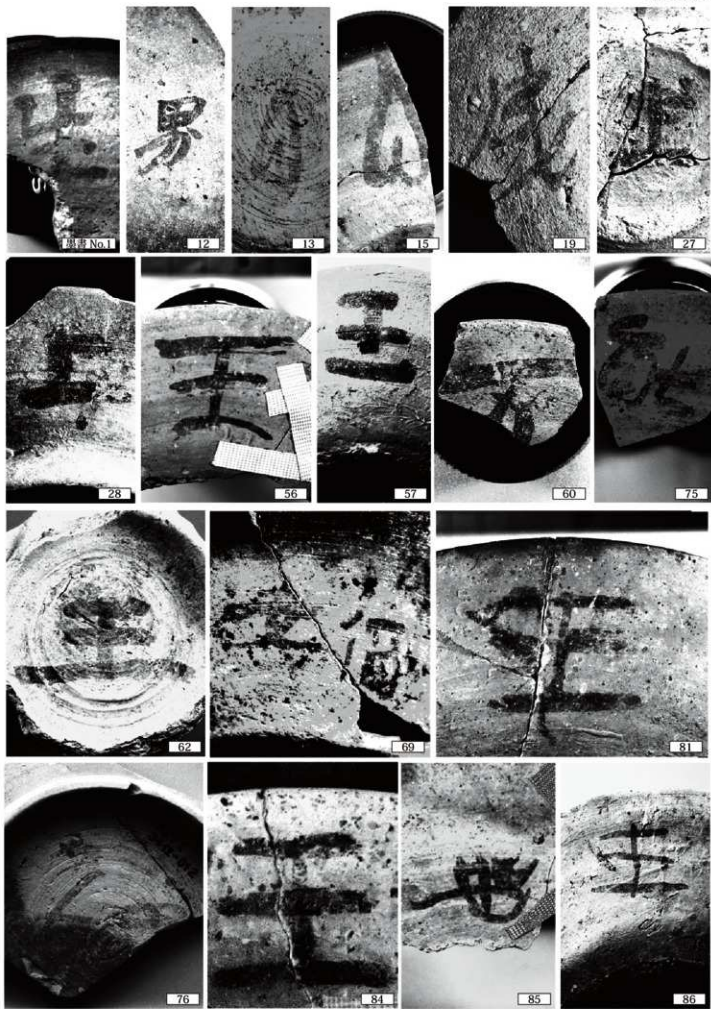
1次 現地説明会



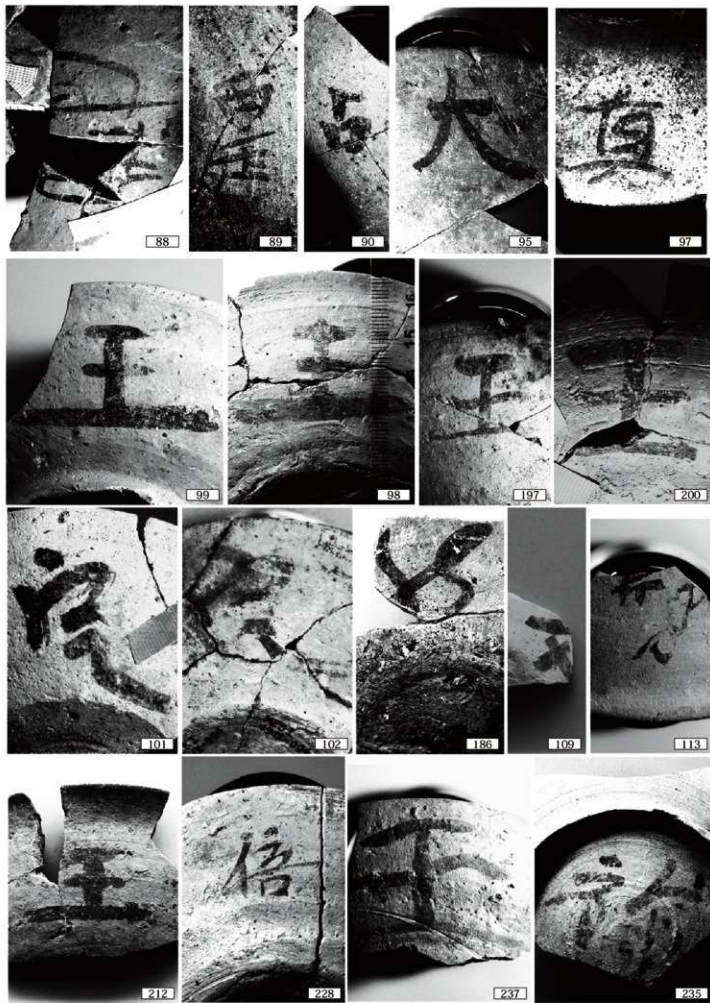
4次 和田地区見学会

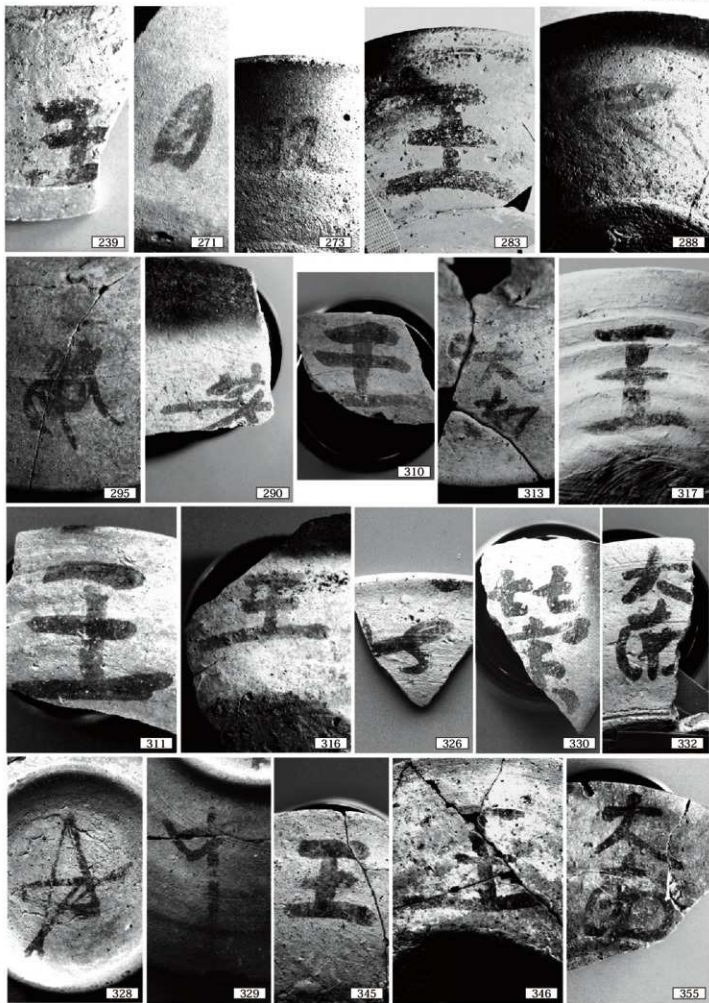


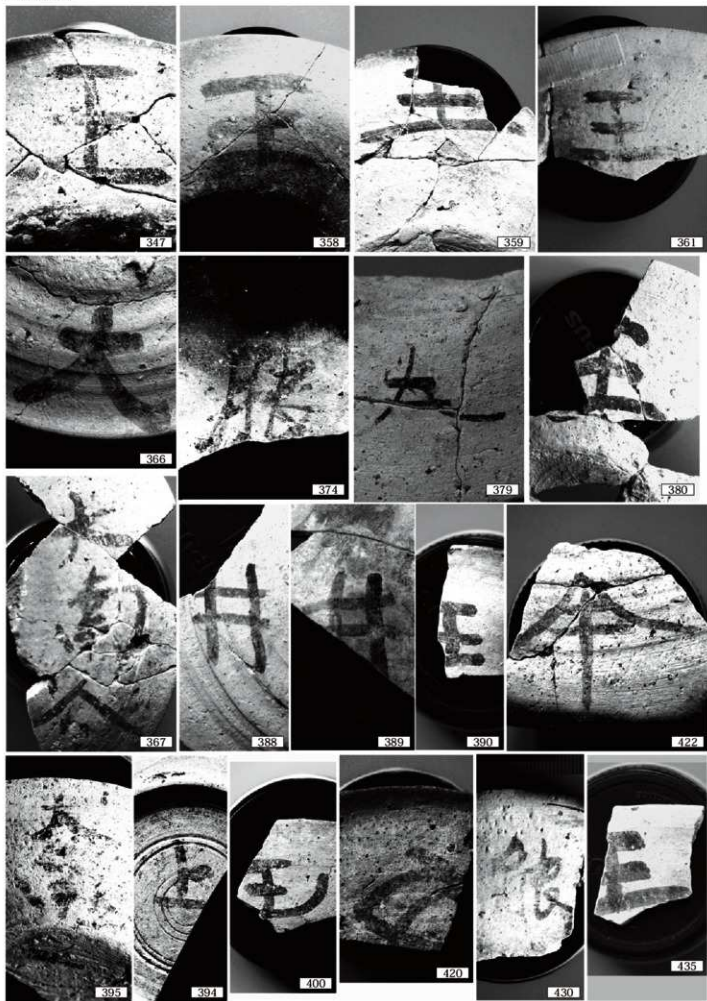
5次 現地説明会

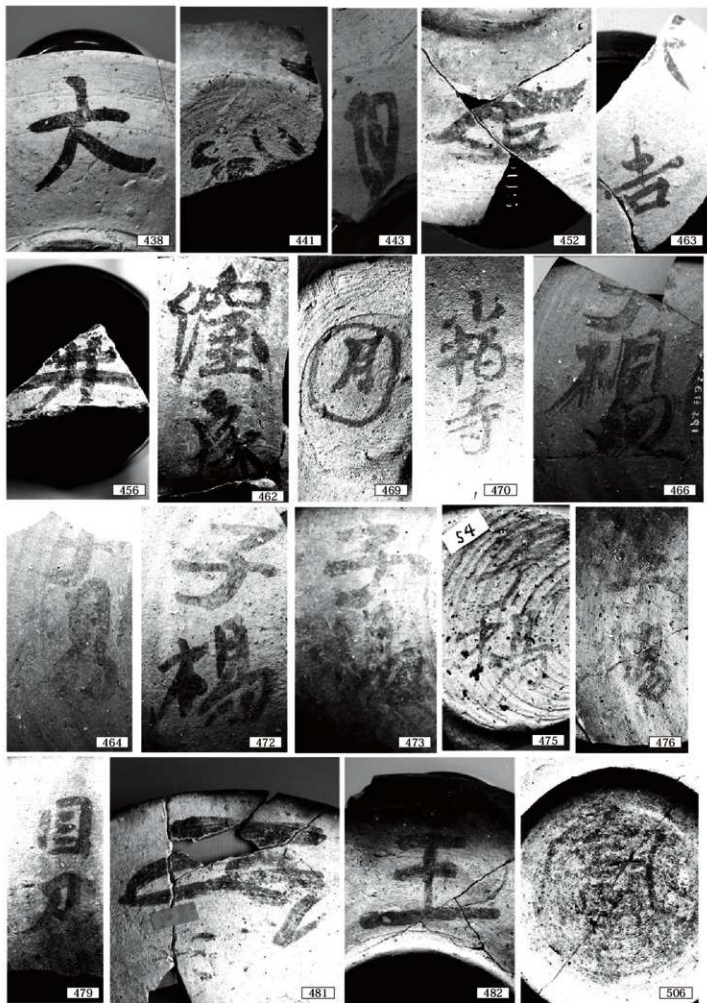


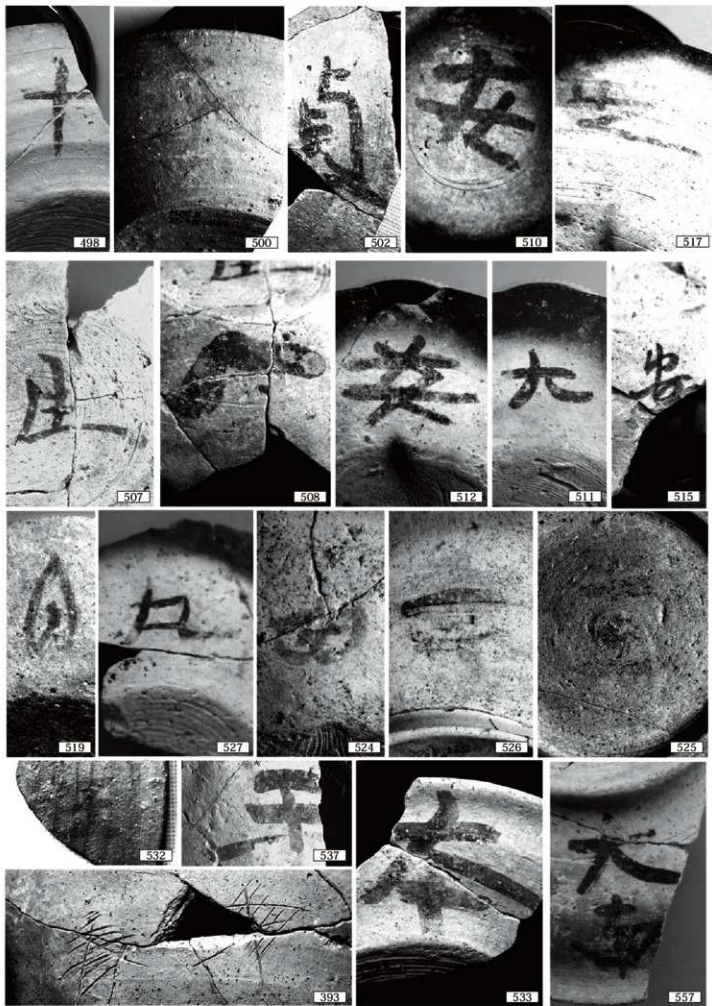
墨書 (1)











報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし みまざわがわさがいせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 三間沢川左岸遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№226							
編著者名	小山奈津実、直井雅尚、原田健司、高島義和							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2017(平成29)年3月31日 (平成28年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みまざわがわさがい 三間沢川左岸	ながのけんまつもとし 長野県松本市 わた 和田3967番ほか	20202	288	36度 11分 11秒	137度 54分 09秒	S62.5.30~7.21	7.741㎡	松本市臨空工業 団地建設事業
						S63.4.21~8.1	11.304㎡	
						H22.4.12~23.7.20	11.742㎡	新松本工業団地 建設事業
						H23.4.25~24.3.8	7.897㎡	
						H25.6.4~12.13	1.961㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三間沢川左岸	集落跡	平安	竪穴建物 291棟 第1~203住 ※132住重複 ※5・30・282住欠番	[土器・陶磁器] 土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰軸陶器、緑軸陶器、青磁、白磁、縄紋土器		・平安時代前~中期の集落址の一部を調査し、竪穴建物が密集して検出された。 ・集落を貫く長大な水路が発見された。 ・集落の北縁を画す溝と、それを渡る通路跡が確認された。 ・竪穴建物に伴って多量の土器陶磁器、金属製品、石製品が出土した。 ・銅鈔や銭貨などの銅製品が出土した。 ・銅印「長良私印」が竪穴建物から出土した。 ・墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が多量の遺構から出土した。		
			掘立柱建物 15棟	[土製品] 羽口、筒状土製品、陶製円盤				
			土坑 120基	[銅製品] 銅印、銅鏡、鉸具、巡方、丸網、鉈尾、				
			溝址 22条	八稜鏡、海獣葡萄鏡、銭貨(富寿神宝、延喜通宝)				
			通路状遺構 5基	[鉄器・鉄製品] 刀子、斧、鋸、紡錘車、鉸具、鋸、鎌、字				
			道路状遺構 1基	引鉄、火打金具、鉄滓				
			ピット 351基	[石器・石製品] 編物用石錘、砥石、巡方、浮子、縄紋・弥生時代の石器(石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨製石鏃) [自然遺物] 炭化材、炭化種実、炭化米				
要約	<p>竪穴建物を中心とする平安時代9~10世紀の集落址とそれに伴う様々な施設を検出し、多数の遺物出土をみた。竪穴建物は第1・2次調査区を中心に291棟、掘立柱建物は15棟が確認され、土坑墓5基が集落内に点在していた。遺構群の中央部を貫く長大な水路や、集落の北縁を画す溝とそれを渡る通路状遺構、大型の金床石を据えた鍛冶遺構らしきものなども確認された。</p> <p>遺物は竪穴建物等の覆土・床面から多量の土器陶磁器や金属製品、石製品、土製品が出土した。金属製品では銅鈔、銅鏡(八稜鏡、海獣葡萄鏡破片)や銭貨(富寿神宝、延喜通宝)、銅鈔など銅製品が目立ち、銅印「長良私印」が第22号竪穴建物から出土している。また緑軸陶器と墨書土器が多く、特に「王」と読める墨書が複数の遺構から多数出土した。石製品には砥石、石鈔、編物用石錘、土製品には羽口、筒状土製品、陶製円盤が見られた。</p> <p>それ以前に人が居住した形跡がない地帯に出現し、多数の金属製品や緑軸陶器を有すが150年間ほどしか継続しなかった特殊な集落遺跡で、その性格や生業、出現と撤退の背景など、今後の突明が大きな課題となる。</p>							

松本市文化財調査報告No.226
長野県松本市
三間 沢川左岸遺跡
—発掘調査報告書—

発行日 平成29年3月31日
発行 松本市教育委員会
〒390-8620 松本市丸の内3番7号
印刷 株式会社 二光印刷



西庄



子楊



☆



大南介



王